金日成主席
革命活動史

朝鮮・平壌

チュチェ 101（2012）

金日成主席
革命活動史

朝鮮・平壌

外国文出版社

チュチェ 101（2012）

はじめに

朝鮮人民の偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席は、チュチェ思想、先軍思想の創始者、チュチェ革命偉業の開拓者であり、社会主義朝鮮の始祖、朝鮮民主主義人民共和国の永遠の主席である。

主席は、10代前半期に革命の途についたときから70星霜、ひたすら人民大衆の自主偉業の実現のために生涯を捧げ、史上空前の不滅の業績を残した。

主席は、銃剣をもってチュチェの革命偉業を切り開き、30代に日本帝国主義を撃滅して祖国を解放し、40代には世界の「最強」を誇るアメリカ帝国主義を打ち破って祖国の安全と民族の自主権を守り抜いた。

主席は、反帝反封建民主主義革命と社会主義革命、社会主義建設を成功裏に遂行し、人民大衆があらゆるものの主人となりすべてが人民大衆のために奉仕する社会主義制度を樹立し、自主、自立、自衛の社会主義強国を打ち立てた。また、帝国主義と敵対勢力の反共和国孤立・圧殺策動をことごとく粉砕しながら人民大衆中心の朝鮮式社会主義を固守し、その威容を全世界にとどろかした。

主席は、チュチェの革命偉業の継承問題を立派に解決し、祖国の自主的統一を早め、全世界の自主化偉業を実現するたたかいで特出した貢献をなした。

主席は革命活動の全期間、「以民為天」（人民を天のごとく見

なす）を座右の銘として常に人民と苦楽をともにし、人民のための献身の道を歩み続け、晩年にも祖国の繁栄と人民の幸福のためにすべてを尽くした。

主席は、祖国と人民、時代と歴史に残した不滅の革命業績によって、チュチェの太陽として永遠に人類の心に生き続けている。

金日成主席の革命活動史を研究しようとする世界の進歩的人民の一致した願いにこたえて、2011年4月に出版された『金日成主席革命活動史』を主席の生誕100周年に当たる2012年に各国語で翻訳して発刊する。

編　集　部

目　　次

はじめに

第１章　金日成主席の誕生、チュチェの
革命偉業の開拓
（1912 年 4 月～1931 年 12 月）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１節　金日成主席の誕生と生い立ち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２節　革命活動の開始、打倒帝国主義同盟の結成・・・・・・・・ 7

第３節　新しい世代の共産主義者を育成し、
人民大衆を意識化、組織化する活動・・・・・・・・・・・・・ 10

第４節　日本帝国主義と反動軍閥に反対する大衆
闘争と反日勢力の団結をめざすたたかい・・・・・・・・・ 16

第５節　チュチェ思想、先軍思想の創始、
卡倫会議の指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

第６節　最初の党組織――建設同志社の結成、
党組織の拡大、強化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

第７節　朝鮮革命軍の結成と抗日武装闘争の
準備を積極的に推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

第２章　反日民族解放闘争を新たな高い段階へと
発展させるためのたたかい
（1931 年 12 月～1936 年 2 月）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

第 1 節　明月溝会議、遊撃戦の形式を基本に
武装闘争を展開する戦略的方針の提示 ･････････････ 47

第 2 節　反日人民遊撃隊の創建、先軍革命指導の
開始、南満州と北満州への進出 ･･････････････････ 50

第 3 節　豆満江沿岸遊撃根拠地の創設、人民革命
政府の樹立、民主主義的改革の実施 ･･････････････ 57

第 4 節　抗日武装闘争の国内への拡大 ･･････････････････････ 64

第 5 節　党組織の建設と大衆組織の拡大 ･･････････････････ 69

第 6 節　遊撃区での全人民的防衛体系の
樹立、遊撃区防衛戦 ･･････････････････････････ 75

第 7 節　反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編、
朝鮮人民革命軍党委員会の結成、積極的な
軍事・政治活動 ･･････････････････････････････ 81

第 8 節　朝鮮革命の主体的立場を堅持、遊撃区の
解散と武装闘争の広大な地域への拡大 ･･････････････ 87

第 9 節　国際革命勢力との連帯の強化、
反帝共同戦線の実現 ･･････････････････････････ 96

第 3 章　抗日武装闘争を中心とする反日民族解放闘争を
全国的規模で一大高揚へと導くたたかい
（1936 年 2 月～1940 年 8 月）･･････････････････････ 101

第 1 節　南湖頭会議を指導、抗日武装闘争を
中心とする反日民族解放闘争を一大
高揚へと発展させる戦略的方針を提示 ･････････････ 101

第 2 節　朝鮮人民革命軍主力部隊の拡大、
祖国光復会の創立 ····· 105

第 3 節　白頭山密営を中心とする白頭山根拠地の
創設、国内深くに秘密根拠地を拡大 ····· 110

第 4 節　党および祖国光復会組織の全国的・
全民族的規模への拡大 ····· 114

第 5 節　大部隊による国内進攻作戦、歴史的な
普天堡戦闘 ····· 121

第 6 節　中日戦争の勃発に対処して軍事・政治
活動を強化し、全民抗争の準備を
速めるためのたたかい ····· 128

第 7 節　反日民族解放闘争を引き続き高揚させるための
課題を提示、苦難の行軍を勝利へと指導 ····· 135

第 8 節　茂山地区進攻作戦、白頭山東北部一帯を
革命の戦略的基地として構築 ····· 141

第 9 節　大部隊による旋回作戦と積極的な分散活動 ····· 146

第 4 章　祖国解放の大事を主動的に迎える
たたかい、祖国解放の偉業を達成
（1940 年 8 月～1945 年 8 月） ····· 152

第 1 節　小哈爾巴嶺会議、祖国解放の大事に
備える戦略的方針を提示 ····· 152

第 2 節　朝鮮人民革命軍の小部隊活動 ····· 154

第 3 節　朝鮮人民革命軍の軍事・政治訓練 ····· 160

第 4 節　党創立の準備を完了し、祖国光復会運動を
拡大、発展させるための闘争、 最後の
決戦をめざす全人民抗争の準備活動 ····· 163

第 5 節　朝・中・ソ武装力の連合戦線の
実現、国際連合軍の編制 ····· 173

第 6 節　最後の攻撃作戦を指導、祖国解放の
偉業を達成 ····· 177

第 7 節　抗日武装闘争勝利の歴史的意義、
チュチェの革命伝統を創始 ····· 182

第 5 章　反帝反封建民主主義革命を
遂行するためのたたかい
（1945 年 8 月～1947 年 2 月） ····· 189

第 1 節　新しい祖国建設の路線と建党・建国・
建軍の 3 大課題を提示、祖国へ凱旋 ····· 189

第 2 節　党創立偉業の実現、党の政治路線と組織
路線を擁護、貫徹するためのたたかい ····· 195

第 3 節　広範な大衆を党の周りに
結集させるための活動 ····· 201

第 4 節　北朝鮮臨時人民委員会の創設、民主改革の
実施、民主的教育と文化発展のための活動 ····· 204

第 5 節　正規の革命軍隊建設の準備 ····· 217

第 6 節　アメリカ帝国主義の南朝鮮占領と
民族分裂策動を粉砕するためのたたかい ····· 222

第 7 節　勤労人民の大衆的党―― 労働党の創立 ･････････ 230

第 8 節　建国思想総動員運動と増産競争運動、識字運動････ 235

第 6 章　社会主義への過渡期初期の課題遂行と
統一的中央政府樹立のためのたたかい
（1947 年 2 月～1950 年 6 月） ･･････････････････ 243

第 1 節　社会主義への過渡期初期の課題を提示、
北朝鮮人民委員会の創設 ･･････････････････････ 243

第 2 節　自立的民族経済建設路線を提示、人民
経済の復興発展をめざすたたかい ･･････････････ 247

第 3 節　朝鮮人民革命軍の朝鮮人民軍への
発展、国の軍事力の強化 ･･････････････････････ 253

第 4 節　生産関係の社会主義的改造の準備 ･･････････････ 262

第 5 節　北朝鮮労働党第 2 回大会、党の質的強化 ････････ 267

第 6 節　全民族の団結実現の促進、朝鮮民主主義
人民共和国の創建 ･･････････････････････････････ 271

第 7 節　中国人民の革命闘争への積極的な支援、
国際民主勢力との連帯の強化 ･･････････････････ 280

第 8 節　祖国統一のための愛国勢力の結束と
平和的統一方案の実現をめざすたたかい ････････ 286

第 7 章　祖国解放戦争を勝利に導くためのたたかい
（1950 年 6 月～1953 年 7 月） ･･････････････････ 292

第 1 節　アメリカ帝国主義の武力侵攻を撃退、
断固たる反撃によって南半部を解放 ･･････････････ 292

第 2 節　戦争の一時的難局を打開し新たな反撃に移行、
革命的規律の強化と後方の復旧・整備 …… 302

第 3 節　積極的な陣地防御戦、党勢の拡大、強化と
人民政権の機能と役割の強化 …… 309

第 4 節　戦時生産と戦後復興建設の準備を推進 …… 316

第 5 節　人民軍の質的強化、チュチェの
戦争理論と戦法の深化、発展 …… 323

第 6 節　アメリカ帝国主義の蛮行を暴露し、
世界人民との連帯を強化する活動 …… 328

第 7 節　党の組織的・思想的強化、戦争の
最終的勝利をめざすたたかい …… 332

第 8 章　戦後の人民経済復興発展と社会主義の
基礎建設のためのたたかい
（1953 年 7 月～1960 年 12 月） …… 340

第 1 節　戦後経済建設の基本路線提示、
人民経済の復興建設を指導 …… 340

第 2 節　戦後軍建設の戦略的課題提示、人民軍を
党の指導に忠実な党の軍隊に強化、
発展させるための闘争 …… 347

第 3 節　4 月テーゼの発表、社会主義革命の
本格的な推進、人民大衆中心の
社会主義制度の樹立 …… 352

第 4 節　戦後の事大主義、教条主義を一掃し、
主体性を確立するためのたたかい …… 364

第 5 節　党員と勤労者を社会主義思想で武装させる活動、
革命伝統を固守し継承するための闘争を強化 …… 368

第 6 節　朝鮮労働党第 3 回大会、党の統一・団結の
強化と反革命との闘争の強化 …… 375

第 7 節　社会主義建設の革命的大高揚をめざす闘争、
チョンリマ運動の創始と深化・発展 …… 382

第 8 節　党活動に新たな転換をもたらすための活動、
チョンサンリ精神、チョンサンリ方法の創始 …… 391

第 9 節　祖国の自主的平和統一のための 方針提示、
在日朝鮮人運動の強化、発展 …… 397

第 10 節　帝国主義に反対し、社会主義諸国の
統一と団結を強化するたたかい …… 402

第 9 章　社会主義の全面的建設をめざすたたかい
（1961 年 1 月～1970 年 11 月） …… 408

第 1 節　朝鮮労働党第 4 回大会、社会主義の全面的
建設をめざす綱領的な課題を提示 …… 408

第 2 節　新たな社会主義経済管理システムの確立 …… 411

第 3 節　経済建設と国防建設を並進させる戦略的方針を
提示、自衛的国防力を強化するための闘争 …… 414

第 4 節　社会主義農村問題に関するテーゼの発表、
農村テーゼ貫徹のためのたたかい …… 420

第 5 節　勤労者団体の活動を改善し、幹部の党性、
労働者階級性、人民性を強めるための活動 …… 424

第 6 節　朝鮮労働党代表者会議、党の唯一思想
体系を確立し、全社会を革命化、労働
者階級化するたたかい ····· 429

第 7 節　社会主義的工業化を実現するための闘争 ····· 437

第 8 節　在日朝鮮人運動と世界革命との国際的
連帯の強化のためのたたかい ····· 445

第 10 章　3 大革命を力強く繰り広げるためのたたかい
（1970 年 11 月～1980 年 10 月） ····· 453

第 1 節　朝鮮労働党第 5 回大会、思想・技術・文化の
3 大革命を推進する綱領的課題を提示····· 453

第 2 節　3 大技術革命の推進と社会主義
憲法の制定、発布 ····· 457

第 3 節　チュチェ思想の全面的な深化、発展 ····· 463

第 4 節　革命偉業継承問題の解決 ····· 467

第 5 節　3 大革命の深化、発展と社会主義大建設の推進 ···· 472

第 6 節　人民軍に対する金正日同志の指導体系の
確立、人民軍の戦闘力の強化 ····· 479

第 7 節　人民政権を強化し、人民経済の主体化、
近代化、科学化を促進 ····· 484

第 8 節　社会主義教育に関するテーゼの発表、
社会主義文化の開花、発展 ····· 488

第 9 節　祖国統一の 3 大原則と 5 大方針を
貫徹するたたかい ····· 494

第 10 節　自主性を擁護する世界人民との団結の強化 ····· 500

第 11 章　全社会のチュチェ思想化を促進するための活動
(1980 年 10 月～1989 年 12 月) ····· 506

第 1 節　朝鮮労働党第 6 回大会、全社会の
チュチェ思想化を革命の総体的
任務として明示 ····· 506

第 2 節　第 6 回党大会の決定貫徹をめざす
総進軍、「80 年代の速度」の創造 ····· 509

第 3 節　人民軍を政治的、思想的、軍事技術的に
強化するためのたたかい、金正日同志の
軍指揮体系の確立 ····· 518

第 4 節　朝鮮労働党を永遠にチュチェの革命的
党に強化、発展させるための活動 ····· 522

第 5 節　社会主義経済管理の原則を擁護、貫徹し、
社会主義の物質的・技術的土台を強固に
築くための活動 ····· 527

第 6 節　人民の物質・文化生活を向上させるために ····· 537

第 7 節　科学技術研究活動と教育事業に
新たな転換をもたらすために ····· 542

第 8 節　高麗民主連邦共和国創立方案を実現するために ····· 547

第 9 節　全世界の自主化偉業を実現するために ····· 553

第 12 章　社会主義偉業を固守し前進させるためのたたかい
(1990 年 1 月～1994 年 7 月) ····· 560

第 1 節　社会主義偉業を固守し前進させるための
根本原則と闘争課題を明示 ····· 560

第 2 節　社会主義の思想的基盤を強化し、
社会主義的文化と民族文化遺産を
いっそう輝かせるための活動 ····· 564

第 3 節　国防力を鉄壁に打ち固め、アメリカ帝国主義の
核騒動を粉砕するためのたたかい ····· 574

第 4 節　変化した環境と革命発展の要請に即して
社会主義経済建設を力強く推進 ····· 582

第 5 節　全民族の大団結による祖国統一の
画期的な局面を開くための活動 ····· 591

第 6 節　社会主義運動を再建し、自由で平和な
新しい世界を建設するための活動 ····· 597

偉大な領袖金日成同志は永遠に
われわれとともにおられる····· 606

第1章　金日成主席の誕生、チュチェの革命偉業の開拓

（1912年4月～1931年12月）

第1節　金日成主席の誕生と生い立ち

社会主義朝鮮の始祖である金日成（キムイルソン）主席は、1912年4月15日、平壌（ピョンヤン）市の万景台（マンギョンデ）で誕生した。

主席の家門は代々、愛国、愛族、愛民を家風としてきた愛国的で革命的な家庭であった。

曾祖父から祖父母、両親、叔父、弟、外祖父、母方の叔父に至るまで、いずれも国の自主独立と人民の自由と幸福のため侵略者に抗するたたかいの先頭に立って勇敢にたたかった熱烈な愛国者、革命家であった。

曾祖父の金膺禹（キムウンウ）は、19世紀後半期、大同江（テドン）に侵入したアメリカの侵略船シャーマン号を撃沈し、シナンドアー号を撃退するたたかいの先頭に立って勇敢にたたかった愛国者であった。

祖父の金輔鉉（キムボヒョン）と祖母の李宝益（リボイク）も子孫を革命の道に導き、彼らの革命闘争を積極的に助けながら不屈の革命精神で日本帝国主義に抗してたたかった愛国者であった。

父の金亨稷（キムヒョンジク）は、祖国の独立と人民の自由と解放のために生涯を捧げた反日民族解放運動の指導者であった。

金亨稷は「志遠」の思想を座右の銘としてつとに革命の道を歩み、1917年3月23日、当時、朝鮮の愛国者が結成した国内外の組織のなかで規模最大で反帝国主義的・自主的立場が最も強く、大衆的地盤が強固な反日地下革命組織である朝鮮国民会を結成した。そして1919年の3・1人民蜂起後、情勢の要請に応えて朝鮮人民の反日民族解放運動を民族主義運動から無産革命へと方向転換させるうえで先駆的役割を果たし、武装闘争方針を打ち出し、武装組織の団結と反日愛国勢力の統一・団結を実現するため生涯を終えるまで献身的にたたかった。

母の康盤石（カンバンソク）は、生涯を朝鮮革命の勝利と女性の社会的解放のために捧げた朝鮮女性運動の指導者であった。

康盤石は朝鮮最初の革命的な女性大衆組織である反日婦女会を結成し、祖国の独立と女性の社会的解放をめざすたたかいを積極的に繰り広げ、極貧にもめげず日本警察の執拗な迫害にも屈することなく、夫の金亨稷と金日成主席の革命活動を献身的に助けた。

叔父の金亨権（キムヒョングォン）と弟の金哲柱（キムチョルチュ）も、つとに反日革命闘争に参加してたたかった革命闘士であり、外祖父の康敦煜（カンドンウク）と母方の叔父である康晋錫（カンジンソク）も同じく反日愛国闘士であった。

金日成主席の家庭は勤勉、質朴で、仁徳を貴ぶ人民的な家庭であった。

一家は代々貧しい小作農という困難な境遇にありながらも、誠実で勤勉な労働によって生活を支え、金は無くとも生きられるが仁徳が無ければ生きられないということを家風とし、高潔な品性と仁徳を貴び、親子や兄弟、隣人との間では互いに助け尊ぶ心が厚かった。

主席の革命的な家柄こそ、その革命思想と偉人としての品格を育んだ土壌であり、チュチェの血統が根を下ろした革命の揺らんでもあった。

父の金亨稷は、家門の長孫である息子の名を国の柱になるという意味を込めて「成柱（ソンジュ）」と名付けた。

主席は、両親の革命的影響とたゆみない探究、そして矛盾にみちた社会現象の体験、日本帝国主義に抗する革命闘争の実践を通して偉大な革命家に育った。

金日成主席は次のように述べている。

「わたしは幼いとき、父母から愛国主義的教育と革命的影響を受け、真理を探究する過程で、そして不公平で矛盾にみちた社会現象を目撃する過程で、虐げられる人民に同情を寄せ、彼らを抑圧し搾取する帝国主義者と地主、資本家階級を憎悪するようになり、人民の解放と自由のために一生を捧げてたたかう決意を固めるようになりました」

主席は幼いころ、両親から麗しい祖国や5000年の悠久の歴史をもつ英知に富んだ朝鮮民族について、封建支配層と侵略者に抗して敢然とたたかった朝鮮人民と愛国の名将、世界の文化宝庫を豊かにしたさん然たる民族文化について、そして朝鮮を占領した日本帝国主義の野蛮な植民地支配と民族蔑視、地主、資本家の苛酷な搾取について聞かされ、国と民族を愛し敵を限りなく憎む精神を育んだ。

また、朝鮮人は常に朝鮮人の精神をもち、朝鮮人自身の力で祖国を解放し、人民の新しい社会を建設すべきだという父の言葉を胸に深く刻み、強い民族自主意識をつちかった。そして、父から

レーニンや10月社会主義革命について、社会主義理念が実現したソ連の話を聞かされ、人民が主人となった新しい社会にあこがれるようになった。朝鮮国民会事件で日本警察に連行されながらも相手を威圧してやまない父の毅然たる態度と、警官の横暴な家宅捜索に抗議する母の剛毅な姿、そして平壌監獄で辛苦をなめながらも革命的気概を失うことのない父の姿を通じて、日本帝国主義への憎悪の念をさらに強めた。そして、病中にあっても闘争を中止することのなかった父の革命への忠実さと、身が引き裂かれ粉になろうとも初志を貫き必ず祖国を解放しなければならないという父の革命的信念と不屈の意志から大きな影響を受けた。

主席は、日本帝国主義植民地支配下の苦しい生活体験を通して、また祖国と民族の不幸と苦痛を目撃する過程で反日愛国思想と階級意識を強め、革命の道を歩む大いなる志を育んだ。

1910年代は、朝鮮人民が日本帝国主義に国を奪われ、植民地奴隷に転落した最も暗たんとした時代であった。朝鮮全土は文字通り大きな監獄と化した。

主席は、年々農事に精出しながらも貧苦にさいなまれる一家の生活と朝鮮人民の悲惨な境遇を通して、日本帝国主義植民地支配の反動性と搾取社会の矛盾を鋭く感じとった。3・1人民蜂起のとき、主席は幼少の身でデモの群衆とともに万景台から普通門（ポトン）まで行進し、日本帝国主義侵略者と屈することなくたたかう朝鮮人民の姿と、徒手空拳の群衆を銃剣で弾圧する日本軍警の蛮行を目のあたりにし、日本帝国主義への反抗精神をかきたて、民族の犠牲的な闘争精神と英雄的気概を胸に深く刻んだ。

主席は、革命運動に専念する両親に従って中江（チュンガン）、臨江、八道

溝、撫松と各地を転住しながら、亡国の民の悲哀と苦痛を骨身にしみて感じとった。

主席は父の意に沿って1923年3月16日に八道溝を出発し、3月29日に万景台に着くまでの14日間の「学びの千里の道」を歩きぬく中で人々の親切に触れ、朝鮮民族が善良で道義心のある民族であることを実感した。

祖国に戻った後、七谷（チルゴル）の彰徳（チャンドク）学校に通いながら、朝鮮の歴史と地理、文化について学んだだけでなく、朝鮮人民は質朴で勤勉でありながらも勇敢で剛毅であり、いかなる困難や試練にもめげず、礼儀正しく人情味のある反面、不義に対しては妥協することのない人民であるという貴重な体験をした。そして、労働者と農民、青年学生をはじめ広範な人民大衆が血を流して日本帝国主義に抵抗する姿を前に、いかなる力をもってしてもくじくことのできない民族の尊厳と独立の意志を強く感じ、人民大衆を立ち上がらせるならば、朝鮮人民自らの力で必ず祖国を取り戻すことができるという思いを抱くようになった。また狡猾な「文化統治」の美名のもとに強行される日本帝国主義侵略者の蛮行を目にし、日本帝国主義こそ朝鮮民族の自由と尊厳を踏みにじる最も凶悪な絞殺者であり、朝鮮人民に耐えがたい貧困と飢えを強要する暴虐な搾取者、略奪者であることを悟り、朝鮮民族はたたかいを通じてのみ日本帝国主義を駆逐して祖国の独立を手にし、幸福に暮らすことができるということを確信するようになった。

父が日本の警察に逮捕されたという知らせを受けた主席は、1925年1月22日、万景台を後にして再び100里の道を歩き、2月3日に鴨緑（アムロク）江を渡った。この「解放の千里の道」は、主席が革命の道

を歩む歴史的な契機となった。

金日成主席は次のように述べている。

「わたしは13歳のとき、朝鮮が独立しなければ二度と再び帰るまいと固く決心して鴨緑江を渡りました。そのときわたしは誰かがつくった『鴨緑江の歌』をうたいながら、いつまたこの地を踏むことができるだろうか、自分が育ち、先祖の墳墓のあるこの地に再び帰る日は果たしていつのことであろうかと思うと、幼心にも悲しみを押えることができませんでした」

主席は、深い探究と革命実践を通じて革命家の資質と品格を備えていった。

幼時から並外れて勉学に励み『レーニン一生記』、『社会主義大義』、『露国革命史とレーニン』、『朝鮮の偉人』、『朝鮮英雄伝』など朝鮮の愛国名将と世界名人の伝記、革命的な小説を耽読し、その過程で社会現象と革命闘争に対する眼識を広め、独自の思考力を育んだ。特に父の意を体して中国語を熱心に学び、幼時から中国語に精通した。

主席は、学業に励むかたわら、父から与えられた困難な革命任務を遂行し、学生や大衆の中で反日愛国思想を宣伝し、大衆啓蒙活動を繰り広げる実践闘争の過程で革命的意志をつちかった。

1926年6月5日、父の金亨稷が逝去した。主席にとって金亨稷は父であると同時に革命の道へと導いた師であり、指導者であり、血縁関係を超越した革命の同志でもあった。父を亡くした喪失の痛みは何事にも代え難いものであった。

しかし、父が遺した「志遠」の思想、3大覚悟、同志獲得の思想、そして2挺の拳銃、こうした高貴な革命遺産から力を得、そ

の遺言どおり祖国解放という正義のたたかいに全力を尽くす決意を固めたのである。

第2節　革命活動の開始、打倒帝国主義同盟の結成

金日成主席は、成柱を中学まで勉強させるようにという父の遺言どおり、何としても勉強を続けさせようという母の思いに支えられ、上級学校への進学を望む主席の意思の実現に努力する父の友人たちの保証と紹介で、1926年6月中旬、撫松から樺甸へと向かい、華成義塾に入学した。

軍事的対決によってのみ日本帝国主義を打倒することができ、軍事に精通してこそ独立運動の戦列に立つことができる、というのが軍事・政治学校である華成義塾に入学したときの主席の見解であった。

主席は、華成義塾における教育を非凡な眼識で分析、判断し、批判的な姿勢で接した。

華成義塾における教育は、民族主義思想と旧韓国式の古い軍事訓練だけであった。主席が最も失望したのは華成義塾の思想的な立ち後れであった。学校当局は、民族主義思想のみを主張し、先進思想はやみくもに排斥した。華成義塾の制約性は、民族主義運動そのものの制約性を示していた。主席は、華成義塾を通じて民族主義運動の全貌をうかがい知るようになり、次第に華成義塾に対して抱いていた期待は崩れていった。

民族主義運動者の古い方式では祖国の独立を達成することはで

きないことを痛感した主席は、祖国の解放をめざす新しい道を探究するために『共産党宣言』をはじめマルクス・レーニン主義の書籍を熱心に耽読し、革命の原理を朝鮮の現実と結び付けて深く研究した。この過程で、朝鮮革命の進むべき道は、日本帝国主義を打倒して祖国を解放し、労働者、農民をはじめ勤労大衆の住みよい新しい社会をつくることであるという確信を深めた。

また、朝鮮革命の新しい道を切り開くためには、事大主義とセクト主義に毒されていない真の新しい世代の革命家を育成しなければならないと認識し、まずその活動を華成義塾の学生たちの間で始めた。

主席は、華成義塾の学生の間で社会主義思想を朝鮮革命の実践問題と結び付けて広め、その過程を通じて学生たちが朝鮮革命に対する正しい見解と立場をもつよう導いた。そうして、学生たちの間では新しい思潮に心を寄せる気運が日増しに高まり、大半の学生が先進思想を信奉するようになった。

主席は、新しい思潮に敏感で社会主義思想に心を寄せる学生に一人ひとり会って革命的な影響を与え、生死苦楽をともにする数多くの革命同志を結束させた。

主席は、このように朝鮮革命の真の道、自主的発展の道が探究され、中核勢力が備わった時点において、革命的前衛組織を結成する活動を積極的に繰り広げた。

1926年9月末、輝発河の川辺での中核メンバーの会合で、朝鮮革命を担っていく組織の必要性を説き、前衛組織の結成準備を促進するよう強調した。10月10日には、革命組織結成のための準備会議を開き、温めてきた組織の名称と性格、闘争綱領、活動規約

について討議した。

これにもとづいて、1926年10月17日、樺甸で打倒帝国主義同盟（略称「ㅌ（トゥ）・ㄷ（ドゥ）」）が結成された。

主席は、打倒帝国主義同盟結成会議で行った報告『帝国主義を打倒しよう』で、打倒帝国主義同盟は名実ともに帝国主義の打倒をその使命としているとし、朝鮮人民の不倶戴天の敵、日本帝国主義を打倒して朝鮮の解放と独立を達成することを当面の任務として打ち出し、最終目的として朝鮮に社会主義・共産主義を建設し、ひいてはすべての帝国主義を打倒して世界に共産主義を建設することを闘争綱領として提示した。そして、この闘争綱領を立派に実行するためには、何よりもまず、同盟員が思想・意志の面で団結するとともに、抗日闘争にすべてを捧げる決意に満ちたしっかりした青年を受け入れて同盟組織を拡大、強化し、同盟員は厳格な組織生活の規範に沿って活動すべきであると強調した。

会議では、打倒帝国主義同盟の規約が参加者に配布された。

会議に参加した組織メンバーの一致した念願と意思により、主席は打倒帝国主義同盟の責任者となった。

打倒帝国主義同盟は、朝鮮で初めての新しい型の真の共産主義的革命組織であった。

「トゥ・ドゥ」の結成により、朝鮮革命は正確な闘争目標と戦略・戦術をもって自主的発展の道を歩むようになり、朝鮮人民は歴史の主体として自分の運命を自分が責任をもち、自らの力で切り開いていくようになった。打倒帝国主義同盟の結成は、朝鮮での党創立をめざすたたかいの始点となり、「トゥ・ドゥ」から朝鮮労働党の栄えある根元が培われた。打倒帝国主義同盟の結成は、

銃剣をもって日本帝国主義を打倒せんとする決死の戦いの宣言であった。

第3節　新しい世代の共産主義者を育成し、人民大衆を意識化、組織化する活動

金日成主席は、革命運動を開始した後、吉林を中心に新しい世代の共産主義者を育成する活動を推し進めた。

吉林は吉林省の省都で、中国東北地方の政治、経済、文化の中心の一つであるだけでなく、満州で活動する朝鮮の反日独立運動家と共産主義者の政治活動の拠点でもあった。

主席は、「トゥ・ドゥ」の旗のもとに革命運動をより高い段階で本格的に繰り広げるため、1926年12月の初め、「トゥ・ドゥ」のメンバーと後日、吉林で会うことを約束し樺甸を後にした。

主席は吉林へ向かう途中、撫松に立ち寄って「トゥ・ドゥ」の綱領を実現する組織・政治活動を積極的に繰り広げた。主席は1926年12月15日、朝鮮で最初の革命的な少年組織であるセナル少年同盟を結成し、12月26日には母の革命活動を助けて、朝鮮最初の革命的な女性大衆組織である反日婦女会の結成を実現させた。

主席は、1927年1月14日に吉林に着き、17日から吉林毓文中学校に籍をおいて青年学生運動を積極的に繰り広げながら、先進思想の研究を深めていった。

先進的な書籍が多く出回り、新しいものを志向し真理を求めて苦悩する青年学生が先を争うように集まる吉林の社会的・政治的

雰囲気は、樺甸で始めた先進思想の探究をより深く掘り下げるうえで有利な条件となった。

主席は、学校で学ぶ課目の学習に没頭する一方、『共産党宣言』や『資本論』、『国家と革命』、『賃労働と資本』をはじめマルクス・レーニン主義の書籍を朝鮮の具体的現実と結びつけて耽読した。この過程で、マルクス・レーニン主義をドグマではなく実践の武器として意識するようになり、朝鮮革命に関する理論と戦略・戦術を深く探究した。

この時期、『母』や『鉄の流れ』、『祝福』、『鴨緑江上』、『阿Q正伝』などの小説と当時の現実生活を描いた進歩的な小説を数多く読んだ。

吉林での探求と体験は、主席が革命的世界観を揺るぎなきものとし、自主的な革命思想の骨格を形成する重要な契機となった。

主席は、青年学生の特性と革命闘争における彼らの地位と役割を洞察し、彼らを新しい世代の共産主義者に育成するため、先進思想を普及する活動を積極的に繰り広げた。

まず、毓文中学校内に秘密読書グループをつくり、それを吉林市内の各学校へと急速に拡大し、読書発表会、討論会、講演会、弁論大会などをたびたび催し、青年学生の革命意識を高めていった。

主席は青年学生を意識化するとともに、彼らを組織的に結束するための活動を積極的に推し進めた。

主席は、青年学生を組織に結集するためまず中核を育成し、彼らの自立的役割を高め、合法的組織活動と非合法的組織活動を緊密に結びつけ、合法組織で鍛えられた中核を非合法組織に受け入

れる原則を堅持するようにした。そして、既存の組織のうち看板だけで活動していない組織は解消して新しく結成し、微弱ではあっても活動している組織は存続させて利用、改組するようにした。

1927年4月10日、吉林市内の朝鮮人少年を対象に合法組織の朝鮮人吉林少年会を結成し、5月8日には民族主義者の後援を受けていた純然たる親睦団体の朝鮮人旅吉学友会を革命的な学生青年組織である朝鮮人留吉学友会に改組した。そして、朝鮮人吉林少年会と朝鮮人留吉学友会が青少年の趣味と好みに応じて講演会や討論会、学習会、弁論大会、読書発表会、歌の普及、歌唱隊行進、スポーツ競技、演芸公演といった課外活動を活発に行うことで、青少年を革命的に教育し鍛えるようにした。

主席の精力的な指導によって、吉林一帯に「トゥ・ドゥ」のメンバーを中核とする新しい世代の革命勢力が急速に成長し、この時期の革命闘争で新しい運動体となった。吉林に新しい運動体が出現したという情報とともに、主席の名声は広く知れ渡り、国内はもちろん日本、沿海州と満州各地から数多くの青年が主席の指導を受けようと吉林に集まってきた。

主席は彼らを革命的に教育して「トゥ・ドゥ」に加入させる一方、組織を吉林市内の各校に広げていった。

主席は、打倒帝国主義同盟が拡大され、広範な青年が結集してくるに伴い、1927年8月27日、「トゥ・ドゥ」をより大衆的な組織である反帝青年同盟に改組した。そして反帝青年同盟組織を文光中学校、吉林第1中学校、吉林第5中学校、吉林師範学校、吉林女子中学校、吉林法政大学など市内の各学校と吉林市周辺の農村地帯はもちろん、柳河県、樺甸県、興京県一帯へと広げていった。

主席は、急速に拡大した青少年学生の大衆組織を統一的に指導していく前衛的な組織を結成することを決心し、1927年8月28日、朝鮮共産主義青年同盟を結成した。

主席は共青結成会議での演説で、朝鮮共産主義青年同盟の性格と課題を示した。

朝鮮共産主義青年同盟は単なる青年組織ではなく、朝鮮の共産主義運動に新しい世代が生まれた当時、朝鮮革命の前途を切り開いていく使命を担った青年共産主義者の先鋒隊として各階層の大衆団体を指導する革命的な前衛組織であった。

朝鮮共産主義青年同盟に提起された重要な課題は、同盟を戦闘的な組織に固め、革命組織への指導を強化しながら広範な青年を反日の旗のもとに固く結束させ、彼らをさまざまな形態の反日闘争に力強く立ちあがらせることであった。

会議参加者の一致した念願と意思により、主席は朝鮮共産主義青年同盟の責任者となった。

主席は、朝鮮共産主義青年同盟を結成した後、共青組織を拡大、強化し、その戦闘力を高めることに深い関心を払った。その結果、共青は短期間に吉林市とその周辺はもちろん、満州の広大な地域と北部朝鮮一帯をはじめ国内深くまで拡大していった。

共青は、青年の組織的結束を促進し、中核を育成し、朝鮮革命の主体的勢力を強化し、新しい型の党組織の結成をめざす新しい世代の共産主義者の活動を力強く推し進めるうえで中枢的な役割を果たした。当時、共青は朝鮮革命の前衛部隊としての役割を果たしながら、傘下の青少年組織の指導とともに、労働者、農民、女性の各組織の指導も行った。

主席は、青年学生を結集する活動で収めた成果を強固にしながら、広範な人民大衆の中に入って彼らを意識化、組織化する活動に心血を注いだ。そして、人民こそ教師であり、革命を推し進める基本動力である、という主体的観点に立って「人民の中に入ろう！」というスローガンを高く掲げた。

主席が人民の中に本格的に入り始めたのは、1927年の冬休みからであった。

主席は、広範な大衆を意識化する活動をさまざまな形式と方法で力強く繰り広げた。

1928年1月15日、撫松で朝鮮初の革命的新聞である『セナル』を創刊して、広範な青年と大衆を反日愛国思想で教育し、反日闘争に奮い立たせる強力な思想的武器とした。

また、大衆の間で演芸宣伝隊の活動を活発に繰り広げた。

吉林毓文中学校で数多くの文学作品を耽読し、革命的文学・芸術の理論と創作的資質を身につけた主席は、演劇『安重根（アンジュングン）、伊藤博文を射つ』、『血噴万国会議』、『娘からの手紙』と歌舞『13道自慢』、『団結紐』などの文学・芸術作品を創作し、演芸宣伝隊を組んで巡回公演を行い、人民を革命的に目覚めさせた。特に1928年の初め、撫松で創作した『朝鮮の歌』はまたたく間に各地に広まり、同胞たちに愛国心と民族的自負を植えつけた。

撫松一帯で演芸活動を繰り広げていた主席は、反動軍閥当局に逮捕されたが、撫松の大衆の抗議によって釈放された。

演芸宣伝隊の活動とともに、各地に夜学を設け、卡倫の進明学校と孤楡樹の三光学校など各学校を大衆教育の拠点とし、講演や説明対話、話の集いなどさまざまな形式と方法で大衆を意識化す

る活動を力強く推し進めた。

主席は、各階層の大衆を結集する階層別の大衆組織を結成し、拡大させていった。

青年との活動に深い関心を寄せた主席は、1927年12月20日、撫松地方の中核的青年からなる大衆的な反日青年組織である白山青年同盟を組織した。白頭(ペクトウ)山周辺の青年の組織である白山青年同盟は反帝青年同盟の変身であった。

主席は、民族主義者と分派分子の影響のもとにあった青年団体を革命的な組織に改組した。

1928年5月、吉林で麗新青年会の代表と会い、民族主義者や分派分子の影響下にあった青年団体を漸次、革命的な組織に改組する方向と方途を示した。そして蛟河地方に行き、民族主義者の影響下にあった麗新青年会の先進的な中核で反帝青年同盟蛟河支部を設置し、その役割を高めて麗新青年会と拉法青年会を革命的に改組した。一方、卡倫や孤楡樹、陵街、三原浦などの満州一帯と、義州(イジュ)、枇峴(ピヒョン)、昌城(チャンソン)、碧潼(ピョクトン)、元山(ウォンサン)、海州(ヘジュ)、南浦(ナンポ)など国内各地に新しい世代の共産主義者を派遣し、民族主義者の影響下にあった青年団体を革命的に改組するようにし、東満青総の中に先進的な青年で革命的な組織をつくり、数多くの反日青年を分派分子の影響から抜け出させてこの組織に結束させた。

主席は、人口の絶対多数を占める農民を獲得することを、革命の勝敗を左右する要の問題と見なし、彼らの中に入って、それまで識字運動や生活環境の衛生的改造にとどまっていた農村啓蒙活動を大衆の組織化、革命化と密接に結合させて積極的な政治闘争の一形態に発展させていった。

吉林周辺の新安屯をはじめ農村へ出向いて農民と一緒に仕事をし、話し合いながら革命的に教育し、1928年3月10日、朝鮮初の革命的な農民組織である農民同盟を結成した。

一方、吉林市内の労働者の中に入って彼らを階級的に目覚めさせ、1928年8月25日、朝鮮初の労働者階級の新しい型の革命組織である反日労働組合を結成した。

そして、こうした組織を朝鮮の北部国境一帯と撫松、安図、長白、卡倫、孤楡樹などの広い地域に拡大していった。

主席が人民の中で精力的に活動したことで、新しい世代の共産主義者が数多く育ち、各階層の広範な大衆が意識化、組織化されて、朝鮮革命の強固な根幹をなし、大衆的基盤が築かれるようになった。

実に、吉林毓文中学校時代は、主席にとって青年運動の最盛期であった。

第4節　日本帝国主義と反動軍閥に反対する大衆闘争と反日勢力の団結をめざすたたかい

金日成主席は、新しい世代の共産主義者を育成し、広範な人民大衆を革命的に目覚めさせ、組織に結集する一方、日本帝国主義と中国反動軍閥に対する大衆闘争を指導した。

1920年代の後半期に至り、中国東北地方では、満州占領のために強行した日本帝国主義の強盗さながらの山東出兵を契機に、朝中人民の反日闘争気勢はいっそう高揚した。主席の指導のもとに

吉林を中心とする広い地域で青年学生運動が強化され、人民の反日闘争気勢がさらに高まるや、日本帝国主義は、あわただしく領事館警察を総動員する一方、中国の反動軍閥をそそのかして朝鮮人反日運動家に対する弾圧に狂奔した。

主席は、逮捕された朝鮮独立運動家を釈放させる闘争を巧みに指導した。

1927年2月中旬、日本帝国主義の差し金のもとに中国の反動軍閥は、吉林で民族主義運動家安昌浩（アンチャンホ）の時局講演の開催を口実に会場を襲撃して300余名を逮捕するという暴挙にあえて出た。主席はこれを朝鮮人民の反日闘争を抹殺する反革命的策動と断じ、革命組織のメンバーと広範な大衆を釈放闘争へ立ち上がらせた。「トゥ・ドゥ」メンバーの会議で対策案を示した後、講演をはじめさまざまな方法で世論を喚起し、大衆デモを組織して拘束者全員を釈放させ、中国の反動軍閥とそれを操る日本帝国主義に大きな打撃を与えた。こうして、大衆を目覚めさせ、革命闘争の発展に向けて有利な局面を開いた。

主席は、革命組織の結成と拡大に伴い、日本帝国主義と反動軍閥に対する科学的な闘争方針と方法を示し、正しく導いた。

主席は、日本帝国主義と反動軍閥に対する闘争を成功裏に行うためには、情勢と彼我の力関係を科学的に分析したうえで正しい戦略と戦術を立て、革命勢力の準備の程度に応じてさまざまな形態の闘争を行い、合法闘争と非合法闘争を巧みに組み合わせ、小規模闘争から漸次、大規模闘争へと移行しなければならないと指摘した。そして、日本帝国主義と反動軍閥に反対するすべての階級と階層、社会勢力を広範に動員しなければならないと強調した。

主席は、その実践闘争の序幕として1928年の夏、日本帝国主義と結託した中国の反動軍閥に反対する吉林毓文中学校学生の同盟休校を指導した。

毓文中学校の革命化が進むと、中国の反動軍閥当局は反動的な教員と右派系の学生をそそのかして校内の民主的秩序に違反する行動を取らせる一方、進歩的な教員に圧力を加え、先進的な学生の活動を弾圧した。こうした策動を適時に粉砕せずには、学問の探究も青年運動も円滑に進めることができなかった。

主席は、1928年7月中旬、共青および反帝青年同盟幹部会議を招集し、同盟休校の具体的な計画を提示した。そして学生の待遇を改善し、学生が要求する課目の授業を保障し、進歩的な教員と校長に圧力を加えてはならないという要求を掲げ学生の間で宣伝活動を力強く繰り広げる一方、授業をボイコットして集会を開き、ビラと檄文、弾劾文を配布するなどさまざまな闘争を指導した。そして、必要な場合、市内の他の学校でも同盟休校に参加する準備を整えるよう手配りした。

同盟休校が全市内に波及する気配が見えると、これに恐れをなした軍閥当局は、止むなく学生の要求をのまざるを得なかった。

同盟休校は、日本帝国主義と結託した中国の反動軍閥に大きな打撃を与え、青年学生に団結してたたかえば必ず勝利するという確信と新たな闘志を抱かせ、組織のメンバーを実践闘争の中でさらに鍛え上げることができた。

主席は、同盟休校の勝利と経験にもとづいて、1928年10月から11月まで、日本帝国主義の吉林――会寧（ヘリョン）間の鉄道敷設に反対し、日本商品を排斥するより大規模な闘争を指導した。

日本帝国主義は、ずいぶん前から進めてきた吉会線鉄道敷設工事を完成させ、中国東北地方を政治的、経済的、軍事的に掌握し、日本商品を同地域に大量に送り込んで莫大な利潤を得ようともくろんだ。

主席は、日本帝国主義の吉会線鉄道敷設工事に反対する闘争と日本商品排斥闘争の政治的意義と大衆闘争の成熟した要求を洞察し、1928年10月上旬、北山公園薬王廟の地下室で、共青および反帝青年同盟の幹部会議を開き、吉会線鉄道敷設工事を阻止、破綻させ、日本商品を排斥する大衆的なデモを展開する方針を示した。そして、吉会線鉄道敷設と日本商品浸透の侵略的本質と、それに反対する闘争の目的と意義を明らかにし、闘争スローガンと行動方向、闘争方法を示した。次いで、デモ隊を編成し、各隊伍の責任者を任命し、デモの準備をしっかり整えるようにした。

デモの準備を進めていたとき、11月1日に吉敦線鉄道開通式が行われるという情報を得た主席は、計画した日を数日早めて10月下旬、吉林市内の各学校の学生が一斉に校庭で集会を開き、吉会線鉄道敷設に反対する弾劾文を発表し、街頭デモに立ち上がるようにした。そして、隊伍の先頭に立ってデモを指導した。

主席は、省議会の広場で開かれた大衆集会で、デモ参加者に団結して日本帝国主義の吉会線鉄道敷設に反対して断固たたかおうと熱烈にアピールした。この呼びかけに応えて、数千名の青年学生が「日帝侵略者を打倒しよう！」、「日帝の吉会線鉄道敷設工事に反対してたたかおう！」というプラカードを掲げ、革命組織メンバーからなるピケ隊を先頭に前進を阻む軍警の銃剣を押しのけて激烈な闘争を展開した。これに、広範な大衆が合流した。

この闘争によって、吉敦線鉄道開通式は無期限延期となった。

吉林で始まったデモは、日を追ってさらに高揚し、満州全地域に拡大され、その革命的影響は国内深くまで波及し、人民を反日闘争へと立ち上がらせた。

デモ隊の反日気勢が高まると、主席は彼らを日本商品排斥闘争へと導いた。大衆は「日本商品を排斥しよう！」というスローガンを掲げてデモを展開し、日本人の商店から商品を持ち出して焼き払ったり松花江に放り投げたりした。これにあわてた日本帝国主義は中国の反動軍閥をそそのかしてデモを銃剣で弾圧させた。

主席は、ただちに「日本帝国主義と結託した反動軍閥打倒」のスローガンを掲げ、犠牲者の葬礼と結びつけてより大規模なデモを展開するよう指導した。

主席の指導のもとにおよそ40日間も続いた吉会線鉄道敷設反対闘争と日本商品排斥闘争は、満州侵略の野望を実現しようとした日本帝国主義侵略者と、彼らと結託した中国の反動軍閥に大きな打撃を与えた。

吉会線鉄道敷設反対闘争と日本商品排斥闘争は、朝鮮人民が主席の指導のもとに輝かしい勝利を収めた初の大規模な反日大衆闘争であった。この闘争は、それまで惨めな失敗を繰り返していた朝鮮の反日民族解放闘争史に終止符を打ち、反日大衆闘争が領袖の指導のもとに成功裏に展開される新たな段階へと発展する契機となった。

大衆闘争の実践の中で新しい世代の共産主義者の隊伍はさらに強固となり、青年学生と人民は、団結してたたかえば勝利するという信念を持つようになった。

主席は、ブルジョア民族主義者と分派分子の荒唐無稽な主張と理論、分裂策動を粉砕し、広範な反日勢力の団結を実現する闘争を指導した。

民族主義運動の「指導者」をもって自任していた者たちは、日本帝国主義植民地支配のもとで「教育と産業の振興による国力培養運動」が「独立の目的を達成する最短コース」であり、その「力の準備」は資本主義列強の「援助」によって行うべきであるという外部勢力依存思想と民族虚無主義思想をまき散らしていた。一方、分派分子はそれぞれ「理論家」、「指導者」を自称し、既成理論の個々の命題を引き合いに出して「プロレタリア革命」だの、「ブルジョア民主主義革命」だのと、朝鮮革命とはおよそ縁遠い詭弁を弄していた。

主席は、安昌浩の講演の際、書面質問を出して講演を途中で放棄させ、火曜派、Ｍ・Ｌ派、ソウル・上海派の「大物」と会い、彼らの誤った主義、主張と理論に反撃を加えた。そして、民族主義者と分派分子がまき散らす誤った思想的毒素の影響を防ぐために青年学生と大衆の間で講演と演芸宣伝活動、研究討論、出版物を通じた宣伝活動を繰り広げ、さまざまの「主義主張」の反動的本質と、それが朝鮮革命運動の発展に及ぼす重大な悪影響と弊害を喝破した。

主席は、民族主義運動団体が分裂を克服し、統合を実現するよう革命的な影響を与えた。

民族主義者の指導層が、彼らの独立運動団体である正義府、新民府、参議府の3府統合問題を日程に乗せ、その指導的地位をめぐって論争に明け暮れていたとき、主席は彼らに会って、互いに

力を合わせ団結して一日も早く3府統合を実現するよう忠告した。そして、風刺劇『3人1党』を創作、上演して彼らの猛省を促した。その結果、良心の呵責を受けた彼らは3府を統合して国民府をつくらざるを得なかった。

主席は、青年運動の分裂を防ぐたたかいを導いた。

1928年の夏、分派分子が青年運動の「ヘゲモニー」を握るため「朝鮮青年運動家協議会」を開き、駐中青総の結成を企てたとき、反帝青年同盟員である旅新青年会の活動家を派遣し、分派主義的策動に反対して原則的な闘争を展開するようにした。そして翌年の秋、国民府が興京県旺清門で南満青総大会を開き、満州一帯のすべての朝鮮青年団体を自己の手中に収めようとしたときには、自ら白山青年同盟代表の資格で大会に参加し、国民府上層部の分裂主義的策動に打撃を与えた。また弾劾文を書いて発表し、先進的な青年に危害を加え、逮捕、虐殺する彼らの罪業を暴き出した。こうして国民府のテロ分子は、人民大衆から非難と糾弾を受け、新しい世代の共産主義者への大衆の期待はさらに高まり、反日愛国勢力の真の統一と団結が実現されるようになった。

大衆闘争の勝利と反日勢力の団結をめざす闘争を通して、主席に対する大衆の信頼と欽慕の念はいっそう高まった。

革命組織のメンバーと人民は、主席を絶対的に信頼し、尊敬して高く戴いた。吉林時代に金赫（キムヒョク）、車光秀（チャグァンス）など青年共産主義者たちは、主席を祖国と民族の運命を救う偉大な指導者、朝鮮革命を勝利に導く星、団結の中心、指導の中心として仰ぎ慕った。彼らは亡国の悲運に閉ざされていた朝鮮の夜空に現れ、三千里江山を明るく照らす暁の明星になってほしいという願いを込め、主席の

名を金一星（キムイルソン）あるいはハンビョル（一星）と呼んだ。そして、主席の偉大さを称えた頌歌『朝鮮の星』を創作し、人民の間に広く普及させた。

第5節　チュチェ思想、先軍思想の創始、卡倫会議の指導

金日成主席は、朝鮮革命の独創的な道を切り開きながら時代と革命的実践の要請を洞察し、革命の新しい指導思想であるチュチェ思想を創始するための思想・理論活動を精力的に繰り広げた。

朝鮮では、歴史発展の特殊性からして事大主義が長期間にわたって国の発展を阻み、結局、事大主義のために国は日本帝国主義の植民地に陥ることになった。

したがって朝鮮革命は、植民地半封建社会の社会経済的条件のもとで錯雑に絡んだ民族的・階級的矛盾を解消しなければならない複雑さと困難のため、朝鮮人民が自主的に、創造的に切り開かなければならない前人未踏の道であり、国の後方支援や正規軍の援助もない中、強盗日本帝国主義とたたかわなければならない類のない困難な革命であった。

朝鮮革命のこのような特殊な環境は、それに即した革命の新しい指導思想を必要とした。

主席は、父から受け継いだ「志遠」の思想を思想的・精神的源泉として、そして自身の「以民為天」の思想を座右の銘として、時代と革命実践が求める革命の新しい指導思想を創始するため思

索と探究を重ねた。

「志遠」の思想は、人民の力に対する絶対的な信頼、国の独立をあくまでも自力で達成すべきであるという徹底した自主精神、いかなる難関と試練も乗り越えていく不撓不屈の革命精神が盛り込まれた革命の持論であった。

「以民為天」の思想は、すべてを人民大衆を中心に据えて考え、人民大衆を限りなく大切にし愛する愛民思想であり、国と民族の自主性を生命とし、その尊厳と栄誉を輝かせ、祖国の独立と繁栄のためにたたかう愛国、愛族の思想である。

主席は、従来の労働者階級の革命思想と理論を朝鮮の革命実践と結びつけて深く研究する過程で、特に民族主義運動と初期共産主義運動が遺した教訓を全面的に分析する過程で、新しい指導思想、チュチェ思想の始点となる革命の真理を見いだした。

金日成主席は、当時を回想して次のように述べている。

「わたしはわが国の民族主義運動と初期共産主義運動のこうした実態を分析し、革命をそういうやり方で進めてはならないと痛感した。

こうしてわたしは、自国の革命は自らが責任を持ち、自国人民の力に依拠して遂行してこそ勝利するのであり、革命で提起されるすべての問題を自主的に、創造的に解決していかなければならないという信念を抱くようになった。これが今いっているチュチェ思想の出発点となったのである」

主席は、つとに革命の道に立った初期から、特に1929年の秋、中国の反動警察に逮捕され、吉林監獄で獄中闘争を展開しながら、朝鮮における民族主義運動と初期共産主義運動の実態を分析し、

従来の共産主義運動家と民族主義運動家の思考と活動方式には二つの本質的な弱点があるということに着目した。

その一つは、人民大衆の力を信頼せず、それに顔をそむけたため、人民大衆から離れたということであった。彼らは、人民大衆の中に入って教育し組織化し、革命闘争に立ち上がらせることは考えず、大衆から離れて「ヘゲモニー」を握るための権力争いと空論に明け暮れて大衆を分裂させていた。主席はこうした本質的な弱点を見抜き、彼らとは違って人民大衆の力を信じてその中に入り、大衆に依拠してたたかう真の革命の道を切り開き、その過程で革命の主人は人民大衆であり、人民の中に入って彼らを教育し立ち上がらせてこそ、革命で勝利することができるという真理を見いだした。これがチュチェ思想の始点の一つであった。

従来の共産主義運動家と民族主義運動家の思考と活動方式の今一つの弱点は、派閥争いと事大主義、教条主義が甚だしいことであった。彼らは自力で革命を行おうとはせず、派閥争いに明け暮れ、それぞれ外部勢力に依存して国の独立を達成しようとした。独立運動上層部の人物の中には、周辺の大国を後ろ盾にし、彼らの力を借りて独立を達成しようとする者がいるかと思えば、はてはアメリカが朝鮮の独立を「贈り物」にしてくれることを期待する者さえいた。共産主義運動家と自称していた者たちは、それぞれ派閥をつくってコミンテルンの承認をとりつけようと奔走し、植民地半封建社会である朝鮮の歴史的条件と具体的な現実から離れて、既成理論と他国の経験をそのまま模倣しようとした。

主席は、初期の共産主義者と民族主義者の間に見られたこうし

た本質的な弱点から深い教訓を汲み取り、彼らとは違って、朝鮮革命におけるすべての問題を自らの信念と判断にもとづいて決定し、朝鮮革命の具体的な現実と実情に即して解決していく自主と創造の道を歩んだ。その過程で、革命は誰かの承認や指示によってではなく、自らの信念にもとづき自ら責任をもって行うべきであり、革命で提起されるすべての問題を自主的に、創造的に解決しなければならないという真理を見いだした。これがチュチェ思想の今一つの始点であった。

主席がチュチェ思想の真理を見いだしたことで、人民大衆が自らの運命の主人として登場する新しい時代の歴史的課題を立派に解決できる思想的・理論的基礎が築かれることになった。

主席はこれにもとづいてチュチェ思想の体系を打ち立てる思想・理論活動を精力的に繰り広げ、ついに革命の新しい指導思想、チュチェ思想を創始した。

チュチェ思想とは一言で言えば、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推し進める力もまた人民大衆にあるという思想である。

チュチェ思想の創始によって、朝鮮人民は歴史上初めて自己の指導思想を手にした尊厳ある誇り高き人民となり、朝鮮革命は自己の確固とした指導思想に沿って前進するようになった。

主席はチュチェ思想とともに、先軍思想を創始するための思想・理論活動を精力的に展開した。

人民大衆の自主偉業は、帝国主義やあらゆる反革命勢力との力の対決を伴う困難な闘争であり、銃剣は革命の勝利を左右する最も重要な手段であった。

人民大衆が世界と自己の運命の主人として、自己の運命を自主的に、創造的に切り開いていくためには、何よりも武装、銃剣を手にしなければならなかった。銃剣や大砲を持って襲いかかる帝国主義侵略者にはハンマーや鎌を手にした抵抗やデモ、議会闘争では決して勝つことはできなかった。銃剣はとりもなおさず民族の運命であり、武装した帝国主義侵略勢力には銃剣を持って抵抗しなければならなかった。

朝鮮革命はまさにその初期から反革命的暴力との激しい対決であった。

最も野蛮な暴力によって人民大衆の革命闘争を容赦なく弾圧するのは帝国主義特有の生存方式であるが、朝鮮を占領した日本帝国主義はその狡猾さと破廉恥さ、暴虐さ、悪辣さにおいて、歴代の帝国主義侵略勢力の中でも比類なき最も悪逆無道な侵略者であった。

日本帝国主義が朝鮮の反日民族解放運動を銃剣で弾圧する状況下で、革命闘争は必然的に暴力化の方向へと向かわざるを得なかった。革命的暴力こそが爪先まで武装した日本帝国主義の反革命的暴力を打ち負かす、最も強力な闘争手段であった。

朝鮮革命は武装、銃剣を求め、2000万の人民を革命勝利の道へと導く指導的指針、組織的な武装闘争へと導く徹底した革命思想を切実に求めていた。

しかし、この問題に科学的な答えを与える革命思想は従来の労働者階級のいかなる理論にもなかった。

主席は、1920年代後半期と1930年代初めに至り、革命において銃剣を基本と見なし、銃剣をもって革命を切り開き、前進させて

いく銃剣重視の思想、先軍思想を創始して、時代と革命実践が提起するこの差し迫った要求を立派に解決した。

主席は革命の道に立った当初、すでに革命闘争における銃剣の位置と役割、朝鮮反日民族解放運動の実態と教訓を深く分析し、それにもとづき「トゥ・ドゥ」の綱領を示すことによって先軍思想の始原を開いた。

主席は、父から「志遠」の思想、3大覚悟、同志獲得の思想とともに、2挺の拳銃を革命の遺産として受け継いだ。まさにこの2挺の拳銃から、武装闘争によってのみ爪先まで武装した強盗日本帝国主義を打倒し、国の独立を達成できるのだといった父の崇高な志を受け継ぎ、父の総体的志向であった武装闘争によって、必ず祖国の独立と人民の自由と解放を達成するという覚悟と決意を固めた。

主席は、2挺の拳銃と「トゥ・ドゥ」の綱領を始原として独創的な先軍革命の道を切り開く過程で積んだ革命闘争の経験を普遍化し、革命すなわち銃剣、軍隊すなわち同胞の運命という真理を見いだし、それを思想的・理論的基礎として銃剣重視、軍事重視の革命思想、先軍思想を創始した。

先軍思想は一言で言えば、軍事を優先させ、革命軍隊を主力として革命運動全般を推し進めていく思想である。

チュチェ思想が自主性を社会的人間の生命、国家と民族の生命とし、その実現の道を明示する自主の思想であるとすれば、先軍思想は自主性をめざす闘争が帝国主義との力の対決の中で行われる特性に即して、銃剣を先立たせ、重視する思想である。

主席は、1930年5月、吉林監獄から出獄した後、毓文中学校を

中退して職業革命家となり、獄中で構想した朝鮮革命の主体的な路線と戦略・戦術を確定するために心血を注いだ。

当時、元山埠頭労働者のゼネストと新興(シンフン)炭鉱労働者のストライキ、端川(タンチョン)農民暴動、光州(クァンジュ)学生事件など朝鮮人民の反日大衆闘争は、暴動的性格を帯びて急速に発展したが、結局、失敗に終わってしまった。

主席はこれらの闘争を注視しながら、時代の推移にかなった正確な路線があり、正しい指導さえあれば、いかなる強敵をも打ち破ることができると確信し、人民に科学的な闘争方法と戦術を与え、民族の進路を示すべきであることをいっそう痛感した。

主席は吉林を発って敦化県四道荒溝へ出向き、20日余り留まりながら、獄中でなめた辛苦のため衰弱した体を顧みる暇もなく、極左冒険主義的な5・30暴動の弊害により破壊された革命組織を立て直し整備する一方、朝鮮革命の主体的な路線と戦略・戦術を一つひとつ定立していった。

その後、卡倫へ行って朝鮮革命の路線問題、特に武装闘争路線問題、新しい型の軍隊創建問題について思索を重ね、それまで構想し温めてきた思想的・理論的要点を整理し、総合的に体系化して、会議に提出する報告書を準備した。そして、報告草案を共青および反帝青年同盟幹部の討議にかけた。彼らはそれに全面的な支持を表明した。

このような準備を経て、1930年6月30日から7月2日まで、卡倫で共青および反帝青年同盟の幹部会議を開いた。

会議には車光秀や金赫、崔昌傑(チェチャンゴル)、崔孝一(チェヒョイル)、桂永春(ケヨンチュン)、金園宇(キムウォンウ)など各地からきた数多くの共青および反帝青年同盟の幹部が

参加した。

主席は『朝鮮革命の進路』と題する歴史的な報告を行った。

主席は報告でチュチェ思想、先軍思想の原理を明らかにし、革命で堅持すべき立場と態度を明示して次のように述べた。

「革命闘争の主人は人民大衆であり、人民大衆が立ち上がってこそ革命闘争で勝利を収めることができるのです」

主席は、革命を勝利へと導くためには人民大衆の中に入って彼らを立ち上がらせなければならず、革命闘争で提起されるすべての問題を自らが責任をもって自らの実情に即して自主的に、創造的に解決しなければならないとし、朝鮮革命の主人は朝鮮人民であり、朝鮮革命はあくまでも朝鮮人民自身の力で、わが国の実情に即して遂行するという確固たる立場と態度を堅持しなければならないと強調した。

そして、帝国主義はその侵略的・略奪的本性からして、植民地から決して自ら引き下がろうとはせず、植民地支配を維持するために例外なく野蛮な暴力をふるっているとし、帝国主義侵略勢力は革命的武力で打倒すべきであるという原理を示した。

主席は報告で、チュチェ思想、先軍思想の原理を具現して朝鮮革命の戦略的・戦術的問題を全面的に明らかにした。

まず、朝鮮革命の基本的任務と性格、動力と対象、戦略的課題を規定した。

主席は、当代の朝鮮社会の性格を科学的に分析したうえで、朝鮮革命は社会主義革命でもなくブルジョア革命でもない、新しい型の社会革命である独創的な反帝反封建民主主義革命であると規定し、反帝反封建民主主義革命には労働者、農民、青年学生、知

識人、小ブルジョアジー、それに良心的な民族資本家と宗教家をも含む広範な反帝勢力が参加することができ、この革命の対象は日本帝国主義と彼らと結託した地主、資本家、親日派、民族反逆者であると指摘した。

また、革命を勝利に導くにはまず、日本帝国主義と彼らと結託した反動勢力を打倒して民族の解放と独立を達成し、日本帝国主義を打倒した後は労働者、農民など広範な人民大衆の利益を擁護する政権を樹立し、それにもとづいて反帝反封建民主主義革命の課題を遂行しなければならないと述べた。そして、反帝反封建民主主義革命の遂行後も革命を継続して社会主義・共産主義社会を建設し、ひいては世界革命も遂行しなければならないと強調した。

主席はまた、朝鮮革命を成功裏に遂行するための主体的な路線と方針を打ち出した。

まず、抗日武装闘争路線を提示した。

主席は、反日闘争の歴史的な教訓が示しているように、独立は他人がもたらしてくれるものではなく、平和的な方法では絶対に達成することができないとし、民族の独立を達成するためには組織的な武装闘争を展開しなければならないと強調した。そして、武装闘争を展開するためには、その準備活動を着実に行わなければならないとし、その具体的な方途として革命的武装組織である朝鮮革命軍を結成し、武装闘争を展開するためにさまざまな経験を蓄積すべきであると述べた。

主席は次に、反日民族統一戦線路線を提示した。

主席はすべての反日愛国勢力を目覚めさせて固く結束し、反日

闘争に立ち上がらせるべきであるとし、労働者、農民はもとより宗教家、良心的な民族資本家に至るまで、反日思想をもつすべての勢力を反日の旗のもとに固く結集させるべきであると述べた。

主席は次に、革命的な党の創立方針を提示した。

主席は、朝鮮共産党の解散から重要な教訓を汲み取り、健全な土台を踏まえて党を創立するためにたたかわなければならないとし、そのためには、分派分子のように何の準備もなく直ちに党の創立を宣言しようとしたり、コミンテルンの承認を得ようとするのではなく、必ず自力で新しい革命的な党を創立すべきであると述べた。さらに、党中央の結成を先に宣言するやり方ではなく、十分な準備のもとにまず党の基層組織をつくり、それを絶えず拡大、強化していく方法で党を創立するとともに、その準備は必ず日本帝国主義に反対する武装闘争と緊密に結びつけて進めるべきであると強調した。

主席が卡倫会議で武装闘争路線と反日民族統一戦線路線、党創立方針を打ち出し、武装闘争路線を第一の基本路線として提示したことにより、反日愛国勢力を結集する活動も党創立の準備も、銃剣、武力建設を優先させる軍事先行の原則にもとづいて遂行する新たな先軍革命方式が創出されることになった。

「トゥ・ドゥ」の結成から新しい出発を宣言した朝鮮革命は、卡倫会議を機にチュチェの旗、先軍の旗のもとに、独自の革命路線と戦略・戦術をもって自らの前途を切り開いていく、自主的な革命の道を確固と踏み出すことになった。

第6節　最初の党組織――建設同志社の結成、党組織の拡大、強化

金日成主席は、卡倫会議の方針貫徹にあたって党組織を結成する活動に第一義的な力を注いだ。

革命的な党組織を結成することは、朝鮮において反日民族解放闘争に対する指導を正しく実現するための差し迫った要求であった。1930年代初期、反日民族解放運動がその幅と深さにおいて従来の闘争とは比ぶべくもない高いレベルに発展した状況の中、共青の名のもとでは全般的な反日民族解放運動をスムーズに指導することができなかった。党組織を結成してこそ、共青をはじめ各大衆団体はもちろん、反日民族解放運動全般を指導し、抗日武装闘争の準備を積極的に推し進めることができるのであった。

党組織の結成は、党創立の偉業を成功裏に推し進めるために提起される必須の要件であった。

1928年の共産党の解散と分派分子の党再建運動が残した重要な教訓は、何の準備もなく党中央を結成しようと急ぐのではなく、党創立のための組織的・思想的基礎を築く活動を着実に行っていくべきであり、そのために基層党組織を結成し、強固にしなければならないということを示していた。党組織を結成してこそ、それに依拠して中核を育成し、革命隊伍の統一を実現し、大衆的地盤を構築するなど党創立の組織的・思想的基礎を築く活動を着実に行っていくことができるのであった。また、そうしてこそ中国の党との関係を保ち、コミンテルンとの活動もスムーズに行うこ

とができるのであった。

革命の指導思想と革命路線、党創立方針が提示され、革命の指導中核と広範な大衆的地盤が築かれた状況のもとで、党組織を結成する問題は機の熟した要請として提起された。

主席は、このような要請を反映して1930年7月3日、卡倫で党組織結成会議を開き、最初の党組織を結成した。

共青および反帝青年同盟の幹部である車光秀、金赫、崔昌傑、桂永春、金園宇、崔孝一など新しい世代の共産主義者が最初の党組織のメンバーとなった。会議に参加できなかった金亨権をはじめ金利甲（キムリガプ）、朴根源（パクグンウォン）、李済宇（リジェウ）なども最初の党組織のメンバーとなった。

主席は会議で行った演説『党組織の結成に際して』で、最初の党組織の地位と使命について次のように述べている。

「きょう結成した革命的党組織は、やがて創立されるわが党の源であり、わが党創立のための党の基層組織を拡大するうえで母体としての意義をもつ組織だと言えます」

主席は演説で、党組織のメンバーに提起される課題とそれを遂行するための方途を示した。

主席は、広範な地域に基層党組織を急速に拡大し、それに対する統一的な指導体系を打ち立て、大衆運動に対する党の指導を実現することについて述べた。そして、「一つの思想・意志で団結しよう！」というスローガンを高く掲げ、革命隊伍の統一・団結を実現するために全力を注ぎ、革命の大衆的地盤を強固にするための課題を示した。また、党組織に提起される課題を立派に遂行するためには自主的立場を堅持し、党組織の建設を反日闘争と緊

密に結びつけて進めるべきであると強調した。

「トゥ・ドゥ」の綱領と規約に朝鮮の共産主義者の最終目標と当面の闘争課題が明示され、卡倫会議で採択された革命路線と戦略的方針に共産主義者が進むべき道と行動規範が具体的に示されていたため、党の綱領と規約は別個に採択しなかった。

主席は、生死をともにする同志を探し出して結集することから朝鮮革命を進め、達成しようとする遠大な抱負と革命的意志を反映して、最初の党組織の名称を建設同志社と呼ぶことにした。そして1930年7月10日には、建設同志社の思想的代弁者の役割を果たす出版物として雑誌『ボルシェビキ』を創刊した。

主席は、最初の党組織を結成した後、それを母体として党組織を急速に拡大していった。

1930年7月、孤楡樹の伊通河で最初の党組織のメンバーの会議を開き、党組織を拡大するうえで提起される具体的な課題を示した。

そして、党組織を絶えず拡大、強化するためには、革命的な組織生活と実践闘争の中で鍛えられた優れた人たち、特に共青と反帝青年同盟で鍛えられ認められた先進的な青年を党員として受け入れ、豆満江（トウマン）沿岸の北部朝鮮一帯と朝鮮人が数多く住む間島一帯に短期間のうちに党細胞を組織することが重要であると述べた。そして、この活動で最初の党組織のメンバーの役割を高めることが重要であると強調した。

主席は、最初の党組織のメンバーを豆満江沿岸の北部朝鮮一帯と満州の各県と主要都市に派遣し、基層党組織を拡大する活動を指導した。

特に国内に党組織を拡大することに深い関心を払い、1930年9月末には朝鮮北部の穏城(オンソン)地区に出向いて党組織を結成する準備を周到に行った。これにもとづいて10月1日、穏城郡頭婁(トウル)峰で党組織を結成する会議を開き、演説『国内党組織の当面の課題について』で、党組織を戦闘的な組織に拡大、強化し、各階層の大衆を革命組織に結束して反日闘争に立ち上がらせる問題をはじめ、国内の党組織に提起される課題を示した。次いで、穏城地区革命組織の中核からなる穏城党組織を結成した。

穏城地区党組織を結成した後、主席は国内各地に党組織を拡大する活動を積極的に推し進めた。その結果、穏城をはじめ六(リュク)邑一帯と北部朝鮮一帯に党細胞が組織された。

主席は、汪清や延吉、和竜、琿春、安図など豆満江沿岸の東満州一帯の朝鮮人居住地域で党組織を拡大するための活動を積極的に繰り広げていった。

1930年の秋、和竜県大拉子と汪清県石峴地区へ出向いた主席は、闘争の中で鍛えられ認められた共青員と労働者、農民出身の中核からなる基層党組織を新たに結成した。

豆満江沿岸の東満州一帯に派遣された新しい世代の共産主義者は、労働者、農民が集中している炭鉱、鉱山と山間部の農村に党細胞と党分組など基層党組織を拡大していった。同時に南満州一帯の海竜、清原、柳河、興京、鉄嶺、公主嶺、開原など朝鮮人居住地域でも、基層党組織を結成する活動を力強く繰り広げた。このように国内と満州の各朝鮮人居住地域に基層党組織が急速に拡大した結果、党組織の建設を力強く推し進める土台が築かれた。

各地で基層党組織が拡大されるに伴い、主席は組織指導体系を確立することに力を入れた。

1930年10月11日、延吉県朝陽川での党および共青幹部への談話と翌年の春に行われた敦化講習において、整然たる党組織指導体系を確立する方針を全面的に提示した。講習では、基層党組織を統一的に指導するうえで提起される原則的な問題を明示し、党および革命組織の活動区域を地域的に区分した革命組織区を設け、革命組織区と各県に党委員会を組織、整備する活動を正しく行うことを強調した。また、地理的に重要な位置にある安図一帯で党組織指導体系を確立することに深い関心を払い、1931年6月中旬、自ら小沙河区党委員会を組織した。

こうして、豆満江沿岸の東満州各地に革命組織区が結成され、基層党組織の活動を直接指導する末端指導単位の党組織として区党委員会が組織、整備され、区党委員会と直属党細胞の活動を指導する中間指導単位の党組織として県党委員会が強化されるようになった。

主席は、自主的な党組織の建設をコミンテルンの積極的な支持のもとに推し進めた。

この時期にハルビン、五家子などでコミンテルンのメンバーや連絡員に会い、彼らに朝鮮革命の生命である自主性の原則と創造性の原則、主体的路線について詳細に説明した。1930年8月下旬には、コミンテルン連絡所との連係を図るためにハルビンへ出向いた。主席は情勢があまり厳しかったため、警官が出入りしない白系ロシア人の経営する高級ホテルに宿泊したが、旅費を切りつめるため街に出て安価なトウモロコシ焼きもち1、2

枚を食した。

主席は、コミンテルン連絡所を訪ね、分派分子による極左冒険主義的暴動がもたらした東満州の情勢について通報し、卡倫会議で採択された朝鮮革命の主体的な路線と方針、特に自主的な党創立方針について説明した。

コミンテルン連絡所のメンバーは、主席が打ち出した朝鮮革命の主体的路線と戦略的・戦術的方針に全面的な支持を表明するとともに、マルクス・レーニン主義に創造的に対処する金日成主席の立場はきわめて鼓舞的なものであり、新しい党創立方針を打ち出し、その母体となる最初の党組織として建設同志社を結成したのは一国一党の原則に矛盾しないと言った。

彼らは、主席にモスクワ留学を勧めた。五家子に来たコミンテルン連絡員も、コミンテルンは金日成同志に大きな期待をかけているとし、モスクワ共産大学に入学するよう勧めた。車光秀をはじめ同志たちは、留学に必要な生活用品をすべて準備して、コミンテルンの勧めに応ずるよう説得した。

主席は、留学を勧める人たちに、朝鮮革命については朝鮮人民が最もよく知っている、朝鮮革命に関する戦略・戦術と方法論を見いだすためには朝鮮人民の中に入っていくべきである、わたしはソ連ではなく人民の中に入って朝鮮革命の理論と方法を学ぶ、と断言した。その後、同志たちとともに東満州に行き、人民と苦楽をともにしながら、党組織の結成と抗日武装闘争の準備を力強く推し進めた。

第7節　朝鮮革命軍の結成と抗日武装闘争の準備を積極的に推進

金日成主席は卡倫会議後、抗日武装闘争を展開するための準備を進めながら軍事的側面に第一義的な力を注ぎ、その最初の活動として朝鮮革命軍の結成に深い関心を払った。

主席は、朝鮮革命軍を結成するため、入隊させる青年の選出と武器の獲得を基本に準備活動を行った。

新しい世代の清新な共産主義者で武装隊伍を編制する一方、独立軍の中で先進思想に同調する軍人を教育して味方につけ、その思想的準備の程度に応じて革命軍に受け入れるようにした。同時に、さまざまな形式と方法で武器を手に入れ、闘争綱領と組織規範を作成するなど、武装隊伍を編制するための準備活動を推し進めた。

革命軍結成の準備を整えた主席は、1930年7月6日、伊通県孤楡樹で党および共青幹部会議を開き、朝鮮革命軍の結成を宣言した。

朝鮮革命軍は、チュチェ思想と、それにもとづく先軍思想によって指導され、大衆政治活動や軍事活動も行う政治・半軍事組織であった。

金日成主席は朝鮮革命軍の使命と基本的任務について次のように述べている。

「朝鮮革命軍は、積極的な政治・軍事活動を通じて武装闘争の中核的根幹を育成し、武装闘争に必要な武器を獲得して軍事的経験を積み、広範な人民大衆を固く結集させて、組織的な抗日武装

闘争の準備をしっかりと整えなければなりません。これが朝鮮革命軍の使命と基本的任務であります」

主席は、朝鮮革命軍を第1隊、第2隊、第3隊と幾つかの隊に編制して責任者を任命し、隊員には「朝鮮革命軍」という印のある赤い帯と武器を手渡した。

主席は朝鮮革命軍を結成した後、それを政治的、軍事的に準備させる活動を推し進めた。武装隊伍の中核を整えることに第一義的な意義を付与し、1930年7月中旬には孤楡樹で朝鮮革命軍隊員の短期講習を行い、革命武力の根幹を育成した。同時に孤楡樹の三光学校に2年制の高等科を設置し、政治と軍事を兼備した朝鮮革命軍指揮官を系統的に育成した。

こうして、やがて創建される革命武力の根幹が育成されるようになった。

主席は満州と朝鮮各地に朝鮮革命軍の武装グループを派遣し、軍事・政治活動を積極的に繰り広げるようにした。

主席は、武装闘争を国内深くへ拡大する構想を立て、金亨権を責任者とする武装グループを国内に派遣した。武装グループは1930年8月14日、豊山(プンサン)郡把撥(パバル)里の警察官駐在所を襲って悪質な日本人巡査部長を射殺し、利原(リウォン)郡一帯で大衆政治工作を繰り広げた後、北青(プクチョン)、洪原(ホンウォン)方面に進出して大徳(テドク)山戦闘、節婦(チョルブ)岩戦闘などを行った。

朝鮮革命軍の他のグループは、義州地方に進出して軍事・政治活動を展開し、満州の広い地域でも革命軍グループが、長春金剛館戦闘、ハルビン道裡戦闘、延吉県倒木溝戦闘など多くの戦闘を繰り広げて日帝侵略軍と反動警察、密偵と走狗を誅殺して武器を

獲得しながら広範な大衆を教育し、革命組織に結集させた。

主席は朝鮮革命軍の軍事・政治活動を指導する一方、中部満州一帯を中心に武装闘争の大衆的基盤を築く活動を精力的に推し進めた。

極左的な5・30暴動と8・1暴動による後遺症をいやすために、1930年5月から10月にかけて一身の危険をも顧みず、吉林と海竜、清原、蛟河、ハルビン、敦化、穏城など満州と国内各地を巡って破壊された革命組織を立て直し、拡大していった。

主席は、一日に何回も変装し死線を乗り越えなければならなかったその日々、敵の取り締まりと執拗な追跡により危険が迫るたびに、同志たちと人民の献身的な助けを受けて危機を切り抜けた。海竜行きの列車では撫松小学校時代の同窓生である中国の大富豪の息子張蔚華の助けで日本領事館警察の執拗な追跡から逃れ、蛟河へ行った時には名も知れぬ婦人の犠牲的な保護によって警察の追跡の手を逃れた。主席はこうした事実を通じて、革命家が命までも託せる潔白で堅実な道義は勤労人民にあるということを痛感した。

主席は、農村の革命化を武装闘争の大衆的基盤の構築にあたって第一義的に解決すべき鍵と位置づけ、それに大きな力を注いだ。

主席は1930年10月、中部満州の五家子に出向いて、そこを農村革命化のモデルにするための活動を展開した。

五家子は民族主義者が「理想郷」にするといって開拓した農村であり、ここを革命化すれば中部満州一帯の農村革命化に大きな影響を及ぼし、その経験にもとづいて満州全域と朝鮮北部国境一帯の農村の革命化を推し進めることができた。

主席は、村の頑固な有志との活動に第一義的な関心を払い、忍耐強い説得と感化教育によって彼らが古い思考方式から脱け出すようにした。それをもとに、民族主義の影響下にあった大衆団体を農民同盟、反帝青年同盟、反日婦女会、少年探検隊などに改組し、村人たちを受け入れて政治生活をするようにし、地方自治行政機関である村公会も革命的で民主的な自治委員会に改組するようにした。主席は、五家子の人民を啓蒙し教育することにも深い関心を払い、三星学校の教育内容を革命的なものに改め、月謝を廃止して五家子村の貧しい子どもたちを対象に無料教育を実施するようにした。また、夜学を設けて教育を受けられない青壮年や婦女に文字を教えるようにした。

主席は、不朽の古典的名作『花を売る乙女』の台本を完成して上演し、『赤旗の歌』、『革命歌』など革命的な歌の普及を活発に繰り広げて大衆を階級的に目覚めさせ、彼らを反日闘争へと力強く立ち上がらせた。また、五家子では農民同盟機関誌として『農友』を発行した。『農友』は間島地方にまで配布され、農民の啓蒙に大きな役割を果たした。

主席の精力的な活動により、五家子は革命的な村に生まれ変わり、その経験は広く普及して広範な地域で農村革命化が積極的に推し進められた。その結果、五家子を中心とする遼河の農村をはじめ中部満州の各地域は朝鮮革命軍の強固な活動拠点となり、武装闘争の大衆的地盤が拡大された。

この間、革命同志や辺大愚（ピョンデウ）をはじめ五家子の有志たちは、かくも偉大で尊い人がどうして暁の明星にのみたとえられようかとして、民族の運命を救う太陽になってほしいという全同胞の念願

と意志を込めて、ハンビョル（一星）と呼ばれていた主席の名を金日成と呼ぶようになった。

主席は1930年12月下旬、懐徳県五家子で開かれた朝鮮革命軍指揮官・革命組織責任者会議で、中部満州地方における活動を総括し、東満州へ進出して抗日武装闘争の準備をさらに推し進める課題を示した。

五家子会議は、青年学生運動と農村地下運動から武装闘争の段階へと移行して、銃剣をもって祖国を解放しようとする主席の確固たる決意と意志を改めて示す会議となった。

五家子会議の後、主席は革命活動の中心地を東満州に移し、武装闘争の準備を推し進めていった。

東満州は自然地理的に朝鮮と直接つながっているだけでなく、住民の大多数が朝鮮人で占められ、階級的構成が良好であり、武装闘争の展開に有利な地域であった。

主席は東満州へ向かう際、極左冒険主義的な5・30暴動の後遺症について総括し、広範な大衆を一つの政治勢力に結集する正しい組織路線を示し、この路線をもって新しい世代の共産主義者を武装させるという二つの課題を打ち出した。

このころ主席は、孤楡樹で革命組織の活動を指導し、長春方面に行く途中で反動軍閥当局に逮捕され、長春監獄で3度目の辛酸をなめたが、連共人士たちの助けを得て釈放された。

1931年の春、東満州に行った主席は、敦化で朝鮮革命軍の隊員と革命組織の中核メンバーの講習会を開き、基層党組織を統一的に指導するうえで必要な原則的問題とともに、抗日武装闘争の準備を本格化するための課題と方途を明示し、地下工作員を東満州

各地の都市と農村に派遣した。

その後、主席は革命勢力の構築に力を入れる一方、安図、延吉、和竜、汪清一帯で極左的暴動による後遺症をいやすための革命組織の活動を指導し、朝鮮の北部国境地帯である鐘城（チョンソン）、穏城にまで赴いて革命組織の活動を盛り立てた。1931年5月14日、鐘城郡豊谷面（プンゴク）豊溪洞（プンゲ）共樹徳（コンスドク）で政治工作員および地下革命組織責任者会議を開き、分派・事大主義者の極左冒険主義的な策動の弊害を一掃し、武装闘争を展開するための革命勢力の準備を十分に整えるうえで提起される課題を具体的に示した。

主席は共樹徳会議の後、革命勢力を十分に準備するために分派・事大主義者の極左冒険主義的路線を克服し、革命的組織路線を貫徹することに深い関心を払った。主席は1931年5月20日、延吉県明月溝で党および共青幹部会議を招集し、演説『極左冒険主義路線を排撃し、革命的組織路線を貫徹しよう』で、極左冒険主義路線の不当さと弊害を明らかにし、革命的組織路線を貫徹するための課題を示した。

主席は、現在、朝鮮の共産主義者にとって最も重要な課題は、革命の基本大衆をしっかりと結集し、その周りに各階層の反日勢力を固く団結させ、全民族を一つの政治勢力として結束させる革命的組織路線を貫くことであると述べた。

主席は明月溝会議の後、革命的組織路線を貫徹するために、党および共青の幹部と朝鮮革命軍メンバーを間島の各地区と穏城、鐘城、慶源（キョンウォン）など朝鮮の北部国境一帯に派遣した。同年夏から安図地区を活動拠点として間島と国内の革命活動を指導し、1931年6月下旬、会寧、鐘城地区に入り、そこで活動している政治工作

員と革命組織の活動を指導した。

こうして、興隆村を中心とする安図地区では革命組織が深く根を下ろし、指導的中核が独自に活動していけるようになり、満州各地と六邑一帯など北部朝鮮一帯でも、革命的組織路線を貫徹するための闘争が活発に展開され、強固な革命勢力が築かれるようになった。

主席は革命的組織路線を貫徹する闘争で収めた成果にもとづき、間島地方全域で広範な大衆を大規模な秋収闘争へと奮い立たせた。1931年8月末、延吉県太平溝で開かれた党および共青幹部会議で、間島の農民を秋収闘争へと立ち上がらせる方針を打ち出し、次いで9月下旬、安図県松江で開かれた安図地区革命組織責任者会議では、この闘争を東満州の全地域に拡大、発展させる対策を講じた。そして同年10月上旬、延吉県王隅溝で開かれた党および革命組織責任者会議で、秋収闘争を日本帝国主義に反対する暴力的な政治闘争へと発展させる新たな方針を示した。

秋収闘争は、間島の10余万農民が参加した、大規模で組織的な暴力闘争へと発展し、日帝侵略者と反動地主に大きな打撃を与えて勝利を収めた。秋収闘争は人民を目覚めさせ鍛える重要な契機となった。

主席は武装闘争の準備を本格的に推し進めながら、武装闘争の形式を確定することに深い関心を払った。

主席は、日本帝国主義の満州侵略と関連して1931年10月中旬、鐘城郡光明（クァンミョン）村で国内政治工作員と地下組織責任者の会議を開き、組織的な武装闘争の開始はこれ以上引き延ばすことのできない緊急な課題となっているとし、武装闘争の準備を本格化するための

課題を示した。光明村会議は、国内の人民と革命家に対する武装闘争の合図でありシグナルであった。

主席は遊撃戦に深い関心をもち、この研究を深めた。『孫子』、『三国志』と朝鮮の兵書である『東国兵鑑』、『兵学指南』などを読み、外国のパルチザン闘争や朝鮮の義兵出身の名将たちの多様な戦法、壬辰祖国戦争（文禄・慶長の役）についても研究した。この過程で、数と技術のうえで優勢な日帝侵略軍と戦って勝利するには変幻自在の遊撃戦を適用すべきであることを確信するようになった。

主席の指導のもとに抗日武装闘争を本格的に展開できる政治的・軍事的準備が整い、朝鮮の反日民族解放闘争は先軍の旗のもとに組織的な武装闘争の段階を迎えた。

第2章　反日民族解放闘争を新たな高い段階へと発展させるためのたたかい
（1931年12月～1936年2月）

第1節　明月溝会議、遊撃戦の形式を基本に武装闘争を展開する戦略的方針の提示

日本帝国主義の満州侵略によってもたらされた情勢は、銃を手に取って直ちに抗日武装闘争を展開することを求めていた。

1931年、9・18事変を起こし、満州に対する武力侵略を開始した日本帝国主義は、「後方の安全」のために朝鮮人民に対する反動攻勢を全面的に強化した。彼らは特に、満州の朝鮮人居住地域で人民への暴圧を強化した。そのため、日本帝国主義の弾圧に抗する朝鮮人民の反日闘争はいっそう強まり、次第に暴力闘争の様相を呈していった。

この時期、大衆的な武装闘争を展開する絶好のチャンスがもたらされた。

日本帝国主義の満州侵攻と中国東北軍の総撤退によって満州地方の国民党の支配は崩壊し、日本帝国主義の支配体制もまだ確立されておらず、満州全土は無政府状態にあった。広範な中国人民の反日救国運動は至るところで展開されていた。

このような緊迫した情勢と有利な諸局面を科学的に分析した

金日成（キムイルソン）主席は、抗日武装闘争を早急に展開するため、1931年12月16日から25日にかけて延吉県明月溝で党および共青幹部会議を開いた。

会議には革命組織と実践闘争を通じて鍛えられた40余名の革命的前衛闘士が参加した。中国の共産主義者も参加した。

主席は『日本帝国主義に対する武装闘争を展開するために』と題する歴史的な演説を行い、全民族が祖国解放のための聖戦に総決起するようアピールした。

主席は、すべての人が武器を取って祖国解放のための聖戦に決起するときが訪れたとし、貧富と貴賤、党派と信教のいかんを問わず、日本帝国主義に反対するすべての愛国勢力を武装闘争に総動員すべきであると指摘した。そして銃のある人は銃を、金のある人は金を、力のある人は力を出し、全民族が反日武装闘争に総決起すべきであると強調した。

金日成主席は次のように述べている。

「…遊撃戦の形式を基本として武装闘争を展開しなければなりません。

遊撃戦は、自らの力を保持しながらも、敵に大きな政治的・軍事的打撃を与えることができ、小さな力によっても、数量上、技術上優勢な敵を十分掃滅できる武装闘争の方法です」

主席の示した方針は、全会一致で認められた。

主席は、遊撃戦の形式で武装闘争を繰り広げるための課題と方途を全面的に示した。

まず、常備の革命武力である反日人民遊撃隊を組織する課題を提示した。

主席は、今後創建される反日人民遊撃隊は義兵隊や独立軍とは根本的に異なる真の人民の軍隊、労働者階級の軍隊、革命の軍隊にならなければならないとし、反日人民遊撃隊を創建するためには、地下革命闘争の厳しい試練の中で鍛えられた優れた青年共産主義者を根幹として武装部隊を組織し、革命闘争の実践の中で認められた先進的な労働者、農民、愛国青年を受け入れて遊撃隊伍を絶えず拡大し、遊撃隊に対する共産主義者の指導を確保すべきであると述べた。また、武装力の2大要素の一つである武装を整えることは武装闘争の成果を左右する基本的な要因であるとし、「武装はわれわれの生命だ！　武装には武装で！」というスローガンを打ち出し、敵の武器を奪って武装するとともに、自らの手で武器をつくる課題を提示した。

主席は、反日人民遊撃隊を円滑に創建するためには、最初は地方ごとに小規模の遊撃隊を組織し、それを強化しつつ大部隊の革命武力に発展させるべきであると述べた。

主席は次に、遊撃根拠地創設の課題を示した。

遊撃根拠地創設に有利な条件が備わっていた豆満（トウマン）江沿岸一帯の山岳地帯と革命化された農村地域に解放地区形態の遊撃根拠地である遊撃区を創設し、その周辺の農村地域を革命化することで実際、遊撃区と変わりのない地域にすべきであると強調した。

主席はまた、武装闘争の大衆的基盤を築く課題を示した。大衆的基盤を築くためには、各階層の人民大衆を各種の組織に結集して革命的に教育するとともに、実践を通じて革命勢力を戦闘的に鍛え、拡大していくべきであると強調した。

主席はまた、朝中人民の反日統一戦線を結成する課題を示した。

朝中人民の反日統一戦線を結成するうえで最も緊要な課題は、中国人反日部隊との連合戦線を結成することであると述べ、ここで重要なのは、兵士大衆との下部統一戦線を基本とし、これに依拠して上層部との統一戦線を結成する原則を堅持することであると指摘した。また、反日部隊を味方に引き入れる組織的対策として、反日部隊の集結地である汪清と安図に別働隊を組織することが重要であると指摘した。

主席は最後に、党組織および共青の活動を強化する課題を示した。

遊撃隊の指導的中核と将来創立される党の組織的根幹を育成するためには、党生活を強化し、共青活動に力を入れて共青組織を拡大すべきであると指摘した。

この会議は、抗日武装闘争の始原を開き、朝鮮の反日民族解放運動と共産主義運動に新たな転換をもたらした。会議では、反日民族解放運動をその最高の段階である武装闘争へと移行させる意志が再確認され、「武装には武装で、反革命的暴力には革命的暴力で！」のスローガンのもとに銃剣をもって日本帝国主義を撃滅する抗日戦争が正式に宣言された。こうして反日民族解放闘争は、先軍の旗のもとに組織的な武装闘争の新たな高い段階に入った。

第2節　反日人民遊撃隊の創建、先軍革命指導の開始、南満州と北満州への進出

金日成主席は1931年冬の明月溝会議後、抗日武装闘争の主導的勢力となる反日人民遊撃隊を創建する活動に全力を傾けた。

全土が日本帝国主義の圧制と厳しい弾圧下にあった当時、日帝侵略軍に対抗しうる常備の革命武力を整えることは、決して容易なことではなかった。反日人民遊撃隊を創建するには、人員や兵器の問題、反日部隊との関係など軍事的、政治的に提起される多くの難問を解決しなければならなかった。

主席は父から譲り受けた2挺の拳銃を元手に、主体的な先軍思想にもとづいて建軍偉業を実現する道を踏み出した。

主席は多くの指導的中核を汪清、延吉、琿春、寧安、吉林など満州の広い地域に派遣する一方、革命活動の中心地を遊撃戦に有利な安図地方に移し、遊撃隊を創建する活動を指導した。1932年1月、安図県小沙河で行われた小沙河区党委員会会議と党および共青幹部会議で、反日人民遊撃隊の創建で提起される諸問題を解決するための積極的な対策を講じた。

主席は、武装部隊の組織に第一義的な関心を払った。

主席は朝鮮革命軍と党および共青組織で鍛えられた人たちを根幹とし、安図とその周辺の赤衛隊、労働者行動隊、少年先鋒隊などの半軍事組織で政治的、軍事的に鍛えられた青年と、豆満江沿岸の各県で秋収闘争を通じて鍛えられ認められた青年を選出して武装隊伍を組織するようにした。

武装部隊の中核が育成されると、1932年3月上旬、安図県小沙河で車光秀（チャグァンス）、金日竜（キムイルリョン）、朴勲（パクフン）、金喆（キムチョル）（金喆熙（キムチョルヒ））、李英培（リヨンペ）など18名の青年共産主義者でまず小規模な遊撃隊（遊撃隊グループ）を組織した。汪清、延吉、和竜、琿春など各地域でも小規模遊撃隊が数多く組織された。

主席が示した「武装はわれわれの生命だ！　武装には武装

で！」のスローガンを高く掲げた遊撃隊グループと革命組織のメンバーは、至るところで日帝侵略軍や日満警察、親日走狗、反動官僚層の武器を奪取する闘争を繰り広げた。同時に、革命組織のメンバーと大衆は、最初は鍛冶屋で刀や槍をつくり、その後は兵器廠を設けて炸裂弾をつくった。実に、武器獲得のためのたたかいは全民抗争の開始を予告する前哨戦となった。

主席は、抗日武装闘争の大衆的基盤を築く活動に大きな力を注いだ。

1932年2月から3月にかけて、遊撃活動に有利な地域である富爾河の農村に入り、「下男」を装って工作を進めて村を革命化し、その経験を各地に広めた。こうして、短い間に豆満江沿岸一帯の多くの農村に武装闘争を支える大衆的基盤が築かれた。

1932年春、主席は、東満州の各地で10余万農民大衆の大規模な春慌闘争を組織した。春慌闘争を通じて日本帝国主義と反動地主に大きな打撃を与え、遊撃隊グループと革命組織はいっそう鍛えられ、多くの労働者、農民、愛国青年が革命に目覚めるようになった。

主席は、中国人反日部隊との連合戦線の実現にも深い関心を払った。

反日部隊との連合戦線実現の問題を遊撃隊創建で解決すべき当面の課題と位置づけた主席は、1932年4月上旬、安図県小沙河で革命組織責任者の会議を開き、反日部隊の上層部と交渉する問題を提起し、自ら安図の反日部隊を訪ねて于司令と会談し、于司令部隊を反日共同戦線に立たせた。そして、反日共同戦線を強化するために別働隊と反日兵士委員会を設け、反日部隊との活動を強

化するようにした。こうして、遊撃隊の合法的活動の道が開かれるようになった。

主席は、遊撃隊の階級構成と指揮体系、服装なども既成にこだわることなく、遊撃戦の要求と特性に即して独自に解決した。また、反日人民遊撃隊を組織する最終会議を開き、入隊志願者の最終審査や遊撃隊結成式の日時と場所、当面の活動地域を確定した。

主席は中隊を基本戦闘単位として反日人民遊撃隊を組織し、隊長兼政治委員となった。

主席は1932年4月25日、安図県小沙河土器店谷の台地で遊撃隊創建式を行い、反日人民遊撃隊の創建を宣言した。

主席は創建式で行った演説『反日人民遊撃隊の創建に際して』で、反日人民遊撃隊の性格と使命について次のように述べている。

「反日人民遊撃隊は日本帝国主義とその手先に反対し、祖国と人民を愛する労働者、農民および愛国的青年によって組織された、真に人民の利益を守る革命的武力であります。

人民遊撃隊の目的と使命は、朝鮮で日本帝国主義の植民地支配を覆し、朝鮮人民の民族的独立と社会的解放を成し遂げることです」

主席は演説で、反日人民遊撃隊の拡大、強化と遊撃根拠地の創設、人民大衆との連係の強化など抗日武装闘争を本格的に進めるための課題を示した。

安図で創建された反日人民遊撃隊は主席がじきじき率いる部隊であり、東満州と南満州で選ばれた前衛闘士と国内から来た先覚者で組織され、白頭（ペクトウ）山地区と鴨緑（アムロク）江、豆満江沿岸の全般的地域で活動することを原則とした部隊であった。安図遊撃隊は、先軍に

よる革命指導を実現する中核部隊、主力部隊であった。

安図で反日人民遊撃隊が創建された後、主席が派遣した指導的中核によって汪清、延吉、和竜、琿春など東満州の各地に遊撃隊が組織され、北満州と南満州でも金策（キムチェク）、崔庸健（チェヨンゴン）、李紅光（リホングァン）、李東光（リドングァン）など朝鮮の堅実な革命家によって遊撃部隊が組織された。

主席による反日人民遊撃隊の創建は、朝鮮人民の革命闘争と軍建設に転換をもたらした歴史的な出来事であった。

反日人民遊撃隊の創建により、先軍革命の最も強力な中核部隊、真の人民の革命武力が誕生し、朝鮮革命全般を先軍の原則にもとづいて推進できるようになった。まさにこのときから、金日成主席の先軍による革命指導が始まったのである。

主席は遊撃隊の創建後、反日人民遊撃隊を南満州と北満州へ進出させた。

1932年5月中旬、主席は安図県小沙河での反日人民遊撃隊の指揮官、党および共青幹部会議で、主力部隊の南満州進出は独立軍部隊との統一戦線を実現し、武装闘争の大衆的基盤を築くだけでなく、南満州進出を通じて反日人民遊撃隊を政治的、軍事的に鍛えられた革命武力に強化することに重要な目的があると強調した。

主席は1932年5月、遊撃隊創建後の初の戦闘である安図県小営子嶺での敵の輸送隊に対する伏兵戦を勝利に導いて、隊員に勝利への確信を抱かせ、遠征に必要な物資を確保した。

主席は南満州への進出に先立ち、病床にある母を訪ねて見舞い、6月初めに反日人民遊撃隊の主力部隊を率いて南満州進出の途についた。

主席は、安図―― 撫松県境での日帝侵略軍との初の遭遇戦で絶

妙な反攻撃戦を展開し、1個中隊の敵兵を全滅させて日本軍の神話を打ち破り、隊員と人民に勝利の信念を抱かせた。そして、撫松に数日間留まって革命組織を拡大、強化する活動を行った後、6月の末に通化に赴き、梁世鳳（リャン セ ボン）をはじめ独立軍の指揮官と兵士に民族の団結した力で祖国を解放し、この聖なるたたかいで青年が先頭に立つよう呼びかけ、日本帝国主義とあくまでたたかうよう鼓舞激励した。次いで三源浦、孤山子、柳河、海竜、濛江地区に進出して大衆を革命化し、破壊された革命組織を立て直し、遊撃隊の隊伍を拡大し、武力装備を改善する活動を繰り広げた。また、反日部隊との活動を繰り広げて反日連合戦線を強固にした。

南満州遠征の目的を達成した主席は、1932年8月下旬、拡大、強化された反日人民遊撃隊の主力部隊を率いて安図県両江口に帰還した。

同年8月末、両江口で2回にわたる反日兵士委員会の会議を開いて反日部隊との活動をいっそう積極化するための具体策を講じ、9月には、反日部隊との連合作戦で敦化県城戦闘と額穆県城戦闘を勝利へと導いた。敦化県城戦闘は、反日人民遊撃隊が中国人反日部隊と共同で日帝侵略軍に打撃を与えた最初の県城戦闘であった。

主席は、1932年9月下旬、両江口で反日人民遊撃隊の指揮官・政治工作員会議を開き、遊撃隊創建後6カ月間の活動を総括し、遊撃隊の活動拠点を汪清に移し、反日部隊との活動を強化し、東満州一帯で急速に拡大されている遊撃闘争を正しく指導し、革命根拠地の創設を速め、固く守る問題など、遊撃闘争を新たな段階へと発展させるうえで提起される課題を明示した。

両江口で多忙な日々を送っていた主席は、同志たちの切なる勧めで安図県小沙河の母を訪ねた。ところが母はすでに世を去り、家には二人の弟が残っていた。主席はこみあげる悲しみをこらえ、母の遺言をかみしめながら墓を訪ね、必ず銃剣をもって祖国の解放を達成すると悲壮な誓いを立てた。

主席は、日帝侵略軍の安図侵入が時間の問題となっている緊迫した情勢に対処し、両江口で反日兵士委員会の会議を開き、撤退する反日部隊が集結している羅子溝に行って彼らとの活動を強化することにし、1932年10月初め、北満州進出の途についた。

主席は反日人民遊撃隊の主力部隊を率いて両江口を発ち、富爾河、頭道梁子、官地付近と南湖頭など至るところで軍事・政治活動を展開し、人民の間に革命の種をまき広めた。10月下旬には汪清地区で、党および共青組織と大衆団体の活動を指導し、将来ここに反日人民遊撃隊主力部隊の活動拠点を築くための準備を進めた。

同年12月末、主席は汪清県羅子溝で反日兵士委員会の会議を開き、ソ連を経由して中国関内へ撤退しようとする反日部隊を思いとどまらせ、彼らとの反日連合戦線を強めるための対策を講じ、翌年1月上旬には老黒山地区へと進出し、反日部隊の上層部に会って反日救国の抗戦に立ち上がるよう呼びかけた。

その後、日帝侵略軍の執拗な追撃をかわしながら汪清地区に向かって困難な行軍を続けていた途中、羅子溝台地で思いがけず敵の包囲にさらされた。遊撃隊はここでくじけてしまうか、立ち上がってたたかい最後の勝利を勝ち取るかという生死存亡の岐路に立たされた。主席はどんなことがあっても武装闘争を続けなけれ

ばならないという決意を固め、勇敢にたたかい危機を切り抜けた。その後、馬（マ）という姓を名乗る老人の助けで、山小屋で20日間、軍事・政治学習を行った。

主席は、南満州と北満州への進出と軍事・政治学習を通じて鍛えられた遊撃隊伍を率いて、1933年2月、腰営口を経て小汪清の馬村に着き、そこに司令部を定めて武装闘争を中心とする朝鮮革命全般に対する戦略的な指導を強化していった。

第3節　豆満江沿岸遊撃根拠地の創設、人民革命政府の樹立、民主主義的改革の実施

金日成主席は、反日人民遊撃隊を拡大、強化する一方、豆満江沿岸に遊撃根拠地を創設する活動を推し進めた。

遊撃根拠地を創設することは、先軍による革命指導を成功裏に実現するための必須の要請であった。反日人民遊撃隊創建後の情勢は、遊撃根拠地の創設を切実に求めていた。

武装闘争が力強く展開され、豆満江沿岸の広い地域が革命化されると、これに恐れをなした日本帝国主義は間島地方の朝鮮人の「討伐」に狂奔した。極悪非道な日帝侵略軍は連日、革命化された農村を襲って殺しつくし、焼きつくし、奪いつくす「焦土化」作戦を強行して、遊撃隊と人民大衆のつながりを断ち切り、先軍革命の主力部隊である反日人民遊撃隊を揺籃期のうちに圧殺しようと狂奔した。このような情勢下にあって、遊撃根拠地を速やかに創設せずには、創建されて間もない遊撃隊と革命大衆を敵の反

動攻勢から守り、全般的な朝鮮革命を発展させることができなかった。

この時期、遊撃根拠地を創設できる条件も熟していた。豆満江沿岸の広い地域で農村革命化が急速に進められて大衆的基盤が強化され、革命組織が築かれ、必要な武装力の準備も整えられていたのである。

主席は、当時の情勢と武装闘争発展の切実な要請を深く洞察し、すでに1931年冬の明月溝会議と翌年5月の小沙河会議で示した遊撃根拠地創設方針に従って、豆満江沿岸一帯に遊撃根拠地を創設する活動を推し進めた。

主席は、解放地区形態の根拠地である遊撃区を創設することに第一義的な関心を向けた。

遊撃区は敵の支配体制から脱して遊撃隊が完全に掌握している区域、すなわち敵の反動支配が一掃され、革命政権が樹立され、防衛能力と体制が整っている根拠地を意味した。

主席は遊撃区創設のための第一段階として、豆満江沿岸の各地方に党および共青の有能な指導的中核を派遣し、農村の革命化を速める措置を講じた。結果、農村地域は遊撃区が整えられるまで反日人民遊撃隊が足を据えて活動できる臨時の拠点となり、遊撃根拠地を創設する基盤となった。

主席は、反日人民遊撃隊が敵を軍事的に制圧し、遊撃区を創設できる地域を確保するようにした。そして、ここに革命的大衆を集結させるとともに、政権を樹立し、党、共青その他の革命組織と赤衛隊、少年先鋒隊などの半軍事組織を結成するようにした。また、遊撃区人民の生活を安定させ、革命的な規律と秩序を確立

するため一連の措置を講じた。

主席は南満州への遠征に先立ち、1932年5月末、安図県小沙河でモデルケースとしての遊撃区の創設を進めた。これを契機に、東満州の各県に遊撃区が続々と創設された。

主席は1932年10月、汪清県大北溝、小北溝、小汪清など各地域に赴いて遊撃区の創設を指導した。

こうして1932年夏から1933年初めまでの間に、安図県の小沙河、大金江を中心とする地域をはじめ汪清県の小汪清、嗄呀河、腰営口を中心とする地域、延吉県の王隅溝、海蘭溝、石人溝、三道湾、葦子溝を中心とする地域、和竜県の漁郎村、牛腹洞を中心とする地域、琿春県の大荒溝、煙筒砬子、梨樹溝を中心とする地域など豆満江沿岸の山間部農村に敵の支配体制から完全に解放された解放区形態の根拠地である遊撃区が創設された。その後、一部の遊撃区をより有利な地域に移して新しい遊撃区を創設するという主席の方針に従って、安図県の車廠子と内島山、汪清県の大荒崴、金倉、延吉県の新成洞を中心とした地域に遊撃区が創設された。

主席は遊撃区の創設と合わせて、遊撃区の周辺に半遊撃区を創設する活動を推し進めた。

半遊撃区は、表面上は敵の支配地域であるが、実際には遊撃隊と革命組織が掌握している地域であった。

遊撃闘争は固定した地域だけでなく、日本帝国主義が占領しているすべての地域で展開されるため、遊撃区周辺の広い地域に半遊撃区を創設してこそ、遊撃区防衛の負担を減らし、遊撃区をしっかり守り、遊撃戦を拡大、発展させることができるのであった。

しかし、当時、左傾日和見主義者と分派・事大主義者は解放地

区形態の遊撃根拠地である遊撃区の創設にのみ固執し、半遊撃区の創設に反対した。彼らは遊撃区と敵の支配区域を「赤色区域」と「白色区域」に色分けし、敵の支配区域の人民と中間地域の人民を「反動的な大衆」、「二面派大衆」だとむやみに疑い、排斥した。このように、抗日の道を歩んでいた少なからぬ大衆を敵の側に押しやるという重大な誤りを犯したのである。

主席は左傾日和見主義者と分派・事大主義者の妨害策動をはねのけながら、1933年春から半遊撃区の創設活動を積極的に推し進め、政治工作員を遊撃区の周辺地域に派遣して革命組織を結成し、大衆を組織的に結集させた。また、敵の支配機関の末端組織を掌握し、敵の機関に奉仕している人々を獲得するようにした。

こうして羅子溝、大荒崴、転角楼、涼水泉子などの汪清地域と延吉、和竜、琿春、安図地域の広い地域、東寧県と敦化県の一部の地域、北部朝鮮の六邑一帯に半遊撃区がつくられた。遊撃区のうち、防衛に不利な一部の地域も半遊撃区に切り換えられた。

主席は、敵の支配区域に目に見えない遊撃活動の拠点を設置するようにした。

遊撃活動の拠点は、遊撃隊が敵の支配区域へ行って軍事・政治活動を行ったり、連絡を取るために設置する拠点であり、地下革命組織や連絡所からなる機動的かつ臨時的な性格をもつ根拠地の一形態であった。

主席は、敵の支配区に政治工作員を派遣して地下革命組織を結成し、連絡所をつくる活動を活発に行うようにした。こうして、短期間に竜井、琿春、図們、老頭溝、百草溝など敵の支配区域の主要都市と軍事要衝、鉄道沿線地帯に数多くの遊撃活動の拠点が

つくられた。

主席は、遊撃区に人民革命政府を樹立し、民主諸改革を実施するためのたたかいを指導した。

主席は、卡倫会議と1931年冬の明月溝会議で示された政権建設思想にもとづき、1932年5月、小沙河会議で人民革命政府路線を打ち出し、その貫徹のために遊撃区における極左的なソビエト路線を克服し、人民革命政府を樹立するよう導いた。

コミンテルンのソビエト路線に従ってソビエト政府を樹立することは当時、国際共産主義運動において公認された一つの潮流であった。東満州の各遊撃区でも、左傾日和見主義者と分派・事大主義者はソビエト路線にならって遊撃区の実情に合わないソビエト政府を立て、即時社会主義の実現という極左的なスローガンのもとに、私有財産一般の撤廃を宣し、共同生活、共同労働、共同分配の実施を採用した。極左的なソビエト施策がわざわいして、遊撃区では甚だしい動揺と混乱が生じ、多くの人が不満を抱いて遊撃区を離れていった。

1933年2月下旬、主席は汪清県小汪清馬村で開かれた党および共青幹部会議で、遊撃区に見られる極左的偏向をいち早く是正し、朝鮮革命の主体的路線を貫徹するための当面の課題と遂行のための方途を示した。そして、豆満江沿岸の一部地域に組織されたソビエトを人民革命政府に改編する方針を打ち出した。馬村会議は、主体的な人民革命政府路線を擁護、貫徹するうえで転換の契機となった。

会議後、主席は党および共青幹部を現地に派遣し、各地での人民革命政府路線を貫くための活動を導いた。一方、ソビエト路線

を押しつけたり、それに追従する人たちに会い、理路整然とした論理で説諭した。

主席は1933年3月18日、嗄呀河遊撃区の泗水坪で、モデルケースとして汪清第5区人民革命政府を樹立する集会を指導した。その集会で行った演説『人民革命政府は真の人民の政権である』で、人民革命政府の性格について次のように述べた。

「きょうわれわれが樹立する人民革命政府は、労働者階級が指導する労農同盟にもとづき、広範な反日大衆の統一戦線による真の人民の政権です」

主席は、人民革命政府を早急に樹立する方途と、人民革命政府が実施すべき諸施策を明らかにした。

集会で主席は、人民の意思による区人民革命政府の代表を選出し、汪清第5区人民革命政府の樹立を宣布した。これは、労働者階級の政権樹立史において初めての新しい型の革命政権、人民政権の誕生であった。

試験的に人民革命政府を樹立した後の1933年4月、主席は小汪清馬村と十里坪でコミンテルンの派遣員に会い、極左的なソビエト路線の不当さと人民革命政府路線の正当さを明らかにした。そして、その年の夏に開かれた路線転換の問題を討議する会議で、人民革命政府路線と人民革命政府の施政方針を改めて明らかにした。会議では、人民革命政府路線にもとづきすべての遊撃区でソビエトを人民革命政府に改編し、ソビエト路線の極左的偏向を正す闘争を展開するという決定が採択された。

こうして、1933年の夏までに、豆満江沿岸の各遊撃区に区人民革命政府が、各村には村人民革命政府が樹立された。条件の整っ

ていないところでは、過渡的形態として農民委員会を設立し、徐々に人民革命政府に改編していった。

人民革命政府は、労働者、農民、兵士大衆はもちろん、青年学生、知識人、良心的な資本家、宗教家をはじめ広範な反日勢力を網羅し、彼らの利益を代表する人民的かつ民主的な新しい型の政権であった。

主席は、遊撃区で民主諸改革を実施するよう導いた。

民主的諸改革を実施してこそ、遊撃区の革命大衆を植民地的および封建的搾取と抑圧から解放し、彼らに真の政治的権利と安定した生活を保障することができ、創設された遊撃区が武装闘争の軍事戦略的基地、後方基地としての役割を十分果たすことができるのである。

主席は、人民革命政府が遊撃区の人民に政治的自由と民主的権利を保障し、親日派地主、買弁資本家、民族反逆者に対しては断固、独裁を実施するようにした。

また、遊撃区で日本帝国主義者と親日派地主、民族反逆者の土地を没収して農民に無償で分与し、産業分野では日本帝国主義者と買弁資本家の財産をすべて没収し、良心的な民族資本家の企業は奨励し、8時間労働制と最低賃金制を実施し、人民に安定した生活を保障するようにした。

主席は、男女平等権を発布して女性に男子と同等の権利を保障し、児童団学校での無料教育と合わせて、遊撃区の人民に無料治療制を実施するようにした。

こうして、豆満江沿岸に創設された遊撃区は、解放地区としての姿を見せるようになった。

第4節　抗日武装闘争の国内への拡大

金日成主席は、豆満江沿岸の遊撃根拠地を朝鮮革命の策源地、軍事戦略的基地として固める一方、抗日武装闘争を国内へ拡大するためのたたかいを指導した。

抗日武装闘争の国内への拡大は、主席が武装闘争を始めた当初から一貫して堅持してきた戦略的目標であり、不変の意志であった。しかし、民族排外主義者と分派・事大主義者は、中国領内の朝鮮革命家が朝鮮の革命のためにたたかうのは民族主義的な「朝鮮延長主義」であり、コミンテルンの一国一党制の原則にも矛盾するとして、武装部隊の国内への進出を妨害した。

一方、豆満江沿岸の広い地域に遊撃根拠地が創設され、それに依拠して抗日武装闘争が日増しに拡大するのに恐れをなした日本帝国主義は、遊撃隊と遊撃区を揺らん期のうちに圧殺し、国内の人民にその影響力が及ぶのを防ぐため大規模兵力を集中して国境警備を強化した。

主席は、朝鮮の革命家にとって朝鮮の解放のためたたかうのはなんぴとも侵すことのできない神聖な権利であるという確固たる信念を抱き、極めて困難な状況のもとでも武装闘争を拡大するため国内への進出を断行した。

1933年3月初め、主席は反日人民遊撃隊の一部隊を率いて小汪清遊撃区の馬村を出発し、敵の厳しい警戒網をついて豆満江を渡り、祖国の地――穏城（オンソン）地区に入った。

主席は1933年3月11日、王在（ワンジェ）山で穏城地区地下革命組織責任者

および政治工作員会議を招集し、『武装闘争を国内へ拡大するために』と題する演説を行い、抗日武装闘争を国内へ拡大する方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「…われわれは、敵が悪辣に策動し、いかに情勢が厳しくとも、必ず抗日武装闘争を国内へと拡大しなければなりません」

主席は国内の広大な地域に半遊撃区をより多く設け、強化すべきであるとし、そのためには遊撃隊が豆満江沿岸一帯で戦闘を行う一方、国内の地下革命組織は広範な大衆を組織に結集し、革命化するたたかいを力強く展開し、山林地帯の有利な自然条件を利用して秘密連絡所や活動拠点を設けるべきであると強調した。

そして、武装闘争を国内へ拡大するためには全民族を単一の政治勢力として結集しなければならないとし、日本帝国主義を憎み、祖国の解放を心から望む人であれば、財産や知識の程度、居住地や性別にかかわりなく全民族を反日民族統一戦線の旗のもとに結集し、さまざまな形態の合法および非合法な大衆組織を多く結成して広範な大衆を結集し、彼らを革命的に教育しなければならないと説いた。

主席は、武装闘争を国内へ拡大するための準備活動とともに、大衆闘争を密接に結びつけることが必要であるとし、国内でさまざまな形態の反日闘争を展開し、国内の革命家と人民が遊撃隊と遊撃区の人民に対する支援に全力を傾けるべきであると強調した。

また、われわれに提起されている困難かつ複雑な革命任務を立派に遂行するためには、革命の参謀部となる党がなくてはならないとし、従って先進思想で武装し、実際の闘争で鍛えられ認めら

れた共産主義者の中核を育成するために力強くたたかうことが必要であると強調した。

主席は、王在山会議後、1933年3月下旬には慶源(キョンウォン)郡の柳多(リュダ)島、5月下旬には鐘城(チョンソン)郡の新興(シンフン)村錦山(クムサン)峰、8月下旬には慶源郡の剥石(パクソク)谷など数回にわたって国内に進出し、政治工作員や地下革命組織責任者の会議と講習を指導して王在山会議の方針を貫くための具体策を講じた。

また、北部朝鮮一帯の人民を革命化し、王在山密営をはじめ多くの密営を設け、各農村と主要都市、鉄道沿線に秘密連絡所を設けさせた。

主席が派遣した政治工作員の積極的な活動により、穏城を中心に会寧(ヘリョン)、鐘城、慶源、慶興(キョンフン)、富寧(プリョン)など六邑一帯をはじめ北部朝鮮一帯に強固な半遊撃区が築かれた。

政治工作員は穏城、清津(チョンジン)地区をはじめ新興、元山(ウォンサン)、南浦(ナンポ)、ソウルなど国内の主な地域に組織的拠点を設け、人民を意識化、組織化していった。彼らは国内の人民に、主席の示した主体的な革命路線を説明し、遊撃区で発刊した出版物を配布した。同時に反日革命後援会、反帝同盟、農民相助会、婦女会、児童団などの組織をつくり、労働者、農民をはじめ広範な大衆を結集した。また労組、農組への革命的影響を強める活動を展開した。

主席は、反日人民遊撃隊の国内進出を積極化することにし、遊撃隊の一部隊を率いて涼水泉子をはじめ豆満江沿岸の国境地帯に進出し、積極的な軍事・政治活動を繰り広げながら武装闘争を国内へ拡大する活動を精力的に導いた。

反日人民遊撃隊の小部隊とグループは穏城、鐘城、会寧、慶源、

茂山（ムサン）など北部国境一帯に進出して敵の兵営、警察官駐在所、面事務所、渡し場、税関などを襲撃し、悪質な警察・日帝の手先を誅殺する戦闘を活発に展開した。1935年1月の1カ月間に、穏城郡だけでも穏城面南山（ナムサン）洞襲撃、美浦（ミポ）面月坡（ウォルパ）洞襲撃、美山（ミサン）洞襲撃、楡浦（ユポ）面世仙（セソン）洞襲撃など数多くの戦闘を展開するとともに、人民の間で政治活動を行った。

反日人民遊撃隊の相次ぐ国内進出と積極的な軍事・政治活動は、日帝侵略者に大きな政治的・軍事的打撃を与え、人民には必勝の信念と勇気を抱かせ、国内における各種形態の反日闘争を大いに励ました。

主席は、国内の反日大衆闘争を強化する活動を指導した。

主席は国内の人民が抗日武装闘争への支持、声援を活発に行うよう導いた。

地下革命組織と政治工作員は、抗日武装闘争への支援に人民を奮起させた。労働者、農民をはじめ各階層の人民は、日本帝国主義の厳しい弾圧のなかでも「抗日武装闘争を支援しよう！」「抗日遊撃隊を援護しよう！」というスローガンを掲げ、遊撃隊と遊撃区への支援に奮い立った。穏城や会寧、慶源、茂山、清津、元山、咸興（ハムフン）など全国各地の人民は抗日遊撃隊を声援するさまざまな集会を開き、檄文やビラ、出版物を通して抗日武装闘争への支持を表明した。

全国各地から遊撃隊への入隊を熱望する数多くの愛国青年が遊撃区を訪ね、愛国的人民は敵情を探知して遊撃隊に知らせ、道案内や寝食などの便宜を図った。

人民は遊撃隊と遊撃区に対する物質的支援活動も盛んに行った。

これには労働者や農民、青年学生、知識人はもちろん、愛国的な宗教家や企業家など広範な反日大衆が参加した。

抗日武装闘争に対する人民大衆の積極的な支援は、遊撃隊員と遊撃区の人民を励まし、武装闘争と人民大衆の反日闘争との連帯を強めた。

主席は、国内各階層の人民が各種形態の大衆闘争を力強く展開するよう導いた。

主席の指導のもとに政治工作員と地下革命組織のメンバーは、国内の人民を各種形態の大衆的反日闘争へと奮い立たせた。

労働者はストおよび労働団体結成の自由と団体契約権の獲得、8時間労働制の実施、賃金の引上げ、待遇改善などの要求を掲げてたたかった。たたかいは新義州（シンイジュ）、興南（フンナム）、南浦などの産業地区で断えず起こった。1931年から1935年の間に900余件のストが起きたが、これは、それまでの10年間の総スト件数を上回るものであった。たたかいの大半は経済闘争の枠を越えて政治闘争の性格を帯び、主として日本帝国主義の植民地支配に反対することにほこ先が向けられた。

農民のたたかいも強化された。1931年から1935年の間に350件余りの大衆的な小作争議があったが、ほとんどが日本帝国主義支配機関や収奪機関を襲撃し、悪質な地主に懲罰を加える闘争へと発展した。

青年学生の間でも反日的な同盟休校や、読書会事件、ビラ事件などが頻繁に起き、日本帝国主義の民族文化抹殺策動に反対し、民族文化を守るための愛国的な知識人や文化人、芸術家のたたかいも力強く繰り広げられた。

第5節　党組織の建設と大衆組織の拡大

金日成主席は、豆満江沿岸の遊撃根拠地に依拠して抗日武装闘争を強化する一方、党組織の建設を力強く推し進めた。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれはこれまでの成果にもとづき、革命組織が活動しているところから始めて各地へと党組織を絶えず拡大しながら党組織の指導体系を整備、強化し、闘争の中で鍛えられ、信頼できる先進分子を党組織に受け入れて共産主義の中核分子の隊伍を拡大、強化し、党創立の組織的根幹を強固なものにしなければなりません。

また、革命隊伍の思想・意志の統一とその純潔を保つことが重要です」

主席は党の基層組織をつくり、それを絶えず拡大し、その組織指導体系を確立することに全力を傾注した。

先軍革命の主導的勢力である反日人民遊撃隊内に党組織を設け、統一的な党組織指導体系を確立することに第一義的な関心を払い、基本戦闘単位である中隊に党の基層組織である細胞をつくり、その下に党分組を設置した。そして、遊撃隊の力が増大し大隊が編制されるに伴い、細胞を統一的に指導する使命を持つ大隊党委員会を組織し、大隊が連隊に改編されると、部隊内のすべての活動を担う集団的指導単位としての連隊党委員会を組織した。

反日人民遊撃隊内に各級党組織が結成されたことで、従来は地域的単位ごとに行われていた党組織の建設が武装隊伍である遊撃

隊を基本にして幅広く行われるようになった。

主席は、遊撃区と敵統治区域の党組織を整備、拡大し、整然とした組織指導体系を確立するよう導いた。

各遊撃区で党員の審査と再登録を進める一方、信頼できる革命組織のメンバーを党組織に受け入れ、集落ごとに党細胞を、その下に党分組を設置した。また、区党委員会を組織、整備し、遊撃区と敵統治区域の党組織に対する指導を同時に行えるよう機構を改編する一方、敵統治区域の党活動を管轄する党機構を設けるようにした。

主席は国内、特に豆満江沿岸の北部朝鮮一帯で党組織を拡大し、その組織指導体系を整えるようにした。そして、すでに穏城地区に国内初の党組織を結成した経験を踏まえ、遊撃区で鍛えられた党活動家と政治工作員を国内の各地域に系統的に派遣し、基層党組織を拡大するようにした。彼らの積極的な活動により、1932年6月から翌年4月までに世仙、月坡、長徳（チャンドク）、竜南（リョンナム）などの穏城地区と雄基（ウンギ）、茂山地区の豊山（プンサン）木材所をはじめ北部朝鮮の各地に党細胞が組織された。

主席は数回にわたって国内へ出向き、北部朝鮮一帯をはじめ国内での党組織の建設を指導した。

国内の慶源郡剥石谷で行われた政治工作員および地下革命組織責任者の講習会で、地下党組織建設問題について講義し、翌年2月には穏城郡豊仁（プンイン）洞で国内党組織および革命組織代表の会議を招集し、穏城地区をはじめ国内の広い地域に党組織を拡大し、地区党委員会のような地域的指導機関を設置する課題を提示した。この会議は1930年代前半における国内党組織の拡大、強化にとっ

て画期的な契機となった。

主席は1934年2月上旬、穏城一帯の基層党組織を指導する地域的な党指導機関である穏城地区党委員会を組織した。結果、穏城地区はもとより、国内深くに党組織を速やかに拡大するための組織的拠点が築かれた。

こうして、穏城、鐘城、会寧、慶源、茂山、延社（ヨンサ）、雄基、羅津（ラジン）、清津、富寧など北部朝鮮一帯をはじめ国内各地に多くの基層党組織が設けられ、指導体系も確立した。

主席は、党創立の組織的根幹を育成する活動を推進した。

主席は労働者、農民の子女を反日人民遊撃隊に受け入れ、武装闘争の炎の中で革命家に育てた。腰営口や火焼舗、能芝営などの各地域に遊撃隊と党および革命組織メンバーのための幹部訓練班（軍事・政治講習所）を設け、政治・思想的に、実務的に鍛えられた中核を育成するようにした。

幹部訓練班は予備幹部の養成と遊撃隊や地方党および大衆団体の活動家の再教育を目的とする常設の党幹部養成基地であった。ここでは主席の著作と朝鮮革命の主体的路線を貫徹するうえで提起される戦略戦術的な問題、大衆政治活動、国際情勢、遊撃戦術といった政治・軍事課目を集中的に講義した。

主席は幹部訓練班に党および共青組織を設け、組織・思想生活を強め、有能な軍事・政治活動家を数多く育成し、党創立の組織的根幹を整えるよう導いた。

主席は、分派・事大主義を克服し、革命隊伍の統一と団結、純潔を保つためのたたかいを展開した。

当時、分派・事大主義者は遊撃区の党および革命組織で主体的

な革命路線の貫徹を妨げ、隊伍の統一と団結に多大な弊害を及ぼしていた。分派・事大主義を克服することは、隊伍の統一と団結を強め、党創立の組織的・思想的基礎を築くうえで極めて重要な問題となっていた。

主席は遊撃隊員と党および革命組織のメンバーを反分派闘争へと奮起させるため、1933年5月10日、『セクト主義を一掃し、革命隊伍の統一と団結を強化しよう』と題する論文を発表した。

論文で主席は、セクト主義の思想的根源とその罪業、手口を暴露し、セクト主義を一掃し、革命隊伍の統一と団結を強化するための課題を全面的に提示した。

主席はすべての遊撃隊員と共青員、革命組織のメンバーが革命的世界観を確立し、広範な大衆を反分派闘争に積極的に参加させ、セクト主義とのたたかいを革命隊伍を強化する活動と緊密に結びつけて展開するとともに、反分派闘争における左右の偏向を警戒し、革命の利益に沿って原則的に進めなければならないと指摘した。そして、セクト主義を一掃するたたかいは複雑かつ深刻なたたかいであるだけに、根気よく進めるべきだと強調した。

主席はまた、セクト主義の本質と有害性、分派分子の手口を党組織と革命組織のメンバーにしっかりと認識させ、彼らを朝鮮革命の主体的路線と戦略戦術で武装させる思想教育を強化するようにした。同時に、セクト主義の弊害を一掃するための大衆集会を開き、それを通じて広範な大衆を覚醒させた。特に、分派分子はいずれも事大主義者であったため、反分派闘争を、事大主義に反対し主体的革命路線を擁護するためのたたかいと緊密に結びつけて行うよう導いた。

主席は、大衆団体を拡大、強化する活動を繰り広げるようにした。

大衆団体を拡大、強化することは、党創立の大衆的基盤を築き、各階層の広範な大衆を反日闘争へと決起させる原則的な要請であった。

主席は、共青組織の拡大、強化に第一義的な関心を払い、1933年3月27日、汪清で開かれた共青活動家会議での演説『共青活動を改善するためのいくつかの課題について』で、共青組織をさらに拡大、強化するための課題と方途を明示した。

主席は共青組織を拡大するうえで左右の偏向を排し、隊伍内に不純分子や偶然分子が潜入できないようにし、各級の共青組織が思想教育を実践闘争と結びつけて多様な形式と方法で進め、児童団と少年先鋒隊の活動を責任をもって指導しなければならないと述べた。そして、共青活動家は革命的大衆観点を確立し、革命的な活動方法や姿勢を身につけるべきであると強調した。

共青活動家会議後、主席はまず、遊撃隊と遊撃区の共青組織を生気ある戦闘的な組織にし、共青活動が青年大衆の中に深く浸透するようにし、多くの共青幹部を東満州や国内など各地に派遣して敵支配地区の青年を実践の中で鍛えて組織に受け入れるようにした。特に安図、敦化、撫松、長白、臨江などに政治工作員を派遣して共青遼吉辺中心県委員会を設置し、敵支配地区の地下青年活動を強化する措置を講じた。

主席は、児童団を党、共青とともに3代同盟の一つに定め、児童団活動に深い関心を払った。

1933年6月中旬、汪清県小北溝で児童団の責任者たちに会い、

一部の活動家の間に児童団の活動を軽視したり負担に思う傾向が見られるとし、児童団員を真の革命家、朝鮮革命の頼もしい継承者に育てなければならないと強調した。そして、常に児童団学校に関心を寄せ、困難な状況のもとでも食糧や生活必需品、学用品を児童団員に供給するようにした。

主席の精力的な指導と格別な配慮のもと、児童団員は朝鮮革命の頼もしい継承者に育ち、血みどろのたたかいのなかで金今順（キムグムスン）のような少年革命家、少年英雄が輩出した。

主席は汪清第2区の反日婦女会をはじめ大汪清、小汪清、泗水坪一帯の反日大衆組織の活動を現地で指導する一方、政治工作員を各地に派遣し、労働組合、農民協会、反日婦女会の組織を各地に拡大するようにした。また、遊撃区と敵統治区の広い地域に反日会、反帝同盟、革命互済会といった統一戦線の大衆団体を設け、日本帝国主義に反対する人々を結集した。

主席はまた、広範な大衆を教育し、自覚させるため、革命的な出版物の発刊と文芸作品の創作、普及活動に深い関心を払った。

主席は『大衆新聞』、『農民闘争』、『青年闘争』など各階層の大衆の特性と知識水準にかなった出版物を発刊し、思想・芸術性の高い文学・芸術作品を数多く創作して普及し、演芸活動も活発に行うようにした。

主席の指導のもとに反日大衆団体が拡大、強化され、広範な大衆が固く結束されたことで、主体的革命勢力は強固なものとなり、武装闘争の大衆的基盤が築かれた。

第6節　遊撃区での全人民的防衛体系の樹立、遊撃区防衛戦

金日成主席は豆満江沿岸の遊撃区に全人民的防衛体系を確立する活動を導いた。

金日成主席は次のように述べている。

「遊撃区域では遊撃隊を政治的、軍事的に成長させるだけでなく、赤衛隊、少年先鋒隊などの半軍事組織を拡大、強化し、全人民を武装させて遊撃根拠地を防衛するようにしなければなりません」

主席は、中核的な勢力である反日人民遊撃隊の強化に第一義的な力を入れた。

主席は1933年2月下旬、馬村での会議で、反日人民遊撃隊の隊伍を早急に拡大し、政治的、軍事的に強化する課題を示し、汪清第2中隊をはじめ各遊撃部隊に出向いて活動を指導した。遊撃区内の半軍事組織と革命組織を通して鍛えられた中核分子と実践の中で認められた敵統治区域の青年を大々的に受け入れて遊撃隊伍を増やすとともに、遊撃隊員の間で思想教育と組織生活を強化して彼らを政治的、思想的にしっかり武装させ、遊撃隊伍を軍事的、技術的に強化するようにした。

主席は反日人民遊撃隊の軍事的面貌をいっそう強めるため、1933年4月25日に著作『遊撃隊動作』、同年11月15日に『遊撃隊常識』を発表した。『遊撃隊動作』には、遊撃隊の精神的・道徳的品性から遊撃戦の一般原則まで根本的な問題が明示されており、

襲撃戦や伏兵戦、防御戦、行軍、宿営をはじめ戦闘行動の手配と、射撃、武器の管理、規律など遊撃隊活動のすべての原則と方法が規範として簡明に記されている。『遊撃隊常識』には、遊撃隊の性格と使命、任務が明示されており、遊撃戦の本質と遊撃戦で適用すべき戦闘組織法、生活秩序が具体的に記されている。『遊撃隊動作』と『遊撃隊常識』は、革命武力を建設し、主体的な戦法を確立し発展させる原典的基礎であり、遊撃隊のすべての軍事活動における指導指針、戦術教範となった。

主席は、武装闘争の初期、部隊の指揮と管理において露呈された極端な軍事民主主義を克服し、整然とした軍事規律と秩序を確立するよう導いた。

極端な軍事民主主義とは、軍隊の指揮と管理においてすべての軍人は上下の区別なく同等の権限を行使すべきであるという主義主張であり、軍事行動のすべての面で甚だしい平均主義を追求し絶対化する傾向があった。これを直ちに克服せずには、遊撃隊の指揮体系を麻痺させ、遊撃隊の建設と軍事作戦に予期しない結果を招き、革命運動の発展に少なからぬ支障をきたす恐れがあった。

主席は、1933年10月、汪清県十里坪で東満州遊撃隊指揮官・政治委員会議を開き、部隊の指揮と管理における極端な軍事民主主義を克服する方途を明示した。

主席は、遊撃隊内での部隊指揮に当たって基本となるのは、指揮官の決心と厳格な中央集権的規律の確立であり、部隊の指揮・管理の方法では政治活動を優先させるべきであるとし、部隊では上下関係の区別が明確かつ無条件でなければならず、指揮官は上部の命令を断固かつ積極的に実行し、いったん決心したことはあ

くまで貫徹すべきであると指摘した。また、民主主義にもとづく個人責任制の原則に従って部隊を指揮、管理し、遊撃隊に整然とした命令指揮体系を樹立し、鉄の規律を確立するよう強調した。

こうして、極端な軍事民主主義は克服され、反日人民遊撃隊は短期間で政治的、軍事的にしっかりと整った革命武力、遊撃区の全人民的防衛体制の中核勢力となった。

主席は、遊撃区の人民を武装させ、遊撃区を要塞化するよう導いた。

遊撃区の青壮年と少年を反日自衛隊、少年先鋒隊、青年義勇軍などの半軍事組織に参加させ、軍事訓練を強化した。

主席は、遊撃区の人民を武装させるため、敵の武器を奪取する闘争を繰り広げる一方、自力更生の革命精神を発揮して自力で武器をつくるようにした。当時、間島の人たちは遊撃区に手榴弾工場を建ててくれるようソ連に要請したが、何の返答もなかった。

主席は自力更生の道こそ生きる道である、革命を推し進めるうえで決定的なのは自らの力を最大限に発揮させることであり、他人の援助は二次的なものであるという立場に徹するようになった。主席は兵器廠を特に重視し、そこで武器を修理、製造するようにした。

そうして、鍛冶場にある工具で拳銃や小銃、弾薬を修理、再生し、火薬をつくり、木砲や延吉爆弾のような炸裂弾も製作した。

主席は、遊撃区を要塞化するため、小汪清遊撃区を試験的に要塞化する活動を指導した。防御線から奥深くの随所に塹壕や交通壕を掘り、望遠哨所、中間哨所、受け哨所、低地哨所、門前哨所などの監視所を設け、石の山、落とし穴、遮断物などの防御構築

物を設置するようにした。敵が侵攻してきた場合には、遊撃隊員と半軍事組織のメンバー、人民を速やかに動員するための非常動員態勢、退避対策をしっかり講じるようにした。

主席は遊撃区に確立された全人民的防衛体制に依拠して遊撃区防衛戦を勝利へと導いた。

遊撃区防衛戦では、積極的な防御戦と敵背撹乱作戦を組み合わせ、遊撃区の人民を全民抗争へと決起させるという戦術的問題を明示した。

反日人民遊撃隊が日本帝国主義の「討伐」を撃破するたたかいでは、敵の兵力が分散していれば力を合わせて襲撃、掃滅し、敵が兵力を集結して攻撃してくれば分散して行く先々で敵の後方を撹乱する戦術的原則を堅持するようにした。また、反日人民遊撃隊はもちろん、全人民を遊撃区を守るたたかいに奮い立たせるようにした。

主席は、日本帝国主義が遊撃区への「討伐」を強行した当初から主導権を握り、多様かつ変化に富む戦法と戦術によって敵の攻撃を撃破した。

1933年2月中旬、汪清県腰営口遊撃区の防衛戦を指揮し、伏兵戦によって日本守備隊の攻撃を退け、翌日には再攻撃する敵に痛撃を加え、戦闘を勝利に導いた。

また、4月中旬、敵が火砲と航空機の援護のもとに1500名もの兵力を投入して司令部の位置する小汪清遊撃区域を包囲し、執拗な攻撃を加えてきたときには堅固な防御陣地に依拠し、誘引要撃戦と襲撃戦を展開して敵を守勢に追い込んだ。遊撃隊と遊撃区の人民はこぞって立ち上がり、無比の勇敢さと犠牲的精神、集団的

英雄主義を発揮して優勢に立つ敵の攻撃を退け、小汪清遊撃区域を死守した。

反日人民遊撃隊と遊撃区人民の英雄的なたたかいによって痛撃を受けた日本帝国主義は、1万数千名に達する兵力をもって汪清、延吉、和竜、琿春一帯の遊撃区を「最終掃討」する大規模な冬期「討伐」攻勢に出た。そのため、豆満江沿岸の遊撃区は極めて困難な状態に追い込まれた。

主席は、新たな軍事・政治情勢に対処するために開いた1933年10月の十里坪会議で、すべての遊撃区で日本帝国主義の大規模「討伐」を撃破するため積極的な対策を講じるとともに、小汪清遊撃区防衛戦闘（馬村作戦）を指揮した。

敵は小汪清遊撃区に攻撃のほこ先を向け、5000余名の「精鋭兵力」と航空隊まで繰り出して「討伐」を開始した。当時、遊撃区には2個中隊の遊撃隊しかなかった。

主席は数的に格段優勢な敵の攻撃に対処し、遊撃隊と小汪清管内の人民を全民抗戦へ立ち上がらせた。こうして遊撃隊と青壮年はもちろん、女性や老人、児童までもが遊撃区防衛の決死の戦いに立ち上がった。

主席は、全面的な防御戦を展開し、波状式に攻撃をしかけてくる敵に集中射撃、炸裂弾や投石攻撃を加えて撃退するようにした。敵の大兵力が引き続き投入されると、誘引欺瞞戦術を主とする伸縮自在な機動と積極的な防御による消耗戦に移行し、遊撃区の奥深くに敵を誘いながら、伏兵戦、狙撃戦、宿営地襲撃戦、焚火炸裂弾戦など千変万化の戦法で敵を守勢に追い込み、せん滅的打撃を加えた。

遊撃隊と人民は一体となり、堅忍不抜の意志と気力を発揮して数十日間にわたり熾烈な戦闘を繰り広げ、小汪清遊撃区を死守した。

敵は惨敗を重ねながらも数量上、技術上の優勢に依存して兵力を増強しながら、小汪清遊撃区を圧殺するため攻撃を続けた。

主席は、情勢が切迫していると判断し、遊撃区と人民を守る防御戦を展開するとともに、敵の後方に回ってその背後を攻撃するなど、戦闘局面を転換させる大胆な作戦を展開した。

主席は防御戦のみに固執し、敵背撹乱作戦に反対する左傾日和見主義者の策動を粉砕し、1934年2月中旬、小汪清遊撃区を防衛していた遊撃隊の一隊を率いて敵後方の涼水泉子に進出して日本の警察と「満州国」軍、自衛団を襲撃し、続いて新南溝、北鳳梧洞、寺洞東谷の敵に連続的に打撃を与え、敵の「討伐」拠点の一つである大肚川に対する襲撃戦を敢行した。

狼狽した敵は遊撃区の包囲網を解いて、本拠地へ後退せざるを得なかった。

約90日間にわたる小汪清遊撃区防衛戦は遊撃隊と人民の勝利に終わった。その過程で、朝鮮人民の百折不撓の革命精神の根源となる英雄的な遊撃区精神が生まれた。遊撃区精神は、金日成将軍の統率する革命の司令部を生命を賭して守ろうという徹底した領袖決死擁護の精神、遊撃区に樹立された新しい制度と生活を守ろうとする百折不撓の闘争精神、軍民が一体となってたたかう擁軍愛民の精神、あらゆる試練と難関を自らの力で克服する自力更生、刻苦奮闘の革命精神であった。

馬村作戦は、小汪清を死守することによって、東満州各県の遊

撃区の危機解消に大きく寄与した。馬村作戦の勝利に励まされた延吉、和竜、琿春一帯の防衛者も集団的英雄主義を発揮して遊撃区を立派に守り通した。

馬村作戦を主とする遊撃区防衛戦の勝利は、日帝侵略者に甚大な軍事的・政治的・道徳的惨敗を被らせ、反日人民遊撃隊の政治的・軍事的威信を著しく高めた。遊撃区防衛戦を通して数多くの遊撃戦法が編み出され、大部隊活動への移行に資する軍事戦略的、戦術的基礎が築かれ、反日人民遊撃隊は敵のいかなる侵攻をも撃破できる豊富な経験を持った不敗の革命武力に強化された。

第7節　反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編、朝鮮人民革命軍党委員会の結成、積極的な軍事・政治活動

金日成主席は反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編する活動を正しく指導した。

1933年の秋に至って、反日人民遊撃隊が急速に成長して東満州各県の遊撃部隊は連隊規模に拡大され、有能な指揮官と政治幹部が育成され、軍事活動地域と闘争規模が拡張された状況のもと、従来のように各級党の軍事部を通じての指揮体系ではすべての遊撃部隊を統一的かつ円滑に指揮することができなくなった。

主席は、1934年3月9日、汪清県馬村で反日人民遊撃隊軍事・政治幹部会議を招集し、反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編する方針を打ち出した。

主席は、抗日武装闘争が敵の正規軍を相手に遊撃戦の方法で行われている特性を考慮し、朝鮮人民革命軍を正規の兵力体系に編制するとともに、遊撃戦の原則を確実に貫徹し、朝鮮人民革命軍司令部が統一的かつ円滑に指揮できるよう部隊を編制すべきであると述べた。

主席は、反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編する活動を短期間で終えるよう導いた。

朝鮮人民革命軍内に3・3制にもとづいて師団、連隊、中隊、小隊、分隊を設け、すべての遊撃部隊に対する統一的な指揮管理体系を確立した。また、中隊を基本戦闘単位とし、それを最大限に強化し、司令部の統一的な指揮を円滑にできるように部隊を編制した。

こうして反日人民遊撃隊の朝鮮人民革命軍への改編は、1934年3月から5月までの間に成功裏に進められた。朝鮮人民革命軍のもとに2個師団と1個独立連隊が組織された。

主席は、朝鮮人民革命軍が場合によっては東北人民革命軍の名で活動するようにした。東北という名称はある国を意味するのではなく、あくまで地域的概念として通用する言葉であった。結局、東北人民革命軍は、朝鮮人民革命軍としての使命とともに、東北の抗日偉業に寄与する革命武力としての使命も同時に遂行した。

主席は、反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編するとともに、統一的な党指導機関として朝鮮人民革命軍党委員会を結成する活動を推進した。

主席は、1934年3月9日、汪清県馬村での反日人民遊撃隊軍事・政治幹部会議で朝鮮人民革命軍党委員会を結成する方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編するに当たっては、それに相応する新たな党の組織体系を確立しなければなりません。

新たな党の組織体系を確立するために、まず朝鮮人民革命軍党委員会を組織し、その役割を高めなければなりません」

主席は、朝鮮革命が武装闘争を基本にして展開され、党組織の建設も武装隊伍を中心にして展開されている状況のもと、党組織に対する統一的な指導を実現できる党指導機関を武装隊伍内に設け、その名称を朝鮮人民革命軍党委員会にすべきであると指摘した。そして、朝鮮人民革命軍党委員会が最高指導機関として人民革命軍内の党委員会と党組織全般に対する統一的な指導が円滑にできるようにした。

主席は、遊撃区内の党組織と反日人民遊撃隊内の各級党組織で、朝鮮人民革命軍党委員会の結成方針を貫くための討議を行い、党組織体系を改編するようにした。

また、朝鮮人民革命軍が師団体系に改編された軍事体系に応じて、師団と連隊に党委員会を設けて政治委員を置き、師団党委員会には政治委員の活動を補佐するための政治部を置き、それに必要な課を設け、連隊は連隊政治委員が連隊党委員会のすべての活動を直接担当して指導するようにした。そして中隊には党細胞を、小隊には党分組を設けるようにした。

主席は朝鮮人民革命軍内の部隊と地方党組織で、朝鮮人民革命軍党委員会を結成する会議に送る代表を選出するようにした。

このような準備を経て1934年5月31日、大荒崴で朝鮮人民革命軍党委員会を結成する会議を招集した。

会議には、朝鮮人民革命軍各部隊の党組織と地方党組織で選出された代表が参加した。

会議では、朝鮮人民革命軍党委員会の結成が宣布された。

朝鮮人民革命軍党委員会は、チュチェ思想とそれにもとづく先軍思想を指導指針とし、その実現のためにたたかう党の指導機関として民主主義中央集権制の原則に従って部隊内の各級党組織と地方党組織を指導する統一的な党の指導機関、最高指導機関であり、武装闘争と党創立準備活動、反日民族統一戦線運動と反日大衆闘争など朝鮮革命全般を指導する先軍革命の参謀部であった。

新たな党の組織構造において最高指導機関は党代表大会であった。

朝鮮人民革命軍党委員会内に常務委員会が設けられ、幹部問題、党規律問題、当面の軍事・政治活動問題、部隊管理問題、地下工作問題など活動全般における重要な問題を討議し、決定し、その実行を指導することになった。

主席は朝鮮人民革命軍党委員会の結成後、その機能と役割を高めるようにした。

主席は、朝鮮人民革命軍党委員会が党代表大会が開かれるまでの間のすべての活動を指導し、各時期に提示される朝鮮革命の路線と戦略戦術的方針を討議、決定し、その貫徹に向けて各級党組織と革命組織、人民革命軍部隊を奮起させるよう導いた。

また、朝鮮人民革命軍党委員会が革命隊伍内に鉄のような規律を確立し、人民革命軍の各部隊と各級党組織、革命組織を政治的、思想的に強化し、特に党と革命隊伍の思想・意志および行動の統一をしっかり保つことに力を入れるようにした。そして、人民を

各種形態の反日闘争に参加させ、人民の反日闘争に対する党の指導を強化するようにした。

主席は、反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編した後、日本帝国主義の「討伐」攻勢を粉砕するための積極的な軍事・政治活動を展開した。

1934年に入り、日本帝国主義は全面的な包囲作戦と長期攻勢によって遊撃区を「完全消滅」させるため、「歩々占領の堡塁戦術」に集団部落の設置、「保甲制度」による政治的・経済的封鎖を組み合わせた新たな「討伐」計画をもって囲攻作戦を強行した。

主席は敵の囲攻作戦に対処するため、朝鮮人民革命軍部隊が遊撃区の防衛に力を入れながら大規模作戦を展開して敵後方の軍事的・政治的拠点を連続的に攻撃して敵の企図を破る一方、有利な地域に遊撃区を拡大するようにした。

主席は、1934年3月、腰営口遊撃区に司令部を移し、朝鮮人民革命軍の春期攻勢を指揮して汪清県小百草溝戦闘、大肚川戦闘、石頭河子戦闘、南蛤蟆塘戦闘、延吉県依蘭溝戦闘、茶條溝戦闘、和竜県牛心村戦闘、琿春県老頭溝金鉱谷戦闘など、遊撃区周辺の敵の軍事拠点や集団部落の建設現場に対する襲撃戦を展開して敵に大きな打撃を与え、敵の囲攻作戦企図を出だしから粉砕した。

主席は春期作戦で収めた成果を強固にし、主動的に敵の囲攻作戦を撃破するため、同年6月から夏期作戦に転じた。

敵が囲攻作戦で遊撃区を窒息させようとする状況にあって、主席は数カ所の固定した遊撃区を守ろうとするのは敵の企図に巻き込まれることになると考え、遊撃区域を安図県北西部と汪清県東北部に拡大することを夏期作戦の中心方向として定めた。

そのため、人民革命軍第1師と独立連隊に安図県大甸子――富爾河一帯を攻撃させて敵の注意を集中させた後、朝鮮人民革命軍第2師第4、5連隊の一部と反日部隊を率いて羅子溝方面に進出し、続けざまに羅子溝進攻戦と大興溝戦闘、吊廟台戦闘など多くの戦闘を展開し、敵に甚大な打撃を加えた。

主席は1934年8月下旬、汪清県腰営口で開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議で、日本帝国主義の囲攻作戦を最終的に撃破する作戦的方針を示し、北満州への遠征を断行することにした。

その目的は北満州で活動している抗日武装部隊を支援し、彼らとの共同戦線を強める一方、敵の背後に打撃を与えて日本帝国主義の囲攻作戦を撃破することにあった。

主席は同年10月下旬から朝鮮人民革命軍の遠征隊を率いて北満州に進出し、寧安県横道河子付近戦闘、南湖頭鏡泊湖畔石頭河戦闘、房身溝付近戦闘、新安鎮付近戦闘、大海浪河沿岸戦闘、老伝家戦闘など行く先々で軍事活動を展開して寧安駐屯の日帝侵略軍と靖安軍部隊を壊滅状態に陥れる一方、中国人武装部隊の戦闘士気を鼓舞した。またハーモニカ重奏団の公演をはじめ多様な形式と方法で政治活動を展開して、不毛の地とされていた寧安一帯の人民を革命化し、彼らを各種組織に結束させた。

遊撃区を防衛するため遠征隊の大部分の人員を先に東満州に送り、少数の人員を率いて北満州で軍事・政治活動を展開していた主席は、遠征隊の軍事的・政治的任務を円滑に遂行し、1935年1月下旬に帰路についた。戦闘を重ねながら天橋嶺の吹雪をついて行軍していた途中、主席は傷寒に冒されて瀕死の状態に陥った。40度の高熱にさいなまれながらも不屈の意志で革命歌謡『反日戦

歌』をつくって歌いながら疲労困憊した隊員を励ました。

韓興権(ハンフングォン)中隊長をはじめ遊撃隊員と天橋嶺木材所の金(キム)老人は犠牲的精神を発揮して敵の四面包囲を突破した。大嵗子山中の趙宅周(チョテクチュ)老一家は主席の身辺の安全と健康回復のために真心の限りを尽くした。

主席は1935年2月中旬、北満州遠征を終えて腰営口遊撃区に帰還した。

朝鮮人民革命軍の第1次北満州遠征は、朝中両国の武装部隊と人民の間の戦闘的友誼と団結を強めたばかりでなく、敵の背後に打撃を加えることにより、遊撃区「討伐」に集中されていた敵の兵力を分散、弱体化させ、囲攻作戦に致命的な打撃を与えた。

主席は同年3月、汪清県天橋嶺戦闘と塘水河子戦闘をはじめ多くの戦闘を勝利に導き、日本帝国主義の囲攻作戦を最終的に粉砕した。

第8節　朝鮮革命の主体的立場を堅持、遊撃区の解散と武装闘争の広大な地域への拡大

1930年代前半期、抗日武装闘争を拡大、発展させるうえで重大な問題として提起されたのは、革命勢力に対する日本帝国主義の破壊・謀略策動とともに、民族排外主義者と分派・事大主義者による分裂策動であった。

日本帝国主義は銃剣によるファッショ的統治によっても、「文化統治」の方法によっても朝鮮人民の反日闘争を阻止できなくなると、1932年2月、延吉で「民生団」を発足させた。「民生団」は日本帝国主義のスパイ・謀略団体であり、反共走狗の団体であ

った。日本帝国主義が「民生団」を発足させたのは、朝鮮民族の反日意識を麻痺させ、朝鮮の革命家を陥れて人民から孤立させ、朝中人民の間にくさびを打ち込んで革命隊伍を内部から瓦解させるためであった。

「民生団」は組織されるやいなや、その反革命的正体が暴露されて革命家と人民から糾弾を受け、排撃され、いくらもたたぬうちに解体してしまった。

すると、日本帝国主義は1934年9月、「民生団」の後身である「間島協助会」をつくり、革命隊伍を瓦解させるためより悪辣かつ狡猾に策動した。「間島協助会」は、革命隊伍内で行われた反「民生団」闘争を巧妙に利用して幾多の謀略をめぐらした。彼らは遊撃区内に数多くの「民生団」のメンバーが潜り込んでいるかのようにデマを流布して堅実な革命家を害し、互いに不信の念を抱かせ、排斥するようにした。

極左排外主義者と分派・事大主義者は日本帝国主義の奸計に惑わされて反「民生団」闘争を民族排外主義的目的と分派的野望を満たすことに悪用した。こうして、反「民生団」闘争は極左的に進められるようになった。東満州の遊撃区では実在しない「民生団」との闘争が続けられ、「民生団」でない堅実な朝鮮革命家に「民生団」の濡れ衣が着せられ、大量虐殺される惨事が起こった。

こうした状況のもとで、反「民生団」闘争の極左的偏向を克服するかいなかは、とりもなおさず朝鮮革命の命脈を保つかいなかという深刻な問題となった。

この重大な危機を一身を投げうって打開したのが金日成主席であった。

主席は反「民生団」闘争の初期から、革命隊伍の統一・団結を強化する原則にもとづいてこの闘争を推し進めた。

反「民生団」闘争を十分な根拠と確実な資料をもって進めるようにし、「民生団」事件が起きるたびに、一般的調査を進め、当事者がそれにかかわるようになった動機と目的など、事件全般を把握したうえで慎重に処理するようにした。また、ごく少数の悪質分子はたたき、自覚不足で「民生団」に引きずりこまれた人たちは教育して革命の側に結束させるようにした。そして、革命的実践こそが人々の思想と自覚の程度を検証する基準になると考え、反「民生団」闘争を実際の活動と緊密に結びつけて行うようにした。

主席の原則的な闘争によって「民生団」事件の虚構性が暴かれ、極左排外主義者と分派・事大主義者の反革命的正体が暴露された。

しかし、1934年10月、主席が北満州遠征に向かうと、彼らは再び反「民生団」闘争を一段と極左的方向へと導き、反革命的策動を公然と強行した。その結果、多くの人が「反革命分子」、「敵の手先」に仕立てられて殺害され、遊撃区は再び不安と恐怖に包まれるようになった。

1935年2月、1次北満州遠征を終えて腰営口遊撃区に戻った主席は、2月24日から3月3日にかけて行われた大荒崴会議で、極左排外主義者と分派・事大主義者の策動を暴露して彼らに決定的打撃を加え、朝鮮革命の主体的立場を固守した。

極左排外主義者は会議で、東満州の朝鮮人はそのほとんどが「民生団」ないしその容疑者であるため、朝鮮人は幹部になれない、民族解放の旗を掲げてもならない、という途方もない主張を

持ち出した。会議は重苦しい雰囲気の中で進められた。

主席は会議で、『朝鮮革命のためにたたかうのは、朝鮮共産主義者の自主的権利である』と題する演説を行った。

主席は、東満州に滞在している朝鮮人の70％、朝鮮革命家の80～90％が「民生団」ないしその容疑者であり、遊撃区は「民生団」の培養地であると主張する極左排外主義者の荒唐無稽な詭弁を科学的な資料をもって論駁した。主席は、どんな物質であれ、本来の構成要素と異なる要素が80％以上占めるようになれば、それはもはや他の物質となる、これはあまりにも明白な事実であるとし、反「民生団」闘争を狭隘な排外主義的目的と不純な分派的野望の達成に利用しようとすることを厳しく断罪した。

そして、幹部問題に関する偏狭な民族排外主義的見解を批判するとともに、幹部抜擢の原則を明らかにした。朝鮮人は少数民族であるから多数民族を指導できない、朝鮮の革命家は分派的習癖と動揺性があり、反動化しやすいので幹部になれない、といった極左日和見主義者の民族排外主義的で非科学的な主張を糾弾し、国籍や所属、人口の多少を幹部抜擢の基準にしてはならず、少数民族であれ多数民族であれ、革命への忠実さと能力をもとに幹部を抜擢する原則を守らなければならないと強調した。

また、中国の地で活動している朝鮮共産主義者は民族解放のスローガンを掲げてはならないという排外主義者の主張にも痛撃を加えた。

金日成主席は次のように述べている。

「朝鮮革命の勝利、朝鮮民族解放の偉業の達成をめざしてたたかうことは、誰も阻むことができず、代行することもできない朝

鮮共産主義者と朝鮮人民の自主的権利であり、神聖な義務です」

主席は、強盗日本帝国主義に奪われた国土と塗炭の苦しみをなめている民族の運命を救う崇高な使命を担っている朝鮮の共産主義者は、いつ、どこでたたかおうと、絶対に朝鮮民族解放のスローガンを放棄することはできず、朝鮮の共産主義者が祖国の解放をめざしてたたかうことはなんぴとも阻むことはできず、代行することもできない自主的権利であり、神聖なる義務であると強く主張した。

参会者は、主席の原則的で理路整然とした主張に支持と共感を表明した。

大荒崴会議は朝鮮革命を危機から救い、反日民族解放闘争をチュチェの旗のもとに力強く前進させ、数多くの朝鮮革命家の運命を救い、革命隊伍の統一・団結を保持できるようにした。この会議を契機に多くの人が「民生団」という無実の罪をぬぐい去り、「民生団」の濡れ衣を着せられて無念の死を遂げた人たちも政治的生命を取り戻すことができた。そして、隊伍内に漂っていた反目と不信、恐怖は消え去り、革命隊伍の団結が強化されるようになった。

大荒崴会議を契機に朝鮮の革命家と人民は、金日成主席を民族の太陽としてさらに高く仰ぎ慕うようになった。

主席は大荒崴会議後の同年3月下旬に行われた腰営口会議で、反「民生団」闘争における極左的偏向を再び暴露し、それを正すための具体的方途を示した。そして、大荒崴会議と腰営口会議の基本的論点となっていた幾つかの重要な問題をコミンテルンに提起することにした。

主席は大荒崴会議と腰営口会議の後、反「民生団」闘争で露呈した極左的偏向による悪影響を一掃するたたかいを指導した。

すべての軍事・政治幹部が「民生団」の反動的本質と反「民生団」闘争が極左的に行われた原因、この闘争に見られた極左的偏向を克服するための課題と方途を正しく認識し、朝鮮人民革命軍部隊と遊撃区での反「民生団」闘争の極左的偏向を克服し、その悪影響を一掃するたたかいを力強く展開するようにした。

主席は各遊撃区をめぐって反「民生団」闘争の極左的偏向を正す活動を指導した。1935年3月、延吉県三道湾遊撃区域の能芝営で書記処幹部会議を開き、反「民生団」闘争で堅持すべき原則を再び明らかにし、人に関する問題は慎重に処理するよう説いた。そして、汪清県梨樹溝に出向いては「民生団」の汚名を着せられて監禁されていた人たちを釈放した。

主席の原則的かつ献身的な闘争により、反「民生団」闘争における極左的偏向の悪影響は克服され、朝鮮革命の主体性と民族性が固守され、チュチェ思想にもとづく革命隊伍の統一・団結が強化された。

主席は遊撃区を解散し、武装闘争を広大な地域に拡大、発展させる闘争を指導した。

豆満江沿岸一帯に遊撃区を創設する際、その使命と任務として提起されていた最大の課題である革命勢力の保持と育成、抗日武装闘争の拡大、発展をめざす政治的・軍事的および物質的・技術的基礎構築の問題は、1930年代中ごろに至って解決された。

また当時、遊撃区に対する日本帝国主義の「討伐」と封鎖策動はその極に達した。彼らはおびただしい精鋭武力を動員して遊撃

区を2重、3重に包囲し、「討伐」を強化すると同時に、集団部落を設置し、中世的な保甲制度を実施して遊撃区の軍隊と人民を孤立させ圧殺するための「飢餓作戦」、「封鎖作戦」、「帰順工作」を企てた。

このような情勢のもと、解放地区の固定した遊撃区の防衛にのみ没頭するなら、敵とのたたかいで守勢に立たされる恐れがあり、数年にわたって育成してきた革命勢力を保持できず、支離滅裂になる恐れがあった。

主席は新たな情勢と革命発展の要請を洞察し、1935年3月21日から27日まで汪清県腰営口で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、遊撃区を解散し広大な地域へ進出するという新たな戦略的方針を提示した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれはいささかも動揺することなく、新たな情勢と革命の任務に即して遊撃区を解散し、広大な地域へ進出する新たな戦略的任務を立派に遂行しなければなりません」

主席は会議で、新たな情勢と革命発展の要求を無視し、むやみに「遊撃区死守」を主張する一部の人たちの無謀な軍事冒険主義的見解を批判し、新たな戦略的方針を貫徹するための具体的な課題を示した。

腰営口会議は、朝鮮人民革命軍が遊撃区を死守するための戦略的防衛から戦略的攻撃の新たな段階へと移る転換の契機となった。

主席は腰営口会議後、遊撃区を主動的に解散する活動を指導した。

遊撃区の解散は幾多の難関にぶつかった。敵は軍隊と人民が遊

撃区から抜け出せないように軍事的封鎖を強める一方、民心を動揺させるデマを飛ばした。そのうえ、多くの人民は遊撃区から離れようとしなかった。

主席は、遊撃区の解散を円滑に進めるため、3月末、腰営口で朝鮮人民革命軍党委員会の活動家と各地域の党組織責任者による協議会を開き、朝鮮人民革命軍党委員会の指導のもとに各部隊の政治機関と地方党組織が遊撃区の解散を政治的に正しく指導するようにした。そして4月中旬、腰営口で開かれた軍民交歓大会に参加して、遊撃区解散の必要性と正しさを再度説明し、遊撃区人民の移住方向と方法、新しい活動地域での闘争方向を提示した。次いで東満州の各県と革命組織区に特派員を送り、人民に遊撃区解散についての正しい理解をもたせるようにした。また、朝鮮人民革命軍各部隊の積極的な軍事活動によって敵の策動を制圧し、軍隊と人民が遊撃区から無事に抜け出せるようにする一方、遊撃区を離れる人民にいろいろと生活上の援助を与えるようにした。

主席は遊撃区の解散と関連して、青年義勇軍と反日自衛隊をはじめ半軍事組織のメンバーはもとより、入隊を願望する青年と党および共青の活動家、人民革命政府の活動家など数多くの青壮年を朝鮮人民革命軍に入隊させた。

1935年5月に始まった遊撃区の解散は11月初めの車廠子遊撃区の解散をもって成功裏に完了した。

解放地区形態の遊撃区を主動的に解散したことで、大規模な包囲攻撃によって遊撃区を窒息させようとしていた日本帝国主義の企ては破綻し、朝鮮人民革命軍はより広大な地域で大部隊による遊撃戦を巧みに展開することができるようになった。

主席は遊撃区の解散後、広大な地域での朝鮮人民革命軍の積極的な軍事・政治活動を指導した。

1935年4月末、腰営口で行われた朝鮮人民革命軍指揮官会議で、広大な地域に進出する朝鮮人民革命軍部隊の活動区域と兵員編制、任務などを示し、主力部隊の北満州遠征（第2次）断行の課題を提示した。

再び北満州遠征を断行することにした主要な動機は、北満州一帯で活動している朝鮮革命家との連帯を強化し、彼らとの全面的な協力の道を開き、第1次北満州遠征を通じてその始原を開いた北満州の中国共産主義者との戦闘的同盟を強固にし、彼らとの共同闘争をさらに強化することにあった。

主席は北満州遠征を前に、老黒山戦闘と太平溝戦闘を断行して朝鮮人民革命軍の威力を轟かし、遠征隊員の戦闘的士気をいっそう奮い立たせ、遠征の準備もしっかり整えた。そして1935年6月25日、汪清県太平溝で朝鮮人民革命軍北満州遠征部隊の指揮官及び隊員を前に行った演説で、革命の種を広大な地域に積極的にまく課題を示した。

主席は遠征部隊を率いて太平溝を発ち、石頭河子、四道河子、八人溝を経て老爺嶺の険しい山々を越えて北満州の地に進出した。7月下旬、北満州で活動している中国人指揮官と連係を結んで共同闘争を強化するための対策を講じ、次いで寧安県山東屯戦闘、額穆県青溝子戦闘、南天門付近戦闘、官地付近柳莱溝戦闘など幾多の戦闘を指揮して人民に勝利の確信を抱かせ、敵を不安と恐怖におののかせた。

そして、さまざまな形式と方法で政治活動を行って広範な人民

を革命化し、彼らを反日闘争へと立ち上がらせた。また、朝鮮人民革命軍の優秀な指揮官と隊員を北満州の武装部隊に送って戦闘力を強めるようにした。

北部朝鮮一帯と豆満江沿岸一帯、そして南満州方面に進出した朝鮮人民革命軍部隊も、至るところで軍事・政治活動を活発に展開して敵に甚大な打撃を与えた。

第9節　国際革命勢力との連帯の強化、反帝共同戦線の実現

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは世界の革命勢力との国際的連帯の強化にも深い関心を向けるべきです。

朝鮮革命は植民地民族解放闘争の一環として進められているのですから、世界革命と緊密なつながりがあります。朝鮮革命が成功裏に遂行されれば、それだけ世界革命に寄与することになり、世界革命が順調に進展すれば、それだけ朝鮮革命に有利な条件が整うことになります」

主席は、各国の共産主義者は自国の革命を立派に行うべきであるとし、朝鮮の革命家は全世界の労働者階級との国際的連帯を強化し、コミンテルンとの連係を結ぶうえで常に朝鮮革命の主人は自分自身であるという自覚と原則的立場を堅持し、自らの革命的本分を全うすべきだと強調した。同時に、各国の共産主義者は世界各国人民の革命闘争を積極的に支援すべきだと指摘した。

主席は、中国人民との反日統一戦線の実現に大きな力を傾けた。

中国人民との反日統一戦線を実現することは、両国が置かれている環境の類似性、両国人民が担っている時代的使命の共通性からして切実な要求として提起された。

主席は、中国人民との反日統一戦線を恒久的な戦略的問題と見なし、中国共産主義者とその指導下にある武装部隊との団結を強化することに第一義的な関心を払い、中国共産党と中国共産主義者との連係を強固にした。

中国の地で活動する朝鮮共産主義者にとって、中国共産主義者との連帯なしには反帝共同戦線を結成して抗日武装闘争を力強く繰り広げることはできなかった。中国共産党との連帯を強化することは、満州省委員会傘下の党組織に朝鮮革命家が多いという実情からしても重要な問題として提起された。

主席は1931年冬の明月溝会議の前後、初めて中国共産党組織と連係を結び、小汪清に司令部を置いて活動する過程で中国共産主義者との連帯をいっそう緊密にした。主席が中国共産主義者との緊密な連係のもとに反日共同闘争を繰り広げることで、朝鮮革命と中国革命は一つの脈絡で結ばれるようになった。

主席は、朝鮮人民革命軍を絶えず強化し、その役割を高める一方、中国共産主義者の指導する反日武装部隊をあらゆる面から支援することに特別な関心を払い、私心のない支持と支援を与えた。

中国共産主義者の要望を容れて、韓興権、金京錫（キムギョンソク）、朴吉松（パクキルソン）、朴洛権（パクラククォン）など朝鮮人民革命軍の優秀な軍事・政治幹部と隊員を数多く中国共産主義者が指導する遊撃部隊に派遣し、彼らの武装隊伍を政治的、軍事的に固めるようにした。

特に1934年10月、試練をなめていた北満州の中国人抗日武装部隊を支援するため第1次北満州遠征を断行し、周保中をはじめ北満州の中国共産主義者に会って革命闘争を発展させるための方途について討議した。そして、中国人武装部隊の戦闘力を強化するために遠征隊の過半数の人員を彼らに譲り渡し、彼らとの共同作戦で鏡泊湖畔戦闘をはじめ多くの戦闘を展開した。

北満州の武装部隊はその後、寧安反日遊撃隊を軸に、同地の群小反日部隊との連合を実現して東北人民革命軍第5軍を編制した。その結果、北満州の抗日武装力は一段と強化された。

主席が第1次北満州遠征を通じてその基礎を築いた中国共産主義者との戦闘的同盟を固め、新しい時代の要請に即して彼らとの共同闘争を一段と強化するうえで、第2次北満州遠征は重要な契機となった。

第2次北満州遠征の間にも山東屯戦闘をはじめ幾多の連合作戦を指揮して勝利を収め、朝中両国共産主義者が指導する武装部隊間の戦闘的団結と連帯をさらに強化した。この時期に主席が行った第2軍と第5軍の連合作戦は、中国共産主義者とのきずなを強固にするうえでとりわけ重要な意義があった。

主席は、実践的な模範をもって広範な中国人民の間で大衆政治活動を力強く展開し、北満州にも抗日武装闘争の炎を燃え上がらせた。自らオルガンを弾いて漢族の民謡『蘇武歌』をうたい、流暢な中国語で反日演説もして額穆地方の中国人民を感動させた。このときから当地の中国人民は、朝鮮人民革命軍こそ真の愛国的な革命軍だと言って極力支援し、党、共青、婦女会、児童団などの各革命組織に加わって革命闘争に奮い立つようになった。

主席は中国人反日部隊との連合戦線を実現する活動を積極的に展開した。

日本帝国主義の満州占領後、中国東北地方にはさまざまな名称の反日部隊（救国軍）が生まれた。

主席は反日部隊との連合戦線を実現するうえで、下層部の統一を基本としながらこれに上層部の統一を結合し、闘争しながら団結し、部分的連合から全面的連合を実現し、低い形態の共同闘争から高い形態の闘争へと移行する原則を堅持した。

1933年6月、主席は身の危険を顧みず、羅子溝に駐屯していた救国軍前方司令の呉義成と談判し、全面的な反日連合戦線の新たな局面を開いた。

また、実際のたたかいを通じて反日連合戦線をさらに強固にし、彼らに抗日の旗をあくまで固守させるため、反日人民遊撃隊創建後、反日部隊と連合して敦化県城戦闘と額穆県城戦闘を行い、1933年9月には反日部隊との共同作戦によって東寧県城戦闘を勝利に導いた。そして、この戦闘で瀕死の重傷を負った反日部隊旅団長の史忠恒は主席の命令を受けた遊撃隊員の犠牲的な救出作戦によって救い出された。

東寧県城戦闘を契機に反日部隊との連合戦線は全面的に実現した。

その後、反日部隊を積極的に引き入れて大甸子戦闘、羅子溝戦闘、老頭溝戦闘など敵の主要拠点の進攻作戦を展開し、反日連合戦線をさらに強化した。

主席は、世界革命との国際的連帯を強化するため、コミンテルンと緊密な連係を保った。

すでに主席はハルビンと五家子、小汪清馬村と寧安県八道河子

などでコミンテルンの派遣員に会って連係を保った。大荒崴会議と腰営口会議で討議された問題に関して朝鮮革命家が堅持している主体的立場と主動的な措置について報告を受けたコミンテルンは、朝鮮革命の生命となっている自主性の原則、創造性の原則、主体的な革命路線と方針に全面的な支持を表明した。コミンテルンは、主席が主体的な革命路線を打ち出し、自主的に革命を切り開いていることに大きな関心と期待を示した。

主席は、初の社会主義国家であるソ連を擁護するたたかいを積極的に繰り広げた。

当時、社会主義国家であるソ連を擁護することは、コミンテルンの活動においても当面の闘争課題の一つとなっていた。

日本帝国主義が膨大な兵力をソ満国境一帯に集結し、ソ連に対する武力挑発を絶えず強行していたとき、主席は1932年秋から1933年秋にかけて、琿春と東寧県城をはじめ敵の軍事的拠点の襲撃戦を、1934年春から1935年末にかけて京図線で列車襲撃戦などを相次いで行い、日本帝国主義のソ満国境侵攻策動に大きな打撃を加えた。

第3章　抗日武装闘争を中心とする反日民族解放闘争を全国的規模で一大高揚へと導くたたかい
（1936年2月～1940年8月）

第1節　南湖頭会議を指導、抗日武装闘争を中心とする反日民族解放闘争を一大高揚へと発展させる戦略的方針を提示

1930年代の中期に至り、抗日武装闘争を中心とする反日民族解放闘争を一大高揚へと導くことは革命発展の機の熟した要請となった。

金日成（キムイルソン）主席の指導のもと、数年にわたる厳しい闘争を通じて朝鮮人民革命軍を主導的勢力とする主体的革命勢力は大きく成長し、革命隊伍の統一・団結が強化され、武装闘争の大衆的基盤も強固になった。特に、極左排外主義と分派・事大主義に反対する闘争を通じて、朝鮮革命の自主性はいっそう強まった。

国際的にもファッショ勢力と反ファッショ勢力間の激烈な闘争が展開され、この闘争の中で国際ファシズムは次第に世界の人民から孤立し、反ファッショ民主勢力と民族解放勢力が日を追って成長していた。

一方、日本帝国主義は大陸侵略戦争を準備するため朝鮮でファ

ッショ的暴圧と収奪をかつてなく強め、朝鮮人民の自主意識と民族的なあらゆるものを抹殺しようと策動した。そのため、日本帝国主義に対する朝鮮人民の憎悪心は極度に達し、反日闘争が広範囲で繰り広げられた。

こうしたことは、反日民族解放闘争を全国的規模で新たな高揚へと導くことのできる主・客観的条件が整ったことを意味した。

主席は新たな情勢と革命発展の要請を洞察し、1936年2月27日から3月3日にかけて、寧安県南湖頭で朝鮮人民革命軍の軍事・政治幹部会議を開いた。

会議には、腰営口会議以後、コミンテルンに派遣されていたメンバーも参加した。彼らは、朝鮮共産主義者が朝鮮革命を責任をもって遂行するのは、誰にも譲歩することのできない神聖な権利であり、反「民生団」闘争での極左的誤謬に対して主席が取った原則的な立場が正当であることをコミンテルンが認め、全面的に支持、賛同したことを伝えた。

主席は会議で、『反日民族解放闘争を強化、発展させるための共産主義者の任務』と題する歴史的な報告を行った。

金日成主席は朝鮮の共産主義者に提起される戦略的任務について次のように述べている。

「こうした有利な情勢のもとで、朝鮮の共産主義者に提起される重要な任務は、朝鮮人民の革命勢力を強化し、すべての力を動員して反日民族解放闘争をさらに発展させることです」

主席はこの報告で、朝鮮の共産主義者に提起された戦略的課題を成功裏に遂行するための方針を示した。

まず、現段階において反日民族解放闘争を一大高揚へと導くた

め、朝鮮人民革命軍の主力部隊を国境地帯に進出させ、闘争の舞台を漸次国内に拡大するという方針を示した。

朝鮮人民革命軍が国境地帯と国内に進出して反日闘争を展開するためには、有利な条件が備わっている白頭山（ペクトウ）を中心とする国境一帯に新たな遊撃根拠地を創設すべきであると指摘したうえで、白頭山の大森林地帯に朝鮮人民革命軍が足を据えて活動できる密営網を形成し、その周辺地域の人民を組織化して半遊撃区形態の遊撃根拠地を築くべきであると述べた。

また、朝鮮人民革命軍が国境一帯と国内に進出して反日闘争を発展させるためには武装闘争を積極的に展開しなければならないとし、そのための当面の問題は抗日武装隊伍を拡大、強化し、特に朝鮮人民革命軍の主力部隊を強化することが第一の課題として提起されていると指摘した。

主席は、朝鮮人民革命軍部隊が国境地帯に進出するからといって、中国人民の抗日武装部隊との共同闘争を弱めてはならず、人民革命軍の各部隊は抗日連合軍の名のもとで中国の共産主義者と共同で武装闘争を展開すべきであると強調した。

主席は、反日民族統一戦線運動を全国的規模でさらに拡大、発展させる方針を示した。

反日民族統一戦線運動を新たな段階へと発展させるためには、常設的な統一戦線組織体を結成する必要があるとし、新たに組織する反日民族統一戦線組織体は、ごく少数の反動分子を除き、全民族を祖国解放戦線に結集する大衆的な革命組織にならなければならず、その名称と綱領には各階層人民の共通の念願と反帝反封建民主主義革命の段階で解決すべき基本的課題が盛り込まれなけ

ればならないと指摘した。この活動を武装闘争との緊密な連係のもとで展開し、変化する情勢に即応して共青を発展的に解散し、広範な愛国的青年を結集した大衆的革命組織として朝鮮反日青年同盟を組織すべきであると強調した。

主席は党創立の準備活動を全国的規模で力強く進める方針を示した。

党創立の準備活動で重要なのは、党組織を絶えず拡大し、党組織に対する指導体系を確立することであると指摘し、朝鮮人民革命軍部隊と各地の朝鮮人居住地、特に国内で党組織を拡大し、朝鮮人民革命軍党委員会から地方の党組織に至るまで、統一的な組織体系を確立すべきであると述べた。そして、党創立の組織的根幹をしっかり整え、主体的な革命路線にもとづいて隊伍の思想の一致と行動の統一をしっかりと保ち、鉄のような組織規律を確立し、党創立の大衆的基盤を築くために極力努力すべきであると強調した。

主席は当時を回顧しながら、南湖頭会議は1930年代の前半期と後半期を画する朝鮮革命の分水嶺と言える、南湖頭会議で採択された決定により、朝鮮の共産主義者は抗日武装闘争を中心とする朝鮮革命全般をいっそう高い段階へと発展させる新たな里程標を持つようになった、と述懐している。

主席は、南湖頭会議の方針を貫徹するための講習や党政治活動家会議を開き、南湖頭会議の基本精神を反映させた「祖国へ進軍してラッパの音を響かせよう！」というスローガンを掲げ、白頭山地区への進軍の途についた。

第2節　朝鮮人民革命軍主力部隊の拡大、祖国光復会の創立

金日成主席は南湖頭会議後、白頭山地区へ進出する中、朝鮮人民革命軍主力部隊を拡大、強化するために新しい師団の編制を進めた。

金日成主席は次のように述べている。

「抗日武装隊伍を拡大するうえでわれわれに提起される第一の課題は、朝鮮人民革命軍の主力部隊を強化することです。

主力部隊を強化すれば、これまでのように部隊で優秀な軍事・政治幹部を引き続き多く育成して他の部隊に派遣し、抗日武装隊伍を全般的に強化することができます。

われわれはできるだけ早い時期に、東満州および南満州一帯の朝鮮青年と国内の優れた青年たちを入隊させて新しい師団を編制し、その政治的・軍事的威力を強化するため積極的に努力すべきです」

主席は1936年3月下旬、安図県迷魂陣で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、南湖頭会議の方針を貫徹するための実践的対策として人民革命軍部隊を改編する問題を提起した。

主席は会議で、人民革命軍部隊を改編して従来の2個師団から3個師団、1個独立旅団に拡大し、各師団と旅団の活動地域を分担した。新たに編制される朝鮮人民革命軍の主力師団は、白頭山を中心とする鴨緑江（アムロク）国境沿岸一帯で活動するようにした。

会議ではまた、祖国光復会創立準備委員会を設ける問題も討議

された。

主席は、朝鮮人民革命軍の新しい師団を、軍事活動だけでなく政治活動もしながら朝鮮革命全般を主導していく主力部隊にする構想を立て、それを実現していった。

新しい師団の編制は、敵の執拗な「討伐」攻勢を撃破し、反「民生団」闘争における極左的な弊害を一掃するたたかいの中で進められた。

主席が新師団の編制のために迷魂陣を出発して馬鞍山地区に着いたとき、新師団の母体となるべき第2連隊は蛟河方向に移動し、そこには「民生団」の嫌疑をかけられて戦闘隊伍から排除された100余名の人員が残留しているだけだった。

主席は「民生団」の容疑者全員に会い、「民生団」との嫌疑は完全に無効であると宣言し、調書を焼き払う勇断を下した。1936年4月、彼らを主力とする新しい師団を編制し、その誕生を宣言した。

「民生団」の嫌疑をかけられていた人たち全員を新師団に受け入れたといううわさを聞いて集まってきた人たちと群小部隊、入隊を志願する愛国的青年たちからなる、新しい連隊と中隊を編制した。

主席は「民生団」の嫌疑をかけられていた隊員たちに、1カ月以内に敵の武器を奪って帰ってくる任務を与えて敵地に派遣した。彼らは徒手空拳で敵を襲い、たった15日間で銃弾を補い、銃も新しいものに取り替え、機関銃まで手に入れて戻ってきた。主席はこの武器をもって西崗戦闘をはじめとする戦闘を数回行い、主力部隊の武装装備の充実化を図った。

主席は、新しい師団を編制した際、朝鮮の建軍史上初の女性中隊を編制し、その後、馬鞍山の児童団員と白頭山地区から人民革命軍を訪ねてきた少年たちで少年中隊も組織した。

主席は新師団を編制して強化する一方、常設的な反日民族統一戦線組織体である祖国光復会を創立する活動に心血を注いだ。

主席は1936年3月下旬、迷魂陣で朝鮮人民革命軍の指揮幹部と人望の厚い愛国団体の代表たちで祖国光復会創立準備委員会を組織するとともに、国内と満州各地に朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員を派遣し、祖国光復会の創立をめざす組織・政治活動を展開させた。そして南湖頭から東崗に至る間、行軍と戦闘が続く苦難にみちた環境の中でも、密林のたき火のかたわらで祖国光復会の綱領と規約、創立宣言書を作成した。

主席は1936年5月1日から15日にかけて、撫松県東崗で祖国光復会創立のための朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開いた。

会議には天道教代表と農民代表、教員代表、労働者代表も参加した。

主席は会議で『反日民族統一戦線運動をさらに拡大し、全般的な朝鮮革命を新たな高揚へと導こう』と題する歴史的な報告を行った。

主席はこの報告で、祖国光復会創立の必要性と意義、その性格と機能、綱領の基本的内容を明示し、祖国解放の旗のもとに全民族を一つの政治勢力として結束し、朝鮮人民革命軍が国境地帯と国内に進出して反日民族統一戦線運動を強力に展開するための課題を提示した。

主席は反日部隊との連係をさらに強化し、敵軍瓦解工作を巧み

に行い、国境沿岸に新しい根拠地を創設するために積極的に努力すべきであると強調した。

主席は会議で『祖国光復会10大綱領』と『祖国光復会創立宣言』、『祖国光復会規約』を発表した。

主席は『祖国光復会10大綱領』で、民族的自主権を実現するための政治的課題として、真の朝鮮人民政府を樹立し、革命軍を組織して人民に民主主義的な自由と権利を保障し、海外朝鮮同胞の民族的権利を擁護することを規定した。また、国の自主的発展を保障する経済的課題として、土地改革と主要産業の国有化を実施し、労働者の労働条件と勤労者大衆の生活を改善し、自立的な民族経済を建設することを提起した。そして社会・文化面の課題として、社会生活のすべての分野において日本帝国主義の植民地統治制度と封建的な残滓を一掃し、民主主義的民族教育と民族文化を発展させることを規定した。同時に、朝鮮民族に対して平等な立場を取り、朝鮮民族解放運動に善意と中立を示すすべての国と友好関係を保つという自主的な対外政策の基本原則を提示した。

主席は『祖国光復会創立宣言』で、祖国光復会の創立を国内外に宣言し、都市と農村の至るところに即刻、祖国光復会組織を結成し、祖国光復会10大綱領の旗のもとに全民族が団結し、祖国の解放をめざすたたかいを強力に展開するようアピールした。

会議では創立宣言を誰の名で発表するかという問題が論議された。参会者たちは金日成将軍が祖国光復会の創立を発起し、創立準備委員会の活動も主宰し、綱領と創立宣言書も作成したのだから将軍の尊名で発表すべきだと異口同音に提起した。しかし主席は、発起人としては過去の義兵運動や3・1運動の時期から独立運

動に献身してきた名望の高い年配の愛国志士を立てるべきだと提起した。慎重な討議の末、金日成将軍の尊名を金東明（キムドンミョン）という仮名を使うことを条件に、金東明、李東伯（リ ドンベク）、呂運亨（リョウンヒョン）の3人の連名で発表することにした。

主席はそれぞれの地域の実情に応じて宣言書を発表するようにした。創立宣言書はその後、国内外の各地に送られたが、あるところではそれを複製しながら、それぞれ地方で影響力のある人物や著名人士を発起人として発表し、祖国光復会の名称も東満朝鮮人祖国光復会、在満韓人祖国光復会など当該地域の実情に合うように付けた。

主席は『祖国光復会規約』で、祖国光復会の闘争目的と名称、入会対象、組織の形式と構造、会員の義務と権利、組織規律、特殊会員の入会方法と工作任務など、祖国光復会の活動方式全般と内部生活規範を全面的に規定した。

会議では祖国光復会10大綱領と規約、創立宣言書が全会一致で採択された。

参会者たちは、全朝鮮人民の一致した意思と念願を込めて主席を祖国光復会の会長に推戴した。

主席は1936年5月5日に祖国光復会の創立を世に宣言した。会議で祖国光復会の機関誌として『3・1月刊』を発行することを決定した。

祖国光復会は唯一の綱領と規約、組織体系を持ち、民主主義中央集権制の原則にもとづいて活動する、朝鮮における初の常設的な反日民族統一戦線組織体であり、全民族的愛国勢力に対する領袖の指導、党の指導を揺るぎなく保障する大衆組織であり、強力

な地下革命組織であった。

第3節　白頭山密営を中心とする白頭山根拠地の創設、国内深くに秘密根拠地を拡大

金日成主席は南湖頭会議後、白頭山根拠地の創設に大きな力を注いだ。

金日成主席は次のように述べている。

「南湖頭会議以後、われわれは武装闘争を国内へと拡大し、わが国の革命運動を一大高揚へと導くうえで重要な役割を果たす戦略的地帯の確保に大きな力を注いできました」

白頭山地区は自然、地理的に見ても、朝鮮人民革命軍が依拠して活動するのに非常に有利であるだけでなく、周辺地帯の住民の反日感情も強いところであった。白頭山は朝鮮の祖宗の山であり、朝鮮の象徴、民族史の発祥地であった。朝鮮革命全般を一大高揚へと導く戦略的地域として白頭山地区を確保すれば、民族のすべての勢力を反日聖戦へと奮い立たせ、全民抗争の勝利を達成することができた。

主席は白頭山根拠地の創設に有利な条件を整えるための朝鮮人民革命軍主力部隊の軍事・政治活動を指導した。

主席は国境地帯に進出しながら、1936年6月と7月に老嶺戦闘、西南岔戦闘、西崗戦闘を、8月には撫松県城戦闘などを勝利に導き、撫松一帯の敵を軍事的に完全に制圧した。1936年8月下旬、主席は漫江集落で不朽の名作、革命演劇『血の海』の公演をはじ

め大規模な政治活動を行って村を革命化し、至るところで大衆政治活動を積極的に繰り広げた。こうして、漫江だけでも数多くの人たちが自ら進んで入隊し、漫江は朝鮮人民革命軍の強固な補給基地の一つとなった。

主席は鴨緑江沿岸一帯に進出して軍事・政治活動をさらに積極的に展開した。

1936年9月初旬、長白県の大徳水戦闘に次いで、小徳水の馬登廠樹林の中で望遠戦術を使って二道崗と一五道溝方面から出動した「討伐隊」を同士討ちさせて掃滅した。このときから、金日成将軍の率いる朝鮮人民革命軍は「遁術」を使って「昇天入地」し、「神出鬼没」するとのうわさが広がるようになった。主席はさらに一五道溝東崗戦闘、一三道溝竜川里戦闘、二〇道溝二終点戦闘をはじめ大小の戦闘を連続的に繰り広げて敵に甚大な軍事的・政治的打撃を加え、人民に勝利の信念を植えつけた。

主席は猛烈な軍事・政治活動によって敵を軍事的に制圧し、人民を革命化しながら、白頭山の大森林地帯に朝鮮人民革命軍がよりどころとして活動できる密営網を形成するようにした。

主席は密営の建設を第一義的な課題とし、司令部が位置する密営地、朝鮮革命運動全般に対する中心的指導拠点となる密営地を立派に建設するよう指導した。

主席は東崗会議の直後、金周賢（キムジュヒョン）、李東学（リ ドンハク）、金雲信（キムウンシン）など優秀な軍事・政治幹部を国内の白頭山地区に派遣し、中心的指導拠点となる密営の候補地を探索させ、1936年9月20日には主力部隊のメンバーを率いて鴨緑江を渡り小白水谷（ソ ベク ス）に進出して密営の建設を指導した。

主席は小白水谷で朝鮮人民革命軍主力部隊の指揮官の会議を開き、白頭山の深い森林地帯に密営地を設け、それが敵に絶対発見されず、革命運動全般に対する統一的指導をしっかり保障する指導の中心的な拠点としての使命と役割を果たせるようにすべきだと強調した。そして司令部密営をはじめ、その周辺に配置する各密営の場所と規模、使命と役割などを具体的に示した。

こうして、短期間に小白水谷に司令部の密営としての白頭山密営が設置され、これを中心として周辺に数多くの衛星密営が設けられた。白頭山密営は朝鮮革命の本拠地、中心的指導拠点となった。

国内の白頭山地区には、司令部密営の補助密営として、司令部を訪ねてくる人のための窓口であると同時に、待合所、面談所、宿泊所、講習所、訓練所、出版所として利用される獅子峰（サザボン）密営と、党組織の建設を国内に拡大し、国内の革命家と政治工作員との連係を保つ熊山（コムサン）密営、国内で活動する朝鮮人民革命軍部隊の中間連絡所として利用される仙五山（ソンオサン）密営をはじめ間白山（カンベクサン）密営、小胭脂峰（ソヨンジボン）密営、無頭峰（ムドウボン）密営、双頭峰（サンドウボン）密営、大角峰（テガクボン）密営、鴨緑江岸密営などそれぞれ異なった使命を持つ密営が建設された。国内の白頭山地区に設けられた秘密根拠地の密営は、抗日武装闘争を国境一帯と国内深く拡大するための朝鮮人民革命軍の作戦基地、活動基地、後方基地としての役割と、白頭山周辺の住民地帯を革命化し、掌握、統制する拠点としての役割を果たした。

また、西間島一帯にも黒瞎子溝密営、紅頭山密営、地陽渓密営、二道崗密営、横山密営、鯉明水密営、富厚水密営、青峰密営と、撫松地区密営をはじめ数多くの衛星密営が設けられた。

主席は密営網を形成する活動とともに、白頭山周辺地域に地下革命組織を設置し、地域の人民を革命化するための活動を進めた。

主席は大徳水をはじめ各地域の村民の中に入って大衆政治活動を展開する一方、権永璧（クォンヨンビョク）、池泰環（チ テ ファン）、朴禄金（パクロククム）など数多くの政治工作員を派遣して白頭山周辺の人民を革命化させた。政治工作員は党および祖国光復会組織をはじめとする革命組織を設立し、人民を革命化する一方、組織の中核メンバーを敵の末端支配機関に潜り込ませて面長、区長、村長、十家長として活動させて敵の支配機能を麻痺させた。その結果、白頭山周辺の住民地区は形式上、敵の行政権が及んでいるだけで、実際には朝鮮人民革命軍が掌握し統制する革命化された地域となった。

こうして白頭山密営を中心に国内と西間島の広い地域に新しい形態の根拠地、白頭山根拠地が創設された。

主席は白頭山根拠地を創設した後、国内深くへと秘密根拠地を拡大していった。

白頭山根拠地を創設した直後、主席は秘密根拠地を狼林（ランリム）山脈一帯に拡大することと、国内に秘密根拠地を創設する地域と秘密根拠地の規模などについて明示した。朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員を国内各地に派遣し、軍事・政治活動に有利な森林地帯に密営や連絡所などからなる秘密根拠地を設けさせた。

主席は朝鮮人民革命軍主力部隊のメンバーを率いて数回にわたって厚昌（フ チャン）、豊山（プンサン）、狼林、赴戦（プ ジョン）、新興（シンフン）、陽徳（ヤンドク）地区をはじめ国内深くに進出し、秘密根拠地を設けるための具体的な課題を示し、その活動を指導した。

こうして北部朝鮮一帯の倉坪（チャンピョン）、豊山、厚昌、厚峙嶺（フ チ）、狼林、

赴戦、新興、渭原（イウォン）、昌城（チャンソン）、五佳（オガ）山地区と中部朝鮮一帯の徳川（トクチョン）、陽徳、安州（アンジュ）、平城（ピョンソン）、九月山（クウォル）、新坪（シンピョン）、谷山（コクサン）、兎山（トサン）、板橋（パンギョ）、太白（テベク）山地区、そして南部朝鮮一帯の智異（チリ）山地区をはじめ重要地区に秘密根拠地が設けられた。

国内各地に設けられた秘密根拠地は、白頭山密営に位置する司令部の統一的な指導のもとに当該地域での武装闘争と党組織建設、祖国光復会運動を中心とする反日大衆闘争、全民抗争の準備などを確実に保障する地域の指導拠点としての役割を果たした。

第4節　党および祖国光復会組織の全国的・全民族的規模への拡大

金日成主席は白頭山根拠地を拠点にして党創立の準備を全国的・全民族的規模へと急速に拡大、発展させていった。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは朝鮮人民革命軍部隊と各地の朝鮮人居住地で、党組織の建設活動を積極的に推進すべきです。特に国内では、分散している共産主義者を結集すると同時に、闘争の中で点検された先進分子を積極的に入党させて、党組織を絶えず拡大しなければなりません」

主席は、抗日革命の主力となる朝鮮人民革命軍の部隊に党組織を拡大し強化する活動に大きな力を注いだ。

朝鮮人民革命軍の主力師団が新しく編制され、拡充されるに伴い、部隊内の党組織を整備、強化することに第一義的な関心を払

い、新たに組織される中隊には党細胞を新設し、改編される中隊にはそれに合わせて党細胞を組織し、細胞指導機関を選挙するようにし、連隊には連隊党委員会を設け、さらに師団党委員会を組織するようにした。

主席は、主力部隊だけでなく、朝鮮人民革命軍第4師、第5師、独立旅団の部隊でも、小隊には党分組、中隊には党細胞、連隊と旅団には連隊党委員会と旅団党委員会、師団には師団党委員会を設置し、朝鮮人民革命軍党委員会の指導を受ける整然とした組織指導体系を確立していった。

主席は国内の広い地域に党組織を拡大し、整然とした組織指導体系を確立するようにした。

国内で分散して活動していた愛国者と革命家を一つの勢力に結束し、彼らの間で直接的な連係を保ち、全国的な規模で展開される反日民族解放闘争に対する党の指導を強化するためには、責任を担って遂行する党指導機関を設ける必要があった。

主席は1936年5月に開かれた東崗会議で、党組織の建設を遊撃隊内に限定したり、中国の東北一帯だけを舞台にしたりしてはならず、国内深くに党創立の組織的・思想的基礎を築くべきであると強調し、国内の広い地域に党組織を拡大し、国内における党創立の準備活動を統一的に指導するため、国内党工作委員会を組織する課題を示した。

1936年12月には国内の共産主義者に手紙を送り、国内で活動していた朴達（パクタル）を黒瞎子溝密営に呼び、国内に党組織を結成するに当たっては、承認などということは問題になり得ず、あくまでも朝鮮共産主義者の自主権に属する問題であるとし、党組織の建設で

自主的立場を堅持すべきであると強調した。そして党組織を先に結成できるところは党組織を先に結成し、大衆団体を先に結成できるところは大衆団体を先に結成し、共産主義者を育成した後に党組織を結成すべきであると指摘した。

主席は1936年12月31日、朝鮮人民革命軍党委員会の会議を招集し、国内党工作委員会を設ける必要性と意義、使命と任務、組織規範と活動原則を明らかにした。

会議では国内党工作委員会が設立された。国内党工作委員会は、朝鮮人民革命軍党委員会の指導のもとに、国内における革命闘争を統一的に指導し、国内の党組織建設を担う地域的な党指導機関であった。

主席は国内党工作委員会を組織した後、全国的な規模で党組織を拡大する活動を推し進めた。

1937年5月、国内党組織を建設するための重要な措置として、朴達を責任者とする国内党組織建設のための母体組織である国内党グループを組織した。

そして1937年5月26日、熊山密営で開かれた国内党工作委員会第2回会議で行った演説『国内党組織を拡大、強化するために』で、国内党工作委員会の結成以後の党組織の建設状況を総括し、国内党組織建設における課題と方途を示した。

主席は、全国的規模で党組織を拡大するため、甲山（カブサン）と三水（サムス）一帯を国内党組織建設のための原種場とし、そこで育てた中核を他の地方に派遣して党組織を拡大させ、1937年の夏と秋には、国内党工作活動を支援する使命を担った北鮮政治工作隊を北部朝鮮の各地に派遣した。工作隊は北部朝鮮一帯を革命化する方法を通じて、

国内党組織建設を直接支援する任務を遂行した。

朝鮮人民革命軍の優秀な政治活動家たちで編制された北鮮政治工作隊は、国内の至るところで党組織の建設と祖国光復会の組織網を拡充する活動を積極的に繰り広げ、労組、農組をはじめ既存の組織と共産主義グループに深く入って党組織の建設を推し進めた。

主席は金正淑（キムジョンスク）を新坡（シンパ）地区に派遣し、そこを足場にして豊山地区と狼林、赴戦、新興、北青（プクチョン）、利原（リウォン）、端川（タンチョン）など各地域に党組織を結成させた。

政治工作員と国内党工作委員会の積極的な活動によって、国内の広い地域に党組織が急速に拡大された。甲山、新坡、豊山をはじめ咸鏡（ハムギョン）南北道と陽徳地方、そして平壌（ピョンヤン）、碧城（ピョクソン）など全国各地の鉱山、炭鉱、工場、農村、漁村、都市に党組織が結成された。

主席は長白地区を中心とする白頭山西南部と東北部一帯で、党組織の建設を積極的に推進した。

主席は1936年3月下旬、東満党工作委員会を設立した。東満党工作委員会は、朝鮮人民革命軍党委員会の指導のもとに豆満（トウマン）江沿岸一帯における党組織建設活動を統一的に指導する地域的な党指導機関であった。東満党工作委員会の設立によって、東満一帯にあったすべての党組織はその傘下に入った。

一方、白頭山西南部一帯における党組織の建設を推進するため、1937年2月、権永璧を責任者とする長白県党委員会を設立した。長白県党委員会は、朝鮮人民革命軍党委員会に直属し、長白地区をはじめ白頭山西南部一帯における党組織の建設を統一的に指導する地域的な党指導機関であった。その傘下に区党と党グループが設けられた。

東満党工作委員会と長白県党委員会の指導のもとに長白、撫松、臨江一帯をはじめ東満州と南満州の朝鮮人居住地域にも党組織が拡大された。

このように全国的・全民族的規模で党組織建設が強力に推進された結果、分散して活動していた革命家が組織的に結束し、すべての党組織が朝鮮人民革命軍党委員会の統一的な指導のもとに活動する強力な党組織指導体系が確立された。党中央の宣言こそなかったが、朝鮮革命全般に対する主席の唯一的指導が確固と実現し、党創立の組織的・思想的基礎構築に転換がもたらされた。

主席は祖国光復会を創立した後、朝鮮人民革命軍を主力として、祖国光復会の組織を全国的・全民族的規模で急速に拡大していった。

主席は1936年10月上旬、長白県黒瞎子溝密営で開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部および政治工作員会議での演説『祖国光復会の組織を急速に拡大していこう』をはじめ他の機会にも祖国光復会の組織を急速に拡大するための課題と方途を示した。

主席は国内をはじめ広い地域に祖国光復会の下部組織を設置するとともに指導体系を確立し、広範な大衆を祖国光復会の組織に固く結集すべきだとし、この活動における政治工作員と人民革命軍隊員の役割を高めるよう強調した。

主席は祖国光復会の組織を全国的・全民族的規模に拡大するため、まず朝鮮人民革命軍の全員を祖国光復会に受け入れ、彼らが全人民を反日民族統一戦線に結集する宣伝者、組織者となり、朝鮮人民革命軍の隊伍から選出された政治工作員が祖国光復会の組織建設で主要な役割を担うよう指導した。

主席はモデルケースをつくり、それを母体として祖国光復会の

組織を全国的・全民族的規模に拡大していった。

主席は長白をはじめ西間島一帯を祖国光復会組織拡大のための試験地区に定め、金一（キムイル）、金周賢などの指揮メンバーを責任者とする政治工作小部隊をこの一帯に派遣し、祖国光復会の組織建設を強力に展開させた。こうしてわずか半年のうちに、長白一帯に整然とした祖国光復会の組織が生まれた。1936年10月、祖国光復会長白県二〇道溝新興村支会の結成に次いで、数多くの祖国光復会支会が組織され、その傘下に分会と生産遊撃隊、反日青年同盟、反日婦女会、児童団が組織された。そして長白県の上崗区、中崗区、下崗区に祖国光復会区委員会が組織され、1937年2月には李悌淳（リ ジェスン）を責任者とする祖国光復会長白県委員会が組織された。

汪清、和竜、琿春、延吉など東満州の各県と朝鮮人が多く居住する南北満州の広い地域に祖国光復会の下部組織が設けられ、急速に拡大していった。

主席は、甲山と三水、豊山地区を、祖国光復会の組織を国内深くに拡大するための重点地域に定め、この一帯で祖国光復会の組織建設活動を積極的に推進させた。

主席は1936年12月、黒瞎子溝密営で朴達に会い、祖国光復会の組織を拡大するうえで提起される具体的な闘争課題を示した。主席の教えにもとづいて翌年の1月、甲山工作委員会は祖国光復会の国内下部組織である朝鮮民族解放同盟に改編された。朝鮮民族解放同盟は祖国光復会の組織を国内深くに拡大する一つの発進基地となり、その傘下に数十の祖国光復会の下部組織が設置された。

主席は金正淑をはじめ多数の政治工作員を新坡、三水、豊山一帯に派遣して祖国光復会の組織網を拡充し、それを足場に全国各

地で祖国光復会の組織網を拡充させていくようにした。

それにより咸鏡南北道はもとより、平安(ピョンアン)南北道、黄海(ファンヘ)道、江原(カンウォン)道と南部朝鮮一帯を包括する全国各地で反日会、救国会、光復会などそれぞれ異なる名称の祖国光復会の下部組織が急速に拡大し、北青地区委員会をはじめ各級の組織が設置され、整然とした組織指導体系が確立されていった。祖国光復会の組織には労働者や農民だけでなく、青年学生、知識人、民族資本家、民族主義者、良心的な宗教家など、国と民族を愛し、日本帝国主義に反対する各階層の大衆が広く集まった。南満州で活動する梁世鳳(リャンセボン)独立軍部隊の副司令であった崔潤亀(チェユング)は主席が送った親書と祖国光復会創立宣言、10大綱領を受け取った後、兵士を率いて朝鮮人民革命軍の側につく義挙を断行した。

主席は進歩的な天道教徒を祖国光復会の組織に結集する活動を精力的に進めた。

天道教は朝鮮の民族宗教であり、理念と実践において愛国・愛族・愛民を追求し、布教の範囲はどの宗教よりも広く、教徒も多かった。

主席は長白、豊山一帯の天道教徒の間に祖国光復会組織を設け、広範な下層の教徒を結集しながら上層の教徒を包容するため積極的な対策を講じた。

1936年11月中旬、獅子峰密営で天道教咸鏡南道道政の朴寅鎮(パクインジン)をはじめ天道教の代表たちに会い、彼らに祖国光復会創立の目的と10大綱領、民族解放闘争の展望を説明し、祖国解放戦線に積極的に参加するよう呼びかけた。

こうして1937年の春、豊山郡内の天道教徒からなる祖国光復会

豊山支会が結成され、それに続いて甲山、三水、恵山（ヘサン）、長白一帯に天道教中核メンバーによる祖国光復会組織が設けられ、数多くの天道教徒が結集した。

主席は1937年の秋、朝鮮人民革命軍の小部隊を率いて豊山地区を訪ね、革命組織の活動を指導しながら、天道教徒が多いこの地域の特性に合わせて教徒を祖国光復会の組織に結集させた。

主席は祖国光復会の組織を急速に拡大して統一的な指導体系を確立する一方、祖国光復会の各組織に対する党の指導を強化した。

こうして、祖国光復会運動全般に対して党の指導ができる組織指導体系が確立され、祖国光復会組織は広範な大衆を結集させ、抗日武装闘争へと力強く立ち上がらせる使命と役割を立派に果たすようになった。

全国的・全民族的規模で祖国光復会の組織建設が強力に推進された結果、祖国光復会は数十万の会員を擁する汎民族的組織に拡大され、抗日武装闘争の大衆的基盤はいっそう強固になった。

第5節　大部隊による国内進攻作戦、歴史的な普天堡戦闘

金日成主席は白頭山根拠地を拠点にして軍事・政治活動を強力に展開し、大部隊による国内進攻作戦を勝利に導いた。

1930年代中期の情勢は、朝鮮人民革命軍の大部隊が国内へと進出し、日本帝国主義に打撃を与え、人民に祖国解放実現の確信を抱かせることを切実に求めていた。

日本帝国主義は大陸侵略の準備を完了するため、朝鮮人民に対する植民地支配をかつてなく強化した。彼らは各種の悪法をでっちあげ、ファッショ的支配機構を増設し、労働者、農民の革命的進出を苛酷に弾圧し、愛国的人民を手当たり次第に検挙、投獄、虐殺した。また、経済の軍事化に拍車をかけながら朝鮮人民を非人間的に搾取し略奪して飢餓と貧窮に陥れた。日本帝国主義は「内鮮一体」、「同祖同根」を仰々しく唱え、朝鮮人民の民族性を抹殺しようと、朝鮮人民固有の良風美俗はもとより、朝鮮語と文字までなくし、「大和魂」を注入しようと悪辣に策動した。そして、朝鮮人民革命軍への人民の期待と希望を抹殺するため、途方もない悪宣伝を飛ばした。まさに朝鮮は文字通り生き地獄と化し、朝鮮人民の頭上には暗雲が重く垂れ込めていた。こうした状況にあって、祖国の人民に勝利の信念を抱かせ、彼らを反日闘争に立ち上がらせるためには、一日も早く大部隊による国内進出を断行する必要があった。

一方、南湖頭会議で提示された戦略的方針を貫徹するためのたたかいが強力に推進され、祖国光復会の組織が国内外の広い地域に拡大し、武装闘争の大衆的基盤がいっそう強化され、白頭山根拠地が創設されたことによって、それを拠点にして武装闘争を国内へ拡大できる戦略的地盤が築かれた。

主席は、国内進攻作戦に有利な条件を整えるため、朝鮮人民革命軍に対する日本帝国主義の「冬季大討伐」攻勢を撃破するたたかいを指導した。

朝鮮人民革命軍の国境地帯への進出と、白頭山根拠地の創設に大きな恐怖と不安を感じた日本帝国主義は1936年10月、朝鮮総督

と満州駐屯関東軍司令官との間で「図們会談」を開き、抗日武装部隊を「完全掃討」して治安を維持する「非常対策」として、国境警備の強化、大規模な共同「討伐」作戦の展開、西間島一帯の集団部落化を骨子とする「3大政策」を作成した。「3大政策」の核心は1936年の「冬季大討伐」であり、その基本目標は朝鮮人民革命軍司令部がある白頭山地区であった。日本帝国主義は通化に「討伐司令部」を設置し、同年11月から大規模な「冬季大討伐」を強行した。日本帝国主義の「討伐」を撃破せずには、白頭山根拠地を維持できないばかりか、国内の進攻作戦を成功裏に遂行することも不可能であった。

主席は1936年11月、黒瞎子溝密営で朝鮮人民革命軍の軍事・政治幹部会議を招集し、敵の数的、技術的優勢を思想的・戦術的優勢をもって撃破する方針を示し、それを貫徹するため朝鮮人民革命軍の大規模な軍事作戦を巧みに指揮した。

主席は1936年11月中旬、誘引・伏兵戦によって敵の「冬季大討伐」を撃破するための黒瞎子溝入口での戦闘を勝利に導き、さらに大部隊活動と小部隊活動を組み合わせて長白県一帯で一四道溝市街襲撃戦闘、一三道溝桃泉里上村奇襲掃討戦をはじめ各種の戦闘を展開し、敵に痛撃を加えた。

主席は同年12月、朝鮮人民革命軍の性格と使命、指揮官、兵士の日常生活において厳守すべき規範と行動準則を規定した「朝鮮人民革命軍暫定条例」を策定し公布した。主席は暫定条例で、魚が水を離れては生きていけないように、朝鮮人民革命軍は人民を離れては生きていけないということを肝に銘じ、人民の生命、財産を守り、人民と生死、苦楽をともにしながら、軍民が一致団結

して祖国と人民の解放をめざしてたたかい、指揮官と隊員が革命的同志愛と将兵一致の精神を高く発揮するよう強調した。

主席は1937年、横山密営で隊員たちと一緒に正月を過ごした後、紅頭山戦闘、桃泉里戦闘、鯉明水戦闘などを相次いで繰り広げ、敵の「冬季大討伐」攻勢を粉砕した。

主席は長白地方に集結していた敵の兵力を最大限に分散させ、敵の注意をほかへそらせることで白頭山根拠地における地下組織の整備活動の安全を図り、朝鮮人民革命軍の国内進出に向けて有利な条件を整えるため、1937年3月に主力部隊を率いて撫松への遠征を断行した。

主席は遠征の途上、部隊内で革命的同志愛が高く発揮されるよう細かく気を配り、絶妙な戦法を駆使して長白県断頭山戦闘と撫松県西大嶺戦闘、漫江付近戦闘を繰り広げ、敵に大きな打撃を与え、小湯河で大道行軍の一行千里の戦術で敵を首尾よくまいて撫松遠征を勝利をもって終結させた。

主席は国内進出に有利な条件を整えたうえで、大部隊による国内進攻作戦を指揮した。

1937年3月29日から31日にかけて、撫松県西崗で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、『大部隊の国内進攻作戦によって人民に祖国解放の希望を与えよう』と題する演説で、大部隊による国内進攻作戦によって日帝侵略者に痛撃を加え、敵の牙城に火を放ち、人民に朝鮮人民革命軍は健在であり、祖国解放の正義のたたかいで勝利しており、人民革命軍が存在するかぎり、朝鮮は必ず独立するということを認識させなければならないと強調した。

そして、人民革命軍の部隊を3方面に進出させる作戦計画を示

し、各部隊の任務と活動方向、活動区域を定めた後、主力部隊を率いて恵山方面へ進出した。

主席は西崗会議後、撫松県東崗密営で朝鮮人民革命軍主力部隊の軍事・政治訓練を実施して、国内進攻の政治的・軍事的準備を整え、5月初めに、朝鮮人民革命軍の機関紙『曙光』を創刊した。

1937年5月中旬、長白県一九道溝地陽渓台地で国内進攻のための隊伍の整備と各種の教宣活動を展開する一方、国内情勢をより詳しく把握しながら作戦の準備を完了した。

豆満江と鴨緑江沿岸の国境一帯に進出した朝鮮人民革命軍部隊の活動状況と敵の動静をうかがっていた主席は、茂山（ムサン）地区に進出した部隊が敵に全面包囲される危機にあるという報告を受け、彼らを救出し国内進攻の目的も同時に達成するため、攻撃の目標を恵山から普天堡（ポチョンボ）へ移す対応策を立てた。

主席は普天堡戦闘を勝利に導いた。

主席は主力部隊を率いて6月3日の夜、口隅水堰で筏で鴨緑江を渡り、祖国の地である坤長徳（コンジャンドク）で宿営し、翌日、普天堡市街に偵察班を派遣し各ルートを通じて掌握した情報を再確認し、さらに各組に具体的な戦闘任務を下達した。

6月4日、日が暮れると、部隊は坤長徳を下って普天堡市街に近づき、それぞれの位置を占めた。

主席は主要攻撃目標の警察官駐在所からわずか100メートルそこそこの街の入口にあるドロノキの下に指揮所を定めた。

夜10時、主席の発した銃声を合図に、普天堡戦闘が開始された。

朝鮮人民革命軍の隊員たちは警察官駐在所、面事務所をはじめ日本帝国主義の弾圧機構や統治機関をたちどころに襲撃、掃討し

て普天堡一帯を解放した。普天堡市街には天を焦がさんばかりの炎が立ち昇った。

政治工作員たちは、主席が作成した『布告』と『祖国光復会10大綱領』を通りに貼り出し、各種の檄やビラをまいた。

人民は「金日成将軍万歳！」、「朝鮮独立万歳！」を声高く叫びながら主席を熱烈に歓迎した。

主席は歓呼する人民の前で、祖国の解放をめざして力強くたたかおうと演説をし、彼らに必勝の信念を抱かせ、こぞって反日聖戦に決起するよう呼びかけた。

日本帝国主義の朝鮮総督府が治安維持の完璧を豪語していた国内に朝鮮人民革命軍の大部隊が進攻し、面所在地普天堡の敵の支配機関を一撃のもとに掃討したことは、日本帝国主義の植民地支配体制を根底から揺さぶる歴史的な出来事であった。

金日成主席は次のように述べている。

「その意義は何人かの日本人を殺したことにあるのでなく、朝鮮人は死なずに生きており、日本帝国主義とたたかえば勝利するという信念を高める革命の曙光を照らしたことにあります。普天堡戦闘は、朝鮮人は日本帝国主義に抵抗する、『内鮮一体』を認めない、日本人と朝鮮人は『同祖同根』でない、朝鮮人は日本帝国主義者に協力して中国を侵略しない、朝鮮人は母国語を捨てないであろう、自分の姓氏を日本の姓氏に変えない、朝鮮人は死なずに生きている、日本帝国主義者に抗してたたかえば勝てる、ということを全世界に宣言しました。これが普天堡戦闘の戦略的意義であります。ここに普天堡戦闘の歴史的意義があるのです」

主席は国内進攻作戦の勝利を強固にする闘争を指導した。

主席は普天堡戦闘の後、追撃してくる敵を口隅水山で掃滅した。

そして、3方面へ進出した部隊を長白県地陽渓に集結させ、6月13日、盛大な軍民交歓集会を開いた。主席はこの席で国内進攻作戦の勝利を総括し、軍民の一致団結によって祖国解放という偉業の達成を速めるための課題を示した。

朝鮮人民革命軍の国内進攻作戦にあわてふためいた日本帝国主義は、朝鮮駐屯軍第19師団所属の咸興（ハムフン）第74連隊や満州国軍まで動員し、2000余名の大兵力を繰り出して攻撃してきた。

主席は6月30日、間三峰で大せん滅戦を指揮した。

この日、雨の降り続く中での戦闘はまる1日続いた。女性隊員たちは射撃を続けながら朝鮮民族の代表的な民謡の一つである『アリラン』を高らかにうたった。間三峰の激戦場に響いた歌声は日帝侵略軍兵士を唖然とさせ、恐怖におののかせた。

この日、敵は数多くの死体を放置し、200名ほどの敗残兵を集めて逃走した。

この戦闘は口隅水山戦闘とともに、普天堡戦闘の勝利をより強固で輝かしいものにし、「無敵皇軍」の神話を完膚なきまでに打ち破り、朝鮮人民革命軍の白頭山地区進出後、抗日革命の全盛期をもたらす大きな意義のあるものとなった。

朝鮮人民革命軍の国内進攻作戦のうわさは当時、国内外の主要新聞と出版物を通じて広く伝わり、この作戦を勝利に導いた主席の名声は海外同胞を含む全朝鮮人民の胸に解放の救星、民族の太陽、偉大な軍事戦略家、伝説的英雄として深く刻みつけられることになった。

第6節　中日戦争の勃発に対処して軍事・政治活動を強化し、全民抗争の準備を速めるためのたたかい

抗日武装闘争が国内深く拡大し、全国的規模で党および祖国光復会の組織を拡充するためのたたかいが力強く展開されていた時期、「東亜の盟主」となって世界制覇を成し遂げようとする野望のもとに侵略戦争の準備を進めていた日本帝国主義は、1937年7月7日、「蘆溝橋事件」を起こして中国関内への全面的な武力侵攻を開始した。

一方、コミンテルン内の極左冒険主義者たちは東北の抗日連軍部隊に無謀な熱河遠征を強要した。

金日成主席は中日戦争の勃発と関連し、1937年7月中旬に白頭山密営で開かれた朝鮮人民革命軍主力部隊指揮官会議での演説と、同年8月初めに長白県初水灘で行われた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議での演説『中日戦争の勃発に対処して敵背撹乱作戦を積極的に展開しよう』で、抗日武装闘争をさらに強化し、朝鮮革命全般を新たな高揚へと導く戦略的方針を示した。

主席はまず、鴨緑江、豆満江沿岸一帯をはじめ広い地域で敵背撹乱作戦を行う方針を示した。

敵の背後をたたいて撹乱すれば、中国関内に向けられていた敵の主力を分散、弱体化させることができ、敵を混乱させ、日本帝国主義の大陸侵略政策を阻止、破綻させるうえで有利な局面を開くことができた。

主席は、満州の抗日武装部隊が無辺広野の熱河方面に進出して

敵と正面対決するよう求める極左冒険主義的熱河遠征路線を排撃し、主体的立場に立って主動的かつ、積極的な戦法、遊撃戦の要求を貫徹すべきであるとし、朝鮮人民革命軍部隊は熱河方面ではなく、鴨緑江、豆満江一帯の山岳地帯へと進出し、機動的な遊動作戦によって日本帝国主義の背後を絶えず撹乱して打撃を与えるべきであると指摘した。

また、中日戦争の勃発に対処して反日・反戦闘争を強化し、全人民的抗争の準備を進めるため、国内に小部隊と政治工作員をより多く派遣して祖国光復会の組織をさらに拡大し、狼林山脈を利用して革命根拠地を設け、国内の至るところで生産遊撃隊と労働者突撃隊を組織し拡大していかなければならないと強調した。

主席は朝鮮人民革命軍の敵背撹乱作戦を指揮した。

主席は1937年8月中旬、朝鮮人民革命軍指揮官・兵士大会を招集し、白頭山密営会議と初水灘会議で示した戦略的方針を貫徹するためのたたかいに指揮官と兵士を奮起させた。

大会の後、朝鮮人民革命軍部隊が日本帝国主義の大陸侵略戦争拡大策動を破綻させるための軍事作戦を各地で活発に展開するようにした。

主席は中日戦争が起きた当初から、朝鮮人民革命軍の主力部隊を率いて長白県一九道溝の馬順溝付近戦闘、一三道溝の西崗城襲撃戦闘、竜川里劉家洞付近戦闘など数々の戦闘を指揮して敵に打撃を与え、敵の後方を撹乱させた。

中日戦争が長期化するに伴い、朝鮮人民革命軍部隊の活動は新たな段階に入り、撫松――西崗伏兵戦闘と輝南県城進攻戦闘など

重要な意義のある背後撹乱作戦を展開し、敵に引き続き甚大な打撃を与えた。

こうして、全中国を一気に占領しようとした日本帝国主義の妄想はことごとく破綻し、抗日戦に立ち上がった中国人民を大いに励ました。

主席は国内で人民の反日・反戦闘争を強化し、全民抗争を活発に推し進めるための措置を講じた。

主席は1937年9月、『全朝鮮同胞へのアピール』を発表した。

アピールでは、中日戦争と朝鮮革命との相互関係、反日闘争を強化する問題、全民抗争準備の戦略的方途が示された。

主席は、戦略的意義を有する大山脈に朝鮮人民革命軍部隊の活動基地、作戦基地、後方基地であると同時に、全民抗争と反日大衆闘争の指導拠点となり得る秘密根拠地を数多く設けるようにした。

主席は国内の革命運動全般に対する指導をさらに強化し、全民抗争準備の突破口を開くため1937年9月、朝鮮人民革命軍主力部隊の一小部隊を率いて新興（シンフン）と豊山地区に進出し、9月25日、咸鏡南道新興郡佳坪（カピョン）面豊上（プンサン）里の蔘畑（サンバツ）山で朝鮮人民革命軍の政治工作員・地下革命組織責任者会議を開き、興南（フンナム）、咸興、元山（ウォンサン）など軍需工場の集結している東海岸地区をはじめ、国内各地に党および祖国光復会組織と、その他の反日大衆団体を組織し拡大させ、労働組合と農民組合を革命的な大衆組織に拡大、強化して武装部隊を組織し、国内各地で各種形態の反日抗戦を果敢に展開する課題を示した。

蔘畑山会議を契機に赴戦、興南、咸興、元山、端川、新興、豊山をはじめ国内各地に党および祖国光復会組織が拡大、強化され、

半軍事組織である労働者突撃隊と生産遊撃隊が編制され、日本帝国主義の軍需生産を遅延、破綻させ、産業施設を破壊し、軍糧の調達に反対するなど各種形態の反日闘争が強化された。特にそれまでさまざまな弱点と制約をもっていた従来の労組、農組が革命的に改編されて祖国光復会の下部組織になるか、またはその影響下に入るようになり、労組、農組内に党組織が拡大され、労働運動と農民運動は抗日武装闘争と結び付き、革命的な大衆運動に発展するようになった。

主席は中日戦争勃発後の複雑な情勢と革命発展の要請に即して、朝鮮人民革命軍の隊員と人民を政治的、思想的にしっかり武装させるよう指導した。

日本帝国主義が中国関内の広い地域を占領し、人民に対する弾圧をさらに強化するようになると、一部の人々の間で革命勝利への信念をなくし、動揺する傾向が見られるようになった。これは、南湖頭会議を契機に一大高揚期にあった朝鮮革命の前進を阻む障害となった。

主席は1937年11月10日、朝鮮人民革命軍機関紙『曙光』に著作『朝鮮共産主義者の任務』を発表した。

著作で主席は、朝鮮革命の性格と課題を改めて明らかにし、朝鮮革命を自主的に遂行するための朝鮮共産主義者の当面の任務を全面的に提示した。

特に、朝鮮の共産主義者が自らの革命任務を成功裏に遂行するためには自主的立場を堅持しなければならないと強調した。

主席は、自主的立場は自国人民の力を信じ、自らの力によって自国の革命を責任をもってあくまで遂行しようとする共産主義者

の根本的立場であると強調したうえで、自主的立場を堅持してこそ、自国の実情に合う革命路線と方針を打ち立て、それを貫徹していくことができ、いかなる難関や試練においても自国の革命を最後まで遂行できる、と述べた。そして、朝鮮革命の主人は朝鮮人民であり、朝鮮共産主義者であるからこそ、朝鮮の共産主義者は自己の信念にもとづいて革命闘争を展開し、自らの革命勢力を打ち固め、それをよりどころにして朝鮮革命を勝利に導くべきであると強調した。

主席は朝鮮人民革命軍の指揮官と隊員たちを政治的、軍事的に武装させるため、1937年11月下旬から翌年の3月下旬にかけて、濛江県馬塘溝密営で集中的な冬期軍事・政治学習を指導した。

「学習も戦闘だ！」、「革命家にとって学習は第一の義務である」というスローガンを示し、政治学習を基本としながら軍事訓練も行うよう指導した。

主席は、政治学習に第一義的な力を注ぎ、革命において自主性を堅持する問題と革命的信念の問題、自力更生の革命精神に関する問題を正確に認識することに重点を置くようにし、『祖国光復会10大綱領』と『朝鮮共産主義者の任務』などの著作を主な教材とした。

主席は政治学習とともに軍事学習にも大きな力を入れた。軍事講習では遊撃戦法を概括した『遊撃隊動作』と『遊撃隊常識』を完全に消化させることに重点が置かれた。

馬塘溝密営での軍事・政治学習は、朝鮮人民革命軍隊員の政治的・軍事的能力を一段と高め、彼らを不屈の革命家に育てた密林にある「軍事・政治大学」であった。

主席は朝鮮人民革命軍隊員と人民を政治的、思想的に武装させるため『3・1月刊』や『曙光』、『鐘の音』など革命的出版物を広く活用した。そして、朝鮮人民革命軍と革命組織構成員が書き記した各種のスローガンを通じて隊員と人民を革命的に教育した。

主席は抗日武装闘争と全民抗争の準備を拡大、強化するための朝鮮人民革命軍の軍事活動をさらに積極的に展開した。

主席は1938年の春期攻勢を指導した。春期攻勢の場を長白、臨江の鴨緑江沿岸の国境地域に定め、敦化県廟嶺伏兵戦闘、八道溝大陽岔襲撃戦闘、長白県佳在水戦闘、一二道溝戦闘、臨江県六道溝戦闘と双山子戦闘、呉家営戦闘、賈家営戦闘など数多くの戦闘を次々と繰り広げた。

主席は春期攻勢に次いで同年の夏、柳河、通化一帯で丘陵地帯を拠点に平野地帯に集結した敵を誘引、奇襲する機動作戦と、日本帝国主義の大陸侵略戦争を阻止し破綻させる背後打撃戦を猛烈に展開した。

この年の春と夏に主席の指導した軍事活動は日本帝国主義に大きな打撃を加え、各地で活動する部隊と政治工作員、人民の闘争を大いに励ますと同時に、熱河遠征に参加して難関に直面していた中国人抗日連軍部隊を危機から救ううえでも決定的な役割を果たした。

主席は日本帝国主義がでっち上げた「恵山事件」によって破壊された革命組織を速やかに再建、整備するよう指導した。

朝鮮人民革命軍の主力部隊が一時、白頭山地区を離れて撫松、濛江県一帯で活動している間、日本帝国主義は「恵山事件」をでっち上げ、長白地区と恵山一帯で革命勢力に対する大々的な弾圧

旋風を巻き起こし、数多くの指導的中核と革命組織のメンバーを検挙・投獄し、党および祖国光復会組織を破壊した。

主席は1937年11月下旬、朝鮮人民革命軍党委員会の非常会議を開き、革命組織を保護し、党組織と祖国光復会組織の建設をいっそう活発に展開するための対策を講じた。また、翌年の5月には白頭山密営に来て金正淑を国内の大鎮坪（テジンピョン）地区に派遣しながら、朴達をはじめ国内の革命家たちに力と勇気を与え、破壊された革命組織を早急に再建、整備するための具体的な方途と今後の活動方向を伝えるようにした。

こうして、日本帝国主義の野獣じみた弾圧が続く厳しい状況のもとでも、党および祖国光復会の組織は速やかに再建、整備され、拡大されていった。

主席は、抗日革命を引き続き高揚させるため、全国的規模で武装闘争と全民抗争の準備を早急に強化させた。

主席は北部朝鮮一帯での武装闘争を拡大し発展させるために1938年4月、国内に北鮮反日人民遊撃隊を組織する方針を示し、5月に開かれた白頭山密営会議でその準備を積極的に推進する課題を示した。

主席は1938年8月には朝鮮人民革命軍主力部隊の一部のメンバーを率いて新興地区をはじめ北部朝鮮一帯と中部朝鮮の陽徳地区にまで進出し、国内で革命闘争をさらに強化するための新たな対策を講じた。

主席の示した課題を貫徹するため、朝鮮人民革命軍の小部隊、グループ、政治工作員たちは全国各地で政治・軍事活動を活発に展開した。

主席は全民抗争のための中核育成事業も積極的に推し進めた。

1938年5月に国内の間白山一帯に全民抗争準備のための中核育成基地を設けるようにし、9月には間白山密営を訪れて講習所の設置と運営における具体的な課題を示し、全人民的武装蜂起を起こすために必要な軍事・政治知識と能力を備えた中核を数多く育成して全国各地に派遣する活動も推進した。

第7節　反日民族解放闘争を引き続き高揚させるための課題を提示、苦難の行軍を勝利へと指導

1938年の秋、抗日武装闘争の前途に重大な難関が生じた。

日本帝国主義は関東軍主力師団の大半と、「満州国」軍や地方武装警察隊まで動員して、鴨緑江、豆満江沿岸の軍事戦略上の重要地域に配置し、抗日武装部隊に対する「討伐」をいっそう悪辣に強行した。一方、軍事的攻勢だけで目的が達成できなくなると、「治本工作」や「思想工作」、「帰順工作」などを骨子とする「文化討伐」を大々的に繰り広げて革命組織を破壊し、革命家や愛国者を検挙、投獄、虐殺するなどの蛮行を働いた。

こうした状況の中、極左冒険主義的な熱河遠征によって南満州の中国人抗日連軍部隊が甚大な損失を被ったため、朝鮮人民革命軍は白頭山西南部一帯で増強された敵の大兵力とほとんど単独でたたかわざるを得なくなった。

金日成主席は1938年11月25日から10余日間にわたり、濛江県南牌子で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、当面の難

局を打開して革命を引き続き前進させるための主動的な対策を講じた。

主席は演説『当面の難局を打開し、革命を引き続き前進させよう』で、熱河遠征の極左冒険主義的誤謬とその結果を分析、批判し、朝鮮革命を引き続き高揚に導くための課題を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「今日、われわれには当面の情勢に対処して日本帝国主義の大々的な『討伐』攻勢を粉砕し、熱河遠征の後遺症を一刻も早くいやして朝鮮革命を引き続き前進させるべき重大かつ栄誉ある任務が課されています」

主席は朝鮮革命を引き続き高揚に導くためには朝鮮の共産主義者が朝鮮革命の主人として自主的立場を堅持し、情勢を正しく判断し、朝鮮人民革命軍の部隊が速やかに白頭山を中心とする国境一帯に進出し、広い地域で軍事・政治活動をより活発に展開しなければならないと述べた。

そして、革命を引き続き高揚に導くための実際的な対策として、人民革命軍の部隊を方面軍と独立連隊に編制し、その活動区域を分担させた。これにもとづき第一方面軍は通化、寛甸、集安など南満州の山岳地帯で、第2方面軍は主席の統率下で国内と長白、臨江など鴨緑江沿岸の国境一帯で、第3方面軍は額穆、寧安など北満州と豆満江沿岸の北部国境一帯で活動することになった。

主席は会議後、南牌子を発つ前に、人間の良心と信義まで捨てて民族反逆者となった李鐘洛（リ ジョンラク）を革命の名で処刑した。革命の裏切り者の末路は、思想は信念化されるべきであって、純然たる知識だけのものであっては役に立たず、信念のない者は良心も道徳

的信義も、人間としての体面も保つこともできないのはむろん、党と領袖、祖国と革命、同志と人民のために真の貢献をすることはできないとの教訓を示した。

主席は1938年12月初めに第2方面軍を率いて鴨緑江沿岸の国境地域への歴史的な苦難の行軍を開始した。

敵は「東辺道討伐作戦」の名のもと、「大掃討作戦」の主要目標を朝鮮人民革命軍司令部に定め、膨大な「討伐」軍を人民革命軍の主力部隊に集中させ、航空隊まで動員して2重3重と包囲し、猛烈な攻撃と執拗な追撃を併用した「猛攻長追戦術」の要である「ダニ戦術」に出て必死に襲いかかってきた。そのため朝鮮人民革命軍は、敵の執拗な追撃と包囲、零下40度前後の酷寒と寒風の中、休息することも、食事や睡眠を取ることもできず、行軍を続けながら毎日のように敵と戦わざるを得なかった。

主席は苦難の行軍の初期、大部隊による集中攻撃と大せん滅戦で敵を守勢に追い込んだ。

主席は敵の執拗な追撃に対処してジグザグ行軍をする戦法を用い、曲がり角ごとに機関銃を装備した戦闘員を待ち伏せさせ、敵が射撃圏内に入ると猛射撃を浴びせて撃滅した。

主席は引き続き主導権を握って敵との戦闘を繰り広げながら、険しい竜崗山脈の幾多の尾根を越えた後、濛江県の四道岔、五道岔の敵を掃討し、臨江県腰溝集団部落襲撃戦闘と螞蟻河付近戦闘、王家店襲撃戦闘、煙筒拉子付近伏兵戦闘などで敵に連続打撃を加えた。

主席の指揮のもと、朝鮮人民革命軍主力部隊は1カ月近く雪中行軍を続けた後の1939年1月初め、長白県七道溝の奥地に至った。

主席は、敵が大兵力を繰り出して包囲陣を張り、最後の対決を企てると、これに対処するため七道溝の奥地で朝鮮人民革命軍第2方面軍幹部会議を招集し、大部隊による活動から分散活動に移行する方針を示し、部隊を3方向に進出させた。

主席の示した方向に従って、警護中隊と機関銃小隊で構成された司令部直属部隊は長白県佳在水方面へ、第7連隊は長白県上崗溝一帯へ、第8連隊と独立大隊は撫松県東崗一帯へと進出した。裁縫隊員と負傷者たちは長白県青峰密営に入った。

方面軍が分散活動に移ったときから、苦難の行軍は第2段階に入った。朝鮮人民革命軍の主力部隊は速やかに分散活動に移り、敵の集中攻撃をかわして混乱に陥れた。

主席は司令部直属部隊を率いて長白県青峰を経て紅土山子と富厚水の台地に至ると、行軍コースを変えて横に抜け、前後から現れた敵に同士討ちをさせて数多くの敵を掃滅した。そして1939年2月中旬、佳在水付近の丘陵に至ると宿営しながら軍事・政治学習を行い、その後の活動方向と戦術的問題について討議した。

主席は長白奥地の敵の大部隊が丘陵地帯に押し寄せて来る状況に直面すると、白昼に部隊を率いて大道路に沿って行軍を続け、前後から襲いかかる敵を攻撃して撃退した。

主席はそれ以降、敵をかわす戦術から先手を打って敵を討つ攻撃戦術に転じ、一三道湾集団部落襲撃戦闘を行って1個中隊の敵を完全に掃討した。

主席は、敵に引き続き甚大な打撃を与え、分散して活動している部隊に司令部の位置を知らせるため、長白県一三道溝戦闘を行った。

主席は再び集結した主力部隊を率いて間三峰付近と一二道溝一帯で軍事・政治活動を行った後、1939年3月、長白県北大頂子に至った。

こうして、100余日にわたる朝鮮人民革命軍主力部隊の苦難の行軍は勝利のうちに終結した。

主席の指揮のもとに行われた苦難の行軍は、単なる部隊の移動行軍ではなく、当面の難局を打開し、革命を引き続き前進させるための軍事行動であり、まさに抗日武装闘争の縮図でもあった。

主席は熾烈な戦闘に明け暮れた厳しい行軍の日々、陣頭に立って部隊を指揮しながら、力を出してこの苦境を乗り越えてこそ祖国に進出することができると隊員たちを鼓舞、激励し、1合のはったい粉まで隊員たちと分け合って飢えをしのいだ。

朝鮮人民革命軍指揮官と隊員たちは主席のまわりに一心団結して万難を克服し、苦難の行軍で勝利を収めることができた。

苦難の行軍の勝利は、領袖決死擁護の精神と百折不撓の革命精神、自力更生、刻苦奮闘の革命精神、革命的楽観主義精神の偉大な勝利であった。

朝鮮人民革命軍指揮官と隊員たちは主席を政治的、思想的に擁護し、主席の身の安全のために身を投じて肉弾となり、盾となった。

抗日の女性英雄金正淑は、長白県青峰密営で主席の革命思想と路線を歪曲し、司令部に危害を加えようと悪辣に策動した革命の背信者と容赦なくたたかい、司令部をつぶそうとする敵の陰謀をそのつど摘発、粉砕した。また呉仲洽（オ ジュンフプ）第7連隊と警護中隊をはじめ朝鮮人民革命軍のすべての指揮官と隊員は、あらゆる犠牲を顧

みることなく革命の司令部を立派に防衛した。呉仲洽第7連隊は司令部を装い、敵の相次ぐ攻撃を撃破しながら朝鮮人民革命軍司令部を堅固に防衛してきた防弾壁であり、難攻不落の砦であった。いついかなる状況にあっても、すべての兵士、指揮官たちがこぞって司令部の安全を思うのが、第7連隊の固有な特性であり、司令官の命令、指示を、身を投げ出し肉弾となって最後まで強靭な意志をもって貫徹していくのが第7連隊の生活と闘争の戦闘的な気風であった。

朝鮮人民革命軍指揮官と隊員たちは、主席がいれば必ず勝つという革命的信念を持ち、突き当たる難関を不屈の意志をもって突き抜け、困難を極める苦境に立たされても常に悲観せず勝利する明日を思い描き、万難を排して突き進んだ。

苦難の行軍を勝利をもって終結することができたのは、たたかいが厳しくなり、困難が重なれば重なるほど軍民が一体となってあらゆる試練に打ち勝ったからである。この時期、人民は危険を冒して朝鮮人民革命軍の戦闘行動を極力支援し、物心両面から支持、声援した。

苦難の行軍の勝利は、日本帝国主義の狂気じみた反動攻勢と極左冒険主義者の無謀な策動による悪影響を排し、朝鮮革命を引き続き前進させる新たな局面を開いた。

実に苦難の行軍の歴史は、比類ない試練に打ち勝ち、いかなる逆境のもとでも勝利の確信をもってチュチェ革命偉業の勝利的前進のためにたたかう朝鮮人民を力強く励ます偉大な力の源となった。

第8節　茂山地区進攻作戦、白頭山東北部一帯を革命の戦略的基地として構築

金日成主席は、苦難の行軍を勝利のうちに終えた後、再び大部隊による国内進攻作戦を敢行した。

朝鮮人民革命軍の祖国への再進軍は、人民革命軍の威力を誇示し、反日民族解放闘争を引き続き高揚させるため切実に求められたものであった。

朝鮮人民革命軍の大部隊が国内へ進出して敵に打撃を与えれば、人民革命軍を「完全掃滅」したという日本帝国主義のデマ宣伝を打ち消して朝鮮人民革命軍の存在と威力を内外に示し、「恵山事件」によって一時、萎縮していた国内人民に自信と勇気を与え、破壊された革命組織を再建、拡大し、国内における党組織の建設と統一戦線運動に新たな活力を与えることができるのであった。

主席は新たな情勢と革命発展の要請を分析したうえで、1939年4月初め、長白県北大頂子で朝鮮人民革命軍幹部会議を招集した。

主席は『積極的な反撃戦によって日本帝国主義侵略者に連続打撃を加え、祖国に進軍しよう』と題する演説の中で、苦難の行軍の勝利を総括し、朝鮮人民革命軍が積極的な反撃に転じ、日帝侵略者に連続的に打撃を加え、祖国に再び進軍する方針を示した。

差し当たって鴨緑江沿岸と国境一帯で積極的な春期攻勢を展開して敵の要衝を打撃し、国内進攻作戦の準備を整えた後、朝鮮人民革命軍の主力部隊が茂山地区へ進攻することにした。

茂山地区は普天堡戦闘後、敵が守備隊兵力を数倍も増強してい

る地域であった。大部隊がこうした地域に進出して敵に打撃を与えるならば、北部朝鮮のどの地区に進出するよりも国内の人民に幾倍もの大きな影響を与えることができた。

主席は、茂山地区進攻作戦を成功裏に終えた後は白頭山東北部で大部隊による新たな作戦を展開するという活動方向を示した。

主席は北大頂子会議後、茂山地区進攻作戦をひかえ、朝鮮人民革命軍の主力部隊を率いて積極的な春期反撃戦を展開した。

初の春期反撃戦として、1939年4月、敵の主要「討伐」拠点である長白県邱家店襲撃戦闘を行った後、一五道溝襲撃戦闘、半截溝襲撃戦闘など多くの戦闘を展開して敵に連続的に打撃を加え、祖国進軍に必要な軍需物資を整え、国境一帯の人民に勝利の信念を抱かせた。

4月30日には長白県小徳水馬登廠で全世界勤労者の祝日であるメーデーを盛大に記念し、祖国進軍の途についた隊員の士気を盛り立てた。次いで5月初めに間白山密営に赴き、敵情を考慮して国内進攻作戦の時期と路程を最終的に確定するなど、大部隊による国内進攻作戦計画を完成した。次いで黒瞎子溝密営で朝鮮人民革命軍主力部隊の第7連隊、第8連隊と独立大隊、警護中隊の700余名からなる祖国進出隊伍を率いて1939年5月18日、鴨緑江を渡り祖国の地に入った。

この日、金正淑をはじめ朝鮮人民革命軍の隊員たちは青峰（チョンボン）で宿営準備を終えた後、立木の樹皮をはがし、「朝鮮民族の自由と独立、解放のために最後までたたかおう」、「朝鮮の青年よ！速やかにはせ参じて抗日戦に力強く参加せよ！」などの革命的スローガンを記した。

主席は青峰と乾滄(コンチャン)で宿営した後、5月20日枕(ベゲ)峰に至り、朝鮮人民革命軍指揮官会議を開いた。そして、敵が胞胎(ポテ)山一帯を中心とする山岳地帯に兵力を集中し、大道には注意を向けず夜間の警備を強化している弱点を利用し、一行千里の戦術で大胆に「甲茂警備道路」を白昼行軍して速やかに茂山地区に進出する戦術的方針を示した。

5月21日、枕峰を出発した部隊は行軍の途中、三池淵(サムジョン)で休息した後、「甲茂警備道路」を白昼行軍して茂浦(ムポ)に着いた。

茂浦宿営地で開かれた指揮官会議で、主席はそれまでの行軍を総括し、部隊が大紅丹(テホンダン)地区に進撃する課題を示した。

5月22日、主席は国師堂(クッサダン)付近で第7連隊を新開拓(シンゲチョク)方面に派遣し、警護中隊と第8連隊を率いて新四洞(シンサドン)に進出し、その地の人民に反日闘争に立ち上がるよう呼びかけるとともに、すべての隊員が木材所労働者の間で政治活動を行うようにした。

5月23日、主席は大紅丹原で誘引伏兵戦術で追撃してくる敵を全滅させた。

茂山地区進攻作戦を終えた後、主席は闘争の舞台を白頭山東北部一帯へと拡大し、朝鮮革命の戦略的基地に築く活動を進めた。

1939年5月下旬、主席は安図県大溝で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、『白頭山東北部を拠点にして軍事・政治活動を強力に展開するために』と題する演説を行い、白頭山東北部で軍事・政治活動を強め、この一帯に今一つの強力な革命の砦を築く方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれが白頭山東北部を拠点にして軍事・政治活動を展開

する主要な目的は、白頭山西南部一帯で収めた成果と経験を踏まえて、白頭山東北部一帯に今一つの強力な革命の砦を築き、豆満江沿岸の北部朝鮮一帯はもとより、全国的な範囲で祖国解放戦線により多くの大衆を結集させて革命闘争の火の手を激しく煽ることにあります」

遊撃区の解散後、新しく創設された革命根拠地は主として西間島一帯と白頭山を中心とする国内の各地域に設けられていた。このような状況にあって、白頭山東北部と豆満江沿岸の北部朝鮮一帯に新たな革命根拠地を設ければ朝鮮人民革命軍の活動基地と作戦基地、後方基地を全国的規模に拡大し、それを拠点に朝鮮革命全般をさらに力強く推進することができた。

会議後、主席は白頭山東北部一帯に新たな根拠地を設けるための軍事・政治活動を力強く展開した。

主席は和竜県、安図県をはじめ東満州一帯の各地帯を革命の砦にするため、主力部隊を率いて東京坪戦闘、輝楓洞戦闘、烏口江戦闘、青頭村戦闘、青山里付近の木材所襲撃戦闘など多くの戦闘を連続的に行って敵を軍事的に制圧し、朝鮮人民革命軍の活動に有利な条件を整えた。

主席は人民の間で政治活動を繰り広げ、大衆を革命化していった。住民の構成がよく朝鮮に近い和竜県玉石洞で軍民サッカーをはじめぶらんこや相撲、軍民合同娯楽会、演芸など多彩な活動を行った。その後、柳洞、輝楓洞、三道溝、明月溝などの広大な地域の革命化にも力を入れた。

主席は主力部隊に白頭山東北部の有利な森林地帯に秘密根拠地を設置させた。こうして、烏口江流域の森林地帯に司令部の密営

が設けられ、各地域にも密営が設置され、その周辺に2、3の秘密連絡所が設けられた。

主席は豆満江沿岸の北部朝鮮一帯を朝鮮革命の強固な基地にするための活動を進めた。

朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作グループを国内に派遣する一方、北部国境一帯に進出して秘密根拠地を創設する活動と党および反日大衆団体を組織する活動を指導した。

主席は1939年6月18日、茂山郡三長面三河洞国師峰に進出し、地下革命組織責任者および政治工作員会議を開き、『国内の革命組織に課されている任務について』と題する演説を行った。演説で、変化する新たな情勢の要請に即して朝鮮革命を引き続き高揚させるため、茂山、延社地区をはじめ豆満江沿岸の北部朝鮮一帯を革命闘争の基地として強固にする課題を示した。

会議直後の6月下旬、主席は主力部隊を率いて再び茂山郡三長地区に進出し、国師峰会議の方針を貫徹する対策を講じた。金正淑は三長地区の実情を詳細に調べて主席に報告し、直接延社地区に行って延社地区党委員会と祖国光復会延社地区委員会を組織した。

主席は1939年8月、茂山、延社地区に進出して党および祖国光復会組織を全国的規模に拡大する活動を展開する具体的な課題を示した。

こうして茂山、延社地区はもとより、北部および中部、南部朝鮮一帯の産業地帯と主要都市、農漁村に党および祖国光復会の組織が拡大され、茂山、延社地区と慶源、漁郎地区など北部朝鮮の各地に強固な秘密根拠地が構築された。

このように白頭山東北部一帯に朝鮮革命の強固な戦略的基地が

築かれ、そこを拠点にして日本帝国主義との最後の決戦を成功裏に展開する準備が整えられるようになった。

第9節　大部隊による旋回作戦と積極的な分散活動

朝鮮人民革命軍の積極的な軍事・政治活動に狼狽した日本帝国主義は、1939年秋から関東軍司令官直属下の「討伐司令部」を吉林に設置し、「東南部治安粛正特別工作」の名目で20余万の大兵力を動員し、密営を封鎖して朝鮮人民革命軍を掃討し、革命組織を全面的に破壊するための大「討伐」作戦を強行した。こうして朝鮮人民革命軍は再び厳しい試練に直面することになった。

金日成主席は敵のこの「討伐」作戦を破綻させるため、白頭山東北部で大部隊旋回作戦を展開した。

主席は1939年10月上旬、安図県両江口で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、『白頭山東北部の広い地域で大部隊旋回作戦を展開するために』と題する演説を行い、日帝侵略者の新たな「討伐」作戦を粉砕するため、白頭山東北部の広大な地域で大部隊旋回作戦を展開する方針を示した。

大部隊旋回作戦は、密営を中心に展開していた従来の軍事・政治活動とは異なり、大部隊で所定の秘密コースに沿って絶えず旋回しながら一行千里の戦術、陽動戦術など多様な戦法を用いて敵を掃滅する流動作戦であった。

主席の作戦構想は旋回期間を約1年とし、初の旋回作戦は部隊の活動に有利な敦化、額穆の西方に定め、大部隊で攻撃して敵の

注意がそこに向けられると、濛江、撫松、長白方面に急旋回してその地の敵に痛撃を与え、敵が革命軍の後を追って押し寄せてくるとき、部隊は再び間島省の南端を経てもとの場所に戻るというものであった。

主席は神妙な軍事的知略と絶妙な戦法で大部隊旋回作戦を勝利に導いた。

まず、第7連隊と第8連隊、警護中隊を動員して、部隊が通過する要所ごとにあらかじめ食糧を貯蔵させた。そして、旋回作戦に先立ち、11月、安図県花拉子密営で約20日間、軍事・政治訓練を行い、隊員を政治的・思想的に、軍事技術的に鍛え上げた。

主席は旋回作戦の第1段階として敦化遠征を断行した。

コースは花拉子から敦化に抜け、濛江、撫松方面へ進出するものであった。

主席は大部隊の行軍路を惑わすため、部隊の移動方向を急変させる戦術で敵を和竜、安図一帯の谷間に誘い込んだ後、数十里を強行軍して敦化の奥地に進出した。

主席は敦化遠征の過程で、4道荒溝付近の宿営地で反日青年同盟の会議を招集し、戦闘を前にすべての指揮官、隊員を思想的に奮起させ、1939年12月17日と24日に六棵松戦闘と夾信子戦闘を断行して敵に痛撃を与え、大部隊旋回作戦の第1段階の目的を達成した。この戦闘を機に200余名の労働者が朝鮮人民革命軍に入隊した。

六棵松の木材所襲撃戦闘で第7連隊長の呉仲洽が戦死した。

愛する連隊長を失った主席は胸の痛みに耐えかね涙ながらに追悼の辞を述べた。

主席は敵を敦化県の奥地に誘い入れた後、ひそかに南方に抜けて松花江流域に進出し、撫松県白石灘密営で40余日間の軍事・政治学習を行った。その後、大部隊旋回作戦第2段階に移り、軍事・政治活動を積極的に展開した。

第2段階のコースは、白石灘から白頭山東北部の二道白河、三道白河、四道白河を経て国内に進出し、また和竜県を経て安図県に戻るというものであった。

主席は1940年2月、部隊を率いて白石灘を出発し、あらかじめ定めておいた秘密コースに沿って再び豆満江沿岸の国境一帯に進出した後、新たな情勢に即して国内進出を後に回し、3月11日、敵の「討伐」拠点の一つである大馬鹿溝木材所襲撃戦闘を断行した。

敵は、北にいるとばかり思っていた朝鮮人民革命軍主力部隊が突然、和竜と安図県境の国境近くに現れ、大馬鹿溝を襲撃すると、人民革命軍司令部の「討伐」に総力を集中した。

3月25日、主席は紅旗河谷で意表をつく誘引・伏兵戦術によって「常勝部隊」、「討伐の王者」と自称し革命軍「討伐」の先頭に立っていた「前田討伐隊」を全滅させた。

紅旗河戦闘を契機に「東南部治安粛正特別工作」の名のもとに強行された敵の第1段階の「大討伐」作戦は撃破され、朝鮮人民革命軍の大部隊旋回作戦は勝利のうちに終わった。

主席は大部隊旋回作戦後、積極的な分散活動によって日本帝国主義の「東南部治安粛正特別工作」を最終的に破綻させるための闘争を指導した。

朝鮮人民革命軍に対する「冬季討伐」作戦で惨敗を重ねた日本

帝国主義は、体面を保つため「東南部治安粛正特別工作」期間を引き延ばし、人民革命軍に対する前例のない大規模な「討伐」攻勢を再び強行した。

主席は1940年4月初め、安図県花拉子で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開いて『当面の情勢の要請に即して分散活動を果敢に展開しよう』と題する演説を行い、朝鮮人民革命軍部隊が積極的な分散活動に移行する新たな方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「…日本帝国主義の『東南部治安粛正特別工作』を最終的に粉砕し、朝鮮革命を引き続き粘り強く前進させるために、朝鮮人民革命軍は分散活動に移行する必要があります」

主席は、分散活動を成功裏に展開するため、分散活動の要請に即して連隊別に地域を担当し、中隊を単位にして活動できるように隊伍を編制し、至るところで連続打撃、反復打撃、同時打撃など多様な遊撃戦術と戦法を縦横に駆使するとともに、人民との血縁的な連係を強めるよう強調した。

主席は花拉子会議後、4月中旬から朝鮮人民革命軍部隊の分散活動を指導した。

敵が「討伐」兵力を山間地帯に集中している状況下にあって、部隊を率いて花拉子密営からひそかに抜け出し、丘陵地帯に進出して1940年4月中旬、同時打撃戦術によって小沙河流域の東南岔と洋草溝集団部落の敵を奇襲、掃滅した。さらに、追いすがる敵を樹街峰の谷間で掃滅した後、敵を引き離し、素早く車廠子方面に姿をくらました。

主席は敵の兵力を分散させるため、安図県城の東部にある南二

道溝、北二道溝、新成屯に対する同時攻撃を行った後、第8連隊を豆満江沿岸に、第7連隊と警護中隊を安図県北部に派遣して連日、敵を攻撃させた。

主席は武装闘争の火の手を国内に拡大するため、1940年5月中旬、警護中隊を率いて茂山地区に進出し、小部隊とグループ活動の要求に即して、この一帯の秘密根拠地を完璧に構築する活動と日本帝国主義の「東南部治安粛正特別工作」を撃破するための人民革命軍部隊の軍事活動を指導した。そして朝鮮人民革命軍小部隊、グループおよび地下革命組織責任者の会議を招集し、豆満江上流の北部国境一帯を革命の基地として強固にするうえで提起される課題を明示した。その後、国内進出の成果を強固にするため、豆満江沿岸と安図県の中部、北部で打撃戦をいっそう力強く展開するようにした。

6月に入り、主席は東京坪と上大洞部落に対する反復打撃戦を行い、その後、数個の部落に対する同時打撃戦で大勢の敵を掃滅した。そして追撃してくる敵を掃滅し、次いで安図県五道揚岔南部にある古洞河木材所を襲撃して多くの供給物資をろ獲した。

主席は、敵が部隊の活動方向を探知して襲いかかる状況に対処するため、当面の難局を敵に対する連続的な攻撃と多様な戦術を駆使して打開することにし、部隊を数個の小部隊に編制し、敵の大攻撃に対抗する戦術で、1940年夏にも至るところで日に何回もの小部隊による全面的な消耗戦を展開した。

主席は同年6月末、朝鮮人民革命軍主力部隊の一隊を率いて小哈爾巴嶺一帯へ進出する途中、大沙河の奥地で悪質な「新選隊」と遭遇したが、巧みな戦術で敵を全滅させた。この戦闘で主席の

身近に危険が迫った瞬間、金正淑は身を持って主席をかばい、敵兵を矢つぎばやに撃ち倒した。

朝鮮人民革命軍は、大部隊旋回作戦に次ぐ4カ月間の小部隊による分散活動を通して日本帝国主義の「東南部治安粛正特別工作」に決定的な打撃を与え、勝利を収めた。

主席によって1940年春と夏にかけて展開された朝鮮人民革命軍の小部隊による積極的な分散活動は、抗日武装闘争の新たな段階への移行における一つの重要な試行段階となった。

第4章　祖国解放の大事を主動的に迎える たたかい、祖国解放の偉業を達成
（1940年8月～1945年8月）

第1節　小哈爾巴嶺会議、祖国解放の大事に備える 戦略的方針を提示

1940年代に入り、朝鮮の革命家に、祖国解放の大事を主動的に迎える万全の準備を整えるべき緊切な課題が提起された。

1939年9月、ファッショ・ドイツのポーランド侵略に端を発した第2次世界大戦は、1940年の春からヨーロッパ全域へと急速に拡大していった。日本は「大東亜共栄圏」の野望を遂げるため、中国大陸での侵略戦争が終結していない中、東南アジア地域に戦火を拡大する一方、「銃後の安全」を狙って盲動した。

この時期に至って日本帝国主義との最後の決戦を展開できる、朝鮮人民の主体的革命勢力がしっかりと準備された。

金日成（キムイルソン）主席の先軍指導のもとに朝鮮人民革命軍は政治的・思想的、軍事技術的に急速に成長し、武装闘争ばかりでなく全般的朝鮮革命の遂行において確固たる指導的地位を占め、中核的な役割を果たした。日帝侵略者に対する抗日革命闘争の時期、朝鮮人民革命軍は軍隊であると同時に党であり、政権でもあった。朝鮮人民革命軍の武力の保証によって党創立の組織的・思想的準備が整

い、祖国光復会組織と反日民族統一戦線運動が拡大、発展し、全人民抗争の準備も周到に進められた。これは日本帝国主義との最後の決戦を展開できる強固な土台となった。

主席は1940年8月10日から11日にかけて、敦化県小哈爾巴嶺で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、『祖国解放の大事を首尾よく迎えるために』と題する報告を行った。

主席は報告で、過去10年間の抗日武装闘争の過程で収めた成果と経験を総括し、急変する情勢に対処して祖国解放の大事を主動的に迎える準備を着実に整えるという新たな戦略的路線を示した。

祖国解放の大事を主動的に迎えるため、日本帝国主義を滅亡させるための最後の決戦の準備に万全を期し、解放された祖国に革命的党と人民政権、人民の軍隊を創建し、革命を引き続き力強く前進させる準備を整えなければならないと指摘した。

主席は、祖国解放の大事を主動的に迎えるための戦略的課題を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「祖国解放の大事を主動的に迎える準備を整えるうえで最も重要なのは、朝鮮革命の中核勢力である朝鮮人民革命軍の力を蓄積しながら、彼らを有能な政治・軍事幹部に育てることです」

主席はこの戦略的課題を成功裏に実行するため、朝鮮人民革命軍が大部隊の作戦から小部隊の作戦に転じる新たな戦略的方針を提示した。

日本帝国主義の「大討伐」攻勢がかつてなく強化されている状況にあって、大部隊作戦を強行すれば、朝鮮人民革命軍の損失は避けることができず、反日民族解放闘争に重大な支障をきたす恐

れがあった。必死にあがく敵と正面衝突して革命勢力を弱めるのは、自らの力を最大限に保持しながら多くの敵を掃滅するという遊撃戦の基本原則にそぐわないものであった。また、日本帝国主義が満州一帯での抗日遊撃部隊の活動を対ソ侵略の口実にしようとしている状況のもとで、小部隊の作戦に移行するのは社会主義国家であるソ連を擁護することでもあった。

主席は新しい戦略的方針を貫徹するため、朝鮮人民革命軍が広範な反日大衆を結束する大衆政治活動を力強く繰り広げ、朝鮮と満州の広い地域で小部隊による軍事・政治活動を巧みに展開し、すべての指揮官と兵士を政治的、軍事的によりしっかり準備させ、世界のすべての革命勢力との連帯を強化するよう強調した。

小哈爾巴嶺会議を契機に、抗日武装闘争は新たな戦略的段階を迎えることになった。

第2節　朝鮮人民革命軍の小部隊活動

金日成主席は小哈爾巴嶺会議後、朝鮮人民革命軍の各部隊を大部隊活動から小部隊活動に移行させた。

その準備の一環として、まず朝鮮人民革命軍部隊の小部隊への編制に取りかかった。

主席は1940年8月中旬、小哈爾巴嶺で朝鮮人民革命軍の党政治幹部会議を招集し、変化した闘争戦略に即して人民革命軍部隊を小部隊とグループ、そして軍事・政治訓練を行う部隊などに編制し、それに合わせて各部隊の党組織と政治機関を改編する方途を

明らかにした。

そして、政治幹部と軍事幹部、古参の隊員と新入隊員を適切に組み合わせる原則で小部隊は普通10名から数十名、グループは数名で編制するとともに、活動区域を割り当てた。

主席は小部隊と各グループに相応の任務を示しながら、政治活動、戦闘、偵察などをそれぞれ遂行する小部隊とグループに分け、状況によっては偵察グループが政治活動を行ったり、戦闘を基本とするグループが偵察と政治活動を同時に受け持つようにした。そして小部隊とグループに対する統一的な指揮系統と連絡体系を確立し、装備も活動地域の特性と任務に応じて軽くし、小部隊とグループ内に党細胞と党グループを組織し、その役割を高めるようにした。

朝鮮人民革命軍の各部隊では、短期間に小部隊の編制が成功裏に行われた。こうして朝鮮人民革命軍は、連隊管下の中隊、小隊、分隊をなくし、適当な数の小部隊が組織されることになった。

主席はまた、小部隊とグループが本拠とする臨時秘密根拠地の設置に大きな力を注いだ。

主席は同年9月上旬、間白山密営での朝鮮人民革命軍の小部隊およびグループの責任者会議をはじめとする各会議で、抗日武装闘争発展の新しい戦略的段階の要請に即して、新たな形態の遊撃根拠地として臨時秘密根拠地を設置する方針を示した。

主席はすでに1930年代後半に白頭（ペクトゥ）山地区をはじめ広い地域に設置した秘密根拠地を引き続き利用しながら、その周辺に小部隊活動の特性に合わせて流動的で小規模な臨時秘密根拠地を数多く新設するようにした。そしてこうした根拠地を基地または活動拠点

の形で設けるようにした。

こうして慶興（キョンフン）、雄基（ウンギ）、茂山（ムサン）、羅津（ラジン）など北部朝鮮一帯をはじめ全国各地の戦略的要衝と、延吉、和竜、安図、汪清をはじめ満州の広い地域に多くの臨時秘密根拠地が設けられた。臨時秘密根拠地には小部隊が利用する密営および通信連絡、秘密会合、補給物資保管の場所などが設けられた。

主席はこうした準備にもとづいて、小部隊とグループの軍事・政治活動を指導した。

日本帝国主義は1940年の秋から「秋季および冬季討伐」作戦を展開し、朝鮮人民革命軍司令部に対する「討伐」に全力を集中した。

主席は小部隊の活動に移行した初期から、神出鬼没の遊撃戦術で敵を守勢に追い込み、小部隊活動の模範を示した。

1940年8月、安図県黄花甸子付近の沼地で望遠戦術を使って敵を掃滅し、次いで延吉県発財屯付近での戦闘、同年9月と10月の安図県五道揚岔戦闘と黄溝嶺戦闘などによって敵に大きな打撃を与えた。

主席は敵の「討伐」攻勢がさらに強化され、食糧難まで重なった困難な状況に対処して、1940年10月中旬、隊員を鼓舞激励するため和竜県孟山村で司令部直属の小部隊およびグループメンバーの会議を招集し、現状は厳しいが最後の勝利はわれわれのものである、信念と楽観をもって革命の道を最後まで歩んでいこう、と強調した。

主席は小部隊活動全般を指導する一方、各地で活動する小部隊に食糧と衣料品、医薬品を送るようにした。

これに励まされた小部隊とグループは国内はもとより、汪清と琿春、東寧、寧安、穆棱をはじめ満州の広い地域で積極的な流動作戦を繰り広げて、日帝侵略者に連続的に強い打撃を加えた。

主席は1941年春から小部隊の活動をより多様かつ幅広く展開した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれが極東に新たな臨時基地を設け、国内と満州一帯を出入りしながら小部隊の活動を活発に展開するようになったのは、抗日武装闘争史上一つの転換とも言えることでした」

主席は極東に新たな訓練基地を設け、満州と国内に多くの小部隊とグループを派遣する一方、1941年4月上旬、小部隊を率いて満州と国内に進出し、小部隊とグループの活動を指導した。

汪清県と敦化県を経て安図県寒葱溝に至り、一小部隊を樺甸、敦化地区に派遣したのをはじめ、長白と車廠子、国内の白頭山地区など各地域に政治工作グループを派遣して地下組織網を拡大するようにした。その後、安図と撫松の広い地域で既存の組織を拡大する活動を指導した。

主席はソ日中立条約が締結された新たな情勢に対処するため、小部隊、グループと革命組織のメンバーが主体的立場を堅持するよう導いた。

1941年4月、ソ日中立条約締結のため、思想的準備が足りず事大主義に毒されていた一部の人の間で思想的動揺が起きた。

主席は1941年5月、「われわれの力で朝鮮革命を完遂しよう！」という革命的スローガンを提示し、同年6月に間白山密営で開かれた朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作グループ、革命組

織責任者の会議で、情勢がどのように変わろうと主体的立場を堅持し、自力で朝鮮革命を完遂するための思想教育を強力に展開するよう強調した。そして1941年7月20日、穏城郡豊利里タクサンゴルで行われた政治工作員および革命組織責任者の会議で、ファシズム・ドイツのソ連侵攻によって急変した内外の情勢を分析し、自らの力で祖国解放の偉業を達成するための課題を示した。次いで7月28日に汪清県夾皮溝で開かれた朝鮮人民革命軍の小部隊責任者会議での演説『必勝の信念をもって祖国解放の偉業を成し遂げよう』で、革命勝利の確たる信念をもって到来する革命的大事を主動的に迎える準備をしっかり整えるよう強調した。

主席はその後、急変する情勢の要請に即して小部隊の軍事・政治活動をいっそう精力的に指導した。1941年8月初め、朝鮮人民革命軍の一小部隊を率いて汪清――羅子溝間の道路工事場を襲撃して敵に甚大な混乱と恐怖を与え、広範な人民大衆に祖国解放の信念を植えつけた。そして1941年9月中旬、それまでの小部隊活動の成果を強固にするため、再び小部隊を率いて極東基地から満州と国内に進出し、豆満江沿岸と国内の各地域で活動する小部隊、グループの活動を現地で指導しながら彼らに必勝の信念を抱かせた。

また、同年10月に慶源郡新乾里煙峰で朝鮮人民革命軍の小部隊、グループ、革命組織責任者会議を招集し、大衆政治活動を積極的に繰り広げると同時に、さまざまな反日・反戦闘争を展開し、敵情偵察を強化するよう強調した。

主席の教えと実践的模範に鼓舞された小部隊とグループは、満州の広い地域と国内に深く入って小部隊活動を活発に展開した。

1942年の夏、国際連合軍の編制を前後した時期、主席は小部隊活動をいっそう活発に繰り広げた。

主席は対日最終作戦を見通して、1942年8月初に開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議で、祖国解放をめざす対日最終作戦の準備を進めるうえで提起される課題を示し、小部隊とグループ活動を拡大するよう強調した。また、対日最終作戦遂行のための軍事偵察と全民抗争の準備に重点を置き、小部隊活動でグループの活動を基本としながら、比較的大きな小部隊活動を組み合わせる原則を堅持するようにした。この原則に従って軍事作戦でもグループによる活動に重点を置き、小部隊による襲撃戦と要撃戦をうまく結合させた。

この時期の小部隊作戦は、朝鮮人民革命軍主力部隊のメンバーで組織された小部隊活動を基本とし、これに国際連合軍の別働隊に属して活動した朝鮮人民革命軍隊員の軍事偵察工作を結合する形で展開された。

朝鮮人民革命軍の小部隊とグループは国境一帯に築かれた日帝侵略軍の要塞区域と、雄基、羅津、清津（チョンジン）、羅南（ラナム）、興南（フンナム）、元山（ウォンサン）、平壌（ピョンヤン）などに進出して敵の要塞と要衝の軍事施設と兵力およびその移動状況、港湾施設と沿海の水深などを探知する軍事偵察と、広範な人民を全民抗争に奮起させる活動、敵軍瓦解工作を力強く繰り広げた。

小部隊の活動により、朝鮮人民革命軍を掃滅しようとした敵の企図は破綻し、人民革命軍の力が保存、蓄積され、祖国解放の大事を迎える準備が着々と進められるようになった。

祖国解放の大事が迫っていた激動の時期である1942年2月16日、

白頭山密営で金正日（キムジョンイル）総書記が誕生した。

抗日革命闘士たちは、抗日大戦の炎の中で白頭山の息子として誕生した金正日を、金日成主席が切り開いたチュチェの革命偉業、先軍革命偉業を代を継いで勝利に導くことを願って白頭光明星と称えた。

国内に進出して小部隊活動を指導していた主席は、1942年6月に白頭山密営に赴き、息子を懐に抱いてその将来を心より祝福した。そして金正淑（キムジョンスク）に、息子を立派に育てて革命の代を継がせよう、白頭山で高く掲げた革命の赤旗を代々掲げていくようにするのがわれわれの意志だと、切々と語った。

第3節　朝鮮人民革命軍の軍事・政治訓練

金日成主席は祖国解放の大事を前にして小部隊の活動を強化する一方、朝鮮人民革命軍のすべての指揮官と隊員を政治的、軍事的に準備させるため軍事・政治訓練を指導した。

金日成主席は次のように述べている。

「祖国解放の大事を前にして、われわれには政治的、軍事的に鍛えられた多くの優れた幹部が必要です。われわれが来たるべき祖国解放の大事を首尾よく迎えられるか否かは、朝鮮革命の中核勢力である朝鮮人民革命軍のすべての指揮官と兵士が、自らをいかに政治的、軍事的に鍛えるかにかかっています」

主席は朝鮮人民革命軍の軍事・政治訓練を成功裏に行うための準備を手抜かりなく進めた。

新たな情勢と現実的条件とコミンテルンの勧告を慎重に考慮して、軍事・政治訓練に有利なソ連の極東地方に訓練基地を定めることにし、訓練に参加する朝鮮人民革命軍部隊を正規化された隊形の訓練部隊に編制した。そして訓練を計画し指導する参謀部署を設け、軍事・政治訓練の実施に即応して部隊の党委員会をはじめ各級党組織と政治機関を強化する対策も講じた。

特に軍事・政治訓練を成功裏に行うための合理的で科学的な訓練要綱の策定に力を入れた。

訓練要綱には、小部隊の活動と緊密に結びつけて実戦に応用できるようにする問題など、軍事・政治訓練で堅持すべき原則的諸問題から、政治教育と軍事教育を結合する問題、そして訓練科目とその内容、実行および総括の仕方に至るまで具体的に示されていた。また、朝鮮人民革命軍の指揮官と隊員が朝鮮革命の路線と戦略戦術的方針で武装し、朝鮮についてよく知り、現代戦に必要な先進軍事知識を深く習得して、日本帝国主義との最後の決戦と解放後の新しい祖国建設に役立つ幅広く多様な内容が盛り込まれていた。

主席は軍事・政治訓練を行うに当たり、隊員に対する思想啓発と教育活動を積極的に繰り広げ、有能な軍事・政治幹部を講師として選抜することにも深い関心を払った。同時に、新たな情勢と軍事・政治訓練の特性、訓練の条件に合わせて訓練基地を整備するようにした。

このような準備を経て、1941年初めから極東の訓練基地で軍事・政治訓練を開始し、国際連合軍が編制された後には訓練をさらに強化するようにした。

主席は政治学に第一義的な関心を払い、『祖国光復会10大綱領』や『祖国光復会創立宣言』、『祖国解放の大事を首尾よく迎えるために』などの主要な著作、朝鮮革命の路線と戦略戦術の学習を基本にしながら、哲学、政治・経済学、党建設理論、それに経済管理運営に関する学習も行うようにした。

主席は特に、祖国に対する学習に大きな力を注いだ。

1943年9月15日、政治講義の時間に朝鮮人民革命軍の政治幹部および政治教員に行った演説『朝鮮の革命家は朝鮮をよく知るべきである』で、朝鮮の革命家が朝鮮革命を責任をもって遂行するためには、朝鮮の歴史と地理、燦然たる文化の伝統についてよく知るべきであると指摘した。

主席は政治学習とともに軍事訓練も強化するようにした。

軍事訓練はあくまでも祖国解放をめざす最後の決戦に役立つよう、抗日戦争の経験にもとづき、朝鮮の地形と朝鮮人の体質を考慮して行うようにした。

主席は遊撃戦術の訓練を活発に行ってすべての指揮官と隊員をそれに精通させる一方、現代戦の訓練を強化するようにした。戦術訓練を第一義的な課題とし、遊撃闘争の経験を踏まえそれを発展させる原則で、国内の実情に合わせて訓練要綱を策定し訓練を行うようにした。射撃訓練では距離がまちまちの不動目標、移動目標、出現目標に対する射撃を基本としながら、狙撃兵の訓練も強化した。また、最後の決戦の時期には鴨緑江（アムロク）と豆満江を渡河して祖国に進軍しなければならない状況を考えて、スキー、水泳、渡河、上陸作戦などの訓練を行った。特に、最後の決戦の時期に部隊を国内の各地域に空挺隊として降下させることを予定して落

下訓練に大きな力を入れ、模範落下組と飛行機に同乗して模範動作を示し、たびたび落下訓練に参加した。そして、この訓練を降下訓練、空挺隊訓練と結合して行うようにした。同時に通信の機動性を保障するための無線通信訓練も強化した。

主席は隊員と指揮官に兵器学、地形学、衛生学、工兵学と対化学戦の知識も習得させた。

主席の精力的な指導のもと、朝鮮人民革命軍の指揮官と隊員は政治的、思想的に鍛えられ、遊撃戦法と現代戦法、各兵種技術を身につけた有能な政治・軍事幹部に成長した。

第4節　党創立の準備を完了し、祖国光復会運動を拡大、発展させるための闘争、最後の決戦をめざす全人民抗争の準備活動

金日成主席は小部隊の軍事・政治活動と軍事・政治訓練を強化する一方、党創立の準備活動に力を注いだ。

主席は革命的大事を控えて、新たな情勢と革命発展の要請に即して党組織を整備、拡大するようにした。

1941年4月、白頭山東北部をはじめ各地域に小部隊のメンバーを派遣するに当たり、破壊された党組織をさまざまな方法で速やかに整備、拡大し、革命的警戒心を高めて組織を徹底的に偽装、隠蔽し、用意周到に活動に取り組み、小部隊と政治工作グループが組織・政治活動と軍事活動を正しく結びつけるよう指示した。

主席は国内と東満州の各地域で、党組織を整備、拡大する活動

を精力的に指導した。

1941年7月中旬、延吉県明月溝南小屯での特殊党組織の結成をはじめ、汪清県の小汪清、十里坪と敦化県、安図県、和竜県、延吉県など各地方で党組織を整備、新設する活動を指導した。そして1941年10月に咸鏡(ハムギョン)北道慶源、翌年6月に雄基と茂山地区に進出して六(リュク)邑一帯をはじめ国内各地方での党組織建設状況を確認し、より強力に推し進める対策を講じた。

白頭山東北部と国内の都市と農村、主要産業中心地に派遣された小部隊、グループと政治工作員は、労働者、農民とかつて遊撃根拠地で革命組織に属していた中核メンバーで党組織を結成した。そして朝鮮人民革命軍の家族と親戚、革命家の遺児で党組織を設け、組織から離れていた党員を探し出して組織に迎える方法で党組織を整備、拡大した。こうして、国内と白頭山東北部の広い地域で党組織が整備、拡大された。

主席は祖国解放の大事が迫るにつれ、党創立の準備を全面的に完了する活動を積極的に推し進めた。

1943年2月9日、茂山郡延社(ヨンサ)面ウジョクゴルで開かれた全国党組織責任者および党中核メンバーの会議で、南湖頭会議以後の党組織建設状況を総括し、党創立の準備を全面的に完了するための課題を示した。

主席は会議後、国内の広い地域に基層党組織を拡大し、地域別の党指導機関を組織するため、主要産業地帯と戦略的要衝をはじめ全国各地に数多くの政治工作グループを新たに送り込んで党組織を拡大し、主要工場と都市、農村地帯に地区党委員会を設けるようにした。

こうして清津、咸興（ハムフン）、平壌（ピョンヤン）、釜山（プサン）、大邱（テグ）、木浦（モクポ）、群山（クンサン）、晋州（チンジュ）など全国各地に、革命組織で鍛えられ認められた中核からなる党組織が結成、拡大された。そして平壌、价川（ケチョン）、南浦（ナンポ）をはじめ各地域に党グループを置いた平安（ピョンアン）南道地区党委員会と、清津製鉄所（日鉄）を中心とする清津地区の工場に党細胞を置いた清津地区党委員会など、地域別の党指導機関が設けられた。

主席は地区党委員会が国内党工作委員会の結成後、各地に設けられた党組織と反日大衆組織を統一的に指導する地域別の指導機関としての役割を円滑に果たせるようにし、全国のすべての党組織が朝鮮人民革命軍党委員会の統一的指導のもとに動く整然たる党組織指導体系を確立した。

主席は各地区党委員会と党組織の戦闘的機能と指導的役割を高めるようにした。

1944年7月に富寧（プリョン）郡観海（クァンヘ）面羅石（ラソク）洞御明（オミョン）山での国内党組織責任者会議をはじめ諸々の会議で、最後の決戦を前にした情勢の要求に即して党組織の戦闘的機能と役割を高めるための措置を講じた。

主席は党組織が、当該単位と地域で祖国光復会をはじめ各革命組織、全人民抗争組織を新しく組織、拡大し、広範な人民を全人民抗争の準備とさまざまな反日闘争に奮起させる政治活動を力強く繰り広げるようにした。これとともに、基層党組織で党員に対する政治・思想教育と組織生活を強化し、彼らを革命実践を通じて絶えず鍛えるようにした。

このようにして、党創立の信頼すべき組織的根幹が数多く育成され、チュチェ思想にもとづく革命隊伍の思想的純潔が保たれ、党創立の大衆的基盤が築かれた。

主席は祖国光復会運動をいっそう拡大、発展させるたたかいを指導した。

金日成主席は次のように述べている。

「朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作グループは、朝鮮と満州の広範な反日大衆の中に入り、敵に破壊された祖国光復会の組織をはじめ革命組織を再建、整備し拡大する活動を積極的に展開すべきです。そうして、より広範な反日大衆を革命組織に結集させなければなりません」

主席は祖国光復会組織を整備、拡大するため、数多くの小部隊とグループ、政治工作員を国内の広い地域はもとより、満州と日本の各地域にも送り込んだ。

彼らは破壊された祖国光復会の組織を再建、整備する一方、かつての革命組織のメンバーを探し出して彼らを教育し目覚めさせて祖国光復会組織に結束した。朝鮮人民革命軍の小部隊とグループは国内と、汪清、琿春、延吉、和竜など豆満江沿岸一帯と南満州、北満州の広い地域に祖国光復会組織をはじめ革命組織を拡大し、各階層の大衆を結集させた。日本に派遣された政治工作員と革命組織のメンバーは、各地に居留している朝鮮人からなる祖国光復会の下部組織を設け、拡大していった。

これとともに、広範な人民に主席の示した朝鮮革命の路線と戦略戦術、『祖国光復会10大綱領』について広く宣伝し、日本帝国主義の滅亡の不可避性について認識させて、彼らに最後の決戦に立ち上がる準備を整えさせた。また、主席を解放された朝鮮で民族の領袖に戴いて幸福を享受せんとする人民の願いを反映したスローガン、金正日総書記の誕生を知らせるスローガン、白頭山3

大将軍を戴いた民族の誇りと自負を謳歌したスローガン、全人民を最後の決戦の準備に奮い立たせる内容を盛り込んだスローガンも提示した。これらのスローガンは大衆を意識化、組織化して祖国解放戦線に結集させ、全民族を日本帝国主義との最後の決戦に立ち上がらせるうえで大きな役割を果たした。

主席は1944年7月、茂山郡延社面新章（シンジャン）洞上丹山（サンダン）での全国祖国光復会組織責任者会議で、祖国光復会の組織をさらに拡大、発展させるための課題と方途を提示しながら、祖国光復会組織がすべての反日大衆を一つの政治的勢力に固く結集し、祖国解放の偉業を達成するたたかいに総動員するよう強調した。

主席は会議後、大衆政治活動と地下活動の経験がある朝鮮人民革命軍の指揮官と隊員で新たに小部隊と政治工作グループを組織し、国内の各地域に派遣した。彼らは労働者、農民をはじめ青年学生、宗教家など各階層の人民を、日本帝国主義との最後の決戦に立ち上がるよう準備させた。そして主要工場、企業に入って先進的な労働者を掌握し、彼らを中核にしてさまざまな名称の祖国光復会下部組織を結成し拡大していった。祖国光復会の組織を拡大する活動は、農民と青年学生をはじめ各階層の大衆の間でも繰り広げられた。そうして、国内各地で地元の特性と大衆の準備程度に応じて祖国光復会の組織が拡大された。

主席は祖国解放の旗のもとに、国内外で活動しているすべての反日愛国勢力との団結を実現することに大きな力を注いだ。

主席は国内と満州の反日愛国勢力を結束する活動を力強く推し進める一方、上海臨時政府と朝鮮義勇隊、朝鮮独立同盟と朝鮮義勇軍をはじめ中国関内の反日愛国勢力との連係の実現にも深い関

心を払った。また宗教家との活動にも力を入れ、小部隊、グループと反日地下革命組織が敵の弾圧策動を粉砕して愛国的宗教家を保護するための対策を講じるようにし、彼らを組織に結集させた。

こうして、この時期に弱小ではあるが反日愛国勢力として存在していた民族主義運動家をはじめ反日勢力は、『祖国光復会10大綱領』に接して主席を欽慕し、連共、合作の道を踏み出す傾向を見せるようになった。重慶に位置していた上海臨時政府は、抗日の伝説的英雄である主席と連係を図るため数回にわたって連絡員を送り、1944年には呂運亨（リョウンヒョン）が組織した反日地下団体である朝鮮建国同盟も、主席と連係を取るために多大な努力を傾けた。

主席は日本帝国主義敗亡の日が近づくにつれ、全人民抗争の準備をいっそう加速させた。

日本帝国主義は中日戦争を終結できない中、1941年12月に太平洋戦争を引き起こし、日が経つにつれ滅亡の泥沼にはまりこんでいった。朝鮮における日帝侵略者の支配体系は次第に麻痺していった。人民の反日、反戦闘争は日増しに強化され、敵の機関に勤める官吏の間でも職務を怠る傾向がさまざまな形で現れた。日本帝国主義の支配体系に生じたこのような脆弱性は、国内の抗争組織が大胆に全人民抗争を準備していける可能性をもたらした。

主席は新たな情勢と革命発展の要請を深く洞察し、祖国解放を達成するための3大路線を示した。

主席は1943年1月上旬に開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議で、情勢が到来すれば朝鮮人民革命軍の総攻撃と、それに伴う全人民の蜂起、人民革命軍の小部隊と武装蜂起組織との背後連合作戦を展開するという対日最終作戦の方向を提示し、それを

祖国解放の3大路線として確定した。そして同年2月下旬、新興(シンフン)地区秘密根拠地の頭無峰(トウムボン)密営での朝鮮人民革命軍指揮官、小部隊、グループおよび革命組織責任者会議で、すでに確定された祖国解放の3大路線を再び示し、それを実現するための課題と方途を明示した。

主席は祖国解放の3大路線を踏まえて、全人民抗争の準備を積極的に推進した。

主席は全人民抗争の準備を進めるうえで、次のような問題に特別な関心を払った。一つは、国内にある秘密根拠地を全人民抗争の軍事的・政治的拠点としてさらに固めながら、新たな臨時秘密根拠地を設けることであり、今一つは、国内により多くの小部隊とグループ、政治工作員を送り込み、新たな情勢の要請に応じて全人民抗争勢力を祖国解放作戦にしっかり備えさせることであり、さらに、国内の全人民抗争勢力に対する統一的指導を実現することであった。

主席は全人民抗争の準備を進めるため、根拠地をより強固に築くことに第一義的な関心を向け、すでに設けられた国内の秘密根拠地を全人民抗争の軍事的・政治的拠点としてさらに固めながら、国内の要衝に臨時秘密根拠地を設ける活動を積極的に繰り広げるようにした。

そうして、咸鏡山脈、赴戦嶺(プジョンリョン)山脈、狼林(ランリム)山脈など北部朝鮮の山岳地帯はもとより、北大峰(プクテボン)山脈、阿虎飛嶺(アホビリョン)山脈、太白山脈をはじめ国内の中部地域にさまざまな形態と規模の臨時秘密根拠地がさらに設けられた。

主席は根拠地の建設を先行させながら、全人民抗争の力量を祖

国解放をめざす最後の決戦にしっかり備えさせるようにした。

国内の広い地域に派遣された朝鮮人民革命軍の小部隊、政治工作員と党および革命組織は、広範な人民の間でビラ、檄文、スローガン、伝説的なエピソードなどを活用して、主席の革命思想と卓越した用兵術、高邁な徳性と品格に関する宣伝を力強く繰り広げた。

主席は全人民抗争の準備のための武装蜂起組織を強固にするため、1943年7月中旬、鐘城(チョンソン)郡華方(ファバン)面鹿野(ロクヤ)洞熊山(コム)で朝鮮人民革命軍の小部隊、グループおよび地下革命組織責任者の会議を招集し、全国的規模で全人民抗争のための人民武装隊を組織する方向と方途を示し、翌年7月に再び国内に進出し、富寧郡富居(プゴ)面富居洞関丈(クァンジャン)臨時秘密根拠地で、全人民抗争をめざす武装蜂起組織の拡大、強化に当たって堅持すべき原則的問題について明示した。

主席はたたかいの中で認められた労働者・農民出身の青年を中核とし、日本帝国主義の徴集制に反対して山中に隠れている青年をはじめ青壮年からなるさまざまな名称の武装隊を至るところに組織し、既存の生産遊撃隊と労働者突撃隊などの半軍事組織を漸次武装隊に改編するようにした。

こうして、熊山労農武装隊、鵲峰(カチボン)武装隊、茂山鉱山白衣社、羅津人民武装隊、大鎮坪(テジンピョン)抗日決死隊、救国青年会、光復(クァンボク)武装隊、智異山(チリサン)武装小部隊など国内各地に武装隊が次々と組織され、平壌とソウルをはじめ各所にさまざまな名称の抗争組織が生まれた。1942年にソウルでは、政治工作員の指導のもとに各階層の愛国的人民で「金日成隊」が組織され、済州(チェジュ)島の摹瑟浦(モスルポ)をはじめ国内各地、それに日本までその勢力を広げた。「金日成隊」は祖国解放

の聖戦に命を賭してたたかうことを誓った革命的な抗争組織であり、広範な反日大衆を結束して抗争態勢を備え、朝鮮人民革命軍が国内進攻を開始すれば、それに合流することを目的としていた。

1944年7月、主席の従弟金元柱（キムウォンジュ）によって組織された「祖国解放団」は、朝鮮人民革命軍の祖国解放作戦に合流して武装暴動を起こすことを主要目的とし、平壌をはじめ中西部の工場、農村地帯に入って各階層の大衆の間で組織を拡大し、日本帝国主義の警察機関と官公署にまで組織網を広げた。

全国の武装蜂起組織と人民は、「金日成将軍が率いる朝鮮人民革命軍の進撃に大衆武装暴動で合流しよう！」というスローガンのもとに各地で積極的な武装蜂起の態勢を整えた。

全人民抗争組織を設けるたたかいは、日帝侵略軍に徴集された朝鮮青年の間でも繰り広げられた。平壌に駐屯していた日本軍第30師団では、朝鮮の青年たちが反日学徒兵武装隊を組織し、朝鮮人民革命軍に集団的に合流する計画を立てて活動した。

国内で革命運動をしながらいずれかの組織に関与していた少なからぬ人たちも、主席の示した全人民抗争路線に従って日本帝国主義との最後の決戦をめざす全人民抗争の準備に合流した。

全人民抗争勢力は急速に成長し、1942年に日本帝国主義に発覚した国内の反日地下組織だけでも180余にのぼり、人員は50万人を越えた。

主席は日本本土に全人民抗争勢力を整えることにも特別な関心を払った。

主席は日本にすでに組織されていた祖国光復会組織と各種形態の反日組織を整備しながら新しい組織を引き続き増やす一方、朝

鮮人民革命軍の特殊工作員を日本に送り込んで敵の軍事情報を収集し、対日軍事作戦の勝利を勝ち取るための準備を本格化することを活動方向として提示した。

日本に派遣された政治工作員は、危険を冒して抗争組織をつくるため積極的にたたかった。そうして、北海道から九州に至る日本各地と、大学生から神学校の学生、炭鉱労働者から徴用労務者に至るまで朝鮮人が住んでいるところであればどこでも革命組織が根を下ろすようになった。

主席は全人民抗争の準備に向け、各地に組織された地区党委員会が地域的指導機関としての役割を高め、成長した全人民抗争勢力に対する統一的指導を実現するようにした。

主席は、政治工作員と党および革命組織が労働者、農民、青年学生を各種形態の反日反戦闘争へと立ち上がらせて鍛え、全人民抗争と武装暴動に備えさせるようにした。

労働者は各地でストライキとサボタージュ、放火、爆破など、各種形態の闘争を繰り広げて日本帝国主義の軍需生産と戦時輸送に大きな打撃を与え、農民は農産物の強制供出とさまざまな戦時負担、強制動員に反対してたたかった。国内各地の教員と青年学生の間でも秘密結社事件や同盟休校事件が頻発し、徴兵と徴用、強制動員に反対する青壮年のたたかいは絶え間なく繰り広げられた。国内外の知識人は民族の魂を守るために力強くたたかった。ソウルの延禧（ヨンヒ）専門学校に組織された赤色研究会は、政治工作員との連係のもとにすべての活動を『祖国光復会10大綱領』の実現に集中し、朝鮮語学会は先覚者を網羅した秘密地下組織を組んで民族語を守り、民族の魂を守るためにたたかった。数多くの青年学

生と学者、宗教家、教育者、作家・芸術家、言論人が全人民抗争組織に入り、日本帝国主義の民族抹殺政策に反対して屈することなくたたかった。

第5節　朝・中・ソ武装力の連合戦線の実現、国際連合軍の編制

1940年代前半に至って国際反帝・反ファッショ勢力との連帯を強化することは、抗日革命の最後の勝利を保証する重要な要因の一つであった。特にソ連や中国の武装力との協力を緊密にすることは、祖国解放の主体的力量をさらに強化し拡大する一方、有利な国際的環境を整えるうえで重視すべき戦略的問題であった。

この時期、朝・中・ソ3国の革命家の前には、反ファッショ共同戦線を早急に形成すべき課題が提起されていた。第2次世界大戦の炎は全ヨーロッパへと拡大し、日本帝国主義は全アジアへと侵略戦争を拡大しながらファッショ・ドイツとともにソ連に対する侵攻の企みを露骨に表わした。ソ連は東西からの挟撃の脅威にさらされていた。

金日成主席は新たな情勢と革命発展の要求を深く洞察し、1940年12月から翌年の3月中旬にかけてコミンテルンが招集したハバロフスク会議に参加し、朝・中・ソ武装力の団結と協力を実現する原則的立場を明らかにした。

会議には朝鮮人民革命軍と東北抗日連軍および満州の各省委の責任幹部、コミンテルンとソ連の代表が参加した。

主席は朝鮮人民革命軍と東北抗日連軍第1路軍および南満省委の代表としてこの会議に参加した。

会議では、朝鮮人民革命軍、東北抗日連軍の各路軍と省委間の連係と、コミンテルンおよびソ連と共同歩調をとるための対策を協議した。また、満州における抗日遊撃運動の将来の問題、ソ連極東軍事当局との相互支持と協力の内容、方式などが討議された。

会議で論議された中心的議題は、朝鮮と中国東北地方での遊撃闘争とソ連軍との相互関係をどのように結び、それを新たな情勢の要求に即していかに強化、発展させるか、ということであった。

主席はこの問題と関連して、ある一方が他方を無視したり他方の独自性を認めない無理な統合に反対し、各自の独自性を尊重することを基礎に各武装力の国際的な連合を結成すべきであると指摘し、ソ連の利益にもかない、朝鮮革命と中国革命の利益にも合致する共同闘争の形式と方法を探究し、同志的で私心のない態度でプロレタリア国際主義を最大限に発揚し、共同の利益に合わせて解決していくことを提議した。

この提議はコミンテルンと3国指揮官の支持を受け、朝・中・ソ3国の革命的武装力間の団結と協力を実現するうえで有利な作用を果たした。こうして会議では、緊迫した国際情勢に対処して朝・中・ソ3国の武装力の独自性をそれぞれ認めることを条件に統合するという意見の一致を見た。

金日成主席は次のように回顧している。

「1942年7月、われわれはソ連、中国の戦友たちとともに国際連合軍を編制し、朝鮮革命の主体的力量を全面的に強化する一方、国際反帝勢力との共同闘争を通じて日本帝国主義の撃滅と第2次

世界大戦の勝利に寄与しました」

主席は朝・中・ソ3国武装力の理想的な連合形態を国際連合軍と見なし、1942年の春、ソ連の高級軍事関係者に会い、国際連合軍の編制に関する戦略的構想を示した。

主席は彼らに、自力独立はわれわれが一貫して堅持している原則であるが、それは国際的協力や国際革命勢力との連合を排除するものではないとし、国際的に外国の援助を受けたり、他国の革命勢力と連合してたたかうのは事大主義ではないことを明らかにした。

国際連合軍の編制に関する主席の構想は中国とソ連側の政治的・軍事的要求と一致し、これはソ連軍事当局とコミンテルンに伝達され、緊急に解決されるべき問題として提起された。

主席は1942年7月中旬、東北抗日連軍とソ連極東軍の軍事幹部とともに、朝・中・ソ武装力の連合問題を最終的に討議した。3国の軍事幹部は朝鮮人民革命軍と東北抗日連軍の独自性を維持することを前提として、国際連合軍を創設することを決定した。

主席は7月下旬、中国の軍事幹部とともにソ連極東軍司令官と協議し、国際連合軍編制に関して最終的に合意した。

国際連合軍はその存在と活動の機密を保持し、擬装を完璧にするため縮小して編制する原則のもとで旅団規模にすることにした。敵の諜報・破壊活動から朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部の身辺を保護するため、軍事階級も実際より低めて象徴的なものにした。

そうして、1942年8月1日、極東基地で国際連合軍である国際旅団の創設が宣布された。

主席は朝鮮人民革命軍と東北抗日連軍第1路軍の兵員で編制さ

れた第1支隊（国際連合軍の朝鮮支隊）の指揮を受け持った。

国際連合軍の使命と基本的任務は、朝・中・ソ武装力が共同作戦で日本帝国主義を撃滅、掃討するため訓練に力を注いで政治・軍事幹部を養成し、小部隊活動を積極的に繰り広げて日本帝国主義の戦争能力を弱め、対日作戦に必要な軍事偵察活動と、敵の支配体制と敵軍の内部を攪乱するたたかいを幅広く展開することであった。

国際連合軍の編制を分岐点に、朝鮮人民革命軍は中国人民との共同闘争段階から朝・中・ソ3国武装力の連合によって世界の反帝反ファッショ闘争の壮大な流れに合流する新たな闘争の段階に移行することになった。

主席は国際連合軍が編制された後、ソ連と中国の共産主義者との友好、団結の強化に努めた。

まずソ連の共産主義者と深い連係を保ち、ソ連人民の祖国戦争を極力支持、声援した。

主席はソ連軍司令部と極東軍の高級軍事・政治幹部との深い連係を保って対日作戦に必要な問題について討議し、彼らに朝鮮における日本軍の兵力配置と彼らの統治方法、国内人民の反日闘争と反日勢力の実情、その発展方向、ソ連との連合作戦の実際上の可能性について随時説明した。そしてソ連党および軍隊の高級幹部とも親交を深めた。彼らは主席の示した空挺隊戦法による祖国解放作戦計画と、解放後の自主独立国家建設に関する主体的立場を支持した。

主席は10月革命記念日、赤軍創建記念日の行事を意義深く行い、ソ連人民の祖国戦争に対する国際的連帯を表明し、ソ・独戦争で

勇敢にたたかったソ連の英雄たちを宣伝する活動や戦死したソ連の戦友たちの追悼式を行って、崇高な国際主義的徳義の模範を示した。主席はプロレタリア国際主義の旗のもとにソ連人民の闘争を積極的に支援したことでソ連政府から赤旗勲章を授与された。

また、朝鮮人民革命軍の優秀な指揮官を国際連合軍の中国人部隊に多数派遣し、彼らの軍事・政治活動を極力援助するようにした。

主席はソ連の対日作戦参加に関連して、ソ連、中国の武装力との軍事的連係を強め、共同作戦の準備に力を注いだ。

主席は国際連合軍を構成している各民族部隊の作戦分担を正しく定め、各軍種、兵種間の協力と提携作戦に深い関心を払い、対日戦に参戦するソ連軍との共同作戦問題を協議し具体的な対策を立てた。

第6節　最後の攻撃作戦を指導、祖国解放の偉業を達成

1940年代の中期に至り、祖国解放をめざす最後の攻撃作戦の展開に有利な情勢が生じた。

ファッショ・イタリアの敗北に次いで1945年5月9日、ファッショ・ドイツが降伏し、日本帝国主義も滅亡の危機に直面した。

日本帝国主義は全戦線にわたって敗戦を重ね、国内でも激化する階級的矛盾と支配層内の軋轢と葛藤に突き当たった。

その反面、祖国解放の大事を主動的に迎えるための朝鮮革命の主体的勢力は成長、強化された。朝鮮人民革命軍は祖国解放をめざす日本帝国主義との最後の決戦で、主動的な役割を遂行できる

革命武力に強化、発展し、国内各地に朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦に合流できる全人民抗争勢力が強化された。

急変する情勢の推移を洞察した金日成主席は、日本帝国主義を撃滅し祖国を解放するため決戦の準備を加速させた。

金日成主席は次のように述べている。

「朝鮮の解放は、ソ連軍が日本関東軍を撃滅していた有利な状況のもとで、朝鮮人民と人民革命軍が自らの力によって成し遂げた偉大な結実です。1930年代と1940年代の前半期にわれわれが組織した国内の抗争組織と武装隊が、朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦計画に従って、国内各地に陣取っていた日本帝国主義の侵略兵力と植民地統治機構を制圧、掃討して国を解放したのでした」

主席は、1945年5月10日に開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議で、すでに明示されていた祖国解放3大路線にもとづいて祖国解放をめざす最後の攻撃作戦の総体的目的と基本形式、力量編制、ソ連軍との連合作戦問題など、最後の攻撃作戦方向とそれに伴う具体的な活動計画を示した。そして「すべての力を抗日大戦の最後の勝利のために！」という革命的スローガンを示した。

主席は会議後、雄基、間白山密営、延社、富寧、羅津などの一帯に進出し、国内で活動している小部隊、グループと全人民抗争組織をはじめ革命組織を日本帝国主義との最後の決戦に総動員する対策を立てた。

主席は以前から心血を注いで練り上げてきた最後の攻撃作戦計画を完成し、1945年7月30日に開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議で発表した。

この計画は、間白山一帯に集結した朝鮮人民革命軍部隊は予定

のコースを経て進出して各道を解放し、極東の訓練基地に集結している朝鮮人民革命軍部隊は、平壌地方をはじめ各地域に空挺作戦で迅速に進出し、既設の秘密根拠地を占めて電撃的な軍事作戦を展開し、国内で活動する朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員は、抗争組織を大々的に拡大して人民を全人民抗争に立ち上がらせることによって、全民族を随所で朝鮮人民革命軍の進撃に合流させることであった。

主席は最後の攻撃作戦計画に合わせて朝鮮人民革命軍の戦闘隊形を再編制し、金策（キムチェク）、安吉（アンギル）、姜健（カンゴン）、崔春国（チェチュングッ）、柳京守（リュギョンス）、金一（キムイル）、崔賢（チェヒョン）、呉振宇（オジンウ）など、優秀な軍事・政治幹部を重要都市と地区別の責任者に任命し、自ら平壌と平安南道地区に進出して最後の攻撃作戦全般を指導する計画を立てた。

主席はソ連軍との共同作戦の対策も講じた。

1945年の夏、ハバロフスクでソ連極東軍の総司令部、第25集団軍の指揮官と共同作戦問題についてたびたび協議し、具体的な対策を立てた。対日作戦を前にしてモスクワで開かれた対日作戦に関する会議に参加し、ソ連の党および軍隊の高級幹部たちに会い、当面の軍事・政治情勢と祖国解放後の自主独立国家建設に関する原則的立場を明らかにした。

主席は最後の攻撃作戦の遂行に入る前にその突破口を開くため、一部の部隊をもって敵の国境要塞区域に対する襲撃戦闘を敢行した。

この任務を受けた朝鮮人民革命軍の隊員は、1945年8月8日の夜、雄基郡土里（ト）と琿春県南別里、東興鎮など敵の国境区域の各軍事要衝を奇襲した。その結果、日本帝国主義の要塞区域では混乱が生

じ、敵の防御状態と弱点が露呈したことから、敵の国境要塞区域を一挙に突破できる状況がもたらされた。

主席は8月9日、朝鮮人民革命軍の各部隊に祖国解放のための総攻撃命令を下した。

朝鮮人民革命軍の各部隊は総攻撃に転じ、対日戦争に参加したソ連軍との緊密な連係のもとに日帝侵略軍を掃討しながら怒涛のごとく祖国に進撃した。

間白山密営を最後の攻撃作戦の出撃陣地としていた朝鮮人民革命軍の各部隊は、国内で活動していた小部隊、グループ、全人民抗争組織とともに各道を掌握するための戦闘を展開した。豆満江沿岸に集結した部隊は一挙に敵の国境要塞を突破して慶源、慶興一帯を解放し、引き続き雄基方面へと戦果を拡大させた。そして海岸上陸部隊の先遣隊として活動していた一部の部隊は、ソ連軍部隊との緊密な共同作戦によって雄基に上陸し、清津一帯へと進撃した。他の部隊は満州の金廠、東寧、穆棱、牡丹江を解放し、追撃戦を展開して関東軍に致命的な打撃を与え、豆満江の対岸に進出した。

主席は各方面に進撃する朝鮮人民革命軍部隊の作戦全般を指揮する一方、平壌と新義州（シンイジュ）、咸興をはじめ主要地域に降下させる部隊を飛行場に待機させた。

主席は朝鮮人民革命軍の総攻撃に合流するよう人民を全人民抗争に立ち上がらせた。

朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦に呼応して、すでに国内に派遣され活動していた朝鮮人民革命軍の小部隊、グループと政治工作員は、人民武装隊や武装蜂起組織、広範な人民を全人民抗争に

立ち上がらせ、全国各地で日帝侵略軍と憲兵、警察機関を襲撃、掃討して敵背攪乱闘争を果敢に展開し、進撃する人民革命軍部隊を極力支援した。

咸鏡北道羅津人民武装隊はソ連軍の上陸以前にすでに羅津を解放し、慶興、雄基地区に組織された人民武装隊は最後の攻撃が開始された初期から人民革命軍に合流して勇敢にたたかった。鵲峰武装隊は最後の決戦が開始される前に戦闘行動に突入し、退却してくる敵の敗残兵を元汀（ウォンジョン）、青鶴（チョンハク）、馬乳山（マユ）一帯で掃討して自力で会寧（ヘリョン）を解放し、敵の飛行機と高射砲、多数の装具や被服類をろ獲し、火薬庫とガソリン倉庫も爆破した。清津、吉州（キルチュ）、城津（ソンジン）地区の武装隊は敗残兵を掃討して都市と工場を掌握し、警察機関を奇襲、掃討した。咸鏡南道一帯の抗争組織は、部隊が進撃してくる前に数多くの警察署や敵の統治機関を襲撃、掃討した。新義州地区の抗争組織は、警察官派出所と国境警備営所を襲撃し、道警察部と道庁を占拠し、飛行場にたむろしていた敗残兵を武装解除した。平安南道と平壌地区では、祖国解放団を中心とする大規模な抗争隊伍が兵器廠を襲撃し、道庁と府庁を占拠し、敵の敗残武力を制圧した。江原道（カンウォン）の鉄原（チョルウォン）、法洞（ポプトン）、平安北道の鹽州（ヨムジュ）、朔州（サクチュ）地区、黄海（ファンヘ）道の抗争組織も各地の敵を襲撃し制圧した。

わが方の各部隊の猛烈な攻撃と積極的な全人民抗争によって決定的な打撃を受けた日本帝国主義は、最後の攻撃作戦開始1週間目の8月15日に慌てふためいて無条件降伏を宣言した。

日本帝国主義の降伏後も、朝鮮総督府と朝鮮軍管区司令部はアメリカの教唆と庇護のもとに8月16日、「政治運動取り締まり要領」なるものを公布し、各地方に駐屯している管下の部隊に、朝

鮮人民の解放闘争を鎮圧する指令を発した。敵は朝鮮駐屯軍は今なお健在だと公言し、日本の無条件降伏を奇貨として独立運動を起こすなら、断固武力を行使するゆえ軽挙妄動するなとの警告を発した。日帝侵略軍は抵抗を続け、日本帝国主義の植民地統治体制を維持しようと狂奔した。

こうした状況のもとで、主席は朝鮮人民革命軍の各部隊と国内の抗争勢力に、抵抗を続ける日帝侵略軍の敗残兵と敵の統治機構を武力をもって容赦なく掃討するよう命令した。

主席の命令に従い、朝鮮人民革命軍の各部隊と全人民抗争勢力は各地で抵抗する日帝侵略軍を最終的に撃滅し、武装を解除する一方、日本帝国主義の植民地統治機構を打破し、党組織と人民的な地方自治機関や保安機関を設置し、民主的な新しい秩序を確立し、敵の破壊・謀略策動から国の産業、文化施設を守るための闘争を展開した。咸鏡南道と咸鏡北道以外にも、国内の抗争組織と武装隊は8月中旬の1週間のうちに1000カ所近くの敵統治機関を襲撃し、掃討した。

主席の指導のもとに長期にわたって英雄的な抗日武装闘争を展開してきた朝鮮人民は、日本帝国主義の植民地統治体制を最終的に一掃し、ついに祖国解放の歴史的偉業を成就した。

第7節　抗日武装闘争勝利の歴史的意義、チュチェの革命伝統を創始

金日成主席によって先軍の旗のもとに展開された抗日武装闘争

は、朝鮮人民の反日民族解放闘争史において最も高く、輝かしい位置を占める栄えある革命闘争であった。

抗日武装闘争は常備の革命武装力によって日帝侵略者を撃滅し、民族の自主権と国の独立を達成した最も高い形態の民族解放戦争であった。抗日武装闘争は、国家的後方も正規軍の支援もなしに長期にわたって強大な敵とたたかって勝利した、たぐいなく困難な革命闘争であり、武装闘争を基本とし、党創立準備活動と反日民族統一戦線運動を密接に結びつけて行った最も幅広い民族解放闘争であった。抗日武装闘争は世界革命運動の一環として帝国主義と植民地主義に反対し、被搾取階級と被抑圧民族の解放偉業を達成するための反帝民族解放闘争であり、植民地従属国人民が銃剣をもって民族解放革命を遂行した歴史の新時代を開く偉大な革命闘争であった。

抗日武装闘争の輝かしい勝利は、主席の独創的な先軍革命指導によって成し遂げられた貴い結実であった。

抗日武装闘争の勝利は、主席が創始した不滅のチュチェ思想、先軍思想の偉大な勝利であった。

主席は抗日革命の道に立った初期に最も科学的かつ革命的な指導思想であるチュチェ思想と先軍思想を創始し、それを具現した革命路線と闘争方針を示した。そして先軍の旗のもとに武装隊伍を先行して結成し、銃剣に依存して抗日武装闘争の輝かしい勝利をもたらした。

抗日武装闘争の勝利は、主席の駆使した軍事的戦略・戦術、用兵術の輝かしい勝利でもあった。

主席は敵の軍事技術上の優位を革命軍隊の政治的・思想的およ

び戦略・戦術的優位によって打破する主体的な軍事思想を打ち出し、武装闘争の各段階ごとに正しい戦略・戦術的方針を示し、遊撃戦の戦術と戦法を創出し、常に主導権を握って数多くの軍事作戦と戦闘を勝利に導き、日帝侵略軍に惨敗を被らせた。

主席は国際的な反帝共同戦線の実現に関する路線を打ち出し、それを具現して抗日武装闘争の全期間にわたって広範な反日勢力との共同戦線を立派に実現し、世界の革命的人民との国際的連帯を強めることに大きな力を注いだ。これにより抗日武装闘争に勝利をもたらす有利な国際的環境が整った。

抗日武装闘争の歴史的意義は、祖国解放の偉業を立派に達成し、新しい社会建設への大路を切り開いたことにある。

主席は、朝鮮人民はほぼ半世紀にわたる日本帝国主義の植民地統治を終わらせて自由と解放を勝ち取り、朝鮮人民の前に独立、繁栄の新しい朝鮮建設の輝かしい前途が開かれることになったと述べている。

抗日武装闘争の勝利によって朝鮮人民は、民族の自主権を回復して国の独立を達成し、新しい朝鮮の真の主人となった。こうして、富強、繁栄の新しい祖国建設に向け有利な条件がもたらされた。

抗日武装闘争の歴史的意義はまた、朝鮮革命を引き続き前進させる主体的な革命勢力を育成したことにある。

抗日武装闘争の炎のなかでチュチェの革命偉業を遂行していく根幹部隊がしっかり固められ、各階層の広範な大衆が一つの政治的勢力に固く結集した。朝鮮人民は祖国を解放した金日成主席を民族の太陽として高く戴き、主席の周りに固く団結して新しい祖

国建設のために力強く前進できるようになった。

抗日武装闘争の勝利は国際的にも大きな意義を有する。

抗日武装闘争は史上はじめて、自主性の旗、先軍の旗のもとに勝利する反帝民族解放革命の新しい時代、植民地民族解放戦争の端緒を開いた。

抗日武装闘争は植民地民族解放革命に関する理論の発展に大きく寄与した。

主席の示した不滅のチュチェ思想、先軍思想にもとづく主体的な革命路線、反帝反封建民主主義革命理論、遊撃戦を基本形式とする武装闘争理論、反日民族統一戦線に関する理論、党建設と人民政権建設に関する理論をはじめとする独創的な革命理論は、労働者階級の革命理論を新たに発展させた貴い思想的・理論的財産である。

主席は抗日革命闘争を勝利に導く過程で、朝鮮労働党の栄えあるチュチェの革命伝統を創始した。

金日成主席は次のように述べている。

「抗日革命の血みどろのたたかいの中でチュチェの思想体系が確立され、不滅の革命業績と闘争経験が積み上げられ、革命的活動方法と人民的活動作風が創造されました」

主席によって創始されたチュチェの革命伝統で最も重要な位置を占めるのは、チュチェの思想体系と白頭の革命精神である。

チュチェの思想体系は主席の革命思想、チュチェ思想と、それにもとづく唯一思想体系である。

主席は抗日革命闘争の時期に、終始一貫してチュチェ思想にもとづいて人民大衆の自主性を実現することを革命の根本目的とし、

人民大衆をして革命闘争で主人としての地位を占め、主人としての役割を果たすようにした。そして事大主義と教条主義を排撃し、主体的立場を堅持して革命闘争で提起されるすべての問題を自主的に、創造的に解決していった。

白頭の革命精神には、領袖と革命に対する限りない忠実性の精神と、帝国主義と階級の敵に対する仮借なき闘争精神、必勝の信念と革命的楽観主義、自力更生、刻苦奮闘の革命精神と百折不撓の闘争精神、献身的・犠牲的精神、同志愛と道義、社会主義的愛国主義と国際主義精神など、革命家が備えるべき崇高な精神的・道徳的品性が全面的に盛り込まれている。

領袖決死擁護の精神は党の革命伝統に一貫されている基本精神である。

朝鮮人民革命軍の隊員と革命家たちによって高く発揚された領袖決死擁護の精神は、主席の革命思想と指導、気高い徳性と人間的魅力に根差しており、血の海、火の海を突き抜ける革命的実践の過程で形成され強固になり、伝統的に受け継がれてきたがゆえに不変のものである。

白頭の革命精神の中で必勝の信念と革命的楽観主義の精神は重要な位置を占めている。

主席は革命家と人民を必勝の信念と革命的楽観主義精神で教育し、自らその崇高な模範を示した。

朝鮮人民革命軍の隊員と革命家は戦闘と行軍で日が暮れ、酷寒と食糧難まで重なる困難な状況のもとでも、夜になると主席とともにたき火の周りに集まって踊り、うたいながら楽天的に生活した。彼らは突き当たる困難と試練を笑顔で切り抜け、革命歌を声

高らかにうたいながら敵撃滅の勢いでたたかって日帝侵略軍を打ち破り、戦闘で輝かしい勝利を収めた。

白頭の革命精神で重要なのは、自力更生、刻苦奮闘の革命精神と百折不撓の闘争精神である。

朝鮮人民革命軍の隊員と革命家は、試練に満ちたたたかいの道で常に自力更生、刻苦奮闘の精神を高く発揮し、いかに困難な革命任務をも自力で無条件に遂行し、「千万べん倒れようとも敵を討とう！」というスローガンのもとに強靭な意志と不屈の闘志をもって敵と英雄的にたたかった。

白頭の革命精神で重要なのはまた、革命的同志愛と革命的信義である。

主席はつとに同志を獲得することから革命活動を始め、困難な革命闘争の過程で崇高な革命的同志愛の新しい歴史を創始した。主席はいついかなる環境の中でも自分より先に隊員のことを考え、彼らに肉親の愛と恩情をめぐらした。主席は偉大な人間、偉大な同志であり、革命的同志愛と道義の最高の化身であった。

白頭の革命精神で、抗日の愛国主義精神はまた重要な位置を占めている。

抗日武装闘争は史上類例のない最大の愛国闘争であり、朝鮮人民革命軍の隊員と朝鮮の革命家は真の愛国者の典型であった。

主席の創始したチュチェの革命伝統において重要な位置を占めるのは、貴い革命業績と豊富な闘争経験である。

主席は抗日革命闘争を勝利に導く過程で、チュチェの革命的な党の創立と人民政権の樹立、革命武力の創建、大衆組織の整備、文化建設、統一戦線運動をはじめ政治、軍事、経済、文化など、

革命と建設のすべての分野で貴い革命業績と豊かな闘争経験を積み上げた。

主席は抗日革命闘争の初期、革命の銃剣に革命偉業の勝利があり、国と民族の自主独立も繁栄もあるという独創的な先軍革命の原理を示し、それを具現して反日人民遊撃隊を創建し、遊撃隊を朝鮮人民革命軍に強化、発展させて先軍革命の最も強力な政治勢力、中核勢力として立派に育成した。

そうして軍建設の貴い業績と豊富な経験を積み、党の先軍政治の歴史的根源をもたらした。

主席の創始したチュチェの革命伝統で重要なのは、革命的な活動方法と人民的な活動作風である。

主席は「以民為天」の思想を座右の銘とし、抗日武装闘争の全期間、人民の中に入って革命闘争を繰り広げる過程で、人民大衆の力と知恵に依存してすべての問題を解決する革命的な活動方法を創造した。

主席は人民を心から尊重し愛し、人民の声に耳を傾け、彼らの要求をそのつど解決する人民的な活動気風、率先垂範の活動気風、謙虚かつ素朴で礼儀正しく、文化的に生活する気風の気高い模範を示した。

チュチェの革命伝統は主席が各段階の革命闘争を指導する過程でさらに深化、発展し、金正日総書記によってその純潔性は固守され、立派に継承され、さらに豊かなものとなった。

第5章　反帝反封建民主主義革命を遂行するためのたたかい
（1945年8月～1947年2月）

第1節　新しい祖国建設の路線と建党・建国・建軍の3大課題を提示、祖国へ凱旋

祖国の解放は、人民の運命を切り開くうえで根本的転換の契機となる大慶事であり、自主独立国家建設の幅広い道を開いた歴史的な出来事であった。

解放された朝鮮の各地には人民委員会が組織され、国内の党組織に加わっていた革命家や抗争組織のメンバーによって党組織や大衆団体が結成された。労働者は武装自衛隊を組んで工場、企業と炭鉱、鉱山、港湾、鉄道などを守り、平壌（ピョンヤン）とソウルをはじめ主要都市には内外の作家・芸術家が集結した。全人民抗争を機に発揮された朝鮮人民の救国の熱意は、解放とともに建国の熱意に昇華した。

しかし、国内外の情勢は複雑を極め、新しい祖国建設の前途には多くの難関と障害が横たわっていた。朝鮮の北と南にそれぞれソ米両軍が進駐したため、国が分裂するという危険をはらんでいた。また親日派、民族反逆者はさまざまな政党や団体を設け、分派分子、左右の日和見主義者はそれぞれ「革命家」、「愛国者」

と自称し、ブルジョア共和国を建設すべきだの、直ちに社会主義の道を進むべきだのと言って、新しい祖国建設の道に混乱をまねいていた。人民は、解放された朝鮮がどの道を進むべきか皆目見当がつかなかった。

このような情勢を洞察した金日成（キムイルソン）主席は1945年8月20日、朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、『解放された祖国での党、国家および武力建設について』と題する演説を行った。主席は演説で新しい祖国建設の路線とその実現のための建党、建国、建軍の3大課題を提示した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは勝利の成果にもとづいて朝鮮革命を引き続き前進させ、朝鮮人民自身の手で富強な自主独立国家を建設しなければなりません」

主席は、抗日武装闘争の過程で築き上げた貴い革命業績と豊富な闘争経験にもとづき、建党、建国、建軍の事業を力強く推し進めて、新しい朝鮮建設の歴史的任務を必ず立派に遂行しなければならないと強調した。

主席は、朝鮮革命の参謀部であり、労働者階級の前衛部隊である共産党を創立する課題を提示した。

主席は、抗日武装闘争の炎の中で鍛えられた共産主義者を中核に統一的な労働者階級の党を早急に創立すべきであるとし、国内で活動していた共産主義者は組織的に鍛えられておらず、セクト主義の思想的毒素から抜け出していないが、われわれに長期の武装闘争で鍛えられ洗練された朝鮮革命の信頼すべき根幹が準備されている以上、国内の共産主義者を大胆に信頼し、度量をもって

導くならば、彼らは革命の道を正しく進むであろうと述べた。そして、党が革命の参謀部としての使命と役割を果たすためには、朝鮮共産党は少数の共産主義者の組織ではなく、広範な勤労者大衆の中に深く根を下ろした大衆的な党となるべきであると強調した。また、分派のない全隊伍の思想、意志および行動の統一を保ち、党員を革命的な思想・理論で武装させ、鉄のような自覚的規律を確立し、民主主義中央集権制の原則を堅持すべきであると述べた。同時に党の幹部を政治的、思想的に鍛え、広範な大衆を党の周りに結集させ、人民大衆の間で党の指導的地位を確保しなければならないと強調した。

主席は次に、主権の問題を解決するための課題を示し、その遂行方途を明らかにした。

主席は、主権の問題を解決するためには、解放後の朝鮮革命の性格と任務に照らして、全朝鮮人民の利益を代表する民主主義人民共和国を樹立すべきであるとし、それは朝鮮人民自身の手により建設されなければならず、労働者階級の指導のもとに各階層の民主勢力を網羅する民主主義民族統一戦線を結成し、それにもとづいて人民政権を樹立すべきであると指摘した。そして、反帝反封建民主主義革命の段階において人民政権が遂行すべき課題と行動綱領を明示した。

主席はまた、正規の革命軍隊を自力で建設する課題を示した。

抗日武装闘争の激しい炎の中で鍛えられた朝鮮人民革命軍は正規軍を創建できる強固な資産であるとし、抗日革命闘士を根幹とし、労働者、農民をはじめ勤労人民の子女で正規の革命軍を建設すべきであると述べた。

主席は建党、建国、建軍の3大課題を遂行するためのグループを組織し、その派遣地を定めるとともに、数日間にわたってグループのための講習を行った。

主席は祖国に凱旋し、新しい祖国建設のためのたたかいを正しく導いた。

20星霜にわたる抗日革命闘争の日々に積もりつもった疲労をいやすいとまもなく、人民の中に入って彼らを新しい祖国建設路線の貫徹へと奮い立たせた。

1945年9月中旬、元山（ウォンサン）地区にきた主席は、その地方の党活動家や労働組合代表、有志たちと話し合う過程で、それまで国内のいかなる党派や組織も人民にこれといった建国路線を示していないことが分かった。当時、一部の者は、「ソビエト」を夢見て社会主義革命の即時遂行を主張し、またある者は、封建制度を復活させるか、ブルジョア制度を樹立する道へ進むべきだと主張した。

その日、主席は軍事・政治幹部および元山市共産党組織の責任幹部と話し合い、反帝反封建民主主義革命の段階において朝鮮が進むべき道は進歩的民主主義の道であり、解放された祖国に樹立すべき国家は民主主義自主独立国家である、これがまさにわれわれの建国路線であり、人民大衆が願う道である、と説いた。

9月20日には抗日革命闘士を咸鏡（ハムギョン）南北道と鉄原（チョルウォン）方面へ政治工作員として派遣しながら、新しい祖国建設の路線を貫徹するための具体的な課題を与え、人民をその遂行に奮い立たせるようにした。

9月下旬には平壌地区電気部門の活動家と労働者に会い、電力工業を復旧、発展させる対策を討議し、平壌穀物加工工場に出向

いて自力で工場を復旧する課題を与えた。

主席は、1945年10月3日、平壌労農政治学校の学生に『進歩的民主主義について』と題する講義を行い、朝鮮式の独特な民主主義について明らかにした。

主席は講義で、朝鮮の進むべき道は真の民主主義である進歩的民主主義の道であり、この道を進んでこそ人民に自由と権利を与え、幸せな生活をもたらし、国の完全な自主独立を達成することができると述べた。

当時、多くの人は、民主主義と言えば社会主義国家のソ連式の民主主義と、資本主義国家のアメリカ式の「民主主義」のみを念頭に置いていた。それゆえ、少なからぬ人たちは、新しい朝鮮を建設するためには両者のうちどちらかを選択しなければならないと考えていた。

主席は、われわれの志向する進歩的民主主義は資本主義諸国の「民主主義」とは根本的に異なり、また社会主義国家の民主主義を真似たものでもなく、反帝反封建民主主義革命の段階にある朝鮮の現実にかなった新しい型の民主主義であるとし、それは自主、連合、自由、富強、革命、平和を特徴としている、と強調した。

10月9日、主席は故郷万景台（マンギョンデ）への分かれ道を通りすぎて降仙（カンソン）製鋼所の労働者たちを訪ね、自力で一日も早く工場を復旧して国の強固な冶金工業基地に発展させる課題を与えた。

主席の精力的な活動により、解放直後の困難かつ複雑極まる情勢下にあっても、朝鮮人民は富強な新しい民主朝鮮の建設をめざすたたかいに力強く立ち上がった。

このように、新しい祖国の建設で提起される緊急かつ重大な諸

問題を解決した主席は、1945年10月14日の午後、平安(ピョンアン)南道の党委員会と人民政治委員会が共同で主催した平壌歓迎市民大会に参列し、祖国の人民と初の対面を果たした。主席が幹部席に姿を現すや「金日成将軍万歳！」の歓呼が天地を揺るがした。

主席は市民大会で『すべての力を新しい民主朝鮮建設のために』という歴史的な演説を行った。

演説で主席は、朝鮮民族が新しい民主朝鮮を建設するために力を合わせるときが来たとし、力のある人は力で、知識のある人は知識で、金のある人は金で建国事業に積極的に貢献し、祖国を愛し、民族を愛し、民主を愛する全民族が固く団結し、民主主義自主独立国家を建設していこうと呼びかけた。

主席の凱旋演説は、新しい祖国建設の路線貫徹をめざすたたかいへと全人民を奮い立たせる自主独立国家建設の大綱となった。

当時、『平壌民報』紙は「錦繡江山を揺さぶった40万の歓声」という見出しで、平壌歓迎市民大会の模様を次のように伝えている。

「4000年の歴史を誇る平壌、40万の人口を擁する平壌とはいえ、かつてこれほど多くの民衆が集まった例があるだろうか。これほど意義深い集会があったことがあるだろうか…。

…特に大会を歴史的に意義あらしめ、群衆の感動を呼び起こしたのは、朝鮮の偉大な愛国者、平壌が生んだ英雄金日成将軍がここに参列して、民衆に情愛に満ちた熱烈な挨拶と激励を送ったことである。…朝鮮同胞が最も敬慕し待望していた英雄金日成将軍がそのりりしい勇姿を場内に現すと、熱狂的な歓声が沸き上がり、全会衆は歓喜のあまり感涙にむせんだ」

主席は、平壌歓迎市民大会での凱旋演説を終えた後にようやく故郷万景台を訪ね、20年ぶりに祖父、祖母と感激的な対面を果たした。

第2節　党創立偉業の実現、党の政治路線と組織路線を擁護、貫徹するためのたたかい

解放直後、新しい祖国建設の壮大な綱領を実現するうえで急を要する問題として提起されたのは、抗日革命闘争の時期に築かれた党創立の組織的・思想的準備にもとづいて、党創立の偉業を達成することであった。

金日成主席は解放後、遅滞なくチュチェ型の革命的党創立の偉業を実現する活動を正しく導いた。

党創立の活動は極めて困難かつ複雑な状況の中で進められた。1920年代に朝鮮共産主義運動を破局に導いた分派分子は、そこから然るべき教訓を汲み取ろうとせず、またもや派閥争いに明け暮れ、党の創立事業を妨げた。南朝鮮では、「火曜派」系や「M・L派」系の分派分子が陰謀をめぐらしてそれぞれ「党」なるものをつくりあげ、派閥争いに狂奔して共産主義隊伍を分裂させていた。一方、アメリカ帝国主義者とその手先は、分派分子をそそのかして共産主義運動の団結と共産党の創立を破綻させようと策動した。

主席は、党創立に当たって、党中央を組織する前に地方党組織を強固に築くよう導いた。

主席はすでに1945年9月、軍事・政治幹部および元山市共産党組織の責任幹部への談話で、各地方で先に党組織を設け、それにもとづいて党中央指導機関を組織する方法で党を創立する方針を示した。

主席は地方党組織を強固にするため、抗日革命闘士を政治工作員として各地に派遣した。

政治工作員の積極的な活動により既成の党組織が整備、強化され、党組織のないところでは新規に党組織が生まれるようになった。その結果、短期間のうちに各地の工場、企業はいうまでもなく、里から面、郡、市、道に至るまで党組織が設けられるようになった。

主席は、各地に分散して活動していた国内の共産主義者に会って統一的党創立の方針を知らせ、彼らを党創立偉業の実現へと導いた。

主席は統一的な党創立における平安南道党委員会の位置と役割の重要性を推し量り、1945年9月下旬、道党の責任幹部に会って、われわれには党の創立以外に急を要する課題はないと指摘し、平安南道党委員会の活動方向を示した。

1945年9月下旬と10月初めには、南朝鮮から来た共産主義運動家と対面し、朝鮮革命を中心に据えて団結をめざし、当面は各派がそれぞれ組織した党を早急に整備し、組織的に結束した一つの統一的党にすることについて忍耐強く説諭した。

党創立準備の進捗に伴い、党中央指導機関設立の問題が機の熟した要求として提起された。

主席は、あらゆる条件が有利な北朝鮮に遅滞なく党中央指導機

関を設ける活動を強力に推し進めた。

解放直後、北朝鮮では朝鮮人民革命軍の基本勢力があって党創立のための合法的な可能性と革命の発展に有利な条件が整っていた反面、アメリカ帝国主義が占領した南朝鮮では人民の政治的活動が抑制され、共産主義者の活動は非合法化されていた。

有利な状況にあった北朝鮮に党中央指導機関を一時も早く設けてこそ、各地方に結成されて活動する共産党組織を統一的に指導し、革命隊伍の組織的・思想的統一を成し遂げ、広範な大衆を結集して朝鮮革命全般に対する党の指導を確固と実現することができるのであった。

主席は、北朝鮮共産党中央組織委員会を設けることを決心し、1945年10月5日党創立のための予備会議を招集した。

会議では、党中央指導機関として北朝鮮共産党中央組織委員会を創設する問題が討議された。抗日革命闘士と多くの地方党組織の代表は北朝鮮共産党中央組織委員会の創設を積極的に支持した。しかし、分派分子はいわゆる「ソウル中央」をうんぬんしてこれに反対した。会議では、分派分子らの執拗な分裂策動を暴露、糾弾する激烈な思想闘争が繰り広げられた。

主席は、北と南に生じた相反する情勢を分析し、南朝鮮に進駐した米軍が軍政を布き、共産主義者と愛国的人民の革命的進出を苛酷に弾圧している状況のもとで、朝鮮革命全般を主動的に推し進めるためには、有利な条件が整っている北朝鮮に強力な党中央指導機関として北朝鮮共産党中央組織委員会を創設すべきであると強調した。そして、分派分子らの醜悪な目的を暴露し、彼らの地方割拠主義的な分裂策動に決定的な打撃を加えた。

主席は、1945年10月10日、平壌で歴史的な北朝鮮共産党中央組織委員会創立大会を開催した。会議は13日まで続けられた。

主席は、大会で行った報告『わが国におけるマルクス・レーニン主義党の建設と党の当面の任務について』で、強力な党中央指導機関として北朝鮮共産党中央組織委員会の創設を提唱し、党の組織路線と政治路線を明示した。

主席は党の組織路線を示しながら、革命的で戦闘的な党を建設するためには、その組織的根幹をしっかりと打ち固め、無産階級を基盤とする強固な大衆的政党を創設し、全党の思想・意志と行動の統一を実現し、民主主義中央集権制にもとづく革命的規律を強化しなければならないと強調した。

金日成主席は党の政治路線について次のように述べている。

「われわれは民主主義人民共和国を創建し、祖国を富強な民主主義的自主独立国家に発展させなければなりません。これがまさに現段階におけるわれわれの基本的な政治課題であります」

主席は、民主主義人民共和国の樹立を党の基本的政治課題とし、その実行をめざす4大当面課題を提示した。そして北朝鮮に強力な革命的民主基地を創設するという党の政治課題を示した。

大会に参加した代表たちは、主席が示した党の組織路線と政治路線を支持し、北朝鮮共産党中央組織委員会の創設を全幅的に支持した。

党中央指導機関としての北朝鮮共産党中央組織委員会の結成と党創立の宣言により、「トゥ・ドゥ」の結成から始まったチュチェ型の革命的党創立の歴史的な偉業はついに実現した。

党の創立後、主席はその政治路線と組織路線を擁護し貫徹する

たたかいを指導した。

1945年11月中旬に行われた北朝鮮共産党中央組織委員会第2回拡大執行委員会は、党の政治路線の擁護・貫徹をめざすたたかいで重要な意義を有した。

主席は『真の人民の政府を樹立するために』と題する演説で、政権樹立に関する分派分子と左右の日和見主義者の反革命的・反人民的主張を思想的、理論的に粉砕し、政権問題の解決において党が堅持すべき原則的な立場と課題を明示した。

主席は、真の人民の政権である民主主義人民共和国を樹立するため、各階層の広範な愛国的民主勢力を結集する民主主義民族統一戦線を結成し、それにもとづいて北朝鮮に人民の利益を代表する暫定的な中央政権機関を創設し、統一的な中央政府樹立の基盤を築かなければならないと述べた。

主席は、党の組織路線が貫徹されるように導いた。

当時、党の指導的地位にあった分派分子と地方割拠主義者は、党の組織路線の貫徹を陰に陽に妨げていた。

党の組織路線貫徹のための決定的な対策を立てるため、1945年12月中旬、北朝鮮共産党中央組織委員会第3回拡大執行委員会が招集された。

主席は会議で行った報告『北朝鮮共産党各級党組織の活動について』と、結語『党の強化のために』で、党創立大会以後の党建設における成果と欠点を全面的に分析し、党を健全な土台にもとづいて強化、発展させるための課題を示した。

主席は、党の階級構成を改善し、党の統一と規律、大衆との結びつきを強め、幹部養成と党勢配置、唯一党員証の授与と党員統

計を正確に行い、統一戦線活動を改善、強化するよう強調した。

会議では、主席を中心とする党の思想・意志の統一を成し遂げ、党内に鉄のような規律を確立するため、党中央指導機関を強化する画期的な措置が講じられた。そしてすべての党員の一致した意思と念願によって、主席は党の最高首位に推戴された。会議では、党の指示に背いて党の規律に違反した分派分子の策動が厳しく批判され、そのような傾向を克服するための断固たる措置が講じられた。

党中央組織委員会第3回拡大執行委員会は、党の組織的・思想的統一を強化し、党内に主席による唯一的指導体系を確立する画期的な契機となった。

会議後、主席は第3回拡大執行委員会の決定実行を推進しながら、党の唯一的な組織指導体系の確立に第一義的な力を注いだ。

各道党委員会に党の検閲メンバーを派遣すると同時に、各地方に党組織特派員を送って地方党組織への指導、点検を行わせ、各道・市・郡・面党組織で党代表者会議を開いて党の組織路線を貫徹するための具体的な対策を立てるようにした。また、1945年12月下旬に北朝鮮共産党平安南道第1回代表者会議に、翌年1月10日には、北朝鮮共産党黄海道海州市熱誠者会議に参加して、党中央組織委員会第3回拡大執行委員会の決定を貫徹するための活動を指導した。

主席は党の隊伍をしっかり固める活動に深い関心を払った。

1945年末から1946年初めにかけて、全党的な党員審査と唯一党員証の授与を行って、党内に潜入した不純分子を粛清し、党隊伍の純潔を保つようにした。同時に、市・郡党委員会が労働者、農

民の先進分子からなる党勢を拡大し、工場や農村で党細胞を早急に増やして、党が労働者階級と貧農の中に深く根を下ろすようにした。こうして、第3回党拡大執行委員会からわずか4カ月の間に党勢はほぼ6倍に拡大され、党の階級構成は著しく改善された。

主席は、1946年2月中旬、北朝鮮共産党中央組織委員会第4回拡大執行委員会を招集して、第3回党拡大執行委員会の決定実行のための活動状況を総括し、党を組織的、思想的にさらに強化するための新たな措置を講じた。

このようにして、中央から細胞に至るまで、主席の唯一的指導を実現するための整然とした組織指導体系が確立され、党中央指導機関と各級党組織が党と革命に忠実な優秀な活動家で構成され、党の統一と団結が強化されるようになった。

第3節　広範な大衆を党の周りに結集させるための活動

金日成主席は党を創立して組織的、思想的に強化すると同時に、広範な大衆を獲得して党の周りに結集するための活動を指導した。

金日成主席は次のように述べている。

「新しい民主朝鮮を建設できるか否かの問題は、いつにわれわれが共産党を強化して民族統一戦線を結成し、広範な大衆を共産党の周りに結集させることに成功するかどうかにかかっています」

広範な大衆を党の周りに結集させることは、党を強化し革命に勝利するための重要な要求である。

主席は、大衆を結束するためには大衆団体を広範に組織して、

労働者は労働者組織に、農民は農民組織に、青年は青年組織に、女性は女性組織に、文化人は文化人組織にそれぞれ参加させなければならないと指摘した。

主席は青年を一つの民主的な青年組織に結束することに主眼を置いた。

解放直後、青年組織として共青（共産主義青年同盟）があったが、多くの青年が加わることはできなかった。

主席は各階層の青年を単一の青年組織に結集させるため、1945年10月、「愛国的青年は民主主義の旗のもとに団結せよ！」とのスローガンを掲げて共青を主動的に解散し、大衆的青年団体である民主青年同盟を組織する路線を提示した。

主席は民青組織路線を貫徹するため民主青年同盟結成準備委員会を設け、その活動を指導した。

1945年10月末に開かれた民主青年熱誠者大会で、共青を民青に改編して北朝鮮民主青年同盟を創立するという決定と新しい民主青年同盟の綱領、規約を採択させ、11月下旬には、平安南道民主青年団体結成大会に参加して民青の結成を指導し、その経験を全国に広めた。

これにもとづいて主席は、1946年1月17日北朝鮮民主青年団体代表者会議を招集し、北朝鮮民主青年同盟の結成を宣言した。

1945年11月30日に北朝鮮労働組合総連盟が結成され、1946年1月31日には北朝鮮農民組合連盟、1945年11月18日には北朝鮮民主女性同盟が創立された。同時に、北朝鮮工業技術総連盟、北朝鮮芸術総連盟、北朝鮮記者連盟、北朝鮮仏教徒連盟、北朝鮮キリスト教連盟などの社会団体が組織された。

その結果、短期間のうちに各階層の広範な大衆が一つの政治勢力に結集され、民主主義民族統一戦線の強固な土台が築かれた。

主席は、大衆団体の組織とともに、民主主義民族統一戦線を結成する活動を指導した。

主席は、1945年10月中旬、各道党委員会の責任幹部に行った演説『新しい朝鮮の建設と民族統一戦線について』と、1945年12月下旬、民主青年団体主催の政治講座で行った講義『民族統一戦線問題について』をはじめとする諸著作で、民主主義民族統一戦線路線と統一戦線運動において堅持すべき原則、その形態などを全面的に明示した。

主席は、民主主義人民共和国を建設するためには、労働者階級と農民だけでなく、民族資本家も含むすべての愛国的民主勢力が参加する統一戦線を結成しなければならないと述べた。

民主主義民族統一戦線を結成するために、中間勢力の政党結成を主動的に支援して、彼らが反動派の側に偏らず民主的政党に発展するよう導いた。

こうして1945年11月3日、小ブルジョアジー、企業家、商人、富農、一部の小市民とその他の階層を含む民主党が、翌年2月9日には大多数が天道教を信ずる農民からなる天道教青友党が組織された。

主席は、友党が民主主義的自主独立国家の建設に積極的に参加し、共産党と友好関係を結んでいる状況にあって、彼らと統一戦線を結ぶようにした。そして、共産党が友党との関係において下部統一を基本としながら、上層部との統一を成し遂げる原則を堅持していくようにした。

主席は、民族主義者、宗教家との活動にも大きな力を注いだ。

1945年11月、かつて民族主義運動に携わった人たちに会った主席は、祖国と民族の運命に心を配る民族主義者は共産主義者を排斥するのでなく協力し合わなくてはならないと説諭した。そして、宗教家に会っては、共産党の宗教政策を説明し、宗教を信じるにしても自国人民のために信じ、「神様」を信じても朝鮮の「神様」を信じなければならないと説いた。

主席は、友党の党員や民族主義者、宗教家たちが民主主義民族統一戦線運動に積極的に参加するようになった成果を踏まえて、1946年7月22日、北朝鮮民主的政党、社会団体代表者会議を開き、常設の統一戦線組織である北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会を結成した。

民主主義民族統一戦線には、各政党・社会団体が網羅され、その傘下に600余万に達する各階層の大衆が結集した。こうして、広範な大衆が新しい祖国の建設にさらに力強く立ち上がるようになった。

第4節　北朝鮮臨時人民委員会の創設、民主改革の実施、民主的教育と文化発展のための活動

金日成主席は、真の人民の中央主権機関である北朝鮮臨時人民委員会を創設するためのたたかいを指導した。

主席は、アメリカ帝国主義と李承晩（リスンマン）傀儡一味の民族分裂策動のため、直ちに全朝鮮の統一政府を樹立できない状況の中、1945年

10月に開かれた党創立大会と11月の北朝鮮共産党中央組織委員会第2回拡大執行委員会で、各政党、各派との連合を実現し、すべての愛国的民主勢力を結束し、それにもとづいて北朝鮮中央主権機関として北朝鮮臨時人民委員会を創設する方針を示した。

主席は、抗日革命闘争期の人民政権建設で得た貴重な経験にもとづき、抗日革命闘士たちを政治工作員として各地に派遣し、各級人民大会を招集して人民自身が人民委員会委員を選出する方法で地方人民委員会を組織するようにした。その結果、1945年11月末までに、北朝鮮のすべての地域で道・市・郡・面・里人民委員会が組織されて活動を始めた。

主席は、新設された地方政権機関を真の人民の政権として打ち固めるため、政権機関に潜入した親日派、民族反逆者などの反動分子を徹底的に摘発、粛清するようにする一方、平壌市人民委員会と平安南道人民政治委員会、平安北道龍川（リョンチョン）郡人民自治委員会などの地方人民委員会を巡察しながら、地方政権機関を整備、強化する活動を指導した。

1945年11月19日には、人民経済各部門を指導し、各道間の経済的連係を強化するための過渡的な中央行政機関として北朝鮮行政10局を組織した。

1945年12月、朝鮮問題に関するモスクワ3国外相会議の決定が発表された後、反動派の策動がいっそう露骨になった状況のもとで、統一政府の樹立を速めるため北朝鮮臨時人民委員会を創設するための活動を強力に推し進めた。

中央主権機関創設の基盤が築かれた土台を踏まえて、主席は1946年2月初め、民主的政党・社会団体指導者からなる発起委員

会を組織し、北朝鮮中央主権機関創設に向けた準備を推進し、2月5日に北朝鮮共産党中央組織委員会常務執行委員会で北朝鮮臨時人民委員会の組織に関する諸問題を明らかにし、7日には、北朝鮮臨時人民委員会創設のための民主的政党・社会団体代表の予備会議で、創立大会に関する諸問題を具体的に討議、決定した。

主席はこのような準備を経て、1946年2月8日、北朝鮮の民主的政党・社会団体・行政局・人民委員会代表者協議会を招集した。

協議会で、『当面する朝鮮の政治情勢と北朝鮮臨時人民委員会の組織に関して』と題する報告を行い、中央主権機関創設の必要性と北朝鮮臨時人民委員会の当面の課題を提示した。

協議会では、労働者、農民をはじめ各階層人民の代表で北朝鮮中央主権機関である北朝鮮臨時人民委員会が組織され、全朝鮮人民の一致した意思と念願によって主席が北朝鮮臨時人民委員会委員長に推戴された。

主席は、党の政治路線を具体化して、人民政権の任務を明らかにした11カ条の当面の課題を提示した。

北朝鮮臨時人民委員会は、抗日革命闘争期に豆満(トウマン)江沿岸の遊撃区に打ち立てられた人民革命政府の継承として、チュチェ思想を指導指針とし、進歩的民主主義を実現する人民民主主義独裁政権であった。北朝鮮臨時人民委員会の使命は、親日・親米派、民族反逆者、地主、買弁資本家には独裁を、広範な人民大衆には民主主義を実施しながら、北朝鮮において反帝反封建民主主義革命を遂行して革命的民主基地を創設し、社会主義革命段階に移行する前提条件を整えることであった。

主席は、北朝鮮臨時人民委員会を創設した後、それを武器にし

て革命武力および保安機関の保証のもとに民主改革遂行の準備を加速した。

主席は、数次にわたり民主改革の遂行において共産党が堅持すべき基本的原則を明らかにした。すべての改革を大衆自身の活動、全人民の運動とし、進攻的、連続的に進めて短期間で完遂し、民主改革を通して植民地的、封建的社会経済関係を一掃すると同時に、社会主義への継続革命の要求に応じてすべての改革を徹底的に遂行しなければならないと強調した。

主席はまた、民主改革を成功裏に実施するため、革命勢力を強固にするよう指導した。

思想教育を強化して、勤労大衆の階級意識と主人としての自覚を高めることで、広範な大衆が民主改革の遂行に目的意識的に奮い立つようにした。同時に、共産党の指導的役割を高め、労農同盟を強化しながら統一戦線活動を活発に行って、すべての政党、社会団体が民主改革の遂行において足並みを揃えるようにした。一方、内外反動派のあらゆる妨害策動を粉砕して民主改革を成功裏に遂行するため、人民政権機関と革命武力および保安、司法、検察機関などの独裁機関を強化するようにした。

主席は、土地問題の解決を反帝反封建民主主義革命の第一義的な課題に定めて、土地改革の実施に力を注いだ。

土地問題を正しく解決してこそ、社会の発展を阻害している封建的な生産関係を一掃し、農民大衆を世紀の立ち後れと貧困から解放し、新しい民主朝鮮を建設することができるのであった。土地改革の実施は、農民が人口の絶対多数を占める植民地農業国であった朝鮮において特に重要な問題となっていた。解放直後、北

朝鮮では全農家の4％にすぎない地主が耕地総面積の58・2％を占め、全農家の56・7％の貧農はわずか5・4％の耕地を占めるにすぎなかった。

主席は、主体的な立場に立って国の実情と農民の世紀にわたる宿望に応じて土地問題を解決することに深い関心を払った。

1945年10月16日、北朝鮮共産党中央組織委員会第1回拡大執行委員会で土地改革の基本的方向を示す『土地問題に関する決定』が発表された。その後の1945年秋、農民の3・7制闘争が繰り広げられた。3・7制闘争を通じて鍛えられ覚醒した農民は大衆集会を開き、耕作する農民への土地分配を要請する手紙や決議文、請願書を主席に送った。そして1946年の3・1運動記念日には、200余万の農民が土地を要求してデモを行った。3・7制闘争と土地請願運動を通じて、農民は土地改革の主人としての自覚と決意を持つようになった。

主席は、1945年12月から翌年2月までの間、平安南道大同（テドン）郡をはじめ各地方に出向いて、農村の実情と土地に対する農民の願望を把握し、朝鮮農村の実情にかなった土地の没収対象、没収および配分方法、小作制度を永遠になくすための方法などを確定した。

こうした準備を経て、1946年3月初め、北朝鮮共産党中央組織委員会第5回拡大執行委員会を招集して、土地改革の実施に関する諸問題を全面的に示し、3月5日には『北朝鮮土地改革に関する法令』を発布した。

主席は「土地は耕作する農民に！」というスローガンを示し、農民を土地の主人にすることを土地改革の基本的原則とし、その実行のための方針を打ち出した。

金日成主席は次のように述べている。

「わが党は耕作する農民を土地の真の主人にするため無償没収、無償分配の原則にもとづいて土地改革を行い、没収した土地は国有にせず、農民の個人所有にする方針を示しました」

主席は、土地改革方針の貫徹において提起される諸問題を明らかにした。

日本国家、日本人、親日派、民族反逆者の所有していたすべての土地と灌漑施設、営農設備を没収の対象とし、5ヘクタール以上の土地を所有し、それを小作に出したり雇用労働力に耕作させていた不労所得者を排除すべき地主と規定し、その土地と住宅、役畜、農機具、果樹園、山林、灌漑施設は一切没収し、自力で耕作せずに他人に小作に出していた土地は、面積の大小にかかわらずすべて無償没収するようにした。没収した土地は、雇農および土地がないか少ししかない農民に家族数と労力者数をもとに均等に分配して彼らの所有にし、分与された土地については売買、抵当、小作を禁じ、自力で耕作しない場合は国家に返納させ、没収した山林、灌漑施設、果樹園および耕作に向かない土地は国有化することにした。

主席は土地改革の実施に当たり、雇農と貧農にしっかり依拠するとともに、中農と同盟を結び、富農を孤立させる階級政策を打ち出した。

雇農と貧農は土地分与の基本的享受者であり、土地改革に最も大きな利害関係があった。中農はそのほとんどが自作農であり、基本的には土地分与の対象ではなかったが、地主や高利貸の搾取と抑圧によって、絶えず没落の脅威にさらされていたため、土地

改革を支持した。富農は土地改革で清算の対象ではなかったが、小作に出していた土地は没収されることになったため、改革に反対する傾向はあった。

主席は土地改革を成功裏に進めるため、農村の里を単位に雇農と貧農からなる1万1500余の農村委員会を組織し、農村委員会が土地の没収対象と追放対象を規定し、土地の没収と分配など土地改革法令の執行をすべて受け持ち、地主、親日派、民族反逆者との闘争の先頭に立つようにした。また、平壌学院の学生と1万余名の先進的な労働者からなる土地改革支援隊を組んで農村に派遣し、彼らが農村委員会の活動を支援し、地主や反動分子の破壊・謀略策動を暴露、粉砕するたたかいを果敢に展開するようにした。同時に、各政党や社会団体との統一戦線を強化して、全人民を土地改革の勝利へと奮い立たせた。

主席はまた、大同郡や江西（カンソ）郡、中和（チュンファ）郡など各地方に出向いて土地改革が党の方針通り行われるよう指導した。1946年3月10日、大同郡柴足（シゾク）面聖文（ソンムン）里を訪ねた主席は、地主の下男であった農民たちと会い、彼らに最上の土地を分与するようはからい、長年にわたり下男奉公してきた農民にはその地主の家を与え、手ずから門札にその姓名を書いて掲げた。

土地改革は厳しい階級闘争を伴うものであったため、主席は地主や反動分子の破壊活動を防止するため土地改革実施に関する臨時措置法を制定、公布して人民政権の独裁機能を強め、広範な大衆を階級敵とのたたかいに奮起させた。そして、追放の対象となった地主を他の地方に移住させる措置を講じて彼らの力を分散させ、農民に地主の悪影響が及ばないようにした。同時に、地主や

民族反逆者をかばう右寄りの偏向と、没収対象ではない富農や中農の土地まで没収する左寄りの偏向を適時是正させた。

こうして朝鮮の土地改革は20日余りで完了した。その結果、100万ヘクタール以上の日本帝国主義と親日派、民族反逆者、地主が所有していた土地が無償没収され、土地を持たないか少ししか持たない72万余戸の農家に無償分配された。

土地改革後、主席はその成果を強固にする一連の措置を講じた。

農村での党勢を拡大し、農村基盤をさらに強化するよう導いた。1946年6月27日、旧時代の供出制度と地税、収益税、その他雑多な重税を撤廃して、単一の農業現物税制実施に関する法令を発布した。そして農民銀行、消費組合などの信用・商業協同団体を設けて高利貸や暴利行為を防止し、農民の営農と生活の便宜を図るようにした。同時に「解放された朝鮮の最初の春を増産で迎え、ひとうねの土地も残さず耕そう！」というスローガンを示して、農民を農業生産へと奮い立たせた。

このようにして、反帝反封建民主主義革命段階において最も重要な課題の一つになっていた土地問題は立派に解決された。

主席は重要産業国有化の闘争を指導した。

解放前、朝鮮産業の大部分は日本帝国主義と買弁資本家が独占していたため、民族経済の発展は極度に抑制されていた。重要産業を国有化せずには、帝国主義とその手先の経済的基盤と植民地支配の後遺症を一掃して、労働者階級を植民地的従属と搾取から永遠に解放することも、民族経済を自立的に発展させて富強な自主独立国家を建設することも不可能であった。また人民が自らの要求通り国家を管理・運営することも、人民生活の速やかな安定、

向上を図ることもできなかった。

主席は、日本帝国主義の所有となっていた工場、企業は当然朝鮮人民の所有にすべきだという確固たる立場を堅持した。国の実情を見極めた主席は、「工場は労働者に」というスローガンを示し、工場委員会を広く組織して国有化の対象となっている産業施設と経済機関を掌握し管理・運営するようにし、それに対する人民政権機関の整然とした統制・管理システムも確立した。

主席は、このような成果を踏まえて1946年8月10日、『産業、交通運輸、逓信、銀行などの国有化に関する法令』を発布した。

法令では、日本国家と日本法人および私人の所有または朝鮮人民族反逆者の所有となっていた企業、鉱山、発電所、鉄道運輸、逓信、銀行、商業、文化機関などをすべて無償没収し、これを人民の所有、すなわち国有化することを宣言した。

主席は反帝反封建民主主義革命の段階に即して、重要産業の没収対象を日本帝国主義と民族反逆者の所有のみに限定する一方、法的に民族資本家の所有は保護するとともに、個人企業家、商人の経営活動を奨励した。

重要産業の国有化によって、全産業の90％以上におよぶ1034の重要産業施設が全人民の所有となった。

主席は、勤労者の民主主義的自由と権利を全面的に保障する改革にも大きな力を注いだ。

1946年6月24日、『北朝鮮の労働者、事務員に対する労働法令』を発布して労働者、事務員に初めて8時間労働制と、同一労働に対する同一賃金制、有給休暇制、社会保険制をはじめとする労働と休息の民主主義的自由と権利を全面的に保障した。

また、1946年7月30日には『北朝鮮男女平等権に関する法令』を発布して、人口の半分以上を占める女性に選挙権と被選挙権、労働と教育の権利をはじめ社会生活の各分野で男子と同等の権利を与えることを法的に保障した。

教育、文化、司法、検察の各分野においても、日本帝国主義植民地統治時代の古い制度と遺物を一掃し、民主的施策を実施して、朝鮮民族史上初めての人民的かつ民主的な教育・文化および司法・検察制度を確立した。こうして北朝鮮では短期間のうちに、反帝反封建民主主義革命の課題が立派に遂行された。

このようにして、北朝鮮には人民大衆の意思と要求を具現した朝鮮式の独創的な人民民主主義制度が確立され、革命的な民主基地が創設された。

主席は民主改革の実施とともに、民主的教育と文化の発展を促すための活動を指導した。

主席は、民族幹部陣容の強化を新しい朝鮮建設の主要な問題とし、その解決に大きな力を注いだ。

新しい民主朝鮮建設の道には言い知れぬ難関と試練が横たわり、なかでも民族幹部の不足は最大の難問となっていた。日本帝国主義の長年の植民地支配の結果、解放後の朝鮮には専門家や技術者が非常に不足していた。

主席は、民族幹部問題を革命と建設の成敗を左右する問題として重視し、その解決のため、古いインテリを教育、改造するとともに、勤労人民出身の新しい民族幹部を養成するという方針を提示した。

北と南に散り散りになっていた古いインテリを一人二人と探し

出して連れ戻し、新しい祖国の建設で知識と才能を思う存分発揮させるとともに、勤労人民出身の新しい民族幹部を養成するため1946年10月1日、金日成総合大学を創立し、それを母体として多くの大学と専門学校を開設した。同時に、新しい祖国の建設に切実に求められる党・国家経済機関の活動家を養成する中央党学校（金日成高級党学校の前身）、中央高級指導幹部学校（人民経済大学の前身）と、革命家の遺児を育成するための万景台革命学院を創立した。

主席は、民族幹部問題の解決とともに、民主的教育の発展にも深い関心を払った。

主席は、大衆運動によって学校建設を推し進め、学業条件を十分保障するようにした。1945年10月28日、平安南道大同郡龍山（リョンサン）面下里（ハ）七谷（チルゴル）の人民を訪ね、祖国の将来と次世代のために学校を多く建設しなくてはならないとし、中学校を建てる敷地を定め、学校の建設方向と方途を示した。その後、学校の建設が終わったという報告を受けた主席は、知・徳・体を備えた立派な人材を育成して国を興すという意味で、学校の名を「三興（サムフン）中学校」と命名した。

1946年2月20日、主席は北朝鮮臨時人民委員会第1回会議の議案として鉛筆問題を上程し、それを解決するための具体的な対策を立て、学用品や実験器具をはじめ教具・校具も十分に提供するようはからった。

1946年3月上旬、北朝鮮臨時人民委員会第4回会議で、教育の発展のため民主教育を担って立つ有能な教員を多数養成する対策を立て、同年4月5日の北朝鮮人民教員職業同盟結成大会をはじめ各機会に、進歩的民主主義の原則にもとづいて新しい教育システム

を確立する措置を講じた。そして1946年4月からは、革命家の遺児や貧困家庭の子女の授業料を免除する措置を講じた。

主席は、新しい民主朝鮮の文化を建設するための活動を指導した。

1946年5月下旬、北朝鮮各道人民委員会、政党、社会団体の宣伝員、文化人、芸術家大会で行った演説で、文化分野に提起される課題と方途を示した。

主席は、今日の朝鮮でのたたかいは武装闘争ではなく政治闘争であり、宣伝戦、文化戦であるとし、解放された朝鮮の文化人の使命と任務、文化宣伝活動を改善、強化するための課題と方途を示した。

民族文化を発展させるため、北朝鮮芸術総連盟と演劇団、中央交響楽団、各道芸術団体を組織して、日本帝国主義の民族文化抹殺策動のためペンを折ってうっ憤に身悶えていた作家たちや、舞台を奪われてさ迷っていた芸術家を組織的に結束させた。

民主改革の実施により国の津々浦々で変革が起こっていたとき、人民は、金日成将軍に対する頌歌をつくることを切望していた。

主席は、どうしてもというなら自身の歌よりも人民の歌を多くつくるようにと言ってそれに応じなかった。

しかし創作家たちは、抗日の女性英雄金正淑（キムジョンスク）の指導のもとに、革命頌歌『金日成将軍の歌』を立派に創作し、その6月に金正淑の参加のもとに初の試聴会を行い、8月には主席を迎えて中央交響楽団の公演でこの歌を公開した。

『金日成将軍の歌』は多大な反響を呼んで人民の間に広く普及していった。

主席は長編叙事詩『白頭山（ペクトウ）』の創作に大きな意義を付与し、数

次にわたって詩人に会い、時間をかけて抗日武装闘争の史実を語り、作品の内容と描出の方途に至るまで詳細に教えた。1947年1月には、創作された長編叙事詩を最後まで読み通し、立派な出来栄えだと称賛し、叙事詩の核心をなす普天堡(ポチョンボ)戦闘の場面をより上手に描き出して完成させる方向を示した。長編叙事詩が出来上がったという報告を受けた主席は、それを新聞や放送で普及し、詩集としても出版して広く宣伝させた。

主席は1946年9月下旬、作家たちに愛国歌を創作する課題を与え、その創作方向を示しながらこう語った。

「…わが国は実に美しい国です。3面が海に囲まれ、山は険しく荘厳な趣があり、田野には5穀が豊かに実ります。わが国には地下資源や金銀宝玉も無尽蔵にあります。朝鮮人民は5000年の長い歴史を持つ人民であり、輝かしい文化を誇る聡明な人民であります。このように美しい祖国と立派な闘争伝統を持つ朝鮮人民の民族的誇りと自負心を歌に盛り込まなければなりません」

この教えはそのまま愛国歌の歌詞となった。

1947年6月下旬『愛国歌』の試聴会に参加した主席は、詩句「きらめく文化　育てし」以下の部分をリフレーンにするのがよさそうだとし、そのようにすればメロディーの面から見ても効果的で音楽上の調和もよく取れるばかりでなく、歌がいっそう荘重になり、うたう人に民族的な誇りと自負心を植えつけることができると教えた。

このように崇高な愛国、愛族、愛民の思想が熱くこもっている『愛国歌』は、主席の細心の指導によって立派に完成された。

主席の主体的な民族文化建設方針と賢明な指導のもとに、文化

人たちはそのほかにも劇映画『わがふるさと』、油絵『普天堡ののろし』をはじめ数多くの作品を立派に創作することで、国の文学・芸術の発展に大きく貢献した。

第5節　正規の革命軍隊建設の準備

解放された朝鮮が完全な自主独立国家になるためには、国と民族を防衛する強力な民族軍隊を建設しなければならなかった。自民族の軍隊を持っていない国は完全な自主独立国家とは言えない。朝鮮が日帝侵略者に占領された原因の一つは、国政の腐敗にもあったが、強力な民族軍隊を持っていなかったことがより主要な原因であった。まして、久しい前から朝鮮を虎視眈々と狙っていたアメリカ帝国主義侵略軍が「解放者」の仮面をつけて南朝鮮に進駐することになったため、強力な正規軍を建設することは一刻の猶予もならない差し迫った課題であった。

金日成主席は1945年8月20日の演説で、いかなる難関に直面することになっても自力で正規の革命軍隊を建設するという方針を打ち出した。

主席は、抗日武装闘争の炎の中で鍛えられた抗日革命闘士を中核に、労働者や農民をはじめ勤労人民の子女からなる正規の革命軍隊を建設し、抗日の革命伝統を継承しなければならないと強調した。

当時、正規の革命武力を建設するには幾多の試練と難関があった。先進的な軍事科学と技術を身につけた軍事・政治幹部が不足

し、軍事装備を生産できる物質的・技術的土台もなかった。

主席は突き当たる難関を克服しながら、抗日武装闘争の炎の中で積みあげた軍建設の貴重な業績と経験にもとづき、自力で正規の革命軍隊を建設する準備を推し進めた。

解放直後、党の創立と政権の樹立をはじめどの分野でも求められるのは幹部であったが、主席は、金策（キムチェク）、崔庸健（チェヨンゴン）、安吉（アンギル）、姜健（カンゴン）、金一（キムイル）、崔賢（チェヒョン）、柳京守（リュギョンス）、呉白竜（オ ベンリョン）、趙政哲（チョジョンチョル）、崔春国（チェチュングク）など抗日革命闘士の大半を正規軍の建設に振り向け、その主役を果たすようにした。

同時に、正規軍の建設に必要な軍事・政治幹部を養成する基地を設けることに大きな力を入れた。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれがこれから新しい民主朝鮮を建設し、民族軍隊、近代的正規軍を創建するためには、何よりも多くの幹部が必要です。新しい朝鮮を担っていく幹部を速やかに育成することは今日、われわれにとって第一の革命課題であります。それゆえ、われわれは学院を創立し、近代的正規軍の根幹となる軍事・政治幹部を数多く養成しなければなりません」

主席は、正規軍の建設で緊切となっている幹部問題を解決するため、軍事・政治幹部養成基地の創設を発起し、その活動を指導した。

1945年11月17日、平安南道龍岡（リョンガン）郡多美（タミ）面智蔚（チウル）里に出向いて初の軍事・政治幹部養成基地となる学院の敷地を定め、その名を「平壌学院」と命名し、建設で提起される課題と教育活動の方向を具体的に示した。

主席は、学院の建設を速めるべきだと指摘し、まず兵舎から始

めて、講義室や訓練場、射撃場を整備し、建国室と食堂、病院、住宅、講堂もきちんと整えなくてはならないと述べた。

また、学院の教育目的を正しく設定し、それをあくまで実行すべきだとし、学院の教育は徹頭徹尾、朝鮮革命と人民に忠実に奉仕する革命的で人民的な教育となるようにし、学生に対する政治・思想教育を強化し、先進軍事科学と技術、大衆工作方法を教えるよう強調した。

こうして解放後3カ月の間に正規武力の建設に寄与する平壌学院が創設され、主席はその名誉院長となって学院の教育事業の指導にあたった。

1946年1月初め、主席は平壌学院の教職員、学生に初の講義を行い、2月23日には、開院式の祝賀演説で学院に提起される課題を提示した。

その結果、平壌学院は、創設されてほどなく正規の軍事・政治幹部養成の母体基地として強固に築かれ、1946年4月末に第1期卒業式が行われた。

主席は、平壌学院から軍事幹部養成の機能を分離して中央保安幹部学校を創設する措置を講じた。

主席は1946年4月、江西郡城岩面大安（カンソ　ソンアム　テアン）里に出向いて学校の敷地を定め、7月には平壌学院から分離して中央保安幹部学校を別途に設け、軍事指揮官を多数養成する課題を示した。同年8月中旬には、中央保安幹部学校に抗日革命闘士を責任幹部として派遣しながら、軍事幹部の養成において主体性を確立することの必要性を述べ、その後、数次にわたって学校を訪ね、他の国の方式をまねることなく朝鮮式の教育を行うよう強調した。

こうして、中央保安幹部学校の軍事教育は主体的観点に立って進められるようになり、軍事幹部養成の質的水準が一段と高まった。そして1947年10月下旬、第1期卒業式が行われた。

主席は、空軍と海軍の建設に必要な軍事幹部養成基地の創設にも深い関心を払った。

1946年3月中旬、平壌学院に航空班を設け、同年7月には水上保安幹部学校の敷地を定めて空軍と海軍の軍事幹部を計画的に養成できるようにした。

平壌学院を母体として各軍事幹部養成基地が強固に築かれることにより、正規軍の建設において最大の難問の一つとなっていた軍事・政治幹部の問題が解決された。

主席は、正規軍の中核部隊である保安幹部訓練所を設け、必要な軍種、兵種部隊を編制する活動を力強く推し進めた。

主席は1946年8月中旬、金策をはじめ抗日革命闘士たちに、中核部隊組織の原則と規模、位置などを示し、新設部隊の名称は保安幹部訓練所とし、指揮機関の名称を保安幹部訓練大隊部とするよう命じた。次いで9月初め、朝鮮人民革命軍の基本陣容と、平壌学院出身の多くの軍事・政治幹部を中軸に、解放直後に各地に組織された保安隊、国境警備隊、鉄道警備隊などを母体として保安幹部訓練所を設けた。9月中旬には、保安幹部訓練大隊部内に文化部を設けて、各訓練所への党の指導が円滑になされるようにした。

主席は保安幹部訓練所を組織した後、正規の革命武力の中核部隊としての面貌を整えることに深い関心を払い、その活動を現地で指導した。

1947年1月中旬、保安幹部訓練所第2所軍官会議で行った演説『保安幹部訓練所の当面の課題』で、祖国と人民を防衛し、党の正規革命武力の建設において、保安幹部訓練所を強化することの重要性と意義について強調し、訓練所の課題を示した。

まず、軍人に対する政治・思想教育を強めるべきであるとし、文化部は部隊内に党の政策伝達体系を確立し、各時期の党の路線と政策をそのつど軍人に伝えることによって、すべての軍人に党の政策の本質と正当性を把握させ、党の革命思想でしっかりと武装させなければならないと述べた。同時に、軍人に朝鮮人民革命軍隊員たちの百折不撓の革命精神を植えつける教育に力を入れなければならないと説いた。また戦闘訓練を強化して、すべての軍人が短期間内に先進的な軍事科学技術と戦闘組織法を体得し、兵器と戦闘技術機材を愛護し、部隊内に軍紀を確立し、上下間、同志相互間の革命的団結を強めるよう強調した。

主席は、正規軍の建設に必要な軍種、兵種部隊を組織する措置を講じた。

主席は1946年6月5日、沿岸警備を任務とする保安隊を水上保安隊と改名し、西海と東海にそれぞれ水上保安隊を組織して正規の海軍兵力を創設した。

新しい朝鮮の航空隊を建設するため、航空技術者と労働者、農民出身の青年で航空協会支部を設け、1945年12月には各支部を統合して朝鮮航空協会を結成した。そして1947年8月20日、平壌学院の航空班の卒業生と航空技術者たちで平壌学院飛行隊を組織した。こうして新しい朝鮮の空軍が誕生した。

主席は軍種部隊とともに、砲兵、工兵、戦車兵、通信兵など主

要な兵種部隊編制の準備にも力を注ぎ、既成の軍種、兵種の母体となる部隊を政治的、軍事的に強化して、祖国防衛において中核的役割を果たすようにした。

主席は、自立的な兵器工業の土台を築くことに深い関心を払った。

1945年10月初、平壌市平川（ピョンチョン）里に出向いて主体的な兵器工業創設の遠大な構想を示し、1947年6月下旬には兵器工場の開設に関する保安幹部訓練大隊部の命令を下達して、初の兵器工場の創設を宣言した。こうして同年10月初旬、初の国産自動短銃の試作品が生産された。

正規の革命武力建設の準備に心血を注いできた主席の先軍革命指導によって、解放後2年という短期間に近代的な正規軍を建設する準備が十分整った。

第6節　アメリカ帝国主義の南朝鮮占領と民族分裂策動を粉砕するためのたたかい

1945年8月、ソ連軍との共同で対日作戦に参加した朝鮮人民革命軍が日帝侵略軍を撃滅して破竹の勢いで進撃するや、朝鮮半島全体を併呑しようという野望を実現できなくなったアメリカは、朝鮮の半分だけでも占領しようと狡猾に策動した。当時、米軍は日本の沖縄戦線とフィリピン戦線に釘づけになっていたため、直ちに朝鮮半島に進出することは不可能だった。それでアメリカは窮余の一策として急遽、朝鮮駐屯日本軍の武装を解除するという美名のもとに、ソ米両軍の「武装解除分担線」なるものをでっち

あげた。

このように、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略野望と関係諸国の妥協により、朝鮮人民の民族分裂の悲劇のもとである38度線なるものが生まれることになった。アメリカ帝国主義は、「武装解除分担線」を口実に1945年9月8日、一発の銃声も発することなく南朝鮮を占領し、当初から軍政を布いた。

米軍は軍政の看板のもとに、南朝鮮各地に組織された人民委員会を銃剣をもって強制的に解散させ、親日派や民族反逆者を糾合して親米的な反動政党や団体をつくりあげ、すべての民主勢力を容赦なく弾圧した。そして「敵産払い下げ」という美名のもとに南朝鮮の主要な経済命脈を掌握して多くの工場を閉鎖し、農村の封建的搾取関係を保護し助長した。また、南朝鮮を軍事基地にするため日本帝国主義が設置した軍事施設を再整備し、傀儡軍をつくりあげるための準備を加速する一方、朝鮮人民の固有の民族文化を蹂躙、抹殺しながら、南朝鮮人民に退廃的で反動的なヤンキー文化と「アメリカ的生活様式」、崇米事大主義思想を広めた。

南朝鮮を永久占領して植民地化し、朝鮮民族の分裂を企むアメリカ帝国主義の策動は日増しに露骨になっていった。

そのため、解放された朝鮮人民には、アメリカ帝国主義の南朝鮮占領と民族分裂策動を粉砕するための新たな闘争課題が提起されるようになった。

金日成主席は、アメリカ帝国主義への幻想を排し、アメリカ軍政に反対する闘争を果敢に繰り広げるよう呼びかけた。

金日成主席は次のように述べている。

「わが国の植民地化を企むアメリカ帝国主義の策動が露骨にな

っている状況で、われわれがアメリカ軍政に反対してたたかわないならば、完全自主独立国家を建設できないことは言うまでもなく、朝鮮人民は再び亡国の民の悲惨な状態に陥るでしょう。3000万朝鮮人民はたとえたたかって死のうとも、アメリカ帝国主義者の奴隷になることはできません」

解放後、国の社会発展を阻み、朝鮮人民の自主独立国家の建設に障害をもたらしたのはほかならぬアメリカ帝国主義者であった。南朝鮮を占領して朝鮮人民に不幸と苦痛を与えたアメリカ帝国主義は朝鮮民族の不倶戴天の敵となったが、南朝鮮の少なからぬ人はアメリカが「連合軍」として対日作戦に参加したという事実と、李承晩をはじめ親米売国奴が流布した崇米事大主義思想のため、アメリカ帝国主義への幻想を抱くようになった。

このような実情を見極めた主席は、1945年9月下旬、南朝鮮から来た共産主義運動者との談話をはじめ機会あるたびに、アメリカ帝国主義の侵略的本性と民族分裂策動を暴露し、いかなる幻想や期待も抱かず、アメリカ軍政に反対してあくまでたたかわなければならないと説いた。

主席は、有利な情勢の到来を待ちながら闘争を控える右傾的な偏向と、力関係を正確に判断することもせず無謀なたたかいに乗り出す極左的な偏向をともに克服し、主・客観的条件にかなった正しい闘争スローガンを提示し、政治闘争と経済闘争、暴力闘争と非暴力闘争、合法闘争と非合法闘争といったさまざまな闘争形式と方法を巧みに併用することが必要であると強調した。

主席は、南朝鮮で各階層のすべての愛国的民主勢力を結束する活動を強力に推進するよう導いた。

主席は、南朝鮮の民主勢力を結束するため、指導的力量である真の労働者階級の党を建設することに第一義的な関心を払った。

1945年10月下旬、38度線を越えてきた南朝鮮共産党組織の幹部たちと話し合い、南朝鮮における党建設の問題について論じた。主席は彼らに、セクト主義を克服してすべての共産主義グループを網羅する党を建設することが急務であるとし、南朝鮮では党の階級構成を絶えず改善し、党を勤労大衆の中にしっかりと根を下ろした組織にし、党の隊伍の純潔性を保つことに深い関心を払うべきであると強調した。また1946年1月下旬には、南朝鮮共産党組織の責任者に書簡を送り、党を強化するために努力せず、地位欲に目が暗んでいる派閥分子と厳しくたたかい、党の隊伍を早急に整備するよう改めて促した。

こうして1946年2月、南朝鮮共産党が新たに組織されることになった。

主席はまた、南朝鮮の愛国的民主勢力を民主主義民族統一戦線に結集する活動に大きな意義を付与した。

主席は1945年12月20日に許憲（ホ ホン）に送った手紙の中で、派閥に反対してたたかうと同時に、各階層の愛国的民主人士が団結して広範な大衆を獲得し、民主勢力を拡大する闘争に力を集中するよう強調した。翌年の2月11日、平壌を訪ねた呂運亨（リョウンヒョン）に会い、南朝鮮の各階層の愛国的民主勢力を結集するためには、民主主義的統一戦線を結成しなければならないとし、その構成原則と闘争方向を示した。そして、南朝鮮の共産主義者と力を合わせていち早く民主主義的な統一戦線を結成するために奮闘するよう強調した。

主席の徹底した民族統一戦線思想とこのうえない抱擁力に感化

された南朝鮮の愛国的民主人士や中間政治勢力は、統一戦線を実現する道に合流し、1946年2月に南朝鮮民主主義民族戦線が結成された。

主席は、モスクワ3国外相会議の決定を支持する運動を呼びかけた。

1945年12月、モスクワでのソ・米・英3国外相会議では、第2次世界大戦後国際的に処理すべき一連の問題を討議し、朝鮮問題に関する決定を採択した。

この決定によれば、朝鮮を独立国家として復興させることを展望して、朝鮮の政党や社会団体との協議のもとに民主主義的臨時政府を樹立し、朝鮮が独立国家として民主的・自主的発展を遂げられるようにするため、ソ・米・英・中の4カ国が5年以内の後見制を実施することになっていた。

ところがアメリカ帝国主義と反動分子、一部の政治勢力は、この決定を「信託統治」のための決定かのように事実を歪曲し、決定に反対する「反託」運動を繰り広げた。3国外相会議の決定に対する態度は、統一的な民主主義的自主独立国家建設を支持するかどうか、即ち朝鮮の明日の運命にかかわる重大な政治的問題であった。

主席は1945年12月31日、北朝鮮共産党中央組織委員会部長協議会で、朝鮮を民主主義的独立国家として復興、発展させることを予見したのが3国外相会議の決定の真意であるとし、朝鮮に民主主義的臨時政府を樹立するということは、党の政治路線と民主主義的自主独立国家の建設を志向する朝鮮人民の要求にも合致するものであると言明した。そしてアメリカ帝国主義と南朝鮮反動派

の「反託」謀略を暴露し、モスクワ3国外相会議の決定を支持する運動を広範に展開する措置を講じた。

こうして、1946年1月初めから全朝鮮的規模でモスクワ3国外相会議の決定を支持する運動が強力に展開された。北朝鮮では1月2日、共産党、独立同盟、労働組合、民主青年同盟、民主女性同盟、平安南道農民委員会の六つの政党、社会団体の共同声明が発表され、平壌と各地方で3国外相会議の決定を支持する大衆集会とデモが行われた。ソウルでも1月3日、共産党をはじめ民主的政党・社会団体共催の3国外相会議の決定を支持する市民大会が開かれた。南朝鮮でアメリカ帝国主義とその手先にだまされて「反託」運動に乗り出した政治勢力と、中立を守っていた人たちも、この決定の真意を理解して方向を転換するようになった。

主席はまた、親米的な単独政府をでっちあげようとするアメリカ帝国主義の策動を粉砕するために大きな力を注いだ。

モスクワ3国外相会議の決定によって、1946年3月20日から朝鮮臨時政府の樹立問題を討議するためのソ・米共同委員会がソウルで開かれた。

主席はこれに関連して、1946年3月23日のラジオ演説で、ソ・米共同委員会は朝鮮人民が切実に求める統一的臨時政府を樹立する問題を解決すべきであるとし、臨時政府が実施すべき「20カ条政綱」を発表した。

政綱には、日本帝国主義支配のあらゆる残滓を一掃し、人民に真の自由と政治的権利を保障し、民主改革と施策を実施するという基本的要求が全面的に反映されていた。

ソ・米共同委員会は2回にわたって行われたが、朝鮮に統一的

な民主主義的臨時政府ではなく親米的な単独政府をでっちあげようとするアメリカ帝国主義の策動によって破綻した。

このような実情に即して、主席は北朝鮮で「20カ条政綱」を徹底的に実践し、これによって統一政府樹立に向けた強固な土台と有利な条件が整った。

主席が示した「20カ条政綱」と反米救国闘争方針を支持して、南朝鮮人民はアメリカ帝国主義の植民地従属化政策と民族分裂策動に反対し、民主改革を要求するたたかいに立ち上がった。

南朝鮮人民のたたかいは1946年夏に入ってさらに盛り上がった。6月初めの三陟（サムチョク）炭鉱労働者のストをはじめ、各地での8・15解放1周年記念闘争、光州和順（クァンジュファスン）炭鉱労働者の闘争、各地農民の「夏穀徴収」反対闘争、青年学生の「国大案」反対闘争など各階層人民の闘争が相次いで展開された。彼らは当面の生活面の要求だけでなく、米軍政の暴圧反対、労働組合活動の自由、北朝鮮のような民主改革の実施、統一的な民主主義的臨時政府の樹立といった政治的スローガンを掲げて強力な闘争を展開した。

南朝鮮人民の闘争は、1946年秋に入って大規模な闘争へと発展した。

9月に4万名に及ぶ鉄道労働者は、食糧の保障、賃上げ、米軍政暴圧の即時中止、北朝鮮のような民主的労働法令の実施などを要求して大衆的なストを決行した。これに呼応して南朝鮮の他の産業、運輸部門の労働者もストを決行し、学生や事務員、市民も闘争に合流した。労働者のゼネストは、数百万大衆の積極的な支持を得て南朝鮮全域へと急速に拡大していった。

主席は1946年9月下旬、北朝鮮労働党中央委員会常務委員会を

招集し、南朝鮮労働者の闘争を支持、声援する大衆運動を展開する措置を講じた。

この措置により、北朝鮮の労働者と事務員、文化人は、南朝鮮労働者の闘争を支持、声援する大衆集会やデモを行い、南朝鮮労働者に援護金を送った。

10月に入り、南朝鮮労働者の闘争は全人民的な反米救国抗争へと発展した。闘争に決起した人民は「アメリカ帝国主義の植民地従属化政策反対！」、「政権を人民委員会へ！」、「北朝鮮のような民主改革を実施せよ！」などのスローガンを掲げて各地でデモ、スト、暴動を起こし、警察署や郡庁などの弾圧機関を襲撃し、反動的警官と悪質官吏に懲罰を加えた。抗争には南朝鮮全域で230余万名の愛国的人民が参加した。

しかし闘争は、アメリカ帝国主義の野獣じみた弾圧と分派分子の破壊・謀略策動により、相応の成果を上げることができず鎮圧された。アメリカ帝国主義は「戒厳令」を布き、多くの侵略軍と武装警察隊を動員して人民を手当たり次第に拘束、投獄、虐殺した。朴憲永（パクホンヨン）徒党は大衆を無謀な暴動に駆り出して多くの人々を犠牲にし、党組織と革命組織を破壊させた。

南朝鮮人民の英雄的な9月ゼネストと10月人民抗争は、アメリカ帝国主義とその手先に甚大な打撃を加え、その植民地統治基盤を根底から揺さぶり、労働者階級をはじめ人民大衆の革命性と団結の威力を誇示した。

第7節　勤労人民の大衆的党――労働党の創立

金日成主席は共産党の指導のもとに民主主義革命が成功裏に進展するに伴い、共産党を勤労人民の大衆的党に発展させる活動を推し進めた。

共産党を勤労人民の大衆的党に発展させることは、党自体の発展の合法則的な要請であった。これは国内に共産党とともに勤労者を含む諸政党が存在していた解放直後の実情と関連してより切実な問題であった。北朝鮮には共産党と新民党が、南朝鮮には共産党と人民党、新民党がそれぞれ組織されており、こうした勤労者党の存在は勤労大衆の統一・団結に支障をきたしていた。このような実情の中、勤労大衆の統一を成し遂げるためには、各勤労者党を合同して一つの大衆的な党に組織する必要があった。

これは、変化した社会階級関係の要請でもあった。当時、北朝鮮に人民政権が樹立され、民主改革が実施される過程で、労働者階級の指導的地位は一段と確固としたものとなり、労働者階級と農民、インテリの同盟が強化され、新しい民主朝鮮の建設において利害関係をともにするようになった。そして、共産党の当面の闘争綱領と他の勤労者党の綱領もおおよそ一致していた。

主席は1946年6月26日、南北朝鮮共産党責任幹部協議会で勤労大衆の大衆的党を創立するという方針を打ち出した。

金日成主席は次のように述べている。

「現段階において勤労人民の大衆的党を創立する活動は、南北朝鮮の情勢と闘争任務が異なる条件のもとで、北朝鮮と南朝鮮で

それぞれ別々に行うことが必要です。北朝鮮では共産党と新民党が合同して勤労人民の大衆的党を創立し、南朝鮮では共産党と人民党、新民党が合同して勤労人民の大衆的党を創立するのがよいと思います」

主席は、勤労人民の大衆的党創立に関連して提起される原則的な問題を明らかにした。

主席は、党を合同してもその革命的性格は変わらないということを明らかにした。また共産党が他の勤労者党と合同するとしても、党の指導思想と党の組織原則は変わることはないと強調した。

主席は、党を合同した後はその隊伍をより広範な範囲に拡大すべきだとの方針を示した。党が鍛えられた共産主義者のみを受け入れるなら大衆的な党に発展することはできないとし、労働者、農民、勤労インテリの中で新しい祖国の建設に貢献する民主主義的な先進分子であれば誰を問うことなく入党させなければならないと述べた。

そして党の中核隊伍を打ち固め、引き続き拡大させるべきであると述べた。そして、党が大衆的な党に発展し、党の隊伍が急速に拡大される過程で、党員の間に思想・理論水準と活動能力において格差が生じかねないとし、中核党員を育成し、その役割を高めてこそ、党員の全般的な水準を早く引き上げ、党を質的に強化することができる、と述べ、党の中核を引き続き育成することを党の一貫した組織路線として提示した。

そして勤労人民の大衆的党を創立することは、共産党と他の勤労者党との合同を成し遂げる問題であるため、共産党の意思を他の政党に押しつけようとしてはならず、すべての問題を慎重に処

理しなければならないと指摘し、合同して新しく創立される党で共産主義者は高い地位を望んではならず、党首といった地位は人民党か新民党に譲歩すべきだと強調した。

主席は北朝鮮で党の合同を極力推し進めた。

まず、共産党員と新民党員の間で合同の必要性と正当性を正しく認識させることに深い関心を払った。

1946年7月中旬、新民党と南朝鮮共産党の責任幹部に会い、勤労大衆の分裂を防ぎ、革命勢力の決定的な優位を確保するためには、共産党と他の勤労者党が合同しなくてはならないと説諭した。

こうして、北朝鮮の朝鮮新民党は合同を支持する立場を公式に表明し、共産党に送る合同提議書が『正路』に掲載された。

主席は7月下旬、北朝鮮共産党中央委員会常務執行委員会で、北朝鮮共産党と朝鮮新民党の合同問題について討議し、新民党に返書を送ることにした。両党合同の基本的な合意がなされると、7月27日の北朝鮮共産党中央委員会第8回拡大執行委員会で、両党中央委員会連席会議に提起する報告と合同声明書、合同後の党の名称、綱領と規約草案、指導機関選挙細則などを討議した。

主席は、両党の合同があくまでも民主主義的原則を踏まえて行われるようにするため、7月末の北朝鮮共産党および朝鮮新民党中央委員会連席会議と拡大連席会議で、創立される党の綱領と規約、指導機関選挙細則、合同声明書の草案に、両党党員の意思と要求が反映されるよう十分に討議をしたうえで、合同の決定を採択するようにした。そして両党の連席会議後、党の綱領と規約草案、合同声明書を両党の下級党組織の討議にかけ、合同を細胞か

ら上部組織へと行っていくようにした。

このようにして、8月初めから両党の各級組織では拡大委員会を開いて、両党の連席会議で採択された決定書と合同声明書を通過させ、党の綱領と規約草案に対する討議を進めた。両党の合同細胞総会、市・郡党および道党代表者会議が順次開催され、8月末までの1カ月という短期間に労働党の各級地方組織が生まれるようになった。

主席はこのような土台を踏まえて、1946年8月28日から30日にかけて北朝鮮労働党創立大会を招集し、『勤労大衆の統一的党を創立するために』と題する報告で労働党の性格と基本的任務、闘争課題を提示した。

主席は、労働党は勤労大衆の利益を代表し擁護する先鋒隊であり、現段階における党の基本的任務は反帝反封建民主主義改革を遂行し、民主主義人民共和国を樹立することであると言明した。

主席は党を強力な戦闘部隊にするための課題を示しながら、党隊伍の思想・意志の統一と純潔性、鉄の規律を確固と保障し、党と大衆との結びつきを強固なものにし、党の政策と決定を大衆の間に浸透させ、幹部問題に最大の関心を払うことを強調した。

大会では、党の綱領と規約を採択し、党機関紙として『労働新聞』と政治理論雑誌『勤労者』の発刊を決定した。

党マークの制定問題を重視した主席は、図案に労働者、農民、インテリを象徴するハンマーとかま、筆を描くようにした。

分派分子は党マークにハンマーとかまとともに筆を入れることに反対した。

主席は彼らに、インテリなくしては革命も国の建設も進めるこ

とはできない、古い社会を打ち壊して権力を獲得するたたかいでもインテリは必要であり、新しい社会を建設するにもインテリはなくてはならず、知識と技術を身につけたインテリと手を取り合ってこそ、革命も建設も進めることができるのだと説いた。

このようにして、ハンマーとかま、筆が記された党マークが制定され、党は勤労人民の利益を統一的に代表する唯一の大衆的党に発展するようになった。

主席は南朝鮮における党の合同にも深い関心を払った。

南朝鮮での党の合同は、アメリカ帝国主義とその手先の破壊・謀略策動と分派分子の分裂策動によって、厳しい試練を経なければならなかった。アメリカ帝国主義とその手先は、共産党や人民党、新民党への弾圧に狂奔し、スパイ、謀略分子を潜入させて内部から瓦解させようと策動した。

主席は1946年9月下旬に発表した歴史的な著作『北朝鮮労働党の創立と南朝鮮労働党の創建問題について』で、南朝鮮における党の合同を妨害する分派分子の罪業を辛辣に暴露、批判し、合同を早急に進めるよう強調した。

こうして1946年11月、南朝鮮労働党が組織された。しかし、朴憲永一味をはじめ分派分子の分裂策動によって南朝鮮では党の合同が形式的に行われ、南朝鮮労働党は勤労大衆の統一的党としての役割を果たすことができなかった。

主席は、南朝鮮労働党が分派分子の分裂主義的な策動を粉砕し、相応の役割を果たせるようにするため心血を注いだ。

第8節　建国思想総動員運動と増産競争運動、識字運動

旧社会が残した思想、技術、文化の立ち後れと経済的難関を克服して新しい祖国建設の壮大な課題を立派に遂行するためには、建国偉業の主体である勤労人民大衆の思想・意識を改造し、彼らの創造力を発揮させるさまざまな大衆運動を展開しなければならなかった。

金日成主席は新しい祖国建設を推し進めるために、愛国的な大衆運動である建国思想総動員運動、増産競争運動、識字運動を力強く展開するようにした。

まず、建国思想総動員運動を正しく導いた。

主席は解放直後から人民大衆の間で、日本帝国主義の思想的残滓を一掃して民族自主意識と建国思想を植えつけることを思想改造の主要な問題とし、党のすべての政治思想活動をそれに集中させた。

建国思想教育活動の進捗に伴い、人民の思想・意識に大きな変革が起こり、新しい民主朝鮮建設に貢献しようという人民大衆の政治的情熱は著しく高まっていった。しかし、反帝反封建民主主義革命によってつくりだされた新たな社会的・経済的状況に比べて人々の思想・意識水準は後れていた。人々の頭には日本帝国主義によって植えつけられた古い思想の影響と生活慣習がかなり残っていた。こうした古い思想の影響と生活慣習を一掃せずには、民主改革によってもたらされた新しい社会経済関係を強固にし、革命と建設をより高い段階へと発展させるこ

とはできなかった。

主席は建国偉業遂行の鍵を思想改造に求め、1946年11月25日、北朝鮮臨時人民委員会第3回拡大委員会で、思想・意識分野で一大変革を起こすための建国思想総動員運動を発起した。

金日成主席は次のように述べている。

「…全国的に広範な人民大衆の間で建国思想総動員運動を力強く推し進め、古い思想・意識を改めるためのたたかいを繰り広げるべきです」

建国思想総動員運動は日本帝国主義が残した不健全で退廃的な因習や生活態度を一掃し、新しい民主朝鮮の活動家にふさわしい精神と風格、道徳と戦闘力を全面的に培い、生気にあふれ躍動する民族的気風を創造する全人民的な一大思想改造運動であった。

この運動における主な対象は、人々の意識に残っている日本帝国主義と封建主義の思想的残滓と悪習である奴隷的屈従思想、事大主義思想、民族虚無主義思想、官僚主義、利己主義と、不健全かつ退廃的で享楽主義的な悪い習慣であった。この運動の思想教育における基本的内容は、人民大衆に自力で困難を克服し、主人としての立場で新しい国づくりに臨む自力更生の革命精神と、個人の利益よりも社会全体の利益を重んじ、国家と社会財産を愛護する崇高な愛国主義思想を身につけさせ、すべての人々が互いに助け導き合う集団主義にもとづいた人民的道徳を培うことであった。

主席はこの運動の方途を示し、全党的、全人民的な運動として新しい祖国建設をめざす人民大衆の実践闘争と緊密に結びつけて

進めるよう導いた。

建国思想総動員運動を推し進めるために、1946年12月の北朝鮮労働党中央委員会第14回常務委員会と北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会第8回会議で、思想・意識改造のための具体的な課題を示し、この運動を全人民的な運動として実践と結びつけて推し進めた。そして、北朝鮮臨時人民委員会が建国思想教育の基本的内容と宣伝形式、方法を具体化した「建国思想総動員宣伝要綱」を策定して下達するようにした。同時に、建国思想総動員運動の方針と遂行方途を勤労者に広く説明し、その貫徹をめざす実践の過程で見られる模範となる事実をそのつど伝えるようにした。

主席は、この運動が思想教育と思想闘争の方法によって深められるよう実質的な措置を講じた。

党、国家経済機関、司法・安全機関、社会団体と工場、企業、居住区域など各部門、各単位で思想教育と思想闘争が行われた。その過程で、個人主義、利己主義、享楽主義、腐敗・堕落した行為、官僚主義、無責任な態度などが厳しく批判され、敵対分子、異分子が摘発された。そして幹部の責任感はいっそう強くなり、活動態度と作風が改善され、人民大衆の建国意識や政治的自覚、愛国的熱意と積極性はかつてなく高揚した。

主席は、建国思想総動員運動を新しい民主朝鮮建設をめざす実践闘争と緊密に結びつけて繰り広げるよう導いた。

労働者は「その日の仕事はその日のうちに成し遂げよう！」というスローガンを掲げて建国思想を実践に移し、増産の火の手を上げた。定州（チョンジュ）機関区の労働者は愛国的献身性を発揮し、破壊さ

れた機関車を修理して列車の運行を正常化し、輸送能力を高めるための愛国的増産運動ののろしを上げた。

主席は1947年1月20日、彼らに感謝の手紙を送り、その創造的愛国運動をその先駆者の名をとって「金会日（キムヘイル）運動」と命名し、全国のすべての鉄道部門の活動家と労働者をこの運動に決起させた。その結果、この運動は人民経済のすべての部門、すべての単位に波及した。

建国思想を具現するための愛国運動は農民の間でも繰り広げられ、国の困難な食糧問題を解決するための愛国米献納運動として展開された。

主席は30俵の愛国米を献納した金済元（キムジェウォン）農民の愛国的行為を高く評価し、全国の農村では大衆的愛国米献納運動が展開された。

建国思想総動員運動は、勤労者の思想・意識の改造に一大変革をもたらし、朝鮮での思想革命の発端となった。

主席は大自然改造事業と増産競争運動を指導した。

主席は、人民の熱意を最大限に引き出して新しい朝鮮建設の途上に横たわる難関を打開するため、大自然改造事業に人民大衆を立ち上がらせた。その最初の事業として、普通江（ポトン）の改修工事を発起し、幾度も現地に出向いて設計を検討して工事を進める具体的な方途を示し、1946年5月21日には自ら着工式に参加して激励の辞を述べ、くわ入れのシャベルを取った。

日本帝国主義が10年という年月をかけても完成できなかったこの工事を、平壌市民はわずか55日間で完成させた。その結果、平壌を水害から守り、市民の生命と財産を保護できるようになった。普通江改修工事は、朝鮮における大自然改造の新たな歴

史を開いた序曲であり、自然を改造するたたかいの第一歩となった。

三神(サムシン)運炭線工事、端川(タンチョン)港修築工事、鴨緑(アムロク)江護岸工事、龍興(リョンフン)江改修工事、海州築港工事など幾多の工事場でも相次ぐ奇跡と革新がもたらされた。

主席は造林事業を大衆運動として推し進めるよう導いた。

主席は1946年3月2日、金正日(キムジョンイル)と金正淑を伴って牡丹(モラン)峰に登り、造林事業を推し進めるための方針を示した。翌年4月6日には紋繍(ムンス)峰で手ずから植樹を行いながら、大衆あげての運動で造林事業を行い、すべての山がうっそうたる樹林で覆われるようにし、国を美しい楽土にかえようと人々に呼びかけた。

全人民は造林事業にこぞって立ち上がり、祖国の山河は日増しに新しい民主朝鮮の山河にふさわしいものとなった。

主席は、日本帝国主義によって破壊された経済を一日も早く復旧し、発展させるための愛国的増産競争運動を繰り広げるよう指導した。

1946年2月15日、北朝鮮共産党中央組織委員会第4回拡大執行委員会で、愛国的な増産競争運動形態としての労働英雄運動を提唱し、この運動をすべての工場、鉱山、農村で幅広く展開するようにした。

労働英雄運動は全国のすべての工場、企業と農村に拡大された。1947年1月1日現在、黄海製鉄所をはじめ822の工場、企業が復旧されて操業を開始し、穀物は前年より340余万石増の1450余万石が生産された。

主席は人民経済を全面的に復興、発展させるべき新たな要請に

即して、労働英雄運動を大衆的増産競争運動へと発展させていった。その過程で勤労者は、高い建国熱意と自力更生の革命精神を発揮して破壊された生産施設を復旧し、数多くの創意考案と技術革新案を導入して空前の高揚を起こした。

増産競争運動は朝鮮における技術革命の端緒となった。

主席は勤労者の間で識字運動を力強く展開するよう導いた。

日本帝国主義の植民地愚民政策の後遺症により、解放直後の北朝鮮では230余万名の成人が文字の読み書きができなかった。非識字者をなくさなければ勤労者の文化・技術水準の向上や民族文化の発展は言うまでもなく、彼らを政治的に目覚めさせ建国事業に動員することもできなかった。

主席は識字運動を新しい民主的文化建設の第一義的な課題とし、1945年11月17日、識字運動を展開する方針を打ち出した。

主席は「人民文化の向上は識字運動から！」というスローガンを示し、この運動を党と国家の指導のもとに全社会的、全人民的な運動として推し進めるようにし、その段階別の課題と方途を示した。

1946年11月、冬季農村識字運動に関する北朝鮮臨時人民委員会の決定によって、同年12月から翌年3月までの4カ月の間に識字運動を大衆運動として広範に推し進めた。都市や農・漁村、工場、企業など至るところに成人学校を設けるとともに、中央と道、市、郡、面に識字指導委員会、里には識字班を組織した。そして各政党、社会団体、文化団体の活動家と各級学校の教員、学生を派遣して集中的な識字運動を展開させた。

1947年12月から翌年3月までを識字運動を大々的に展開する期

間とし、識字運動のモデルケースをつくり、それを全国に広める措置を講じた。

主席は1947年8月初、江原道平康郡西面玉洞里（カンウォン　ピョンガン　ソ　オクトン）の主婦李桂山（リ　ゲ　サン）に会って彼女が非識字者であることを知り、読み書きができてこそ生きがいがあり、国のために尽くすことができると諭し、今からでも遅くないから懸命に文字を習い、その状況を手紙に書いて寄こし、全人民に識字運動を力強く展開することを呼びかけるよう言い聞かせた。それから3カ月後、読み書きができるようになったという彼女の素朴な手紙を受け取った主席は非常に満足し、称賛と激励を込めた返信を送り、その模範を見習う「李桂山運動」を展開するようにした。

大衆あげての識字運動である「李桂山運動」は全国に波及し、解放後3年もならない間に200万人以上の勤労者が非識字状態から脱した。

主席は1948年5月下旬、中央識字運動展覧館を見て回り、識字運動で達成した成果をさらに強固にするための課題を示し、1948年12月から1949年3月までを第2回冬季識字および成人再教育キャンペーン期間として設定し、識字運動を全国的規模で今一度繰り広げて非識字者を完全になくすようにした。

主席の教えに従い、北朝鮮の各地では、「知識は力、無知は滅亡！」、「学びに学んで、さらに学ぼう！」というスローガンのもとに老若男女を問わず識字運動に広く参加した。その結果、1949年3月に至って全国的に非識字者を完全になくし、朝鮮は東洋で初の非識字者のいない国となった。識字運動は朝鮮での文化革命の端緒となった。

建国思想総動員運動と増産競争運動、識字運動は、勤労者の自主性を束縛していた古い思想の残滓と技術・文化の立ち遅れを一掃し、新しい民主朝鮮建設の推進に大きく寄与した。この運動から始まった思想、技術、文化の3大革命は社会発展の強力な推進力となった。

第6章　社会主義への過渡期初期の課題遂行と統一的中央政府樹立のためのたたかい
（1947年2月～1950年6月）

第1節　社会主義への過渡期初期の課題を提示、北朝鮮人民委員会の創設

金日成（キムイルソン）主席は、北半部で反帝反封建民主主義革命が完遂されると、社会主義革命へ移行する方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「労働者階級の指導する反帝反封建民主主義革命が引き続き社会主義革命へ移行するのは、革命発展の合法則的過程であります」

反帝反封建民主主義革命が遂行された後、北朝鮮には小商品経済形態と資本主義的経済形態が少なからず残っていた。このような経済形態を存続させては、勤労者に対する搾取と貧困の根源をなくすことはできず、国の経済全般を計画的かつ急速に発展させることもできなかった。そして労農同盟にもとづく全人民の統一、団結を強化することも、反動分子が足場をつくって蠢動する基盤と古い思想の温床を取り除き、革命の政治的基盤を強化することもできなかった。これは、ただ社会主義革命を通じてのみ解決することができるのであった。

主席は社会主義革命において提起される基本的課題を明示した。

社会主義革命は人間による人間の搾取を最終的になくし、人民大衆の社会的・政治的自主性を実現し、社会発展の新しい道を開く重大な社会的変革である。

主席は、社会主義革命における第一義的な課題は社会主義政権を立てることであり、社会主義的生産関係の全一的支配を確立することであると説いた。

そして、生産関係の社会主義的改造は、資本主義から社会主義への過渡期の初期においては主にその準備を進めながら部分的に行い、人民大衆が古い生産関係の改造を切実に求め、それを遂行できる力が十分に整ったときに全面的に推進すべきであると指摘した。

主席は、社会主義革命の任務遂行に合わせて人民政権をさらに強化、発展させる活動を指導した。

主席は1946年9月25日の北朝鮮労働党中央委員会第2回会議をはじめ一連の会議で、社会主義政権建設に関する独創的な方針を示した。

それは、臨時の性格を帯びる人民委員会を、社会主義革命の任務遂行に合わせて強化、発展させる方法で社会主義政権を樹立するという方針であった。

反帝反封建民主主義革命の遂行によって、北朝鮮臨時人民委員会の階級的基盤が強化され、勤労人民大衆が幸福な生活をもたらした人民政権を絶対的に信頼し支持していたことは、人民政権を社会主義政権に発展させる十分な条件と可能性をもたらした。

主席は、人民政権を社会主義政権に発展させる最も合理的な方

途は民主的選挙を実施することであると強調し、民主選挙を勝利に導いた。

主席は選挙を成功裏に行うため、1946年9月初めの北朝鮮臨時人民委員会第2回拡大委員会で各級地方人民委員会委員選挙に関する規定を制定し、それに従って11月3日に北朝鮮全地域で道・市・郡人民委員会の委員選挙を実施する決定を採択するようにした。そして同年9月、北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会第5回会議と北朝鮮労働党中央委員会第2回会議で、人民委員会委員選挙の意義と朝鮮の選挙制度の進歩的内容と選挙の宣伝を積極的に繰り広げる問題について述べ、民主主義民族統一戦線（民戦）で民主的政党・社会団体の代表が人民委員会の委員候補を共同で推薦するようにした。同時に中央と地方に選挙委員会を設け、選挙活動全般を統一的に指導するようにした。

主席は1946年10月、平安(ピョンアン)北道の義州(イジュ)、朔州(サクチュ)、亀城(クソン)、定州(チョンジュ)など各郡の選挙準備活動を現地で指導し、選挙の勝利へと人民を奮い立たせた。

1946年10月中旬には平安南道人民委員会の委員候補に推薦された江東郡(カンドン)三登(サムドゥン)面に出向いて、すべての有権者が選挙に参加し、人民主権をしっかり固めるよう呼びかけた。

この日、三登面の人民は、奪われた祖国を取り戻し、張り合いある新しい生活をもたらしてくれた主席への感謝の表示として、会議場入口の道に真心を込めて準備した木綿布を敷いておいた。主席は人民の服となるこの布を踏むことはできないと述べ、布を片付けた後に会議場に入った。

主席は選挙を破綻させようとする反動分子の策動を粉砕するた

たかいを力強く推し進めた。

選挙運動の開始とともに、南朝鮮の反動勢力と北朝鮮のかつての地主、資本家、民族反逆者など階級の敵は、民主選挙を破綻させようとさまざまのデマを流し、民戦で共同推薦した人民委員会委員候補に反対投票するよう陰で扇動し、宗教者の選挙参加を妨げようと卑劣な策動をめぐらした。

主席は彼らの策動を暴露、糾弾し、人民の間で警戒心を高めるようにする一方、人民の政治的熱意をいっそう高めるため各地で民主選挙を祝う大衆集会を催すようにした。最初の民主選挙の日には、平壌（ピョンヤン）市第6号選挙区第52号分区に出向いて労働者出身の候補に賛成票を投じた。

朝鮮人民の歴史において初めての道・市・郡人民委員会委員選挙は大きな勝利を収めた。有権者の99・6％が選挙に参加し、その96％が人民委員会委員候補に賛成票を投じた。

主席は民主選挙の勝利にもとづき1947年2月、北朝鮮道・市・郡人民委員会大会を招集し、最高主権機関である北朝鮮人民会議を創設した。

主席は2月下旬に開かれた北朝鮮人民会議第1回会議で、革命発展の新たな要請に応じて北朝鮮臨時人民委員会は、その政権を最高主権機関である北朝鮮人民会議に委譲すると言明した。

会議では全人民の一致した意思と念願によって、主席が北朝鮮人民委員会委員長に推戴された。主席は北朝鮮人民会議の委任により北朝鮮人民委員会を組織した。

北朝鮮人民委員会は、朝鮮に樹立された初の社会主義政権であり、その重要な任務は全国的規模で反帝反封建民主主義革命の課

題を遂行するためにたたかいながら、北半部で漸次、社会主義へ移行する過渡期の任務を遂行することであった。北朝鮮人民委員会は、北朝鮮人民政権の最高執行機関であった。

北朝鮮人民委員会の樹立後、主席は面・里（洞）人民委員会委員選挙を実施する措置を講じ、各級地方人民委員会を新たに構成した。

主席の指導のもとに中央から地方に至るまで整然とした体系を備えた人民委員会が創設され、革命と建設を成功裏に遂行できる強力な武器がもたらされた。

第2節　自立的民族経済建設路線を提示、人民経済の復興発展をめざすたたかい

金日成主席は国の完全な自主独立と富強発展を成し遂げるため、自立的民族経済建設の路線と党の経済政策の基礎を明示した。

主席は1946年10月の科学者、技術者大会と12月の各道人民委員会産業部長および国営企業所支配人会議、そして翌年2月の北朝鮮道・市・郡人民委員会大会などの会議で、自立的民族経済建設路線を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「国家の完全自主独立と発展を成し遂げるためには、自立的民族経済を建設して経済の自立性を確立しなければなりません」

主席は自立的民族経済建設の基本内容と方途を明示した。

国の経済が総体的に立ち後れ、それさえも甚だしく破壊されて

いる実情において、経済建設の第1段階を復興期と規定し、この時期の経済建設の基本的方向を示した。

復興期の経済発展において重要なのは、破壊された経済を復興するだけでなく、植民地的跛行性と奇形性を一掃し、国営部門が経済全般で支配的な地位を占めるようにすることであると指摘した。

そして、これを実現するためには当分の間、現有の重工業部門の工場を復旧して人民経済の発展に必要な機械設備と原料、資材を生産する一方、軽工業部門を新たに創設して重工業との均衡を保ち、同時に農業を急速に発展させなければならないと強調した。

主席は主要経済部門に対する国家の直接的な計画的管理を実施し、国営部門の指導的役割を絶えず強めて、国営部門と協同組合部門、私営部門を正しく結合させることを過渡期初期の党の経済政策の基礎とした。

経済を計画的に管理しなければ、経済を国の実情に即して合目的的に発展させ、人民経済各部門の均衡と生産の成長を早めることはできず、自立的民族経済を成功裏に建設することもできなかった。また国営部門の指導的役割を高めなければ、国の経済を社会主義の方向へと発展させることはできず、協同組合部門と私営部門を正しく導くこともできなかった。

主席は過渡期初期の党の経済政策にもとづき、人民経済計画の遂行へと全党と人民を立ち上がらせた。

主席は最初の人民経済計画を遂行するたたかいを指導した。

1946年下半期から最初の人民経済計画の基本的指標を一つひと

つ確定し、それにもとづいて1947年2月中旬の北朝鮮道・市・郡人民委員会大会で、1947年度の人民経済計画を発表した。

1947年度人民経済計画の基本的課題は、工場、企業を復旧、操業して工業生産を前年度の192％、穀物生産は118・6％にそれぞれ高め、人民の生活を速やかに安定させることであった。1947年度の人民経済計画は朝鮮で初めての経済計画であり、民主主義的自主独立国家建設の基礎を強固に築く経済建設綱領であった。

日本帝国主義から受け継いだ経済は非常に立ち後れ、それさえ甚だしく破壊されたうえ、経済建設の経験がなく、民族技術幹部や技能労働者は足りず、原料、資材、資金も不足していただけでなく、アメリカ帝国主義者と階級敵の破壊・謀略策動が激化していた当時、この膨大な経済計画を遂行することは容易ではなかった。

主席は突き当たる難関を打開する秘訣は大衆の愛国的熱意と無限の力にあると信じ、全人民を最初の人民経済計画の遂行へと立ち上がらせた。

1947年3月の北朝鮮労働党中央委員会第6回会議や5月の北朝鮮人民委員会第36回会議をはじめとする一連の会議で、人民経済計画を成功裏に遂行するための党と人民政権機関、社会団体の課題を示し、その実現のための措置を講じた。

主席は党活動を改善し、党員が経済技術知識を身につけ、生産で前衛的役割を高め、勤労者の間で増産突撃運動を力強く展開すること、活動家の古い活動方法と作風を一掃し、革命的な活動方法と人民的な活動作風を確立することについて強調した。また、人民政権機関が幹部の政治的・実務的水準を高める一方、経済幹部陣容を固めるとともに、彼らに経済建設に関する理論と方法

を教え、各級政権機関の職能を明確に規定し、計画規律を厳守するようにした。同時に、職業同盟をはじめ社会団体が党と大衆を結びつける紐帯としての役割と、生産者大衆を教育して経済建設に立ち上がらせる大衆的政治組織としての役割を果たすよう導いた。

主席は人民大衆の中に入って彼らを人民経済計画の遂行へと立ち上がらせた。

主席は1947年3月、黄海(ファンヘ)製鉄所に出向いて、第3号溶鉱炉とコークス炉を早急に復旧させる課題を与え、9月には清津(チョンジン)製鉄所と城津(ソンジン)製鋼所を訪ねて、具体的な復旧対策を講じた。主席は有害ガスと埃が漂い、高圧の電流が流れる危険な原鉄炉で働く城津製鋼所労働者の姿を目の当たりにして胸を痛め、鋼材がいかに貴重であっても労働者の生命と換えることはできないと強調し、原鉄職場を爆破するよう命じた。

主席は1947年4月と5月に江東郡馬灘(マタン)灌漑工事と价川(ケチョン)郡チョルゴル灌漑工事をそれぞれ現地で指導し、6月7日には美林(ミリム)平野に出向いて農民と一緒に田植えをしながら、彼らを穀物増産へと奮い立たせた。そして、同年9月には陽徳(ヤンドク)郡クジゴルの農民を訪ね、山をひかえたところでは山を十分に利用しなければならないと述べた。

人民経済各部門に対する主席の精力的な指導によって、初の人民経済計画は立派に遂行された。1947年度の国営工業生産高は102・5％と計画を大幅に上回り、穀物は前年に比べて17万トンの増産となった。工業生産高で国営工業が占める比率は80・2％に達した。学校は前年に比べて1・4倍、学生は1・3倍に増え、また、数多くの病院と診療所が新設され、労働者、事務員とその扶養家

族に社会保険法による無料治療制が実施された。

主席は最初の人民経済計画の遂行で達成した成果にもとづき、1947年12月初め、北朝鮮人民委員会第53回会議で通貨改革を実施する措置を講じ、次いで通貨改革法令を発布して、自立的民族経済建設に必要な資金が十分に保障されるようにした。

主席はこのような成果と経験にもとづいて、1948年度人民経済計画の遂行へと全党、全人民を導いた。

主席は1948年2月上旬の北朝鮮人民会議第4回会議で1948年度の人民経済計画を発表し、次いで北朝鮮労働党中央委員会第12回会議で、それを完遂するための具体的な課題と方途を示した。

主席は咸鏡（ハムギョン）南道と咸鏡北道、平安南道と平安北道をはじめ全国の工場、企業と農村に赴いて指導し、年間計画を遂行するための大衆的増産競争運動を力強く展開するよう導いた。

こうして、1948年度の人民経済計画も円滑に達成された。国営および協同団体の工業生産高は102％と計画を大幅に上回り、工業生産は前年度に比べて50・6％増加した。また穀物収量も、日本帝国主義支配時代の最高収穫年度に比べ10・4％増え、食糧は自給自足できるようになった。

2回にわたる年間計画を遂行する過程で国の経済的基盤はより強固となり、計画化の面でも少なからぬ成果と経験が蓄積された。こうした現実は、これまでのような短期ではなく、より長期的な計画にもとづいて人民経済を急速に復興、発展させることを求めた。長期的な展望計画を立ててこそ、人民経済全般を計画的に発展させることができるのであった。

主席は1948年7月下旬の北朝鮮人民委員会第71回会議で、2カ年

人民経済計画遂行のための方針を示し、1949年2月初めに開かれた最高人民会議第2回会議で、2カ年人民経済計画の中心的課題を示した。

2カ年人民経済計画の課題は、すべての工場を復旧し、必要な工場を新設して工業生産を解放前の水準を上回るようにし、植民地的跛行性をなくして自立経済の土台を築くことであった。

主席は2カ年人民経済計画を成功裏に遂行するため、全党と全人民を立ち上がらせた。

主席は、計画を遂行する鍵は経済活動の指導を改善、強化することにあると見なし、1949年7月の第4回産業省傘下の工場・企業支配人会議や、同年11月の産業部門経済および職業同盟熱誠者大会をはじめ、その後の人民経済部門別会議で、各級党組織が経済活動に対する党の指導を政治的方法で行い、新たな環境に応じて幹部の経済指導水準を改善するための具体的な措置を講じた。

そして黄海製鉄所、清津製鉄所、興南(フンナム)肥料工場など主要工場、企業と、平安南道江西(カンソ)郡、黄海道金川(クムチョン)郡、載寧(チェリョン)郡ナムリが原をはじめとする各農村に赴き、2カ年人民経済計画を完遂するための方途を具体的に示し、難問を解決した。1950年3月、笏洞(ホルトン)鉱山を訪れた主席は、坑夫たちが働いている切羽に入らないのなら鉱山に来る必要はない、と言って岩水の滴る坑内に入り、坑夫たちに2カ年人民経済計画の遂行で採掘工業を優先させる意義と、掘進を先行させる方途も示した。

全国の勤労者はさまざまな形の増産競争運動を展開し、人民経済計画を期限前に完遂するためのたたかいにこぞって立ち上がった。

この時期、アメリカ帝国主義と李承晩（リ スンマン）傀儡一味は、北朝鮮地域に対する武力侵攻を頻繁に行う一方、スパイ、破壊・謀略分子を送り込んで破壊・謀略策動を働いた。

主席は、1949年6月、新たな情勢に対処してすべての党員をしっかり準備させ、2カ年人民経済計画の遂行を促すため、全党員に党中央委員会の手紙を送り、手紙の討議を高い政治的・思想的水準で行うようにした。

これは労働党を不抜の党に強化し、広範な人民大衆を党の周りに固く結束し、当面の2カ年人民経済計画の遂行に転換をもたらす契機となった。

こうして、2カ年人民経済計画に予定されていた工業生産課題は1950年上半期までにあらかた遂行され、工業生産は解放前の水準をはるかに上回り、日本帝国主義支配の後遺症である工業の植民地的跛行性は著しく克服された。農業部門でも、穀物は解放前の最高収穫年度より増収となり、農業の物質的・技術的土台はさらに強化された。文化建設の分野でも大きな成果を収めた。15校の大学と各級幹部養成機関、55校の技術専門学校が新設され、1950年9月から全般的初等義務教育制を実施する準備が整った。

第3節　朝鮮人民革命軍の朝鮮人民軍への発展、国の軍事力の強化

1947年に入り、アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味は侵略武力を大々的に増強する一方、38度線一帯で北朝鮮に対する武力侵攻

を絶え間なく強行した。

1947年に38度線一帯での敵の武力侵攻は270余回に達した。1948年になると武力侵攻はさらに拡大された。銀波山（ウンパ）や国師峰（クッサ）など38度線一帯では、敵の武力侵攻を撃退する熾烈な戦闘が続いた。

敵の戦争挑発策動に対処して祖国と人民の安全を守り、新しい祖国の建設を武力で保証するためには正規の革命武力を速やかに建設する必要があった。

金日成主席は新たな情勢と革命武力建設の合法則的要求を洞察し、遅滞なく朝鮮人民革命軍を正規の革命武力である朝鮮人民軍に発展させるためのたたかいを指導した。

主席は正規軍としての姿を整える活動を将来を展望しながら推し進めた。

主席は1947年5月から保安幹部訓練所と水上保安隊、平壌学院の飛行隊の軍人、そして各級軍事学校の学生に新しく制定した正規軍の制服を供与し、近代的な武器と戦闘技術機材で武装させるようにした。また正規軍建設の要求に即して軍事編制を改め、政治活動と戦闘訓練、給養活動で正規の体系を確立するとともに、軍事規定と教範、軍旗と軍人宣誓を制定し実施するようにした。

主席は1946年9月に作家たちを呼び、正規軍でうたう歌を創作する課題とその方向を示し、『人民軍行進曲』が創作されるとそれを軍歌にした。1948年1月には遠からず創刊される新聞『朝鮮人民軍』の任務と課題、編集方向を示した。

主席は正規軍を統一的に指導するため、1948年2月初めの北朝鮮人民委員会第58回会議で、北朝鮮人民委員会内に革命武力の軍事的・政治的指導を専門に受け持つ民族保衛局を設け、局長に

金策（キムチェク）を任命した。

これにもとづいて1948年2月8日、主席は朝鮮人民革命軍を正規の革命武力である朝鮮人民軍に発展させた。

この日、平壌では朝鮮人民軍の閲兵式が盛大に執り行われた。閲兵式には革命武力の創建者である金日成主席とともに金正日（キムジョンイル）、金正淑（キムジョンスク）も参列した。

主席は閲兵隊を査閲し、『朝鮮人民軍の創建に際して』と題する演説を行った。

主席は演説で、正規の革命武力の誕生を全世界に宣言し、朝鮮人民軍の性格を明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「…人民軍は民主朝鮮の正規軍としてはきょう創建されますが、実際には長い歴史の根源をもつ軍隊であり、抗日遊撃闘争の革命伝統と貴重な闘争経験と不屈の愛国精神を受け継いだ光栄ある軍隊であります」

主席は、朝鮮人民軍は抗日革命闘士を中核にして労働者、農民をはじめ勤労人民の優れた子女で組織された真の人民の軍隊であり、朝鮮民族の解放と独立のために、人民大衆の幸福のために帝国主義侵略勢力と国内反動勢力に反対してたたかう革命の軍隊であると強調した。

主席は演説で、朝鮮人民軍を政治的、軍事的に強化するための綱領的な課題を示した。

演説が終わった後、朝鮮人民軍各部隊の荘厳な分列行進が行われた。

朝鮮人民革命軍の正規の革命武力、朝鮮人民軍への発展は、

主席の創始したチュチェ思想と、それにもとづく先軍思想、先軍革命路線の輝かしい勝利であった。

朝鮮人民革命軍の朝鮮人民軍への発展によって、解放された祖国での建軍の課題は立派に実現し、自力で国と民族の自主権と革命の獲得物を守る自主独立国家の革命武力が誕生した。

主席は人民軍を各軍種・兵種部隊を持つ正規の革命武力に拡大、強化し、全力を挙げて戦闘力を高めるよう導いた。

主席は1948年2月中旬、保安幹部訓練所の各所を師団、旅団に改称し、9月には内務省の保安旅団を歩兵師団に改編して人民軍に編入させ、新しい歩兵師団を組織した。

また空軍武力を強化するために、その中核部隊である平壌学院の飛行隊を朝鮮人民軍総司令部飛行隊に改編し、次いで戦闘任務と教導任務を同時に遂行する正規の飛行連隊に拡大し、飛行士と技術要員をより多く養成する対策も講じた。そして飛行場の建設とともに近代的な飛行機と戦闘技術機材を購入して送り、その物質的・技術的土台を強化して飛行師団に発展させた。

主席は海軍の中核部隊である水上保安隊を拡大、強化する一方、水上保安幹部学校を海軍軍官学校に改編し、海軍技術訓練所を組織して必要な海軍の幹部と技術要員を養成するようにした。また海軍基地を新設し海岸警備任務を遂行する艇隊を編成するようにし、わが国の労働者階級が建造した初の警備艦も送った。そして海軍建設における成果を踏まえて海軍艦隊も組織した。

主席は技術兵種と専門兵部隊の組織にも力を傾けた。

主席は1948年8月、抗日革命闘士の柳京守（リュギョンス）に、今後組織される大規模機甲部隊の母体となる戦車連隊を編制する課題を与え、そ

の後、組織されて間もない戦車教導連隊を訪ねて、政治的、軍事的に準備された戦車兵を多く養成して戦車部隊も増やし、戦闘力を全面的に強化するよう導いた。

また砲兵武力の強化にも大きな意義を付与し、威力のある曲射砲や直射砲で装備された民族保衛省の予備砲兵部隊と高射砲兵連隊、海岸砲区分隊を組織した。同時に工兵、通信兵、自動車兵の部隊を組織し、その強化、発展にも力を注いだ。

主席は1948年5月中旬の内務局保安旅団将校会議での演説『祖国と人民の利益を守る強力な人民の武力になるべきである』で、人民軍の戦闘力を強化するための4大課題を示した。

4大課題とは、第1に、すべての軍人が巧みな戦術と敏活な戦闘動作を習得し、第2に、巧みな射撃術を身につけ、第3に、体力を鍛え、第4に、政治的に強く武装することである。

主席は人民軍の政治的・思想的強化に第一義的な関心を払った。

主席は1948年9月の北朝鮮労働党道・市・郡委員会委員長連席会議で、優秀な党員を選出して人民軍に入隊させ、軍隊内の党勢を強化する措置を講じた。そして同年10月下旬の警備隊文化活動家会議での演説と、11月中旬の朝鮮人民軍一区分隊の指揮官への談話で、部隊内で党の政治活動を強化する課題を示し、軍人に強い階級意識と愛国主義精神を植えつけ、彼らが抗日遊撃隊の百折不撓の闘争精神と必勝の信念を見習うよう教育することについて強調した。

主席は人民軍指揮官の指揮能力の向上にも大きな関心を払った。

主席は1948年10月、金正日、金正淑とともに第1中央軍官学校第2期卒業式の祝賀宴に列席した。主席はこの日の演説で、部隊

の戦闘力を強化するためには指揮官の役割を高めなければならないと指摘し、指揮官は党の思想で武装するために努力し、抗日革命烈士の闘争業績と経験を地道に学び、軍事学習に励んで先進軍事科学と軍事技術、現代武器に精通し、指揮能力を絶えず高めていくべきだと強調した。

主席は人民軍の各部隊、区分隊で、国の実情に即して戦闘訓練を強化するよう導いた。

主席は抗日武装闘争期の軍事・政治訓練の経験を生かし、国の実情に即して戦闘規定や教材、訓練要綱を策定し、それにもとづいて戦闘訓練を行うようにした。

特に軍人の射撃訓練を強化して百発百中の名射手に育て、抗日遊撃隊員の射撃訓練経験を生かして山地での射撃訓練を多く行うようにした。その他にも障害物の克服、白兵戦、手榴弾投擲、水泳、武装強行軍、山岳横断訓練を強化するようにした。

主席は国防工業を急速に発展させることに大きな力を注いだ。

抗日革命闘士を兵器工業部門に派遣し、各地から優秀な労働者、技術者を選出して兵器工場に送る措置を講じた。そして近代的な兵器生産設備と原料、資材を優先的に供給して、自動短銃をはじめさまざまな兵器と弾薬をより多く生産するようにした。

1948年12月12日、労働者が性能のよい自動短銃をつくったという報告を受けた主席は、仕事をさしおいて試験射撃場に出向いて試験射撃を行い、工場をさらに拡大して軍需産業の土台を築く課題を示した。

その後、近代的な生産設備を購入して自動短銃を流れ生産できるようにし、1949年10月末、兵器工場の労働者がつくった自動短銃を

抗日革命闘士たちに授与し、彼らと記念写真を撮った。

主席の精力的な指導により、自動短銃はもとより、迫撃砲、手榴弾、砲弾、弾薬など人民軍の武力装備を自力で生産できる国防工業が築かれた。

こうして、人民軍は短期間に政治的、軍事的に準備された正規の革命武力に成長し、その戦闘力は日増しに高まっていった。

主席は敵の戦争挑発策動に対処して、軍事力を強化することに力を傾けた。

人民軍と警備隊、保安隊で政治活動と戦闘訓練をいっそう強化し、鉄のような規律と秩序を確立して、すべての軍人が自分の兵器に精通し戦闘技術機材を巧みにこなし、敵のいかなる不意打ちも撃破できる万端の戦闘態勢を整えるようにした。

アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味は1949年夏、朝鮮戦争を起こすための「北伐軍事戦略計画図」まで作成して侵略戦争の準備を進めた。アメリカ帝国主義は南朝鮮の傀儡軍と警察兵力を大幅に増やし、アメリカ本土と日本から大量の兵器や戦闘技術機材を持ち込み、軍用飛行場を大々的に新設、拡張した。そして共和国北半部に対する武力侵攻に連隊、師団規模の武力と「虎林(ホリム)部隊」をはじめ特殊部隊まで動員し、「北伐」計画の実行可能性を確認する目的で38度線での武力侵攻を本格的に強行した。1949年にコサン峰、松岳(ソンアク)山、銀波山、国師峰をはじめ38度線全域における敵の武力侵攻はおよそ2617回に達した。

主席はこうした情勢に対処して、人民軍部隊に万端の戦闘動員態勢を整えさせた。

まず、人民軍軍人の間で政治・思想教育を強化する措置を講じた。

1949年5月、人民軍の基本戦闘単位である中隊に文化担当副中隊長の職制を設け、各部隊の文化部の役割を高めるようにした。そして、雑誌『宣伝員手帳』や『軍事知識』などの出版物を発刊して普及させるようにした。同年9月には朝鮮人民軍第40戦車教導連隊をはじめ各人民軍部隊を訪ね、中隊の建国室を立派に整備し、軍人に対する政治・思想教育を強化するよう導いた。

主席はまた、軍人の間で戦闘訓練をいっそう強化するようにした。

1949年7月、増強された歩兵大隊の攻撃戦術演習を指導しながら、山の多いわが国の地形条件に合う戦法を深く研究して砲兵を巧みに利用し、軍人を険しい山地で鍛えるよう強調した。

主席は同年8月下旬の朝鮮人民軍第238軍部隊軍人との談話で、敵が攻めてくれば直ちに応戦できるように戦闘訓練を本格的に行うべきであると指摘したうえで、戦闘訓練では実戦に応用できることを多く教え、戦術訓練、射撃訓練、歩兵と砲兵の共同訓練を強化し、指揮官の指揮能力を高め、部隊内に強い軍事規律を確立するよう強調した。

主席の指導のもとに、人民軍部隊と人民警備隊は敵の戦争挑発策動をそのつど粉砕した。こうして、敵は1949年に戦争を引き起こそうとした計画を放棄せざるを得なかった。

主席は、1950年に入って敵の武力挑発策動が戦争瀬戸際に至った状況のもとで、1950年5月下旬の朝鮮人民軍第603軍部隊第1大隊第1中隊の軍人との談話、6月上旬の第749軍部隊軍人との談話『戦闘準備をさらに強化しよう』で、いつにもまして緊張した動員態勢を堅持し、敵が襲いかかってくればいつでも応戦できるように部隊の戦闘準備をいっそう強化しなければならないと強調した。

主席は、すべての軍人が革命偉業の正当性を明確に認識し、われわれは必ず勝利するという確たる信念を持し、祖国と人民を熱烈に愛し、敵の侵略から祖国を守るために命をなげうってたたかえる教育をするよう導いた。

また戦闘訓練をさらに強化して、すべての軍人が自らの武器と戦闘技術機材に精通し、百発百中の射撃術を体得するようにした。同時に行軍訓練や山地での攻撃と防御訓練を多く行い、携帯機材を利用した渡河訓練と対空訓練、夜間訓練を強化し、特にすべての軍人が1階級上の職務を遂行できるようにした。

主席は敵の戦争挑発策動に対処して軍需物資の確保に力を入れ、全人民的祖国防衛体系を確立するよう導いた。

1949年8月5日の朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、軍需物資を十分に確保し、全人民的祖国防衛体系を打ち立てるという綱領的課題を示し、これを力強く推し進めた。

主席は全人民的祖国防衛体系を確立するため、1949年7月、祖国防衛を全人民的な事業に転換させる大衆的な社会団体として祖国防衛後援会を結成することを発起し、職業総同盟、農民同盟、民主青年同盟、民主女性同盟の代表で祖国防衛後援会結成準備委員会を組織し、中央から地方に至るまで祖国防衛後援会の各級指導機関を設けるようにした。祖国防衛後援会は会員と人民の間で軍事訓練と軍事知識の普及活動を行い、人民軍とその留守家族を極力援護し、広範な青年を含む青年訓練隊を組織して、有事の際に祖国防衛の聖戦に動員できる軍事的予備陣を準備する活動を行う一方、祖国防衛資金カンパ運動を広く組織、展開した。

主席は北朝鮮航空協会を祖国防衛後援会に編入させ、民族保衛省と内務省が祖国防衛後援会の活動を日常的に助けるようにした。そして道・市・郡党委員会は、祖国防衛後援会の幹部と青年訓練隊の指揮官として堅実な人を抜擢して配置するようにした。

主席は1949年8月初め、全国の工場、企業と農村、海岸と国境、38度線、鉄道などの沿線地帯に組織されている民間軍事組織を整理して統一的な地方人民自衛隊を設け、当該地域の内務機関をその指導に当たらせた。地方人民自衛隊は、祖国を防衛する自衛的な民間軍事組織であった。

第4節　生産関係の社会主義的改造の準備

生産関係の社会主義的改造は社会主義革命発展の合法則的過程であり、資本主義から社会主義への過渡期に解決すべき基本的な課題である。

しかし当時、生産関係の社会主義的改造は人民大衆の生活上の要求とはなっていなかった。民主主義革命が遂行されたばかりの状況にあって、初めて土地を分与された農民の思想・意識水準は、まだ社会主義的改造を受け入れる程度にまでは至っていなかった。また生産関係の社会主義的改造を全面的に実施できる社会経済的および物質的条件も十分に熟していなかった。

金日成主席は、社会主義革命発展の合法則的要求と国の実情を具体的に分析し、過渡期の初期には生産関係の社会主義的改造を部分的に実施しながら、主にその準備を整えていくという方針を

示した。

主席は、過渡期初期における生産関係の社会主義的改造のための準備を進めた。

主席は手工業の社会主義的改造に大きな意義を付与し、それを部分的に実施するようにした。

手工業の社会主義的改造は、技術的に立ち遅れていた零細な朝鮮の手工業の生産と技術を発展させ、手工業者の生活を改善するために解決すべき重要な問題の一つであった。これは、工業の植民地的後進性と跛行性のため、国営工業がこまごました品物まで生産することのできなかった当時、人民の日用品の需要を満たすためにも必要であった。

主席は1947年9月初め、北朝鮮労働党中央委員会常務委員会で『生産合作社を組織することについて』と題する演説を行い、生産合作社を組織する方針とその実行において堅持すべき原則と具体的な方途を明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「生産合作社は徹底した自発性の原則にもとづき、まず農村で家内副業に携わる人や手工業者で組織すべきであります。そして経験を積みしだい、都市手工業者や小市民の生産合作社も組織すべきです」

当時、朝鮮の農村には季節的な遊休労働力が多く、生産合作社の組織を妨げる資本主義的商工業者の策動もあまりなかった。農民はまだ個人経営を協同化するまでには準備されていなかったが、季節的な副業生産の共同経営には応じられる状態にあった。

主席は当時の実情からして、都市より農村に先に生産合作社を

組織するようにし、農民の本業ではなく副業生産部門からこれを推し進めるようにした。

そして農村副業生産合作社が増え、経験が蓄積されるに伴い、都市手工業者の間でも業種別に生産合作社を組織するようにした。

主席は都市手工業の協同化を資本主義的商工業を制限する政策と結びつけながら進めた。主席は国家が合作社に資材と資金を計画的に提供し、製品は国営および協同団体の商業網を通じて販売するようにし、生産合作社への投機分子の潜入を防ぎ、害悪行為から合作社を守るため、国家の指導と支援を強化する措置を講じた。そして、1948年からはすべての生産合作社に国家の人民経済計画課題を遂行させるようにした。

その結果、組織されたばかりの生産合作社は初めから健全な発展を遂げ、その優越性がはっきりと現れるようになった。1949年の末には手工業者の22・5%が協同経営に網羅された。

主席は漁村の零細漁民からなる水産合作社を組織するよう導いた。

1947年8月下旬、北朝鮮人民委員会農林局の責任幹部に零細漁民で水産合作社を組織するという方針を示し、同年9月には咸鏡北道鏡城(キョンソン)郡塩盆津(ヨムブンジン)を訪ねて水産合作社を試験的に組織するよう指導した。そして、1948年7月には北朝鮮労働党中央委員会常務委員会で水産合作社を広範に組織する新たな対策を立てた。

こうして各漁村に水産合作社が広く組織され、1949年に至りその生産量は全国的な漁業生産量の29・8%を占めるようになった。

都市と農漁村に合作社が増えるにつれ、その経営活動を改善するため、主席は1950年3月、朝鮮労働党中央委員会組織委員会で、生産合作社と水産合作社を指導する機能を消費組合中央委員会か

ら分離し、それぞれ独自の指導体系を確立するようにした。

主席は過渡期初期における農業の社会主義的改造の準備を推し進めた。

当時はまだ、農業の社会主義的改造は機の熟した問題とはなっていなかった。土地改革によって土地の主人となった農民の愛国的熱意と生産意欲はかつてなく高まり、分与された土地に対する彼らの愛着心も非常に強かった。こうした状況のもとで協同化を前面に押し出すなら、農民の支持を得られないだけでなく、土地改革によって高揚した彼らの生産意欲をそぎ、農業生産に支障をきたす恐れがあった。しかし小規模な個人農経営を放置しておいては農業生産を急速に発展させることはできず、社会主義制度を確立することもできなかった。

主席はこれらの理由から、過渡期初期に農業の社会主義的改造を前面に押し出さず、農業協同化を実現する条件を漸次整えていくようにした。

主席はまず、農業協同化に有利な条件を整えるため、富農経営の発展を抑制する政策を取った。

人民政権の法令と決定によって農村では富農の労働力の常時雇用を禁止し、季節労働力の雇用のみを許可するようにした。同時に季節労働に従事する人たちで職業同盟団体を組織し、彼らと団体契約を結ばせた。その結果、富農経営の発展は著しく抑止され、富農も自力で耕作しなければならなかった。

また、農民に集団経営の優越性を実生活を通じて認識させることに深い注意を払った。

主席は農民に信用と消費分野から協同経営の優越性を実感でき

るようにするため、1946年4月と5月に協同的信用機関である農民銀行と協同的商業機関である消費組合を創設し、その役割を高めるようにした。そうして、消費組合は農民の生活向上に寄与するようになった。

主席は、農業生産分野で農民に集団経営の優越性を正しく認識させるため、解放直後、平康（ピョンガン）、慶源（キョンウォン）郡などの各地に設けられた国営農牧場を強化し、農業発展で先駆的役割を高めるようにし、農村に古くから伝わる役畜共同利用、労力互助などの協同的労働形態を広く普及し、奨励した。

主席は、農業の社会主義的改造のための物質的・技術的条件を整えることに力を注いだ。

農村に不足する役畜の問題を解決するため、1949年7月、各地域別に牛馬賃耕所を設け、幾つかの地域にテストケースとして農業機械賃耕所を組織し、同年11月には黄海道および載寧郡責任幹部との談話で、農業機械賃耕所の設置準備を整えるよう強調し、翌年2月、内閣第4回全員会議では農業機械賃耕所を設置する措置を取った。

こうして平安北道の竜川（リョンチョン）と定州、平安南道の安州（アンジュ）、咸鏡南道の咸州（ハムジュ）、黄海道の載寧などの平野地帯に農業機械賃耕所が設置され、その管下に分所が組織された。同時に各種の改良農機具を増産し、平南灌漑をはじめ水利施設を新設・拡張する工事が大々的に進められ、大量の化学肥料が生産、供給されて農村の物質的・技術的土台は一段と強化された。

主席は、資本主義的商工業の社会主義的改造を予見してその準備を進めた。

主席は、資本主義的商工業の肯定的側面を利用する一方、その否定的側面は厳格に制限する措置を講じた。私営商工業者の業種を日用品生産と小売商品の流通に限定し、違法行為を社会的に暴露し、それに反対してたたかうようにした。また、資本主義的商工業者に対する思想教育を強化し、彼らが気高い愛国心をもって国と人民の利益のために尽くすようにした。

その結果、過渡期の初期、生産関係の社会主義的改造のための準備は着実に進められ、生産関係の社会主義的改造を全面的に推進できる基礎が築かれた。

第5節　北朝鮮労働党第2回大会、党の質的強化

1948年に入り、北朝鮮では革命と建設のすべての分野に新たな転換がもたらされていた。人民政権が強化され、軍建設、経済建設が成功裏に推進され、国の政治、軍事、経済各部門の威力は著しく強まった。党建設においても大きな前進が遂げられ、党の隊伍は急速に拡大され、党の戦闘力と指導的役割も高まった。

祖国統一をめざす北朝鮮人民のたたかいと、アメリカ帝国主義の植民地従属化政策に反対する南朝鮮人民のたたかいは一段と強化された。特に、2・7救国闘争を契機に、南朝鮮での反米救国闘争は新たな高揚を見せた。

一方、アメリカ帝国主義は1947年9月、不法にも朝鮮問題を国連に上程し、「投票機械」を動員して「国連臨時朝鮮委員団」をつくりあげ、その監視のもとに南朝鮮で単独選挙を実施する「決

定」を採択することにより、朝鮮民族は分裂の危機に直面するようになった。

新たな情勢に対処し、1948年3月27日から30日にかけて北朝鮮労働党第2回大会が開かれた。金日成主席は大会で、党中央委員会の活動報告を行い、結語を述べた。

主席は報告で、党の自主的平和統一方針を再度提示し、実現の方途を具体的に示した。

金日成主席は次のように述べている。

「わが党は、一般、平等、直接の選挙原則と秘密投票の方法によって、全朝鮮にわたる最高立法機関の選挙を主張します。このようにして選挙された人民の最高立法機関は、民主的な憲法を制定し、朝鮮人民を民族的繁栄と幸福へ導く真の民主主義的人民政府を組織すべきであります。朝鮮人民自らがこのような方法によって統一政府を樹立することは、外国軍隊が撤退した条件のもとでのみ可能であります」

主席は、朝鮮人民が自主的に、民主主義的原則にもとづき、平和的な方法で祖国の統一を実現することを祖国統一の基本方針として規定した。

そして、祖国の自主的平和統一を実現するためには、北と南の団結した力でアメリカ帝国主義の狡猾な植民地政策に反対するたたかいを繰り広げるとともに、北と南のすべての民主主義的政党・社会団体代表の連席会議を開き、民主主義的統一国家の樹立を促進するための具体的な計画と方策を立てるべきだと指摘した。

次いで、過渡期初期の党の経済政策を貫くための課題を示し、経済建設に対する各級党組織の指導的役割を高めることについて

も言及した。

また、初の人民経済計画遂行の過程で得た経験と教訓を分析し、それにもとづいて党が大衆を組織し政治的に指導する党になるだけでなく、経済を建設し、企業を管理運営し、経済知識と技術を身につけた建設者の党となるという要求を前面に押し出した。そして幹部は経済知識を習得し、企業の管理・運営方法と経験を学び、経済運営で厳格な秩序と規律を確立し、人民経済を発展させることで国営部門の指導的役割を絶えず強めるよう強調した。

次いで党の質的強化を大衆的党建設の中心的問題とし、党細胞を強化する課題を示した。

党細胞は日常的に党員を教育し訓練して党隊伍の思想的一致と組織的統一を保ち、党の路線と政策を実生活に具現する基本組織であるとし、細胞の強化は全党を強化するうえで基本となると述べた。

そして党細胞を強化するためには、各細胞が中核の育成に努め、細胞の活動水準を高めてすべての細胞を生気に満ちた戦闘的党組織にすることが重要であると強調した。

大会では、主席が示した課題を貫徹するための決定が採択され、党の革命任務と党発展の要求に即して規約が改定された。

北朝鮮労働党第2回大会は、党を組織的、思想的に強化し、祖国の統一と革命的民主基地の強化をめざす朝鮮人民のたたかいに歴史的な転換をもたらす契機となった。

主席は、第2回党大会後、党の質的強化のために力を注いだ。

主席は党を質的に強化するため、党細胞の強化に主な力を入れた。

1948年11月初め、北朝鮮労働党中央委員会常務委員会で党細胞

の活動を改善、強化するための課題を示した。

主席は党細胞の活動家を党の中核で固め、日常的に彼らの役割を高めるよう指導すべきだと述べた。そして、党細胞は党員に正しく任務を分担し、その実行を随時総括し、細胞総会と党勢拡大を党規約の要求と原則通りに行うよう強調した。同時に、細胞活動を強化するため細胞に対する上級党委員会の指導、点検を強化するよう指摘し、直接現地に出向いて党細胞の活動を指導した。

1949年1月5日、平安南道順川(スンチョン)郡舎人(サイン)面トクサン里ウォンドン村の党細胞を訪ねた主席は、細胞の会議録を見て細胞の活動状況も具体的に調べ、細胞総会と大衆活動の方法を詳しく教えた。その日、三花(サムファ)党細胞の学習会にも参加し、党員が抗日遊撃隊員のように勝利の確固たる信念を抱いてたたかっていくためには、知識があってこそ先を見通すことができるとし、学習に励むよう強調した。

党細胞に対する主席の指導は、細胞の戦闘的な機能と役割を一段と高め、党を組織的、思想的に強化する転機となった。

主席は1949年2月中旬に行われた北朝鮮労働党中央委員会第5回会議で、党細胞をはじめ下級党組織の第2回党大会後の9カ月間の活動総括会議について言及し、党組織の活動を改善、強化する課題を示した。特に、党細胞の中核を多く育て、彼らの政治・理論水準を高めるために根気よく努力するよう強調した。

主席は党を質的に強化するため、党員に対する思想教育を強めるよう導いた。

主席は1948年6月中旬、北朝鮮労働党中央委員会常務委員会で、党の隊伍が新入党員で絶えず補充されている実情のもとで各級党組織は彼らの政治・思想水準を高めるための教育を強めるべきだ

と指摘した。そして翌年1月と5月の北朝鮮労働党中央委員会常務委員会では、党学習会の水準を高めるための対策を講じた。

主席はまた、党を質的に強化するため、幹部陣容をしっかり固める活動にも深い関心を払った。

主席は1949年1月中旬の政権機関、社会団体および主要工場、企業の幹部事業活動家連席会議をはじめいろいろな機会に、党の幹部政策を正しく実行するよう強調し、労働者、貧農および雇農出身の幹部を基本としながら、知識人出身の幹部を適切に組み合せて配置し、幹部の教育に大きな力を入れなければならないと指摘した。

また、中央党学校をはじめ党幹部養成機関の事業を改善して有能な党活動家をより多く育成するようにした。一方、幹部陣容の純潔性を保つことに深い関心を向け、幹部事業で定められた手順と秩序を厳格に守るようにした。

結果、党はいかなる難関と試練をも乗り越え、革命を勝利の道へと確固と導く強力な革命の参謀部に成長した。

第6節　全民族の団結実現の促進、朝鮮民主主義人民共和国の創建

金日成主席は、民主主義的原則に立って全朝鮮の統一中央政府樹立をめざす全民族の団結の実現に第一義的な力を入れた。

金日成主席は次のように述べている。

「今日、われわれにはいち早く民主的統一政府を樹立し、国の

経済と文化を急速に発展させて、富強な自主独立国家を建設すべき重大な課題が提起されています。われわれがその課題を円滑に遂行するためには、民戦傘下の民主的諸政党・社会団体が一致団結しなければなりません」

主席は全民族の団結を実現するため、1947年10月初めの北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会議長団会議で、南北の各政党・社会団体代表者間の協議会や連席会議形式の南北協商の開催を提案し、翌年1月の北朝鮮民戦中央委員会議長団会議では、南朝鮮の各政党・社会団体指導者と個別人士に、南北協商を求める書簡を送る措置を取った。1948年3月には、南朝鮮の各政党・社会団体の指導者たちへの書簡を通じて、南北朝鮮諸政党・社会団体代表者会議の前に小規模な指導者連席会議を4月初めに平壌で開催することを提議した。次いで開かれた北朝鮮民戦中央委員会第26回会議では、4月14日に平壌で南北連席会議の開催を南朝鮮各政党・社会団体に提議する公開書簡を採択するようにした。

南北朝鮮諸政党・社会団体代表者連席会議招集に関するこの提案は、全朝鮮人民の熱烈な支持、賛同を得た。南朝鮮の民戦傘下の政党・社会団体はもとより、中間および右翼政党・社会団体も南北連席会議を支持する特別決議文を採択した。

しかし、アメリカ帝国主義とその手先はこの会議を破綻させるため、会議に参加しようとする政党・社会団体や個別人士に圧力を加え、恫喝した。朴憲永（パクホンヨン）徒党はうわべでは南北連席会議を支持しながら、中間勢力と獲得できる右翼勢力をのけものにし、彼らの意に同調する者だけを会議に参加させようと企んだ。

主席は敵のあらゆる妨害策動を粉砕し、南北連席会議招集のた

めの準備を速めた。

主席は1948年3月末、北朝鮮労働党中央委員会第1回会議で、連席会議準備委員会を早急に構成し、会議に参加する北朝鮮代表を選出するとともに、会議に提出する文書を準備し、会議の期間中に南朝鮮代表の生活上の便益を図ることについて述べた。4月初には準備委員会を設け、会場や代表たちの宿所の準備から芸術公演、参観地、代表招請状に至るまで細やかに指導した。

主席はまた、活動家を派遣して南朝鮮の政党、社会団体と個別人士を連席会議に参加させる対策を立てる一方、南朝鮮右翼政党の高位人物の使者に会い、かつて祖国と人民に罪を犯した者であっても前非を悔い祖国統一の愛国の道を踏み出すならば、過去を問わず手を携えていくという意志を表明し、南朝鮮の右翼政党代表たちに平壌訪問の道を開いた。

主席の高い権威と広い度量、正しい統一戦線政策に感動した南朝鮮の進歩的な政党、社会団体はもちろん、中間政治勢力や右翼勢力も南北連席会議の開催を積極的に支持した。

主席は1948年4月19日から23日にかけて、平壌で南北朝鮮諸政党・社会団体代表者連席会議を開いた。

会議には、北と南の1000余万名の党員と同盟員を含む56の政党、社会団体の代表695名が参加した。

会議で主席は『北朝鮮の政治情勢』と題する政治報告を行い、南朝鮮での単独選挙を破綻させ、民主主義的原則にもとづいて統一中央政府を打ち立てて祖国の統一を達成することを当面の最大の民族的課題として提示し、そのため北と南の人民が一致団結して民族あげての反米救国闘争を展開するよう呼びかけた。

そして、アメリカ帝国主義とその手先の単独選挙を粉砕し、民主主義的原則を踏まえて統一政府を樹立するための救国対策を打ち出した。

会議では南朝鮮の単独選挙を排撃し、統一政府を樹立するという決意を盛り込んだ『朝鮮の政治情勢に関する決定書』と、全人民を闘争に呼びかける檄『全朝鮮同胞に告ぐ』を採択、発表した。また、南朝鮮「単独選挙・単独政府」反対闘争委員会を組織し、ソ米両軍の即時撤退を求めて両国政府に送る手紙を採択した。

連席会議は、思想と理念が異なり信教の違いがあっても、民族共通の偉業をめざすたたかいにおいては誰もが団結することができ、全民族が大団結して救国闘争を展開するならば、祖国統一の偉業を達成することができるということを示した。

主席は連席会議後、南朝鮮での単独選挙を粉砕し、民族の団結と祖国の統一を達成するたたかいを正しく導いた。

主席は1948年4月末に招集した南北朝鮮諸政党・社会団体指導者協議会で、外国軍隊の撤退と統一中央政府樹立のための当面の問題を明らかにした『南北朝鮮諸政党・社会団体の共同声明』を発表し、南北連席会議の成果を強固なものにした。

次いで5月初めに、連席会議と指導者協議会の決定を貫徹するための実践的方途と統一の展望問題を協議するため、大同江（テドン）のスク島で連席会議に参加した南朝鮮各政党・社会団体指導者たちとの協議会を催した。

主席は協議会で、南朝鮮単独選挙を破綻させるための対策を示し、特に南北総選挙を実施して統一的な中央政府として朝鮮民主主義人民共和国を創建する構想を示し、外部勢力への依存と祟米

事大主義思想を排撃し、朝鮮人民自身の力で祖国統一を成し遂げなくてはならないと強調した。

スク島協議会の参加者たちは、祖国統一の偉業を達成するための主席の闘争戦略を全面的に支持した。スク島協議会は、統一的な中央政府である朝鮮民主主義人民共和国の創建について合意した事実上の全朝鮮政治協商会議であり、党の統一戦線史に光輝あるページを記した歴史的な会合であった。

南朝鮮から来たすべての政界の人士は金日成主席に限りない敬慕の念を表した。「反共」にこりかたまっていた金九（キムグ）でさえ主席との対面と万景台（マンギョンデ）の訪問を果たしたのち、朝鮮を正しく導く英雄は金日成将軍をおいてほかにない、将軍に従って民族の団結と祖国統一のためのたたかいに献身する、と誓った。

南北連席会議後、北と南のすべての愛国的民主勢力は、アメリカ帝国主義がでっちあげた単独選挙を粉砕する闘争を強力に展開した。北半部の人民は、平壌市をはじめ全国各地で南朝鮮での単独選挙を排撃、糾弾する大衆集会やデモを連日行い、南朝鮮人民の闘争を積極的に支持、声援した。南朝鮮の各階層の人民もさまざまな形の闘争を力強く展開した。労働者たちは単独選挙に反対するゼネスト委員会を結成し、ソウルをはじめ主要都市でゼネストを決行した。済州（チェジュ）島をはじめ各地の人民は武装蜂起を起こし、「投票所」と敵の暴圧機構を破壊した。こうしてアメリカ帝国主義によって企てられた5・10単独選挙は事実上、破綻した。

しかしアメリカ帝国主義は、陰謀をめぐらして「選挙」の結果をでっちあげ、親日・親米派や民族反逆者たちで不法な「国会」をつくり、傀儡政府をつくりあげようと狂奔した。そのため民族

分裂の危機はいっそう増大し、自主的祖国統一のたたかいに新たな難関が生じた。

主席は民族分裂の危機を打開する根本的な措置として、全朝鮮の中央政府を樹立する活動を指導した。

1948年6月末から7月初めにかけて南北朝鮮諸政党・社会団体の指導者協議会を招集し、その報告で、南朝鮮「国会」の不法性を暴露し、決定的な対策として全朝鮮の政府を打ち立てる方針を提示した。

主席は、遅滞なく朝鮮人民の意思を代表する全朝鮮最高立法機関を設立し、朝鮮民主主義人民共和国憲法を施行して、単独政府ではなく南北朝鮮諸政党・社会団体の代表が参加する全朝鮮政府を樹立しなければならないと強調した。

会議では主席が示した祖国統一のための対策を支持、賛同し、南北朝鮮総選挙を実施して最高人民会議を創設し、南北朝鮮の代表で全朝鮮中央政府を樹立することを決定した。

主席は民主主義人民共和国創建に向けた準備を指導した。

主席は、創建される共和国の法的基礎となる朝鮮民主主義人民共和国憲法の制定、施行に大きな意義を付与し、1948年2月上旬、北朝鮮人民会議第4回会議で策定ずみの憲法草案を全人民の討議にかけるようにした。

憲法草案に対する全人民的討議は、1948年2月中旬から2カ月余りの間に北南朝鮮全域で行われ、全人民の全幅的な支持を得た。

主席は1948年7月9日の北朝鮮人民会議第5回会議で共和国憲法を審議するようにした。

主席は共和国創建への準備に当たって、国号と国章、国旗と国

歌の制定に心血を注いだ。

当時、分派・事大主義者は「朝鮮民主主義人民共和国」という国号を各面から論難した。彼らは、「国号が長すぎる」、「外国では国名をそのようにつくらない」などと言い、国号を「人民共和国」とするか、さもなければ人民という文字をなくして「民主主義共和国」とすべきだと主張した。

主席は、国名はわれわれが主人となって人民の要望どおりつくればそれでよい、他人の顔色をうかがう必要はない、「朝鮮民主主義人民共和国」という国号には、わが共和国の自主的性格と、真に民主主義的で人民的な性格がはっきり反映されている、国号から「人民」という文字をはずそう、「民主主義」という言葉を加える必要はないといった一部の者の主張は、朝鮮革命発展の現段階の任務を正しく認識しておらず、特に国土が分断された状況下で革命を進めるということを無視するところから生まれた極めて誤った主張である、と論駁した。

そして、人民の意思を十分に反映し、分裂した朝鮮の現実、革命の当面の任務と根本的目的をすべて考慮して、国号を朝鮮民主主義人民共和国とするのが最も理にかなっていると説いた。

国章と国旗の制定にも深い関心を払った主席は、1948年1月中旬、図案作成者たちに会い、国章と国旗には朝鮮民主主義人民共和国が尊厳ある自主独立国家であることが象徴的によく反映されていなければならないと指摘し、国章には工業強国に発展する国の将来を示す水力発電所の姿と勝利のシンボルである5角の星を描くようにした。そして国旗は、輝かしい共和国の未来を立派に形象化するようにした。

主席は国歌にしても、国土が統一されていないことを考慮に入れて、共和国の国歌とはせず愛国歌と名づけ、歌詞の内容に至るまで詳しく指導した。

こうして、分派・事大主義者の陰険な策動は粉砕され、主席の愛国、愛族、愛民の崇高な志がこもった国号、国章、国旗、国歌が制定されるようになった。

主席は共和国創建のための南北総選挙が成功裏に行われるよう導いた。

主席は1948年7月10日の北朝鮮人民会議第5回会議で、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議の代議員選挙を8月25日に実施することにし、7月中旬の北朝鮮労働党中央委員会第2回会議では、すべての党組織が最高人民会議代議員選挙を高い政治的熱意と勤労の成果をもって迎えるための組織・政治活動を力強く繰り広げるようにした。そして8月初めには、南北朝鮮労働党連合中央指導機関を結成して、北と南の党組織と党員の活動を統一的に指導し、総選挙によって全朝鮮中央政府の樹立を促進するようにした。

主席は北と南の情勢が相異なる具体的な実情に即して、北朝鮮では、一般、平等、直接の選挙原則により秘密投票の方法で自由な選挙を実施し、南朝鮮ではまず署名投票の方法で人民代表者大会の代表を選出し、その後に代表者会議で再び秘密投票の方法で最高人民会議の代議員を選出するようにした。

主席は、8月下旬、平安南道江東郡勝湖（スンホ）選挙区の有権者に行った演説と、南朝鮮人民代表者大会参加者との談話で、最高人民会議の性格と任務、選挙の意義と代議員の任務を明示し、すべての人が高い政治的熱意をもって選挙に参加するよう呼びかけた。そ

して、平安南道大同(テドン)郡と平壌市の数カ所の投票所に赴いて、選挙を成功させるための課題を具体的に提示した。

主席の指導のもと、1948年8月25日、南北総選挙は成功裏に実施された。北朝鮮では、有権者の99・97％が投票して212名の最高人民会議代議員を選出した。南朝鮮では有権者の77・52％が参加して1080名の人民代表を選出し、この代表たちは海州(ヘジュ)に集まって南朝鮮人民代表者大会を開き、360名の最高人民会議代議員を選出した。

主席は総選挙に勝利した1948年9月上旬、平壌で朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第1回会議を招集した。

会議では朝鮮民主主義人民共和国憲法が採択された。

この日、全朝鮮人民の一致した意思と念願によって、金日成主席が朝鮮民主主義人民共和国内閣首相に選出された。

銃剣をもってチュチェの革命偉業を切り開き、抗日大戦を勝利に導いて祖国解放の歴史的偉業を達成し、新しい祖国の建設を導く金日成主席を国家首班として推戴したことは、党と軍隊と人民の最大の幸福、至上の栄光であった。

主席は9月9日、朝鮮民主主義人民共和国政府を組織して朝鮮民主主義人民共和国の創建を内外に宣言し、『朝鮮民主主義人民共和国政府の政綱』を発表した。政綱で主席は、国の完全な統一を実現し、富強な民主主義的自主独立国家を建設するための共和国政府の施政方針を示した。

最高人民会議第1回会議では、祖国の統一と国土保全のため、朝鮮民主主義人民共和国政府の名のもとでソ米両軍の朝鮮からの同時撤退を両国政府に要求した。

朝鮮民主主義人民共和国は、抗日革命闘争の炎の中で主席が築いた栄えある革命伝統を継承し、南北全朝鮮人民の総意によって打ち立てられた唯一の合法的国家であり、労働者、農民をはじめ勤労人民の利益を代表し、その自主性をあくまで擁護する真の人民の国家である。共和国政権は、人民の意思と要求によって創建された自主的な政権であり、広範な社会的・政治的基盤を有する朝鮮式の政権であった。

朝鮮民主主義人民共和国の創建により、朝鮮人民は自主独立国家の人民となり、チュチェの旗、先軍の旗を高く掲げ、世界の大小国家と同等の権利をもって国際舞台に堂々と登場できるようになった。共和国の創建により、朝鮮人民は、主席が切り開いたチュチェの革命偉業を立派に実現していく強力な武器を手にすることになった。

共和国の創建はまさに、自主的人民の出現であり、チュチェ朝鮮、先軍朝鮮の荘厳な誕生でもあった。

朝鮮民主主義人民共和国の創建により、自主独立国家を建設するための朝鮮労働党と軍隊と人民の闘争は新たな段階を迎えるようになった。

第7節　中国人民の革命闘争への積極的な支援、国際民主勢力との連帯の強化

金日成主席は解放後、新しい朝鮮建設の困難な状況のもとでも中国人民の革命闘争を積極的に支持、声援した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは抗日武装闘争の時期に、中国人民と共同戦線を張って長い間共同闘争を展開し、解放後にも、米軍の南朝鮮占領と国の南北分断によって情勢が複雑を極め、新しい祖国の建設に多くの難関がありましたが、中国人民の革命闘争を支援するため最善を尽くしました」

日本帝国主義が敗退した後の中国東北地方の情勢は、非常に厳しく複雑であった。

蒋介石一味はアメリカ帝国主義の庇護のもとに、日本軍の武装を解除し、その占領地域の管轄権を譲り受けた有利な状況を利用して中国全土の70％を占め、占領地域を東北地方にまで拡大するための総攻勢を仕掛けていた。

主席は気高い国際主義的道義心から、1945年9月15日、中国東北地方に派遣される軍事・政治幹部への談話で、中国人民の革命闘争を支援するという方針と、それを実行するための課題と方途を示した。

主席は姜健（カンゴン）、崔光（チェグァン）、朴洛権（パクラックォン）をはじめ朝鮮人民革命軍の多くの軍事・政治幹部を中国の東北地方に派遣して、朝鮮人武装部隊を組織し、党組織と政権機関、大衆団体を設け、中国人民の統一戦線結成に協力するよう命じた。

こうして、延辺地区をはじめ北満州、南満州の広大な地域が東北解放の強固な軍事的・政治的基地となった。

主席は、東北解放作戦に関する戦略戦術案を示し、中国共産党に兵器をはじめ多大の軍需物資を援助した。

そして中国側の要請を受けた主席は1945年11月末、中国の丹東

に赴き、新たに組織された東北民主連軍の指揮官に会い、自信と勇気を与え、戦局を根本的に転換させる対策を示した。

1946年3月下旬には咸鏡北道穏城郡南陽まで出向いて、東北民主連軍副総司令員兼吉林・遼寧軍区司令員の周保中に会い、東北で展開する作戦上の諸問題をすべて解決した。

1946年春には毛沢東主席の特使に会い、中国人民解放軍部隊が朝鮮を経由して東北地方に進出できるようにし、兵器の提供を求める中国共産党の要請を受諾した。その後、日帝侵略軍からろ獲した10万余挺の銃器と弾丸、火薬、軍服、医薬品など莫大な量の軍需物資を引き渡し、山東地方の中国人民解放軍部隊が南浦港と朝鮮の北部国境地帯を経て北満州に移動し、戦略物資を運搬できるルートを提供した。そして抗日戦で鍛えられた指揮官と兵士を主軸とする砲兵連隊と工兵部隊も編制して派遣した。

最も困難な状況でたたかう中国人民に送る物心両面からの支援は、中国東北地方に生じた難局を打開し、中国革命に有利な状況をもたらした。

主席は中国人民が解放戦争を行っていた全期間、中国人民解放軍に所属する朝鮮人部隊が作戦と戦闘で主動的かつ決定的な役割を果たすよう導いた。

東北解放作戦に参加した朝鮮人部隊は東北民主連軍の主力をなし、犠牲的精神を発揮して蒋介石国民党軍とたたかった。特に中国東北地方の解放作戦に決定的な転換をもたらした長春、吉林、四平、錦州、瀋陽などにおける戦闘で、朝鮮の優秀な子女は貴い青春を惜しむことなく捧げた。朝鮮青年は中国人民の第3回国内革命戦争の全期間、東北の牡丹江と延辺地方から万里の長城を越

え、長江を渡河して、海南島に至る数千里の解放戦で国際主義戦士としての栄誉ある使命と任務を全うし、中国の解放と人民中国の誕生に大きく貢献した。

毛沢東と周恩来は、中国の5星紅旗には朝鮮共産主義者の赤い血がにじんでいる、としばしば語った。

主席は国際民主勢力との連帯を強める活動に大きな力を注いだ。

まず、朝鮮の社会団体が国際民主団体に加わって積極的に活動するよう導いた。

1946年6月に北朝鮮民主青年同盟は世界民主主義青年連盟に、10月に北朝鮮民主女性同盟は国際民主婦人連盟にそれぞれ加入し、翌年5月には北朝鮮職業総同盟が世界労働組合連盟の一員となった。

その後、主席は国際民主団体が催すさまざまな国際会議や行事に代表団を派遣して、各国人民との連帯を強化する活動を活発に展開するよう指導した。

1947年7月初め、世界青年祭典に参加する代表団に会い、新しい民主朝鮮の青年代表として祭典のすべての行事に参加して祖国と民族の栄誉を轟かし、世界民主青年運動の発展に寄与するよう訓示した。そして1948年6月には、国際労働青年大会をはじめ各大会に代表団を派遣して、平和と民主主義、民族独立と社会主義をめざしてたたかう世界各国の青年、人民との友好・団結を強化するようにした。

同時に、訪朝した国際民主団体との活動にも大きな意義を付与し、1947年4月初めに世界労連書記長を団長とする世界労連代表団に接見し、国際労働運動の統一と団結をさらに強めていくよう

激励した。

このような活動と措置は、朝鮮人民の民主建国の偉業に対する国際的な支持と共鳴を呼び、国際民主陣営の強化に大きく寄与した。

主席は共和国創建後、遅滞なく民主陣営諸国と国交を結んで友好・協力関係を発展させていった。

自主性の原則を踏まえて民主陣営諸国と国交を結び、友好・協力関係を発展させることを共和国政府の対外活動の基本方針とし、1948年10月から1950年1月までの期間に社会主義諸国、人民民主主義諸国と国交を樹立するよう導いた。結果、共和国の国際的地位と役割は強まり、民主陣営諸国との友好・協力関係の発展と全般的な国際民主勢力の強化に大きく寄与することになった。

主席は共和国の対外的権威を高め、国際的連帯を強めるため、1949年2月下旬から4月上旬にかけて、政府代表団を率いてソ連を公式親善訪問した。訪ソ中、スターリンをはじめソ連の党および政府指導者たちと数次にわたって会談を行い、両国間の友好・協力関係を発展させる問題と重要な国際問題について意見を交わした。そして自主権の尊重と、平等と互恵の原則にもとづく経済的・文化的協力に関する協定を締結した。

スターリンは歓迎宴でのスピーチで、金日成同志は東方で帝国主義侵略からソ連を武装をもって擁護した真のプロレタリア国際主義者であり、共産主義者の鑑であると高く称賛した。

主席は国際民主勢力との連帯を強める活動を、アメリカ帝国主義の世界制覇の野望を粉砕し、平和と民主主義を守る闘争と結びつけて推し進めた。

第2次世界大戦後、帝国主義の頭目として登場したアメリカ帝国主義は、一方では悪名高い「トルーマンドクトリン」を掲げ、核兵器を振りかざして露骨に戦争政策を追求した。アメリカ帝国主義は世界各地に軍事基地を設置し、「北大西洋条約機構」のような軍事ブロックをつくり、社会主義諸国、人民民主主義諸国に対しては軍事的包囲の環を形成し、革命的な国々を力によって転覆しようと策動しながら民族解放闘争に対する弾圧に狂奔した。他方では「マーシャルプラン」の看板のもとに、ドルをだしにして「援助」政策を実施した。

そのため、世界の多くの国でアメリカ帝国主義に対する「強大さ」の神話が流布し、「解放者」、「援助者」の仮面をかぶったアメリカ帝国主義への幻想に少なからずとりつかれていた。これはアメリカ帝国主義との原則的なたたかいと、平和と民主主義、民族独立と社会進歩をめざす闘争において大きな障害となった。

主席はこうした事態を鋭く見極め、北朝鮮労働党第2回大会と1949年12月中旬に開かれた朝鮮労働党中央委員会第2回総会で、アメリカ帝国主義こそ世界反動の元凶であり、最も悪辣で狡猾な侵略者であることをことごとく暴きだし、アメリカ帝国主義へのいかなる幻想も排して反帝反米の立場を堅持し、世界平和愛好勢力が一致団結して、革命的な国々を内部から分裂させ瓦解させようとするアメリカ帝国主義の策動を破綻させていくよう強調した。

主席はまた、アメリカ帝国主義の新たな侵略策動を粉砕して平和と民主主義を守り、世界革命全般を発展させるために精力的に活動した。

共和国政府と社会団体の声明やアピール、国際民主団体に送る

手紙を通じて、アメリカ帝国主義の侵略的本性と世界の至るところで強行している侵略と戦争策動を全面的に暴露した。そして1949年2月下旬、女性同盟中央委員会委員長および文芸総中央委員会委員長への談話で、4月に開かれる平和擁護世界大会への参加を機に、戦争に反対し平和を擁護するためにたたかう世界各国人民との連帯を強化するよう訓示した。そして各種の国際会議に代表団を派遣し、世界制覇の野望を実現するため国際協定を踏みにじって狂暴に振る舞い、ファシズム国家を復活させようと狂奔するアメリカ帝国主義の策動を暴露させた。

主席の指導によって国際民主勢力との連帯は強まり、新しい祖国建設をめざす朝鮮労働党と人民の闘争には有利な国際的環境がもたらされるようになった。

第8節　祖国統一のための愛国勢力の結束と平和的統一方案の実現をめざすたたかい

金日成主席は共和国創建後、祖国の自主的平和統一を促進するため、北と南のすべての統一愛国勢力を一つの主体的勢力に結束することに大きな力を注いだ。

アメリカ帝国主義とその手先は1948年11月、南朝鮮において「保安法」をはじめさまざまなファッショ的悪法をつくりあげ、すべての民主的政党・社会団体の活動を禁止し、人民大衆の闘争に野獣じみた弾圧を加えた。

このような状況のもとで、北と南の統一愛国勢力を一つに結束

することは、危機に瀕した南朝鮮の革命勢力を救い出し、祖国統一の主体的勢力を強化して、自主的平和統一運動を主動的に繰り広げていくうえで焦眉の問題となっていた。

主席は北朝鮮労働党と南朝鮮労働党を単一の朝鮮労働党として合同する措置を取った。

1949年6月末から7月初にかけて開かれた南北朝鮮労働党中央委員会連合総会で、北朝鮮労働党と南朝鮮労働党を一つの党に統合し、その名称を朝鮮労働党とした。そして、1948年8月に結成された南北朝鮮労働党連合中央指導機関を朝鮮労働党中央委員会政治委員会に改編した。

会議では全党員の一致した意思により、金日成主席を朝鮮労働党中央委員会委員長に推戴し、主席を首班とする党中央委員会が組織された。

両党の合同は、全面的な崩壊状態にあった南朝鮮の各党組織と革命隊伍を収拾し革命運動を発展させ、特に南北労働党に対する主席の唯一の指導をさらに強化する画期的な契機となった。同時に、北と南のすべての統一愛国勢力を総結集して、祖国の自主的平和統一を促進するたたかいに立ち上がらせる指導勢力が打ち固められるようになった。

主席は北と南のすべての統一愛国勢力をさらに広範に結集するため、祖国統一民主主義戦線の結成を推し進めた。

主席は1949年5月の北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会第37回会議と、同年6月の北朝鮮労働党中央委員会第6回会議で、祖国統一民主主義戦線を結成するための原則的な問題を明らかにした。祖国統一民主主義戦線は、全朝鮮の愛国的な民主主義政党・

社会団体が自発性を原則にして加わる組織となるべきであり、祖国戦線の使命と任務は、祖国の統一と完全な独立を達成し、国の民主主義的発展のためにたたかうことであると明示した。

主席は綿密な準備を経て、1949年6月下旬、平壌で祖国統一民主主義戦線結成大会を招集した。

大会には、北と南の左翼と中間、右翼の政党・社会団体と各界人士、在日本朝鮮人連盟など70余の政党・社会団体の代表704名が参加した。大会では、北朝鮮民戦と南朝鮮民戦を統合し、さらに祖国の統一・独立を望むその他の政党、社会団体を新たに加えることで、全国的な民族統一戦線の常設的組織体である祖国統一民主主義戦線を結成した。

祖国統一民主主義戦線の結成により、北と南の各階層の人民は祖国統一をめざす一つの強力な政治勢力として結束し、祖国の自主的平和統一をめざすたたかいをいっそう力強く展開するようになった。

主席は正当かつ合理的な平和的祖国統一の方案を次々と提示し、その実現のためにたたかった。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは祖国の統一問題を同胞同士の争いと外国の干渉を排して、朝鮮人民自身の力で、民主主義的基礎に立って、平和的な方法で解決することを主張しています。われわれは祖国統一をめざすたたかいで、この原則を堅持し続けるでありましょう」

1949年に入り、敵の武力侵攻によって38度線一帯では銃声が鳴りやまず、国は事実上、戦時状態に置かれた。

主席は戦争の危険が間近に迫っていた1949年6月、祖国統一民

主主義戦線結成大会で全朝鮮人民に送る平和的な祖国統一方策に関する宣言を採択、発表させた。

宣言は朝鮮人民自身が朝鮮の統一問題を解決するため、南朝鮮から米軍を即時撤退させ、不法な「国連朝鮮委員団」を解体し、南北総選挙によって全朝鮮最高立法機関を創設し中央政府を組織するという平和的祖国統一方策を明示した。

北と南の愛国的民主勢力は新たな統一方案を積極的に支持し、その実現をめざして全民族的な闘争に立ち上がった。このたたかいの結果、1950年5月に南朝鮮で強行された「国会」選挙では南北協商を支持する反李承晩派の勢力が新しい「国会」で多数を占めるようになった。

南朝鮮で平和統一の気運が高まるや、アメリカ帝国主義は急遽、38度線に侵略兵力を増強し、共和国北半部に対する侵略戦争の準備を加速した。アメリカ帝国主義の指揮に従い、南朝鮮傀儡軍は完全な攻撃戦闘隊形を形成して攻撃命令を待っていた。戦争勃発寸前の厳しい情勢下で、主席は戦争を防止し、平和的方法で祖国を統一するためのより積極的な措置を講じた。

主席は1950年6月上旬の祖国統一民主主義戦線中央委員会第6回拡大会議で、「平和的祖国統一方策推進に関するアピール」を採択、発表し、北と南の諸政党・社会団体と人民に送る措置を講じた。

アピールでは、8月5日から8日までの間に北南朝鮮全地域で総選挙を実施して統一の最高立法機関を創設し、祖国解放5周年に当たる8月15日に最高立法機関の会議をソウルで開催することを提案した。そして平和統一の諸条件と総選挙の手順、総選挙を指

導する中央指導委員会の創設問題などを討議、決定するため、6月15日から17日まで南北朝鮮諸政党・社会団体協議会を海州または開城（ケソン）で開くことを提案した。

アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味は、この平和的祖国統一方案に背を向け、平和統一案を支持する人々を手当たり次第に検挙、投獄した。

主席は最大の自制心と忍耐力を発揮して、平和的祖国統一を推進するため相次いで主動的な措置を講じた。

1950年6月中旬、朝鮮労働党中央委員会政治委員会での結語『わが党の平和的祖国統一方案を実現するために』で、李承晩徒党が南北総選挙によって祖国を統一しようというわれわれの正当な方案に反対している状況下で、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議と南朝鮮「国会」を単一の全朝鮮立法機関として統合する方法で祖国の統一を実現するという新たな案を提起した。

主席の発案に従い、最高人民会議常任委員会は6月19日、「平和的祖国統一の推進に関して」という決定を採択した。決定には、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議と南朝鮮「国会」を単一の全朝鮮立法機関として統合し、そうした方法で成立した全朝鮮立法機関が共和国の憲法を採択し、憲法にもとづいて今後の全朝鮮立法機関を新たに選挙し、南北朝鮮の軍隊を単一の軍隊に改編し、「国連朝鮮委員団」を朝鮮から即時撤退させることが明示されていた。これは、敵の狂気じみた新たな戦争挑発策動によって平和統一実現の可能性が薄れていた厳しい状況のもとでも、何とかして戦争を防ぎ国の統一を平和的方法によって達成しようという、主席の愛国・愛族の一念と根気強い努力の証であった。

アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味は、この正当な平和的祖国統一方案に頭から反対し、祖国統一民主主義戦線中央委員会のアピールを伝えるため出向いた北側派遣員3人を逮捕し、迫害を加える蛮行を働いた。これとともに南朝鮮全域に戒厳令を布き、戦争挑発策動にさらに狂奔した。こうして、国の情勢は一触即発の危機に直面した。

主席は急変する情勢の推移を見極めて、1950年6月22日の各道内務部長に行った演説で、アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味がいよいよ戦争を引き起こすならば、われわれは断固たる反撃を加えるであろうと警告した。

アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味は、わが共和国の平和的祖国統一方案に対し、ついに犯罪的な侵略戦争をもって応えた。

第7章　祖国解放戦争を勝利に導くためのたたかい
（1950年6月～1953年7月）

第1節　アメリカ帝国主義の武力侵攻を撃退、断固たる反撃によって南半部を解放

1947年から共和国北半部に対する武力挑発を頻繁に引き起こし、局部戦争を年々拡大してきたアメリカ帝国主義は、1950年6月25日の早暁、李承晩（リスンマン）傀儡一味をそそのかして全面的な武力侵攻を開始した。敵は無謀な「電撃戦」で共和国北半部を一気に制圧しようとして、海州（ヘジュ）、金川（クムチョン）、鉄原（チョルウォン）一帯から38度線以北の1～2キロの地点まで侵入してきた。アメリカ帝国主義が朝鮮で侵略戦争を起こしたのは、朝鮮民主主義人民共和国を揺らん期に征服して全朝鮮を植民地にし、アジア大陸に対する侵略と世界制覇の野望を実現するための軍事的橋頭堡にするためであった。

アメリカ帝国主義の戦争挑発によって、祖国と人民の前に大きな危険が迫ってきた。朝鮮人民は再び帝国主義者の植民地的奴隷となるか、それとも自主独立国家の自由な人民であり続けるかという重大な局面に立たされた。

金日成（キムイルソン）主席は、敵の侵略戦争に正義の解放戦争をもって対抗する断固たる決心を固め、アメリカ帝国主義の武力侵攻に対処する

革命的な対策を立てた。

主席は6月25日、内閣非常会議を招集した。

主席は参加者に目をやり、アメリカ人は朝鮮人民を見くびっている、狼は棍棒でこらしめよとの言葉の通り、朝鮮人を見くびって挑む彼らに朝鮮人の気概を示すべきである、と述べた。

主席は、会議で『断固たる反撃によって武力侵略者を掃討しよう』と題する演説を行い、朝鮮人民軍部隊に敵の不意の武力侵攻を挫折させて即時に反撃に転ずる命令を下した。

人民軍将兵は、主席の命令に従って共和国北半部に侵入した敵の攻撃を挫折させ、全前線にわたって決定的な反撃に転じた。朝鮮人民は抗日の銃剣によって解放した祖国を反米の銃剣をもって死守する、祖国防衛の聖戦にこぞって立ち上がった。

アメリカ帝国主義と傀儡一味の武力侵攻に抗する朝鮮人民のたたかいは、祖国の独立と民族の自主権を守り、南半部の人民をアメリカ帝国主義の植民地支配から解放するための正義の祖国解放戦争、祖国防衛戦であり、あらゆる階級敵との厳しい階級闘争であった。同時に、それはアメリカ帝国主義をはじめとする世界反動の連合勢力に反対し、社会主義の安全と世界の平和を守るための反帝反米大戦でもあった。

主席は、全軍と全人民を戦争の勝利をめざすたたかいに立ち上がらせるため、6月26日にラジオで『すべての力を戦争勝利のために』と題する演説を行った。

主席は演説で、朝鮮人民が自力で共和国を死守し、南半部をアメリカ帝国主義の植民地支配から解放し、共和国の旗のもとに祖国統一の偉業を達成するための闘争課題を示した。

主席は国のすべての活動を早速、戦時体制に切り換えるようにした。

6月26日、国の一切の権力を集中し、前線と後方のすべての活動を統一的に指導する国家最高指導機関として朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会を、7月4日には武力全般を統一的に指揮する朝鮮人民軍最高司令部を組織した。主席は、全人民軍将兵と人民の一致した意思と念願により、朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会委員長、朝鮮人民軍最高司令官の重任を担うことになった。また作戦指揮をより迅速に行うために前線司令部と軍集団指揮部を設けた。そして、抗日革命闘士の大半を大隊長以上の人民軍指揮官に任命し、人民軍に対する党の指導と政治活動を強化するため、戦線部隊に軍事委員制を設けて、各戦線の部隊に軍事委員を派遣した。

その結果、前線と後方、全党、全軍、全人民に対する主席の唯一の指導をしっかりと実現できる強力な戦時指揮体系が確立された。

主席は、軍事重視、軍事先行の原則にもとづいて、全国に戦時動員体制を確立した。

主席は、全国に戦時状態を宣言して戦時動員令を下し、共和国軍事委員会直属の軍事動員部を組織し、解放した南半部地域には常設機構として人民義勇軍組織委員会を設置し、共和国北半部と南半部解放地域の愛国的な青壮年で、戦争の遂行に必要な武力を補充できるようにした。

主席は、党、政権機関および社会団体の活動を戦時の環境に合わせて改めた。6月27日には全党組織と党員に党中央委員会の手紙を送り、戦況に応じて党組織の戦闘力と党員の先鋒的役割を高

め、党内に革命的規律を確立し、すべての党員がいかなる状況においても敵とたたかえる万端の準備を整えるようにした。同時に、人民政権機関の独裁機能を強め、社会団体の機能と役割を高めるようにした。

主席は、国の経済を軍事重視の戦時体制に改編した。戦時生産を強化して前線の膨大な物質的需要を充足させることに全力を集中し、特に兵器工場の規模を拡大し、可能なすべての工場、企業を軍需品工場に改造して生産を増やし、鉄道の軍事化を図るなど、すべての部門を戦況に即して改組した。

全国は短期間で戦時体制に切り換えられ、全党、全軍、全人民が単一の戦闘隊伍に結束された。興南（フンナム）、松林（ソンリム）、南浦（ナンポ）など主要工場のある地区では労働者連隊が組織されて前線に出動し、青年学生は競って入隊を志願した。そして工場と農村に組織された人民自衛隊は戦況に即して改組され、全人民が職場と町と村を守るため立ち上がった。

主席は、人民軍の反攻撃作戦を指揮した。

6月26日、軍事委員会第1回会議で戦争勝利のための戦略的方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは、アメリカ帝国主義が朝鮮戦争に大兵力を動員する前に速やかな機動と連続的な打撃で敵を掃討し、共和国南半部を完全に解放しなければなりません。これが現段階におけるわが党の戦略的方針です」

主席は、主要攻撃方向を前線西部に定め、人民軍主力部隊を速やかにソウル解放作戦に突入させた。

さらに、ソウル市民の生命財産と文化遺物を保護し、市街戦を成功裏に敢行するため、一部の部隊に先にソウル市内に突入して敵を混乱させ、主力部隊には6月28日5時にソウル解放の総攻撃を開始するよう命じた。

これに従って、抗日革命闘士の柳京守（リュギョンス）が指揮する戦車部隊が突撃路を開き、次いで歩兵連合部隊が敵を正面と側面、背後から攻撃しながら市街地に肉迫し、午前11時30分に敵の主要拠点であるソウルを完全に解放し、南朝鮮傀儡軍の基本集団を掃滅した。

主席は、ソウルを解放した勢いで敵に息つくひまも与えず攻撃を続け、次の作戦に有利な状況をもたらすよう指導した。

人民軍連合部隊は、連続的な攻撃戦を展開して仁川（インチョン）、水原（スウォン）を解放し、烏山（オサン）一帯で遭遇した米侵略軍第24師団の先遣隊を掃滅し、全戦線にわたって敵を37度線以南へ追いつめた。

主席は、地上戦線だけでなく、海上と空中でもアメリカ帝国主義侵略者に連続打撃を加えるよう命じた。主席は6月末、朝鮮人民軍海軍司令官に、東海岸に侵入した米侵略軍の戦闘艦船集団を掃滅するよう指示し、誘引戦術と連続的な分散突撃戦術などの主体的な海上戦法を明示した。

主席の命令に従って朝鮮人民軍第2魚雷艇隊は、7月2日早暁、注文津（チュムンジン）沖において、4隻の魚雷艇で「動く島」と豪語していたアメリカの重巡洋艦「ボルチモア」号を撃沈し、軽巡洋艦を撃破するという世界海戦史に特記すべき偉勲を立てた。勇敢な人民軍飛行隊は、主席が与えた胆力と戦法で「空の要塞」と誇っていた「B—29」戦略爆撃機をはじめ数十機の最新型戦闘機と爆撃機を撃墜、撃破した。

アメリカ帝国主義者は、共和国北半部を一気に占領しようとした企図が失敗するや、飛行隊と艦隊を増強する一方、地上部隊を大々的に朝鮮戦線に投入し、国連の名を盗用して「国連軍」をつくりあげ、追随諸国の軍隊まで引き入れようと策動した。

主席は1950年7月8日、ラジオで『アメリカ帝国主義者の武力侵略を断固撃退せよ』と題する演説を行い、国連の名を盗用したアメリカ帝国主義の凶悪な策動と本性を余すところなく暴露し、全人民軍将兵と人民にアメリカ帝国主義侵略者を徹底的に掃滅するよう呼びかけた。

主席の呼びかけに応えて、人民軍将兵は燃えるような敵愾心を抱いて遭遇する敵を撃滅しながら南へと戦果を拡大していった。

主席は、大田（テジョン）界線で人民軍部隊の進撃を阻止し、戦局を逆転させようとするアメリカ帝国主義侵略者の企図を見透かし、大田解放作戦を巧みに指揮した。

人民軍部隊は砲兵部隊の強力な支援のもとに、敵が「不退却線」と豪語していた錦（クム）江防御線を突破し、次いで公州（コンジュ）を解放し、敵を大田市内へと追いつめた。

周密な大田解放作戦計画を立てた主席は、7月中旬の月もない夜半自ら砲煙を突いて臨津（リムジン）江鉄橋を乗用車で渡り、ソウルにある前線司令部を訪ねて直ちに作戦会議を招集し、大田解放作戦の方針を提示した。それは、人民軍部隊が大田の北と北西、側面から敵を追いつめて攻撃する一方、東南に進出して包囲すべき連合部隊が敵の執拗な抵抗によって遅滞した場合には、論山（ロンサン）界線に進出した部隊の一部を東南へ素早く迂回させて敵の退路と増援部隊の進撃路を遮断し、敵を短時間の内に完全に包囲するというもので

あった。

主席の作戦方針に従い、人民軍部隊は7月20日早暁、大田解放の大包囲攻撃作戦を展開し、「常勝師団」と自称していた米侵略軍第24師団を壊滅させて師団長を捕え、正午には大田を完全に解放した。

大田解放作戦後、主席は自ら最前線に出向き、戦果を拡大しながら南進する人民軍部隊の攻撃作戦を指揮した。

主席は敵に決定的な打撃を加える新たな作戦を展開するため、8月初めに忠清(チュンチョン)北道忠州(チュンジュ)の南方、水安堡(スアンボ)の人民軍前線司令部に出向き、前線司令部の幹部および前線連合部隊指揮官、文化活動家の会議を指導した。

主席は会議で、前線連合部隊は、敵に息つくひまを与えず連続的な打撃と大胆な機動作戦で敵の防御線を突破し、迅速に洛東江(ラクトン)を強行渡河し、馬山(マサン)、大邱(テグ)、永川(ヨンチョン)、浦項界線(ポハン)に進出して、敵を撃滅する有利な条件を整えるべきであると述べた。そして、数的に優勢な敵を正面から攻撃しようとばかりせず、自然地理的条件に即して大胆に山道と尾根を伝って正面攻撃と側面、背後攻撃を巧みに組み合わせ、夜戦を強化し、軍種、兵種間の共同作戦を巧みに行い、砲兵をうまく利用するよう強調した。

主席はこの日、前線が眺望できる聞慶(ムンギョン)峠にまで登り、前線の状況と地形を見届け、当面の作戦を遂行するための方向と方途を示した。

主席の前線指導に励まされた人民軍部隊は、主席の示した戦法通り歩兵と砲兵の共同作戦を強化し、山岳戦と夜戦、連続的な攻撃と大胆な機動作戦で敵を包囲、掃滅しながら疾風のごとく南へ

進撃した。こうして、戦争が開始されてわずか1カ月半余りの間に、南半部地域の90％以上と人口の92％以上を解放した。

敗退を重ねたアメリカ帝国主義侵略者は、日本の反動勢力まで朝鮮戦争に引き入れた。

主席は日本の朝鮮戦争参戦と関連して1950年8月末、朝鮮労働党中央委員会政治委員会を招集し、日本領土を米侵略軍の軍事戦略基地として完全にゆだね、朝鮮侵略戦争に必要な軍需物資の生産と輸送を担当するだけでなく、旧日本軍出身で編制した「義勇軍」まで米侵略軍部隊に配属させ、朝鮮戦争に直接参加させている日本反動支配層の犯罪的策動を峻烈に断罪した。

人民軍勇士たちは、米日侵略者に対する怒りと敵愾心を抱いて、敵を最終的に撃滅する戦闘を果敢に展開し、9月上旬に至って慶尚（キョンサン）南北道の狭い地域に敵を追いつめた。

主席は、解放された南半部地域の人民に新しい制度、新しい生活をもたらすことに深い関心を払った。

主席は、南半部の解放地域で党組織と人民政権機関を早急に再建し、民主改革を実施して南半部の人民に真の民主主義的自由と権利を保障し、彼らの生活を安定させるべきだと指摘した。

主席は党、政権機関、社会団体、教育・文化機関の優秀な活動家で政治工作隊を組織し、解放された南半部地域に派遣して、党組織と地方政権機関を再建、整備し、民主改革を実施する活動を支援するようにした。そして南半部解放地域における党、政権機関の再建と民主改革の順調な遂行のため前線警備司令部を組織して、主要解放地域に配置した。

主席は南半部解放地域の党組織を再建する活動を指導した。

党員の登録を慎重に行うと同時に、アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味に反対する実際の闘争を通して認められ鍛えられた人たちを党に多く受け入れて党勢を拡大し、祖国統一をめざすたたかいで愛国的献身性と勇敢さを発揮した革命家、中核党員を党組織の幹部に任用するようにした。

また、戦時条件に応じて南半部の党組織に対する党中央委員会の統一的指導を迅速かつ正確に実現するため、ソウル市に党中央指導部を別個に組織し、これを通じて党中央委員会の唯一の指導のもとに、解放された南半部地域における党組織と人民政権機関の再建、民主改革の実施と経済復興、前線援護などの活動を指導するようにした。その後、解放地域が拡大され、前線が遠くなった状況に即して党中央指導部を大田市に置き、ソウル市と京畿(キョンギ)道、南江原(カンウォン)道の党組織に対する指導は党中央委員会が直接行い、忠清南北道、全羅(チョンラ)南北道、慶尚南北道の解放地域内の党組織に対する指導は、党中央委員会の指導のもとに大田市の党中央指導部に受け持たせるようにした。

こうして南半部の解放地域では、党細胞から道党組織に至るまで朝鮮労働党の各級組織が急速に再建され、整然たる指導体系が確立された。

主席は、人民政権機関と社会団体を再建するよう指導した。

7月10日、軍事委員会第8回会議で、解放された南半部地域で人民政権機関を再建し、南朝鮮人民に民主主義的自由と権利を保障し、彼らの生活を安定させるため暫定的に内閣副首相を責任者として、相・副相級の幹部で朝鮮民主主義人民共和国政府代表委員会を組織し、最短期間でソウル市臨時人民委員会をはじめ郡・

面・里（洞）臨時人民委員会を再建するようにした。また、南半部地域に再建された各級臨時人民委員会を法的に強化するため7月14日、朝鮮労働党中央委員会政治委員会で解放された南半部地域の郡・面・里（洞）人民委員会の選挙を実施する措置を講じた。こうして、慶尚南北道の一部地域と済州（チェジュ）島を除いた9つの道の108カ郡に真の人民の政権である人民委員会が樹立され、人民は政権の主人となった。

人民政権機関とともに社会団体を再建する活動も活発に繰り広げられ、短期間の内に南半部解放地域に職業同盟、農民同盟、民主青年同盟、女性同盟といった社会団体が再建されて活動するようになった。

主席は、南半部解放地域での土地改革をはじめ民主改革の実施を指導した。

主席は、解放地域の土地改革を支援するため多くの党員と中核労働者を派遣する一方、土地改革指導メンバーと点検メンバーも派遣して、土地改革が偏向なく行われるようにした。南半部解放地域における土地改革は、わずか1カ月余りの間に成功裏に遂行された。土地改革により解放地域耕地面積の約43・3％の土地が無償没収され、126万7000余戸の雇農と土地がないか少ししかない農民に無償で分与された。

解放地域においては、このほかにも植民地奴隷教育制度が廃止され、民主的な教育制度が確立され、労働法令、男女平等権法令などの民主的で人民的な施策が実施された。

主席は、解放された南朝鮮人民の生活を安定させ、歴史文化財を保護することにも関心を払った。

さらに前線指揮の多忙な中にあっても、自ら幾度も解放地域に出向き、民主改革の遂行状況とともに人民の生活状況を調べ、必要な対策を立てた。人民の生活を安定させるため、市場を正常に運営させ、永登浦（ヨンドゥンポ）地区に接収しておいた食糧のうち兵糧米を除いた残りをソウル市民に供給するようにした。そして8月上旬には自らソウルへ出向き、ソウル市民の食糧供給はもちろん、薪炭やキムチ用の野菜の供給問題に至るまで、細やかに気を配った。また戦火の中から約1800巻に及ぶ「李朝実録」を傷つけることなく搬出し、後方の安全な場所に保管させるなど、歴史文化財を保護する積極的な対策も講じた。

南半部解放地域の人民は、新しい制度、新しい生活をもたらした共和国政府の施策を熱烈に支持して、前線援護活動に大衆的に参加し、多くの青年学生が人民義勇軍に志願して入隊し、敵撃滅の聖戦に立ち上がった。

第2節　戦争の一時的難局を打開し新たな反撃に移行、革命的規律の強化と後方の復旧・整備

1950年9月中旬、戦争の形勢は急変し、わが共和国は重大な難局に直面した。

アメリカ帝国主義は前線での度重なる惨敗を挽回し、朝鮮侵略の目的をあくまで達成しようと、太平洋方面の陸海空軍と地中海艦隊の一部、アメリカ本土の地上軍とイギリスをはじめ追随諸国の軍隊を朝鮮戦線に投入した。アメリカ帝国主義は増強された大

兵力で洛東江界線で「総攻勢」を企む一方、9月中旬から5万余の兵力と数百隻の艦船、約1000機の航空機を投入して仁川上陸作戦を強行した。敵は仁川、ソウル、原州（ウォンジュ）一帯を掌握して前線と後方を遮断し、人民軍主力部隊を包囲、掃滅し、短時日内に全朝鮮を占領しようと画策した。

人民軍将兵は、洛東江界線と仁川――ソウル地区で数的に圧倒的に優勢な敵の攻勢を撃退するため苛烈な戦闘を繰り広げた。特に月尾（ウォルミ）島の海岸砲中隊は、最後の一人まで肉弾となって仁川の関門を3日間も守り抜き、敵の仁川上陸作戦に甚大な打撃を与えた。しかし、彼我の力関係の著しい差によって戦況は人民軍側に極めて不利となった。

金日成主席は、戦争の一時的難局を主動的に打開するたたかいを指導した。

主席は1950年9月25日、朝鮮人民軍最高司令部作戦会議で直面した難局を打開するための新たな戦略的方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「現段階におけるわが党の戦略的方針は、敵の進攻速度を最大限に遅らせ、時間をかせいで人民軍の主力部隊を救出し、新しい後続部隊で強力な反撃集団を編成して計画的な後退を組織することであります」

戦争第2段階の戦略的方針は、一時的な戦略的後退を周到に行って敵の侵略的企図を破綻させ、不利な情勢を有利にかえ、敵に新たな決定的打撃を与える準備をすることであった。

主席は仁川――ソウル界線と洛東江界線の敵の包囲は範囲が広いため形式にすぎず、抗日武装闘争の時期に鍛えられ洗練された

有能な軍事指揮官がいる限り、人民軍主力部隊は敵の包囲を突破できるという確信のもと、後退期間を1カ月から1カ月半と見通して、早々に反撃に移行することを計画した。

主席は敵が大道路に沿って機動している状況のもとで、人民軍部隊は山並みを伝って連合部隊別に機動防御の形態で組織的に後退するようにした。またソウル地区でたたかった部隊は38度線をはじめ中間地帯で強力な防御陣を張り、敵を牽制して主力部隊の後退を援護するようにした。

主席は1950年10月11日、ラジオで『祖国の寸土を血潮をもって死守しよう』と題する演説を行い、難局を打開するたたかいに人民軍将兵と人民を奮い立たせた。

主席の呼びかけを心から受け止めた人民軍部隊は、元山（ウォンサン）、陽徳（ヤンドク）、平壌（ピョンヤン）一帯で頑強な防御陣を敷き、決死のたたかいを展開して敵の進攻速度を遅らせ、洛東江界線からの人民軍主力部隊と人民の戦略的後退を成功させた。

労働者は困難な条件のもとでも生産施設を安全な地帯に移して生産を続け、農民はあらゆる手段と方法を尽くして後退する人民軍を支援した。科学者、技術者、作家・芸術家と解放された南半部地域の少なからぬ人民が、険しい山を越え川を渡り、人民軍に従って後退した。

被占領地域の党員と人民も英雄的な闘争を繰り広げた。

共和国北半部の広い地域を一時占領したアメリカ帝国主義侵略者は、至るところで罪のない人民を手当たりしだいに虐殺する天人ともに許すまじき蛮行を働いた。敵は信川（シンチョン）郡だけでも郡民の4分の1にあたる3万5000余名の罪のない住民を虐殺した。また学校、

病院、文化機関まで破壊、放火し、貴重な民族文化遺物を手当たりしだいに略奪した。アメリカ帝国主義の教唆のもとに転覆された搾取階級の残存分子と反動分子もこの蛮行に積極的に加担した。敵の野獣じみた虐殺蛮行は、人々にアメリカ帝国主義に対していかなる幻想も抱いてはならず、階級の敵とは妥協することなくたたかわなければならないという血の教訓を与えた。

敵背の人民は占領軍との闘争に奮然として立ち上がった。黄海(ファンヘ)道と江原道、咸鏡(ハムギョン)南道、平安(ピョンアン)南道の各地域で人民遊撃隊が組織され、敵の集結所と輸送手段、戦闘機材を襲撃、破壊し、敵の兵力を掃滅し、敵を恐怖と不安に陥れた。青少年も近衛隊と少年近衛隊を組織して、至るところで敵を掃討し、趙玉姫(チョオクヒ)をはじめ多くの女性も武器を手にとって占領軍と屈することなくたたかった。

主席は、戦略的な一時的後退を指揮する一方、新たな反攻撃の準備を整えるよう指導した。

何よりも北部内陸の山間部に強固な反撃基地を設け、人民軍部隊を再編制して補強し、反撃集団と予備部隊を編制し、訓練を強化するようにした。同時に人民軍に対する党の指導を強化し、軍隊内の党の政治活動を強化するため、1950年10月21日、朝鮮労働党中央委員会政治委員会で人民軍内に労働党組織を設け、文化部を政治部に改組する措置も講じた。

主席は一時的な戦略的後退を指揮しながら、1950年9月下旬、朝鮮人民軍最高司令部の作戦会議で反撃を予見して、人民軍連合部隊で敵背後に強力な第2戦線を形成する方針を示し、その後、新たに編制された部隊を増派して第2戦線部隊を強化した。

主席の命令を受けた抗日革命闘士の崔賢(チェヒョン)をはじめ優秀な指揮

官の指揮のもとに、第2戦線部隊は黄海道と江原道、平安南道など中部朝鮮の広い地帯で、10月中旬から敵背後での戦闘を果敢に展開した。その結果、敵の侵攻速度を最大限に遅らせ、人民軍の反撃に有利な条件をつくりだし、人民軍の打撃力を前後から補強して敵の占領地帯を迅速に解放できるようにした。

主席は、万端の準備を整えた人民軍の新たな反撃作戦を指揮した。

1950年10月下旬に至り戦争は第3段階に入った。

このころ、中国の党と政府は抗米援朝保家衛国の旗のもとに自国人民の優秀な子女からなる義勇軍を組織し、朝鮮戦線に派遣した。

主席は1950年10月24日、朝鮮人民軍最高司令部の作戦会議で、敵の攻撃を阻止し、短時日内に反撃に転じて敵を38度線以南に追い払いながら絶え間ない消耗戦で敵の兵力を掃滅、弱体化させる一方、最終的勝利を得るため万端の準備を整えるという戦争第3段階の戦略的方針を示した。

主席は1950年10月末、朝鮮人民軍最高司令部将校・将官会議を開いて、新たな戦略的方針を貫徹するための具体的な対策を立て、敵の攻撃を決定的に挫折させる強力な反撃戦を繰り広げるようにした。

これにもとづき朝鮮人民軍部隊は、中国人民義勇軍部隊とともに10月下旬から11月初旬まで、前線西部では清川(チョンチョン)江以北の界線で、前線東部では黄草嶺(ファンチョ)、赴戦嶺(プジョン)、漁郎川(オラン)一帯で強力な反撃戦を展開した。

主席は、敵と対峙した雲山(ウンサン)郡富興(プフン)里と古城(コソン)里界線にまで出向いて、雲山地区に侵入した敵に対する反撃戦を指揮した。

わが軍の強力な反撃戦によって全前線で敵の攻撃は失敗し、11

月23日の感謝祭前に朝鮮戦争を終わらせると豪語していた敵の企図は完全に破綻した。アメリカ帝国主義侵略者は、甚大な打撃を受けたにもかかわらず、今度は12月25日のクリスマス前に北半部を占領する、と喧伝しながら新たな総攻勢を企てた。

敵の弱点と攻撃の企図を見抜いた主席は、11月下旬、全前線にわたって攻撃してくる敵を撃滅して決定的な反撃に移行するよう人民軍部隊に命令した。

主席の命令に従って総攻撃に移行した人民軍連合部隊は、緊密な共同作戦で清川江と長津（チャンジン）湖畔、清津（チョンジン）、咸興（ハムフン）一帯の敵を包囲せん滅し、急速に南へ進撃した。中部朝鮮の広い地域を占めていた人民軍第2戦線部隊は敵の退路を遮断し、早急に38度線界線を掌握して敵の中間防御陣と増援部隊の進出を破綻させた。この過程で米第8軍司令官をはじめ多数の敵を殺傷または捕虜にし、戦闘技術機材をろ獲または破壊した。人民軍部隊は敗走する敵を猛烈に追撃して、12月末には占領されていた地域を完全に解放し、38度線以南まで戦果を拡大した。

アメリカ帝国主義侵略者は惨敗を挽回しようと自国内に国家非常事態を宣し、原爆を使用すると脅迫しながら新たな軍事的冒険を企図した。こうして戦争は長期化の様相を呈するようになった。

新たな軍事・政治情勢は、戦略的な一時的後退の時期に現れた欠陥を克服し、党・国家・軍事規律を強化し、軍事分野で主体性を確立し、前線と後方をさらに強化することを求めた。

主席は新たな情勢を見極め、前線と後方を強化するたたかいを指導した。

1950年12月下旬、朝鮮労働党中央委員会第3回総会が開かれた。

主席は『現情勢と当面の任務』と題する報告で、前線と後方を強化し、戦争の最終的勝利をもたらすための当面の課題を示した。

主席は、総会後、党と人民軍を強化し、後方を固めるたたかいを指導した。

主席は、軍事分野における主体性の確立に大きな力を注いだ。

1951年1月下旬、朝鮮人民軍指揮官、政治幹部への談話『われわれの戦法でたたかうべきである』で、軍事分野に現れていた教条主義的傾向を一掃するよう強調し、作戦と戦闘において朝鮮の実情に合う戦法を活用し、敵にせん滅的打撃を加える方向と方途を明らかにした。

主席は事大主義、教条主義の傾向に反対するたたかいを強力に展開する一方、朝鮮の地理的特性と6カ月間の戦争経験にもとづき武力装備を改善し、主体的な戦法に熟達するよう強調した。

主席の方針にもとづき、人民軍部隊は主体的な戦術と戦法を具現して、1951年1月末から6月初めにわたり38度線辺りで敵に対する絶え間ない消耗戦と数次の強力な反撃戦、背後攪乱作戦を繰り広げ、敵に甚大な軍事的・政治的打撃を与えた。

この間、人民軍勇士たちは党と領袖、祖国と人民に対する忠誠心を高く発揮した。韓継烈（ハン ゲ リョル）英雄は寸土も敵に渡すなと命じた最高司令官金日成将軍の戦闘的呼びかけを高く掲げて「わが高地」運動の最初ののろしを上げ、姜浩英（カン ホ ヨン）英雄は最期が迫った瞬間、手榴弾を口にくわえて肉弾となり敵陣に跳び込んで敵を掃滅した。看護婦安英愛（アンヨン エ）英雄は戦闘任務遂行中に一身をなげうって同志たちを救出し、息を引取る最後の瞬間、自らの党員証と党費を党中央委員会に渡してほしいとことづけた。

主席は後方の復旧、整備のため、反革命分子に全面的な攻勢を加えるよう指導した。

主席は反革命分子とのたたかいにおいて、ごく少数の悪質分子に対しては徹底的に独裁を実施し、絶対多数の受け身の追随分子は包容し教育することを基本原則とし、たとえ祖国と人民に罪を犯したとしても心から前非を悔い正直に自首する者は寛大に処し、できる限り多くの人を獲得するようにした。

一方、後方の強化のために1951年1月下旬、軍事委員会第21回会議で、道と郡に地方自衛委員会を組織して敵の蠢動を徹底的に粉砕するようにした。

その結果、後方は復旧、整備され、長期戦に対処できるまでに強固となり、前線での人民軍部隊の戦果も拡大し、敵に莫大な損失を与えた。

第3節　積極的な陣地防御戦、党勢の拡大、強化と人民政権の機能と役割の強化

1951年6月に至って前線は38度線を境にして膠着状態に陥り、戦争は新たな段階に入った。アメリカ帝国主義は依然として侵略の野望を捨てず、兵力と航空隊、砲兵火力を大々的に増強して、前線東部と中部に攻撃を集中して現在の界線を突破し、同時に東西の海岸から上陸作戦を強行しようと企てた。

金日成主席は、戦争が長期戦の様相を帯びるようになった軍事・政治情勢に対処して、1951年5月30日の朝鮮労働党中央委員

会政治委員会をはじめ多くの機会に積極的な陣地防御戦で戦争の最終的勝利を速めるという戦略的方針を示した。

戦争第4段階の戦略的方針は、積極的な陣地防御戦を展開して現在の界線を守り、絶えず敵を攻撃、掃滅する一方、時間を稼いで人民軍の戦闘力を一段と強化し、後方を強固にして戦争を最終的勝利に導く条件を全面的に整えることであった。

主席は新たな戦略的方針を貫徹するために坑道戦法を示し、強力な坑道陣地の掘削に全軍を動員した。

そして、一つの坑道陣地を模範とし、それを普及させるようにし、戦術的に重要な意義を持つ高地と海岸防御地帯に坑道を基本とする堅固な防御陣地を築き、それを拠りどころにして絶え間ない消耗戦で敵に甚大な打撃を加えるようにした。

主席は1951年6月末、前線で勇敢にたたかっている共和国英雄および模範戦闘員を最高司令部に呼び、彼らの戦闘談を聞き、より大きな偉勲を立てるよう励ました。そして彼らに腕時計と「アメリカ帝国主義侵略者を掃滅せよ！」という文字が刻まれている自動短銃を渡しながら、南半部を解放し祖国を統一するまで銃を手放してはならないと訓令した。

人民軍勇士たちは戦闘ごとに比類なき勇敢さと集団的英雄主義を発揮し、巧みな戦法を駆使して敵に甚大な打撃を与えた。

相次ぐ惨敗をこうむって抜きさしならぬ政治的・軍事的危機に陥ったアメリカ帝国主義は、停戦会談を申し入れてきた。アメリカ帝国主義は会談を申し入れることで、朝鮮侵略を糾弾する国際世論を鎮静化させようとし、日増しに深まる政治的・軍事的危機から脱け出し、会談の舞台裏で息をついで新たな攻撃を準備する一方、前線でできなか

った侵略的目的を停戦会談で達成しようと画策した。

主席はアメリカ帝国主義のこうした企図を見抜き、停戦会談に対する原則的な立場と態度を明らかにした。

主席は1951年6月末の朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、アメリカ帝国主義が停戦会談を申し入れてきたのは、われわれへの屈服であり、自らの敗戦を公式に認めたことにひとしいと述べ、われわれは停戦してもよいし、戦争を続けてもよいという立場で、アメリカと停戦会談を行うことに同意すべきであると強調した。

会談で共和国側の原則的かつ強硬な立場によって陰険な目的を実現できなくなったアメリカ帝国主義は、会談を一方的に破綻させ、新たな軍事的攻勢に出た。

主席は、アメリカ帝国主義の「夏季および秋季攻勢」を撃破する作戦を指揮した。

アメリカ帝国主義は、1951年8月中旬から「夏季攻勢」を強行した。彼らは前線西部が主要攻撃方向であるかのように見せかけながら、ひそかに前線東部に大兵力を集中した。

主席は敵の主要攻撃方向は西部ではなく東部であると判断し、敵の「作戦」が開始される直前に西部の人民軍連合部隊を早急に東部へと機動させた。

アメリカ帝国主義は、10余万の兵力と1000余機の航空機、数多くの戦車を動員して1カ月間も狂気じみた攻撃を続けたが、数万名の死傷者を出しただけで、わが軍の防御陣地は一歩も突破できなかった。敵は「夏季攻勢」の惨敗から教訓を見いだそうとせず、同年秋、再び「秋季攻勢」の準備に狂奔した。

主席は全戦線の防御を強化しながら、特に前線東部の1211高地の界

線を鉄壁のごとく固め、海岸防御を強化するよう命令した。

1211高地は戦略的に極めて重要な高地であった。もしもこの高地が敵に渡れば金剛(クムガン)山と元山まで失い、海岸からの上陸を狙う敵の企図を破綻させることもできないのであった。

主席は1951年9月下旬、砲炎弾雨を突いて1211高地の防衛者を訪ね、敵の「秋季攻勢」を撃破する作戦を練った。

主席が示した作戦的方針に従い、人民軍部隊は1211高地に力を集中して防御密度を高め、直射砲を高地の上に配備した。

主席は前線の現地指導から戻った数日後の深夜、現地の軍団長崔賢に電話をかけ、戦闘員はすべて貴重な宝である、すでに冷え込みはじめたようだから温かいご飯と汁を出し、寝床も寒くないようにして風邪を引かないよう事前に気を配らなければならない、と強調した。主席はその後、野菜が十分に供給されていないという報告を受けるや、ただちに大豆を送り、高地の坑道で戦闘員が豆もやしをつくって食べられるようにし、身体が虚弱な軍人のために前線静養所を設けて休息させ、兵士たちが故郷の消息を知りたがっていることを気にかけて、人民軍部隊に野戦ポストを設け、たたかう高地でも故郷の父母妻子の消息を知ることができるようにした。

1951年9月末から「秋季攻勢」を開始したアメリカ帝国主義は、「最大の砲撃」、「最大の爆撃」と喧伝しながら、1211高地に毎日3万～4万発の砲弾と爆弾を浴びせ、数多くの戦車の掩護のもとに傭兵を繰り出して毎日10余回に及ぶ「波状式」の連続攻撃を繰り返した。うっそうと生い茂った山林は火の海と化し、岩も砕けて4方に飛び散った。

1211高地の戦闘員は必勝の信念と革命的楽観にあふれ、燃える

高地の坑道と塹壕で、楽器を作って歌をうたい踊りながら敵と決死のたたかいを繰り広げた。戦闘員たちは「党と領袖のために！」、「祖国と人民のために！」、「寸土たりとも敵にわたすな！」というスローガンを掲げ、青春も生命も惜しみなく捧げてたたかった。英雄兵士李寿福（リ スボク）は、祖国のために胸で火を噴く敵の銃眼を塞いで勝利の進撃路を開き、ある通信兵は切断された通信線を身を投じてつなぎ部隊の通信を確保した。致命傷を負ったある砲兵は、生命の最後の瞬間まで「金日成将軍万歳！」を声高く叫んで敵に砲弾を浴びせた。

主席の卓越した 戦法と用兵術、兵士に対する熱い愛、人民軍軍人と後方人民の英雄的な闘争によって、敵の「秋季攻勢」も完全に破綻した。

「夏季および秋季攻勢」で惨敗を重ねたアメリカ帝国主義は、やむなく1951年10月下旬、停戦会談の再開を申し入れ、軍事境界線の確定と非武装地帯設置に関する共和国側の提案を受け入れざるを得なかった。しかし狡猾な彼らは、不当な主張を持ち出して会談を引き伸ばし、再び軍事的冒険に走った。

主席は戦争の長期化に対処するため党勢を拡大、強化し、党と大衆との連係を強め、人民政権の機能と役割を高める活動を指導した。

党勢を拡大、強化し、党の周りに広範な革命勢力を固く結集するために、1951年11月1日から4日まで朝鮮労働党中央委員会第4回総会を開催した。

主席は総会での『党組織の組織活動における幾つかの欠陥について』と題する報告と『党の組織活動の改善について』と題する結語で、党の組織活動に現れた欠点を全面的に批判し、党勢を拡大、

強化し、広範な大衆を党の周りに結集するための課題を示した。

主席はまず、党勢の拡大、強化を重要な課題として打ち出した。

苛烈な戦火の中で少なからぬ党員が犠牲になった反面、数多くの先進分子が成長している状況にあって、彼らを適時に入党させ党勢を絶えず拡大、強化せずには、党の戦闘力を高め、党と大衆のつながりを強め、人民大衆を戦争の勝利へと奮起させることは不可能であった。

主席は関門主義的傾向を排し、労働者とともに農民、勤労インテリの先進分子を党に受け入れ、労働党を大衆的政党に引き続き発展させていかなければならないと強調した。

そして、勤労農民を多数入党させれば朝鮮労働党は農民党になると憂慮する考えを批判し、朝鮮労働党が労働者階級を中核として構成され、労働者階級の革命思想によって指導される限り、農民出身が増えたとしても党の性格は決して変わることはないと説いた。同時に党の窓口を開くと言って、党勢拡大をキャンペーン式ではなく日常的に行い、党の規約にもとづき個別の入党手続きは厳守すべきであると強調した。

総会後の1952年6月下旬、主席は朝鮮労働党中央委員会組織委員会で、農村における党の政治教育活動と大衆文化活動を強化するという綱領的な指針を示し、同年8月初めに開かれた朝鮮労働党中央委員会政治委員会では、幹部の間で官僚主義に反対するたたかいを強化し、党の隊伍を組織的・思想的にいっそう強固にする課題を示した。

主席は、平安北道と平安南道内の工場と農村の党細胞の活動を現地で指導して、党の隊伍を拡大するとともに細胞を強化し、中

核を育成して党員の先駆的役割を高めるよう導いた。そして1952年6月20日、龍川郡北中面下長里（リョンチョン　プクチュン　ハ　ジャン）の党細胞総会に参加して、党員は党生活を立派に行い、政治・理論水準を高めるために熱心に学び、困難な時であるほど大衆の先頭に立って突き当たる障害と難関を果敢に突破して、楽天的に生活しなければならないと述べた。会議の休憩時間、女性党員が弾くオルガンに合わせてほかの女性党員たちが楽しそうにうたうのを見た主席は、戦争中であっても党員たちが楽天的に働き生活している姿を見て大きな励ましとなったと述べ、勝利の信念と剛毅な意志を持った人々は戦争という困難な試練を前にしても、悲観したりためらうことなく楽天的に生活できるのであると語った。このように確信に満ちて楽天的に生活し困難を克服して進むのが、今日のたたかう朝鮮人民の気概であり、このような人民はいかなる力をもってしても屈服させることはできないと強調した。

党中央委員会第4回総会後、多数の党細胞の中核が成長し、党員の積極性と創意性はかつてなく高まり、前線と後方で献身的にたたかう数十万の労働者、農民、軍人、勤労インテリの先進分子が新たに入党して、朝鮮労働党は100万以上の党員からなる強力な大衆的党に成長した。

主席は、人民政権の機能と役割を高めるための活動を強力に推し進めた。

主席は1952年2月、道・市・郡人民委員会委員長および党幹部連席会議で行った演説『現段階における地方政権機関の任務と役割』で、人民政権の性格と特徴を明らかにし、戦時の条件に合わせてその機能と役割を高めるための課題と方途を示した。

人民政権の機能と役割を高めるためには、何よりも幹部の間で官僚主義的な活動作風に反対するたたかいを繰り広げなければならないとし、幹部は人民の利益を重んじ、彼らに依拠して活動し、人民に命令するのでなく、説得、教育し、常に人民から学び、誠心誠意人民のために奉仕する人民の忠僕とならなければならないと強調した。

主席は、1952年6月22日、平安北道の幹部協議会で人民政権機関に提起された課題を具体的に示し、翌日、中央高級指導幹部学校の教職員、学生に行った演説『人民政権の強化は祖国解放戦争勝利の重要な保障』で、官僚主義はまださまざまな形で見られると指摘し、それを一掃するよう強調した。

また1952年11月下旬、内閣第24回全員会議で、人民政権機関の機能と役割を高めるために、郡を細分化して面を廃止し、里を強化する方向で地方行政体系と行政区域を改組する方針を示した。こうして、人民政権機関は引き続き提起される困難で複雑な課題を迅速、正確に処理しなければならない戦時の条件に即して活動を改善していけるようになった。

第4節　戦時生産と戦後復興建設の準備を推進

金日成主席は全人民を戦時生産に奮い立たせた。

主席は農業生産を高めるため、何よりも農村に大きな力を入れた。

主席は「党の優れた力量を農村へ！」というスローガンを示し、有能な活動家を多数農村に派遣する一方、専任の民主宣伝室長を

配置し、民主宣伝室の運営を根本的に改善して農民の政治的思想・意識水準と階級的自覚を高め、彼らの生産熱意を大いに盛り立てた。

主席は戦時の食糧生産対策を講じた。

1951年3月、戦時の厳しい状況のもとでも平安南道の多くの農村を訪ね、食糧のための闘争は、祖国のための闘争であり、前線の勝利を保障するための闘争であると強調して、農民を戦時の食糧増産へと奮い立たせた。また1952年1月、全国多収穫農民熱誠者大会と畜産部門熱誠者大会を開催して、1951年度の農業増産闘争と畜産業で収めた成果を総括し、その経験を普及させるようにした。

農民は戦時の農業増産に全力を尽くした。農民は間断なく続く敵機の爆撃と艦砲射撃にもひるまず、田畑のそばに待避壕を掘り、役牛に偽装をほどこして昼夜を分かたず農作業を続けた。その結果、戦時の困難な状況のもとでも穀物生産計画は立派に遂行された。

主席は戦時下の工業生産も力強く推し進め、軍需品と生活必需品をより多く生産するよう指導した。

破壊された生産施設を復旧する一方、工場、企業を安全地帯に分散疎開させ、重要な機械工場や兵器工場を地下に移設あるいは新設して戦時中でも生産を続けられるようにした。そして産業、鉄道運輸など人民経済の部門別熱誠者大会を招集し、戦時生産と輸送を円滑に保障する対策を立て、戦火をくぐって多くの工場、企業を現地指導し、労働者を戦時生産闘争に奮起させた。

1951年2月中旬、ある兵器工場を訪ねた主席は、労働者に兵器をより多く生産して前線に送るよう呼びかけ、わが国の地形条件

と朝鮮人の体質にかなった迫撃砲と自動短銃を大量に生産するよう強調した。そして兵器工業の発展に必要な技術者、専門家を養成する基地として、工場に金策（キムチェク）工業大学の分校として夜間大学を設けるようにした。

軍需工場の労働者をはじめ全国の労働者は、敵機の爆撃で電線が切断されれば手でベルトを回して砲弾や織物を生産し、谷間に小型溶鉱炉を建設しては鉄を生産した。鉄道輸送部門の労働者は、猛爆の中でも破壊された鉄道と橋梁、輸送施設を復旧して戦時下でも輸送を保障した。

その結果、1951年の工業総生産は109・6％と計画を超過遂行し、1952年の国営・協同団体工業の総生産高は前年に比べて19％、穀物総収量は13％伸び、鉄道貨物輸送計画も105・2％と超過達成された。1953年の人民経済上半期の計画も超過して達成された。特に軍需工業部門は長期戦に対処できるよう各種の火砲と砲弾、狙撃兵器と弾薬を十分に生産した。

主席は人民の生活を安定させることにも深い関心を払った。

1951年1月、内閣決定で中央から道、市、郡、面、里に至るまで戦災民救護委員会を組織して、戦災をこうむった人民のために生活上の便宜を図るとともに、愛国烈士遺児学院を設立する措置を講じ、愛国烈士遺族と戦傷栄誉軍人、人民軍留守家族のために国家的・社会的援護を幅広く行うようにした。そして1951年1月に開かれた朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、愛国烈士遺児と戦災孤児を国家が引き取って養育する対策を講じ、自ら戦災孤児を最高司令部に連れてきて面倒を見た。

主席は戦争という困難な環境にあっても商品の価格を系統的に

引き下げる措置を講じる一方、労働者、事務員への生活必需品の現物供給制を実施するようにした。そして1952年9月、穀物を廉価で販売し、労働者、事務員の住宅を保障する資金を拠出することを内閣で決定したほか、翌年1月から全国的範囲で無料治療制を実施するようにした。

主席は戦時生産とともに、戦後復興建設の準備も推し進めた。

主席は厳しい戦争のさなかでも勝利した祖国の将来を見通し、1950年12月下旬に開かれた朝鮮労働党中央委員会第3回総会で、戦後復興建設の準備を進める方針を示した。

戦争が長引き、ますます激しさを増していた1952年6月下旬、主席は楽元（ラクウォン）機械製作所鋳物職場の党細胞総会に参加して、労働者たちと戦後の復興建設について相談し、戦後に破壊された経済を復興するためには多くの困難があるだろう、しかしわれわれは何としても破壊された都市と農村を復興しなければならないと切々と語った。この時、ひとりの女性党員が席から立ち上がり「首相さま！　ご心配に及びません。わたしたちがたたかって勝利さえすれば復興建設は問題でありません。日本帝国主義者があれほど破壊したのも2、3年で復旧して立派な暮らしができたではありませんか。戦争が終わればまた復旧して立派な暮らしができますから、あまり心配なさらないで下さい」と申し上げた。主席は、彼女の言葉は労働者階級の強靭な意志を表わしている、われわれの労働者階級は難関と試練にも屈しない強靭な意志をもつ労働者階級であり、このような労働者階級がいる限り、われわれは必ず戦争で勝利し、戦後の復興建設も立派に遂行できると語った。

主席は、戦後の人民経済の復興、発展における機械工業の位置

と役割を重視し、機械製作工業基地の創設に深い関心を向けた。

1951年3月下旬、機械製作工業基地の創設を発起し、同年10月中旬に熙川（ヒチョン）に機械工場を建設するよう指示し、その後、亀城（クソン）、徳川（トクチョン）などの各地に機械工場を建設する措置を講じた。

主席は機械工業とともに金属、電気、石炭、化学工業などの基幹工業部門と軽工業部門工場の復興準備も推し進め、破壊された都市と農村を復興する準備も進めるようにした。

主席は都市と農村の実態調査にもとづいて復興建設計画と設計を完成させ、1952年5月に化学建材工業省を、翌年2月には国家建設委員会を設け、勝湖里（スンホリ）セメント工場をはじめ全国のセメント工場を復旧、整備する一方、各地にれんが工場を建設するようにした。

主席は、特に首都平壌市の復興建設に重要な意義を付与した。1951年1月、都市設計関係者を呼んで平壌市復興建設総計画図を作成させ、1952年5月には平壌市復興建設に関する内閣決定を採択し、1953年7月初めには朝鮮労働党中央委員会政治委員会で再び平壌市復興建設総計画を討議し、自ら平壌市復興委員会委員長の重任を担った。

主席は各道都と農村を復興する計画および設計も作成させ、政権機関と人民軍の重要な職責で活動していた幹部を重工業部門の重要工場、企業の支配人または党のオルグとして派遣する措置を講じた。

こうして、厳しい戦争のさなかに、勝利した祖国の地に平壌市をはじめ全国のすべての都市と農村を新たに建設する雄大な設計図が作成され、復興建設の準備が推し進められた。

主席は、都市と農村における生産関係の社会主義的改造のための準備を推し進めた。

工業部門で社会主義経済形態の比重を高め、その優越性を発揮させるようにし、特に大規模の国営工業が破壊された状況にあって、中小規模の地方産業を発展させ、生産協同組合と水産協同組合を多く組織し、国営商業と消費組合商業の役割を高めて、流通分野で社会主義的要素の比重を高めるようにした。

主席は農業の社会主義的改造のための準備に大きな力を入れた。

戦前から組織され始めた国営農牧場と農業機械賃耕所を増設し、道、市、郡が運営する牧場を数多く設けるようにした。その結果、戦争の間に国営および道、市、郡が運営する牧場は200余も新設され、国営農牧場は37から213に、農業機械賃耕所は5から15に増加した。

また、農村で協同的労力組織形態を広く普及して発展させ、農業協同化の前提条件を整えるようにした。

主席は1952年5月、平安南道大同郡東岩面元和里を訪ね、農民が役牛共同利用班と労力互助班を組織して農作業を行っているのを目にし、これは今後の農業を協同化するうえでも必要なことであると述べ、農業協同組合の優越性とその実現の条件、組織原則を明示した。主席は元和里の農民に対し、農業協同組合を組織して運営してみるのがよい、組合を最初に組織する時は規模をあまり大きくせずに30戸程度にし、自発的に加入を望む人だけで組織するようにし、組合が強化されてから他の人々を順次受け入れるようにすべきだと述べた。

主席は同年12月には、朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、農

村での協同化の新しい芽を積極的に育て、農業協同化の実現に向けた条件をよりよく整え、副業生産協同組合を組織する措置を講じた。その結果、農村では役牛共同利用班、労力互助班などの協同的労力組織形態が広く普及しただけでなく、農業協同組合と副業生産協同組合も数多く組織され、1953年7月現在、農業協同組合は102、副業生産協同組合は72に達した。

主席は戦後の大自然改造事業の準備を推し進めた。

1952年の秋、白茂(ペンム)高原と蓋馬(ケマ)高原など北部高原地帯に調査団を派遣して耕地と放牧地にふさわしい土地を探し出させ、それにもとづいて5号農場をはじめ多くの国営農牧場を開設した。また灌漑施設の復旧・拡張と西海岸での干拓、東海と西海を結ぶ運河建設の遠大な構想を示し、その準備を進めるようにした。

主席は厳しい戦時下でも、民族幹部の養成と科学・技術の発展に深い関心を払った。

1951年8月初め、大学卒業生および大学生召還に関する軍事委員会の指示を下達し、次いで翌年1月下旬には、朝鮮人民軍最高司令部軍事副司令官に、大学在学中に入隊した軍人を呼び戻して学業を続けさせる指示を与えた。こうして、戦闘員が一人でも必要な時に前線でたたかっていた軍人が再び大学に戻り、外国への留学や研修に送り出されるようになった。主席は1952年4月には金日成総合大学を、6月には金策工業大学、平壌師範大学、中央党学校など多くの大学と幹部養成機関を訪ね、民族幹部養成の方向を示し、教授・教育活動で提起されていた問題をすべて解決した。

主席は、戦時のさなかにも科学者に実験器具や試薬をはじめ科

学研究活動に必要なあらゆるものを提供した。そして1952年4月には、科学者大会を招集して主体的な科学発展方向を示し、同年12月1日には科学院を創設し、戦時生産と戦後復興建設に緊要な問題を計画的に研究するよう指導した。

第5節　人民軍の質的強化、チュチェの戦争理論と戦法の深化、発展

金日成主席は前線での勝利をもたらしながら、軍事先行の原則をもって人民軍の戦闘力を高めるため、その質的強化に大きな力を入れた。

主席は1951年12月31日、朝鮮人民軍最高司令部の処長以上の将官、将校に行った演説『人民軍の戦闘力をさらに強化し、戦闘行動をより積極化するために』で、人民軍を質的に強化する綱領的な課題を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは前線で引き続き主導権を堅持し、敵の兵力と火器機材を絶えず掃滅しながら最大限に時間を稼ぎ、人民軍を質的に強化しなければなりません」

主席は、人民軍を強化するためには人民軍の武力装備を国の実情に即して改善、強化し、現代戦の要求に即してすべての指揮官と政治活動家の軍事的・政治的資質を高め、戦闘・政治訓練を着実に行い、部隊の戦闘力を全面的に高めなければならないと強調した。

主席は人民軍の政治的・思想的強化に第一義的な関心を払い、党の政治活動を強化するよう指導した。

1952年7月上旬、朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、人民軍内の党組織と政治機関の役割を高め、すべての軍人が党に忠実で祖国と人民を愛し、敵を憎悪し、勝利の信念を持つよう教育しなければならないと述べた。そして、すべての思想教育をわが国の実情に即して、部隊の戦闘任務と結びつけて効果的に行い、軍人を戦闘任務の遂行へと奮い立たせなければならないと強調した。

主席は軍人への思想教育における事大主義、教条主義を克服し、主体性を確立するよう導いた。

主席は1951年10月、朝鮮人民軍休養所を訪れた際、雪におおわれたシベリアの森林の中の1匹の熊を描いた風景画が掛かっているのを見て、われわれは今、他の国で戦争をしているのではなく、まさにわが国でアメリカ帝国主義者と血を流してたたかっているのであるから、一幅の絵を描いて掛けるにしても、人民軍の兵士を郷土と祖国の一木一草を愛するよう教育するのに必要な絵を描いて掛けなければならない、わが国には美しい海もあり、秀麗な金剛山や妙香(ミョヒヤン)山もあるのだから、一幅のわが国の麗しい風景を描いて掛ければ、人民軍の兵士を教育するのによいはずだと語った。

主席は人民軍を軍事技術的に強化することに大きな力を入れた。

主席は近代戦の要求に即して人民軍指揮官の資質と指揮能力を高めるよう指導した。

1951年11月下旬、朝鮮人民軍最高司令官命令第0618号を下達し、将校の養成および再教育を行うようにした。同時に高級軍事学校

（金日成軍事総合大学）と砲兵軍官学校、軍医軍官学校など軍事教育機関を新しく創設し、多くの軍官学校と部隊に将校を再教育する講習所を設け、指揮官の養成および再教育体系を確立させた。

主席は1952年2月上旬、朝鮮人民軍連隊幹部の短期講習会参加者たちに会い、戦争で最終的勝利を収めるために人民軍に提起される課題と、チュチェの戦法を活用するうえで提起される問題について具体的に述べた。そして同年6月下旬には姜健（カンゴン）軍官学校を訪れて教育施設と教育内容について調べ、わが国の地形と実情に合った戦法、戦争の過程で得た戦闘経験を教える問題などを提起し、その他の軍事学校と軍官講習所の活動についても現地で指導した。

主席はわが国の実情と近代戦の要求に即して戦闘・政治訓練を着実に行い、武力装備を絶えず強化するようにした。

主席は部隊での戦闘訓練を、戦争の過程で得た経験と国情、当面の部隊の戦闘任務に即して行うようにし、特に現在掌握している境界線での防御戦と襲撃戦を効果的に行うために、山岳訓練と夜間訓練を強化するようにした。

主席は人民軍の武力装備を自らの軍需工業に依拠して強化することに深い関心を払い、歩兵部隊の自動火器を増やし、砲兵火器の構成についても山岳の多いわが国の地形に照らして迫撃砲と曲射砲の比重を高めるようにした。そして、空軍力を増強するためパイロットと技術整備要員を数多く養成し、新たな戦闘技術機材で武力装備を改善するようにした。また海軍の武力装備を改善し、戦車兵、通信兵、工兵など技術兵種の部隊に近代兵器と戦闘技術機材を装備させるようにした。

主席は、軍隊の基層組織であり基本戦闘単位である中隊の強化に特別な関心を払った。

1951年10月末、模範中隊運動を発起し、翌年3月下旬には朝鮮人民軍最高司令官命令第0166号を下達して、この運動を全軍に拡大させた。そして、中隊を強化するうえで下士官長が果たす役割の重要性に照らして朝鮮人民軍下士官長講習所を設け、1952年2月下旬に下士官長講習所を訪れ、下士官長が果たすべき任務を明らかにするとともに、中隊の管理を改善するための課題を示した。

こうして1952年末に至り、人民軍の歩兵師団の火器は前年に比べ160％に増え、自動火器も増えて軍隊の機械化水準は著しく高まった。小隊長以上の全指揮官の45％が軍官講習所とその他の教育機関で再教育を受けた。その結果、人民軍は量的のみならず質的にも比べようもなく強化された。

主席は後方を強固に守るため、軍事重視の原則で民間武力を強化するよう指導した。

主席は各地の人民自衛隊の隊伍を増やしてその武力装備を改善し、軍事訓練を強化して戦闘力を絶えず高めるようにした。また優秀な党員で特別武装自衛隊を組織し、人民軍とともに当該防御地域の海岸警備および敵の海上陸戦隊掃滅、スパイ・破壊分子一掃などの任務を遂行させた。

主席は主体的な戦争理論と戦法をさらに深化、発展させた。

戦争理論と戦法を深化、発展させるのは戦争遂行の重要な要求であり、戦争の勝利を戦略・戦術的に裏付けるものでもある。

主席は1952年12月下旬、朝鮮人民軍高級将校会議での『人民軍を強化しよう』と題する演説をはじめとする他の著作で、チュ

チェの戦争理論を近代戦の要請に即してさらに発展させた。

主席は、戦争は本質において特別な暴力手段によるある階級の政策的延長であるとし、政策が帝国主義的なものである場合、その政策から招来される戦争は帝国主義的侵略戦争であり、政策が人民の利益を固守し、軍事行動が民族的抑圧に対する人民の闘争を表わす時には、その戦争はほかならぬ革命的な民族解放戦争であるという新たな古典的定義を下した。

主席は戦争は元来、勤労人民大衆を抑圧、搾取し、他国と他民族を支配しようとする帝国主義者の侵略政策にその根源があるということを明らかにし、戦争勝利の決定的要因は、軍人の政治的・道徳的優越性にある、すなわち戦争において決定的役割を果たすのは兵器や戦闘技術機材ではなく、それを扱う人間であるということを独創的にせん明し、戦争の勝利に至る主動的で決定的な要因は、その国の主体的な力であるという軍事理論を提示した。

主席はまた、戦争は望まないが戦争を恐れてはならず、正義の戦争、革命戦争は最後まで遂行しなければならないという戦争に対する革命的立場を示した。

主席は祖国解放戦争の厳しい戦火の中で、朝鮮式の戦法、チュチェの戦法を編み出した。

戦争は武力の対決であると同時に、軍事戦法と戦略の対決であるため、武力は正しい戦略と戦法によって指導されてこそ、戦争手段としての使命を全うすることができるのである。

主席は祖国解放戦争を勝利に導きながら、敵の不意の侵攻に対応する即時的な反撃戦と連続的な攻撃戦、敵背後における第2戦線の形成、基本戦線と第2戦線の連携による大包囲戦、坑道を拠

りどころにした積極的な陣地防御戦、狙撃手組、飛行機狩り組、戦車狩り組運動、独立重機関銃組、敵背後破壊組、移動砲兵中隊、機動高射砲兵中隊活動など数多くの戦法を編み出した。主席は朝鮮式の戦法、チュチェの軍事戦法を編み出し、人民軍に巧みに活用させることで、数的にも技術的にも優勢なアメリカ帝国主義侵略者を打ち負かして輝かしい勝利を収められるようにした。

第6節　アメリカ帝国主義の蛮行を暴露し、世界人民との連帯を強化する活動

金日成主席は1950年12月の朝鮮労働党中央委員会第3回総会をはじめ、その他の機会にも朝鮮労働党の戦時における対外活動方針を示した。

主席が示した戦時における対外活動方針は、アメリカ帝国主義の朝鮮に対する侵略政策と朝鮮人民に対する彼らの野蛮行為を全世界に暴露し、社会主義諸国の人民をはじめ世界の革命的人民との国際的連帯を強化することであった。

主席はアメリカ帝国主義の蛮行を暴露する闘争に大きな力を入れた。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは史上類のない敵のあらゆる野獣じみた蛮行を人類の前にことごとく暴露して、アメリカ帝国主義者を徹底的に孤立させるべきです」

主席は世界の面前に朝鮮戦争を引き起こしたアメリカ帝国主義

者の正体と罪状をすべて暴露するようにした。

主席は共和国政府の声明と証拠文書を発表することで、国連安保理の「決議」を陰謀をめぐらす方法で仕組んだアメリカ帝国主義の謀略と戦争仕掛け人としてのアメリカ帝国主義の正体を暴露するようにした。特にソウルを解放したときに押収した犯罪的な戦争挑発証拠文書を国連をはじめ国際機関と各国に配布するなど広く公開した。また党および社会団体の談話、声明、大衆集会などを通じてアメリカ帝国主義の罪状を暴露、糾弾した。

その結果、アメリカ帝国主義こそ朝鮮戦争の仕掛け人、侵略者、戦犯者であることがあまねく知れ渡り、アメリカ帝国主義は世界人民から強力な糾弾と憎悪を受けるようになった。

主席はまた、朝鮮で強行したアメリカ帝国主義のあらゆる非人間的な蛮行を世界人民の前に暴露するようにした。

アメリカ帝国主義は国際法と人道の初歩的な規範も踏みにじり、老若男女の別なく罪のない数多くの人民を虐殺し、はては細菌戦、化学戦まで強行した。朝鮮において強行したアメリカ帝国主義のあらゆる蛮行は、「文明の使徒」、「人道主義の擁護者」と自称していたアメリカの仮面をはぎとり、野獣の正体を天下にさらけだした。

主席は共和国政府が声明、アピールなどを発表して、アメリカ帝国主義が朝鮮で犯している罪業について世界に暴露するようにした。そして祖国統一民主主義戦線内に調査委員会を設け、アメリカ帝国主義の蛮行を系統的かつ全面的に調査し、同委員会の報道で広く公開した。同時に、アメリカ帝国主義の蛮行を部門別に具体的に世界の面前に暴露する対策を立て、各国際団体の代表と

世界の進歩的人士が朝鮮を訪れてアメリカ帝国主義の蛮行を現地で調査し、世界に暴露するようにした。

こうして、国際民主婦人連盟の調査団をはじめ国際民主法律家協会および世界の進歩的科学者からなる権威ある調査団が朝鮮を訪れて、アメリカ帝国主義の蛮行を具体的に調査し、報告書と公報、アピール、抗議書簡などを作成して、国際機関や世界各国の政府と各階層の人士に送付した。彼らはこぞって、アメリカ帝国主義の無差別爆撃と集団虐殺、細菌戦などがすべて計画的に強行された犯罪行為であるとし、犯罪者は国際法により厳重に処罰されるべきであり、このような野獣じみた蛮行は即時中止されるべきであると強く主張した。

主席は、世界の革命的人民との国際的連帯を強めるよう指導した。

主席は、社会主義諸国、人民民主主義諸国人民との国際主義的友好と団結の強化に第一義的な関心を払った。

多くの機会に社会主義諸国、人民民主主義諸国との友好・協力関係を拡大、発展させるうえで提起される原則的問題と方途を明確に示し、それを実現するため精力的に対外活動を繰り広げた。

主席は1952年にソ連を非公式訪問してスターリンに会い、朝鮮革命と世界革命にかかわる問題について虚心坦懐に話し合った。

スターリンは、ソ連共産党第19回大会に参加するために来た各国党代表の前で、金日成主席を公認された東方の傑出した指導者として高く称え、アメリカ帝国主義とたたかっている朝鮮人民を支持、声援するよう呼びかけた。欧州の人民民主主義諸国の党首たちも金日成主席を熱烈に歓迎し、たたかう朝鮮人民を積極的に支持、声援し、戦後の復興建設を援助すると約束した。

主席のソ連訪問を契機に、朝鮮人民の正義の偉業に対する支持、声援はさらに高まった。

主席は一方、共和国政府代表団と人民代表団を数次派遣して、兄弟諸国との友好・協力関係をさらに拡大、発展させた。

主席は世界の進歩的人民との国際的連帯を強化することに深い関心を払った。

戦時の厳しい状況のもとでも、朝鮮で世界青年週間を記念し、世界平和評議会第1回会議のアピールを支持する平和擁護署名運動を全国的に幅広く行うようにする一方、平和擁護世界大会、世界平和評議会会議、アジア・太平洋地域平和擁護大会、世界青年学生祭典など多くの国際会議と国際的行事にそれぞれ代表団を派遣して、世界の進歩的人民との連帯を強化する活動を積極的に繰り広げるようにした。同時に戦争の重荷を一身に担った多忙な日々の中、訪朝した多くの外国の政府代表団と国際民主団体代表団、平和人士、ジャーナリストと会見し、反米闘争戦線で力を合わせてたたかうよう鼓舞した。また共和国政府が植民地従属国人民の民族解放闘争と資本主義諸国の労働者階級の革命闘争、自由と独立、平和と民主主義をめざす世界の進歩的人民の闘争を積極的に支持、声援し、国際的な反米反戦闘争で彼らが足並みをそろえるようにした。

主席の精力的な活動によって、世界の革命的人民との国際的連帯は強化され、朝鮮人民の正義の祖国解放戦争に対する世界人民の支持、声援はさらに強まり、祖国解放戦争の最終的勝利に向けて有利な国際的環境が整った。

第7節　党の組織的・思想的強化、戦争の最終的勝利をめざすたたかい

1952年末、朝鮮の情勢は極度に緊迫化した。

アメリカ大統領に就任したアイゼンハワーは12月初めに南朝鮮を訪れ、「交渉より行動が第一」とうそぶき、「新攻勢」の準備をじかに指揮した。アメリカ帝国主義は「新攻勢」で、前線における全面的突破作戦とともに、朝鮮の後方地点に対する海上陸戦隊と落下傘部隊の上陸作戦を謀り、大兵力と多数の航空機、各種火砲の投入をもくろんでいた。

金日成主席はアメリカ帝国主義の「新攻勢」の企図を粉砕し、戦争の最終的勝利を勝ち取るため、何よりも革命の参謀部である党を組織的、思想的に強化し、戦闘力を高めることに大きな力を注いだ。

主席は1952年12月15日から18日まで行われた朝鮮労働党中央委員会第5回総会での報告『党の組織的・思想的強化はわれわれの勝利の基礎』で、党中央委員会第4回総会以後、党活動で収めた成果を総括し、党を組織的、思想的に強化するための綱領的な課題を示した。

主席は党員の党性を強めることを重要な課題として提起した。

金日成主席は次のように述べている。

「党性を強めるということは、個々の労働党員が党に限りなく忠実で、党活動に積極的であり、革命の利益と党の利益を第一の生命と見なして個人の利益をこれに服従させ、いつどこで、いか

なる状況のもとでも党の利益と党の原則を固く守り、一切の反党的、反革命的な思想と妥協することなくたたかい、党生活を正しく行い、党の規律を厳格に守り、党と大衆との結びつきを絶えず強めることを意味します」

主席は、党性を強めるためには、個人の利益を革命の利益に服従させないあらゆる自由主義的傾向とたたかい、党員の党生活、特に批判と自己批判を強めるべきであると強調した。

主席は、党の統一と団結を妨げる分派分子と断固たたかうべきであり、セクト主義を克服するためには党員が革命的警戒心と党性をさらに高め、分派分子の行動を厳しく監視し、党組織の規律を強化し、党生活で民主主義中央集権制の原則を貫くべきであると強調した。そして分派分子がこれ以上、反党的な行動をせず、心から自己の過ちを是正しようとするならば、党はいつでも寛大に包容するであろうと述べた。

主席は党の思想活動を強化する課題を示した。

党内に新入党員が多く、アメリカ帝国主義との厳しいたたかいが続いている状況にあって、いつにもまして党政策教育と愛国主義教育を強化し、党の思想活動分野における形式主義と教条主義、民族虚無主義を克服し、朝鮮の現実と朝鮮革命の実践的要請に即した思想教育を行うよう強調した。

総会後、主席は党を組織的、思想的に強化するための活動を推し進めた。

総会文書の討議を全党的に行うことにし、党員の党性を鍛え、彼らの先駆的役割を高める方向で、そして党組織の戦闘的機能を高めるとともに、「自由主義」とセクト主義を克服する闘争と密

接に結びつけ、思想闘争の方法で行うようにした。

全党あげての思想闘争の過程で党の戦闘力はいっそう強まり、特に党内に長い間潜んでいた朴憲永（パクホンヨン）、李承燁（リ スンヨプ）一味が摘発され、一味の反党・反革命的スパイ行為が余すところなく暴露された。

朴憲永はすでに解放前、日本帝国主義に投降した後、アメリカ帝国主義のスパイに転落した革命の裏切り者であった。解放後にはアメリカ帝国主義の差し金で南朝鮮の党組織と労働運動、人民の革命闘争を内部から破壊し、共和国北半部に入ったのちにも反党・反国家陰謀を続け、特に戦時の厳しい時期に党・国家・軍事機密を系統的にアメリカの諜報機関に通報し、アメリカ帝国主義の「新攻勢」に呼応して武装暴動を起こし、党と政府を転覆しようとした。

朴憲永、李承燁一味を摘発、排除することで党の純潔性は固守され、党の隊伍の統一・団結も強化された。また、彼らに期待をかけて新たな軍事的冒険を強行しようとしたアメリカ帝国主義侵略者に手痛い打撃を与え、戦争の最終的勝利を速めるようになった。

主席は党を組織的、思想的に強化する一方、アメリカ帝国主義の「新攻勢」を粉砕し、戦争の最終的勝利を勝ち取るためのたたかいを指導した。

アメリカ帝国主義は「新攻勢」の開始を企て、朝鮮戦線にアメリカ本土と日本から膨大な兵力と多くの艦船、航空機など戦闘技術機材を投入し、さらに日本の「自衛隊」兵力と蔣介石一味の軍隊まで引き入れようと画策した。

主席は、アメリカ帝国主義の狂気じみた新たな軍事的攻勢を粉砕する積極的な対策を講じた。

1952年12月下旬、朝鮮人民軍高級将校会議を招集し、アメリカ帝国主義の大規模攻勢の企図に対処して人民軍を政治的、思想的、軍事技術的に強化し、東西両海岸と前線を鉄壁の要塞に固め、敵の攻勢を海上と防御前線前方で完全に撃破する軍事的課題を示した。そして同年12月末、朝鮮人民軍最高司令官命令「陣地防御の強化について」を下達し、前線と海岸防御を担ったすべての部隊はそれぞれ占めた界線を難攻不落の要塞にし、戦闘に向け万端の準備を整えるようにさせた。

主席は1953年1月、軍事委員会第53回会議で、前線と東西両海岸の防御陣地を速やかに構築し、平壌を防御するための対策と後方を強化するための具体的な課題を示した。同時にすべての党組織と党員に党中央委員会の手紙を送り、すべての党員と人民軍将兵、人民をアメリカ帝国主義の「新攻勢」を撃破するための決戦に奮い立たせた。

主席は1953年2月下旬、ある軍需工場を現地指導し、戦争の勝利はあくまでも朝鮮人民自身の力で勝ち取らなければならないという主体的立場と自力更生の革命精神を持つよう強調し、東海岸の防御に当たる朝鮮人民軍第256軍部隊と第249軍部隊の将兵を訪ねては、海上と空中から侵入する敵は海上と空中で、地上から侵攻する敵は防御最前線で掃滅し、われわれの地に敵を一歩たりとも踏み込ませてはならないと強調した。

主席の戦略、戦術的方針と現地指導に限りなく励まされたすべての党員と人民軍将兵、人民は「こぞって敵せん滅の決戦へ！」、「最後の血の一滴まで捧げて、祖国の寸土を守り抜こう！」という戦闘的スローガンを掲げ、戦争の最終的勝利をめざす決戦に総

決起した。

主席はアメリカ帝国主義が強行したＴ型高地における攻撃作戦を破綻させ、敵の「新攻勢」企図を完全に粉砕した。

アメリカ帝国主義は「新攻勢」成功の可否を打診し、「同盟国」の士気を盛り立ててより多くの弾よけをかき集めるため、1953年1月、「スマック作戦」と称する鉄原西方のＴ型高地への攻撃を強行した。

主席は敵の企図に関する情報を攻撃開始12時間前に入手し、数十里離れた陽徳界線にある最高司令部予備隊の砲兵部隊を迅速にＴ型高地の界線に進出させ、敵に猛烈な砲火を浴びせて一撃のもとに撃破する戦術的方案を示した。そして砲兵部隊指揮官に電話で命令を下した後、作戦台の前で夜を徹して砲兵部隊の機動を指揮した。

Ｔ型高地の人民軍勇士は砲兵部隊の強力な火砲の支援のもとに、敵の波状攻撃を撃退し、決定的な反撃に転じて敵を完全に掃滅した。

こうして、アメリカ帝国主義が陸軍、空軍の将官たちと追随国の公使、領事、「国連軍」従軍記者まで呼び寄せ、おびただしい兵力を動員して強行したＴ型高地での「模範戦闘」は恥ずべき惨敗に終わってしまった。無名の小さな高地に対する攻撃にすべての兵種、軍種と数十台の戦車をはじめ最新兵器を動員しても惨敗を喫しながら、全前線で大規模な攻勢を展開しても勝算はあるのか、という問題をめぐってアメリカ帝国主義の頭目たちはもめた。

アメリカ帝国主義は最後の期待をかけて準備した「新攻勢」の企てを中途で放棄し、仕方なく停戦会談場に再び姿を現し、1年半も引き延ばしてきた捕虜送還問題に関する共和国側の正当な提

案を受け入れざるを得なかった。しかし、狡猾なアメリカ帝国主義は、より有利な条件で停戦協定を結ぼうと、後方の発電所と貯水池、住宅地区などへの無差別爆撃を強行し、合意していた事項に違反して共和国の捕虜を強制「釈放」するという挑発行為を働いた。一方、李承晩傀儡一味をそそのかして「停戦決死反対」、「単独北進」を叫ばせ、停戦会談の進展に新たな難関をもたらした。

アメリカ帝国主義の謀略策動を粉砕し、戦争の最終的勝利を速めるため、1953年5月中旬から7月下旬まで、3回にかけて敵に対する強力な攻撃戦が展開された。

主席の命令に従い、人民軍部隊は前線東部と中部での第1次攻撃戦に次ぐより強力な第2次攻撃戦を展開し、敵に甚大な打撃を与えた。

敵はソウルを明け渡すことがあってもここだけは明け渡すことができないと強弁し、2年もかけてトーチカと地下構造物を構築した351高地に多数の兵力を集中配置させた。6月初旬、人民軍勇士たちはこの351高地に対する攻撃を開始し、強力な砲兵火力の掩護のもとに突撃に移行して15分で高地を完全に占領した。

人民軍部隊は敵撃滅の意気高く、戦争の最終的勝利を勝ち取るため、連続して第3次攻撃戦を断行した。前線東部と中部、西部で人民軍の強力な火砲が一斉に砲門を開き、歩兵部隊は敵の防御線を突破した。

人民軍部隊は、3回にわたる集中的な攻撃戦によって敵の莫大な兵力を掃滅し、340余平方キロの広い地域を解放した。

抜き差しならぬ窮地に追い込まれ、もはや他に活路を見いだせなくなったアメリカ帝国主義は、やむなく1953年7月27日、先軍

の旗のもとに鍛えられた朝鮮人民の前に膝を屈し、停戦協定に調印せざるを得なかった。

主席はこの日、戦争の勝利を祝って朝鮮人民軍最高司令官命令第470号を下達した。勝利の7・27、「第2の解放の日」を迎えて首都平壌の夜空に戦勝の花火が打ち上げられた。

苛烈な3年に及ぶ祖国解放戦争は、偉大な先軍総帥の指導のもとに反米の銃を手にして正義のたたかいに立ち上がった朝鮮人民軍と人民の偉大な勝利に終わった。

朝鮮人民軍と人民は、戦争の間、アメリカ帝国主義侵略軍40万5498名を含めた156万7128名の敵兵を殺傷または捕虜にし、1万2224機の航空機と564隻の各種艦船、3255両の戦車と装甲車、1万3350余台の自動車、7695門の各種火砲など莫大な戦闘技術機材と軍需物資をろ獲または破壊した。これはアメリカ帝国主義が太平洋戦争で蒙った損失のおよそ2・3倍に相当するものであり、100余年の血にまみれた海外侵略史上初めての恥ずべき惨敗であった。

主席は先軍の旗を高く掲げ、洗練された先軍革命指導によって朝鮮人民軍と人民を勝利に導いた。

主席は3年にわたる戦争の間にソウルと水安堡にあった前線司令部をはじめ、1056個所、5120余里の最前線をめぐり歩いた。チュチェの先軍思想、先軍指導によって世界戦争史上初めてアメリカ帝国主義を惨敗させた戦績により、朝鮮民主主義人民共和国元帥称号（1953・2・7）と共和国英雄称号（1953・7・28）を受けた。

祖国解放戦争の勝利は、朝鮮労働党と革命の発展にとって大きな歴史的意義を有するものであった。

金正日（キムジョンイル）同志は次のように述べている。

「祖国解放戦争は、朝鮮人民が全人民的な英雄的闘争を繰り広げて、歴史上初めて世界帝国主義の頭目であるアメリカ帝国主義を打ち破り、祖国を守り抜いた世界史的意義をもつ偉大な革命戦争でした」

祖国解放戦争の勝利によって、朝鮮人民は祖国の自由と独立、民族の自主権と革命の獲得物を誇り高く守り、共和国の不敗の威力と国家社会制度の強固さ、朝鮮人民の必勝の信念と不撓不屈の闘志を力強く誇示した。

主席の先軍革命指導に従い、軍人と人民は領袖決死擁護の精神、祖国決死守護の精神を発揮してアメリカ帝国主義と15の追随国軍隊の武力侵攻を撃破することにより、朝鮮労働党と朝鮮民主主義人民共和国と、北半部に樹立された人民民主主義制度を立派に守り抜いて民族の尊厳と栄誉を守り、英雄的軍隊、英雄的人民として世界に名を轟かせた。

祖国解放戦争の厳しい試練を通じて、全党、全軍、全人民は主席の周りにさらに固く団結し、朝鮮労働党は豊かな経験を積んだ、洗練され鍛えられた党として強化され、朝鮮人民軍は政治的、思想的に、軍事技術的に強化され、豊富な戦闘経験をもつ不敗の革命武力に成長した。

主席は全人民の決死的な抗戦を導き祖国解放戦争で偉大な勝利を勝ち取ることで、世界「最強」を誇っていたアメリカ帝国主義の傲慢な鼻柱をへし折り、その「強大さ」の神話を粉砕し、アメリカ帝国主義者を下り坂に向かわせる端緒を開いた。

第8章　戦後の人民経済復興発展と社会主義の基礎建設のためのたたかい

（1953年7月～1960年12月）

第1節　戦後経済建設の基本路線提示、人民経済の復興建設を指導

金日成（キムイルソン）主席は、祖国解放戦争が終わると直ちに、全党と全人民を戦後の復興建設に奮い立たせた。

停戦後、国の情勢は依然として緊張状態にあり、復興建設のための朝鮮労働党と人民の前途には多くの難関と障害が横たわっていた。

アメリカ帝国主義は、戦争で喫した惨敗から教訓を汲み取ろうともせず、共和国に対する侵略野望を棄てず、新たな戦争準備に狂奔し、停戦協定を踏みにじり、李承晩（リスンマン）傀儡一味をそそのかして「北進」騒ぎを絶えず引き起こした。こうした情勢のもとで、党と人民は動員態勢を堅持し、銃重視、軍事先行の原則で国防力を強化しながら戦後の復興建設を進めなければならなかった。

戦争の被害は甚大であった。アメリカ帝国主義は、3年にわたる戦争の間、共和国領内に1平方キロ当り平均18個の爆弾を投下し、都市と農村、工場、企業、教育・文化施設まで廃墟にした。人民の生活も極めて困難であった。

アメリカ帝国主義は、朝鮮は100年かかっても再起できないとうそぶき、朝鮮に同情を寄せる友人たちも、朝鮮人民はこの困難にうちかつことができるだろうかと憂慮した。

戦後の復興建設をどこから始めてどうすべきか、糸口がつかめないほど状況は困難を極めていた。

主席は、すでに戦時から構想してきた戦後復興建設の基本方向を確定するのに腐心した。

主席は、1953年7月28日、歴史的なラジオ演説で『すべてを民主基地の強化をめざす戦後人民経済復興建設のために！』という戦闘的スローガンを示し、戦争の勝利を祝う平壌(ピョンヤン)市民大会が終わるとその足で工場、企業を訪ね、現実を具体的に調べた。

主席はこの日、江南(カンナム)窯業工場を現地指導し、29日には平壌紡織工場と黄海(ファンへ)製鉄所を訪ね、労働者、技術者と復興建設の方途について話し合い、次いで南浦(ナンポ)精錬所とガラス工場を現地指導した。8月3日、降仙(カンソン)製鋼所を訪ねた主席は、無残に破壊された製鋼所構内のポプラの木の下に腰をおろして労働者たちと語り合った。主席は、党中央委員会第6回総会を準備している最中だったが、降仙の労働者たちと相談するために訪ねたと言って戦後の人民経済復興の方向について語り、製鋼所をわれわれの力、われわれの設備、われわれの資材、われわれの技術で短期間に立派に復旧し、英雄的な朝鮮労働者階級の気概を今一度世界に示そうと強調した。

主席は1953年8月5日から9日まで、朝鮮労働党中央委員会第6回総会を開催した。

そして、『すべてを戦後の人民経済復興発展のために』と題する歴史的な報告を行った。

主席は、停戦協定の締結に伴って党に提起された革命任務を示し、全党と全人民が戦争で勝利した気勢を少しも緩めることなく、戦後の復興建設にすべての力を動員するよう呼びかけた。

主席は、戦後の人民経済復興発展の基本路線と方向を示した。

金日成主席は戦後の経済建設の基本路線について次のように述べている。

「われわれは、戦後の経済建設において、重工業を優先的に復興、発展させながら、同時に軽工業と農業を発展させる方向へと進まなければなりません。そうすることによって、わが国の経済的土台を強化し、人民生活を速やかに改善することができるのであります」

主席は、戦後の人民経済復興建設を3つの基本的段階に分けて進めるべきであるとし、第1段階では半年ないし1年の間に破壊された経済を全般的に復興するのに必要な準備を整える、第2段階では3カ年計画を遂行して人民経済の各部門を戦前の水準に回復させる、第3段階では5カ年計画を遂行して社会主義的工業化の基礎を築くべきであると述べた。

主席は、総会後、戦後の人民経済復興建設を正しく導いた。

主席は、党を組織的、思想的に強化し、人民大衆を党の周りに結集させることに第一義的な力を注いだ。

党中央委員会第5回総会文書の再討議を全党的に力強く繰り広げ、反党反革命分子朴憲永（パクホンヨン）スパイ一味の思想的毒素を一掃し、党員の党性を強化し、戦後の復興建設における前衛的役割をさらに高めるようにした。また、1953年12月中旬、朝鮮労働党中央委員会第7回総会を開いて、戦後の新たな環境に即して統一戦線活動

を改善するための対策を立て、各階層の大衆を党の周りに固く結集させ、高い愛国的熱意をもって復興建設にこぞって参加するようにした。

主席は、戦時経済体制を戦後の新たな環境に合わせて改めるようにした。

主席は、すべての工場、企業が復興建設に必要な製品を優先的に生産し、戦争で破壊された農業を速やかに復興するようにした。そして、党、政権機関、社会団体、経済機関の優秀な活動家を派遣して、破壊された工場、企業を計画的に復旧し、労働者、事務員の住宅を建設して、彼らの生活を一日も早く安定させるようにした。

主席は、人民軍の高度の戦闘力に依拠して、戦後の人民経済復興建設全般を推し進めるために、人民軍部隊を復興建設に動員して英雄的気概を余すところなく発揮するようにした。

主席は、1953年7月末、朝鮮人民軍最高司令部総参謀部の各局長、軍種、兵種司令官の会議で、人民軍部隊が祖国防衛の任務を遂行するかたわら、戦後の人民経済復興建設に参加するようにする措置を講じた。会議後、多数の人民軍部隊を主要工場、企業と鉄道運輸、農業など人民経済の各部門と主要都市の復興建設現場に派遣した。

また1953年8月中旬には全国戦闘英雄大会を開き、すべての人民軍将兵と人民がアメリカ帝国主義とたたかって勝利したその気勢、その気迫をもって、戦後の復興建設をめざす闘争において引き続き英雄的偉勲を立てるよう鼓舞した。

全人民が戦後の復興建設に取りかかると、事大主義、教条主義

に染まった反党分派分子は、人民の生活が苦しいのに重工業建設に偏りすぎる、機械から飯が出てくるのかなどと言って、朝鮮労働党の経済建設の基本路線に反対した。大国主義者は、何もない廃墟の中から一体何をもって重工業を優先的に発展させ、どうやって同時に軽工業と農業を発展させるのか、と物言いをつけた。

主席は、大国主義者、分派・事大主義者の妨害策動を断固排撃し、経済建設の基本路線を堅持して戦後の復興建設を推し進めた。

主席は人民の中に深く入っていった。1953年10月、興南(フンナム)肥料工場と長津江(チャンジンガン)発電所、咸州(ハムジュ)郡朝陽(チョヤン)里、興南工業大学など数多くの工場、企業、農村、教育・文化機関を現地指導しながら、各部門の事業を具体的に調べ、勤労者と軍人を戦後の復興建設へと力強く立ち上がらせた。

全人民と人民軍の軍人は、自力更生の革命精神と愛国的献身性を発揮して、復興建設を推し進めた。

降仙製鋼所をはじめ数多くの工場、企業では戦後わずか2週間で一部の施設を復旧して生産を開始し、鉄道部門の労働者は、停戦、1週間後に幹線列車の運行を開始する奇跡を生み出した。農民も破壊された耕地と灌漑水利施設を復旧、整備して農作に励んだ。

戦後の復興建設をめざす準備段階の課題は、5カ月という極めて短い期間に首尾よく遂行され、1954年から3カ年人民経済計画を実施できるようになった。

主席は、3カ年（1954～1956）人民経済計画の基本課題を提示し、それを遂行する闘争を指導した。

金日成主席は次のように述べている。

「人民経済復興発展3カ年計画の基本課題は破壊された人民経

済を復興、発展させ、人民経済各部門で戦争前の生産水準を回復することであります」

3カ年人民経済計画は単なる原状復旧ではなく、工業の植民地的跛行性を克服し、国の工業化を実現できる条件を整える方向で、経済を復興、改造することを予見した長期的な展望計画であった。計画実施期間に工業総生産高は1949年に比べてほぼ1・5倍に増え、穀物生産は戦前の水準に到達させることを予見していた。

主席は、1954年3月下旬に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会で、人民経済に対する指導管理を戦後の変化した環境に即して改善し、国家および経済機関の幹部が事務室的、官僚主義的な活動方法を棄てて具体的な指導を行い、特にそれぞれが受け持った仕事に対しては責任感を強めるべきだと述べた。そして党組織が農村に多くの力を向けていた戦時とは異なり、人民経済の主導的部門である工業と運輸部門に関心を向けて党の指導を強化すべきであると指摘し、党委員会の集団指導を保障し、政治的方法で実のある指導を行うよう強調した。

主席はこの総会に次いで全国建築家および建設技術者大会、全国林業部門熱誠者会議、交通・運輸部門模範活動家会議など人民経済の部門別会議と内閣全員会議をたびたび開いて、人民経済計画を遂行するための具体的な課題と方途を示した。

主席は、機械製作工業を中核とする強力な重工業基地の建設に第一義的な意義を付与し、既存の重工業工場を復旧、拡張する一方、重工業工場を新たに建設する事業を正しく結びつけて、重工業のための重工業ではなく、軽工業と農業の発展によりよく寄与する重工業の建設に力を集中させた。

主席は、数多くの重工業部門の工場、企業を訪ね、労働者を経済建設の基本路線を貫徹する闘争へと導いた。

主席は1954年4月、熙川（ヒチョン）機械工場と熙川自動車部品工場の幹部および労働者協議会で機械工業を発展させるための課題を提示し、次いで6月には黄海製鉄所を訪ね、1号平炉から溶銑が流れ出るのを見ると力が沸く、自信を持てる、われわれの力、われわれの技術で溶鉱炉をより大きく、立派に復旧、建設しようと強調した。そして同年7月には、金策（キムチェク）製鉄所、城津（ソンジン）製鋼所を訪ね、製鉄所、製鋼所を計画的に復旧、建設して、鋼鉄と鋼材をより多く生産する課題と方途を示し、翌年11月には降仙製鋼所を現地指導して、製鋼所の労働者は3カ年計画の遂行で先駆者となるべきであると述べた。

また、軽工業の復旧、建設にも深い関心を払い、大規模な軽工業工場を速やかに復旧し、食品加工工場と日用品工場を建設して軽工業の土台を築くようにし、破壊された農業を立て直して発展させることにも大きな関心を払った。

主席は、人民生活の安定と向上に大きな力を注ぎ、勤労者の革命的熱意と創意を高めるようにした。

幹部は復旧建設に努める人民の生活に深い関心を払うべきだとして、住宅建設を力強く展開するようにし、戦時に離散した勤労者や新解放地区の人民、戦没者、敵に虐殺された人の遺族、人民軍留守家族、戦災者と零細農家の生活を安定、向上させるようにした。また、労働者、事務員の賃金を大幅に引き上げ、数次にわたって物価を引き下げ、物資供給事業を改善するようにした。

こうして戦後、短期間の内に重工業と軽工業、農業が速やかに

復旧、発展して人民の生活は安定し、工業配置における植民地的跛行性も克服され、3カ年計画は成功裏に推進されるようになった。

第2節　戦後軍建設の戦略的課題提示、人民軍を党の指導に忠実な党の軍隊に強化、発展させるための闘争

戦後、アメリカ帝国主義は、共和国に対する侵略の野望を棄てず、停戦協定に署名したインクが乾く前に、「16カ国宣言書」なるものを強圧的に採択させ、次いで南朝鮮傀儡一味と相互防衛条約を締結して、いつでも追従国の軍隊と軍事技術機材を自由に動員し、米軍を南朝鮮に長期駐屯させる口実をでっちあげた。一方、アメリカ帝国主義と南朝鮮傀儡一味は、「停戦は休息である」、「たたかいはこれからだ」と言って侵略兵力を大々的に増強し、軍事境界線で軍事的挑発を引き続き強行した。そうして停戦協定はいつ破棄されるか分からない危険にさらされた。

こうした情勢は、敵の新たな戦争挑発策動を阻止し、停戦を恒久的平和に転換させ、戦後の人民経済復興建設と社会主義建設を成功裏に遂行するため、人民軍を全面的に強化することを求めた。

金日成主席は、新たな情勢と革命武力建設の合法則的要求を見極め、1953年10月の朝鮮労働党中央委員会政治委員会と朝鮮人民軍大隊長・政治担当副大隊長会議などの機会を借りて、戦後の軍建設で堅持すべき戦略的課題を提示した。

主席は、人民軍を幹部軍隊にすることを軍建設の戦略的課題と

して提示した。

金日成主席は次のように述べている。

「人民軍を幹部軍隊にするべきです。

人民軍を幹部軍隊にするということは、将校から兵士に至るまですべての軍人が1階級高い職務を担うことができるよう、彼らの水準を高めることを意味します。人民軍を幹部軍隊にすれば、有事の際に彼らを根幹として短期間で新しい部隊を多く編制することができます。

人民軍を幹部軍隊にすることは、祖国解放戦争の経験と教訓から提起される軍建設の戦略的課題であると言えます」

主席は、人民軍を幹部軍隊にするためには軍人の政治的思想・意識水準を高めるべきであると指摘し、彼らの間に党の路線と政策、最高司令官の命令を深く浸透させ、軍人が革命偉業の正当性を正確に認識して必勝の信念を持つようにし、強い敵愾心と気高い愛国主義精神、党と祖国と人民に対する限りない忠誠心を持つように教育すべきであると述べた。

主席は、人民軍を幹部軍隊にするためには、すべての軍人が1階級以上の高い職務を担うことができるよう、戦闘訓練を強化すべきであるとし、戦闘訓練は抗日革命戦争と祖国解放戦争の経験にもとづき、国の具体的状況と部隊の戦闘任務に即して実戦さながらに行って彼らの水準を高めるべきであると強調した。同時にすべての指揮官が、近代戦を巧みに指揮できる近代的軍事科学と技術を身につけるようにし、軍事教育機関を強化し、軍事教育の質的水準を高めるべきであると述べた。

主席は、人民軍の武力装備の近代化を軍建設の戦略的課題とし

て提示した。

主席は1953年10月下旬、朝鮮人民軍第256軍部隊管下の将兵に行った演説『祖国解放戦争の歴史的勝利と人民軍の課題について』と翌年に開かれた人民軍の主要会議、そして軍事学校に対する現地指導において、人民軍の武力装備を近代化することを軍建設の戦略的課題として提示した。

主席は、人民軍の武力装備の近代化を近代的兵器と在来兵器を組み合わせ、国の経済発展に伴って漸進的に威力ある近代的兵器を整える方向で実現する方針を示すとともに、軍事科学技術を発展させ、既存の軍需工場をさらに拡大し、近代的技術で装備する一方、新しい軍需工場を建設し、近代的武力装備を自力で生産すべきであると述べた。

主席は、人民軍を党の指導に忠実な党の軍隊に強化することを、軍建設の戦略的課題貫徹の先決条件と見なし、この事業を指導した。

人民軍を党の軍隊に強化することは、戦後、軍隊内に紛れ込んだ反党反革命分派分子が、人民軍に対する党の指導、領袖の指導を拒否しようと陰険に策動していた実情において格別重要な問題となっていた。彼らは、人民軍を「統一戦線の軍隊」だとうそぶき、軍人を党の政策で教育せず、党中央委員会の決定と指示を軍隊内に浸透させなかった。彼らの目的は、人民軍を党から切り離して階級闘争から後退させ、党の指導を受けない無力な存在にして、朝鮮労働党を武装解除しようとすることであった。

主席は、全軍に党の思想体系を確立するため、1958年1月の朝鮮労働党中央委員会常務委員会で人民軍内の政治機関と各党組織の活動状況を討議し、3月には朝鮮労働党中央委員会総会を招集

し、人民軍内の党の政治活動を改善、強化するための画期的な措置を講じた。

朝鮮人民軍党委員会を組織し、人民軍党委員会が党中央委員会常務委員会の指導のもとに活動するようにし、人民軍各級党委員会の当該政治機関の活動を指導するようにした。

主席は、人民軍内で党中央委員会3月総会の文献学習を着実に行う一方、総会の文献について討議するようにした。文献の討議は革命隊伍の統一・団結を全面的に強化する方向で行うようにし、反党反革命分派分子とのたたかいで主動分子と追随分子を正確に選別するようにした。

主席は、人民軍内の党の政治活動で事大主義、教条主義を克服し、主体性を確立するよう指導した。

1959年5月中旬、朝鮮人民軍軍団以上の軍事・政治幹部への談話『人民軍内における党の政治活動で教条主義を排し、主体性を確立するために』をはじめとする一連の著作で、人民軍内における党の政治活動で主体性を確立するための方向と方途を示した。

人民軍内における党の政治活動で主体性を確立するために、すべての軍人を党の路線と政策、党の革命伝統で武装させる活動を基本として堅持しながら、階級的教育、革命教育を強化して、軍人を搾取制度を憎悪し、社会主義偉業のために生命を賭してたたかう革命戦士に育てるようにした。そして2・8映画撮影所を設立し、革命伝統と祖国解放戦争をテーマにした映画を多く制作して軍人の教育に利用するようにし、人民軍で党の政治活動を説得と教育を基本に、模範による感化教育の方法で行うようにした。

主席は、全軍に党の思想体系を確立するために、軍隊内のすべ

ての活動に対する党委員会の集団指導を強化するようにした。

1960年9月上旬、朝鮮労働党人民軍委員会拡大総会を招集し、党委員会の集団指導を強化するうえで提起される問題を具体的に示した。党委員会は単なる協議機関ではなく、集団的な軍事的・政治的指導機関であるとし、軍隊内のあらゆる活動をすべて党委員会の指導のもとに行うようにした。

主席は、人民軍が党の栄えある革命伝統の純潔性を固守し、継承していくうえで先頭に立つよう導いた。

1958年2月8日、朝鮮人民軍第324軍部隊管下の将兵に行った演説『朝鮮人民軍は抗日武装闘争の継承者である』で、人民軍は栄えある抗日武装闘争の継承者であることを明らかにした。

人民軍が継承すべき唯一の革命伝統は抗日遊撃隊の伝統であるとし、人民軍は抗日遊撃隊の思想体系と、その優れた活動方法と活動作風を継承すべきであり、遊撃隊が人民とともに生き、人民のためにたたかい、指揮官と隊員が固く団結してたたかった伝統を継承し、抗日遊撃隊の必勝の信念と困難を克服する不屈の闘争精神を継承すべきであると述べた。

1958年10月、朝鮮人民軍各級軍事学校教員大会において、そして人民軍部隊を現地指導しながら、すべての将校と隊員が抗日遊撃隊の革命伝統を擁護、固守し、あくまで継承していくよう強調した。

『抗日パルチザン参加者の回想記』と『抗日パルチザン参加者の戦闘回想記』など、革命伝統教育図書が数多く出版され、人民軍内でさまざまな形式と方法で革命伝統教育が強化された結果、人民軍軍人の間で回想記の学習が広く行われ、軍営と訓練場ごと

に『遊撃隊行進曲』をはじめ革命歌謡の歌声が力強く響き、将兵一致、軍民一致の伝統的気風が高く発揮されるようになった。

こうして、人民軍は党の思想体系が確立した革命武力に強化され、抗日武装闘争の継承者に育った人民軍将兵は、「敬愛する金日成同志を首班とする党中央委員会を生命を賭して守ろう！」という信念のスローガンを高く掲げた。

主席は、1960年8月25日に朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守（リュギョンス）第105戦車師団を訪ねたときのことを回想しながら、党中央を生命を賭して守ろうというのは何と重要かつ正しいスローガンであろう、これは党の軍隊である人民軍の勇士たちの胸に響く立派なスローガンであると高く評価した。

第3節　4月テーゼの発表、社会主義革命の本格的な推進、人民大衆中心の社会主義制度の樹立

朝鮮での社会主義革命と社会主義建設は、その特殊性からして新たに提起される数多くの理論的・実践的問題を主体的立場で自力で解決しなければならない前人未踏の道であった。

戦後、国の北と南が異なる革命の段階に置かれるようになった状況のもとで革命と建設を成功裏に進めるためには、党員と勤労者に朝鮮革命の性格と任務、その遂行方途と前途を明確に認識させ、共和国における社会主義革命と社会主義建設について正しく理解させる必要があった。

金日成主席は、人民に社会主義に対する信念を抱かせ、社会主

義革命と社会主義建設を本格的に進めるために、以前から構想し準備してきた社会主義革命綱領の完成に心血を注いだ。

主席は1954年12月末、朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、現段階における朝鮮革命の性格を正しく規定する問題を討議し、間もなく開かれる党中央委員会総会で革命の性格と課題に関するテーゼを発表することにした。

ところが分派・事大主義者は、依然として他国の顔色をうかがい、社会主義革命と社会主義建設を推し進めるべきでないと主張した。大国主義者は、朝鮮労働党が社会主義革命に関するテーゼを打ち出すことを快く思わず言いがかりをつけた。彼らは欧州諸国ではテーゼがなくとも社会主義革命を進めているのに、朝鮮ではなぜテーゼが必要なのかというのであった。彼らの本音は、テーゼといえばソ連共産党のように社会主義革命を先に行った大国の党が打ち出すものであり、朝鮮のように社会主義革命を始めたばかりの小さな党は打ち出すことはできないというものであった。

主席はその際、朝鮮革命に必要なテーゼをわれわれが打ち出す決心をしたのに、これについてとやかく言う必要はないと言い、彼らの主張を一蹴した。

主席はこのように確固とした自主的立場から構想し完成した朝鮮革命の性格と課題に関するテーゼ『すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために』を、1955年4月、朝鮮労働党中央委員会総会で発表した。

主席は、テーゼで全国革命と地域革命の相互関係を独創的に解明したうえで、朝鮮革命全般の性格と基本的任務を明示した。

金日成主席は次のように述べている。

「…朝鮮革命は、一方では反帝国主義的民族解放の課題を遂行し、他方では南半部で今なお地主の圧迫と搾取を受けている広範な農民を解放する反封建的課題を遂行しなければならない」

主席は、全国的規模における朝鮮革命の基本的任務は、アメリカ帝国主義侵略勢力とその勢力を扶植し、その同盟者となっている南朝鮮の地主、買弁資本家、親日・親米派、民族反逆者を打倒し、南半部の人民を帝国主義的および封建的抑圧と搾取から解放して、祖国の民主主義的統一と完全な民族的独立を達成することであると述べ、朝鮮革命を成功裏に推し進めるために、北半部で社会主義革命を本格的に推し進めることを強調した。

主席はテーゼで、共和国北半部の社会経済形態と階級関係を深く分析し、それにもとづいて北半部での社会主義基礎建設のための党の主な任務は、都市と農村で小商品経済形態と資本主義的経済形態を改造して、社会主義経営形態の全一的支配を確立するとともに、生産力をさらに発展させ、社会主義的工業化の基礎を築くことであると指摘し、この課題を5カ年計画の中心的課題として位置づけた。

そして、社会主義基礎建設の課題を成功裏に遂行するためには、人民大衆を社会主義的思想で教育し、新しい文化・技術人材を多数養成し、党の経済建設の基本路線を貫くべきであると強調した。そして人民武力をさらに強化することを、党が遂行すべき最も重要な課題の一つとして提示した。

主席は、社会主義革命を本格的に推進させるたたかいを指導した。

社会主義革命は本質において人間による人間の搾取を最終的に一掃し、社会発展の新たな道を開く人類史上最も重大な社会的変

革である。社会主義革命を遂行してこそ、人間による人間の搾取、階級による階級の従属を生む社会的根源を廃絶し、人民大衆が国家と社会の主人としての社会的・政治的自主性を実現することができるのである。

主席は、農業の社会主義的改造の実現に第一義的な力を注いだ。

主席は、すでに戦時中、元和里（ウォンファ）で、工業化が実現されず近代的な農業機械がない状況のもとでも、 農民自身の要請であれば農業協同化を実現できるという思想を打ち出していた。

戦後、農業協同化は農業の主人である農民自身の生活上の要請として提起されていた。3年間の苛烈な戦争によって農業の物質的・技術的土台はひどく破壊され、農民の40％近くが零細状態にあった。農村では役牛や農機具がわずかしかなく、労働力も非常に不足していた。こうした状況の中、個人農経営をそのままにしておいては農業生産力を急速に発展させることも、戦後困難を極めていた食糧問題や農民の生活問題も解決することはできなかった。個人農経営が存続する状況においては、計画的に急速に発展する工業に農業を追いつかせることはできず、結局、人民経済全般を成功裏に発展させることはできなかった。

戦後、朝鮮には農業協同化を遂行できる革命勢力も十分に整っていた。農民は解放後、新しい生活を創造するたたかいを通して、とりわけ苛烈な戦争の過程で政治的、思想的に覚醒するとともに革命的に鍛えられ、農業機械賃耕所を利用し、労力互助班、役牛共同利用班と副業協同組合を組織、運営する過程で、集団経営の優越性を認識するようになった。これとは逆に、富農など農業協同化に反対する勢力はかなり弱体化していた。

主席は、こうしたすべてのことを見極めて、戦後の時期を農業協同化を実現する最適の時期と見なし、1953年8月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第6回総会をはじめ一連の会議で、農業の技術改造に先立って経営形態を社会主義的に改造する方針を提示した。

金日成主席は次のように述べている。

「…わが党は、農業の技術的改造に先立って、経営形態の社会主義的改造を進めることにしました。現実が農業の社会主義的改造を切実に求め、またそれを担当し遂行しうる勢力が準備されているときには、農業の技術的改造に先立って経営形態の社会主義的改造を行うべきであります」

主席は、農業協同化運動において堅持すべき原則を明らかにした。

農業協同化運動においては自発性の原則を貫くべきであり、農民を協同経営に自発的に加入させるには、農民の間で思想教育を強め、協同経営の優越性を実際に示し、彼らが協同組合の形態を自らの意思によって自由に選択できるようにすべきであると強調した。主席は、農村の階級的力関係に即した正確な階級政策を堅持する原則を示した。

主席は農村の階級関係を正確に分析し、それにもとづき、貧農にしっかり依拠しながら中農との同盟を強化し、富農を制限しながら徐々に改造することを、農業協同化運動で一貫して堅持すべき階級政策に規定した。

主席は農業協同化運動に対する党と国家の指導と支援を強化する原則を明らかにし、政治的・思想的指導と物質的・技術的および財政的支援と労力支援を与えることに基本を置くようにした。

主席は農業協同化運動を正しく指導した。

主席は、経験的段階における協同化運動を積極的に推進していった。

協同化を積極的に支持する貧農と農村の中核をもって、まず各郡にモデルケースとして3～4の農業協同組合を組織し、協同組合の形態と規模、生産手段の統合方式を定めることに深い関心を払った。

主席は、1953年12月中旬、農業生産合作社、前線共同作業隊活動家協議会で、農業協同組合の組織における諸問題を全面的に明らかにした。

主席は、農民の思想的準備の程度と経済状態がそれぞれ異なる事情を考慮して、農業協同組合の形態を三つに規定し、農民がそのうちの一つを自由に選べるようにした。

第1は、土地と農機具を統合せずに農作業だけを共同で行う労力互助班の形態であり、第2は土地を統合して共同で経営し、労働と土地に応じて分配する半社会主義的な形態であり、第3は土地をはじめ基本生産手段すべてを共同所有とし、労働に応じてのみ分配する完全なる社会主義的形態であった。

主席は、農業協同組合の規模をあまり小さくしたり大きくせず、協同組合を運営する過程で経験を積み、幹部の管理・運営水準と農民の思想・意識水準に応じて、その規模を最初は15～20戸程度、条件が整うに伴い漸次40～100戸程度に拡大していくようにした。

主席は、生産手段の統合方式も明示した。役牛や農機具といった生産手段は一律に統合することはせず、農民の希望に従って統合したり、また一定の時期まで引き続き私有の形で共同利用する

ようにし、統合する場合は必ず相応の代価を支払うようにした。

主席は、党と国家が積極的に指導、援助して、協同経営の優越性が実際に現れるよう導いた。

新たに組織された協同組合に対しては長期貸し付けを行い、不足する食糧や種子を貸与し、農機具を優先的に提供し、肥料も廉価でより多く供給し、農業機械賃耕所と牛馬賃耕所が組合の耕耘作業と営農物資の運搬を優先的に行うようにした。そして協同組合の管理・運営活動を積極的に支援し、労働支援を強化するようにした。

主席は、平安南道（ピョンアン）中和郡（チュンファ）三亭里（サムジョン）を訪ね、組織されて間もない農業協同組合を強化、発展させるための課題と方途を明らかにし、大同郡（テドン）金泉里（クムチョン）をはじめ各地に組織された農業協同組合を現地指導して、協同経営の優越性とその生命力が現れるようにし、その経験を全国に広めた。

その結果、1954年に協同経営における単位面積当りの穀物収穫高は、個人農経営より10～50％も多く、現金収入は2～7倍も増えた。

主席は、農業協同化運動を大衆的段階へと発展させるよう導いた。

1954年11月に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会で、農業協同化の実験的段階において収めた成果を総括し、農業協同化運動を大衆的に発展させるための課題を示し、12月下旬には朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、農業協同化運動を大衆的に発展させる政治委員会の決定書を下達するようにした。その結果、農業協同化運動は、1955年から大衆的段階を迎えるようになった。

主席は、大衆的段階における農業協同化運動を偏向なく進める

よう導いた。

主席は、先走って自発性の原則に背き行政的方法で協同化を速めようとしたり、農民の心構えを考慮せず一律に高い形態と大規模な組合を組織しようとする傾向を是正させた。そして、一部の農民の間に現れた否定的な現象を適時に是正しながら、協同化運動に反対する階級敵の破壊・謀略策動を粉砕するよう導いた。

主席は、農業協同組合で雇農と貧農、特に愛国烈士の遺族と人民軍留守家族、除隊軍人が組合で中核的役割を果たし、組合内の党および社会団体組織の役割を高め、組合員の間で階級的自覚と社会主義的意識を高めるようにした。

主席は、平南（ピョンナム）灌漑をはじめ灌漑施設を大々的に拡張し、農村に化学肥料と農業機械、建設資材を大量に供給し、経済的土台の脆弱な協同組合に食糧および種もみと営農資金を貸し付けたり、農民が納付できなかった現物税と国家貸与穀、貸し付け金を免除する措置を講じた。

主席は、農業協同組合の管理・運営を改善するために、優秀な公務員を選抜して農業協同組合に派遣し、農業部門の大学と専門学校を増設する一方、幹部養成機関に管理幹部養成班を設けたほか、各地方に短期養成所を設けて管理幹部を大量に養成するようにした。これとともに農業協同組合の基準定款をつくり、すべての組合がそれを基準にしてそれぞれの実情に合った農業協同組合の定款を作成し、管理・運営を改善していくようにした。

主席は、農業協同組合に対する国家的指導措置として、1955年初めから多数の幹部を動員し、毎年1、2回、農業協同経営に対する集中指導を行うことにし、党中央委員会政治委員会の委員や内

閣副首相、相などの責任幹部が協同組合を一つずつ受け持って指導するようにした。そして同年6月20日、内閣協議会を招集し、農業協同組合をさらに強化するため、中央と地方の党および政権機関の幹部からなる指導グループを農村に派遣して、すべての農業協同組合が独り立ちできるよう支援することを基本にして指導するようにし、実践的模範によって指導メンバーと農村幹部の活動を正しく導いた。

主席は、農業協同化を進める期間に江西郡(カンソ)青山(チョンサン)里をはじめ平安南道の農業部門だけでも100余回の現地指導を行い、1955年11月中旬には順安郡(スンアン)山陰(サンウム)里元和農業協同組合を訪ね、「わたしもこの組合の組合員です」と語り、ともに農作業に精を出して組合を発展させようと激励した。

農業協同化運動は、1957年から完成段階に入った。

主席は農業協同化運動を完成段階へと導いた。

主席は、農業協同化において収めた成果を打ち固めながら、協同化水準の立ち後れた地方に力を集中して、すべての農民を協同経営に参加させるための措置を講じた。

主席は、国情が困難であった1957年、巨額の国家資金を支出して岐陽(キヤン)、オジドン灌漑など大規模の灌漑工事を展開し、協同組合に莫大な財政的および物質的・技術的援助をして、数千個所の中小規模灌漑工事と河川堤防工事を行うようにした。そして農業機械賃耕所を増やして農業協同組合の耕耘作業を受け持たせ、興南肥料工場の復旧拡張工事を推し進め、より多くの化学肥料を生産するようにした。

主席の指導によって、農業協同化は1958年8月に至り全国的に

達成された。

主席は、都市における手工業と資本主義的商工業の社会主義的改造を実現する事業を指導した。

主席は、戦前から部分的に実施してきた手工業の協同化を本格的に推し進めた。

もともと土台が弱かった朝鮮の手工業は、アメリカ帝国主義が引き起こした3年間の戦争によって無残に破壊され、ますます弱体化した。個人手工業者たちは経営を統合し、国の積極的な援助に頼らずには生活を改善できない困難な状態に置かれていた。彼らは戦争前から実施されていた協同化の過程を通して、個人経営に比べ協同経営の優越性を深く悟り、党の協同化方針を積極的に支持した。

主席は、このような実情を見極め、手工業者たちの生産協同組合を広く組織し、彼らの社会主義的改造を推し進めた。そして、協同組合への物質的・技術的・財政的支援を強化して組合を発展させた。

その結果、すでに過渡期の初期から始まった手工業の社会主義的改造は、1956年に至ってほぼ達成された。

主席は資本主義的商工業の社会主義的改造を指導した。

もともと経済的基盤が脆弱であった資本主義的商工業は、戦争時期、アメリカ帝国主義の無差別爆撃によってことごとく破壊され、多くの企業家、商人は手工業者や小商人となんら変わりない状態に置かれていた。彼らは国の援助を受けてそれぞれの生産手段と労働力、資金を共有しなければ、経営を立て直すことも、生活を改善することもできなかった。

このような状況の中、主席は資本主義的な商工業者を社会主義的に改造する方針を示した。

この過程においても、自発性の原則を厳守し、各自の意思に応じて各種形態の協同組合に受け入れ、経営形態の改造と人間改造を密接に結びつけて、すべての商工業者を社会主義的な勤労者に改造するようにした。

主席は、個人企業家を業種ごとに希望する生産協同組合に加入させるようにした。まず、手工業者で組織された組合を強固にしながら、企業家を漸進的に受け入れるようにし、彼らの意識程度と組合の経済状態に応じて、半社会主義的形態を広く取り入れるようにした。そして個人企業家が持ち込んだ設備については漸次、生産協同組合の共同蓄積金で代価を払い、企業家に損害をもたらすことなく彼らの所有を社会主義的所有に転換させるようにした。

主席は、商人が労働に不慣れなことを考慮して、彼らの間でまず販売協同組合または生産・販売協同組合を組織して発展させながら漸次、生産の比重を高めて生産協同組合に転換させるようにした。

そして、既存の生産協同組合を充実させることにも大きな力を注いだ。

さらに、生産協同組合に設備と原料、資金などを供給するとともに、税金を引き下げ、組合の管理幹部を正しく登用、配置し、組合に厳格な規律と秩序を打ち立てるようにした。

主席はこれらの日々、昨日の商工業者であった生産協同組合員を一時的な同伴者としてではなく、革命の永遠の同行者として信頼し、彼らを大きな愛の懐に抱き、誇りある生を享受するよう導

いた。

主席の指導によって、手工業と資本主義的商工業の社会主義的改造は農業協同化と時を同じくして4～5年という極めて短期間に比較的順調に、徹底的に遂行された。その結果、ついに朝鮮において社会主義革命は歴史的勝利を収め、社会主義制度が強固に打ち立てられた。

社会主義制度が樹立された結果、朝鮮では人間による人間の搾取と抑圧が最終的に一掃され、人民大衆の社会的・政治的自主性が実現し、階級解放という歴史的課題が遂行された。

主席は、最も優越した社会主義制度を樹立し、社会主義建設を輝かしい勝利へと導き、祖国の歴史と人類解放の偉業で積み重ねた不滅の業績により、1958年9月7日、朝鮮民主主義人民共和国労働英雄の称号を受けた。

主席は、社会主義社会における革命の内容と方式を新たに示した。

主席は、社会主義制度の樹立後、思想、技術、文化の3大革命は社会主義社会において遂行すべき革命の基本的内容をなし、社会主義建設の全期間に遂行すべき継続革命の課題となり、思想、技術、文化の3大革命は、社会主義社会で遂行することになる新たな革命方式であると述べた。

主席は、思想革命を優先させながら、同時に技術革命と文化革命を力強く推し進める問題をはじめ、3大革命の遂行において党が堅持すべき原則的問題についても明らかにした。

第4節　戦後の事大主義、教条主義を一掃し、主体性を確立するためのたたかい

金日成主席は、戦後、革命と建設が深化するに伴い、事大主義、教条主義に反対し主体性を確立するための断固とした措置を講じた。

朝鮮における社会主義革命と社会主義建設は、他の国とは違う特殊な社会経済的条件と環境のもとで進められた。したがって、既成の理論や他国の経験にもとづいては正しく解決できず、すべての問題を主体的立場で、朝鮮の実情に即して自らの方式で解決しなければならなかった。

主体性を確立することは、戦後、反党分派分子と事大主義者、教条主義者の悪辣な策動がかつてなく激しくなっていたため、より切実な問題となっていた。事大主義者と教条主義者は、労働党の路線と政策に従わず他国に盲従し、人民の力を信じようとせず、すべてを他国に依存しようとした。彼らは朝鮮人民の歴史と文化、労働党の革命伝統まで無視して民族虚無主義に陥り、自国のものはすべて悪く、他国のものはすべて良いものとし、それを機械的に取り入れようとした。事大主義、教条主義はその極に達し、その弊害はもはや我慢のならないものとなった。当時、国際共産主義運動の内部に台頭した修正主義者はその修正主義路線を他国に押しつけようと政治的・経済的圧力を加え、労働党内に潜入していた反党・反革命分派分子は、機に乗じて修正主義を引き入れようとあらゆる策動を弄していた状況のもとで、主体性を確立しなければ、外部からの修正主義の浸透を許し、朝鮮革命に重大な結

果をもたらす恐れがあった。

主席はこうした事情をすべて見極め、事大主義、教条主義に反対し、すべての分野で主体性を確立するための断固たる方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「…わが党は、1955年に教条主義に反対し、すべての分野で主体性を確立する断固とした方針を打ち出し、それを貫くために引き続き粘り強くたたかいました」

主席は、1955年12月28日、党の宣伝扇動活動家に行った演説『思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために』で思想活動において主体性を確立するための根本的指針を示した。

党の思想活動において主体性を確立するための具体的な課題を提示した。

主席は、わが国の歴史、朝鮮人民の闘争の歴史を深く研究して広く宣伝し、特にわが党の闘争史と革命伝統をもって党員と勤労者を教育すべきであると述べた。

主席は、思想活動において主体性を確立するためには、自国のものを誠実に研究してそれに精通し、特にチュチェ思想とその具現であるわが党の路線と政策に精通するよう党員、勤労者を教育しなければならないと強調した。そして主体性を確立する問題に関連して、社会主義的愛国主義はプロレタリア国際主義と密接に関係していることを明らかにし、思想活動で形式主義を一掃し、宣伝活動を着実に行うことについても述べた。

主席は、革命と建設の各分野で主体性を確立するために、思想

分野での主体性の確立に第一義的な関心を向けた。

まず党員と勤労者を党のチュチェ思想で武装させるために1956年2月中旬、朝鮮労働党中央委員会常務委員会を招集し、党の思想活動の内容と形式を全面的に改めるとともに、党員と勤労者をチュチェ思想で武装させる対策を講じた。

主席は、チュチェ思想とその具現である党の路線と政策、革命伝統の解説書を大量出版し、国立中央解放闘争博物館（朝鮮革命博物館の前身）を充実させる一方、党組織と社会団体組織における党の文献と党史、革命伝統の学習を強化するようにした。そして、すべての党組織と宣伝・文化機関が朝鮮のものを基本にして宣伝扇動活動を行い、その形式と方法も人民の感情と嗜好に合うよう全般的に改善するようにした。

主席は文学・芸術分野で党の文芸路線を貫くようにするため、1956年1月8日、朝鮮労働党中央委員会常務委員会で、文学・芸術分野に反動的ブルジョア思想を広めようと策動した反党・反革命分派分子の罪業を暴露し、党の文芸政策を貫徹するための課題を示した。そして同年3月1日、文化宣伝省の責任幹部への談話で、朝鮮の現実と人民の英雄的な闘争を如実に反映し、固有の民族的芸術形式をうまく生かして主体性のある民族文化と芸術を発展させるよう強調した。

主席は教育事業で主体性を確立するため、金日成総合大学と中央党学校をはじめ多くの教育機関と幹部養成機関を訪ね、教育要綱と教材を主体的立場に立って作成し、学生をチュチェ思想と革命に役立つ生きた知識でしっかり武装させる具体的な課題を示した。

主席の指導のもとに思想分野で主体性を確立する闘争が力強く

推し進められた結果、党の思想活動の内容と形式はもちろん、人民の思想生活と思考方式に新たな転換がもたらされた。すべての幹部と党員、勤労者は、主席の革命思想とその具現である朝鮮労働党の路線と政策を基準にして正否を見分けるようになり、彼らの間で朝鮮革命の主人としての自覚と民族的自負、自主意識が高まり、すべてを自力で解決していく革命的気風が確立されるようになった。

実に1955年は、主体性を確立するための朝鮮労働党の一貫した闘争において一つの転機となった。

主席は、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を貫くよう導いた。

まず、政治においては自主性を堅持した。

主席は、大国の圧力に屈したり、外国の顔色をうかがう事大主義的な傾向を一掃し、国の実情と人民の志向と要求に沿って党の路線と政策を立て、それを人民自身の力であくまで貫徹するようにした。

経済においては、自立性を確固と保障した。

1956年の夏、主席はソ連と東欧社会主義諸国を訪問した際、朝鮮はセフ（東欧経済相互援助会議）に加入しなくても自力更生で社会主義建設を立派に行えば、それがとりもなおさず国際主義に対する忠実さを示すことであると述べ、最後までセフに加入せず、自立的民族経済建設路線を堅持した。

国防においては、自衛の原則を貫いた。

自らの強力な自衛的国防力がなくては国と人民の自主権を守ることはできず、民族の自主独立も祖国の繁栄も達成できないとい

う鉄の真理を確信し、強力な軍事的抑止力を持つことを決意し、国防における自衛の原則を固守した。

その結果、朝鮮は政治において独自性を堅持し、対外関係において完全な平等と相互尊重の原則を固守し、自立的民族経済と自衛的国防力を持った威力ある国、誰もが敢えて侵すことのできない社会主義の強国へと発展することができた。

第5節　党員と勤労者を社会主義思想で武装させる活動、革命伝統を固守し継承するための闘争を強化

金日成主席は、党員と勤労者を社会主義思想で武装させる活動に大きな力を注いだ。

戦後、朝鮮では経営形態の社会主義的改造が力強く推し進められていたが、人々の思想・意識はこれについていけない状態にあった。きのうまで資本主義的経営のもとで生活していた人々の頭の中には個人主義、利己主義、消極性と保守主義など古い思想の影響が濃厚に残っていた。このような状態にあって、勤労者を社会主義思想で武装させる活動を強化せずには、彼らの革命的熱意と創造的積極性を高揚させ、社会主義革命と建設を成功裏に遂行することはできなかった。

党員と勤労者を社会主義思想で武装させることは、アメリカ帝国主義と直接対峙して社会主義革命を進めている状況の中ではより重要な問題として提起された。

主席は戦後、生産関係の社会主義的改造に着手した初期から、人々の準備程度に応じて社会主義思想で武装させる活動を推し進めた。

主席は農村にたびたび出向いて、社会主義に対する農民の認識の程度を把握し、農業協同化の三つの形態について分かりやすく説明しながら、どのような形態が社会主義的なものであるかを具体的に教えた。

主席の教示を通じて、自分たちの協同組合形態がまさに社会主義的なものであるということを自覚した農民たちは、これが社会主義であるなら社会主義に勝るものはないと言って農業協同化を積極的に支持した。

社会主義革命が深化し、人々が社会主義的勤労者に改造されるに伴い、彼らを社会主義思想で武装させる問題が機の熟した要求として提起されるや、主席は1955年4月テーゼと翌年2月の朝鮮労働党中央委員会常務委員会、そして朝鮮労働党第3回大会で、社会主義教育を強化し、勤労者を社会主義建設者としてしっかり準備させる課題を提示した。

主席は、階級的教育の強化を基本として、社会主義思想教育を力強く推し進めるようにした。

労働者階級の階級意識は社会主義思想の核心をなし、社会主義社会は労働者階級の階級的要求を具現した社会である。社会主義革命は搾取階級を完全に一掃する重大な社会革命であるため、熾烈な階級闘争を同伴することになる。特に戦後、共和国における社会主義革命と社会主義建設に反対するアメリカ帝国主義と階級の敵の破壊・謀略策動が悪辣に強行される状況の中、勤労者に対

する社会主義思想教育を階級的教育を基本として進めることがなお重要な問題として提起されていた。

主席は、1955年4月に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会で、党員の間で階級的教育をさらに強化する問題を討議、決定し、会議で行った報告『党員に対する階級的教育を強化することについて』で、階級的教育の基本方向と方途を明示した。

主席は、階級的教育は国の具体的な現実に即して行うべきであると強調し、そのためには党員と勤労者が国の社会・経済状態と各階級の境遇および彼らの相互関係を正しく理解するようにさせ、特に敵対階級の階級的本性と狡猾さを明確に認識させ、革命の基本的原動力と同盟者に関する問題を正しく認識させるべきだと述べた。また党員と勤労者の間で革命的世界観を確立し、彼らが革命勝利の確信を強めるよう教育すべきであるとし、自然と社会発展の一般的合法則性を明確に認識させ、資本主義、帝国主義の滅亡の不可避性と社会主義勝利の必然性に関する科学的知識で武装させるべきであると述べた。そして、すべての党員と勤労者が、あらゆる非労働者階級的行為に反対して頑強にたたかうようにし、敵の破壊・謀略策動を適時に摘発、暴露する闘争を積極的に展開するよう教育すべきであると強調し、その具体的方途も詳細に示した。

主席は総会後、党員と勤労者の間で階級的教育を強化する活動を全党的に強力に展開するようにした。

そのために宣伝活動家の陣容をしっかりと固め、党の思想活動体系と内容、形式と方法を改め、階級的教育に対する党組織の指導を改善し、階級的教育において形式主義、読経主義をなくし、

この活動を国の生き生きとした現実と朝鮮革命が提起する実践的問題をもって実質的に行うようにし、特に農民と新しい世代に対する階級的教育を強化することに大きな力を注ぐようにした。

階級的教育が強化された結果、党員と勤労者の階級意識は高まり、社会主義建設の実践の中で彼らの階級的自覚と役割がさらに高まるようになった。

主席は、党員と勤労者を集団主義思想で武装させる活動に深い関心を払った。

主席は、党員と勤労者が、集団の利益の中に個人の利益があり、共同財産の中に個人の財産もある、という正しい認識をもって、社会の共同財産を大切にし、共同労働に誠実に参加し、労働規律を自覚的に順守するよう教育することに深い関心を払った。

主席は1958年5月、両江（リャンガン）道を現地指導した際、社会主義思想で武装させる党の政治教育は地方の実情と階層別の特性に即して行うべきであるとし、両江道の農民は大半が山間部に分散して生活していたため、保守性と分散性が多いので、彼らを集団主義思想で教育する活動を他の地方よりも強化すべきであると強調した。

主席の指導のもとに戦後、党員と勤労者の間で階級的教育を基本とする社会主義教育が力強く展開された結果、社会主義革命は成功裏に進められるようになった。

主席は社会主義制度の樹立後、党員と勤労者に対する社会主義教育をさらに強化するようにした。

主席は、党代表者会議で社会主義教育を強化することを、党の政治活動の総体的方向の一つとして提示し、次いで1958年11月20日、全国の市・郡党委員会の扇動員講習会で行った演説『共産主

義教育について』で、社会主義制度の樹立後、党員と勤労者を社会主義思想で教育するための課題を全面的に提示した。

主席は演説で、新しいものと古いものとのたたかい、進歩と保守とのたたかい、積極と消極とのたたかい、集団主義と個人主義とのたたかい、総体的に言えば、社会主義と資本主義とのたたかい、これがわれわれが行う革命闘争の内容であるとし、社会主義の偉業はわれわれの前進を阻むあらゆる古いものを一掃する過程において勝利すると述べた。

また、資本主義に比べての社会主義の優越性と、新しいものは必ず勝利し、古いものは滅びるという真理をよく教え、集団主義精神と労働を愛する精神、社会主義的愛国主義とプロレタリア国際主義精神、継続革命、継続前進、継続革新の思想をもって教育すべきであるとし、これらすべての活動はいずれも党に対する忠実性で教育する問題と関連づけて行うべきであると強調した。

主席は講習会後、党員と勤労者の間で社会主義教育を積極的に展開するよう導いた。

社会主義教育の進行に伴い人々の精神的・道徳的品格は社会主義的なものに変貌し、集団主義的気風が全社会にみなぎるようになった。勤労者の間には「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」という合言葉のもとに互いに助け導き合いながら社会と集団のためにすべてを捧げ、同志のために血と肉と骨もためらうことなく捧げる崇高な集団主義的行為が数多く見られるようになった。

主席は、党の革命伝統を断固として守り、立派に継承し発展させるための活動を指導した。

革命伝統は社会主義社会の歴史的根源であり、革命の命脈をつなぐ思想的・精神的財産である。社会主義の道を最初に切り開いた領袖によって創始された革命伝統を固守し継承していく過程が、とりもなおさず社会主義の偉業を達成していく過程である。そのため革命伝統に対する態度と立場は、人民大衆の自主の偉業、社会主義の偉業に対する忠実性と裏切り、革命と反革命を分ける試金石となる。

主席は1958年2月、朝鮮人民軍第324軍部隊管下の将兵に行った演説と、同年5月に両江道の党、政権機関、社会団体の活動家に行った演説で、革命伝統を固守し継承していくうえで提起される理論的・実践的問題について深く掘り下げて解明した。

主席は、わが党と人民が継承し発展させるべき唯一の伝統は、抗日遊撃隊の革命伝統であると述べた。

金日成主席は次のように述べている。

「抗日遊撃隊の革命伝統を継承するということは、何を意味するのでしょうか。それは抗日遊撃隊の思想体系を継承し、その優れた活動方法と活動作風を継承することを意味します」

抗日の革命伝統は、豊富かつ多面的な内容を有しており、ここで基本をなすのは、チュチェの思想体系と白頭（ペクトウ）の革命精神、不滅の革命業績と貴い闘争経験、革命的活動方法と人民的な活動作風である。

主席は、抗日の革命伝統の継承で重要なのは、その純潔性を固守し、それを革命と建設のすべての分野で立派に具現することであると強調し、革命伝統教育で提起される理論的・実践的問題についても明示した。

主席は、革命伝統教育を強化してこそ、党員と勤労者が朝鮮革命の歴史的根源を明確に知り、いかなる逆境にあっても党と革命を揺るぎなく守るチュチェ型の革命家になることができ、抗日革命烈士たちのように崇高な革命精神をもって、党の路線と政策を貫徹するうえで限りない献身性と犠牲的精神を発揮することができるのだと教えた。特に革命伝統教育は、革命の試練をなめておらず、地主、資本家の搾取と抑圧を受けていない新しい世代にはとりわけ重要な意義があると強調した。

主席は、革命伝統教育を着実に行って、党員と勤労者に革命伝統にこもっている革命思想と革命精神を深く体得させ、革命伝統教育を彼らの実生活、革命実践と密接に結びつけて深く行うべきであると述べた。

主席は、党の革命伝統を固守し継承していくため、革命伝統教育を強化するための積極的な措置を講じた。

1958年5月、自ら普天堡（ポチョンボ）と三池淵（サムジョン）など両江道内の革命戦跡と革命史跡を訪ねて、革命伝統教育を強化するための具体的な方針を示し、党員と勤労者が、革命の歴史的根源を深く知り、革命の勝利のためにたたかう覚悟を固めるよう教育する課題を提示した。

主席は、1959年に抗日革命闘士を網羅して抗日革命闘争戦跡踏査団を組織し、彼らを中国東北地方に派遣して抗日革命闘争期の貴重な資料や事績遺物を全面的に発掘、収集、整理するようにした。そして、全国に革命戦跡と革命史跡、革命博物館と革命事績館、「朝鮮労働党歴史研究室」を革命伝統教育の拠点として立派に整備し、全党に整然たる革命伝統教育体系を立てるようにした。同時に『抗日パルチザン参加者の回想記』と『革命歌謡集』を大

量に出版し、革命伝統を題材にした図書や記事、映画と小説、歌などを広く創作し普及させるようにした。

党員と勤労者の間で革命伝統教育がさまざまな形式と方法で活発に進められた結果、抗日革命闘争期に創造された朝鮮労働党の栄えある革命伝統は立派に継承されるようになった。

第6節　朝鮮労働党第3回大会、党の統一・団結の強化と反革命との闘争の強化

1950年代の下半期に至り、共和国では戦後の復興建設が基本的に終わり、都市と農村における生産関係の社会主義的改造は成功裏に進められ、人民の思想・意識も日を追って社会主義的に改造されていった。一方、南朝鮮ではアメリカ帝国主義とその手先の新たな戦争挑発策動と、ファッショ的暴圧に反対する人民の闘争気運が日増しに高まっていた。

全般的国際情勢は革命の側に有利に変わっていたが、複雑かつ緊張を極めていた。アメリカを頭目とする帝国主義者は新たな戦争挑発策動と狂気じみた「反共」騒ぎに狂奔し、社会主義諸国を内部から崩壊させようと悪辣に策動した。国際共産主義運動内部に現れた修正主義者は、日和見主義的路線を掲げて自分たちの指揮に従って動くことを強要しながら、社会主義偉業の遂行に重大な難関をもたらしていた。

党内に潜んでいた反党・反革命分派分子は、複雑な情勢に乗じ、外部勢力を後ろ盾にして党と革命に反対して蠢動し始めた。

こうした情勢は、朝鮮労働党と人民が社会主義の基礎建設を完成し、祖国の統一を達成するために力強くたたかい、党の統一・団結を強め、政治・経済・軍事分野で自主、自立、自衛の原則を堅持することを切実に求めた。

金日成主席は、党と革命の要請を見極め、1956年4月23日から29日にかけて朝鮮労働党第3回大会を開催した。

主席は、大会で行った党中央委員会の活動報告で、国内外の情勢を分析し、報告期間党の活動で収めた成果と経験を全面的に総括し、党と人民を新たな勝利へと奮起させる綱領的課題を示し、党の自主的かつ原則的な対外政策を明らかにした。

主席は、社会主義諸国との友好・団結と協力を強化し、自主権の相互尊重と平等権にもとづいて世界平和愛好諸国との政治的・実務的連係を結ぶために努力し、アジアに対するアメリカ帝国主義の侵略と日本軍国主義の復活に反対してたたかい、植民地民族解放闘争を積極的に支持、声援する対外政策の基本原則を明示した。

主席は、報告で社会主義の基礎建設を完成する課題を提示し、5カ年人民経済計画（1957～1961）の期間に遂行すべき闘争目標を明らかにした。

5カ年計画の基本的課題は、生産関係の社会主義的改造を完成し、社会主義的工業化の基礎を強固に築き、人民の衣食住問題を基本的に解決することであった。

主席は、5カ年計画期間における人民経済の部門別発展方向と課題を示し、工業部門では工業の植民地的跛行性を克服し、社会主義的工業化の実現を促し、農業部門では穀物生産を大幅に増やすとともに、農業協同化を完成することと、基本建設と技術人材

養成事業、人民の物質・文化生活の水準を高めるための具体的な課題を明らかにした。

主席は、国家社会制度を強化し発展させるための課題を示し、祖国統一民主主義戦線の活動をさらに強化し、人民政権を強化し、内務・司法・検察機関の役割を高めることについて述べた。

さらに、自主的祖国統一の方針を改めて明らかにし、その実現の方途を示した。

報告ではまた、党建設で収めた成果を総括し、党をさらに強化するための課題が示された。

大会は党建設と革命発展の要請に即して党の新たな規約を採択した。そして、祖国の自主的統一をめざす具体的な方途を提起した宣言「祖国の平和的統一のために」を採択した。

大会では、全党と全人民の一致した念願と意思によって、金日成主席が再び朝鮮労働党中央委員会委員長に選出された。

主席は第3回党大会後、社会主義の基礎建設を完成するためのたたかいを力強く推し進める一方、党の統一・団結を強化するたたかいを導いた。

党の統一・団結を強化することは、この時期、内外の情勢が複雑で反党・反革命分派分子の策動が露骨化した状況にあって緊切な要求であった。

主席は、戦後の困難な時期に党に挑戦した反党・反革命分派分子の策動を暴露、粉砕するたたかいを強力に展開した。

主席は、すでに1955年4月総会で党内に現れた分派的要素について指摘し、今なおそのような行動を続けるならば容認しないであろうと警告し、第3回党大会で再び分派分子に警鐘を鳴らした。

しかし崔昌益（チェチャンイク）ら反党・反革命分派分子は、反党的行為を即時中止するようにという党のたび重なる警告にもかかわらず、反党・反革命的陰謀策動を続けた。彼らは特に、主席が1956年6月～7月にソ連と東欧社会主義諸国を友好訪問する機に乗じて政治的野望を実現しようと、卑劣な反革命的陰謀をめぐらした。崔昌益一味は、1956年8月末に招集された朝鮮労働党中央委員会総会を契機に党に正面から挑戦した。

主席は、党中央委員会8月総会で党を攻撃した反党・反革命分派分子を暴露、粉砕する断固たる措置を講じた。

抗日革命闘士をはじめ総会参加者は一致して分派分子の策動に決定的な打撃を加え、主席をあくまで擁護した。その結果、反党・反革命分派分子の悪辣な陰謀策動は完全に粉砕された。

崔昌益と結託した朴昌玉（パクチャンオク）など一部の分派分子は、党の指導的地位を占めて甚だしい弊害を及ぼしてきた痼疾的な分派分子であった。

総会で暴露、粉砕された分派一味は単なる分派ではなく、アメリカ帝国主義と結託して朝鮮労働党と共和国政府を転覆しようとする極悪な反革命集団であった。彼らは、革命と建設に対する党の指導と人民政権の独裁機能を否定し、党の革命伝統を抹殺しようとし、党の路線と政策に反対し、革命と建設で収めた党の闘争業績と成果を誹謗中傷した。

主席は総会で、分派分子の正体と策動の本質を明らかにしながら、今後、党内における分派活動は無条件に禁止されるべきであり、それがいかなる口実でなされようと、また些細なものであっても、断固粉砕しなければならないと強調した。

総会後、主席は、党全体で分派に反対する党内闘争を強力に展

開する措置を講じた。

8月の総会を契機に分派の頭目は決定的な打撃を受けて排除されたが、その残存分子と分派の思想的毒素は依然として残っていた。分派の毒素を一掃することはどこまでも人々の思想に関する問題であるため、行政的・実務的方法によって解決できるものではなかった。

そのため主席は、反分派闘争を思想闘争と思想教育の形で行うようにし、抗日武装闘争期の反「民生団」闘争の経験と祖国解放戦争の時期、朴憲永一味を暴露、粉砕した経験にもとづいて、一人でも多く党の周りに結束することを原則にして、反分派闘争を偏向なく行うよう指導した。

また反分派闘争で党中央委員会を死守し、党の統一・団結を強化することを第一の課題とし、これに力を集中するようにし、党員と勤労者に分派主義の本質と弊害、その思想的根源と罪業を認識させ、些細な分派的行為に対しても鋭い思想闘争を繰り広げるようにした。そして反分派闘争を事大主義、教条主義、修正主義に反対し、社会主義建設で一大高揚を起こす闘争と密接に結びつけて行うようにした。

この闘争を通じて党員と軍人、勤労者は、政治的、思想的に覚醒し、主席の周りに固く結束した。

主席が1957年8月下旬、最高人民会議代議員選挙の日に江西郡台城(テソン)里の投票所を訪ねた際、一人の老婆が「首相さま！　お顔がとてもやつれていらっしゃるようですが、あまりご心配なさらないで下さい。分派分子らが人民生活がどうのこうのと騒ぎたてても、みんなの暮らしはよくなっていますので大丈夫です。何とい

っても、わたしたちが勝つのはきまっているし、分派分子らは勝てません。心配なさらないで下さい。わたしたちは首相さまを支持します」と言った。

主席は、このような軍隊と人民の積極的な支持と信頼の中で反党・反革命分派分子の策動を粉砕し、党の統一と団結を成し遂げたのである。

主席は、長期にわたって存在した醜悪な分派分子を一掃する党内闘争を総括し、分派的毒素を一掃する闘争を強力に繰り広げるよう指導した。

主席は、1958年3月3日から6日まで、朝鮮労働党代表者会議を開催し、党の統一と団結をさらに強化する課題を示した。

主席は、党の統一と団結を強化するためにはセクト主義、地方主義、家族主義に反対して引き続き断固とたたかい、分派的毒素を一掃し、反修正主義闘争を強力に展開して党員の党生活を強化すべきであると教えた。

そして、セクト主義に反対するたたかいで党中央を擁護することにとりわけ力を注ぐべきであると強調した。

金日成主席は次のように述べている。

「セクト主義に反対する闘争で最も重要なのは、党の団結を固く守るために党中央を擁護することです」

反党・反革命分派分子は、党の指導権を奪うために、党中央を中傷し、その権威を傷つけようと躍起になっていた。

主席は、党中央がなくては党は存在できないと述べ、全党が党中央を擁護、防衛し、党中央の指導を心から受け入れるようにするたたかいをさらに強化すべきであると強調した。

主席は、党代表者会議の後、分派的毒素を一掃するために地方の党組織に対する党中央委員会の集中指導を行うようにし、両江道党委員会をはじめ多くの工場、企業の党組織の活動を現地指導しながら、分派的毒素を一掃する具体的な方向と方途を示し、反分派闘争に現れた偏向を適時に是正させた。

その結果、党内の分派的毒素は一掃され、分派グループはもちろん、その残党ももはや存在しなくなった。

主席は、社会主義革命の勝利に伴い、反革命とのたたかいを強化するよう指導した。

共和国で生産関係の社会主義的改造が成功裏に進められ、あらゆる階級敵の地盤が崩壊するにつれ、覆された搾取階級は最後の悪あがきに出た。司法機関に潜んでいた反党分派分子は、敵対分子との闘争を故意に怠っただけでなく、彼らを公然と庇護したり結託し、反革命分子を無罪として釈放するようなことまでした。社会主義建設を推し進め敵の侵害から革命の獲得物を固守するためには、反革命分子の蠢動を徹底的に鎮圧しなければならなかった。

主席は1957年5月末、朝鮮労働党中央委員会常務委員会で反革命との闘争を強化するための原則と方途を示した。主席は、反革命との闘争において対象を正確に定めて敵味方を明確に識別し、現行犯とはあくまでもたたかい、ごく少数の悪質分子は厳しく処罰する一方で、多数の追随分子は包容して教育し改造する原則を堅持するようにした。また、反革命分子との闘争を一時的なこととしてではなく日常の政治闘争として、また何人かの活動家に限られた活動ではなく大衆的な運動として進め、すべての部門、すべての単位で革命的な秩序と規律を確立するようにした。

こうして、この闘争は全人民的な活動となり、階級敵はいっそう孤立し、隠れていた反革命分子は摘発、暴露された。

その結果、反革命との闘争を通じて人民大衆を党の周りに固く結集し、革命の主体的勢力を強化して、社会主義革命と社会主義建設を成功裏に遂行できるようになった。

第7節　社会主義建設の革命的大高揚をめざす闘争、チョンリマ運動の創始と深化・発展

3カ年計画を2年8カ月で完遂した朝鮮人民は、1957年から5カ年計画の遂行に取りかかった。

5カ年計画を成功裏に遂行するには、生産を急成長させなければならなかった。しかし、難関は一つや二つではなかった。5カ年計画は膨大な投資と高度の技術を必要としたが、国には設備と資材、労力と資金などすべてが不足し、技術も立ち後れた状態にあり、人民の暮らしも楽でなかった。かてて加えて、かつてなくヒステリックに強行されるアメリカを頭目とする帝国主義者と国際反動派の「反共」謀略と、李承晩傀儡一味の「北進」騒ぎ、そして大国主義者の圧力と干渉、党内に潜入した反党・反革命分派分子の策動のため国内外の情勢は緊迫し複雑を極めていた。

金日成主席は、革命と建設の前に立ちはだかるこの難局を打開するため、1956年12月、朝鮮労働党中央委員会総会を招集した。

総会では、5カ年計画の初年度である1957年の人民経済計画が討議された。

ところが、一部の人は膨大な展望計画と突きあたる難関におじけづいて尻込みし、人民経済計画の内容を削ろう、前進速度を少し緩めようなどと言い、またある人は外国から借款を受けようと言った。

主席は、人民大衆の革命的熱意を高めるならば、高く立てた人民経済計画は十分遂行できると指摘し、社会主義経済建設で新たな高揚を起こす方針を示した。

そして、1957年に工業総生産高を1956年の予定実績より21％増やし、計画のほか、鋼材5000～1万トンと穀物5万トン、40億～50億ウォン（旧貨幣）分の商品を増産する課題を提示した。

主席は、この力に余る課題を成功裏に遂行するためには、すべての幹部が政治活動、対人活動を活発に行って広範な大衆の積極性と創意を発揮させるようにしなければならないと指摘し、「増産し節約して5カ年計画を期限前に超過遂行しよう！」というスローガンのもとに、全党員と勤労者が内部の潜在力をすべて引き出し、設備の利用度を最大限高めるよう強調した。

総会後、主席は社会主義建設の大高揚へと全党と全人民を奮い立たせた。

主席は、党中央委員会常務委員会の委員をはじめ党と国家の幹部を全国各地の主要工場、企業、農村に派遣し、自ら国のひっ迫した鋼材問題を解決するため、1956年12月28日早朝、降仙製鋼所を訪ねた。国に1台しかない6万トン能力の分塊圧延機で鋼材を増産する余力を見いだすためであった。

製鋼所はすでに1957年、国から8万トンの鋼材生産の課題を受けていた。しかし、8万トンでは鋼材の需要を満たすことはでき

なかった。そのため党中央委員会12月総会で、鋼材を計画より1万トン増産するようアピールし、これにもとづき製鋼所では内部の潜在力を探求していたが、これといった方途を見いだせずにいた。

このようなときに製鋼所を訪れた主席は、降仙製鋼所の幹部および模範労働者と協議会を開き、『内部の潜在力を最大限に引き出し、さらに多くの鋼材を生産しよう』と題する演説を行った。

主席は演説で、党中央委員会12月総会の基本精神と5カ年計画の膨大な課題、そして複雑な国内外の情勢と翌年の人民経済計画の遂行で提起される障害と難関について言及した後、今日の状況が困難であるからといってわれわれが気を落とし、革命闘争と建設に横たわる重大な難関の前でひるんではならない、党は革命の主力部隊である労働者階級を信頼しており、みなさんに期待をかけている、みなさんが次の年に鋼材を1万トン増産すれば国は一息つける、ひっ迫した鋼材問題を解決できるか否かは降仙製鋼所の労働者の闘争にかかっている、鋼材の問題を解決するのはほかならぬみなさんである、みなさんは党の意図を明確に知り、この問題を解決するために全力を尽くすべきである、と期待と信頼を込めた語調でアピールした。

金日成主席は次のように述べている。

「降仙製鋼所の労働者は、党中央委員会12月総会の決定を高く掲げ、集団的革新運動の炎をさらに強く燃え上がらせるべきです。そして、それが共和国のすべての勤労者を社会主義建設の大高揚へと奮起させる炎となるようにしなければなりません」

降仙の労働者は、主席が自分たちを革命的な大高揚の先頭へ押

し立てる、その信頼と愛に鋼鉄増産で応える堅い誓いを立て、鋼鉄生産で一大革新を起こした。彼らは内部の潜在力を積極的に引き出し、設備の利用度を最大限高め、年産6万トン能力の分塊圧延機で12万トンの鋼材を生産するという奇跡を生んだ。こうして、降仙に革命的な大高揚の炎が燃え上がり、降仙はチョンリマ（千里馬）大進軍の初ののろしを高く掲げた歴史のふるさととなった。

降仙の労働者階級の間に大高揚の炎を燃え上がらせた主席は、1957年1月、黄海製鉄所を訪れた後、興南や新浦（シンポ）地区、文徳（ムンドク）郡、粛川（スクチョン）郡などまる1年をかけて全国の各工場、企業、農漁村を現地指導し、全人民をチョンリマ大進軍へと奮起させた。

主席の戦闘的な呼びかけと現地指導に励まされた全国の勤労者は「チョンリマを駆る勢いで前進しよう！」という革命的スローガンを高く掲げ、自力更生の革命精神を発揮して、社会主義建設のすべての部門で革命的な大高揚を起こした。

主席は1957年4月、朝鮮労働党中央委員会総会を招集し、中小漁業、深海漁業、季節漁業など多様な方法で四季海を空けずに漁労作業を行い、魚類加工を根本的に改善し、青年を海に積極的に進出させ、水産業の発展に必要な技術者を養成し、先進技術を広く取り入れるなど、水産業に新たな革新を起こすための措置を講じた。そして同年10月に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会で、党の示した組立式建設方針を広く取り入れ、設計を標準化、規格化し、部材生産を工業化し、施工を機械化して、建設の速度とその質を高める問題など、建設で革新を起こすための対策を講じた。

主席は、会議後、清津（チョンジン）水産事業所と南浦水産事業所など、各水産事業所と平壌市の建設現場などを訪ねて労働者を革新へと奮

い立たせ、彼らの生活に深く心を配った。

その結果、社会主義建設の各部門で大きな革新が起こり、世界を驚嘆させる奇跡が相次いで生まれた。

金策製鉄所の労働者は、年産19万トン能力の設備で27万トンの銑鉄を生産し、黄海製鉄所の労働者は、1年足らずの間に大型熔鉱炉を建設した。革命的大高揚の中で5カ年計画の初年度、1957年の工業生産計画は117％超過達成され、工業生産は前年に比べて144％まで増えた。農業部門は穀物生産計画が112％超過達成された。

朝鮮における社会主義建設の革命的大高揚はこのように起こり、その過程でチョンリマ運動が始まった。

主席は1958年9月に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会で、社会主義建設の大高揚をさらに高め、人民経済の技術改造を推し進める対策を講じた。

主席は総会で「鉄と機械は工業の王者である！」、「すべての力を100万ヘクタールの灌漑面積拡張へ！」というスローガンを示し、金属工業と機械製作工業を速やかに発展させ、数年内に農業の水利化を基本的に完了するための課題を提示した。

総会では、全党員に社会主義建設の大高揚をさらに高めることを呼びかける党中央委員会の手紙を採択した。

9月総会後、主席は、総会の決定貫徹をめざすたたかいを指導した。

主席は、生産者と科学者、技術者の創造的協力を強化し、集団的技術革新運動を広く繰り広げて、技術の発展に新たな前進をもたらし、経済管理と生産の手配をさらに改善して生産成長の潜在

力と可能性をすべて動員するようにした。

主席は金属工業の発展に大きな力を注いだ。

金日成主席は次のように述べている。

「工業化と技術革命でまず第一に重要なのは、近代的な機械設備をつくり出すことです。そして機械をつくるには鉄が必要です」

主席は、機械の生産に必要な鉄の生産を伸ばすため1958年10月上旬、再び降仙製鋼所の労働者を訪ね、鋼材生産で引き続き革新を起こすよう訴え、翌年3月には、城津製鋼所や清津製鋼所、金策製鉄所を、9月には黄海製鉄所を現地指導して、金属工業の発展方向と生産正常化のための具体的な対策を講じた。

金属工業部門の労働者、技術者は、主席の教えに従い、1年足らずの間に30万～40万トン能力の熔鉱炉を建設し、人民経済の各部門で必要な鉄鋼材を自力で生産した。

主席は機械製作工業の発展に深い関心を払った。

当時、大国主義者は、朝鮮で近代的な機械を生産するのは時期尚早だ、また少量生産しては収支が合わない、原料を生産する程度にして機械はわれわれの国から買って使うのがよい、と言った。彼らの言う通り、鉱石を採掘して外国へ輸出し、その代価として機械を輸入するならば、国には空っぽの坑道しか残らず、いつになっても自力で機械をつくるのはできないことだった。

主席は国の工業化に必要な近代的な機械設備を自力で生産する大胆な構想を抱き、1958年10月、岐陽と徳川（トクチョン）の労働者を訪ね、自力更生の革命精神を高く発揮して、自力でトラクターと自動車を生産する課題を与えた。また1959年3月、龍城（リョンソン）機械工場を訪ねては、大型機械と設備を自力で生産するよう対策を講じた。

主席は特に工作機械の生産に大きな力を注いだ。

主席は1959年3月、咸鏡(ハムギョン)北道を現地指導した際、機械工場でもない鏡城(キョンソン)郡の小さな亜麻工場で、自力で工作機械を生産し利用しているのを見て、機械工業の発展に一大飛躍を起こす工作機械の子生み運動を構想し、同年5月の朝鮮労働党中央委員会常務委員会拡大会議で、工作機械の子生み運動ののろしを上げた。そして、この大衆運動が深化すると、それを大型工作機械と特殊工作機械の生産へと発展させていった。

機械工業部門の労働者は、自力更生、刻苦奮闘の革命精神をもって、30余日目に「チョンリマ号」トラクターを、40日目に「勝利―58」自動車を造り出すという奇跡を生んだ。そして、いくらもたたない内に8メートルターニングミルと3000トンプレス、「チョンリマ号」掘削機、「楽元(ラクウォン)1号」大型揚水機、「プルグンビョル―58」ブルドーザーを製作する偉勲を立てた。全国各地で機械が機械を生み、工場が工場を生む驚異的な奇跡が生まれ、わずか1年の間に計画外に1万3000余台の工作機械を生産するという大きな成果が達成された。

主席は、農業の技術改造において水利化に第一義的意義を付与し、100万ヘクタールの灌漑面積を拡張するたたかいを指導した。

主席は、昼夜を分かたず岐陽、オジドン、青丹(チョンダン)などの灌漑建設現場と山間部や平野部はもちろん、南朝鮮との軍事境界線が引かれている地域に至るまで、大小の灌漑建設現場を訪ね、細やかに指導した。

その結果、党中央委員会9月総会の後、わずか6カ月で9900余の灌漑施設が完成し、灌漑面積は37万7000余ヘクタールも拡張

された。

主席は、人民経済の他の部門においても革命的高揚をさらに高めるよう指導した。

電力工業を急速に発展させるため、1958年6月に水豊(スブン)発電所、8月には将子江(チャンジャガン)発電所の建設現場などを現地指導しながら、自力で至るところに発電所を建設するための対策を講じた。その結果、長津江発電所が新たな技術にもとづいて復旧され、将子江発電所をはじめ大規模な発電所や中小規模の発電所が建設された。

主席は化学工業の急速な発展、特にビナロン工業の創設に大きな意義を付与し、自らビナロン工場の建設を発起し、1959年3月には現地に出向き、工場の建設を推し進める方途を示した。そして建設部門で新たな革新を起こすため、1958年2月、平壌市建設部門熱誠者会議を招集し、建設部門に提起される具体的な課題を示し、その後、多くの建設現場を訪ねて難題を一つ一つ解決した。

その結果、朝鮮で初めてビナロン工業が創設され、社会主義建設のチョンリマ速度を象徴するビナロン速度、平壌速度などが創造された。平壌市では、7000所帯分の資材と資金で、2万世帯の住宅を建設する革新が起こり、青年鉄道建設者は3～4年はかかると言われていた海州(ヘジュ)――下聖(ハソン)間80余キロメートルの広軌鉄道敷設工事をわずか75日間で完成し、チョンリマ進軍の威力を誇示した。

主席は、軽工業を急速に発展させるため、1958年6月に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会で、大規模な中央工業と中小規模の地方工業を並進させるという独創的な方針を提示し、全人民的運動で各市、郡に地方産業工場を一つ以上建設するようにした。

その結果、地方の遊休資材と労働力を動員して、わずか3～4カ

月の間に1000余の地方産業工場が建設され、1年余りの間に、それが2000余に増え、一般消費財生産の半分を地方工業が担当できるようになった。

社会主義建設のすべての部門で一大高揚が起こり、国の経済は飛躍的に発展した。工業生産高は1958年に前年に比べ140％、1959年にはその前年に比べて再び153％という驚異的な速度で伸びた。

主席は、革命的大高揚の中でチョンリマ運動を創始し、社会主義建設を最大限に速める全人民的な大衆運動へと発展させた。

主席は、チョンリマ運動の本質を明らかにし、それを社会主義建設における朝鮮労働党の総路線に規定した。

金日成主席は次のように述べている。

「…チョンリマ運動は、経済と文化、思想と道徳のあらゆる分野で一切の立ち遅れを一掃して絶えず革新を起こし、社会主義建設をめざましく推進するわが国数百万勤労者の一大革命運動となり、社会主義建設におけるわが党の総路線となりました」

主席は、チョンリマ運動を深化させ組織化して、チョンリマ作業班運動に発展させるよう導いた。

主席は、1959年2月17日、チョンリマ運動ののろしを上げた降仙製鋼所の労働者を訪ね、チョンリマ作業班運動の火を点じた。

降仙の労働者は、「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」というスローガンを高く掲げ、チョンリマ作業班運動ののろしを上げた。

主席は、降仙で始まったチョンリマ作業班運動を、全国の工場、企業へ急速に拡大するよう導いた。

1960年8月に開かれた全国チョンリマ作業班運動先駆者大会において、チョンリマ作業班運動で収めた成果を総括し、この運動を作業班の範囲を越えて職場と工場まで拡大し、工業だけでなく経済と文化のすべての部門で広く展開するようにした。その結果、チョンリマ作業班運動は、国の広範な大衆が参加する大衆的な大進軍運動へと拡大、発展するようになった。

社会主義建設において革命的大高揚が起こり、チョンリマ運動が深化する中で、機械製作工業を中心とする強力な重工業基地と軽工業基地が建設され、社会主義的工業化の基礎が強固に築かれるようになった。

第8節　党活動に新たな転換をもたらすための活動、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法の創始

社会主義制度が確立し、社会主義建設において大高揚が起きていた新たな環境は、それに即して党活動に新たな転換をもたらすことを求めていた。

金日成主席は、革命発展の要請を見極め、社会主義制度の樹立後、党活動に転換をもたらすためのたたかいを進めた。

主席は、社会主義制度の樹立を前後した時期に、地方党組織の活動を現地指導しながら、社会主義下における党活動について深く研究し、思索と探究を重ねたうえで党活動に関する理論を新たに定立した。

1958年3月上旬に道・市・郡党委員長と人民委員会委員長に行

った演説『党活動の改善について』、1959年2月下旬に生産企業の党オルグおよび党委員長、道・市・郡党委員長の講習会で行った演説『党活動の方法について』など一連の著作で、社会主義下における党活動に関する理論的・実践的問題を科学的に解明した。

金日成主席は党活動の基本について次のように述べている。

「党活動は対人活動であります」

党活動の対象は人間であり、党の任務は人々、党員と勤労者を教育して党の周りに結集させ、党政策の貫徹へと奮い立たせることであるため、対人活動に第一義的な関心を払い、それを堅持していくことがとりもなおさず党活動の基本である。

主席は、人間中心の党活動の原理にもとづいて、党内活動と行政・経済活動に対する党の指導を強化するという思想を提示した。

党活動を党内活動と行政・経済活動に対する指導に区分し、党内活動に主力を注ぎながら行政・経済活動を正しく指導するようにした。

主席は、党内活動においては党を質的に強化する問題に大きな力を注ぐべきであるとし、全党が一糸乱れず動き、幹部との活動、党員との活動、大衆との活動を正しく行うよう指摘した。行政・経済活動に対する党の指導を正しく行うためには、各級党委員会が当該単位の参謀部となり、行政・経済活動に対する党の指導は、政治的指導となるべきであることを強調した。

主席は、党の活動方法と活動作風についても具体的に明らかにした。

主席は、党の権威濫用、官僚主義を克服するたたかいを強く進めた。

主席は、すでに1955年4月の朝鮮労働党中央委員会総会で行った報告『官僚主義をなくすために』において、活動家の活動方法と活動作風を改善する問題、特に官僚主義をなくす問題を重要視して、官僚主義の本質と表現形態、その弊害と思想的根源を全面的に分析し、それを克服する方途を明確に示した。

主席は、また1959年2月に開かれた朝鮮労働党中央委員会総会をはじめ一連の会議で、再び党の権威濫用と官僚主義を一掃する課題と方途を示した。

主席は、党の権威濫用と官僚主義を一掃し、党の活動方法を改善するためには、行政式の方法、命令式の方法をなくし、党活動家が説得と教育を基本にして活動し、それに当たっては大衆の先頭に立つ旗手となり、対人関係では母親となり、謙虚でおおらかであるだけでなく、虚心に学んで政治・理論水準と文化・技術水準を高め、気高い道徳的品性を身につけるべきであると強調した。

主席は党活動を一新しながら新たな党活動体系を打ち立てた。

主席は、党中央委員会の幹部が直接下部の活動家に党の路線と政策を教える制度を打ち立て、すべての党活動家に党中央委員会の意図を明確に認識させるようにした。また下級党組織に対する指導に当たっては、あら捜しをするのではなく、見いだした欠陥を現地で改めるよう助け、その過程で得た好ましい経験だけを持って帰るようにした。そして各級党組織に対する集中指導を行うようにし、咸鏡北道をはじめ各地方党組織に出向いては指導方法の模範を示し、それを全国に広めた。

主席の指導によって、党活動に根本的な転換がもたらされ、党の戦闘力と指導力はかつてなく高まり、党は人民のすべての勝利の組織者、

導き手としての役割をより円滑に果たせるようになった。

主席は、党・国家経済機関の活動体系と活動方法を、発展する現実と環境に即して絶えず改善し完成していった。

当時、朝鮮では生産力が急速に発展して生産の規模は以前と比べようもないほど拡充し、大衆の政治的熱意も非常に高まっていた。新たな環境は、これに即して党の活動体系と活動方法を根本的に改善することを求めていた。

主席は、1959年12月、朝鮮労働党中央委員会総会で、党・国家経済機関の活動体系と活動方法を発展する現実の要請に即して改善するための綱領的な課題を示し、新たな活動体系と活動方法を創造するため、1960年2月、自ら青山里と江西郡へ出向き、15日間も現地にとどまって指導した。

主席は、青山里の活動家と数多くの党員、農民との話し合いを通して、彼らの活動と生活を詳細に理解し、里党の活動と協同組合の管理・運営上の欠陥と難題を深く把握した。

そして、郡内の六つの里に指導メンバーを新たに派遣し、その状況も青山里と変わらないことを確認した。

主席は、郡内の実情を具体的に把握したうえで里党総会と郡党委員会総会を開くようにし、会議の報告書の作成方向と内容など、その準備から会議の進行方法に至るまで教え、会議で成果を収めるよう導いた。

主席は、現地指導の過程で、党員と活動家が革命発展の要請と党の意図を理解し、課された革命任務を自覚的に遂行するようさまざまな形式と方法で教え、活動において提起されるすべての問題を解決する方途を示した。

主席は2月8日、江西郡青山里党総会で『社会主義農業の正しい運営のために』、2月18日、江西郡党委員会総会では『新たな環境に応じて郡党組織の活動方法を改善するために』、2月23日、党中央委員会常務委員会拡大会議では『江西郡党活動の指導を通じて得た教訓について』と題する演説を行い、社会主義農業を正しく運営し、党・国家経済機関の活動体系と活動方法を根本的に改善する問題に全面的な解答を与えた。

主席が青山里と江西郡に対する現地指導を通じて新たに打ち立てた活動体系と方法、そして主席が示した指導方法を総括してチョンサンリ（青山里）精神、チョンサンリ方法という。

金日成主席は次のように述べている。

「チョンサンリ精神とチョンサンリ方法は、わが党の伝統である革命的大衆路線を社会主義建設の新たな現実に即して具体化し、発展させたものです」

チョンサンリ方法の基本は、上部機関が下部機関を助け、上部の人が下部の人を助け、常に現地に行って実情を深く把握し、問題解決の正しい方途を見つけ出し、すべての活動において政治活動、対人活動を優先させ、大衆の自覚的な熱意と創意を引き出して、革命課題を遂行することにある。

チョンサンリ精神、チョンサンリ方法の基本的要求は、上部が下部を助け、活動家が常に大衆の中に入り、大衆に依拠して革命課題を遂行することであり、すべての活動において政治活動、対人活動を優先させることであり、一般的指導と個別的指導を正しく結びつけ、その要所に力を集中することである。

主席は、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法を全党、全国に

広める活動を力強く推し進めた。

1960年2月の朝鮮労働党中央委員会常務委員会拡大会議で、青山里と江西郡に対する指導状況を総括し、活動家が下部に対する指導において堅持すべき原則と方法を示し、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法を広めるための措置を講じた。主席は、党中央委員会常務委員会の委員をはじめ中央と道の有能な活動家を指導グループとして派遣し、全国の郡と里に対する集中指導を実施させた。

主席は、上部機関の活動家が直接下部へ出向き、下部の活動家とともに大衆を具体的に助ける活動体系を打ち立てた。

特に郡を党と国家の末端指導単位として規定し、郡級機関の活動家が日常的に里に出向き、里の活動家とともに党活動と経済活動を直接行い、里の活動を責任をもって助けることを制度化した。

チョンサンリ精神、チョンサンリ方法を広めるたたかいが力強く展開された結果、党・国家経済機関の活動に新たな転換がもたらされた。中央は道を、道は郡を、郡は里を責任をもって指導する活動体系、また上部が下部を助ける活動体系が全面的に確立され、党活動が対人活動に切りかわったことで活動家の指導水準は著しく高まり、党の戦闘力と指導力もさらに強まり、党と大衆の血縁的関係はかつてなく強固になった。

チョンサンリ精神、チョンサンリ方法は党全体に広まり、全国にチョンリマ運動の炎がさらに激しく燃え上がり、社会主義建設のあらゆる分野において新たな革命的高揚が起こった。

5カ年計画の工業総生産高の課題は2年半で完遂され、主要工業製品の現物指標別生産計画も4年間で完遂あるいは超過遂行された。1960年の工業総生産高は1956年に比べて3・5倍に増大し、解

放前の1944年1年間の工業製品総生産量はわずか40日間で達成できるようになり、国の総生産高のうち工業の占める比重は71％に達した。農業分野では農村水利化の課題がほぼ遂行され、穀物収量は4年間で32％伸びた。1960年の国民所得は1956年に比べて2・1倍に増加した。1956年に初等義務教育制が実施され、次いで1958年から中等義務教育制が実施された。5カ年計画期間中に大学は19校から78校に増加し、技師、技手、専門家などは1956年に比べ2倍に伸びた。

5カ年人民経済計画の遂行により、共和国で社会主義基礎建設の歴史的な課題は成功裏に完遂された。

第9節　祖国の自主的平和統一のための方針提示、在日朝鮮人運動の強化、発展

戦後、朝鮮人民の祖国統一をめざす闘争の前途には幾多の難関が横たわっていた。

アメリカ帝国主義と李承晩傀儡一味は、停戦当初から「朝鮮問題は武力によってのみ解決される」とうそぶきながら、南朝鮮に原子砲やミサイルなどの新型兵器を大量に搬入し、1957年7月には「国連軍司令部」まで日本から南朝鮮に移した。そして南朝鮮人民の基本的人権とわずかな民主的自由さえ踏みにじり、祖国統一をめざす革命家と愛国的人民を検挙、投獄、虐殺した。アメリカ帝国主義はまた、南朝鮮に対する植民地的収奪をかつてなく強めながら、南朝鮮経済の従属を深め、民族産業を破滅に追い込んだ。南朝

鮮は文字通り生き地獄と化し、人民は民生苦にあえいだ。

金日成主席は、情勢の変化を鋭敏に見極め、祖国の自主的平和統一に向けた方針と方案を相次いで提示した。

金日成主席は次のように述べている。

「朝鮮の統一問題は、朝鮮人自身の意思によって解決されるべきであります。そのためには朝鮮からすべての外国軍隊が撤退し、南北朝鮮人民が一堂に会して朝鮮問題を討議し、自由な意思表示によって民主主義的統一政府を樹立すべきであります」

主席は、8・15解放10周年慶祝大会で行った報告と1957年9月に開かれた最高人民会議第2期第1回会議での演説で、停戦を恒久の平和へと転換する、アメリカ帝国主義侵略軍を南朝鮮から撤退させる、北と南の軍隊をそれぞれ10万あるいはそれ以下に縮小する、双方武力の不行使協定を締結する、北南間の自由往来と通信交換、経済・文化の交流、政党、社会団体と個別的人士の接触を実現する、統一問題の実務的対策を立てる常設委員会を設置するなど、積極的な方案を提示した。そして、1959年9月の内閣第9回全員会議をはじめ多くの機会に、南朝鮮の人民、特に失業者と絶糧農民、被災民を救援するために救済物資を提供し、浮浪孤児をすべて引き取って養育することを提案した。

主席は、8・15解放15周年慶祝大会で行った報告で、祖国統一を早めるための合理的な方案を示した。

主席は、南朝鮮当局がまだ自由な南北総選挙を受け入れることができないならば、まず祖国統一を早める過渡的対策として南北連邦制を実施することを提案した。

主席は、われわれが提案している連邦制は、南北朝鮮に現存す

る社会・政治制度はそのままにし、朝鮮民主主義人民共和国政府と「大韓民国政府」の独自の活動を保持しながら、両政府の代表からなる最高民族委員会を組織して、民族の関心事である問題を共同で処理しようというものであると述べた。

このように新たな統一方案を提案して、全朝鮮人民に統一に向けた明るい展望を示した。

主席は、祖国統一をめざすたたかいを力強く推し進めながら、海外同胞運動、特に在日朝鮮人運動の主体的な進展に大きな関心を払った。

在日朝鮮人運動を主体的に進展させることは、この運動が厳しい難局にさらされていたため、極めて切実な問題となっていた。

1949年9月、アメリカ帝国主義と日本反動派により解放直後に組織された在日本朝鮮人連盟（朝連）が強制解散させられた後、在日同胞は困難なたたかいを繰り広げ、1951年1月、新たな合法的民族統一戦線体である在日朝鮮統一民主戦線（民戦）を結成した。これに鼓舞された在日同胞は、米日反動派の弾圧にも屈せず共和国を擁護する闘争を果敢に展開した。

主席は1952年12月初め、在日朝鮮人連絡員との談話で、在日朝鮮人運動の主体的な路線転換方針を提示した。

主席が示した在日朝鮮人運動の路線転換方針は、在日同胞は日本で暮らしているが、日本の革命のためにたたかうのではなく朝鮮の革命のためにたたかい、在日朝鮮人運動はあくまで共和国政府の指導のもとに行い、自己の主体的勢力に依拠して民主主義的民族権利を擁護し、祖国の統一・独立のためにたたかい、在日朝鮮人運動を合法的な方法で展開すべきであるというものであった。

主席は、在日朝鮮人運動の路線転換方針を貫徹するため、チュチェ型の海外同胞組織である在日本朝鮮人総聯合会を結成するよう導いた。

主席は、在日朝鮮人運動の性格に即して組織の形態と使命を正確に規定した。

主席は、新たに組織する同胞組織は思想と政見、職業と財産、団体所属の違いを問わず、各階層の広範な同胞をすべて結集した統一戦線体の組織にするようにし、それはある種の汎朝鮮人団体にするのではなく、大衆的政治組織にすべきであると強調した。

そして、新しい型の海外同胞組織を成功裏に建設するためには中核隊伍、特に指導中核を打ち固め、民族的愛国運動の実践闘争の中で中核隊伍を絶えず拡大していくようにし、同胞を主体的な路線転換方針でしっかり武装させ、同胞隊伍の思想的・意志的一致性を保持することに大きな力を注ぐようにした。

主席の指導に従って韓徳銖（ハンドクス）をはじめとする在日朝鮮人愛国者と同胞は、新しい型の同胞組織を結成する事業を積極的に推し進め、それにもとづいて1955年5月25日、東京で在日本朝鮮人総聯合会（総聯）を結成した。

主席は総聯の活動に常に深い関心を払い、あらゆる支援を惜しまなかった。

主席は、1955年9月、祖国解放10周年慶祝在日朝鮮人祝賀団への談話をはじめ、多くの機会に総聯を強化し、愛国運動を展開するうえで堅持すべき原則的問題について明らかにした。

主席は、総聯は愛国運動路線を堅持し、在日同胞は祖国と民族のための愛国活動を力強く展開すべきであり、愛国活動で絶対に

極左に走ってはならず、日本の法を順守しながら合法的な方法で活動すべきであると述べた。同時に総聯は、思想と政見、職業と財産、団体、所属のいかんを問わず、各階層の広範な同胞をすべて結集し、団結した力で祖国の統一・独立と民主主義的民族権利のためにたたかうべきであると強調した。

主席は、総聯の各級機関と団体をしっかり整えることに第一義的な力を注ぐようにした。

その結果、総聯は強化され、青年団体、女性団体と商工人団体、文化・芸術団体、出版・報道機関が全般的に改組、整備され、在日同胞はチュチェ思想の旗のもとに固く団結して海外同胞運動を力強く展開できるようになった。

主席は、在日朝鮮人の民族的権利と尊厳を守り、彼らの子女に対する民族教育事業を発展させるために配慮を惜しまなかった。

主席は、在日朝鮮人の民族的権利を擁護することを共和国政府の一貫した政策とし、神聖な義務として宣言し、彼らの民族的権利と尊厳を侵害する日本反動当局の策動を断固暴露、糾弾するとともに、総聯がすべての在日同胞の民主主義的民族権利の擁護のために粘り強くたたかうよう導いた。

主席は、在日同胞子女に対する民族教育事業を重要な事業と見なし、総聯の民族教育事業の正しい進路を示した。そして日本の地に幼稚園から大学に至るまで整然とした民族教育体系を打ち立て、祖国の人民が勤倹節約して戦後の復興建設を進めていた1957年1月、1957年の国家予算草案を討議する内閣全員会議で、国家予算に「在日同胞子女のための教育援助費と奨学金」という項目を新たに加え、同年4月から毎年莫大な教育援助費と奨学金を

送った。

主席は、主動的かつ積極的な外交措置を講じて在日同胞に帰国の航路を開き、帰国実現に向けあらゆる条件を整えた。

そして、1959年12月から「資本主義から社会主義への民族の大移動」と呼ばれた在日朝鮮同胞の帰国事業がはじまった。

主席の海外同胞運動に関する思想と指導、限りない愛と配慮は、海外同胞が異国の地においても朝鮮民主主義人民共和国の海外公民としての大きな誇りを抱き、民主主義的民族権利と社会主義祖国の繁栄、祖国の自主的平和統一をめざす海外同胞運動を力強く展開する原動力であった。

第10節　帝国主義に反対し、社会主義諸国の統一と団結を強化するたたかい

1950年代の後半に入りアメリカを頭目とする帝国主義者は、世界各地で侵略と戦争策動を強行し、社会主義諸国に対する反革命的な攻勢を強化した。一方、国際共産主義運動の内部で現代修正主義者は、労働者階級の革命思想の真髄を骨抜きにしようとし、彼らの誤った主張を他の国々に押しつけようとして、社会主義運動に混乱を招いた。

新たな国際情勢は、反帝闘争を強力に展開して帝国主義者の侵略と戦争政策を粉砕し、労働者階級の革命思想の純潔性を守るたたかいを強めて世界革命を積極的に推し進めることを切実に求めていた。

金日成主席は1957年12月の初め、朝鮮労働党中央委員会拡大総会の報告や『社会主義諸国の友好と団結』など一連の著作で、世界革命運動において解決が求められている原則的問題を明らかにした。

主席は、今の時代は世界的規模で帝国主義勢力に対する社会主義勢力、民主勢力の闘争の時代であるとし、世界の革命的人民が時代の要請に即して反帝闘争の旗を高く掲げて帝国主義、特にアメリカ帝国主義に対する原則的立場を堅持し、広範な反帝勢力を動員して帝国主義とのたたかいを決定的に強化すべきであると指摘した。

そして、アメリカ帝国主義が世界の至るところで人民の革命闘争を抹殺し、侵略と戦争政策を悪辣に強行している状況にあって、世界革命を促進するためには、反米闘争をさらに強化すべきであると述べた。またアメリカ帝国主義が日本軍国主義を復活させてアジアの平和を脅かそうとしている実情に照らして、日本軍国主義の復活に反対するたたかいも積極的に展開しなければならないと強調した。

主席は、反帝反米闘争を成功裏に行うためには、世界のすべての反帝革命勢力が一つに固く団結しなければならないとし、そのためには社会主義諸国の統一と団結を強め、植民地民族解放闘争と新興独立諸国人民の闘争を積極的に支持、声援し、世界の平和愛好勢力との連帯を絶えず強めなければならないと強調した。そして当面の課題は、すべての国の人民がアメリカ帝国主義の「力の政策」を恐れたり、欺瞞的な「二面戦術」にだまされることなく、アメリカ帝国主義に対し強硬な立場と断固とした態度をもっ

て仮借なくたたかうことが重要であると指摘した。

主席は、ブルジョア思想の反映としての修正主義は、今日の国際労働運動にとって主要な危険となっており、修正主義に反対する闘争は、すべての国の革命家と革命的人民に提起された最も重要な課題であると述べた。

主席は、労働者階級の革命思想の根本原則を「修正」しようとする企てを許してはならず、教条的に対応してもならず、革命と建設においてその正当性が実証された労働者階級の革命的原則を固守し、あくまで貫徹すべきであると述べた。

主席は、社会主義諸国の団結を強化するためには、国の大小にかかわりなく完全なる平等と互恵、民族的自主性の尊重、相互援助の精神にもとづいて国家関係を発展させ、共産党および労働者党が平等な立場で互いに尊重し、協力する原則を堅持すべきであると強調した。同時に帝国主義者の分裂策動に共産党、労働者党はプロレタリア国際主義の旗を高く掲げ、団結して対抗すべきであると強調した。

主席は、社会主義諸国、各国共産党および労働者党との相互接触を通じて、彼らとの統一と団結の強化を図った。

1956年から1958年にかけてヨーロッパとアジアの社会主義諸国を公式訪問し、訪朝した多くの社会主義諸国の党および政府指導者と精力的な対外活動を展開した。

主席は、この過程で行った会談と談話で、わが国と社会主義諸国との間に結ばれた友好・協力関係を拡大、発展させ、露骨化している帝国主義者の侵略策動に社会主義諸国が団結した力で対抗する問題、植民地民族解放運動をさらに積極的に支持、声援する

問題など、世界革命の発展において提起されている焦眉の問題について幅広く意見交換をし、これを通じて相互の理解をさらに深めるようにした。

主席は、1957年11月、10月社会主義革命40周年慶祝行事を契機にモスクワで開かれた社会主義国の共産党・労働者党代表者会議と各国共産党・労働者党代表者会議に参加して、社会主義諸国と国際共産主義運動の統一と団結を守るために精力的に活動した。

主席は会議で、共産党および労働者党の代表が一堂に会して経験を交わし、世界情勢を分析して、共同闘争をいかに展開すべきかという原則的な問題を協議し、闘争方針を立てることはできるが、「世界革命の中心」をつくり、そこでこの国の党はこのようにし、あの国の党はそのようにせよというように指示することには反対すると主張した。そして各国の革命は、その国の党と人民が主人となって自主的に、創造的に遂行すべきであり、完全な平等と自主性、相互尊重と内政不干渉および同志的協力の原則を共産党、労働者党の相互関係の規範とし、それを厳守していかなければならないと強調した。

主席が公明正大かつ原則的な立場を固守した結果、各国の共産党・労働者党の共同の闘争綱領である革命的な宣言が採択され、社会主義諸国の統一と国際共産主義運動の団結の擁護に大きく寄与した。

主席は1960年11月、モスクワで開かれた各国共産党および労働者党代表者会議に朝鮮労働党代表団を派遣して、修正主義者の分裂主義的・大国主義的策動に反対し、労働者階級の革命的原則を固守して原則的な闘争を繰り広げさせた。

主席の指示を銘記して朝鮮労働党代表団は、自主的な立場を堅持しながらプロレタリア国際主義の原則に立って、すべての党の団結を守るため積極的に活動した。

会議では、朝鮮労働党をはじめ革命的諸党の積極的な活動によって日和見主義的立場は克服され、社会主義諸国と共産党、労働者党の組織的分裂も阻止され、革命的内容が盛られた声明が採択された。

主席は、世界的規模で反帝反米闘争に対する支持、声援活動を指導した。

主席は、台湾を占領したアメリカ帝国主義者の中国に対する侵略行為の拡大に反対して断固たたかうようにし、ベトナム侵略戦争の拡大を企てるアメリカ帝国主義の策動を暴露、糾弾し、それに反対するたたかいを積極的に繰り広げるようにした。また1956年にエジプト政府がスエズ運河を国有化する断固たる措置をとったことを契機に、アメリカ帝国主義の差し金のもとに英仏帝国主義者とイスラエル侵略者がエジプトへの武力干渉を強行するや、それに反対するエジプト人民の闘争を力強く支持、声援した。そして「日米安保条約」を改悪し、日本軍国主義の復活と軍事化を促進しようとするアメリカ帝国主義の策動に反対し断固たたかっていく立場を表明した。

主席は、植民地・半植民地諸国人民の解放闘争と新興独立諸国人民の革命闘争に対する支持、声援も強化するよう導いた。

主席はこの時期、帝国主義侵略に反対してたたかう南部ベトナム、ラオス、コンゴ人民のたたかいを積極的に支持、声援し、帝国主義の植民地従属から解放された発展途上諸国の人民が反帝・

自主の道を引き続き進み、民族の独立を強固にし、新社会の建設を成功裏に進めるようあらゆる面から援助した。特に1959年1月初め、キューバ人民が親米独裁政権を打倒して臨時革命政府を樹立したことを高く評価し、翌年8月にキューバと外交関係を結び、新生活の創造をめざすキューバ人民のたたかいを積極的に支持、声援した。

1960年末にわが国は40余の新興独立諸国と経済関係を結び、70余カ国と文化交流を行った。

主席は、反帝反米の旗を高く掲げ精力的な対外活動を展開して、アメリカ帝国主義の侵略と戦争政策に大きな打撃を与え、社会主義諸国の統一と国際共産主義運動の団結を強化し、植民地民族解放闘争をはじめ世界革命全般の発展に不滅の貢献をした。

第9章　社会主義の全面的建設をめざすたたかい
（1961年1月～1970年11月）

第1節　朝鮮労働党第4回大会、社会主義の全面的建設をめざす綱領的な課題を提示

1960年代初期、朝鮮の革命と建設は新たな発展段階に入った。

金日成（キムイルソン）主席の指導のもとに、社会主義基礎建設の課題が成功裏に遂行された結果、社会主義制度が確立され、自立的な経済基盤を有した社会主義工業・農業国となった。

党と革命発展において新たな歴史的転換期を迎えていた時期、主席は社会主義の全面的建設をめざす新たな雄大な綱領を確定することに心血を注いだ。

主席は、1960年12月の朝鮮労働党中央委員会拡大総会で、第1次7カ年計画の基本的方向、特に最初の3年間に遂行すべき任務にもとづき1961年度計画の基本的課題とその遂行方途を示し、1961年の新年の辞で新たな展望計画遂行に向けた初年度の課題を具体的に示した。そして、同年3月20日から22日まで開かれた朝鮮労働党中央委員会総会で、第4回党大会を9月に招集することを明らかにし、党大会に提出する活動報告を準備する一方、龍城（リョンソン）機械工場と検徳（コムドク）鉱山をはじめ各工場、企業を現地指導しながら、新た

に構想した路線と政策の科学性を再三確認し、新たな展望計画の細部にまで一つ一つ確定した。

主席は、1961年9月11日から18日まで朝鮮労働党第4回大会を招集し、党中央委員会の活動報告を行った。

報告で、社会主義基礎建設の成果を総括し、社会主義の全面的建設をめざす綱領的な課題を示した。

主席は、第1次7カ年計画（1961～1967）の基本的課題を明示した。

金日成主席は次のように述べている。

「7カ年計画の基本課題は、勝利した社会主義制度に依拠して全面的な技術改造と文化革命を遂行し、人民生活を画期的に向上させることであります」

主席は、第1次7カ年計画の部門別課題を示した。

工業部門の中心的課題は、工業生産の構造をさらに完備しその技術的基盤を強化して、多面的に発達し強固な原料基地を確保し、最新技術を装備した自立的工業体系を確立することであった。農業部門の中心的課題は、技術改造を推し進めて農業の機械化を実現し、農業生産をさらに高めることであった。これとともに、科学・文化分野と人民の物質・文化生活分野における中心的課題も示した。

主席は、第1次7カ年計画の課題を成功裏に遂行するためには、重工業を優先的に発展させながら、同時に軽工業と農業を発展させ、科学と文化も全面的に発展させるという党の路線を堅持し、特にチョンリマ大進軍の速度を高めて、継続革新、継続前進しなければならないと強調した。

主席は次いで、4月人民蜂起後の南朝鮮の新たな情勢の要請に

応じて、祖国統一を早めるための闘争課題を示した。

主席は、報告期間における党建設分野での成果と経験を全面的に総括し、党を強化し、その指導的役割を高めるための課題を示した。

幹部陣容を引き続きしっかりと固め、彼らの指導水準を一段と高める問題を前面に打ち出し、党員の党生活の拠点であり党の基層組織である初級党組織と各級党委員会を強化し、党の唯一的指導を保障するようにした。また、党活動の方法と作風を改善し、特に党活動においてチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を具現しなければならないと強調した。

主席は、党の統一・団結をさらに強化することを重要な課題として示した。

主席は次いで、対外関係分野で得た成果を総括し、朝鮮労働党の自主的で原則的な対外政策を貫くための課題を提示した。

そして、アメリカ帝国主義と日本軍国主義に対するわが党の原則的立場を明らかにし、社会主義諸国と世界の革命的人民に反帝反米闘争を積極的に展開するよう呼びかけた。

大会では、人民経済発展第1次7カ年計画に関する決定と祖国の自主的平和統一促進に関する宣言を採択し、党と革命の新たな要請に即して党規約の一部を修正、補足した。

大会は全党員と人民軍将兵、人民の一致した念願と意思により、主席を再び朝鮮労働党中央委員会委員長に選出した。

第4回党大会を契機に、社会主義建設をめざす朝鮮労働党と人民のたたかいに新たな局面が開かれた。

第2節　新たな社会主義経済管理システムの確立

金日成主席は第4回党大会以後、全党と全人民を第1次7カ年計画の遂行へと導き、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法を具現して経済管理と党活動を改善することに力を傾けた。

主席はまず、新しい社会主義経済管理システムを確立するたたかいを導いた。

すでにチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を創造する過程で、それを人民経済各部門の指導・管理において全面的に具現する構想を練っていた主席は、精力的に思索と探求を重ね、1961年11月下旬から12月初旬にかけて開かれた朝鮮労働党中央委員会第4期第2回拡大総会で、同年の工業部門に対する指導と管理・運営上の欠陥を分析し、省、管理局の経済指導水準を高め、企業の管理・運営を改善することを重要な課題として示した。

主席はまず、工業部門に新たな社会主義経済管理システムを確立することに深い関心を払った。

1961年12月上旬、国の経済発展と技術革命の遂行において重要な位置を占める大安（テアン）電機工場へ出向き、労働者と技術者、幹部と話し合い、会議にも参加した。そして、各職場と寮、食堂、住宅地区を見て回り、工場の党活動から生産指導、設備の状態や資材供給の状況、工場の機構体系と各部署の役割、技術者の活動状況と労働者の暮らし向きに至るまで、すべてをつぶさに確かめた。

こうして工場の管理・運営上の非合理性を把握した主席は、このような欠陥が普遍的なものであるかを確認するため、平壌（ピョンヤン）紡

織工場の実情と機械工業総局の機構についても検討した。

これにもとづいて、主席は1961年12月15日、朝鮮労働党中央委員会政治委員会拡大会議で大安電機工場に対する指導状況を総括し、新たな工業管理体系を確立するとの課題を示し、16日には大安電機工場党委員会拡大会議を開き、新たな工業管理システムであるテアン（大安）の事業体系を打ち立てる画期的な措置を講じた。

従来の支配人唯一管理制を廃止し、工場党委員会の集団指導のもとに工場を管理、運営する体系と統一的で集中的な生産指導体系、資材を上部から下部へ供給する資材供給体系、生産者大衆の生活を全面的に責任をもって保障する整然とした給養体系を打ち立てた。

主席は、1961年12月下旬には安州（アンジュ）炭鉱を、翌年の1月と8月に平壌紡織工場と黄海（ファンヘ）製鉄所を現地指導し、9月には機械工業部門の幹部協議会を指導しながら、工業部門においてテアンの事業体系を確立するたたかいを力強く推進し、それが実生活で効力を発揮するようにした。

1962年11月の上旬、再び大安電機工場へ出向いた主席は、工場党委員会拡大会議を開き、テアンの事業体系の創設以来1年間の成果と経験を総括し、『テアンの事業体系をいっそう発展させるために』と題する演説を行った。

主席はこの演説をはじめ一連の著作で、テアンの事業体系の本質とその優越性を全面的に明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「テアンの事業体系は、工場、企業が党委員会の集団的指導の

もとにすべての経営活動を行い、政治活動を優先させ、生産者大衆を奮い立たせて提起された経済課題を遂行し、上部が責任をもって下部を援助し、経済を科学的に、合理的に管理・運営する社会主義制度の本質にかなった立派な経済管理体系であります」

主席は、社会主義農業を企業形態で指導する新たな農業指導体系を確立した。

1961年12月、朝鮮労働党中央委員会政治委員会拡大会議で、新たな工業管理体系とともに新たな農業指導体系を確立する課題を示した主席は18日、そのモデルケースをつくるため、国の穀倉地帯の一つであり、郡内経済において農業が圧倒的な比重を占める平安南道肅川郡へ出向いた。

そして、郡の営農状況と農業の管理・運営および技術水準、農村の物質的・技術的土台などを全面的に把握し、郡人民委員会から農業指導の機能を分離し、農業を専門に指導する機関として郡協同農場経営委員会（当時の郡農業協同組合経営委員会）を新設するとともに、農業技術者と農業部門の国家企業所を集中させ、郡協同農場経営委員会が協同農場を指導する機能と農業への物質的・技術的援助を実現する機能を果たすようにした。

主席は、全国の市、郡に協同農場経営委員会を組織する一方、農業に対する科学的・技術的指導を強化するため、各道に道農業経営委員会を新設し、農業省を農業委員会に改組した。こうして、中央から地方に至るまで、整然とした社会主義農業指導体系が確立されたのである。

主席は、社会主義経済本来の要求にかなった科学的な人民経済計画化システムを打ち立てるよう指導した。

1964年3月、人民経済計画化システムを改めるという内閣決定を採択させ、翌年の9月23日には国家計画委員会の党総会で、計画の一元化、細部化体系を確立し、その優越性を発揮させる過程で提起される問題について詳細に説明し、この活動をきめ細やかに指導した。

計画の一元化、細部化の実施によって、計画化には根本的な転換がもたらされ、社会主義経済管理システムが確立されるようになった。

第3節　経済建設と国防建設を並進させる戦略的方針を提示、自衛的国防力を強化するための闘争

アメリカ帝国主義は1962年10月、革命的なキューバ共和国に対する強盗さながらの封鎖を実施し、これにより世界を揺るがすカリブ海危機が起きた。

一方、アメリカ帝国主義は侵略戦争の矛先をアジアにも向け、日本軍国主義者と南朝鮮軍事ファシスト一味を結託させようと策動しながら、共和国に対する侵略戦争の準備に狂奔した。

アメリカ帝国主義の狂気じみた新たな戦争挑発策動によって、朝鮮にはいつ戦争が起こるか分らない一触即発の情勢がつくりだされた。

こうした情勢は、経済建設を推進しながら国防力をいっそう強化するための決定的な対策を講じることを切実に求めた。

金日成主席は、当面の情勢に対処して1962年12月、朝鮮労働党

中央委員会第4期第5回総会を招集した。

主席は会議で、革命の獲得物を自らの力で守ろうとせず、他国に依存しようとしてはならない、何としても自力で祖国を守るべきであるとして、経済建設と国防建設を並進させるという戦略的方針を示した。

そして、銃重視、軍事優先の原則を具現したわが党の軍事路線の主要内容を明示し、「片手には銃を、片手には鎌とハンマーを！」という戦闘的スローガンを示し、全人民は党の新たな戦略的方針の貫徹にこぞって立ち上がろうと呼びかけた。

総会後、主席は自衛的国防力を強化する活動を精力的に指導した。国防において自衛の原則を堅持し、全党、全軍、全人民を国防力の強化をめざすたたかいに奮起させた。

まず、国防力において中枢的力量である人民軍を「一当百」の革命武力に強化することに第一義的な力を注いだ。

1963年2月6日、最前線の大徳（テドク）山軍営を訪ね、「一当百」の戦闘的スローガンを示した。

金日成主席は次のように述べている。

「人民軍が掲げるべきスローガンは『一当百』です。古来いくさに長けた将帥を『一当百』と言いましたが、これは一人が百人にかなうという意味です。軍人が政治的、思想的にしっかり武装し、戦闘訓練と防御工事を着実にすれば『一当百』になれます」

「一当百」のスローガンは、人民軍の幹部化、近代化を推し進め、すべての軍人を政治的、思想的に、軍事技術的にしっかり準備された強兵に鍛え上げる建軍方針であった。

主席は、すべての軍人を「一当百」のつわものに鍛えるために、

まず彼らを政治的、思想的にしっかり武装させることに第一義的な関心を向けた。

革命が長期性と困難さを帯び、搾取され抑圧されたことのない新しい世代が社会の主人公として登場し、祖国防衛の前哨に立っている状況に照らして、軍人の間で階級的教育を強化することに大きな力を入れた。

1963年2月8日、人民軍部隊の政治担当副連隊長以上の幹部および現地の党、政権機関の幹部に行った演説『わが人民軍は労働者階級の軍隊、革命の軍隊である。階級的政治教育を引き続き強化しなければならない』で、階級的教育を軍隊内の政治活動において最も重要な課題の一つとして提起し、現実発展の要請に応じて、かつてアメリカ帝国主義と日本帝国主義が朝鮮人民に犯した野獣じみた蛮行と侵略的本性、そして地主、資本家の搾取者的本性を軍人に教え、資本主義制度の腐朽性と社会主義制度の優越性を正しく認識させる教育を強化するよう強調した。

また、軍隊内で「一人はみんなのために、みんなは一人のために！」というスローガンのもとに1960年8月に始まった赤旗中隊運動を全軍に拡大し、「一当百」の建軍方針が貫徹されるようにした。

そして、軍人を「一当百」のつわものに鍛えるために軍事訓練を強化するようにし、多くの人民軍部隊と区分隊、訓練場を訪れて具体的に指導した。

主席は、1964年7月下旬、中央砲射撃場へ出向いて軍人たちの射撃訓練を指導し、翌年5月上旬には峻嶺を越えて前哨の一区分隊を訪ね、空挺隊との戦法も教えた。そして、1966年2月には朝

鮮人民軍第865軍部隊第1中隊の軍人と打ち解けた雰囲気の中で話し合い、戦闘・政治訓練を着実に行って部隊の戦闘力を一段と強めるよう励まし、翌年の6月初めには歩兵、砲兵、専門兵区分隊と飛行区分隊の戦闘射撃を組み合わせた区分隊の攻撃戦術演習と空挺区分隊の戦術演習を現地で指導した。

そして、陣地を要塞化する活動を積極的に推し進めたことで、人民軍の各部隊、区分隊の陣地はすべて鉄壁の要塞に打ち固められた。

主席は人民軍を「一当百」の革命武力に強化するため、武力装備の近代化に力を入れた。

全軍の近代化において基本となるのは、人民軍の武力装備の強化であり、これは国防科学と国防工業の発展によってのみ確固と裏打ちされる。

主席は、すでに1961年12月下旬、朝鮮労働党人民軍委員会第2期第2回拡大総会で、社会主義経済建設の全面的な進捗に合わせて人民軍の武力装備の近代化で革新を起こし、機械化、自動化の方向へ進む課題を示した。

こうして、自動短銃の生産から出発した朝鮮の国防工業は、各種の近代兵器と戦闘技術機材を自力で十分に生産できる自立的国防工業へと発展するようになった。

主席は国防力を強化するため、全人民を武装させ、全国土を要塞化することに深い関心を払った。

主席は、全人民武装化のために1959年1月14日に創建した労農赤衛隊を党の強力な民間軍事組織に強化、発展させた。1962年12月下旬の朝鮮労働党中央軍事委員会拡大会議で、労農赤衛隊を強

化するための課題と方途を示し、1964年1月中旬には、各道・市・郡労農赤衛隊の幹部連席会議を開き、労農赤衛隊を強化する措置を講じた。さらに、労農赤衛隊を強化するために除隊軍人をはじめ優秀な青壮年でその隊伍をしっかりと打ち固め、整然とした指導体系を確立し、労農赤衛隊の訓練で解決を要する問題を一つ一つ解決した。

主席は、1970年9月12日に青年学生で半軍事組織である赤の青年近衛隊を組織し、軍事訓練を定期的に行えるよう、市、郡（区域）の訓練に適したところに赤の青年近衛隊の野営所を設置するようにした。

こうして、労農赤衛隊員と赤の青年近衛隊員は、片手には鎌とハンマー、ペンを握って生産と建設、学習を行うと同時に、片手には銃剣をしっかり握りしめて社会主義祖国防衛の任務を立派に遂行する、頼もしい戦闘員に鍛えられた。

主席は、全国土の要塞化の方針を徹底的に貫徹して全国を難攻不落の要塞に変貌させた。

主席は、1963年10月、金日成軍事大学の第7期卒業式で行った演説をはじめ一連の機会に、全国土の要塞化の基本的原則を示し、至るところに坑道を設け、前線地帯、後方地帯を問わず全国土を要塞化し、対空防御と海岸防御も強化し、地下工場も数多く建設するようにした。

全人民武装化、全国土の要塞化が力強く推進されたことで、有時の際には全人民が銃を手に取って人民軍とともに同じ塹壕でたたかうことができるようになり、全国が敵のいかなる攻撃にも微動だにしない難攻不落の要塞に変貌した。

主席の先軍革命指導によって人民軍は「一当百」の革命武力に強化され、人民軍を中核とする全人民的・全国家的防衛体系が確立されて、朝鮮の自衛的国防力は敵のいかなる軍事的挑発をもことごとく粉砕し、社会主義祖国の安全と革命の獲得物をしっかり守ることができるようになった。

アメリカ帝国主義は1968年1月、武装情報収集艦「プエブロ」号を朝鮮の領海に不法侵入させてスパイ行為を働き、朝鮮人民軍海軍によって拿捕されると「報復」すると広言し、核空母をはじめおびただしい数の軍艦や航空機を朝鮮東海と南朝鮮に集結させ、艦船と乗組員を即刻返還しなければ共和国を攻撃すると威嚇した。

主席は、軍隊と人民の力、自衛的国防力を強く信じ、アメリカ帝国主義の強硬措置には超強硬措置をもって断固応戦する決心をし、1968年2月8日の歴史的な演説で、アメリカ帝国主義者の「報復」には報復で、全面戦争には全面戦争で応えるということを内外に宣言した。

鋼鉄の総帥の断固たる警告に気をくじかれたアメリカ帝国主義は、やむなくひざを屈して朝鮮に謝罪せざるを得なかった。

その後もアメリカ帝国主義は大型偵察機「ＥＣ―121」を侵入させるなど朝鮮に対する密偵・破壊行為を続けたが、朝鮮人民軍はそのつど彼らに断固たる懲罰を加えた。

これは、主席の先軍指導の輝かしい勝利であり、経済建設と国防建設を並進させるという朝鮮労働党の革命的路線の正当性とその巨大な生命力、「一当百」に鍛え上げられた人民軍の不敗の威力の誇示であった。

第4節　社会主義農村問題に関するテーゼの発表、農村テーゼ貫徹のためのたたかい

社会主義社会において農村問題を正しく解決することは、社会主義建設の合法則的要求、戦略的問題として提起される。農民問題、農業問題を正しく解決してこそ、農村の後進性を一日も早くなくし、人民経済の急速な発展と人民生活の系統的な向上をもたらすとともに、都市と農村間の差、労働者階級と農民間の階級的差を解消し、社会主義の完全な勝利を達成することができるのである。

農村問題をどのように解決するかということは、社会主義の偉業を固守し、前進させていけるかどうかという重大な問題として提起されていた。

金日成主席は、1963年12月下旬、朝鮮労働党中央委員会部長全員会議で、社会主義農村問題の解決において提起される原則的問題とその解決方途を明らかにした。そして、それを社会主義農村建設に具現していく過程で、その正当性と生命力を証明した。

主席は1964年2月25日、朝鮮労働党中央委員会第4期第8回総会で、不朽の古典的著作『わが国における社会主義農村問題に関するテーゼ』を発表した。

主席は、テーゼで社会主義農村問題の本質を明らかにした。

社会主義下での農民問題と農業問題は、農村に打ち立てられた社会主義制度を絶えず強化し、それにもとづいて農業生産力を高度に発展させ、農民の生活を豊かにし、搾取社会が残した農村の後進性を一掃し、都市と農村との差を次第になくすことである。

主席はテーゼで、社会主義下における農村問題の円滑な解決のための基本的原則を明示した。

金日成主席は次のように述べている。

「社会主義のもとにおける農民問題と農業問題を成功裏に解決するためには、必ず農村活動において3つの基本的原則を堅持しなければならない。

第1に、農村で技術革命と文化革命および思想革命を徹底して遂行すべきであり、

第2に、農民に対する労働者階級の指導、農業に対する工業の援助、農村に対する都市の支援を全面的に強めるべきであり、

第3に、農業の指導と管理を絶えず工業の先進的な企業管理の水準に接近させ、全人民的所有と協同的所有の結びつきを強め、協同的所有を絶えず全人民的所有に接近させるべきである」

主席は社会主義の農村問題を解決するためには、まず農村で思想、技術、文化の3大革命をあくまで遂行しなければならないと指摘している。

社会主義制度の確立後、搾取社会の遺物である農村の後進性は、農業の物質的・技術的基盤が工業に比べて弱く、農村住民の文化水準が都市住民より劣り、農民の思想・意識も労働者より低い点に表われている。この後進性によって、農業では協同的所有が支配的形態となり、労働者階級と農民間の階級的差が残る。従って、社会主義制度の確立後、農村の後進性をなくし、農村問題を正しく解決するためには、農民を古い思想と技術、文化の束縛から解放するための思想、技術、文化の3大革命を力強く推し進めなければならない。

次に主席は、農民に対する労働者階級の指導、農業に対する工業の援助、農村に対する都市の支援を全面的に強めるべきであると指摘している。

主席は、労働者階級の党と国家は協同農場の発展と農民の生活を責任をもって見守るべきであるという根本的立場を新たに示した。そして、朝鮮のようにかつて立ち後れた農業国であった国は、一定の期間、社会主義的工業化に必要な資金はある程度、農村に依存しなければならないが、社会主義的工業化の基礎が築かれた後は、工業が農業を支援する方向に変え、農村を全面的に支援しなければならず、労働者階級は農民を政治的、思想的のみならず、技術的に、文化的に、財政的にも援助すべきであると説いた。

主席は、農業に対する指導と管理を工業の先進的な企業管理水準に引き上げ、協同的所有を絶えず全人民的所有に近づけなければならないと指摘した。

農業に対する指導と管理を改善する基本的方向は、農業協同経営の管理・運営方法を工業の進んだ企業管理方法に絶えず近づけさせることであるとし、協同的所有を全人民的所有に移行させるためには、工業と農業間の緊密な生産上の連係を強め、協同的所有に対する全人民的所有の指導的役割を絶えず高める方向で二つの所有を有機的に結びつけるべきであると指摘した。

主席はテーゼで、社会主義農村建設における地域的拠点に関する思想を提示した。

それによって、農村に対する統一的指導の単位と拠点が備えるべき諸条件が解明され、朝鮮では郡が農村と地方の活動全般を直接、統一的に、総合的に指導する地域的単位、拠点となることが

明らかにされた。

主席はテーゼ発表後、その貫徹のための活動を力強く推し進めた。

まず、農村を政治的、思想的に強化することに第一義的な関心を向け、農村の党組織をしっかり固めてその機能と役割を高め、農民の間で思想革命を強めて彼らを革命化、労働者階級化する活動を強力に推進した。

主席は、農村を物質的、技術的に強化し、農民の文化・技術水準を高める活動に大きな力を注いだ。

1964年3月下旬に開かれた最高人民会議第3期第3回会議で、協同農場の経済的基盤を強め、農民の生活を向上させるための法令を採択して、農業現物税を1964年から1966年までの間に全廃し、農場のすべての基本建設と文化厚生施設、住宅の建設を国家が負担し、重要設備と各種農業機械も国家が提供するようにした。同時に、農村技術革命を積極的に推進して干害や水害を防止できる水利体系を立て、全国の里で電化を実現し、トラクターをはじめ近代的な農業機械と化学肥料、農薬を量産して農村に提供するようにした。また、農村の文化革命を強く展開して農民の一般知識水準と技術・文化水準を高め、技術幹部養成事業を強化するようにした。

主席は、農業に対する指導と管理の改善に深い関心を払った。

郡協同農場経営委員会を優秀な活動家で固める一方、彼らの指導水準と指導方法を絶えず改め、協同農場を企業式の方法で指導するようにし、特に1965年5月11日には江原道淮陽郡浦泉（カンウォン　フェヤン　ポチョン）協同農場を現地指導しながら分組管理制を設け、同年11月中旬に行われた朝鮮労働党中央委員会第4期第12回総会で、それを全国の協

同農場に広める措置を講じた。

分組管理制は、農民が集団経営の主人としての高い自覚をもってその管理・運営にすすんで参加できるようにする立派な生産および労働組織形態であり、彼らの間で社会主義思想、集団主義精神を培う最も合理的な集団生活の細胞である。

主席は、社会主義農村建設の全般的問題を解決するため、郡を立派に整備し、その役割を高めることに力を入れた。

そして、1968年9月の朝鮮労働党市・郡委員会責任書記協議会をはじめさまざまな機会に、郡を立派に整備しその役割を高めるよう強調し、郡党委員会と郡行政・経済機関を整備してその機能と役割を高め、地方産業を発展させ、商業流通網を整備し、教育機関と文化・厚生施設を充実させるようにした。

こうして、社会主義農村建設と国の全般的活動において郡の役割はいっそう高まり、農村問題を成功裏に解決するための拠点が築かれた。

第5節　勤労者団体の活動を改善し、幹部の党性、労働者階級性、人民性を強めるための活動

金日成主席は社会主義建設の深化、発展に伴い、勤労者団体の活動を改善する事業を指導した。

朝鮮に社会主義制度が確立され、搾取階級が一掃されて勤労人民大衆があらゆるものの主人となった新しい環境は、それに即して勤労者団体の任務と役割を新たに規定し、その活動体系を改め

ることを切実に求めていた。

主席は1964年6月下旬、朝鮮労働党中央委員会第4期第9回総会での結語『勤労者団体の活動を改善、強化するために』をはじめ一連の著作で、社会主義社会において勤労者団体の役割を強化するよう強調し、その性格と任務を新たに示した。

まず、社会主義社会で勤労者団体の役割をさらに強めることについて明示した。

金日成主席は次のように述べている。

「…勤労者団体は広範な大衆に対する思想教育団体であり、党の外郭団体であります」

主席は、確立された社会主義制度の要求に即して勤労者団体の組織形式と活動体系を改善する活動を指導した。

まず民主青年同盟を社会主義労働青年同盟に改組した。

社会主義革命が勝利した後、すべての青年は社会主義的勤労青年となり、社会主義建設の進展に伴い、彼らの生活と思想的・精神的品格に根本的な変化が起きた。こうした現実は、解放後民主主義の旗のもとに青年を結集した組織を社会主義の旗のもとに新たに発展させることを求めていた。

主席は1963年5月、関係部門の幹部を呼び、民主青年同盟を社会主義労働青年同盟に改組する方針を示し、翌年5月の朝鮮民主青年同盟第5回大会で、朝鮮民主青年同盟を朝鮮社会主義労働青年同盟に改組する措置を講じた。

大会に臨席した主席は、青年をチュチェ思想と党の政策で武装させる政治・思想教育を強化することを社会主義労働青年同盟の中心課題として提示し、すべての青年が党の指導に限りなく忠実

であるべきであると強調した。

主席は、農業勤労者の新たな大衆的政治組織である農業勤労者同盟を組織するよう指導した。

それまで存在した農民同盟は貧農が中心となって地主、富農に反対してたたかった農民の組織であった。しかし、それは地主、富農が一掃され、かつての個人農が社会主義的勤労者となり、社会主義農村建設が当面の革命課題として提起されるようになった現実にはそぐわないものとなった。

主席は党中央委員会第4期第9回総会で、農業勤労者同盟を新たに組織する方針を示し、1965年3月25日、農民同盟を発展的に解体し、農業勤労者同盟を創立した。

農業勤労者同盟は、協同農場員だけでなく国営農牧場と農業に直接奉仕する国家機関、企業の労働者、事務員を網羅する農業勤労者の全く新しい社会主義的大衆的政治組織であった。

主席は、農業勤労者同盟の基本的任務は、農村において思想革命、技術革命、文化革命を成功裏に推進するため、農民の間で思想教育を行って彼らの革命的熱意を発揮させることであり、重要な課題は農村テーゼを貫徹することであると教えている。

主席は、職業同盟の活動において新たな活動体系を打ち立てるようにした。

党中央委員会第4期第9回総会で職業同盟の活動を改善する措置を講じ、職業同盟を労働者と職業同盟員を革命的に教育して党の周りに結束させ、党の示した政治的・経済的課題の遂行へと立ち上がらせる真の思想教育団体に変え、活動体系もそれに合ったものにした。

主席は1965年9月、朝鮮民主女性同盟第3回大会で行った演説をはじめさまざまな機会に、女性同盟の活動体系を改善する対策を講じ、女性を真の革命家、次世代に対する立派な教育者にし、社会主義建設に大いに参加させるようにした。

また、勤労者団体の組織形式と活動体系の改善に伴い、その役割をさらに高めるよう指導した。

主席は1968年10月11日、職業同盟、農業勤労者同盟、社会主義労働青年同盟、女性同盟中央委員会の活動家に行った演説『勤労者団体の役割をいっそう高めるために』で、発展する現実の要請に応じて勤労者団体の役割を高めるための課題を示した。

主席は、党とその外郭団体である勤労者団体を桃の核と果肉の関係にたとえ、各級党組織が勤労者団体組織に対する党の指導を強化し、その自立性を強め、勤労者の革命化、労働者階級化を着実に進め、勤労者団体の中核隊伍をしっかり固めるよう強調した。

こうして勤労者団体の活動はいっそう改善され、広範な大衆が党の周りに結集して社会主義建設を強力に推進することができるようになった。

主席は幹部の党性、労働者階級性、人民性を高め、活動方法と作風を改善するよう指導した。

主席は1964年12月中旬、朝鮮労働党中央委員会第4期第10回総会で、幹部の党性、労働者階級性、人民性を高め、活動方法と作風を改善する課題を提示し、幹部の党性、労働者階級性、人民性は党の路線と政策を実行するための実際の闘争と、労働者、農民、勤労インテリのための実際の活動成果に表われなければならないと指摘した。また、幹部の党性、労働者階級性、人民性を高める

ためには、彼らを党生活、特に細胞生活に真摯に参加させなければならないとし、幹部は地位のいかんを問わず誰もがみな細胞会議と学習会に誠実に参加し、意識的に党組織の統制を受け、批判にすすんで参加すべきであると強調した。

主席は幹部の活動方法を改善する課題を示した。

大衆路線にもとづく活動方法、政治活動を優先させて大衆を奮起させる活動方法は、革命闘争においても経済建設においても必要なものであるとし、幹部はテアンの事業体系とチョンサンリ方法の要求どおり、政治活動をあらゆる活動に優先させ、大衆を奮起させて革命課題を遂行し、常に現地に出向いて下部の活動家を教え、実のある支援をすべきであると強調した。

総会後、主席は幹部の党性、労働者階級性、人民性を高め、活動方法と作風を改善するため、1965年1月には金属化学工業省の党総会と貿易省の党総会、2月と3月には高等教育省の党総会と国家建設委員会の党総会など各省、局の党総会を指導して、幹部の党性、労働者階級性、人民性を高める対策を講じた。

主席は1965年1月、幹部たちを伴って黄海(ファンヘ)製鉄所と殷栗(ウンリュル)鉱山、降仙(カンソン)製鋼所をはじめ各工場、企業を現地指導し、下部の指導において堅持すべき諸原則と指導方法を身をもって具現した。

主席の指導のもとに、幹部の間で党性、労働者階級性、人民性を高め、革命的活動方法と人民的活動作風を確立するための闘争が全党的に展開され、幹部の思想観点と活動態度、活動方法と作風に根本的な変化がもたらされ、社会主義の全面的建設は急ピッチで進められるようになった。

第6節　朝鮮労働党代表者会議、党の唯一思想体系を確立し、全社会を革命化、労働者階級化するたたかい

1960年代の半ばごろ、朝鮮革命の国際的環境は極めて複雑であった。

アメリカ帝国主義は、社会主義諸国に対する侵略策動にいっそう狂奔し、植民地・半植民地諸国人民の民族解放運動を弾圧し、世界各地で平和を乱していた反面、社会主義諸国と国際共産主義運動は団結して反帝闘争を展開できない状態にあった。

こうした状況は、すべての党員と勤労者を思想的にしっかり武装させ、彼らが主体的立場に確固と立ち、党に従って革命の道を揺るぎなく歩み続けることを切実に求めていた。

金日成主席は1966年10月5日から12日まで朝鮮労働党代表者会議を開催し、『現情勢とわが党の任務』と題する報告を行い、朝鮮革命と世界革命を発展させるための路線と戦略的・戦術的方針を示した。

金日成主席はまず、国際共産主義運動と世界革命全般を発展させるための世界革命の基本的戦略について次のように述べている。

「今日、世界革命の基本的戦略は、アメリカ帝国主義に主な矛先を向けることであります」

主席は、世界革命の基本的戦略を貫くためには、各国の革命的人民がアメリカ帝国主義と妥協することなくたたかう原則的立場を堅持し、アメリカ帝国主義とたたかおうとしない左右の日和見主義にともに反対してたたかうべきであると述べた。また、国際

革命勢力をそれぞれ撃破しようとするアメリカ帝国主義の戦略に対処してアジアとヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカ、そして大国と小国を問わず、世界のすべての地域、すべての戦線でアメリカ帝国主義に打撃を加え、勝手に行動できないようその手足を縛り上げるべきであると強調した。同時にアメリカ帝国主義の同盟者、特に日本軍国主義と西ドイツ軍国主義に反対してたたかい、すべての社会主義諸国と平和愛好人民がアメリカ帝国主義の侵略に反対してたたかっているアジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民の反帝反植民地主義闘争を極力支持、声援すべきであると述べた。

そして、左右の日和見主義を克服し、社会主義諸国の統一と国際共産主義運動の団結を成し遂げるうえでの原則と方途を示した。

主席は、国際共産主義運動の団結を成し遂げるためには、反帝共同行動と反帝統一戦線を実現すべきであるとし、重要なのは共産党、労働者党が自主性を堅持することであると強調した。

そして、自主性を守るためには、兄弟諸党が相互の準則を厳守し、他国の党に自己の見解と路線を強要したり、他国に盲従したりしてはならないと指摘した。

また、平等と自主性にもとづいて団結、協力し、国際的連帯を強めながら自主性を堅持していくことが兄弟党、兄弟諸国との関係でわが党が一貫して堅持している確固不動の方針であると強調した。

主席は次に、朝鮮での社会主義建設を促し、革命基地を強化するうえで提起される重要な問題を明らかにした。

主席は、経済建設と国防建設の並進路線を貫徹すべきであると

強調し、経済建設と国防建設において当面提起される重要な課題を示した。主席は、特に国防力を強化するために、軍隊と人民を政治的、思想的に鍛え、それにもとづいて全軍幹部化、全軍近代化、全人民武装化、全国土の要塞化を基本的内容とする党の軍事路線を引き続き堅持し、あくまで貫徹するよう強調した。

主席は、革命隊伍を政治的、思想的にしっかり固めるためには、人民大衆の政治的・思想的統一を強化することと敵対分子との階級闘争を正しく結びつけるべきであると指摘し、全社会を革命化、労働者階級化するという方針を示した。

主席は全社会の革命化、労働者階級化を社会主義制度が樹立された後、労働者階級の党と国家に提起される重要な革命課題とし、労働者階級の指導的役割を絶えず高め、労働者階級を手本にして農民とインテリを教育、改造すべきであると指摘した。

また、情勢に即して社会主義建設の事業全般を改め、国防建設を強化するとともに、これに合わせて7カ年計画を3年間延ばすことにした。

党代表者会議の後に開かれた朝鮮労働党中央委員会第4期第14回総会では、党中央委員会委員長と副委員長の職名を総書記と書記に改めた。

主席は全党、全軍、全人民の一致した意思と念願により、朝鮮労働党中央委員会総書記に推戴された。

主席は党代表者会議後、党の唯一思想体系の確立に第一義的な関心を払った。

主席は1967年3月に行われた道・市・郡および各工場の党責任書記協議会で党の唯一思想体系を確立するよう強調し、同年5月4

日から8日までの朝鮮労働党中央委員会第4期第15回総会で、全党に唯一思想体系を確立する措置を講じた。

主席はこの総会での結語と、1968年1月3日に党の思想活動部門の活動家に行った演説など一連の著作で、党の唯一思想体系を確立するに当たっての原則的問題を全面的かつ詳細に示した。

主席は、党の唯一思想体系を確立するということは領袖の革命思想、党の政策で全党を武装させ、すべての党員を領袖の周りに堅く団結させて革命闘争を進めていくことを意味すると述べている。

労働者階級の革命闘争と建設事業で決定的な役割を果たすのは領袖である。領袖は労働者階級の党の最高頭脳であり、団結の中心である。領袖は革命の指導思想を創始し、路線と政策、戦略と戦術を策定し、広範な人民大衆を意識化、組織化して強力な革命の主体を整え、勤労者大衆のたたかいを勝利に導く。

労働者階級の党は領袖が創立、指導し、領袖の思想と指導を実現するための武器である。したがって、労働者階級の党内には一つの思想、一つの中心、一つの指導があるのみである。もし党内に雑多な思想が存在したり、領袖を中心とする統一と団結がなされず、領袖の指導が確固としたものでなければ、その党は実際には一つの党とは言えない。

主席は、党の唯一思想体系を確立する方途を明らかにした。

党の唯一思想体系を確立するためには、党員と勤労者の間でチュチェ思想教育を強化して、彼らが領袖を高く仰ぎ、領袖を政治的、思想的に、生命を賭して守り、領袖の思想とその具現である党の路線と政策を自らの血とし肉とし、領袖の思想以外にはいかなる思想も受けつけない、という確固たる信念を持つようにしな

ければならず、同時に、党の路線と政策を断固擁護しあくまで実行する革命的気風を確立し、全党、全国、全軍が領袖の唯一的指導のもとに一糸乱れず行動する強い組織規律を打ち立てなければならない、と指摘した。

主席は、党員と勤労者の間で党の唯一思想体系を確立する活動を強力に推進した。

まず、唯一思想教育を強化する積極的な対策を立てた。

主席は、1968年6月中旬の朝鮮労働党咸鏡（ハムギョン）北道委員会、清津（チョンジン）市委員会連合拡大総会をはじめ一連の会議で、党の唯一思想体系の確立において基本とすべきことは、わが党の思想でしっかり武装することであるとし、党員と勤労者を党の革命思想、チュチェ思想で武装させ、党に対する忠実性の教育を党の思想教育の第一工程にすべきであると強調した。そして、唯一思想教育の強化のために党の学習綱領を改編し、党および勤労者団体の教育網を再整備し、党幹部養成機関の事業を改め、現職幹部を対象にした1カ月間講習を制度化した。同時に、唯一思想教育の拠点を整備し、各種の革命的出版物を多く発刊させた。

また、党の唯一思想体系を確立する活動を、党員の党生活を強化し、革命課題を遂行する実践活動と緊密に結びつけて着実に行うよう導いた。

主席は、党の唯一思想体系を確立する活動を推し進めながら、社会主義建設において提起される理論的問題についても科学的に解明した。

主席は、1967年5月25日に発表した古典的著作『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』と、

1968年9月7日に発表した古典的著作『朝鮮民主主義人民共和国は朝鮮人民の自由と独立の旗じるしであり、社会主義・共産主義建設の強力な武器である』などで、これらの問題について全面的かつ深奥な科学的・理論的解明を与えた。

まず、過渡期とプロレタリアート独裁の問題について深奥かつ理論的に解明した。

主席は、われわれが社会主義建設を進めて中産階層をわれわれの側に完全に獲得することができたとき、労働者階級と農民との差異をなくし、無階級社会を建設することができたとき、資本主義から社会主義への過渡期の任務が遂行されたと言える、と述べている。

金日成主席はまた、社会主義の完全な勝利と最終的勝利に関する理論を提示し、完全に勝利した社会主義社会の表徴について次のように述べている。

「敵対階級の策動があり、古い思想の腐食作用が続き、都市と農村の差、労働者階級と農民の階級的差が残っており、国の工業化が完全に実現せず、社会主義の強固な物質的・技術的土台が築かれていない社会は、まだ完全に勝利した社会主義社会とは言えません」

主席は、階級の敵に対する独裁を強化し、思想革命を遂行して全社会を革命化、労働者階級化し、農村問題を最終的に解決し、協同的所有を全人民的所有の水準にまで引き上げ、社会主義経済建設を力強く推し進めることを、社会主義の完全な勝利を達成するための課題として示した。

そして、社会主義の最終的勝利は、外部からの帝国主義者の侵

略と資本主義復活の企図が最終的になくなったときに達成されるのであり、社会主義の最終的勝利を達成するためには、自らの主体的革命勢力を強化するとともに、世界社会主義革命の他の部隊の積極的な支援を受けなければならず、全世界の労働者階級と被抑圧人民との真の国際主義的連帯を強めなければならないと指摘した。

主席はまた、革命隊伍をしっかり固めるために全社会を革命化、労働者階級化する活動を指導した。

まず、社会のすべての構成員を革命化することに力を注いだ。

主席は、党の中核となる力であり、革命の指揮メンバーである幹部の革命化をあくまで優先させた。

1966年10月中旬、朝鮮労働党中央委員会組織指導部、宣伝扇動部の活動家に行った演説で、幹部の革命化において提起される原則的な問題を明らかにし、彼らの間で革命化のために力強くたたかうようにし、1970年6月末から7月上旬まで開かれた朝鮮労働党中央委員会第4期第21回拡大総会を契機に、この活動をさらに深化させた。

同時に労働者階級の革命化と農民の革命化、労働者階級化も強力に推進した。

主席は、労働者階級の間で唯一思想教育と組織生活を強化し、彼らを革命実践を通して絶えず鍛え、1967年6月に咸興（ハムフン）地区を、翌年の5月には大安、岐陽（キヤン）地区を現地指導し、全社会の革命化において労働者階級が模範となるよう導いた。

また、1967年2月初め、全国農業活動家大会で農民を革命化、労働者階級化する具体的な課題と方途を示し、農村で思想・技

術・文化革命を積極的に展開し、農民を組織生活と社会主義的共同労働を通じて鍛え、彼らの思想的・精神的品格と社会経済的地位を労働者階級に近づけるようにした。

知識人の革命化、労働者階級化に深い関心を向けた主席は、1967年6月に咸興市の大学教員に行った演説と、翌年6月に咸鏡北道内の知識人に行った演説で、知識人を革命化する方途を明らかにした。主席は、思想教育と革命的組織生活を強化して知識人をさらに鍛える一方、彼らの間で主体性を確立し、個人主義、利己主義をはじめあらゆる古い思想の残滓を根絶する思想闘争を力強く展開して、すべての知識人を党に限りなく忠実な革命家に育てた。

主席は全社会の革命化、労働者階級化を進める対策も講じた。

全社会を革命化、労働者階級化する活動を大衆自身の活動、全社会的な運動に発展させた。

勤労者を教育する活動をチョンリマ作業班運動の中心的課題とし、これを大衆自身の活動にならしめた。同時に、家庭と人民班、分組と作業班の革命化から職場と村、工場と協同農場の革命化へと進ませた。

主席は、全社会の革命化、労働者階級化のために学校の教育事業を改善し、文学・芸術の役割を高めることに深い関心を向けた。

1968年3月中旬、教育部門の活動家に行った演説をはじめ一連の機会に、人々の革命化、労働者階級化を社会主義教育学の基本原理として新たに規定し、それを全面的に具現する積極的な対策を講じた。

その結果、教育事業において党の唯一思想体系と主体性が確立

され、労働者階級的線が明確に打ち出された。

主席は、文学・芸術分野において主体性を確立し、帝国主義の文化浸透と復古主義の傾向を克服する問題、主題を正しく定め人々の革命的世界観の形成過程を生活の中で生き生きと描く問題、典型の創造において党の階級路線と大衆路線を正しく具現し、労働者階級的線を明確にする問題など、作品創作における原則的な方向と方途を明示した。また、文学・芸術部門に対する党の指導をさらに強化し、党の文芸方針を貫徹するための新たな創作指導体系を打ち立て、作家、芸術家を革命的な文芸作品の創作へと導いた。

こうして、文学・芸術は勤労者の革命化、労働者階級化に大いに寄与することができるようになった。

主席の指導のもとに全社会の革命化、労働者階級化が積極的に推進された結果、人民の思想的・精神的品格には大きな変化が起こり、革命隊伍は不敗のものとして固められ、革命と建設をいっそう強力に前進させる確固とした保証がもたらされた。

第7節　社会主義的工業化を実現するための闘争

金日成主席は、社会主義的工業化の実現のために自立的で近代的な工業を創設し、人民経済の全面的な技術改造を行うためのたたたかいを指導した。

まず、社会主義的工業化において主導的部門である重工業の建設に大きな力を入れた。

主席は、第1次7カ年計画の前半期に築いた重工業の骨幹に肉付けをして重工業を整備、補強することに力を傾注した。

1963年9月上旬に行われた朝鮮労働党中央委員会第4期第7回総会をはじめ一連の機会に、重工業基地の拡張にのみ偏することなく、重工業の骨幹に肉付けをしながら、軽工業と農業の発展、人民生活の向上にそれを役立たせるべきであると指摘した。

主席は、重工業の整備、補強のため、機械製作工業を基軸にして、機械工場を整備、補強することから始めるようにした。

そして、1964年1月上旬に開かれた機械工業部門の活動家協議会で同部門に提起される課題を示し、機械工場の設備を完備してその生産能力を速やかに高め、機械製品の質を一段と高め、協同生産を綿密に手配し、設計を改善するよう強調した。

主席は1963年5月、機械工業省および熙川(ヒチョン)工作機械工場、亀城(クソン)工作機械工場の幹部協議会で、近代的な自動工作機械を大々的に生産する方向を示し、同年7月には亀城工作機械工場を訪れ、精密度と性能の高い各種の自動工作機械を量産する課題を与えた。次いで10月には楽元(ラクウォン)機械工場と他の機械工場を現地指導し、生産工程を完備してより性能のよい掘削機とディーゼル機関を多く製作する対策を講じた。

主席は、機械工業の整備、補強を優先させ、その支援によって重工業の他の部門の整備、補強を強力に推進させた。

主席は金属工業の整備、補強に深い関心を払い、製鉄所、製鋼所で圧延鋼材の生産施設を補強して生産能力をいっそう高めながら、引抜き鋼管、ワイヤロープなどの金属2次加工製品を生産する職場を新設して生産工程を完備し、国内の燃料を使用する製

鉄・製鋼法を一日も早く完成させるようにした。

主席は1962年9月、金策(キムチェク)製鉄所と城津(ソンジン)製鋼所を現地指導しながら、製鉄・製鋼設備を整備し、設備の予防保守と保守点検を着実に行い、鉄鋼材の生産を正常化するための具体的な対策を立てた。そして、1964年12月には降仙製鋼所を訪ね、朝鮮で初めての引抜き鋼管職場の建設を早期に完了する措置を講じた。

こうして金属工業部門では1961年から1964年の間に黄海製鉄所の分塊圧延職場、金策製鉄所の5号転炉、降仙製鋼所の引抜き鋼管職場と鋼管素材圧延職場、城津製鋼所の新中板圧延職場、平壌電線工場などが操業を開始するようになり、圧延鋼材の生産能力が向上し、金属2次加工製品の生産施設が新設された。

主席は化学工業を完備するため、既設の化学繊維工場と合成樹脂工場の拡張工事を続けながら、苛性ソーダ、農薬、医薬品生産基地の新設にも力を入れた。

その結果、2・8ビナロン工場の第2段階工事、清津化学繊維工場の拡張工事、新義州(シンイジュ)化学繊維工場の建設が完成し、肥料工場、除草剤工場、農薬工場が新しく建設されて化学工業の規模は拡大し、特に有機化学工業基地が拡大、強化された。

主席は軽工業基地を強固にし、鉄道の電化を進め、科学技術を発展させる強力な措置を講じた。

軽工業基地を強固に築くため、それまでなかった毛紡織工業、メリヤス工業、衣料工業、化学樹脂日用品工業、塩化ビニールおよびケミカルシューズ工業を創設させた。

1962年1月、平壌幼児メリヤス工場を現地指導した主席は、各地にメリヤス工場を新設させ、翌年10月に新義州毛紡織工場を訪

ねては生産を2倍に高める課題を与え、増大する人民の毛織物の需要を考慮に入れて東海岸に大規模の毛紡織工場を1カ所建設する課題を示した。そして、塩化ビニールとケミカルシューズ生産基地を設ける課題を示し、大規模な日用品工場を新設、拡張する一方、樹脂日用品生産基地も建設させた。

主席は鉄道の電化を本格的に進めるため、1961年から電気機関車をロット生産するよう対策を立てる一方、1961年11月27日から12月1日まで行われた朝鮮労働党中央委員会第4期第2回拡大総会と、1964年1月22日に開かれた交通運輸部門の活動家協議会で、主要幹線鉄道の電化に力を集中する方針を示した。

その結果、1962年に金策――端川(タンチョン)間、1965年までに端川――洪原(ホンウォン)間、平壌――新義州間、平壌――新成川(シンソンチョン)間で電化が完成した。

主席は科学技術の発展に大きな意義を付与し、1963年3月に開催された科学者・技術者大会をはじめ一連の機会に、国の科学技術を新たな高い段階へと引き上げるための工程を明示し、科学教育機関で工業化と技術革命に寄与する科学技術人材をより多く養成し、機械工学、無線工学、電子工学など経済発展に切実に必要な科学技術を全面的に発展させる措置を取った。

主席は社会主義的工業化を推し進める一方、人民の生活を画期的に高めることに全党的かつ全国家的な力を注ぐようにした。

まず、日用品の生産を大々的に増やすために中央軽工業部門の工場を拡大して技術装備を強化し、至るところに地方産業工場を増設して日用品の生産を速やかに増やし、価格を大幅に引き下げるようにした。同時に重工業部門の工場、企業に生活必需品職場を新設させ、多額の投資をせずとも短期間で日用必需品を量産で

きるようにした。

さらに果樹栽培業と畜産業、水産業の発展にも関心を払い、北青郡龍田里（プクチョン　リョンジョン）を果樹栽培業発展のモデルケースにし、1961年4月に朝鮮労働党中央委員会常務委員会北青拡大会議を招集し、第1次7カ年計画期間に20万ヘクタールの果樹園を新たに造成して30万ヘクタールに拡張する課題を示した。そして、1963年6月下旬に全国国営農牧場の活動家協議会を開き、畜産業を速やかに発展させる方向と方途を示し、1965年には家禽業を専門に指導する家禽総局を設けて家禽業の発展を促した。1962年2月には全国水産部門熱誠者大会を招集し、80万トンの水産物生産目標を達成する対策を立てて水産業を新たな段階へと引き上げ、四季にわたり人民に水産物を切らすことなく供給できるようにした。

主席は、特に山間部の人民の生活向上に深い関心を払った。

数回の現地指導の過程で人里離れた山間部の昌城（チャンソン）に手本をつくり、それを全国に広めるため1962年8月、地方の党および経済活動家昌城連席会議を開き、山間部の人民の生活を平野部の人民の生活水準にまで引き上げるための具体的な方途を示し、その後、山間部をいくつも訪れ、昌城の経験に習うよう具体的な対策を立てた。こうして、昔は人の住めない土地と言われてきた山間部は地方産業と農業が発達した住みよい村里に変わった。

主席は、全党、全人民を経済建設と国防建設の並進路線の貫徹において新たな革命的大高揚を起こすたたかいに奮起させた。

主席は、歴史的転換がもたらされていた1967年の1月、ある鉱山の作業班長以上の幹部を呼び、経済建設と国防建設の並進路線の貫徹のために非鉄金属を増産する必要性を強調し、その課題を

提示した。そして同年6月中旬には龍城機械工場の労働者を訪ね、経済建設と国防建設の並進路線の貫徹と社会主義的工業化の達成のためには、1957年に初めてチョンリマ運動を始めたときのように、再び革命的大高揚を起こさなければならないと強調し、龍城の労働者をその先頭に立たせた。

主席は、同年6月末から7月初にかけて朝鮮労働党中央委員会第4期第16回総会を開催し、すべての分野で新たな革命的大高揚を起こすための戦闘的課題を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「経済建設と国防建設を並進させるというこの新しい革命的路線を貫くためには、第1に、すべての部門、すべての単位の幹部と勤労者が思想的準備をしっかり整え、第2に、人民経済のすべての部門で消極性と保守主義、立ち後れと停滞を排撃して強くたたかい、これまでより数倍、数十倍の努力を傾けなければなりません。こうして、社会主義経済建設と国防建設のいずれの分野を問わず、すべての分野でチョンリマの大進軍を続け、新たな革命的高揚を起こさなければなりません」

そして、新たな革命的大高揚を起こすためには、チョンリマ作業班運動をさらに拡大、発展させ、すべての勤労者を革命化、労働者階級化する活動を力強く展開しなければならないと強調した。

主席は労働行政の改善にも深い関心を払った。

労働行政を単なる技術実務的な活動としてではなく、勤労者の間で労働に対する社会主義的態度を養う政治活動、対人活動に変えるよう導いた。さらに、技術革命に主眼を置いて労働力の不足を解消する一方、労働力の合理的な配置、社会主義分配原則の厳

守、非生産労働力の縮減および生産部門労働力の増加、労働計画の改善、労働規律の確立などの問題を解決していくようにした。

主席は、青年が先鋒隊、突撃隊となってチョンリマ作業班運動を盛り上げていくよう導いた。

1968年4月中旬に全国青年総動員大会を開き、血気さかんで勇敢な青年が経済建設と国防建設のすべての持ち場で先鋒隊になるよう励ました。次いで、同年5月に行われた第2回全国チョンリマ作業班運動先駆者大会で、チョンリマ作業班運動の中心的課題は、第1に対人活動を強化すること、第2に設備・資材との活動を強化すること、第3に学習を強化すること、すなわち思想革命、技術革命、文化革命を遂行することであるとして、この運動をさらに発展させてチョンリマ工場、チョンリマ協同農場、チョンリマ学校、チョンリマ騎手の隊伍を拡大すべき課題を示した。

主席の指導のもとに社会主義経済建設に革命的大高揚が起こり、1967年の工業総生産高は前年に比べて17％増え、穀物は例年にない水害を克服して前年に比べ16％の増収となった。1968年の工業総生産高は前年に比べて115％に増え、農業も大豊作を収めた。

主席は、社会主義経済建設で収めた成果と実践的経験にもとづき、社会主義経済の理論的問題を科学的に解明した。

主席は1969年3月1日、古典的著作『社会主義経済のいくつかの理論的問題について』を発表し、この問題を科学的に解明した。

まず、社会主義社会における経済の規模と生産成長速度の相互関係を明らかにした。

社会主義社会における生産成長の可能性は、国家の経済組織者としての機能が強まり、幹部の経済管理・運営水準が高まり、人

民経済各部門間の均衡が合理的に保たれ、国の経済が整うほど大きくなり、同時に社会主義社会においては、技術を計画的に、速やかに発展させることができ、それに伴って労働生産性は絶えず高まり、生産は急速に発展することは明白な真理であると指摘し、特に社会主義社会において生産力の発展を大いに促す決定的要因は、人々の革命的熱意であるということを論証した。

次に、社会主義社会において生産手段の商品形態と価値法則の利用問題、社会主義社会において農民市場とそれをなくすための方途などの問題も科学的に解明した。

主席は、革命的大高揚を堅持し、社会主義的工業化を完成するたたかいをいっそう強力に推進させた。

主席は、翌朝直ちに戦争が起こるとしても、今夜の12時までは建設を続けるという胆力と気概をもって、全党と全人民が革命的大高揚を引き続き堅持し、第1次7カ年計画の高峰をきわめ、社会主義的工業化を達成するたたかいをさらに力強く繰り広げるよう導いた。

主席は1969年の新年の辞で、人民経済の各部門で一大飛躍をもたらす課題を示し、1969年12月に朝鮮労働党中央委員会第4期第20回拡大総会を招集し、1970年の秋に開催される朝鮮労働党第5回大会以前に第1次7カ年計画を完遂するよう呼びかけた。

主席の呼びかけに応えて、全党員と勤労者は人民経済のすべての分野で力強い勤労闘争を展開して新たな奇跡と革新を起こした。

降仙製鋼所の労働者は、1970年に前年同期に比べて鋼鉄生産を2倍に引き上げる新たなチョンリマ速度、「降仙速度」を創出し、全国のすべての工場、企業は1970年10月現在、工業生産を前年に

比べて131％に高めた。また、半年余りの間に1760余の地方産業工場を建設し、各種の一般消費財の生産を急速に増やした。農業部門でも「青山里（チョンサン）の人々の働きぶり」が広がって農産、畜産、果樹、養蚕の各分野で新たな高揚が起こった。

革命的大高揚の炎の中で第1次7カ年計画は成功裏に完遂され、工業化の歴史的課題は立派に達成された。

その結果、かつて近代文明とはほど遠い植民地農業国であった朝鮮は、近代的工業と発達した農業を有する強力な社会主義工業国となった。

これは、5000年の悠久な民族史において大きな意義のある歴史的出来事であり、主席が祖国の富強・繁栄と子孫万代の幸せのために積み上げた最も偉大な業績の一つである。

第8節　在日朝鮮人運動と世界革命との国際的連帯の強化のためのたたかい

金日成主席は海外朝鮮人運動、特に在日朝鮮人運動に深い関心を払った。

1960年代に入って日本当局は在日同胞に対する弾圧と同化の二面政策を執拗に追求した。そのため在日朝鮮人運動の発展途上に重大な難関が生じた。

主席は、1962年1月末、総聯議長に送った書簡『総聯の活動で収めた成果をさらに発展させよう』をはじめ一連の機会に在日朝鮮人運動の進路を提示した。

すべての在日同胞を朝鮮労働党と共和国政府の周りに固く結束させ、新たな情勢の要請に応じて総聯の組織をいっそう拡大、強化し、活動家と同胞大衆に対する思想教育を強化して彼らをみなわが党の思想、チュチェ思想で武装させること、そして、民主主義的民族権利を断固として守り、祖国の自主的平和統一を早めるため積極的にたたかうよう強調した。

主席は、在日朝鮮人運動の強化、発展のため、総聯と在日同胞のたたかいをあらゆる面から支持、声援した。

まず、在日同胞の民主主義的民族権利を守ることに第一義的な関心を払った。

主席は共和国政府をして在日同胞に対する日本当局の「永住権申請」強要と、南朝鮮国籍を強要しようとする策動を断固暴露、糾弾させる一方、1963年10月9日、『朝鮮民主主義人民共和国国籍法』を制定させて、在日同胞の公民権をはじめ民主主義的民族権利を法的に確固と保証した。また、1967年11月最高人民会議代議員選挙の際には7名の在日朝鮮人代表を共和国の代議員に推挙して、共和国の海外公民としての在日同胞の合法的地位を誰も侵せないようにした。

そして、在日同胞が南朝鮮人民の反ファッショ・民主化闘争を積極的に支持、声援し、売国的な「韓日会談」を粉砕する闘争を強力に展開させた。また、在日朝鮮公民の祖国への帰国を阻もうとする日本反動層の狡猾な策動に同胞あげての運動で対応し、このたたかいが日本人民の大きな支持と声援のもとに行われるよう導き、3年余り断たれていた帰国の航路を再開させた。

主席の指導と配慮に励まされた総聯の活動家をはじめ在日同胞

は、内外の敵のあらゆる策動を粉砕し、チュチェの思想体系にもとづく隊伍の統一・団結を強め、総聯組織をしっかりと固め、在日朝鮮人運動を新たな段階へと発展させていった。

1960年代に入って世界革命勢力の拡大、強化に恐れをなしたアメリカ帝国主義は、狡猾な二面戦術によって世界人民を欺き、至るところで侵略と戦争策動に狂奔した。特にアメリカ帝国主義は、1964年8月、トンキン湾事件を起こしてベトナムに対する侵略戦争をエスカレートし、ラオス、カンボジア人民に対する侵略策動をさらに強化した。一方、修正主義をはじめとする日和見主義は反帝反米闘争を弱め、社会主義諸国間の統一・団結と国際労働者階級の革命偉業遂行に弊害を及ぼしていた。

主席は、新たな国際情勢と世界革命発展の要請を洞察し、帝国主義と左右の日和見主義に反対し世界革命を前進させるための戦略的・戦術的方針を示した。

まず、修正主義をはじめ日和見主義に反対し、国際共産主義運動と社会主義諸国の統一・団結を成し遂げる方針を明らかにした。

主席は1962年3月8日、朝鮮労働党中央委員会第4期第3回拡大総会での結語をはじめ一連の著作で、日和見主義の正体を暴露する一方、それに反対する闘争において革命家が堅持すべき原則的立場と態度を明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「内ではブルジョア的影響のとりことなり、外では帝国主義の圧力に屈服すること、これが修正主義発生の根源であります。過去の修正主義も、現代修正主義もすべてその本質は同じものであり、目的も同じであります。両者とも時代が変わったという口実

のもとにマルクス主義の基本原則を否定し、革命闘争を放棄することを求めています」

主席は、歴史的に修正主義は労働運動内に現れた日和見主義的な潮流であり、党の指導とプロレタリアート独裁を否定し、階級闘争を放棄し、帝国主義との妥協を説くことで人民の解放闘争を妨げてきたとし、ここに修正主義の反動的本質と危険性があると指摘した。

そして、日和見主義に反対する朝鮮労働党の確たる立場を明らかにし、日和見主義に反対して両戦線でたたかうにしても、もっぱら団結の念願から出発して、たたかいながら団結し、団結しながらたたかわなければならないと強調した。

主席は、反帝反米闘争を強化し、植民地民族解放運動を力強く展開するための闘争方針を示した。

主席は1967年8月に発表した古典的著作『反帝反米闘争を強化しよう』と、1968年10月に発表した古典的著作『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国人民の偉大な反帝革命偉業は必勝不敗である』などの諸著作で、反帝反米闘争と植民地民族解放運動に対する科学的な戦略・戦術を全面的に明らかにした。

まず、アメリカ帝国主義に主な矛先を向けるという世界革命の基本戦略を実現するためには、世界の革命的人民がこぞってアメリカ帝国主義に立ち向かい、その五体を引き裂かなければならないと強調した。

主席は、植民地民族解放運動は従来のように発達した資本主義諸国の労働者階級の予備軍としてではなく、社会主義をめざす国際労働者階級の革命闘争とともにわれわれの時代の2大革命勢力

をなす、という科学的評価を下した。

そして、被抑圧人民は帝国主義に反対する頑強な闘争によってのみ自らを解放することができる、という真理を明らかにした。

また帝国主義の従属下にあった国々は政治的独立を勝ち取った後も民族解放偉業を最終的に達成するまで革命を続けなければならないと指摘し、新興独立諸国人民の進路を指し示しながら、独立を達成した人民は革命を続けて帝国主義と国内反動勢力の破壊策動を粉砕してその経済的基盤を一掃し、進歩的な社会制度を確立し、自立的民族経済と民族文化を建設するためにたたかわなければならないと述べた。

また、先に革命に勝利した国の人民とまだ勝利していない国の人民間の国際主義的連帯と、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国人民間の戦闘的団結を強化すべきであると強調した。

主席は、帝国主義と左右の日和見主義に反対し、世界革命を前進させるたたかいを力強く推進した。

まず、左右の日和見主義を克服し、社会主義諸国と共産党および労働者党間の友好・協力関係を発展させるため精力的に活動した。

主席は、日和見主義者の反革命的理論と分裂策動をそのつど全面的に暴き、世界の革命家と革命的人民がその正体をはっきり見抜けるようにした。同時に、修正主義者が他国の内政に干渉し、その誤まった路線と政策を受け入れない党と国家を分裂、離間させようとする策動に反対して断固たたかった。

主席は1961年6月末から7月中旬まで、党および政府代表団を率いてソ連と中華人民共和国を訪問し、友好・協力および相互援助に関する条約を結び、当面の重要な国際問題について意見を交わ

した。また、社会主義諸国と各国の党に多くの代表団を派遣して相互往来と接触を強め、それぞれ協定を締結して共同歩調を合わせるようにした。

主席は、資本主義諸国の共産党、労働者党、各国の民主的社会団体、国際民主団体と反米共同行動を取るために積極的に活動した。

主席は国際的規模で帝国主義、特にアメリカ帝国主義に反対する闘争が力強く展開されるようにした。世界の革命的人民が至るところで強行されているアメリカ帝国主義の侵略と戦争策動に反対して断固たたかうよう励まし、国際機構や団体、国際会議に代表団を派遣して反帝反米闘争を積極的に展開させた。

主席は1969年9月中旬、平壌で開かれたアメリカ帝国主義の侵略に反対してたたかう全世界ジャーナリストの課題を討議する国際会議に臨席し、反帝反米闘争を強化するための進歩的記者と言論人のたたかいを励ました。

主席は革命途上諸国の人民に対する支援を崇高な国際主義的義務と見なし、反帝反米闘争を繰り広げている諸国人民に私心のない物心両面からの支持、声援を送った。

当時、反帝反米闘争の焦点となっていたベトナム人民の闘争を支援するため多くの支援物資を送った。また、アメリカ帝国主義と直接対峙して困難なたたかいを繰り広げているキューバ人民に私心のない政治的・軍事的支援を与えた。また1967年6月、アメリカ帝国主義がイスラエル膨張主義者をそそのかして第3次中東戦争を引き起こしたときには、アラブ人民の闘争に全面的な支持と戦闘的連帯を送り、エジプトとシリアに物質的・軍事的援助を与えるなど、反帝反米闘争を繰り広げている各国人民を積極的に

支持、声援した。

主席は、発展途上諸国人民との連帯を強化することに大きな力を入れた。

1961年2月中旬、外務省の責任幹部を呼び、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの新興独立諸国との活動方針を示し、その実行のための具体的方途も示した。

主席は新興独立諸国の指導者と代表団を数多く招請する一方、発展途上諸国に代表団を派遣して政治、経済、文化など各方面にわたって連係を深めるようにした。

主席は、発展途上諸国との友好・団結と連帯を強めるうえで画期的な転機をもたらすため、1965年4月インドネシアを公式訪問した。訪問期間中、主席はアリ・アルハム社会科学院で歴史的な講義を行い、朝鮮労働党と人民が革命と建設で収めた成果と経験を深く分析し、バンドン会議10周年記念行事に列席して発展途上諸国の指導者に会い、新しい社会の建設をめざす彼らの闘争を励ました。

金日成主席への高い尊敬と欽慕の念を抱いていたスカルノ大統領は、歴史が長く世界的に有名なボーゴル植物園に主席を案内した。温室のある展示台で足を止めた彼は、この花はどうですかと尋ねた。その花は植物園の著名な学者が長年の苦心の末に育種した蘭科系のめずらしい花であった。しばらくその花を見つめていた主席は美しい花だと答えた。スカルノ大統領はその花に主席の名を冠したいという思いを吐露した。

主席は彼の重ねての願いを朝鮮人民に対するインドネシア人民の温かな友好の情であるとして承諾した。こうして、数千年の人類史

上初めて偉人の尊名を冠した不滅の花「金日成花」が生まれた。

主席の精力的な対外活動により、朝鮮とアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国との友好・協力関係には画期的な転換がもたらされた。朝鮮は、1960年代に20余りの新興独立諸国と外交関係を結び、多くの国々と領事・貿易関係を持つことになった。

第10章　3大革命を力強く繰り広げるためのたたかい
（1970年11月～1980年10月）

第1節　朝鮮労働党第5回大会、思想・技術・文化の3大革命を推進する綱領的課題を提示

1970年代の初め、朝鮮は革命と建設の各分野で輝かしい勝利を収めた。朝鮮労働党には、その成果にもとづいてチュチェ思想の旗、先軍の旗を高く掲げ、革命と建設をさらに力強く推し進めるべき課題が提起されていた。

金日成（キムイルソン）主席は、それまで革命と建設で収めた成果を総括し、党と軍隊と人民に新たな闘争綱領と課題を示すため、1970年11月2日から13日にかけて朝鮮労働党第5回大会を開催した。主席は大会での党中央委員会の活動報告で、総括期間に国を強力な社会主義工業国に変えた歴史的勝利をはじめ革命と建設で収めた成果を全面的に総括し、社会主義建設をいっそう推し進めるための雄大な綱領を提示した。

主席は報告で、思想・技術・文化の3大革命を推進して社会主義制度を強化し、社会主義建設を促進するための闘争課題を明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれは技術革命をさらに高い段階に前進させて生産力を絶えず発展させ、文化建設を促進して社会主義的民族文化をいっそう開花発展させ、思想革命を優先させて全社会の革命化、労働者階級化を力強く推し進めなければなりません」

主席は、技術革命をさらに高い段階に前進させて生産力を絶えず発展させるための社会主義経済建設の中心的課題として6カ年（1971～1976）計画の基本的課題を示した。

社会主義経済建設分野における6カ年計画の基本的課題は、工業化の成果を強固にし、技術革命を新たな高い段階へと発展させて、社会主義の物質的・技術的土台をいっそう強固にし、人民経済のすべての部門で勤労者を骨の折れる労働から解放することであった。

第1次7カ年計画期間に社会主義的工業化が実現し、人民経済の各部門は基本的に近代技術の土台のうえに引き上げられた。しかし社会主義の完全な勝利を達成するためには、社会主義の物質的・技術的土台をさらに強化しなければならず、そのためには工業化の成果を固め、技術革命をより高い段階へと引き上げ、生産力を急速に発展させることが必要であった。6カ年計画は、このような要請から提起された経済建設の課題であった。

主席は6カ年計画の部門別課題を示した。

工業部門の中心的課題は部門内部構造を完備し、少なくとも原料の60～70％以上を国産でまかなうことによって工業の主体性を強化することであり、農業部門の中心的課題は、農業生産を高度に集約化することであった。

主席は6カ年計画を示しながら、人民経済のすべての部門で技術革新運動を幅広く展開して、重労働と軽労働の格差、農業労働

と工業労働の格差を著しく縮め、女性を家事の重い負担から解放するという新たな3大技術革命の課題を示した。

主席は文化革命を推進するための社会主義文化建設の課題を示した。

社会主義文化建設で最も重要な課題は、帝国主義の文化的浸透を防ぎ、復古主義的傾向を克服することであった。

主席は社会主義文化建設の課題を部門別に明らかにした。

教育部門では近い将来に100万人以上の技術者、専門家を養成し、勤労者の技術・文化水準を全般的に向上させ、子どもを国家的、社会的に養育する事業を発展させ、科学分野では緊要な科学・技術上の問題を適時に解決し、文学・芸術分野では革命的な文芸作品を多く創作しなければならないと指摘した。同時に、民族語とスポーツを発展させる課題も示した。

主席は、思想革命を優先させ、全社会の革命化、労働者階級化を推し進める課題を示した。

勤労者の間で思想教育を革命的実践活動と緊密に結びつけて行い、組織生活を強化し、すべての分野で社会主義的生活様式を全面的に確立すべきであると指摘した。そして模範を創造し、その経験を広めることで徐々に全社会を革命化、労働者階級化していかなければならないと強調した。

主席は、新たな情勢に対処して国防力を強化する課題を示した。それは、党の軍事路線を堅持し、国防において自衛の原則を貫徹し、敵のいかなる侵攻をも撃退できるよう、政治的・思想的および物質的準備を整えることである。

主席は、人民の生活を向上させるうえで提起される最も重要な

課題は、労働者と農民の生活水準における格差、都市住民と農村住民の生活条件における格差を速やかになくすことであり、そのためには、郡を強化してその役割を高め、農村にバスが乗り入れるようにし、水道を引き、農村診療所を病院にすることであると指摘した。

主席はまた、祖国の統一を促進するための課題を示しながら、南朝鮮で革命に利害関係を持つすべての階層を一つの政治的勢力に結集して反米統一戦線を結成し、アメリカ帝国主義とその手先に反対する大衆闘争を積極的に展開すべきであると強調した。そして、現段階における南朝鮮人民の重要な課題は、アメリカ帝国主義の植民地支配とその手先のファッショ的弾圧に反対し、社会の民主化を実現するための大衆闘争をいっそう発展させることであると指摘した。

主席は次に、国際革命勢力との団結を強めるための課題を示した。

主席は、世界の至るところで反米闘争をより積極的に、広範に繰り広げ、革命途上の国、たたかう諸国の人民が互いに団結し支援し合うべきであると強調した。

主席は、朝鮮労働党と人民は社会主義諸国、帝国主義に反対する諸国人民と団結して、アメリカ帝国主義と日本軍国主義に反対し、平和と民主主義、民族独立と社会主義偉業の勝利に向けて引き続き力強くたたかうであろうと強調した。

主席は、党を組織的、思想的に強化して指導的役割を高める課題を示した。

主席は、党内に唯一思想体系を確立し、それにもとづいて党隊伍の思想・意志の統一を強化することを党活動の総体的課題とし

て打ち出した。

党活動を深化、発展させるためには、対人活動を基本にして行うべきであると強調し、対人活動、すなわち幹部との活動、党員との活動、大衆との活動で提起される具体的な問題を明らかにした。

主席は、発展する現実と情勢の要請に即して社会主義経済建設に対する党の指導を強化する、国家経済機関が新たな社会主義経済管理システムに沿って経済を管理・運営するよう指導と統制を強化する、各級人民委員会の機能と役割を高め、人民軍と保安機関、司法・検察機関に対する党の指導を強化するなどの点を強調した。

党大会は社会主義経済建設の基本的方向にもとづいて人民経済発展6カ年計画を討議、決定し、党の新たな革命任務に即して党規約の一部を修正、補足した。

党大会は、全党員と人民軍将兵、人民の一致した意思と念願によって、金日成主席を朝鮮労働党中央委員会総書記に再選した。

第5回党大会を契機に朝鮮革命はより高い段階へと発展し、思想、技術、文化の3大革命の遂行において新たな転換がもたらされるようになった。

第2節　3大技術革命の推進と社会主義憲法の制定、発布

金日成主席は第5回党大会後、技術革命を新たな高い段階へと発展させて勤労者を骨の折れる労働から解放するための3大技術革命を力強く推し進めた。

主席は3大技術革命の突破口を開くため、工作機械の生産に力を集中するよう導いた。

金日成主席は次のように述べている。

「わが党は、3大技術革命を遂行するための中心の環を工作機械の生産に求め、6カ年計画の1年目に工作機械の生産に力を集中しました」

主席は1971年初め、朝鮮労働党中央委員会政治委員会で工作機械の生産を増大させることは重要な問題であると強調し、2月に熙川（ヒチョン）工作機械工場を現地で指導し、工作機械の生産で一大飛躍を起こして翌年4月15日までに1万台を生産するという戦闘的課題を示した。そして1971年9月と10月に亀城（クソン）と熙川の労働者を訪ね、技術革新を引き続き力強く推し進めるよう励まし、11月には朝鮮労働党中央委員会第5期第3回総会を開き、工作機械の台数と種類を増やすなど、3大技術革命の遂行における機械工業部門の課題を具体的に示した。

全国の機械工場の労働者は、生産組織を改編し、集団的な技術革新運動を力強く展開して、1年余りの間に3万台の工作機械を生産する奇跡を起こした。こうして3大技術革命の課題と6カ年計画の遂行に向け確固たる展望が開かれた。

主席は工作機械の生産で収めた成果を踏まえ、人民経済のすべての部門、すべての単位で3大技術革命を推し進めるよう指導した。

主席は重労働と軽労働の格差を縮めることに第一義的な意義を付与し、骨の折れる労働が多く残っている採掘工業部門、特に石炭工業部門から機械化、総合的機械化を実現していくよう導いた。

1970年12月初めの朝鮮労働党中央委員会政治委員会において、

炭鉱での作業を機械化する必要性を強調し、1973年9月の党中央委員会第5期第7回総会で炭鉱設備を大型化、近代化する方針を示した。そして同年11月末、咸鏡(ハムギョン)南道を訪れて鉱業部門活動家協議会を招集し、検徳(コムドク)鉱山を模範にして全国の炭鉱、鉱山で坑内作業の総合的機械化を実現するための技術革命を進めるよう指導した。

主席は冶金工業、化学工業、セメント工業部門で生産工程全般を自動化し、生産過程での高熱、ガス、ほこり、湿気などが労働者の作業と健康に支障を与えている部分を技術面から改造させた。1972年5月下旬、黄海(ファンヘ)製鉄所を訪れた主席は、平炉の前で足を止め、高熱の中で汗を流して働く炉まわり工の労をねぎらい、有害ガスがまだ残っている5・14職場も見て回りながら作業を早く自動化するよう促した。そして同年6月、咸鏡北道への現地指導の過程で、清津(チョンジン)化学繊維工場で有害ガスの問題が完全に解決されていないことを知り、すべての生産工程を近代的設備に改造して有害ガスを完全に除去するよう強調した。

主席は農業労働と工業労働の格差を縮めるため、農業の総合的機械化と全面的化学化を力強く推進させた。

主席は既存のトラクター工場の生産をいっそう高める一方、1971年11月に現地に出向き、大規模な近代的トラクター生産基地を新たに設ける対策を講じ、田植え機をはじめ農業機械を大々的に生産するよう指導した。また、1974年6月上旬、興南(フンナム)肥料連合企業所の党委員会拡大会議を指導し、肥料生産を画期的に増やす方途を示した。

主席は女性を重い家事の負担から解放するため、食品工業と日

用品工業をさらに発展させ、各種の加工食品と近代的な台所用品をより多く生産、供給するとともに、農村に水道を引く運動に大衆を積極的に参加させるようにした。

主席は1971年5月下旬、農村の水道化に向けた模範講習を開かせ、1973年4月には科学映画鑑賞会に参加した活動家と話し合い、農村の水道化を速めるための課題と方途を明らかにした。そして、党中央委員会の政治委員は一つの道を、党中央委員会副部長と課長、道党委員会責任書記は幾つかの部落を受け持って農村の水道化を速やかに実現していく措置を講じた。

主席は3大技術革命を力強く推し進める一方、全社会の政治的・思想的統一を強め、社会主義憲法を制定、発布するための活動を指導した。

主席は全社会の政治的・思想的統一の強化に深い関心を払った。

1971年8月と9月に開かれた朝鮮労働党中央委員会政治委員会と平安(ピョンアン)北道および黄海南道の党委員会拡大総会をはじめ各会議で、全社会の政治的・思想的統一を強化する課題を示した。

そして、この課題を実現するため、党勢の拡大に力を入れ、鍛えられた人々、特に党の頼もしい継承者である新しい世代を多く入党させ、入党を熱望する人々はためらうことなく党に受け入れるようにした。

主席はまた、各級党組織と幹部は各階層の大衆との活動で偏向を犯さず、一人でも多く教育して党の周りに結集するよう導いた。

全党、全軍、全人民が主席の周りに固く団結し、社会主義建設で革命的大高揚が起きていた中、朝鮮人民と世界の革命的人民は主席の生誕60周年を盛大に祝った。

主席の60星霜は、時代と革命、祖国と人民に対し不滅の業績を打ち立てた卓越した領袖の栄光に輝く革命の歴史であった。

朝鮮労働党と軍隊と人民は主席の偉大な指導の足跡が刻まれている各所に事績碑を立て、革命戦跡と革命史跡、革命事績館と革命博物館を立派に整えた。革命の首都平壌（ピョンヤン）の万寿台（マンスデ）の丘には主席の銅像が建立され、朝鮮革命博物館を新装開館した。全党員と人民軍将兵、勤労者は、60星霜ひたすら人民の自由と解放のために尽くしてきた主席に最大の敬慕と忠誠の念を込めて最大の栄光と感謝を捧げ、祝賀の書信と真心のこもった贈り物を寄せた。

最高人民会議常任委員会は生誕60周年に際して、朝鮮革命と世界革命の発展に大きく貢献した主席に朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を授与した。

世界の数多くの革命家と人民は主席への最大の尊敬と欽慕の念を抱いて多彩な慶祝行事を催し、各国の新聞、通信、放送は主席の栄光に輝く革命活動史を特集して紹介した。また多くの国の党および国家元首、革命組織と闘争団体、友好団体、著名な社会活動家と進歩的人士から祝賀電報とメッセージ、献詩と頌歌、真心のこもった贈り物が寄せられた。

1972年4月15日、生誕60周年祝賀宴に臨席した主席は『革命的団結はすべての勝利の保障である』と題する意義深い演説を行った。

主席は、抗日革命闘争の時期、同志と生死、苦楽をともにした数々の思い出を感慨深く回顧し、父母の愛も尊いけれども、それにもまして尊いのは同志愛であると強調し、革命的同志愛にもとづく団結を強めるようアピールした。

主席の生誕60周年を契機に、党と軍隊と人民の統一・団結は、崇高な革命的信義と同志愛にもとづく最も強固な思想・意志の統一・団結に昇華した。

主席は、全人民の政治的・思想的統一にもとづく国家社会制度を強固にするため、新たな社会主義憲法を制定するよう指導した。

1948年に制定された初の共和国憲法は、反帝反封建民主主義革命の成果を法的に定着させたものであり、その使命はすでに十分に果たされた。社会主義制度が確立され、社会主義建設が深化している現実は、それにふさわしい新たな憲法、社会主義憲法の制定を切実に求めていた。この要請を反映して1972年12月27日、最高人民会議第5期第1回会議で『朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法』が採択された。

社会主義憲法はそれまでの成果を法律面から固定化し、社会主義社会における政治・経済・文化分野の諸原則を全面的に制定するとともに、公民の権利と義務、主席を国家元首とする国家機関の構成と任務、活動原則を新たに規定している。

主席は会議で行った演説『わが国の社会主義制度をいっそう強化しよう』で、新憲法の基本的内容と特徴、その制定の意義を全面的に明らかにした。

社会主義憲法の制定、発布は、朝鮮における国家の機能と役割をいっそう高め、人民大衆中心の社会主義制度を強固にするうえで画期的な意義を有するものであった。

最高人民会議第5期第1回会議は、全朝鮮人民の一致した意思と念願を込めて、金日成主席を朝鮮民主主義人民共和国の主席に推戴した。

第3節　チュチェ思想の全面的な深化、発展

偉大なチュチェ思想の深遠な原理と豊かな内容を全面的に解明し、深化、発展させることは、われわれの時代の革命発展の切実な要請であった。

当時、世界の革命的人民の間では、チュチェ思想を学ぼうという志向と熱望が急速に高まっていた。彼らは朝鮮革命に具現され、偉大な勝利と生命力が誇示されているチュチェ思想から自らが進むべき道を求め、それを研究し具現するために努力し、多くの国の党および国家指導者と社会・政治活動家、学者、言論界の人士がチュチェ思想を学ぶため次々と朝鮮を訪れた。

金日成主席は時代と革命発展の要請を深く洞察し、1972年1月の『読売新聞』記者の質問に対する回答と、同年9月の『毎日新聞』記者の質問に対する回答『わが党のチュチェ思想と共和国政府の対内対外政策のいくつかの問題について』、そして朝鮮労働党創立30周年記念大会で行った報告をはじめ多くの著作で、チュチェ思想をさらに深化、発展させた。

金日成主席はチュチェ思想の本質について次のように述べている。

「チュチェ思想とは、一口に言って、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設を推し進める力もまた人民大衆にあるという思想であります。言いかえれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという思想であります」

主席はチュチェ思想の哲学的原理について言及し、チュチェ思

想は、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理にもとづいていると述べている。

主席は従来、哲学の根本問題となっていた物質と意識、存在と思惟の関係が前代の労働者階級の哲学によって科学的に解明された状況のもとで、世界における人間の地位と役割を哲学の根本的問題として提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を独創的に解明した。

人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理が科学的に解明されたことで、この問題に対して完璧な解答が与えられた。

主席は人間が世界を支配する主人の地位を占め、世界を改造し変革するうえで決定的な役割を果たすのは、世界の他の存在にはない特殊な属性である自主性と創造性、意識性を持った社会的存在であるためであると指摘した。

主席は、チュチェ思想が人間の本質的属性と世界における人間の地位と役割の科学的解明にもとづき、人間との関係で解明した世界に対する最も正しい見解、すなわち世界は人間によって支配され、改造され、発展するという合法則性を明らかにした。

主席は、チュチェ思想はすべてを人間を中心に据えて思考し、人間のために奉仕することを求めると指摘した。

また、チュチェ思想は勤労人民大衆に革命と建設におけるすべての問題を主人としての態度で、自主的立場と創造的立場で解決していくことを求めることも明らかにした。

自主的立場は、すべての問題を自国人民の利益の見地から独自に判断し、自らの力で解決していく立場であり、創造的立場は人

民大衆の創造的力を最大限に発揮させてすべての問題を具体的実情に即して解決していく立場である。それゆえ、自主的立場は革命と建設で堅持すべき根本的な立場であり、創造的立場は自然と社会を改造するうえで依拠すべき根本的な方法である。

主席によってチュチェ思想の哲学的原理が解明され、それにもとづき世界が人間によって改造され発展していくという世界発展の合法則性が明らかにされたことで、人間中心の哲学的世界観が新たに確立された。

主席は勤労人民大衆を中心にした社会発展の合法則性と革命の原理を科学的に解明した。勤労人民大衆は歴史の主体、社会発展の原動力であり、人類の歴史は自主性をめざす勤労人民大衆の闘争の歴史であり、人民大衆の創造的活動によって歴史が発展し社会的運動が行われると指摘した。

このように主席は、チュチェ思想の哲学的原理と人間の本質的属性から出発し、勤労人民大衆を主体とする社会的・歴史的運動の合法則性を解明し、社会・歴史の原理、チュチェ史観を確立した。

主席は、チュチェ思想を革命と建設に具現するための指導的原則を明らかにした。

チュチェ思想を具現するうえで重要なのは、思想における主体、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を貫くことである。

思想において主体性を確立するということは、自国の革命と建設に主人として参加する思想と観点を堅持することを意味する。革命と建設は人々の意識的な活動であるため、思想において主体性を確立することは政治、経済、国防などすべての分野で自主的

立場を堅持するための先決条件なのである。

政治における自主の原則を堅持するということは、自分自身の決心により自国人民の利益に即してすべての政策と路線を作成し、自国人民の力によって貫徹していくことを意味する。政治は社会生活において決定的意義を持つ分野である。従って、思想における主体は政治における自主として表われ、経済における自立、国防における自衛も政治における自主によって保障される。

経済における自立の原則を堅持するということは、国内の資源と技術、国の民族幹部と人民の力によって自国人民の物質的需要を充足させる経済を建設することを意味する。経済は社会生活の物質的基盤であるため、経済的自立は思想における主体、政治における自主、国防における自衛を物質的に裏打ちするものである。

国防における自衛の原則を堅持するということは、自国の国防力によって自国を自らが守ることを意味する。国防における自衛は、政治における自主、経済における自立の軍事的保障である。

このように主席は、チュチェ思想の哲学的原理と社会・歴史原理、革命と建設の指導原則を科学的に解明して、チュチェ思想を全面的に深化、発展させた。

主席は、チュチェ思想の原理を全一的に体系化する問題は金正日（キムジョンイル）同志によって立派に実現されたと述べている。

金正日同志はチュチェ思想の根本的原理と真髄をなす内容を深く研究し、それにもとづいて朝鮮労働党の指導思想をチュチェの思想、理論、方法の全一的体系として位置づけ、われわれの時代と革命発展の要請に即して新たな原理と内容をもってチュチェ思想をより内容豊かなものにした。

チュチェ思想が全面的に深化、発展し、全一的に体系化されたことで、チュチェ思想は名実ともに人類思想史において輝かしい位置を占める偉大な革命思想、革命と建設の科学的な指導思想として光を放つようになった。

第4節　革命偉業継承問題の解決

金日成主席は、社会主義建設を新たな高い段階へと発展させるためのたたかいを導きながら、革命偉業の継承問題の解決に格別な関心を払った。

革命の偉業を継承することは、革命の運命にかかわる根本的問題である。労働者階級の革命の偉業は一世代で終わるものではなく、数世代にわたって続く長期的かつ歴史的な偉業である。労働者階級の革命偉業は領袖によって切り開かれ、領袖の指導のもとに前進し、達成される。労働者階級の革命偉業のこのような合法則性は、革命の道を最初に切り開いた領袖の指導的地位と役割が代を継いで継承されて初めて立派に実現されるのである。

1970年代に入り、革命偉業継承の問題を解決することが、朝鮮労働党と革命発展の差し迫った問題として提起された。主席が銃を取って切り開き前進させてきたチュチェの革命偉業は、全社会のチュチェ思想化を実現する新たな段階に入り、チュチェの革命偉業を最後まで達成すべき栄誉ある任務は国家と社会の主人として登場した新しい世代が担うことになった。こうした歴史的環境は、チュチェの革命偉業を代を継いで達成するための領袖の後継

者の問題を正しく解決することを切実に求めていた。

また、革命偉業継承の問題は国際共産主義運動の教訓に照らしても重大な問題であった。国際共産主義運動の歴史的教訓は、革命の代が替わるとき、革命と建設に対する指導が正しく継承されなければ社会主義の偉業は紆余曲折を経、失敗を免れないということを示している。

主席は、党と革命発展の合法則的要求と国際共産主義運動の教訓を科学的に洞察し、政治的領袖の後継者問題を正しく解決することに第一義的な関心を払った。

金日成主席は次のように述べている。

「党の偉業継承において基本となるのは、政治的領袖の後継者問題を正しく解決することです」

主席は後継者問題と関連していろいろな機会に多くのことを語っている。

1972年4月22日、抗日革命闘士たちへの談話『白頭(ペクトウ)の密林で開拓されたわれわれの革命偉業をあくまで達成するために』で、後継者問題の重要さについて明らかにした。

主席は、白頭の密林で切り開かれた朝鮮の革命偉業をあくまで達成するためには革命の後継者を立派に育てなければならず、これは社会主義を建設し、人民に裕福な生活をさせ、分断された祖国を統一しなければならないという朝鮮革命の現実が提起する差し迫った問題であると述べた。そして、革命の後継者を立派に育てることは国際共産主義運動の経験と実情に照らしても、切実な要求であると指摘した。

主席は、革命の後継者を立派に育てることができなければ、党

と革命に取り返しのつかない悪い結果をもたらすことになり、従って、党と革命に限りなく忠実であり、われわれの革命偉業を立派に継承し達成していける能力のある若い人を後継者として選び、立派に育てなければならないと強調した。

主席は1971年6月末、在日本朝鮮青年学生祝賀団への談話をはじめ機会あるごとに後継者が備えるべき品格と資質についても明らかにした。

主席は、労働者階級の革命偉業を正しく継承し達成するためには領袖の生存中に、領袖に限りなく忠実で、非凡な思想的・理論的英知と卓越した指導力、気高い徳性を備えた真の人民の指導者を押し立てて、後継者の指導体系を確立しなければならないと指摘したうえで、後継者の表徴で基本をなすのは領袖とその偉業に対する忠実性、徳義であると強調した。

主席は朝鮮労働党と軍隊と人民の一致した意思と念願を勘案して、金正日同志をチュチェの革命偉業の後継者に押し立てる歴史的偉業を立派に実現した。

金正日同志は早くから卓出した実力によって党と軍隊、革命活動を導き、不滅の業績を築く過程で真の人民の指導者としての非凡な才能を遺憾なく示した。1960年8月25日、朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守（リュギョンス）第105戦車師団に対する現地指導から先軍革命指導を始めた金正日同志は、金日成総合大学と党中央委員会で革命活動を行った10余年間、朝鮮労働党を永遠に金日成主席の党に強化、発展させる遠大な構想のもと、党内に主席の思想体系を確立することを党活動の恒久的な主要任務として堅持すべきだとし、これにすべてを服従させるとともに、朝鮮労働党を思想的・意志的に

統一・団結した百戦百勝の鋼鉄の党に強化することに大きく寄与した。特に1960年代末から先軍政治を実施して人民軍を無敵の強兵に育て上げ、国を自立的な国防工業を有した強力な自衛の国に変えた。これは金正日同志が打ち立てた最も大きな業績である。

金正日同志はこの期間、主席の意を体して文学・芸術部門の活動を直接担って指導し、映画革命、歌劇革命を相次いで遂行し、音楽と舞踊、サーカス、美術など文学・芸術の各分野で一大革命を起こして20世紀チュチェ芸術の全盛期をもたらすとともに、社会主義建設を進め、祖国の統一を早め、世界革命を前進させるたたかいにおいても大きな業績を打ち立てた。

朝鮮人民は卓抜した政治力と指導者としての資質と品格を備えた金正日同志を絶対的に信頼し慕い、金日成主席の唯一の後継者として高く戴くことを願った。

金正日同志をチュチェ革命偉業の後継者として高く戴くうえで抗日革命闘士たちは先駆的役割を果たした。

1974年初め、金日成主席と同席した抗日革命の老闘士金一（キムイル）は、主席の志を100％体現し、指導者としての品格を完璧に備えた金正日同志を党の首脳部に高く戴くことを提議し、これは抗日革命闘士と人民の一致した意思であると切々と進言した。

当時、軍隊と人民は金正日同志を「親愛なる指導者」と呼んで絶対的に信頼し、欽慕の念を込めた頌歌を作ってうたい、主席の後継者として推挙する請願書や手紙を毎日のように党中央委員会に寄せた。

革命偉業継承の問題が日程に上がり、金正日同志をチュチェ革命偉業の後継者として高く戴こうとする全党と全軍、全人民の熱

望が高まっていた歴史的な転換の年、1974年2月中旬に朝鮮労働党中央委員会第5期第8回総会が開かれた。

総会では、社会主義経済建設の10大展望目標を達成する問題が討議、決定され、次いで2月13日に党の首脳部を強化する議案が上程された。

抗日革命闘士呉振宇（オジンウ）が立ち上がり、主席のチュチェ思想を完璧に体現し、その高い志を立派に具現している金正日同志を党中央委員会政治委員会の委員に選出することを提議した。また、党中央委員会政治委員会の委員と書記たちも金正日同志を党の首脳部に戴くよう提言した。

総会は、参会者の一致した支持、賛同のもとに全党と全軍、全人民の組織的意思を反映して、金正日同志を金日成主席の後継者として朝鮮労働党の首脳部に高く戴いた。

こうして、金正日同志は金日成主席の唯一の後継者、名実ともに朝鮮労働党と朝鮮革命を導く指導者となったのである。

全党員と人民軍将兵、人民は、金正日同志を主席の後継者として高く戴いたことを民族の一大慶事、大幸運として祝い、金正日同志の思想と指導に従うことを誓った。

主席は1974年7月末、党組織活動家講習会の参加者に送った書簡『党活動をいっそう強化するために』で、金正日同志を党の首脳部に戴いた新たな歴史的転換期に入った党と革命発展の要請に即して、党の基礎をしっかりと固め、党の指導体系を確立するうえで提起される綱領的な課題を示した。

金正日同志を党の首脳部に高く戴き、その指導体系が確立されたことで、朝鮮では革命偉業の継承問題、政治的領袖の後継者問

題が立派に解決された。

第5節　3大革命の深化、発展と社会主義大建設の推進

金日成主席は、社会主義建設を進め、全社会のチュチェ思想化を実現するため、思想、技術、文化の3大革命を深化、発展させるよう導いた。

主席は、まず3大革命に対する指導方法の改善に第一義的な力を入れた。

当時、活動家の思想・意識水準と政治・実務水準は、急速に発展する現実に追いつけずにいた。経済規模が拡大し、人民経済のすべての部門が近代的な科学、技術で装備され、それに伴い社会主義建設が急速に進む現実は、チョンサンリ（青山里）精神、チョンサンリ方法の要求どおり指導を下部に近づけ、政治的・思想的指導と科学的・技術的指導を結びつけて下部の活動家を実質的に支援することを求めていた。

そのため、主席は1972年の秋、党組織から選ばれた活動家と大学生からなる指導グループを組織し、平壌と沙里院（サリウォン）の紡織工場をはじめ軽工業部門の工場に派遣して3大革命に対する指導力を確認した後、1973年2月1日、朝鮮労働党中央委員会政治委員会拡大会議で3大革命グループ運動を展開する方針を示し、主要な工場、企業、協同農場に3大革命グループを派遣する措置を講じた。

3大革命グループは政治的・思想的に、科学的・技術的に能力を備えた党と国家、経済機関の活動家と勤労者団体の活動家、科

学・技術関係者、青年大学生で構成された。

主席は、3大革命グループ運動を展開する活動を推進した。

1973年2月、工業部門3大革命グループ員のための講習と農業部門3大革命グループの協議会を催し、それぞれが遂行すべき課題を具体的に示した。

主席は、3大革命グループの最も重要な課題は、思想革命を徹底的に遂行することであるとし、すべての勤労者を党の革命思想、チュチェ思想でしっかり武装させ、革命化、労働者階級化していくようにすべきであると指摘した。そして活動家と勤労者が技術革命に対する正しい認識をもち、集団的な技術革新運動を展開し、生産工程の機械化、オートメ化を推進するようにすることが技術革命の遂行におけるグループ員の重要な課題であると指摘した。また、3大革命グループ員が文化革命を力強く進めて勤労者の文化・技術水準を高め、生産文化と生活文化を確立する課題も示した。

主席は1973年2月中旬、金鍾泰（キムジョンテ）電気機関車工場に、同年3月には南浦（ナンポ）地区に出向き、現地での3大革命グループ員の活動と生活に心を配り、3月14日には朝鮮労働党中央委員会政治委員会江西（カンソ）拡大会議を招集し、3大革命グループ員が大衆の中にさらに深く入り、彼らの革命的熱意と創造的知恵を発揮させるよう強調した。そして1973年9月、朝鮮労働党中央委員会第5期第7回総会で、工業部門と農業部門に派遣された3大革命グループの活動状況を総括し、3大革命を引き続き深化、発展させる課題を示し、同年12月11日には教育部門に3大革命グループを派遣する措置を講じ、その任務と活動方向を明らかにした。

主席は1975年2月と3月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第5期

第10回総会と工業熱誠者会議で、思想、技術、文化の3大革命課題の遂行において3大革命グループ運動が収めた成果と経験を総括し、この運動を引き続き力強く展開するよう具体的な対策を講じた。

主席は国事を論ずる重要会議にも3大革命グループ員を参加させて重大な任務を与え、活動の過程で収めた些細な成果にも満足の意を示し、称賛し大いに励ました。

3大革命グループ運動が力強く展開されたことで、グループが活動しているすべてのところで3大革命の炎が燃え上がり、勤労者の革命化、労働者階級化と、技術改造、文化建設に次々と新たな奇跡と革新が起こった。同時に、党および国家経済指導機関の活動家の役割はさらに高まり、3大革命グループ員の多くが革命の前衛に成長した。

3大革命の旗のもとに社会主義建設が新たな発展段階に入り、全社会をチュチェ思想化すべき革命任務が前面に提起された現実は、チョンリマ作業班運動をさらに深化、発展させ、新たな高い段階の大衆運動にすることを求めた。

主席は1973年2月、朝鮮労働党中央委員会の部長協議会で、3大革命の遂行で模範を示した工場を表彰するよう指示し、全国すべての工場、企業で3大革命赤旗獲得運動を展開する構想を示した。

主席が構想した3大革命赤旗獲得運動は1975年11月、金正日同志の発議により、社会主義建設のすべての部門に急速に拡大された。

主席は3大革命を深化、発展させる一方、全党と全人民を社会主義大建設へと力強く奮起させた。

主席は1974年2月中旬に開かれた朝鮮労働党中央委員会第5期第8回総会で、社会主義大建設の方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「全党と全人民が総力をあげて社会主義大建設のたたかいを力強く繰り広げ、来年までに6カ年計画のすべての生産目標を繰り上げて達成し、そのあと引き続き社会主義経済建設の10大展望目標をめざして総進軍すべきであります」

社会主義大建設方針は、全党と全人民が総力をあげて6カ年計画を繰り上げて達成し、近い将来に鋼鉄、非鉄金属、石炭、電力、セメント、機械加工製品、水産物、化学肥料、海面干拓、穀物など社会主義経済建設の10大展望目標を達成することであった。

主席は、社会主義大建設方針を貫徹するためには国の総力をあげてすべての部門、すべての単位で新たなチョンリマ速度で総進軍すべきであるとし、この進軍運動で当面、力を集中すべき主要部門を基本建設部門、工業部門、農業部門、輸送部門、水産部門に規定し、この5つの部門で提起される課題を具体的に明示した。そして、全力をあげて社会主義大建設に奮起するよう全党員に朝鮮労働党中央委員会の手紙を送るとともに、税金を完全になくし、工業製品の価格を大幅に引き下げる歴史的な措置を講じた。

総会後、主席は社会主義大建設をめざすたたかいを指導した。

主席は社会主義大建設を円滑に進めるよう政務院の部、委員会に、当該部門の幹部と工場、企業の労働者からなる党指導委員会を設け、それを正しく運営して経済活動に対する党の指導を一段と強化し、すべての部門、すべての単位でテアンの事業体系の要求が貫かれるよう具体的な対策を講じた。

また、社会主義大建設のため5つの部門に力を集中させ、何よりもまず基本建設部門で一大進攻戦を展開するよう導いた。

主席は1974年を建設の年に定めて力を集中させ、基本建設部門の中でも先に達成すべき対象を金策(キムチェク)製鉄所の拡張工事として力を集中させ、同時に北倉(プクチャン)火力発電所の第2段階工事と順川(スンチョン)セメント工場、青年(チョンニョン)化学工場の建設など膨大な基本建設を力強く推進した。

主席は工業部門で革新を起こすため、新しい炭鉱、鉱山を大々的に開発し、既存の炭鉱、鉱山を改造・拡張し、採掘設備と運搬設備の大型化、近代化、高速度化を早急に推進した。また、工業部門で生産工程のオートメ化、遠隔操作化を強力に推進して工業全般を近代的技術の土台のうえに確固と引き上げた。

主席は輸送部門と水産部門でも新たな高揚を起こすため、鉄道の輸送能力を速やかに高める一方、鉄道と自動車、船舶による連携輸送を強め、空中ケーブル輸送、ベルトコンベヤー輸送、パイプライン輸送の3化輸送を広く導入させた。同時に近代的な漁船をより多く建造し、水産業の物質的・技術的基盤をいっそう強化させた。

主席は、1974年度人民経済計画の達成を社会主義大建設の勝利を裏付ける要の問題の一つと見なし、1974年10月初め、朝鮮労働党中央委員会政治委員会で何としても年間計画を必ず完遂するよう強調した。

金正日同志は主席の意を体して70日間戦闘を勝利に導き、緊張していた社会主義大建設初年度、1974年度人民経済計画を成功裏に完遂させた。

こうして、1975年10月の党創立30周年前に6カ年計画をはるかに繰り上げて達成できる確固たる展望が開かれた。

主席は農業部門を主要戦線の一つとし、農業生産に一大飛躍をもたらすよう導いた。

1970年代に入り世界は、異常気象のため食糧危機、農業危機に直面していた。地球全体を襲った異常気象は朝鮮の農業生産にも大きな影響を及ぼした。増大する工業の原料と食糧問題を円滑に解決するためには、異常気象を克服し、農業生産に転換をもたらす必要があった。

主席は1973年の初めから平安北道と平安南道の農村各地を現地で指導し、農業生産を向上させる方途を模索し、同年1月、朝鮮労働党中央委員会政治委員会と黄海南道、平壌市、平安南道、平安北道の農業部門活動家協議会を開き、農業生産に一大転機をもたらすための課題を示した。

主席は農業生産に転換をもたらすため、1973年から直接農業部門の活動を指導し、国の気候風土と農業実態、世界の先進農法に関する全面的な研究、科学的な営農方法に関する深い探求と農作物の栽培試験、絶え間ない農村での現地指導の過程で積んだ豊かな経験、そして農業発展の根本的要求と異常気象が農業に及ぼす影響を深く分析し、先進的かつ科学的営農方法であるチュチェ農法を創出した。

主席は生産性が高く、朝鮮の気候風土に合う新たな優良品種を大々的に育種させる一方、農作物の原種基地と採種基地を整え、種子の供給を一本化する整然とした体系を確立した。また適地適作、適期適作の原則にもとづいて農業を営み、株単位農作を全面

的に取り入れ、科学的な施肥方式を打ち立てるようにした。

主席は、チュチェ農法どおりの農業を営ませるため数多くの協同農場を訪れ、営農準備から育苗、田植え、草取り、取り入れと脱穀に至るまですべての農作業を仔細に見て回った。

主席は農業生産に転換をもたらすため、農村で技術革命を力強く展開して農業の物質的・技術的基盤を固めるよう指導した。

さらに、近代的かつ大規模な金星（クムソン）トラクター工場の拡張工事を進め、連結農業機械工場とトラクター部品工場を設ける一方、小型トラクター工場と自動車工場も拡張させた。また至るところに新たな肥料工場を建て、除草剤と殺虫剤の生産を増大させ、農業部門の技術者、専門家をより多く養成し、他の部門で働く農業技術者を農村に送る措置を講じた。

こうして、農村の物質的・技術的基盤を固めるうえで大きな成果が達成された。1979年にトラクターは耕地面積100ヘクタール当たり平野部で7台、中間部と山間部では6台に達し、農業部門に従事する技術者、専門家も急速に増え、農作業に対する技術的指導が可能になった。

主席は、農業生産を新たな高い段階へと発展させるため自然改造事業を大々的に展開するよう導いた。

1976年9月下旬に開かれた朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、畑地灌漑の完成、段々畑の建設、耕地整理と土地改良、治山治水、海面干拓などの自然改造5大方針を示し、同年10月中旬に行われた朝鮮労働党中央委員会第5期第12回総会では、自然改造事業を強力に推し進める課題を全面的に示した。その後、平安北道、江原（カンウォン）道、咸鏡南道など各道の農村に対する現地指導を行い、全党、

全国、全人民がこぞって立ち上がり、自然改造5大方針を貫徹するよう導いた。その結果、すべての部門に大きな前進がもたらされ、6カ年計画は達成された。1976年の工業生産は1970年に比べ2・5倍に増大し、解放前1944年の1年間に生産していた工業生産物をわずか5日で生産できるようになった。農業部門では毎年大豊作を収め、6カ年計画の穀物生産目標を2年繰り上げて達成した。

第6節　人民軍に対する金正日同志の指導体系の確立、人民軍の戦闘力の強化

金日成主席は、人民軍に対する金正日同志の指導体系を確立することに深い関心を払った。

主席は1960年代末、金正日同志に軍隊の活動を担わせ、金正日同志による人民軍への党の指導体系を確立することに大きな意義を付与した。

1977年8月20日の朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、朝鮮人民軍総政治局に対する金正日同志の指導を強化するため、それにふさわしい新しい体系と秩序を確立した。

主席は人民軍の党政治活動を根本的に改善するよう指導した。

金日成主席は次のように述べている。

「政治活動を優先させるかどうかによって部隊の戦果が左右されます。政治活動を正しく行う部隊ではすべての軍人が自分の任務をよくわきまえ、旺盛な士気をもって勇敢にたたかい、常に戦闘で勝利するものです。しかし政治活動を優先させず、組織活動

を綿密に行わない部隊は戦果を上げることができません」

主席は1976年5月をはじめ機会あるごとに、人民軍の党政治活動に関連したすべての問題を金正日同志に報告し、その結論に従って処理する措置を講じた。そして人民軍内の各級党組織と政治機関をしっかりと固め、その機能と役割を高めるようにした。

主席は、全社会のチュチェ思想化の要請に即して人民軍の党政治活動を力強く繰り広げるよう導いた。

1977年8月の朝鮮労働党中央軍事委員会で、人民軍の党政治活動を改善するための綱領的な課題を示し、次いで11月末の朝鮮人民軍第7回扇動員大会での演説『政治活動を正しく行って人民軍の威力をさらに強めよう』で、全社会のチュチェ思想化の要請に応じて人民軍でもチュチェ思想教育を強化すべきであるとし、軍人の間でチュチェ思想の原理教育と革命伝統教育、階級的教育、社会主義的愛国主義教育を強化するよう強調した。

こうして人民軍での党政治活動は、すべての軍人を党と領袖への忠実性を第一の生命とし、強い革命意識、階級意識を持った真のチュチェ型の革命家に育てる活動となった。

主席は1979年12月に開かれた朝鮮人民軍党委員会第6期第20回拡大総会で、人民軍に対する金正日同志の指導体系の確立において画期的な転機をもたらした。

会議で主席は、人民軍を政治的、軍事的にさらに強化するための演説を行い、党性の鍛練を基本として人民軍を政治的、思想的に強化する課題と、部隊の管理と戦闘準備など人民軍を軍事的にさらに強化するうえで提起される原則的な問題と課題を示した。

会議後、人民軍内では拡大総会の文献の討議が着実に行われ、

その過程で全軍に対する金正日同志の指導体系が確立された。

主席は人民軍の戦闘力を強化する活動を指導した。

主席は5大訓練方針を示し、近代戦の要請に即して軍人の戦闘訓練を強めるよう導いた。

1975年2月中旬の朝鮮労働党中央委員会第5期第10回総会で、人民軍の幹部化、近代化を実現するための5大訓練方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「人民軍のすべての軍人が強靭な革命精神、巧みな戦術、はがねのような体力、百発百中の射撃術を持ち、人民軍の隊内に鉄の軍事規律を確立するという5大方針を貫くならば、人民軍の威力は比べようもなく強化されるでありましょう」

主席は、アメリカ帝国主義が1976年から核戦争に向けた「チーム・スピリット」合同軍事演習を繰り広げている厳しい軍事・政治情勢に対処して、全軍を5大訓練方針の貫徹へと奮起させた。

主席は歩兵大隊の戦闘射撃訓練判定を全軍で行い、その経験にもとづいてすべての区分隊で射撃訓練をはじめ各種の戦闘訓練を活発に行うようにした。そして1977年3月下旬、各軍部隊が歩兵区分隊を任意に選んで戦闘射撃を行わせるようにし、自ら射撃場に出向いて各種兵器の射撃訓練を指導し、訓練で高い成果を上げた区分隊には最高司令官の命令で表彰し、記念写真も撮った。また同月、歩兵区分隊の防御時射撃の訓練を現地で指導し、戦争は天気のよい日を選んでするものではないとし、これから実弾射撃訓練は風の強い日や雨の日、寒い日や、夜間はもちろん、平地や山地でも行わなければならないと指摘した。また、1978年2月中旬には人民軍指揮官に対し、指揮官は地図を持ち、今後戦争が起

こればありうるさまざまの状況を研究し、それを克服する最も効果的な方法を見つけ出すべきだと強調した。

主席は、人民軍のすべての指揮官が抗日遊撃隊式の部隊指揮・管理方法どおり部隊を指揮、管理し、全軍に革命的な軍務生活の気風がみなぎるよう導いた。

主席は1977年2月中旬に最高司令官命令を下し、人民軍指揮官の部隊指揮能力と管理水準を一段と高めて戦闘準備と戦闘力をさらに強化するようにした。主席は命令で、人民武力部と各軍団で各級指揮官の講習を行うようにした。そして各級軍事学校で部隊指揮・管理に関する教育をする措置を講じ、朝鮮人民革命軍の最も立派な指揮官であった呉仲洽（オ ジュンフプ）連隊長をモデルにして、その部隊指揮・管理の模範を全軍が見習うようにさせた。

主席は軍事規定と教範にもとづいて全軍に鉄のような規律を確立するため、1977年11月末に開かれた朝鮮人民軍第7回扇動員大会で、人民軍軍人が軍務生活で守るべき10大順守事項を提示した。

いつ、どこにあっても軍事規定を厳守する問題をはじめ、武器の管理と軍事・政治訓練、政治生活と革命的同志愛、将兵一致、軍民一致の美風を高く発揮する問題に至るまで、人民軍軍人が軍務生活において指針とすべき内容を全面的に集約した10大順守事項は、誰一人の違反をも許さない軍務生活の準則であった。

主席は人民軍の戦闘力を強化するため、中隊を強化することに深い関心を払った。

主席は1973年10月中旬の朝鮮人民軍中隊長、中隊政治指導員大会で『人民軍の中隊を強化しよう』と題する歴史的な演説を行い、中隊を強化するための綱領的な課題を提示した。

演説で主席は、中隊軍人の間でチュチェ思想教育、階級的教育と社会主義的愛国主義教育を強化することについて述べた。同時に軍人を軍事技術的に、肉体的にしっかり準備させることを、中隊を強化する重要な課題として示し、軍事訓練を着実に行って軍人を「一当百」のつわものに育てる課題を示した。

そして勇敢さ、強靭さ、責任感、規律性、組織性、忍耐力、楽天性、団結性、革命性、忠実性を中隊長、中隊政治指導員が備えるべき10項目の戦闘的な道徳・品性であると強調した。

主席は中隊を強化する活動を細やかに指導した。

1977年8月下旬、中隊指揮官のための大講習の開催を発起して具体的に指導し、それを通して中隊長、中隊政治指導員が区分隊の指揮・管理方法と党の組織・政治活動方法を身につけるようにした。また、各軍事教育機関の教育活動を改善し、優秀な中隊指揮官を養成するようにした。

主席は1979年10月下旬に朝鮮人民軍下士官長講習を開催し、それが円滑に進むよう細やかに指導するとともに、自ら終了式にも列席して下士官長の位置と任務を明らかにした。また副小隊長、分隊長の講習を軍部隊別に行い、彼らの軍事実務的水準と能力を高めるようにした。

また上級機関の指揮官が常に中隊に出向いて活動できるよう活動体系を打ち立て、特に責任幹部が先に立って中隊に出向き、実質的に助けるようにした。

こうして人民軍内のすべての中隊は無敵の戦闘隊伍に育ち、人民軍の全般的威力はさらに強化された。

主席が先軍の旗を掲げて人民軍の戦闘力を全面的に強化したが

ゆえに、1976年の「板門店事件」の際、アメリカ帝国主義侵略者との軍事的・政治的対決で勝利し、その年からアメリカ帝国主義が繰り広げた「チーム・スピリット」合同軍事演習により核戦争の暗雲が垂れ込めたときにも、人民軍は社会主義祖国と革命の獲得物を揺るぎなく守ることができた。

第7節　人民政権を強化し、人民経済の主体化、近代化、科学化を促進

金日成主席は、革命と建設の強力な武器である人民政権の強化に深い関心を払った。

主席は1977年12月15日の最高人民会議第6期第1回会議での演説『人民政権をいっそう強化しよう』で、人民政権を強化するうえで提起される理論的・実践的問題を科学的に解明した。

主席は、国家主権の本質と国家主権が人々の地位と役割を規定する基本的要因であることを明らかにした。

主席は、社会主義の国家活動において社会主義的民主主義を徹底的に実施する課題を示した。

社会主義的民主主義を実施するためには、勤労人民大衆を人民政権の活動に広く参加させ、国家政治活動におけるその役割を絶えず高め、社会主義経済・文化建設を推し進めて勤労大衆に充実した物質・文化生活を実質的に保障しなければならないと説いた。同時に、人民大衆の利益を侵し、社会主義的民主主義を阻害しようとするあらゆる敵対行為とは断固たたかうべきであると強調した。

主席は、ブルジョア民主主義と帝国主義者が唱える「人権擁護」論の反動的本質を暴いた。

ブルジョア民主主義は勤労人民大衆のための民主主義ではなく、少数の搾取階級のための「民主主義」であり、従って本来の意味での民主主義ではないと指摘した。また、帝国主義者が唱える「人権」は人民の人権ではなく、人民の敵の人権、勤労大衆を搾取するための人権であり、彼らの言う「自由」は人民の民主主義的自由ではなく、帝国主義者とその手先の破壊活動の自由であると指摘した。

また、人民政権を強化するためには官僚主義に反対してたたかわなければならないとし、そのための具体的な課題を示した。

主席は人民政権を強化する活動を力強く推し進めた。

主席は政権機関の幹部陣容を党と革命に忠実な人で固め、政権機関の権力機能を強化するとともに、すべての国家経済機関の幹部がチョンサンリ精神とチョンサンリ方法どおり活動するよう導いた。そして人民政権が国の経済管理と人民の生活に責任を負う戸主として、経済・文化建設の指導と人民の物質・文化生活の向上に責任を持つようにした。また、1977年2月末から3月初めにわたる朝鮮労働党中央委員会政治委員会で、社会主義順法生活指導委員会を設け、政権機関の法的統制機能を高め、国家の法秩序を確立するようにした。

主席は社会主義経済建設を推し進める一方、人民経済の主体化、近代化、科学化を実現する活動を指導した。

主席は1977年12月中旬に開かれた朝鮮労働党中央委員会第5期第15回総会と最高人民会議第6期第1回会議で、人民経済の主体化、

近代化、科学化を促進する方針と、第2次7カ年（1978～1984）計画の展望目標を提示した。

金日成主席は次のように述べている。

「第2次7カ年計画の基本課題は、人民経済の主体化、近代化、科学化を促進し、社会主義の経済土台をさらに強化し、人民生活を一段と向上させることです」

第2次7カ年計画期間の工業部門の中心的課題は、既存工業の土台を最大限に利用しながら、さらに拡大して工業の主体性を強化し、すべての工業部門をさらに近代化、科学化することであった。農業部門の中心的課題は、自然改造事業を大々的に展開し、農村の技術革命を促進し、農業を工業化、近代化し、農業生産を科学化、集約化することであった。

主席は人民経済の主体化、近代化、科学化を促進し、第2次7カ年計画を遂行する事業を指導した。

主席は1977年12月に「自力更生の革命精神を強く発揮しよう！」というスローガンを示し、幹部と勤労者が不足するものは探し出し、ないものはつくりだし、自らの力と技術、資源で経済建設を進めるよう導いた。

さらに、1978年1月下旬の朝鮮労働党中央委員会第5期第16回総会で、全党員に送る党中央委員会の手紙を採択するようにし、政務院から工場、企業に至るまで整然とした生産指揮体系を確立し、幹部が政治活動、対人活動をすべての活動に優先させ、経済組織活動に取り組むよう指導した。これと同時に、党の経済担当部署をしっかりと固め、各党組織が経済課題の遂行に力点を置いて党活動と経済活動を緊密にさせるようにした。

主席は全党と全人民を新たな展望計画の遂行へと奮起させ、人民経済の主体化、近代化、科学化を促進することに心血を注いだ。

主席は人民経済の主体化を促進するため、茂山(ムサン)鉱山、検徳鉱山など鉄鉱石および非鉄鉱物の生産基地を強固にし、生産の正常化を図るとともに、安州(アンジュ)炭鉱をはじめ大規模な炭鉱に近代的な技術手段と資材、労働力を集中させて石炭生産を大幅に増やすとともに、各地に中小規模の炭鉱と発電所を建設する措置を講じた。

主席は工業の主体性を強化することに深い関心を払い、金策製鉄所の熱間および冷間圧延分工場の建設を終え、金属2次加工品生産基地をより多く整えて金属工業を完備された工業に発展させ、その自立性を高めるようにした。また国内の原料を使用する化学工場を多く新設し、増大する各種化学製品の需要を円滑に満たせるようにした。

主席は人民経済の近代化を促進するため、大安(テアン)重機工場をはじめ多くの機械工場を新設し、近代的な大型および特殊工作機械と工場、企業の中・小設備を国内で製作、供給するようにした。また、電子工業と自動化工業を発展させて、人民経済の近代化に必要な各種の自動化要素と計器・器具を円滑に生産できるようにした。

主席は人民経済の科学化に大きな意義を付与し、科学の発展に大きな力を注いだ。

1978年3月8日、科学研究部門の責任幹部を呼んだ主席は、党の示した人民経済の主体化、近代化、科学化の方針を貫くための科学研究活動において、科学者に課された任務の重要性を深く自覚して発奮すべきであると述べた。そして同年11月23日には科学者、技術者の協議会を招集し、燃料、動力を節約するための研究の成

果を生産に幅広く導入する対策を講じた。

こうして人民経済の主体化、近代化、科学化は急速に進み、第2次7カ年計画の遂行において大きな成果を収めた。1980年9月までに膨大な第2次7カ年計画の3年分の課題が遂行され、1979年度の工業総生産高は1970年の3・8倍に達し、穀物生産も大きく伸びた。

1979年10月、人民経済の各部門を現地指導していた主席は、いかなる名誉や報酬も望まず、ひたすら党と革命のため、祖国と人民のためにすべてを尽くしてきた科学者の気高い精神と業績を知り、彼らこそ党と革命に限りなく忠実なかくれた英雄であると高く評価し、その模範を全国に広めるよう指示した。

金正日同志は主席の意を体して、かくれた英雄の模範を見習う運動を党の重要な戦略的方針とし、これを全党、全人民の運動として強力に展開するよう導いた。

こうして、この運動はすべての部門、すべての職域で力強く繰り広げられ、時代の英雄、時代の功労者が数多く輩出した。この運動を通して全社会の革命化、労働者階級化が大きく促され、幹部の活動方法と作風も改善され、主体的な科学技術が急速な発展を遂げ、社会主義経済建設に新たな高揚が起こるようになった。

第8節　社会主義教育に関するテーゼの発表、社会主義文化の開花、発展

金日成主席は社会主義文化建設において教育に第一義的な意義

を付与し、その全面的な発展のために力を注いだ。

まず、社会主義教育制度を強固にし、高等教育事業を改善することに大きな力を入れた。

主席は1972年7月上旬の朝鮮労働党中央委員会第5期第4回総会で、10年制高等中学義務教育と1年制就学前義務教育を含む全般的11年制義務教育を実施する歴史的な措置を講じ、同年9月から順次実施して1975年9月1日から全国で実施するようにした。そして1976年4月末には『朝鮮民主主義人民共和国幼児保育・教育法』を制定し、幼児をすべて国家と社会の負担で保育する制度を法定化した。同時に高等教育網を拡大し、6カ年計画期間に100万の知識人を養成して民族幹部問題を円滑に解決するようにした。

こうして、1970年代半ばに共和国の教育は高い段階に達し、民族経済と科学・文化を急速に発展させることのできる確固たる展望が開かれた。

主席は長い間、教育事業を指導しながら、社会主義教育に関する思想と理論を提示し、1977年9月5日の朝鮮労働党中央委員会第5期第14回総会で、それを教育事業に具現して得た経験を集大成した古典的著作『社会主義教育に関するテーゼ』を発表した。

主席は、テーゼで、社会主義教育学の基本原理を明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「社会主義教育学の基本原理は人々を革命化、労働者階級化、共産主義化することである。つまり人々を共産主義的革命思想で武装させ、そのうえで深い科学知識と壮健な体力を持たせることである」

社会主義教育の目的と使命は、人々を社会主義思想で武装させ、

それにもとづいて深い科学知識と強健な体力を備えさせることである。

主席は、社会主義教育事業を円滑に進めるためには、第1に教育において党性、労働者階級性を具現し、第2に教育において主体性を確立し、第3に教育と革命実践を結びつけ、第4に社会主義国家が責任をもって教育事業を進める原則を堅持しなければならないと述べた。

そして、政治・思想教育を社会主義教育の最も重要な内容として規定し、政治・思想教育において重要なのは生徒・学生をチュチェ思想でしっかり武装させて科学的かつ革命的な世界観を身につけさせ、革命教育を強化することであると指摘した。

また社会主義教育においては科学・技術教育を強化することが重要であり、一般知識教育と専門知識教育を強めなければならないと強調した。そして、体育も重視する必要があるとし、学校体育では生徒・学生の体力を鍛え、均整の取れた身体の発育に重点を置くべきであると述べた。

主席は、社会主義的教育方法を具体的に示し、教育方法で重要なのは啓発式教授・教育を行い、理論と実践、教育と生産労働を緊密に結びつけ、組織生活、社会・政治活動を強化するとともに、それを授業と密着させることであるとし、同時に学校教育と社会教育を結びつけ、就学前教育と学校教育、成人教育を並行させることであると強調した。

またテーゼで、社会主義教育制度を強固にし、教育機関の機能と教員の役割を高め、教育事業に対する党の指導と国家的保障、社会的支援を強化する課題を示した。

主席は社会主義教育テーゼの発表後、教育事業を一段と発展させるための活動を指導した。

1978年10月初めの全国教育活動家大会で演説し、社会主義教育テーゼを貫徹するために、教育の質を高め、教育の物質的条件を十分に保障し、全社会をインテリ化するため積極的に努力し、教育事業に対する党の指導を強化しなければならないと述べた。また、教育テーゼが発表された日を教育節に定め、毎年この日を契機に教育テーゼの実行状況を総括することを制度化した。

こうして、社会主義教育学の原理が貫徹され、教育の質が改善され、幼稚園から大学に至るまでの教育体系が確立され、国の教育網はいっそう稠密になった。1970年に比べ1980年に大学は129校から170校に増え、高等専門学校は481校新設されて有能な技術者、専門家がより多く養成されるようになった。全国各地に託児所と幼稚園網が完備し、すべての幼児を国家と社会の負担で保育できるようになった。

主席は科学・技術の発展にも力を入れた。

1972年12月上旬、自然科学部門の活動家協議会での演説『わが国の科学・技術を発展させるためのいくつかの課題』をはじめ一連の著作で、科学研究活動の基本的方向と方法を明らかにした。

主席は、科学研究活動においては既存の経済的基盤を有効に利用して人民経済の自立性と主体性を強化し、技術革命を新たな高い段階へと発展させ、科学を世界的水準まで引き上げるのに必要な科学・技術上の問題を解決することに力を注ぐべきであると指摘した。そして、科学研究活動においては主体性を確立し、科学者、技術者を革命化、労働者階級化しなければならないと強調した。

また、科学者、技術者の研究チームを人民経済の各部門に派遣して、懸案の科学・技術上の問題を解決するようにし、先端科学を研究、指導する新しい機関を設け、科学研究活動に必要な条件と設備を十分に保障するための措置を講じた。

その結果、科学研究活動で大きな成果を収めた。

社会科学部門ではチュチェ思想の偉大さと独創性がさらに深く解明され、政治経済学と歴史学、文学と語学、法学など社会科学の各分野でも新たな研究成果を収めた。

自然科学部門では、主体的な冶金方法が発明され、大自然改造事業に必要な近代的な機械設備が開発され、国内の原料による合成ゴム工業と新たな化学繊維工業を創設する研究活動も大きな成果を収めた。作物の育種・栽培方法などでも科学・技術面の新たな問題が数多く解決された。

主席は文学・芸術を全面的に発展させることに深い関心を払った。

1970年2月中旬の科学・教育および文学・芸術部門活動家協議会での演説『教育と文学・芸術は人びとの革命的世界観の確立に貢献すべきである』など一連の著作で、社会主義的文学・芸術を発展させる方向と課題を明示した。

主席は、作家、芸術家は勤労者と青少年の革命的世界観の確立に役立つ革命的な文学・芸術作品をより多く創作するため努力を惜しんではならないと述べた。

そして文学・芸術部門では、党の唯一思想体系を確立し、党性、労働者階級性、人民性の原則を堅持し、文学・芸術を民族的形式に現代的美感を結合させ、社会主義リアリズムの創作方法を駆使することで思想性と芸術性の高い革命的な文学・芸術作品を数多

く創作し、文学・芸術を大衆的に発展させていかなければならないと指摘した。

また、テーマを正しく設定すること、革命伝統をテーマにした作品と社会主義建設を扱った作品および革命闘争に関する作品の創作を同時にとらえること、革命と建設の真の主人公の典型を創造し、人々の革命的世界観の形成および革命化の過程を深く掘り下げて描くこと、革命的な大作を創作することなど、革命的な文学・芸術作品の創作において提起される諸問題の解決策を明確にした。

主席は社会主義的文学・芸術の発展のため、機会あるたびに、軍人と勤労者を革命化し、党の軍事路線の貫徹に寄与する優れた映画を数多く制作し、歌劇、文学、音楽、舞踊、美術、サーカスなど文学・芸術のすべての分野において主体的文芸思想を具現して新たな転換をもたらす課題を示した。

文学・芸術各分野の創造活動に深い関心を払い、作品の内容と人物形象の細部に至るまで具体的に指導し、1979年10月15日には自作詩『妙香（ミョヒャン）山の秋日に』を発表した。

主席は、人民保健医療事業を改善し、社会主義的生産文化と生活文化を確立するよう導いた。

1971年4月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第5期第2回拡大総会で、保健医療事業改善に向けた画期的な対策を講じ、党の予防医学の方針を貫徹するよう医療従事者を奮起させた。また1980年4月の最高人民会議第6期第4回会議で『朝鮮民主主義人民共和国人民保健医療法』を制定して、保健医療事業の成果を法制化し、人民保健医療事業を発展させる強力な武器をもたらした。

こうして、医療・予防と医療奉仕活動は一段と改善され、都市と郡機関所在地では病院が拡充され、農村の里での病院化が実現した。勤労者と幼児・児童の健康は増進し、住民の平均寿命は解放前より35年も延びて73歳に達した。

主席は、1973年3月の朝鮮労働党中央委員会政治委員会江西拡大会議などの会議で、社会主義的生活文化と生産文化を確立する課題を示し、平壌電線工場など数多くの工場、企業や都市、農村を訪れ、生産文化と生活文化、社会主義的な生活様式と気風を樹立するよう導いた。

その結果、社会主義的な文化が全面的に開花、発展し、勤労者の全般的文化・技術水準も急速に向上していった。

第9節　祖国統一の3大原則と5大方針を貫徹するたたかい

1970年代初めの内外情勢は、朝鮮人民の祖国統一の偉業に有利に変化した。

当時、共和国の革命基地は盤石のごとく固められ、祖国の自主的平和統一をめざす南朝鮮人民のたたかいは強化され、朝鮮人民の祖国統一偉業への国際的支持も日増しに強まっていった。

アメリカ帝国主義の侵略と戦争の策動はベトナムをはじめ世界の至るところで破綻し、アメリカ国内でも反戦運動がより高まり、そのうえ経済低迷とインフレなど経済危機が続いていた。

アメリカ帝国主義は活路を求めて、見せかけの「平和戦略」を

持ち出し、「冷戦」から「平和」、「対決」から「対話」と「共存」に向けた政策転換を標榜するようになった。南朝鮮の支配層は人民の強力な反ファッショ民主抗戦による深刻な支配危機から脱し、「国際孤児」の境遇から抜け出すため、うわべだけでも「平和」と「協商」の看板を掲げざるを得なかった。

新たな情勢に対処して金日成主席は、以前から構想を練ってきた祖国統一の3大原則を提示し、それを貫徹するたたかいを指導した。

主席は1971年8月6日、カンボジア国家元首でカンボジア民族統一戦線議長のノロドム・シアヌーク殿下を歓迎する平壌市民集会での演説『アメリカ帝国主義に反対するアジアの革命的人民の共同闘争は必ず勝利するであろう』で、南朝鮮の民主共和党を含むすべての政党、社会団体および個別の人士といつでも接触する用意があることを明らかにした。

新たな協商方針を実現するため主席が主動的な措置を講じたことから、南朝鮮支配層は対話の場に出てこざるを得なかった。1971年9月から北南赤十字団体の予備会談が開かれた後、これを契機にその後別個に北と南の高位級政治会談が行われた。

主席は1972年5月3日、北南高位級政治会談に参加するため平壌を訪問した南朝鮮側代表との談話で、統一問題解決の基礎となる祖国統一の3大原則を明示した。

金日成主席は次のように述べている。

「わたしは、わが国の統一問題は必ず外部勢力の干渉を受けることなく自主的に、民族の大団結をはかる原則にもとづき、平和的方法で解決すべきだと認めます」

自主、平和統一、民族大団結の祖国統一の3大原則は、統一問題を民族の意思と利益に即して民族自らの力で、そして平和的な方法で解決する、という根本的立場と方途を示した祖国統一のための憲章であった。

1972年7月4日、主席が示した祖国統一の3大原則を基本的内容とする南北共同声明が発表された。

主席は、共同声明が発表され、北と南の対話が始まったのを機に祖国統一の3大原則を貫徹する活動を積極的に推し進めた。

主席は、1972年7月の朝鮮労働党中央委員会第5期第4回総会で、わが方の代表が熱い同胞の情をもって南側代表に接すること、すべての問題を真摯かつ虚心坦懐に討議して会談を成功させることなど、北と南の接触と対話で堅持すべき原則的問題を明らかにした。そして、同年11月の北南高位級政治会談に参加した南側代表との談話で、北と南は対話するだけにとどまらず、今一歩踏み出して協力を実現すべきであると指摘したうえで、政治や経済、文化分野における協力で提起される重要な問題を明らかにした。

アメリカ帝国主義の教唆のもと、南朝鮮支配層はわが方の公明正大な提言をすべて拒否し、対話は重大な局面を迎えた。彼らは南北共同声明が発表された当初から「信頼に値しない紙切れ」だとし、「対話のある対決」、「対話のある競争」、「対話のある共存」を唱えた。一方、対話の裏でアメリカ帝国主義侵略軍の永久駐屯を哀願しながら戦争の準備を加速し、1972年10月にはファッショ的な「維新体制」をつくりあげ、自主、民主、統一をめざしてたたかう愛国者と人民を弾圧、虐殺する蛮行を働いた。そして1973年6月23日には、北と南の「国連同時加盟」を骨子とする

「特別声明」なるものを発表し、祖国の分裂を永久化する政策を公然と宣言した。そのため、ようやく開かれた統一のための対話は決裂状態に陥り、朝鮮民族は永久に二つに分裂される危険に直面した。

主席は民族の分裂を回避するため、新たな対策として祖国統一の5大方針を打ち出し、それを貫徹するたたかいを力強く推し進めた。

また1973年6月23日、チェコスロバキア社会主義共和国の党および政府代表団を歓迎する平壌市民集会での演説『民族の分裂を防ぎ祖国を統一しよう』で、祖国統一の5大方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれが提起した祖国統一の5大方針は、北と南の軍事的対峙状態の解消と緊張の緩和、北と南の多面的な合作と交流の実現、北と南の各階層人民と諸政党、社会団体の代表からなる大民族会議の招集、高麗（コリョ）連邦共和国の単一国号による南北連邦制の実施、高麗連邦共和国の単一国号による国連加盟をその内容としています」

主席は、祖国統一の5大方針を貫徹するためのたたかいを指導した。

主席は、大民族会議の招集を統一問題解決の重要な方途として打ち出し、そのための合理的な案を提示した。

1973年7月に開かれた祖国統一民主主義戦線中央委員会第59回拡大会議で、南朝鮮の各階層人民と各政党、社会団体および海外同胞団体と海外同胞に大民族会議の招集を提議するアピールを採択するようにし、同年11月に朝鮮労働党と朝鮮民主党、天道教青友党の共同の名義で、南朝鮮の各政党に大民族会議の招集を提案

する書簡を送る措置を取った。

そして1975年10月の朝鮮労働党創立30周年記念大会で、国と民族を愛し、祖国の統一を望む人であれば、誰もが思想と理念、制度と信教の違いを乗り越えて祖国統一の旗のもとに全国的な民族統一戦線の結成に向けて立ち上がるよう呼びかけた。

主席はアメリカ帝国主義と南朝鮮支配層の永久分裂策動を粉砕し、祖国統一に有利な条件を整えるための措置を講じた。

1974年3月の最高人民会議第5期第3回会議で、朝鮮民主主義人民共和国とアメリカの間で平和協定を締結することを提案し、それに関する書簡をアメリカ議会に送るようにした。その一方、わが党の祖国統一方針を海外に広く宣伝し、共和国政府の備忘録と外務省スポークスマンの声明を通して内外の分裂主義者の永久分裂策動を全面的に暴露するようにした。

そして、国連舞台を通しても内外の分裂主義者の凶悪なたくらみを粉砕する対外活動を展開するよう導いた。

その結果、アメリカ帝国主義と南朝鮮支配層の永久分裂策動は大きな打撃を受け、国際舞台で朝鮮人民の祖国統一偉業を支持する連帯運動はさらに強化された。また1973年の国連第28回総会では、朝鮮に対するアメリカ帝国主義の侵略と内政干渉の道具である「国連韓国統一復興委員団」を解体する決議が採択され、1975年の国連第30回総会では「国連軍司令部」を解体し、南朝鮮を占領している外国軍隊をすべて撤退させ、停戦協定を平和協定に改めるよう求めるわが方の決議案が採択された。これは国連史上かつてない画期的な出来事であった。1973年9月と1976年8月の第4回および第5回非同盟諸国首脳会議は、朝鮮労働党の祖国統一方

針に全幅の支持を寄せる決議を採択した。また、世界の数多くの国と地域で朝鮮人民との連帯委員会、朝鮮統一支持委員会などの連帯団体が組織された。そして、1977年6月には国際組織として「朝鮮の自主的平和統一のための国際連絡委員会」が創設され、朝鮮人民の祖国統一をめざすたたかいを支持する世界大会が相次いで開かれた。

主席は、南朝鮮支配層の背信行為によって沈滞状態に陥った北南対話を成功させるため、引き続き忍耐強い努力を傾けた。

1978年9月9日の共和国創建30周年記念中央慶祝大会で、われわれはアメリカとの対話の扉も開いており、南朝鮮の当局者、諸政党との対話の扉も開いていると述べ、より幅広い協商を提案した。また1979年1月には、祖国統一民主主義戦線中央委員会が祖国の自主的平和統一を促進するための4項目の提案を盛り込んだ声明を発表し、それを実現するための予備的協議機構として従来の調整委員会に代わる民族統一準備委員会の結成を提起するようにした。

しかし南朝鮮支配層は、この公明正大な協商案に終始反対し、ようやく再開された北と南の対話を再び決裂させた。

主席が示した祖国統一方針と方案に励まされた南朝鮮の革命家と人民は、反統一勢力の策動に対処して強力な反ファッショ民主化闘争を繰り広げた。

1979年10月から釜山（プサン）、馬山（マサン）、ソウル、光州（クァンジュ）など南朝鮮各地で激しく展開された人民の反ファッショ闘争は、ついに朴正熙（パクジョンヒ）逆徒を破滅に追い込み、民主主義と祖国統一の敵に大きな打撃を与えた。特に1980年5月には光州で大衆蜂起が起きた。この蜂起に

は30余万の青年学生と市民が参加し、全羅（チョンラ）南道17の市、郡と全羅北道の各地へと広がっていった。蜂起者は光州市を完全に掌握し、10日間も武器を手にして勇敢にたたかった。

光州人民蜂起は、南朝鮮のファッショ支配基盤を大きく揺るがし、南朝鮮人民の不屈の英雄的気概を示威し、敵のいかなる暴圧も自由と民主主義の実現をめざす人民大衆の志向と願望を押さえ込むことはできないということを実証した。1970年代の祖国統一の3大原則と5大方針を貫徹するたたかいを通して、外部勢力の干渉を退け、民族自らの力で国の統一問題を平和的に解決するための朝鮮労働党と人民の闘争はいっそう強まっていった。

第10節　自主性を擁護する世界人民との団結の強化

1970年代に入り、国際舞台では新たな変化が生じていた。

新たに独立した国々が相次いで国際舞台に登場し、自主性を志向する人民のたたかいはかつてない幅と深さで繰り広げられた。恐れをなした帝国主義、支配主義勢力はこれを押しつぶそうと、世界各地で侵略と干渉、転覆、破壊行為を絶えず強行した。彼らは「支援」と「保護」を口実に発展途上諸国間の紛争に競うように飛び込み、内政に露骨に干渉し、特に主要資源地帯と軍事戦略上の要衝を手に入れようと角逐戦を繰り広げ、その国の自主権を蹂躙した。そのため、世界人民の自主の偉業は重大な挑戦に直面することになった。

新たな情勢は、自主性を踏みにじる帝国主義、支配主義者の策

動を粉砕し、世界人民の自主偉業の勝利を達成するための闘争を強力に展開するよう求めていた。

金日成主席は、古典的著作『朝鮮労働党創立30周年に際して』と『チュチェ思想の旗を高く掲げ、社会主義建設をさらに促進しよう』をはじめ一連の著作で、自主性の旗のもとに世界革命を促進するうえで提起される原則的問題を示した。

主席は、自主性の擁護を世界人民の共通の闘争目標として提起した。

自主性は人間の生命であるだけでなく、国家と民族の生命でもあり、自主性を擁護しなければ、世界的規模であらゆる支配と従属を一掃し、すべての人民が自主的で創造的な生活を享受する新世界を建設することはできない。

そのため主席は、すべての革命闘争はあらゆる支配と従属に反対し、自主的で創造的な生活を建設することに向けられなければならないとした。

そして、支配主義は自主性を志向する現代の趨勢に逆行する反革命的な潮流であり、世界の革命的人民の共通の闘争対象であると指摘した。

いかなる形態と国の大小、社会体制にかかわりなく、他国の自主性を踏みにじり、他民族と人民を抑圧し統制しようとするのはすべて支配主義である。支配主義を克服せずには、民族の独立を達成し国の自主的発展を遂げることもできず、あらゆる支配と従属のない自主化された世界を建設することもできない。

主席は、自主性を擁護する世界のすべての革命的人民と発展途上諸国は、あらゆる支配勢力に攻撃の矛先を向けなければならな

いと強調した。

そして、自主化した世界を建設するため、「自主性を擁護する世界の人民は団結しよう！」というスローガンのもとに世界の人民が固く団結することを呼びかけた。

平和と民主主義、民族独立と社会主義をめざす闘争は、その性格と目的、解決すべき課題がそれぞれ異なっていても、本質においてはいずれも自主性を擁護するたたかいである。自主性を擁護するすべての革命勢力は固く団結してこそ、支配主義勢力に対する反帝・自主勢力の決定的な優勢を確保し、支配主義勢力の反革命的策動を打ち破って自主偉業の勝利を達成することができるのである。

主席は、社会主義諸国間の統一と団結を成し遂げるため忍耐強い努力を傾けた。

1970年代に入っても、社会主義諸国間の意見の相違は克服されなかった。

主席は、社会主義諸国間の統一と団結を成し遂げるためには自主性の原則を堅持すべきであると指摘したうえで、すべての社会主義国は、第1に帝国主義に反対し、第2に植民地民族解放運動と国際労働運動を支持し、第3に社会主義、共産主義をめざして引き続き前進し、第4に内政不干渉と相互尊重、平等と互恵の原則を守りながら団結しなければならないと強調した。

主席は、社会主義諸国間の友好・団結を強化するため精力的に対外活動を行った。

1971年6月、ルーマニア共産党総書記を団長とするルーマニア社会主義共和国党および政府代表団をはじめ、チェコスロバキア、

ブルガリア、ドイツ民主共和国、ユーゴスラビアなど朝鮮を訪問した東欧社会主義諸国の高位級の党および政府代表団と会見し、それらの国の党・政府との友好・協力関係を発展させ、社会主義諸国間の統一と団結を強化する立場を表明した。

また1975年4月中旬から下旬にかけて、党および政府代表団を率いて中華人民共和国、同年5月と6月にルーマニア、ブルガリア、ユーゴスラビアなど東欧社会主義諸国を公式訪問し、自主性にもとづいて社会主義諸国間の意見相違をせばめ、友好・協力関係と団結を強化するために積極的な対外活動を行った。

こうして、朝鮮民主主義人民共和国と社会主義諸国の間の友好・協力関係はさらに強化されるようになった。

主席は非同盟運動の強化、発展にも大きな力を注いだ。

非同盟運動が歴史舞台に登場した当初からその強化、発展に深く関心を寄せてきた主席は、1974年5月の朝鮮労働党中央委員会政治委員会拡大会議で、非同盟運動への加盟方針を示し、その実現のために具体的な対策を講じた。

こうして共和国は、1975年8月にペルーの首都リマで開かれた非同盟諸国の外相会議で全会一致で正式の加盟国となった。

主席は1975年12月中旬に発表した古典的著作『非同盟運動はわれわれの時代の強大な反帝革命勢力である』をはじめ一連の著作で、非同盟運動を発展させるうえで提起される重要な課題を明らかにした。

主席は、非同盟諸国にとって最も重要な課題は帝国主義、植民地主義に反対するたたかいをさらに強化することであるとしたうえで、すべての非同盟国は固く団結して帝国主義、植民地主義に

反対する共同闘争を展開し、非同盟諸国間の経済・技術協力を強化して国の自主的発展をはからなければならないと強調した。

主席は、帝国主義・支配主義勢力の分裂策動によって非同盟運動が重大な試練に直面したとき、数多くの非同盟諸国の指導者との会談と談話などで、非同盟運動の統一と団結を実現するためにはすべての加盟国がこの運動固有の伝統と特性を守り、自主性を堅持し、支配主義勢力の「援助」に眩惑されたり、離間・分裂策動に乗せられてはならないと述べた。さらに、紛争はあくまで団結の理念にもとづいて協議の形で解決し、互いに内政干渉をせず、特権的地位を求めないことを原則に広範な統一戦線を結成し、あらゆる支配主義勢力の侵略と干渉に対しては団結という戦略で対抗すべきであると指摘した。また、新しい国際経済秩序を確立するために努力し、国際政治関係においても列強の特権と専横に反対してたたかわなければならないと強調した。

主席は発展途上諸国、帝国主義に抗してたたかう国々との友好・協力関係を発展させることに深い関心を払い、こうした国の人民のたたかいを積極的に支持、声援した。

主席は1970年代に朝鮮を訪問したカンボジア、アルジェリア、トーゴ、シリア、マダガスカル、ベニン、ガイアナ、セイシェル、モザンビーク、バングラデシュなど多くの発展途上諸国の国家元首、政府首班と会見し、民族の独立を強固にし、新社会の建設と反帝・自主偉業を実現するための貴重な経験を伝え、こうした国々の自主的発展と民族的繁栄をめざすたたかいを大いに励ました。

主席は1975年5月下旬から6月初めにかけて、アフリカのアルジ

ェリア、モーリタニアを訪問して友好・協力関係を発展させ、自主性を擁護する世界の革命的人民との団結の強化に大きく寄与した。

また、カンボジア、マダガスカル、ナミビア、タンザニア、トーゴ、モザンビーク、ジンバブエ、ザンビア、ギニア、ブルキナファソ、ナイジェリア、ベニン、エチオピア、ウガンダ、ガイアナなど多くの発展途上諸国に農業、建設、教育、芸術、スポーツなど各部門の技術者、専門家を派遣し、農業と灌漑施設の建設など経済、文化建設の分野で誠意ある支援を行った。

1973年5月と10月にはアメリカ帝国主義とイスラエル侵略者に抗してたたかうエジプト人民とシリア人民を誠心誠意支援した。

共和国は1970年代に66カ国と新たに外交関係を結び、多くの国との経済・文化交流と協力を拡大、発展させた。さらに、国内の各団体と機構は国際民主団体、経済協力機構、国連専門機構など150余の国際機構に加盟して反帝・自主をめざす活動を積極的に展開した。

こうして、世界各国との友好のきずなはさらに強固なものになり、朝鮮人民の革命の偉業に対する国際的な支持者、共鳴者はかつてなく増大した。

第11章　全社会のチュチェ思想化を促進するための活動
（1980年10月～1989年12月）

第1節　朝鮮労働党第6回大会、全社会のチュチェ思想化を革命の総体的任務として明示

金日成（キムイルソン）主席は、1980年代に党と革命の発展に新たな転換がもたらされていた歴史的な環境の中、1980年10月10日から14日まで朝鮮労働党第6回大会を開催した。

主席は大会で行った党中央委員会の活動報告で、第5回党大会以後、革命と建設で達成した成果と経験を全面的に総括し、党と人民に提起される新たな革命路線と闘争課題を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「全社会のチュチェ思想化は、朝鮮革命の総体的任務であります。勤労人民大衆の自主性を実現するための労働者階級の革命偉業は、全社会をチュチェ思想化することによって初めて最終的に完成されます」

主席は、全社会をチュチェ思想化するためには自主的立場と創造的立場を堅持し、思想、技術、文化の3大革命路線を貫徹しなければならないと指摘した。

そして、全社会のチュチェ思想化を実現するために社会の全構

成員を革命化、労働者階級化、インテリ化し、人民経済を主体化、近代化、科学化する課題を示した。

また、1980年代の社会主義経済建設の基本的課題を示し、近い将来、年間1000億ｋＷｈの電力、1億2000万トンの石炭、1500万トンの鋼鉄、150万トンの非鉄金属、2000万トンのセメント、700万トンの化学肥料、15億メートルの織物、500万トンの水産物、1500万トンの穀物を生産し、今後10年間に30万ヘクタールの海面干拓を行うという社会主義経済建設の10大展望目標と、それを実現するための人民経済各部門の課題を示した。

主席は報告で、祖国の自主的平和統一を実現するためのたたかいを推し進めることについて述べ、祖国統一の3大原則にもとづいて高麗（コリョ）民主連邦共和国を創立するという新たな統一案を提示した。

高麗民主連邦共和国は、北と南がともに相手側に現存する思想と体制を認める基礎のうえで、双方が同等の資格で参加する民族統一政府を樹立し、そのもとで北と南が同等の権限と義務を有し、それぞれが地域自治制を実施する連邦形式の統一国家である。

主席は連邦国家の創立に関する諸問題を全面的に明らかにし、高麗民主連邦共和国が実施すべき10大施政方針を提示した。そして連邦国家が政治、経済、文化、軍事、人民生活、対外関係などの各分野において実行すべき課題を示し、高麗民主連邦共和国は自主、民主、中立、非同盟、平和愛好の国家となるであろうと言明した。

主席は報告で、反帝・自主勢力の団結を強化し、世界革命を発展させるうえで提起される重要な問題を明らかにした。

主席は、帝国主義者、支配主義者の侵略と戦争政策に反対し、

世界の平和と安全を守るために、世界のすべての新興諸国が自主性を堅持し、帝国主義に対して原則的立場を堅持し、非同盟運動を拡大、発展させるうえで提起される原則的問題を明らかにした。

そして、社会主義勢力と国際共産主義運動の統一と団結を実現するうえで堅持すべき原則を提示し、自主、親善、平和を根本理念とする朝鮮労働党の自主的な対外政策を改めて明確にした。

また、チュチェ思想の旗を高く掲げて自主的な対外政策を引き続き実施し、共和国の自主権を尊重する世界各国との友好関係を発展させ、世界の恒久平和と安全を守るために積極的にたたかい、一切の支配と従属に反対し民族の独立と新しい社会の建設をめざしてたたかう世界各国人民を積極的に支持する立場を明らかにした。

主席は報告で、全社会のチュチェ思想化の要求どおり党活動をさらに強化するための課題を示した。

党活動において最も重要な課題は、全党に唯一思想体系をさらに強く確立することであると指摘した。

主席は、党の唯一思想体系の確立を党建設の基本路線とし、この活動を引き続き力強く推し進めなければならないと述べた。

そして、全党に唯一思想体系を確立するためには、すべての党員をチュチェ思想で武装させ、チュチェ思想にもとづく党隊伍の思想、意志の統一と革命的団結を強化し、党内に革命的な活動体系と規律を確立しなければならないと強調した。

主席は、党活動における重要な課題はまた、対人活動を強化して党と革命の隊伍を固め、わが党の栄えある革命伝統を立派に継承し発展させ、革命と建設に対する党の指導を強め、党活動の方法を絶えず改善することであると指摘した。

大会は、全社会のチュチェ思想化の要求に沿って党規約を新たに採択した。

大会ではすべての党員と人民軍の将兵、人民の一致した意思と念願により金日成主席が朝鮮労働党中央委員会総書記に再選された。

第2節　第6回党大会の決定貫徹をめざす総進軍、「80年代の速度」の創造

金日成主席は、朝鮮労働党第6回大会の決定を貫徹するための総進軍へと全党と全人民を奮い立たせた。

第6回党大会が提示した膨大な課題を遂行するためには、社会主義建設の各部門で新たな革命的高揚を起こす必要があった。

そのため、主席は1981年の新年の辞で、「朝鮮労働党第6回大会の決定貫徹をめざして総進軍しよう！」という戦闘的なスローガンを打ち出した。

主席は、総進軍の最初の年である1981年度の経済建設における基本的方向を示し、それを実現するためのたたかいを指導した。

金日成主席は次のように述べている。

「今年の社会主義経済建設の基本方向は、第2次7カ年計画を繰り上げて完遂するたたかいを力強く繰り広げる一方、社会主義経済建設の10大展望目標実現の準備を十分に整えることです」

主席は1981年の1年間、現地指導の道を歩み続け、全党、全国、全人民を総進軍へと力強く奮い起こした。

1981年5月下旬から6月上旬にかけて、17日間も咸鏡(ハムギョン)北道の羅(ラ)

津市、先鋒郡、慶興郡、穏城郡、会寧郡、清津市を現地指導し、その道程は100余里に上った。

そして、同年6月には朝鮮労働党咸鏡北道委員会および清津市委員会合同拡大総会を指導し、自分は人民により豊かな生活をさせるために、骨が折れる仕事であっても現地指導を続けていると述べ、幹部は人民のために誠実に働くべきであると強調した。

主席は現地指導の過程で、第2次7カ年計画を繰り上げて完遂し、10大展望目標達成のための準備を整えるうえで各道と人民経済の各部門に提起される課題を具体的に示した。

主席は社会主義経済に対する指導と管理を改善し、生産と建設において新たな高揚を起こすよう導いた。

1980年12月、朝鮮労働党中央委員会第6期第2回総会での結語『社会主義経済建設に対する指導を改善、強化するために』で、経済幹部が経済組織活動を綿密に行うことを重要な課題として提起し、技術指導、設備管理、資材供給、労働の組織を合理的に行い、連携生産と輸送を手ぎわよく手配するよう強調した。また、1981年4月の朝鮮労働党中央委員会第6期第3回総会での結語『テアンの事業体系を立派に貫徹して工場の管理運営を改善しよう』で、テアン（大安）の事業体系を貫徹するうえで提起される課題を示し、同年8月下旬の朝鮮労働党中央委員会政治局会議では、発展する現実の要請に即して工業指導体系を改善、完備し、経済指導を現地に近づけるための実際的な措置として道経済指導委員会を設けるようにした。

主席は、第6回党大会の決定を実行するため、大自然改造という壮大な構想を示した。

1981年10月上旬に行われた朝鮮労働党中央委員会第6期第4回総会で、30万ヘクタールの海面干拓と20万ヘクタールの新しい土地の開墾、西海(ソヘ)閘門と泰川(テチョン)発電所の建設を大自然改造の4大建設課題として提示し、それを実行するために全党、全国、全人民がこぞって立ち上がるよう呼びかけた。

主席は、第6回党大会が示した社会主義経済建設の10大展望目標を達成するためのたたかいを陣頭指揮した。

10大展望目標のうち穀物生産目標の達成を第一の主要課題に位置づけ、その突破口を開くため力を集中するようにした。

主席は営農工程の時期ごとに深い関心をもって農業を指導した。こうして同年、農業部門では不順な自然・気候条件の中でもチュチェ農法の要求どおり農業に取り組んで大豊作を収めた。

主席は、水産物生産目標を達成するためのたたかいを精力的に指導した。

咸鏡南道内の水産事業所を現地指導しながら実態をつぶさに把握し、それにもとづいて1980年12月中旬、現地で朝鮮労働党中央委員会政治局拡大会議を開いて水産業を発展させるための方向と方法を示し、1981年3月中旬には朝鮮労働党中央委員会政治局・中央人民委員会・政務院合同会議を開き、水産業をさらに発展させる問題をとりあげて討議するようにした。そして同年5月中旬の水産・養魚部門の幹部協議会や、6月初めの東海地区水産部門幹部協議会などを指導し、冬季の漁労準備を周到に行うよう指示した。

主席は、10大展望目標で示された織物生産目標を達成するため、軽工業部門で革新を起こすよう指導した。

1982年1月初め、朝鮮労働党中央委員会政治局会議でその年を軽工業の年と定め、全国に軽工業発展の炎を燃え上がらせた。そして同年2月9日に化学工業部門の幹部協議会を開き、化学工業を発展させてビナロンとモビロンをはじめ化学繊維と合成樹脂、合成ゴムなど軽工業の原料と資材の生産で革命を起こすための対策を講じた。

社会主義建設の各部門で一大高揚が起こっていた時期、金日成主席は生誕70周年を迎えた。

金正日（キムジョンイル）同志は、主席の革命的生涯と不滅の革命業績を末長く伝えるため、チュチェ思想塔と凱旋門、金日成競技場などの大記念碑的建造物を立派に建設するよう指導した。

主席は、1982年4月の最高人民会議第7期第1回会議で朝鮮民主主義人民共和国主席に再選された。

そして4月14日、朝鮮労働党中央委員会・朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議合同会議で『全社会のチュチェ思想化をめざす人民政権の任務』と題する施政演説を行った。

主席は施政演説で、共産主義は人民政権に3大革命をプラスしたものであるという有名な命題を提示し、人民政権を強化し、その機能と役割を高め、思想、技術、文化の3大革命を強力に推進することを社会主義建設の総路線として規定し、その貫徹において提起される原則的な問題を明らかにした。

主席は4月15日、生誕70周年に際して朝鮮労働党中央委員会と朝鮮民主主義人民共和国政府が催した宴会で『革命家の一生はたたかいに始まり、たたかいに終わらなくてはならない』という意味深い演説を行い、革命家の人生行路を示した。

主席の生誕70周年を祝って多彩な行事が行われた。万寿台(マンスデ)芸術劇場では主席を迎えて、わが国の芸術家と世界各国の芸術家の合同公演が行われ、主席に対する頌歌が高らかに響き渡った。こうして幕を上げた各国の芸術家によるこの公演は、その後に「4月の春親善芸術祭」として恒例の催しとなった。

主席の生誕70周年は、朝鮮労働党と領袖の周りに一心団結して第6回党大会の決定を貫徹していく朝鮮人民の総進軍を促す契機となった。

主席は高揚した大衆の革命的熱意と創造的積極性をさらに強く発揚させ、「80年代の速度」を創造する運動を導いた。

金日成主席は次のように述べている。

「…われわれに提起されている社会主義経済建設の膨大な課題を立派に遂行するためには、『80年代の速度』を創造する運動を力強く展開しなければなりません」

主席は「80年代の速度」を創造する運動を強力に推し進めるため、1982年10月に全国青年熱誠者会議を、11月にはチョンリマ運動先駆者大会を開催させた。

主席は「80年代の速度」を創造する運動を指導しながら、非鉄金属の生産目標を達成することに第一義的な関心を払った。

非鉄金属の生産目標を達成せずには、他の展望目標を達成するための財源を確保し、経済全般の発展を力強く推し進め、人民の生活を速やかに向上させることができなかった。

主席は1982年6月下旬、鉱業部門幹部協議会を開き、端川(タンチョン)地区で非鉄金属鉱物の生産を増やすための対策を講じた。主席は非鉄金属の生産目標を達成するための突破口を検徳(コムドク)鉱業総合企業所の

第3選鉱場の建設に見いだし、突撃戦を展開して選鉱場の建設を翌年の上半期に完了するという大胆な作戦を示した。

そして、第3選鉱場の建設において重要な問題の一つである大型コーンクラッシャーをはじめ選鉱設備の製作問題に深い関心を向け、1982年8月に龍城（リョンソン）機械連合企業所を訪ね、労働者たちに第3選鉱場に設置する大型コーンクラッシャーを製作する課題を与えた。

また、同年8月末に咸興（ハムフン）で朝鮮労働党中央委員会第6期第6回総会を開き、検徳と端川地区の労働者を励ますとともに、咸鏡南道内の党・行政・経済幹部に課された任務の重要性をはっきりと認識させ、彼らを奮起させた。

主席は会議で、鋼材とセメントをはじめ設備と資材を適時に供給して「80年代の速度」を創造する運動を強力に展開するならば、検徳鉱業総合企業所の拡張工事は早期に完了することができるとし、その具体的な対策を講じた。

こうして選鉱場の建設は本格化し、1983年6月には全般的な機械設備の試運転が行われた。建設者たちは1年足らずの間に海抜1200メートルの山地に第3選鉱場を立派に建設し、新たな社会主義建設速度、「80年代の速度」創造先駆者としての模範を示した。

8月下旬、竣工間近の検徳鉱業総合企業所第3選鉱場を訪れた主席は、1年間で建設したのは奇跡であり、これは「80年代の速度」創造運動の偉大な建造物であり、人民経済の各部門が第3選鉱場建設の速度で前進すれば、社会主義経済建設の10大展望目標を繰り上げて達成することができると確信したと強調した。

検徳鉱業総合企業所第3選鉱場は共和国創建35周年を迎えて完

成し、9月に操業を開始した。

第3選鉱場が建設されたことで、非鉄金属の生産目標を達成できるという確固たる展望が開かれ、10大展望目標の他の目標を達成するためのたたかいも強力に推し進められ、「80年代の速度」創造運動の炎は全国各地により激しく燃え上がるようになった。

主席は、西海閘門の建設を精力的に指導した。

まず、閘門建設の位置を正しく定めることに第一義的な関心を払った。

主席は水利学者と相談し、いろいろ思索をめぐらしたうえで、1981年5月下旬に自ら船で現地に出向き、泥の堆積が少ないクッサルプリ――枇島（ピ）――広梁湾（クァンリャン）の区間に西海閘門を建設することを決めた。

そして船から降りると閘門建設関連者との協議会を開き、西海閘門建設の着工を告げるとともに、建設がいかに大規模かつ困難であっても、人民軍の軍人が取り組むならゆうに成し遂げることができる、と厚い信頼を寄せた。

多くの外国人は、朝鮮が8キロの外海をせき止めて閘門を建設するという話を聞き、果たしてそんな小さな国が、それも専門家でもない銃を扱う軍人が成し遂げることができるのだろうかと耳を疑った。外国のある海洋建築家は、朝鮮がこれほど困難な仮締切り工事を完成すれば、世界各地の空に花火を打ち上げる、とまで言い切った。

1984年4月中旬、建設現場を訪れた主席は、朝鮮式の土堰堤工法、仮締切り工法、止水工法といった新たな工法を示し、水深数十メートルの外海に大規模な閘門を建設する複雑かつ膨大な工事

を急ピッチで進められるようにした。

主席は、祖国から遠く離れた東欧の社会主義諸国を訪問していたときですら西海閘門の建設が気にかかり、雨期に入る前に閘室と越流ダムの基礎工事を終えるよう指示した。そして1985年9月、金正日同志とともに建設現場を訪れ、力を集中して閘室と越流ダムの工事を終わらせ、堤防の最終締切り工事を完成させるための科学的な方途を示した。

軍人たちは、主席の教えどおり工事を進め、わずか5年で8キロの外海をせき止めて西海閘門を完成させた。そうして、世界を驚嘆させる「80年代の速度」、新たな「西海閘門建設速度」を創造するという英雄的偉勲を立てたのである。

主席は1983年8月の経済部門の幹部協議会で、翌年度に社会主義経済建設で力を集中すべき地区として順川（スンチョン）地区、清津地区、咸興地区、安州（アンジュ）地区、南浦（ナンポ）地区の5カ所を指定した。そして、11月末から12月初にかけて行われた朝鮮労働党中央委員会第6期第8回総会で、5地区における建設を翌年度の人民経済計画の中心的課題とし、その遂行のための具体的な対策を提示した。

主席の指導により、1984年に第2次7カ年計画は立派に遂行され、新たな展望目標を達成できる土台が築かれた。この間、工業総生産高は2・2倍に、そのうち生産手段の生産は2・2倍、消費財の生産は2・1倍に高まり、国民所得は1・8倍に増大した。

新たな展望計画の高い目標を達成するには、人民経済の均衡をより円滑に保ち、工業の技術装備水準をいっそう高め、展望計画期間中に高まった鉄鋼材と燃料、動力の需要を満たさなければならなかった。

そのため主席は、1985年と1986年を調整期と定め、新たな展望計画の高い目標を実現するための準備を整えるようにした。

主席は、楽元（ラクウォン）の労働者を、酸素分離機工場を建設し6000立方メートルの酸素分離機を製作するたたかいへと奮い立たせた。

酸素分離機生産の必要性と、機械工業と科学技術発展の熟成した要求を深く洞察した主席は、1981年10月下旬、平安（ピョンアン）北道の採掘設備生産部門の活動家協議会で楽元機械工場に酸素分離機職場を設置する課題を示し、党中央委員会第6期第8回総会では、楽元の労働者が大型酸素分離機の生産課題を必ず遂行するに違いない、という大いなる信頼と期待を表明した。

楽元の労働者と技術者は主席の信頼と期待に応えて大型酸素分離機の製作にこぞって立ち上がり、ついに朝鮮で初めての酸素分離機第1号を完成させた。しかも大型酸素分離機をロット生産できる工場も立派に建設した。

1985年5月上旬、楽元機械連合企業所の楽元酸素分離機工場を訪ねた主席は、労働者たちの労働の成果を高く評価するとともに、深い感謝の意を表した。

主席は調整期の期間、機械工業を速やかに発展させることに大きな力を注ぎ、工作機械の子生み運動を強力に展開するよう導いた。

主席は1985年6月下旬、強力な採掘設備生産基地の一つである5・10工場を現地指導した際、国に1、2台しかない貴重な特殊工作機械をはじめ機械設備の利用率が高くないことを知った。

これを機に全国を沸き立たせるような新たな大衆運動を繰り広げようと構想を練った主席は、6月25日、政務院常務会議、咸鏡北道・清津市党委員会執行委員会、咸鏡北道・清津市行政および

経済指導委員会合同会議を開き、工作機械の子生み運動を全国的規模で展開する方針を示し、この運動を「1985年6月工作機械の子生み運動」と命名した。そして、その指導グループも組織した。

その後、工作機械の子生み運動を大衆運動として繰り広げるべく党中央委員会政治局の決定書も下達した。

こうして、全国至るところで工作機械の子生み運動は活発に展開されるようになり、その過程で龍城機械連合企業所で初めて1万トンプレスが製作された。

「1985年6月工作機械の子生み運動」の炎のなか、「80年代の速度」の要請に即して奇跡が起こり、調整期の経済課題が立派に遂行されたことで、社会主義経済建設でより高い目標を達成するための物質的・技術的基盤が強固に築かれたのである。

第3節　人民軍を政治的、思想的、軍事技術的に強化するためのたたかい、金正日同志の軍指揮体系の確立

金日成主席は朝鮮労働党第6回大会の後、全社会のチュチェ思想化の要求に即して全軍チュチェ思想化のスローガンを提示し、人民軍を政治的、思想的、軍事技術的にいっそう強化するためのたたかいを指導した。

アメリカ帝国主義が1976年から毎年エスカレートさせてきた「チーム・スピリット」合同軍事演習は、この時期に至ってかつてない規模で繰り広げられ、戦争の瀬戸際へと突き進んでいた国

の軍事・政治情勢は、アメリカ帝国主義の侵略策動を粉砕し、チュチェの革命偉業を武力をもって保障するため、人民軍を政治的、思想的、軍事技術的にいっそう強化することを求めていた。

主席は、朝鮮革命の発展と革命武力建設の合法則的要請を反映して、1982年4月25日、朝鮮人民軍創建50周年祝賀宴での演説『チュチェの革命偉業を武力をもってしっかり保障しよう』で、全社会のチュチェ思想化の要請に即して全軍のチュチェ思想化を軍建設の総体的任務として提示し、人民軍を政治的、思想的、軍事技術的にいっそう強化するための課題と方法を明示した。

そして、人民軍軍人に対するチュチェ思想教育、党政策教育、革命伝統教育を強め、人民軍は党の指導に限りなく忠実でなければならないと強調した。また、軍人の戦闘・政治訓練を強化し、近代戦の要求に即して人民軍の技術装備を絶えず改善しなければならない、と指摘した。

主席は、人民軍の政治的・思想的威力を強めることに第一義的な力を注いだ。

主席は戦争勝利の基本的要因は武器ではなく、その担い手である軍人の政治的・思想的優越性であると見なし、終始一貫して軍人に対する政治・思想教育を優先させた。

そして多くの機会に、人民軍内で党の唯一思想体系と金正日同志の指導体系を確立する教育を強化するよう強調した。

主席は、軍人を朝鮮労働党の革命思想、チュチェ思想でしっかり武装させ、党政策教育と革命伝統教育を強めて、すべての軍人が党の路線と政策を断固擁護、あくまで貫徹し、抗日革命烈士の領袖への限りない忠誠心と不屈の闘争精神を見習うようにした。

そして軍人の間で階級的教育をいっそう強化して、彼らが階級意識で武装し、労働者階級的観点と立場を堅持し、搾取制度と帝国主義、階級の敵を憎み、それに反対して断固たたかうようにした。

主席は特に、軍人の間で社会主義的愛国主義教育を強化することに深い関心を払った。

1987年9月、人民軍の一区分隊の指揮官を呼んだ主席は、祖国の一本の木、わずかな土地、一株の作物でも大事にし愛する人であってこそ、真に祖国と人民を愛し、領袖を欽慕し守ることができると述べた。

主席は、人民軍の軍事技術的威力を強化するよう導いた。

主席は、朝鮮人の体質と国の実情に適した軽量で取り扱いやすく威力のある兵器、戦闘技術機材で装備することに基本を置いて人民軍の近代化を進めるようにした。

そして、武力装備を高度に機械化、自動化して、その機動力と打撃力を高めるようにし、特に砲兵の機動力を高めることに大きな力を入れた。

1982年11月中旬、朝鮮人民軍砲兵大会に列席した主席は、党の主体的な砲兵武力建設方針を貫徹して砲兵の戦闘力を各面から強めることを強調し、新しい近代的な火砲を多く開発しなければならないと指摘した。

主席は指揮の近代化と自動化、電子戦の準備にも深い関心を払った。

こうして、人民軍の各軍種・兵種の装備はさらに近代化され、朝鮮人民軍はいかなる強敵が襲いかかってきても一撃のもとに撃滅できる強力な軍事的抑止力を持つようになった。

主席は、全軍に金正日同志の指揮体系を全面的に確立するよう導いた。

主席は1982年6月12日、白頭山麓（ペクトウ）の由緒深い三池淵（サムジョン）で開かれた朝鮮労働党中央軍事委員会で、人民軍に提起される最も重要な課題は、金正日同志の指導に忠実に従うよう指揮体系を確立することである、今、金正日同志は人民軍を党の立場で指導しているが、軍事的にも直接指導するようにしなければならない、現時代は抗日武装闘争を繰り広げた1930年代や、アメリカ帝国主義とたたかった1950年代とは違って軍事科学技術が高度に発達した時代であるため、時代の発展趨勢と軍事に精通し、無比の胆力と天才的な英知、優れた用兵術を備えた金正日同志の軍指揮体系を新たな高い段階で確立することは至極当然なことである、と述べた。

主席は会議後、金正日同志の軍指揮体系を全面的に確立するため、すべての指揮官と軍人が金正日同志に忠実に従うよう導いた。

特に、人民軍内の責任幹部が金正日同志に忠実に従うようにした。1988年2月下旬、朝鮮人民軍総参謀長に任命された抗日革命闘士の崔光（チェグァン）と席をともにした主席は、われわれが白頭の密林で切り開いたチュチェの革命偉業を達成するには金正日同志の指導体系を確立し、全党、全軍、全人民を金正日同志の周りに固く結集させなければならない、人民軍で提起されるすべての問題を金正日同志に報告し、その結論に従って処理しなければならない、と強調した。

主席は、すべての軍事活動を金正日同志の唯一的指導のもとに行っていくよう格別の関心を払った。

1983年の初め、全軍あげての軍事訓練を金正日同志の指導のも

とに実施するようにし、訓練が高い水準で行われるようにした。

すべての人民軍将兵は、金正日同志を武力をもって決死擁護し、金正日同志の命令・指示を決死貫徹する鉄の信念を持って金正日同志の軍指揮体系を確立していった。こうして、全軍が金正日同志の命令・指示に絶対服従し、一糸乱れず行動する革命的な軍指揮体系が全面的に確立された。

第4節　朝鮮労働党を永遠にチュチェの革命的党に強化、発展させるための活動

金日成主席は人民大衆の自主偉業を達成し、党を永遠にチュチェの革命的党に強化、発展させるため、党の唯一思想体系、チュチェの思想体系を確立する活動を引き続き力強く推し進めた。

主席は1983年に発表した古典的著作『チュチェ思想を具現するための朝鮮人民のたたかいについて』をはじめ一連の著作で、チュチェ思想を具現した朝鮮労働党の路線と政策の正当性と生命力を朝鮮革命の実践的経験にもとづいて論証し、党員と勤労者にチュチェ思想の優越性と独創性に対する信念を持たせるようにした。

主席はチュチェの思想体系を確立する一方、党と革命隊伍の統一・団結を絶えず強化していくようにした。

主席は、朝鮮労働党の指導者である金正日同志を中心とする全党の思想・意志の統一・団結をあらゆる面から強化するようにした。

主席は1983年12月下旬の朝鮮労働党中央委員会政治局会議で行った演説と1984年3月中旬の政務院の責任幹部への談話で、現時

点において特に重要なことは、全党と全人民を党中央委員会の金正日同志の周りに固く団結させることであるとし、すべての幹部と党員は金正日同志を中心とする全党の統一と団結を大切にしなければならないと指摘し、抗日革命闘争の時期に青年共産主義者が領袖に忠誠を尽くしたように、指導者に心から忠誠を尽くすべきだと強調した。

主席は、すべての活動を金正日同志に報告し、その唯一的結論に従って処理する革命的な秩序と規律を打ち立てるうえで実践的模範を示した。現地指導に出向いたり、いっとき休息を取ったりするときにも金正日同志に知らせ、外国訪問を終えて帰ってきても、まず金正日同志に訪問の結果を通報した。

こうして、幹部と党員、勤労者の間で金正日同志の指導に忠実に従い、チュチェの革命偉業のためにすべてを捧げてたたかう革命的気風が確立された。

主席は党と革命隊伍の統一・団結を強化するため、大衆との活動に力を入れて広範な大衆を党の周りに固く結集させるようにした。

広範な大衆を党の周りに固く結束させるため、勤労者団体の活動を改善、強化するよう導いた。

主席は1981年10月下旬、朝鮮社会主義労働青年同盟第7回大会での演説『青年はチュチェの革命偉業の頼もしい継承者になろう』と、同年11月末の朝鮮職業総同盟第6回大会での演説『労働者階級は全社会のチュチェ思想化をめざす闘争で中核部隊となろう』など一連の著作で、党と革命発展の要請に即して勤労者団体の役割を高めるための課題と方法を全面的に示し、党中央委員会政治局常務委員会と政治局会議、書記局会議で、勤労者団体の活

動に対する党の指導をさらに強化するための組織的な対策を講じた。

主席は、広範な大衆を党の周りに結束させるため、党活動家の役割を一段と高めるようにした。

主席は、党が人民大衆の運命に責任をもつ母なる党としての本分を果たすようにするため、党活動家が革命的な大衆観点を打ち立てて真の人民の忠僕となり、人民と生死・苦楽をともにしながら大衆を教育し、彼らから学び、大衆の力に依拠してすべての問題を解決していくようにした。同時に、幹部の間で権柄と官僚主義、主観主義と要領主義などあらゆる誤った活動方法と作風を一掃し、党の伝統的な革命的活動方法と作風を確立するための思想教育と思想闘争を強く繰り広げるようにした。その結果、領袖、党、大衆が一つの社会的・政治的生命体として一心団結した力で、革命と建設における困難かつ膨大な課題を立派に遂行していけるようになった。

主席は、朝鮮労働党の栄えある革命伝統を擁護し、それを立派に継承、発展させていくよう導いた。

主席は、革命戦跡と革命史跡をはじめ革命伝統教育の拠点を立派に整備するようにした。

1982年10月に大城山（テソンサン）革命烈士陵を改築、拡張する方向と方法を示し、党中央委員会書記局の指示文を下してこの工事が全党、全国家的な事業として進められるようにし、1984年4月には愛国烈士陵の建設を発起した。

こうして、大城山革命烈士陵は1985年10月に立派に改築、拡張され、1986年9月には愛国烈士陵が落成した。

この時期、主席は革命伝統を継承、発展させるため、抗日革命闘争の時期に朝鮮革命の中心的指導拠点であった白頭山密営を見つけ出すことに格別な関心を払った。

主席は、1986年8月、白頭山地区を訪れ、抗日革命闘争の事績が秘められている革命戦跡を見て回った。8月中旬のある日、小白水橋を渡りながらふと足を止め、この谷間は見覚えがある、調査してみるようにと指示した。その後、小白水谷の発掘作業と抗日革命闘士の実地考証により、そこが朝鮮革命の司令部の位置していた白頭山密営であったことが証明され、金正日同志が誕生した丸太小屋の跡も見つけ出すことができた。

主席は1988年7月下旬、白頭山革命戦跡建設総合計画模型を前にして、白頭山地区を革命伝統教育の拠点として立派に整備するよう指示した。

そして、同年8月10日には復元された白頭山密営を訪れ、貴重な革命事績を全面的に考証し、それを通じて党員と勤労者に対する革命伝統教育を強化するよう指示した。その日、主席は全党、全軍、全人民の一致した意思と念願を反映して金正日同志の生家の後ろの峰を「正日峰」と名づけ、その岩壁に「正日峰」という文字を刻むようにした。

主席は、党員と勤労者の間で革命伝統教育をさまざまな形式と方法で行い、彼らが党の栄えある革命伝統でしっかり武装し断固擁護するようにし、「生産も学習も生活も抗日遊撃隊式に！」という革命的なスローガンを高く掲げて、抗日の革命伝統を社会生活の各分野で具現していくよう導いた。

主席は朝鮮労働党を永遠にチュチェの革命的な党に強化、発展

させるため、党建設の歴史的経験を全面的に集大成し、それをもって幹部と党員をしっかり武装させるようにした。

主席は1986年5月31日、古典的著作『朝鮮労働党建設の歴史的経験』を発表した。

主席は著作で、革命的な党建設の経験を全面的に総括、分析し、朝鮮労働党をチュチェ型の革命的な党に、社会主義社会の導き手に建設するうえで提起される原則的な問題に科学的な解明を与えた。

朝鮮労働党の本質的特性と基本的使命を明らかにし、対人活動を基本とし、全社会に対する政治的指導を実現するのが労働者階級の党建設の根本原理であるとした。

そして、朝鮮労働党が党建設で堅持している基本原則は、第1に党内に唯一思想体系を確立することであり、第2に党が大衆と渾然一体となることであり、第3に党建設において継承性を保つことであると述べた。

また、党の隊伍を組織的、思想的に強化することを党建設の基本的内容、党活動の中心的課題として力強く展開する過程で得た経験、党と人民大衆の統一・団結を実現することを党建設の重要な原則、党と革命隊伍を強化する決定的な保証とし、党と人民大衆の統一・団結を実現した経験、革命と建設において正確な路線と政策を策定、提示し、それらを実行する闘争を巧みに指導した党の指導の経験を集大成した。

そして、チュチェの指導芸術を確立するためのわが党の闘争経験を広め、党活動体系と活動方法、活動作風の原則的な要求と基本的内容を全面的に明らかにした。

主席はまた、党を社会主義社会の導き手にする展望をもって建設していく問題を示し、そのためには党の偉業を世々代々継承していかなければならないとし、ここで基本となる政治的領袖の後継者問題をりっぱに解決した党の貴重な経験と、党が革命伝統の純潔性を固守した経験を分析した。

そして、党を見通しをもって建設するためには、全党をチュチェ思想化し、社会主義社会本来の要求に即して主体的な党建設思想と理論をさらに発展させ、完成させていかなければならないと強調した。

第5節　社会主義経済管理の原則を擁護、貫徹し、社会主義の物質的・技術的土台を強固に築くための活動

1980年代の中ごろ、金日成主席は国際共産主義運動に生じた難局を鋭く洞察し、チュチェの革命の旗を引き続き高く掲げて進むことを内外に厳かにせん明した。

主席は1986年12月の最高人民会議第8期第1回会議が開催される前日、社会主義の完全な勝利のための綱領を打ち出す趣旨について述べながら、一部の社会主義国が社会主義の原則に反して修正主義、改良主義に走っているとし、われわれは革命の旗を引き続き高く掲げ社会主義の完全な勝利をめざして力強くたたかわなければならないと強調した。

主席は1986年12月末、最高人民会議第8期第1回会議で行った施

政演説『社会主義の完全な勝利のために』で、チュチェの革命的な旗を引き続き高く掲げていくための原則と方途を明示した。

主席は、社会主義の完全な勝利を達成することは社会主義建設の合法則的要求であり、資本主義から社会主義への過渡期に遂行すべき歴史的課題であるとし、完全に勝利した社会主義社会は、全社会が労働者階級化され、全人民が国家と社会の平等な主人として自主的かつ創造的な生活を営む完成された社会主義社会であると述べた。そして、完全に勝利した社会主義社会は階級がない社会であり、社会の全構成員の完全な社会的・政治的平等と裕福な物質・文化生活が保障される発達した社会であると述べた。

主席は、社会主義の完全な勝利を達成するうえで基本問題となるのは、人間と社会関係を労働者階級の姿に改造して階級的差をなくし、無階級社会を実現することであるとしたうえで、労働者階級と農民の階級的差をなくすためには、社会主義農村問題に関するテーゼを貫徹し、協同的所有を全人民的所有に変え、生産手段に対する全人民的所有の全一的支配を確立しなければならないと強調した。

主席の施政演説を心に受けとめた軍隊と人民は、「卑怯者去らば去れ、われらは赤旗守る」という革命歌を高らかにうたいながら、チュチェの革命の旗のもとに社会主義の完全な勝利をめざす壮大な進軍を力強く進めていった。

主席は、チュチェ思想の旗のもとに社会主義経済管理の原則を擁護、貫徹するための活動を導いた。

主席は、実践を通じてその正当性と生命力が実証されたテアンの事業体系をはじめチュチェの経済管理システムを固守し、終始

一貫それを貫かなければならないと指摘し、党の経済路線と政策を幹部の確固たる信念とならしめることに第一義的な関心を払った。

主席は、1987年1月の中央人民委員会第8期第1回会議・政務院全員会議第1回会議合同会議で、朝鮮式の経済管理原則を堅持するよう強調し、他国が社会主義建設で右往左往しているからといって、われわれは絶対に動揺してはならず、チュチェ思想の旗を高く掲げて進まなければならないと述べた。また同年3月の化学工業部門の責任幹部協議会では、修正主義、改良主義を排撃し、われわれの方式で生きていくためには、チュチェ思想で武装し、事大主義に反対してたたかわなければならないとし、事大主義に毒されれば他国をあがめ、他国に追従するようになり、他国が修正主義に走れば自分も修正主義に走り、他国が教条主義に陥れば自分も教条主義に陥り、他国が改良主義に走れば自分も改良主義に走るようになる、従って、幹部は事大主義思想に毒されないよう強く警戒しなければならない、と指摘した。そして、党の路線と政策を信念とすることができなければ動揺し、修正主義、改良主義に陥るようになる、幹部は決して他の国が実施している修正主義、改良主義の政策に惑わされてはならず、朝鮮労働党の路線と政策を信念とし、それをあくまで貫徹していかなければならないと強調した。

主席は、1988年9月8日の朝鮮民主主義人民共和国創建40周年記念祝賀報告大会での報告『チュチェの革命の旗を高く掲げ、社会主義・共産主義偉業を最後まで成し遂げよう』をはじめ一連の著作で、社会主義経済管理の基本原則を再び明らかにしたうえで、チュチェの経済管理システムを擁護、貫徹するうえで提起される

問題について具体的に説き明かした。主席は、社会主義経済に対する指導と管理において政治的指導と経済的・技術的指導、国家の統一的指導と個々の単位の創意性、民主主義と唯一的指揮、政治的・道徳的刺激と物質的刺激を正しく結合させなければならないと強調し、幹部たちがいささかも動揺することなく社会主義経済管理の原則を固守していくよう政策的な線を明確に示した。

主席は、工業に対する指導と管理を改善することに大きな力を注いだ。

人民経済の規模が膨大になり、各部門間の生産上の連携がかつてなく複雑になった新たな現実は、それに即応して経済をより合理的に管理、運営できるよう企業の組織形態を発展させることを求めた。

主席は1984年11月中旬と1985年11月中旬に行われた政務院常務会議と朝鮮労働党中央委員会政治局会議などの機会に、以前から構想を練り、試験的に一部の企業で実施して豊かな経験を積んだ新たな企業組織形態である連合企業所システムを全面的に確立するための措置を講じ、当該部門の具体的特性に即して連合企業所をさまざまな形式で組織するようにした。

こうして、企業管理において集団主義を確固と保障し、国家の唯一的計画に従って生産を手配しながら経営活動を創造的に行い、チュチェの経済管理システムをよりりっぱに貫徹することができるようになった。

主席は、農業に対する指導、管理においても主体的な社会主義農業指導体系を擁護し貫徹するよう導いた。

主席は1986年12月27日の朝鮮労働党中央委員会第6期第12回総

会をはじめ多くの機会に、社会主義農村問題に関するテーゼが示した道に沿って協同経営制度をさらに強化し、全人民的所有の大農場制に移行する方向に進まなければならないと述べた。そして、協同経営を社会主義制度本来の要求に即して集団主義的方法で管理、運営する原則を堅持し、それに反する個人主義的管理方法の些細な要素も厳しく警戒するようにした。また、協同農場の管理・運営水準を高め、作業班優遇制を正しく実施し、集団主義的原則にもとづく分組管理制をさらに強化し、分組の役割を高めて、それが集団の利益と個人の利益を正しく結合させる管理制度、分配制度としての優越性を十分に発揮するようにした。

主席は、幹部たちに社会主義経済管理知識を体得させることに深い関心を払った。

1989年6月、新設された人民経済大学の部門別の研究室を見て回り、社会主義社会で計画経済を固守しなければ人民経済を絶えず急速に発展させることはできず、社会主義経済制度を擁護し固守することもできないとし、計画経済を固守しなければならないと強調した。

主席は社会主義経済建設を強力に推進し、完全な社会主義社会にふさわしい強固な物質的・技術的土台を築くための活動を指導した。

主席は第3次7カ年（1987～1993）計画を遂行するためのたたかいを指導した。

第3次7カ年計画の基本課題は、人民経済の主体化、近代化、科学化を引き続き強力に推進し、社会主義の完全な勝利のための物質的・技術的土台を強固に築くことであった。この計画は、人民

経済の各部門に近代的技術を装備させ、生産能力をさらに造成するための基本建設を大々的に行い、生産を急速に伸ばすことを見通した膨大な計画であった。

ところが、新たな展望計画を遂行するたたかいの前途には多くの難関が横たわっていた。アメリカ帝国主義は共和国を経済的に圧殺しようと、最新科学技術と重要な戦略物資の輸入を妨げ、修正主義者と改良主義者は資本主義の道を踏み出して国際主義の原則を放棄し、彼らの修正主義的政策に従わないからといって朝鮮に経済的圧力までかけていた。こうした環境にあって、国際的協力を期待することはできなかった。

主席は内外の新たな環境に対処して、自力更生、刻苦奮闘の革命精神をさらに強く発揮するよう導いた。

1987年1月の経済部門責任幹部への談話で、「自力更生、刻苦奮闘の革命精神をさらに強く発揮して、第3次7カ年計画の高い目標を繰り上げて達成しよう！」という戦闘的スローガンを示した主席は、新たな展望計画の初年度である1987年の初めから人民経済の各部門、各単位に対する現地指導を行い、すべての勤労者が自力更生の革命精神を強く発揮して、第3次7カ年計画を遂行する闘争に立ち上がるよう呼びかけた。そして1987年10月下旬には南興（ナムフン）青年化学連合企業所を訪れ、この企業所は自力更生の精神に徹した工場であるとし、自力更生の模範として押し立てた。

自力更生の炎は全国に燃え上がった。こうして、第3次7カ年計画の初年度の課題は立派に遂行され、新たな展望計画を成功裏に遂行できる突破口が開かれた。

主席は200日間戦闘を繰り広げることを発起し、全党と全人民

を奮い立たせた。

主席は新たな展望計画の2年目の年である1988年の新年の辞で、社会主義建設の各分野で今一度、一大高揚を起こして共和国創建40周年を勝利者の大祝典として輝かすよう強調した。そして、同年2月の朝鮮労働党中央委員会政治局会議で、共和国創建40周年を迎えて200日間戦闘を繰り広げることを決定し、全党員に送る党中央委員会の手紙と党中央委員会のスローガンを採択するようにした。次いで、200日間戦闘の総体的方向と目標、その実現方途を示し、組織・指揮システムを確立するなど具体的な作戦を手配し、自ら200日間戦闘の陣頭指揮に当たった。

戦闘期間、主席は昼夜の別なく毎日、重要プロジェクトの建設と電力、鋼材、石炭、セメントの生産、運輸部門から報告を受けて提起されている問題を解決し、平壌（ピョンヤン）市内の重要建設現場を現地指導しながら建設者を励ました。

全党と全人民が奮起して200日間戦闘を成功裏に行ったことで、共和国創建40周年を勝利者の大祝典として迎えることができた。

主席は共和国創建40周年記念祝賀報告集会で、200日間戦闘によって盛り上がった気勢を緩めることなく、集団的革新運動を力強く繰り広げ、第3次7カ年計画のすべての目標を達成するよう呼びかけた。

すべての党員と勤労者は、主席の呼びかけに従って今一度新たな200日間戦闘を力強く繰り広げ、人民経済の主体化、近代化、科学化の水準向上に大きく寄与する500余りの重要建設を完成させ、人民経済の各部門で掲げた高い生産目標を立派に遂行した。

主席は、人民経済の各部門が近代化され、部門構造が完備した

主体的な経済を建設するたたかいを力強く導いた。

まず、採掘工業、金属工業をはじめ基幹工業部門の生産能力を一段と高めるようにした。

主席は、基幹工業部門で既存の工場、企業の設備をより効率的で精密な近代的設備に改造し、生産能力を最大限高める一方、新たに近代的な工場、企業を大々的に建設するようにした。

主席は技術発展の新たな段階の要請に即して、機械工業と電子・自動化工業を発展させるため、1988年11月に行われた朝鮮労働党中央委員会第6期第14回総会で、技術革命と社会主義経済建設を推し進めるうえで鍵となる工作機械工業と電子・自動化工業の発展方向と方法を示し、全党と全人民は総会の決定を実行するため大いに努力すべきであると強調した。

こうして、安州地区炭鉱連合企業所、茂山(ムサン)鉱山連合企業所、金策(キムチェク)製鉄連合企業所など多くの工場、企業が拡充され、渭原(イウォン)発電所、チョンリマ製鋼連合企業所の5・18大型鍛造工場など近代的な工場、企業が建設された。また、近代的な各種の電子要素と自動化計器・器具の生産においても大きな発展を遂げた。

主席は人民経済の主体化、近代化、科学化の要請に即して人民経済の先がけである電力工業と鉄道運輸を新たな高い段階へと発展させるよう導いた。

主席は水力発電所を基本とし、それに火力発電所を適切に組み合わせる電力工業の基本的な発展方向を示し、大規模の水力発電所を新たに建設するとともに、至るところに中小発電所を数多く建設するようにした。また、大規模の水力発電所である泰川発電所建設工事の主要課題である膨大な用水路トンネル工事とダム建

設工事を人民軍に任せ、300余に上る綱領的な指示を与えて、発電所の建設を大胆に推し進めるようにした。

こうして、1988年8月、泰川1号、2号発電所が操業を始めた。この他にも、1980年代に大規模の発電所が操業または部分的に操業を始めたほか、数百の中小発電所と幾つかの閘門発電所が建設された。

主席は人民経済各部門において生産が急速に伸びるに伴い、鉄道輸送をあくまで優先させるようにした。早くから鉄道電化の方針を示した主席は、それまでの成果にもとづいて鉄道の電化を強力に推進する一方、1988年8月には恵山（ヘサン）――満浦（マンポ）青年線の鉄道建設を完成させ、次いで8軸電気機関車と100トン級の貨車を製作して鉄道の重量化を実現させ、逼迫していた輸送問題解消に展望を開いた。

主席は農村における技術革命を積極的に推し進めた。

農村技術革命を積極的に推し進めることは、社会主義の物質的・技術的土台構築の要請に即して農業を工業化、近代化するため切実に求められていた。

主席は、1987年10月下旬、経済部門の責任幹部への談話『社会主義農村テーゼに示された技術革命の課題を立派に実現するために』で、農村テーゼの貫徹において提起される当面の課題は農村技術革命を力強く推し進めることであると指摘し、その方途を具体的に示した。

主席は、農村テーゼに示された水利化、電化、機械化、化学化の4大技術革命の課題を数年で実現しようということは朝鮮労働党の確たる決心であるとし、まず農村の水利化を実現することに

力を入れた。

主席は用水の問題を完全に解決するため、西部地区200里区間の水路工事を発起した。これは、西海閘門と泰川発電所の建設によって生まれた大規模な貯水池の水を平安南北道と黄海南北道の穀倉地帯にある農場まで引く膨大な工事であった。

主席は、用水路の図面を見ながら具体的な指図を出し、必要な設備と資材の供給対策まで綿密に立て、工事の進行状況を具体的に調べて提起される問題を一つ一つ解決した。

その結果、基本水路100里、支線100里、合計200里の西部地区水路工事は速やかに進捗した。

主席は農村の水利化とともに、電化、機械化、化学化も積極的に推し進めた。

農村の電化を実現するため、国からの電力供給を増やし、大衆運動によって中小発電所を建設して、脱穀と乾燥、粉砕など農作業に必要な電力需要を満たすようにした。そして、農業の総合的機械化を実現するため、トラクターとトラック、苗取り機、田植機、稲刈機、肥料や農薬を施す機械をはじめ農業機械をより多く生産、供給するようにした。また農村の化学化を実現するため、化学肥料と農薬の生産を増やすための措置も講じた。

社会主義農村テーゼで示された農村技術革命の課題が実現されるにつれ、朝鮮の社会主義農業の物質的・技術的土台はさらに強固なものとなった。

第6節　人民の物質・文化生活を向上させるために

金日成主席は社会主義経済建設を推進する一方、人民の生活を向上させることに大きな関心を払った。

主席は、人民の生活を絶えず向上させることを朝鮮労働党の活動の最高原則とし、社会主義建設の進捗に伴って日増しに高まる人民の要請に即して衣食住問題の円滑な解決に大きな力を注いだ。

まず、人民生活の問題を解決するうえで基本となる食の問題を解決するため、農業の発展に力を入れた。

主席は、1981年10月の朝鮮労働党中央委員会第6期第4回総会と1982年12月の朝鮮労働党中央委員会政治局会議など一連の会議で、穀物生産を画期的に増やすための課題と方法を示し、江西郡(カンソ)青山(チョンサン)協同農場、价川(ケチョン)市宝富(ポブ)協同農場、穏城郡王在山(ワンジェサン)協同農場など各協同農場を訪れて、農業を発展させ農業生産を増やすための対策を講じた。

また、農業への国の投資を増やし、農村技術革命を推し進めるようにする一方、海面干拓と土地開墾運動を強力に展開して耕地面積を大幅に増やし、農作物の育種と栽培方法をより科学化して穀物生産を絶えず増大させるようにした。同時に畜産業、果樹栽培業を発展させ、野菜栽培、特に温室での野菜栽培に力を入れて、人民の食生活に転換をもたらすようにした。

主席は水産業を発展させ、漁獲高を増やすよう導いた。

主席は1980年12月初め、朝鮮労働党中央委員会政治局拡大会議で、冬期の漁獲と加工に力を入れる課題を示し、政治局委員と候

補委員を東海地区の水産事業所に派遣する一方、自ら新浦（シンポ）水産事業所をはじめ咸鏡南道内の各水産事業所を現地指導し、漁獲と加工に革命的転換をもたらすための綱領的な課題を示した。そして、1982年2月中旬の朝鮮労働党中央委員会政治局拡大会議をはじめ一連の会議で、漁獲と加工、浅海養殖など水産業を発展させるための課題と具体的な対策を示した。

主席は、近代的な漁船の建造を増やし、水産業の物質的・技術的土台を強固にし、科学的な漁労方法を大いに導入して、より多くの魚を捕るよう指導した。そして、水産物の加工基地を大幅に増設し、加工を画期的に改善して、美味で栄養価のある魚類加工品を人民に十分供給するようにした。また、経済的効果が高く将来性のある浅海養殖を大いに発展させ、各種の海藻類と貝類を生産して供給するようにした。

主席は、軽工業を発展させるという党の方針を貫徹して一般消費財に対する人民の需要を満たすよう導いた。

また、人民の衣料問題を解決するため織物の生産に深い関心を払った主席は、ビナロン工場、モビロン工場、オーロン工場の建設を発起し、全党、全国が総がかりで建設を力強く推し進めるようにした結果、ビナロンとモビロン、オーロンをはじめ各種化学繊維の生産基地が強固に築かれ、織物の生産が増えるようになった。

主席は、一般消費財の生産を増やすことに大きな関心を払った。

主席は、品物を一つ生産するにしても先に見本をつくり、それを手本にして大量生産に入るようにした。

主席は1988年8月、一般消費財の見本図案集を見て、一般消費財は基本的品目を増やすことを原則に生産を増やさなければなら

ないと述べた。そして、執務室で図案集に1ページ1ページ目を通して完成させ、すべての部門、すべての単位の工場、企業がそれぞれの実情に即して生活必需品職場と作業班を幅広く組織し、一般消費財を多く生産するようにした。

また、金正日同志の発起による大衆的な「8・3大衆消費財」生産運動が強力に展開され、小間物・日用雑貨をはじめ各種の一般消費財の生産が急速に増大した。

党の軽工業革命方針を実行するためのたたかいを通じて、数多くの近代的な軽工業工場が建設され、既存設備の技術改造が積極的に推進されて、軽工業の生産的・技術的土台はさらに強固になった。

主席は住宅と文化施設を多く建設して、人民のためにより文化的な生活条件を整えるようにした。

まず、平壌市をはじめ大都市に近代的な住宅街を形成し、農村文化住宅を大々的に建設して人民の住宅問題を円滑に解決するようにした。

そのために、祥原（サンウォン）セメント連合企業所とシリカリチート・レンガ工場をはじめ大規模な近代的な建材生産基地を建設するようにした。そして都市と農村の特性に合った模範住宅を建て、それをモデルとして人民の生活風習と嗜好にかなった文化的な住宅を大衆的運動で建設するようにした。

こうして、平壌市には蒼光（チャングァン）通り、紋繍（ムンス）通り、安商宅（アンサンテク）通り、光復（クァンボク）通りなど近代的な通りが建設され、人民の住宅問題の解決に一大転換がもたらされるようになった。そして、地方の都市と農村でもシリカリチート・レンガ住宅をはじめ近代的な住宅が

大々的に建設され、都市ばかりでなく里の農村住宅でもセントラルヒーティング化、ガス化が積極的に推進された。

主席は、文化施設を数多く建設して人民のためにより文化的な生活条件を整え、商品供給、公共給食、公共サービスに対する人民の需要を充足させるようにした。

主席は、首都平壌市に人民大学習堂、万景台（マンギョンデ）学生少年宮殿、メーデー・スタジアムなど数多くの文化・スポーツ施設と蒼光院をはじめ公共サービス施設を万年大計の記念碑的建造物として立派に建設するようにした。そして、道都をはじめ地方都市はもちろん、山間部の郡にも蒼光院式の公共サービス施設を建設し、すべての人民が文化的な生活を享受できるようにした。

また、商品が人民に等しく供給されるよう供給体系を正しく立て、公共給食と便益サービス活動を一段と改善して、高まる人民の物質的・文化的需要を充足させることに労苦と心血を注いだ。

主席は、国家が実施している高い形態の各種の人民的施策を固守し、さらに発展させていくようにした。

1980年代の中ごろ、一部の幹部は、勤労者の生産意欲を高めるためには給料と賞金、奨励金といった経済的テコを利用して物質的刺激を強めるべきだ、国情が厳しく国の負担が重いから食糧供給制を廃止し、食糧販売制を実施すべきだ、といった意見を提起した。

こうした時期、主席は社会主義の旗をさらに高く掲げて、朝鮮労働党の人民的施策をあくまで固守し発展させていくよう導いた。

1985年10月下旬、政務院の責任幹部への談話『共産主義的施策をさらに発展させるために』で、人民的施策を固守し、さらに発

展させるうえで堅持すべき原則と方途を明らかにした。

主席は、さる祖国解放戦争（朝鮮戦争）の烈火の中でも実施してきた食糧供給制をはじめ最も優れた人民的施策を今になって廃止しようとしてはならず、さらに発展させていかなければならないと述べた。

そして、立派な制度を打ち立て地上の楽園を築いておいたのに、今になってそれを崩そうとしてはならないとし、物質的刺激を強めるからといって、他の国の真似をして月謝や治療費を取り、税制を復活させ、食糧を市場価格で販売するような制度をつくっては社会主義を成功裏に建設することはできないと指摘した。続けて、われわれはどうすれば、誰もが等しく豊かに暮らせるこの立派な制度を固守し、さらに強化、発展させることができるかという一念で積極的にたたかうべきであると強調した。

主席は各種の人民的施策を引き続き実施し、人民のための社会的施策費を系統的に増やしていくよう導いた。

主席は、国家が農民から高い価格で買い上げた食糧を労働者、事務員に廉価で供給し、無料義務教育制と無料治療制が円滑に実施されるようにした。

主席は、人民的な社会保険制と社会保障制、有給休暇制と静・休養制、女性勤労者の産休制などの人民的な施策を確実に実施して、党の配慮が人民によりよく行き渡るようにした。そして、人民のための社会的施策費を増やすようにする一方、1985年10月4日には協同農民にも社会保障制の恩恵が施されるようにし、国家の資金で住宅を建設して農民に無償で提供するようにした。

こうして、朝鮮人民は誰もが衣食住の心配だけでなく、子女を

学校にやる心配、治療を受ける心配もなく、幸せな生活を思う存分享受できるようになり、社会主義制度の優越性はさらに高く発揚されるようになった。

第7節　科学技術研究活動と教育事業に新たな転換をもたらすために

金日成主席は、全社会のチュチェ思想化の要求に合わせて科学技術の発展に新たな転換をもたらすようにした。

主席は、1982年2月中旬の科学技術部門従事者協議会での演説『科学技術研究活動をわが国の実情に即して進めるために』と、1983年3月下旬の科学院の科学者たちに行った演説『科学研究活動に新たな転換をもたらすために』など一連の著作で、科学技術研究活動を抜本的に改善するための方向と方法を明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「科学者、技術者は科学研究活動をいっそう力強く推し進め、国の科学技術水準を一段と高め、人民経済の速やかな発展に積極的に寄与しなければなりません」

主席は主体的な立場に立って人民経済の主体化、近代化、科学化を推進し、社会主義経済建設の展望目標を達成し、人民の生活を向上させるうえで提起される科学技術上の問題を解決することを研究の基本的な方向として提示し、科学技術研究活動に対する党の指導を強化してこの活動を党の求める方向で進め、科学技術行政活動を改善し、科学者、技術者の水準と責任感を高めなけれ

ばならないと指摘した。

主席は、科学技術研究活動を推進するための積極的な措置を講じた。

主席は、科学者、技術者の陣容をしっかりと固め、彼らの水準を速やかに高めることができるよういろいろな研究条件を十分に整えさせるとともに、党組織が科学研究機関に対する指導を強化し、科学者、技術者の研究課題が必ず遂行されるよう後押しするようにした。また、科学技術研究活動に対する国家の投資を系統的に増やし、科学研究機関と大学に近代的な実験設備と手段を十分に提供し、必要な中間試験工場を適時に建設できるよう建設陣を補強した。そして世界各国と科学技術交流を活発に行い、科学技術情報活動を強化して最新科学技術の成果を広く取り入れるようにした。

主席は、社会主義経済建設において解決を要する科学技術上の問題に基本を置いて科学技術研究活動を行うよう導いた。

主席は1983年4月の政務院責任幹部協議会で、金属工業を発展させるため国内の原料による製鉄・製鋼法を完成させる課題を示し、1986年11月の経済部門責任幹部への談話では、科学者、技術者は主体的な立場に立ち、国内の原料・資源を利用して軽金属工業を発展させるうえで提起される科学技術上の問題を解決するための研究を行うよう強調した。

主席は1982年9月中旬と1987年8月末、農業科学院の試験場と試作畑を見て回り、農業科学研究活動をさらに強化し、農業の工業化、近代化を推し進めて生産を新たな高い段階へと引き上げなければならないと強調した。

主席は1988年3月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第6期第13回総会で、科学技術発展3カ年（1988～1990）計画を採択するようにし、電子工学と生物学、熱工学を発展させるための研究に力を注ぐべく課題を示した。そして翌年の6月に開かれた朝鮮労働党中央委員会第6期第16回総会で、国内の燃料を活用して熱動力の問題を解決するよう強調するとともに、国内の資材でも十分製造が可能で、埋蔵量が豊富な低カロリー炭を燃料とするボイラーを数多く製造するための措置を講じた。

科学者と技術者は、主席の教えに従って農作物の各種の新品種と生物農薬の生産方法を開発し、国内の原料にもとづく化学工業と軽工業を発展させ、浅海養殖における科学技術上の問題を立派に解決した。同時に新型のボイラーを研究し、大型ボイラーに低カロリー炭を利用する技術が開発され、熱動力を節約し効果的に利用するうえで提起される科学技術上の問題は少なからず解決された。そして採掘工業、金属工業、鉄道運輸など人民経済の先行部門で提起される各種価値のある科学技術上の問題も効果的に解決された。

主席は、教育事業に新たな転換をもたらすためのたたかいを指導した。

教育事業に新たな転換をもたらすことは、社会の全般的な技術・文化水準を高め、科学技術を速やかに発展させ、全社会のインテリ化を力強く推し進めるための重要な要求であった。

主席は発展する現実の要請を深く洞察し、朝鮮労働党第6回大会での報告と1988年3月の朝鮮労働党中央委員会第6期第13回総会での結語『科学・教育事業と人民保健医療事業に新たな転換をも

たらすために』など一連の著作で、社会主義教育テーゼを貫徹し、教育事業に転換をもたらすための課題と方法を示した。

主席は教育事業に新たな転換をもたらすためには、何よりもまず、教育の質を一段と高めなければならないと指摘した。

そして、学生の間でチュチェの革命的世界観を確立し、科学技術の発展趨勢に即してその教育水準を高め、最新科学技術分野の教育を強化しなければならないと強調した。また、教員陣容をしっかりと固め、彼らの資質を高め、教育事業に対する投資を系統的に増やして教育条件を十分に整えることについて具体的に述べた。

主席は、全般的11年制義務教育の質を高めることに第一義的な関心を払った。

主席は小学校と中学校の児童・生徒の年齢と知的水準に応じて教育の内容を合理的に編成して、彼らが近代科学と技術を体得できる基礎を築き、豊富な一般知識を身につけるようにした。また、授業を通俗的に分かりやすくし、授業内容を直観化し、さまざまの近代的な教育手段を広く利用して視聴覚教育、実物教育を強化し、実験・実習に力を入れて学んだ内容に対する原理的な認識と応用能力を備えさせるようにした。そして秀でた素質と才能のある児童・生徒を探し出し、系統的に育成することで、彼らが最先端科学技術を開拓していく国の頼もしい科学技術の中核に育つようにした。同時に、師範教育を強化して水準の高い教員を数多く養成し、通信教育と教員再教育・講習制度を確立して教員の科学・理論的、教育実務的水準を高めるようにした。

主席は第1中学校を設け、それを一般化させる過程を通じて教

育事業全般に転換がもたらされるようにした。

1985年2月下旬、平壌第1高等中学校を訪れた主席は、教育の質を高めるうえで提起される課題を示し、このような学校を増設し、これをモデルにして全般的11年制義務教育の質を高めていくべきであると強調した。

主席は高等教育の質を高め、有能な技術者、専門家をより多く育成するよう導いた。

主席は、近代科学技術の発展趨勢と人民経済発展の要請に即して大学の学課指標と教育内容を改定し、教育手段をさらに近代化して教育の科学・理論水準を速やかに高めるようにした。また、有能な科学者、技術者をより立派に育成できるよう大学の養成規模を拡大し、各種の専門学校を新たに設けるようにした。

その結果、最新技術工学を専攻する技術者、専門家の養成基地はさらに拡充され、有能な科学者、技術者がより多く養成され、20代、30代の博士が科学技術の中核として活躍するようになった。

主席は、教育事業の急速な発展にもとづいて全社会のインテリ化を強力に推進させるよう導いた。

主席は、実践を通してその生命力が実証された、働きながら学ぶ高等教育システムをいっそう発展させることに大きな意義を付与し、既存の工場大学をより立派に運営させる一方、工場大学を増設するようにし、これらの大学に有能な教員を配置し、大学の教育条件を整えるためのさまざまな党および国家的措置を講じるようにした。同時に青山農業大学、新浦水産大学など農場大学と漁場大学、テレビ放送大学などを新設し、その教育水準を高めるようにした。そして、工場大学や農場大学で勉学にいそしむ龍(リョン)

陽鉱山(ヤン クムサン)金山坑の労働者と安州郡祥瑞(サン ソ)協同農場の青年分組員の模範を大いに広めて、勤労者の知識水準を大学修了程度にまで引き上げる活動を力強く推し進めるようにした。

主席は、全社会のインテリ化の重要な拠点であり通信総合大学でもある人民大学習堂と全国各地の図書館を着実に運営して社会教育を強化するようにし、「全党、全人民、全軍が学習しよう！」というスローガンのもとに、全社会に革命的な学習気風を確立させて、すべての勤労者が学習を生活化、習性化し、技術・文化水準を高めていくよう精力的に導いた。

教育の質を一段と高め、全社会をインテリ化する活動が強力に推進されたことで、社会の全構成員の科学技術知識と文化知識水準は全般的に高まり、技術者、専門家の養成事業も改善され、将来の高等義務教育実施に向けた準備活動は大きく進展するようになった。

第8節　高麗民主連邦共和国創立方案を実現するために

金日成主席は高麗民主連邦共和国創立方案を実現するために心血を注いだ。

主席が朝鮮労働党第6回大会で示した高麗民主連邦共和国創立方案は、北と南に現実的に相異なる思想と体制が存在する状況のもと、併呑したり併呑されたりすることなく、一方が他方を圧倒したり圧倒されたりしない共存の原則で二つの体制をそのまま存続させ、二つの自治政府を連合する方法で一つの統一国家を形成

するというものである。

主席はこの方案の実現のため、全民族の大団結を成し遂げることに第一義的な力を入れた。

金日成主席は次のように述べている。

「高麗民主連邦共和国創立方案を一日も早く実現するためには、全民族の大団結を図らなければなりません」

主席は、全民族を祖国統一の旗のもとに固く結集させるための合理的な提案を打ち出して、民族団結への志向を高揚させた。

主席は1980年11月、共和国の諸政党、社会団体が連席会議を開き、国内外の各界の代表で高麗民主連邦共和国創立準備委員会のような民族共同の協議機構を設置することを提議するようにした。そして1981年8月に、連邦国家創立の方途を共同で模索するため、北と南の政党、団体の代表と海外同胞代表からなる民族統一促進大会を招集することを提案する共和国の諸政党、社会団体の合同声明を発表するようにした。翌年2月には、北と南、海外の著名な政治家を含む100人合同会議の招集を祖国平和統一委員会の声明を通して提案するようにした。また1987年11月に、祖国統一民主主義戦線中央委員会・祖国平和統一委員会の合同会議で民族団結のための五つの方案を打ち出すようにし、1989年1月には民族の意思を込めて、統一の方途に対する民族的合意を見るための北南の指導的人士の政治協商会議の開催を提案するようにした。

これらの提案は、北と南、海外の広範な人民の一致した支持と賛同を得、彼らの統一への熱望と民族団結の志向を大いに高揚させた。

主席は、アメリカ帝国主義と南朝鮮支配層の分裂策動によって

北と南の愛国勢力が直ちに団結を実現するのは難しい状況のもとで、まず北と海外の勢力が連合してやがて大連合を実現する土台を築くようにし、それにもとづいて北と海外同胞間の対話を実現していくようにした。

こうして、北と海外の同胞は数回にわたって一堂に会し、祖国統一問題について論議し、特に1989年7月に平壌で開かれた国内外同胞の祖国統一促進大会では、祖国統一問題を討議し、祖国解放45周年に当たる1990年8月15日に、板門店（パンムンジョム）で北と南、海外同胞の代表が参加する祖国統一のための汎民族大会を招集することにした。

主席は朝鮮半島の緊張を緩和し、祖国統一の平和的な環境をつくりだすための闘争を強力に展開するよう導いた。

主席は緊張を緩和し、軍事的対峙状態を解消し、祖国統一に有利な前提をもたらすため、1984年1月の中央人民委員会・最高人民会議常設会議合同会議で、朝米会談に朝鮮の緊張激化に責任がある南朝鮮当局も参加させ、3者会談を行うという新たな提案を示した。

そして、この提案を実現するため忍耐強い努力を傾けるとともに、平和統一の前提条件を整えるため、さまざまの合理的な協商提案と措置を相次いで講じた。

主席は1986年、北南高位級政治・軍事会談の開催を提案する一方、共和国政府が軍事当局者会談を開く提案と朝鮮半島を非核地帯、平和地帯にする提案などを示すようにし、15万余の軍人を平和的建設に振り向ける措置を取った。また、1987年に段階的な軍縮提案を示し、その実行措置として10万人の人民軍兵士を一方的

に縮小した。そして1988年には、双方の当局者を含む諸政党、社会団体の代表と各界人士が参加する北南連席会議の招集を提案し、共和国政府が北南国会連席会議、朝米議会会談などを提案して朝鮮半島の緊張を緩和し、恒久平和を保障するための実際的措置を講ずるようにした。

主席は熱い同胞愛、民族愛をもって民族の和解と団結の気運を高め、凍結された北南対話の道を開くためできる限りのことをした。

1984年9月、南朝鮮で水害のため数十万の被災民が生じたとき、彼らに真心のこもった救援物資を送るよう同胞愛的な措置を講じた。

この措置により、分断されてほぼ40年ぶりに初めて救援物資として5万石の米と10万トンのセメント、50万メートルの織物と多量の医薬品が南朝鮮の水害被災民に届けられた。

これを契機に、民族の和解と団結、北南間の接触と対話の雰囲気が醸成されていった。

主席はこうした有利な情勢に即して、赤十字会談と経済会談、スポーツ会談など多岐にわたる対話を主動的に発起した。

こうして、12年前に中断された北南赤十字会談をはじめさまざまの対話の扉が再び開かれるようになった。祖国解放40周年を契機に、北南の赤十字芸術団と故郷訪問団の相互訪問が実現し、平壌とソウルを行き来しながら同胞同士の血脈をつなぎ、肉親の情を分かち合った。これは民族の和解と団結の気運をいっそう高め、全民族的な規模で統一への熱望を一段と高揚させた。

主席は、統一の意志を抱いて平壌を訪れる南朝鮮の人士と同胞を肉親の情をもって温かく迎え、統一の使節として押し立て、民

族の和解と統一の熱気を高めていった。

1989年3月に平壌を訪れた南朝鮮の「全国民族民主運動連合」（「全民連」）顧問の文益煥（ムンイクファン）牧師を統一の使節として温かく引見し、第13回世界青年学生祭典に参加するため平壌を訪れた「全国大学生代表者協議会」（「全大協」）代表に接見し、彼女の愛国的壮挙を高く評価し、民族の立派な娘として押し立てた。

統一使節の平壌訪問を機に、全同胞の民族的和解と団結の気運はさらに高まり、全民族的規模で祖国統一への熱望がいっそう高揚した。

南朝鮮人民と海外同胞は、主席が示した高麗民主連邦共和国創立方案を絶対的に支持し、祖国統一をめざす闘争を強力に展開した。

南朝鮮人民は自主、民主、統一をめざすたたかいを果敢に繰り広げた。

1980年5月の光州（クァンジュ）人民蜂起を契機に、南朝鮮の青年学生と人民はアメリカ帝国主義に「侵略者」、「略奪者」、「殺人者」の烙印を押し、相次いで反米闘争に立ち上がった。

南朝鮮の青年学生は、釜山（プサン）と大邱（テグ）、ソウルと光州で「米国文化院」に対する放火、爆破、占拠を断行した。彼らは反米・自主化闘争を漸次発展させてアメリカ帝国主義侵略軍と核兵器の撤去、非核軍縮の実現をはじめ高い要求を提起し、その実現をめざしてより広範な大衆闘争を強力に繰り広げた。

南朝鮮人民の闘争は1987年6月に至って、ついに反米・反ファッショ人民抗争に発展した。6月人民抗争は、ソウルをはじめ南朝鮮全域で延べ300余万の各階層の人民が参加した大衆闘争であり、アメリカ帝国主義と南朝鮮の親米支配層に致命的な打撃を与

え、南朝鮮人民の反米・反ファッショ民主化闘争を盛り上げる転換の契機となった。

南朝鮮の大学総学生会の連合組織である「全大協」は1988年、6・10、8・15南北学生会談と国土縦断大行進を実現するためのたたかいへと南朝鮮の青年学生を立ち上がらせた。

南朝鮮民主勢力の連合戦線組織である「全民連」は、団体の総体的目標は労働者、農民、進歩的な知識人が中心となって民主化、自主化、民族の統一を志向してたたかうことであるとし、汎民族大会を開くための闘争を推進していった。

南朝鮮人民の自主、民主、統一をめざすたたかいにおいて、統一革命党はその指導的役割を高めていった。

統一革命党中央委員会は、発展する現実の要請に即して南朝鮮の各政党、各派、各階層の広範な愛国的人民を結集して民族挙げての反米民族解放運動へと立ち上がらせるため、1985年7月に党の名称を「韓国民族民主戦線」（「韓民戦」）に変え、民族自主の偉業を達成するための闘争綱領である「韓国民族自主宣言」を発表した。

「韓民戦」は平壌と日本、キューバ、シリアなどに代表部を置き、南朝鮮人民と世界の進歩的人民との連帯を強めた。また、「救国の声」放送と新聞「救国戦線」などさまざまの宣伝手段を利用して、広範な人民大衆を不滅のチュチェ思想で武装させるための政治宣伝活動を力強く繰り広げ、民族の太陽である金日成主席と民族の導きの星である金正日同志を祖国統一の救いの星として高く仰ぎ、チュチェ思想の光のもと、南朝鮮人民のたたかいを新たな段階へと発展させていった。

海外同胞と世界の平和愛好人民も朝鮮の統一をめざすたたかいを力強く繰り広げた。

総聯と在日同胞をはじめ海外の朝鮮同胞は、崇高な民族的使命感を抱いて外部勢力の侵略と戦争策動に反対し、朝鮮を非核地帯、平和地帯にし、内外の分裂主義者の策動を粉砕して高麗民主連邦共和国創立方案を実現するため粘り強くたたかった。

世界の平和愛好人民は、1981年3月から1982年3月にかけて高麗民主連邦共和国創立方案と統一国家の10大施政方針を支持する国際的な署名運動を展開し、朝鮮の自主的平和統一を求める国際的連帯運動を広範な大衆運動に急速に発展させていった。

高麗民主連邦共和国創立方案を実現するための闘争は北と南、海外の同胞、そして世界的規模で強力に展開され、祖国統一の早期実現に有利な局面が開かれるようになった。

第9節　全世界の自主化偉業を実現するために

1980年代に至り、世界の平和と安全は至るところで撹乱され、一連の地域では国と民族の自主権がはなはだしく蹂躙され、人民大衆の自主偉業は試練に直面した。

新たな情勢は、世界的規模で反帝・自主の旗を高く掲げ、アメリカ帝国主義をはじめ国際反動勢力の策動を粉砕し、支配と従属のない自主化された新しい世界を建設するためのたたかいを力強く展開することを切実に求めていた。

金日成主席は、1982年4月の朝鮮労働党中央委員会・最高人民

会議合同会議での施政演説をはじめ一連の著作で、全世界の自主化を実現すべく方針を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「世界の進歩的人民は、自主性の時代的潮流をいっそう力強く推し進めることによって、全世界の自主化を実現しなければなりません」

主席は、全世界を自主化するうえで主体となるのは自主性を擁護する世界の人民であり、主な闘争対象はアメリカをはじめ世界の帝国主義勢力であると規定した。そして全世界の自主化を実現するためには、すべての国、すべての民族が自主性を堅持し、帝国主義者の支配と従属に反対し、自主性にもとづく平等な国際秩序を確立し、侵略と戦争に反対して世界の平和と安全を守り、帝国主義者の分裂・離間策動を粉砕して反帝自主勢力の団結を強化しなければならないと強調した。

主席は自主性を擁護する世界人民間の団結、反帝自主勢力の団結を強化することに大きな力を注いだ。

まず、社会主義諸国との友好・協力関係を発展させることに第一義的な関心を払った。

主席は1982年9月と1984年11月、1987年5月に中華人民共和国を訪問し、伝統的な朝・中友好を強化、発展させるため精力的に活動した。

また、1984年5月中旬から7月初めにかけて、党および国家代表団を率いてソ連と東欧社会主義諸国を公式親善訪問した。訪問期間、主席はこれらの国の党および国家指導者との会談と談話を通じて、社会主義国間の統一・団結を実現し、社会主義の原則を堅

持していく朝鮮労働党の原則的立場を明らかにし、友好・協力に関する条約を締結し、多くの都市と農村、工場、企業を参観して勤労者の労働の成果を称え励ました。

そして訪問の過程で時間を割き、38年前に平壌駅前広場で催された3・1人民蜂起記念行事の際、反動分子が投げつけた手榴弾を身をもって防ぎ朝鮮革命の首脳部を防衛した国際主義戦士ノビチェンコに会い、彼に大いなる愛と配慮をめぐらした。また、ソ連と東欧社会主義諸国の他の縁故者にも会って恩情をめぐらした。

主席は1986年10月下旬、再びソ連を訪問し、帝国主義者の反社会主義的策動から社会主義偉業を固守するうえで提起される原則的問題を示し、1988年6月下旬から7月初めにかけてモンゴルを親善訪問し、この国の社会主義建設における成果を高く評価し、大いに励ました。

主席の社会主義諸国に対する歴史的な訪問は、朝鮮革命の国際的連帯を強め、世界の平和と安全を守り、全世界の自主化の実現に大きく寄与した。

主席は社会主義諸国への訪問を通じて友好・協力関係を発展させる一方、社会主義国の党首や元首をはじめ指導者を朝鮮に招き、友好・団結と協力関係をいっそう発展させていった。

1983年、キューバ人民の反帝反米闘争を支援して10万挺の自動小銃と大量の弾薬を送り、1986年3月にはキューバ共産党中央委員会第1書記・キューバ共和国国家評議会議長のフィデル・カストロ・ルス内閣首相を招請し、社会主義偉業の遂行において革命的立場と原則を堅持する意志を今一度確認し、友好および協力に関する条約を締結した。

そして、1986年10月にドイツ民主共和国の党および国家指導者を、1988年10月にはルーマニア大統領をはじめ社会主義諸国の党および国家指導者を招請し、友好・協力関係を発展させる問題をはじめそれぞれが関心を寄せる問題、社会主義的原則を固守する問題などについて真摯に意見交換をした。

主席は非同盟運動の統一と団結を強化し、非同盟諸国、発展途上諸国間の友好・協力関係を発展させることに大きな関心を払った。

われわれの時代の強力な反帝・自主勢力である非同盟運動の統一と団結を強化することは、全世界の自主化を実現するための必須の要求であり、帝国主義者が非同盟諸国を分裂、離間させようと悪辣に策動し、国家間の紛争が依然として続いている状況のもとでは特に重要な問題であった。

主席は非同盟運動の統一と団結を強化するため、1986年6月の朝鮮労働党中央委員会政治局・中央人民委員会合同会議での結語『非同盟運動の強化、発展のために』をはじめ一連の著作で、非同盟諸国がこの運動の根本理念と原則を忠実に守り、意見の相違や紛争問題を団結の原則に立って話し合いの方法で解決することなど、非同盟運動で堅持すべき原則的問題を明らかにした。

そして非同盟諸国の国家元首をしばしば朝鮮に招請して、非同盟運動内に生じた難関を打開し、この運動の統一と団結を強化し、世界の自主化を促進するうえで提起される問題について述べ、彼らのたたかいを激励した。

主席は1981年2月にニューデリーで開かれた非同盟諸国外相会議と1983年3月、1986年9月、1989年9月にそれぞれ開催された第7回、第8回、第9回非同盟諸国首脳会議をはじめ重要な会議に代表

団を派遣し、非同盟運動加盟国が反目と対立、紛争を克服し、統一と団結を志向するようあらゆる努力を尽くすようにした。

そして非同盟諸国、発展途上諸国が支配と従属の古い国際秩序を打ち壊し、自主性にもとづく新しい国際秩序を確立し、集団的自力更生の原則で政治、経済、文化の各分野にわたって南南協力を発展させていくようにした。

主席は南南協力を発展させ、非同盟諸国が経済的自立を成し遂げるうえで重要な意義のある一連の国際会議を平壌で開催するようにした。

こうして、1981年8月に食糧および農業増産に関する非同盟およびその他の発展途上諸国の討論会が、1983年9月には第1回非同盟およびその他の発展途上諸国の教育・文化相会議が、1987年6月には南南協力に関する非同盟諸国閣僚級特別会議が平壌で開催された。

主席は食糧および農業増産に関する非同盟およびその他の発展途上諸国の討論会に参加した代表団を歓迎する宴会で行った演説『非同盟諸国と発展途上諸国は自力更生して農業問題を解決しよう』と、第1回非同盟およびその他の発展途上諸国の教育・文化相会議に参加した閣僚たちに行った演説『新興諸国の民族文化を発展させるために』、そして南南協力に関する非同盟諸国閣僚級特別会議での祝賀演説『南南協力を拡大発展させよう』で、非同盟諸国、発展途上諸国の人民の新しい社会の建設をめざすたたかいで提起される問題の解決方途を示した。

主席は、非同盟諸国、発展途上諸国の人民のたたかいを誠心誠意支援した。

主席は、発展途上諸国との協力において農業生産力の発展に第一義的な関心を払い、タンザニアとギニアに農業科学研究所を、ガーナをはじめとするアフリカ諸国に試験農場を設置するとともに、朝鮮の有能な農業科学者と技術者を派遣し、灌漑工事も行うようにした。また、工業と民族文化を発展させるため、私心のない援助と協力を行った。

主席は、アメリカをはじめ帝国主義者の侵略と戦争政策に反対し、世界の平和と安全を守るためのたたかいを力強く繰り広げるよう導いた。

主席は、戦争を防止し平和を守るために、軍縮を実現し、核兵器を完全に廃棄し、他国にある侵略軍と侵略的軍事基地を撤去し、帝国主義者が「軍縮」と「緩和」を表看板に社会主義諸国を武装解除させ、力で優位に立とうと画策していることに警戒心を高め、他国に対する帝国主義者の武力干渉と軍事的侵略に反対してたたかわなければならない、という原則的問題を明らかにした。

主席は朝鮮半島と世界の各地域を非核地帯、平和地帯にするため精力的に活動した。

1981年3月中旬に日本社会党代表団と会見した際、朝鮮半島をはじめ東北アジア地域に非核地帯、平和地帯を創設することを提案し、1984年9月に再び日本社会党代表団に会ったときには、政権党であろうと政権党でなかろうと、各国の党と社会団体、そして広範な人民大衆は力を合わせてアジアに非核地帯、平和地帯を創設するためさらに積極的にたたかうべきであると強調した。そして1986年6月、朝鮮半島を非核地帯、平和地帯にし、その地位を確固と保証するための実際的な対策を講ずることを求める提案

を打ち出した。

主席はアフリカと中近東、インド洋と南太平洋、バルカン半島とヨーロッパの各地域をはじめ、世界の広い地域に非核地帯、平和地帯を創設するための世界各国人民のたたかいを積極的に支持、声援することで、世界の平和を愛する人民の反戦・反核・平和運動を大いに鼓舞激励した。

主席は反帝・自主、平和、親善のための国際会議と祭典、政治行事を成功させるため積極的に活動した。

1983年7月の反帝・親善・平和のための世界ジャーナリスト大会に参加した代表を歓迎する宴会での演説と、1986年9月の朝鮮半島における非核・平和のための平壌国際会議に参加した代表を歓迎する宴会での演説で、反戦・反核・平和運動の指針を示した。

また1989年7月に反帝・連帯、平和と親善の理念のもとに朝鮮で行われる第13回世界青年学生祭典が史上最高の水準で開催されるようにし、自ら祭典の開幕式に列席して『青年学生は時代の先駆者になろう』という祝賀演説を行った。

主席は全世界の自主化偉業を達成するためのたたかいを積極的に推し進めることで、全社会のチュチェ思想化と祖国の自主的統一をめざす闘争にいっそう有利な国際的環境をもたらし、反帝・自主偉業の実現に不滅の貢献をした。

こうして、世界の革命的人民から自主時代の偉大な指導者、領袖として尊敬され信頼された。

第12章　社会主義偉業を固守し前進させるためのたたかい
（1990年1月～1994年7月）

第1節　社会主義偉業を固守し前進させるための根本原則と闘争課題を明示

1980年代の末～1990年代の初め、ソ連と東欧諸国では社会主義が挫折し、資本主義が復活するという悲劇的な事態が生じた。

これを奇貨として、アメリカをはじめ帝国主義者と反動派は「社会主義の危機」について喧伝し、社会主義のとりでである朝鮮民主主義人民共和国を政治的、経済的、軍事的に圧殺しようと悪辣に策動した。これに便乗して社会主義の背信者たちがまた、共和国を彼らの歩む背信の道に導こうと干渉と圧力をかけてきた。

こうした情勢のもとで、帝国主義者と反動派の狂気じみた反社会主義策動を粉砕し、社会主義偉業を固守し前進させることは、社会主義の運命にかかわる極めて重大な問題であった。

金日成（キムイルソン）主席は、このような激動の時期に社会主義の旗をいっそう高く掲げ、社会主義を守るたたかいに決然と歩み出し、1990年代の初年度である1990年1月1日の新年の辞と、同年5月24日に最高人民会議第9期第1回会議で行った施政演説『わが国の社会主義の優越性をさらに強く発揮しよう』などの諸著作で、朝鮮の社会

主義の不敗性と優越性を科学的、理論的に論証し、社会主義偉業を固守し前進させるための根本原則と闘争課題を全面的に明らかにした。

主席は、社会主義偉業を固守し前進させるためには革命の正しい指導思想がなければならないと述べた。

そして、複雑な情勢の中でも朝鮮で社会主義が引き続き成功裏に前進しているのは、まさに朝鮮革命の指導思想であるチュチェ思想が正しいからであると指摘した。

主席は、社会主義偉業を固守し前進させるためには革命の主体を強化し、その役割を高めなければならないと強調した。

金日成主席は次のように述べている。

「革命の主体を強化することは、社会主義のためのたたかいにおいて根本問題となります。人民大衆が革命の主体としてしっかり準備されなくては、政権のためのたたかいで勝利することができず、主体を絶えず強化せずには社会主義社会を建設することも、その優越性を発揮することもできません」

主席は、革命の主体を強化するうえで基本となるのはその中枢をなす党を強化し、その指導的役割を高めることであると述べた。同時に、勤労人民大衆を党の周りに一つの思想、一つの意志で固く結束させなければならないと述べた。

また、社会主義偉業を固守し前進させるためには、社会主義の優越性を全面的に発揮しなければならないと指摘した。

朝鮮の社会主義は、一言でいってチュチェ思想を具現した人間中心の社会主義である。そして社会の基本的特徴は、人民大衆が社会の真の主人であり、社会のすべてのものが人民大衆に奉仕す

る真の人民の社会であるというところにある。社会主義が人民の生命であるなら、チュチェ思想は社会主義の生命である。

主席は、朝鮮の社会主義の優越性は人民の享受している幸せで希望に満ちた社会主義的生活に明白に表われていると指摘したうえで、社会主義的生活の本質は、人民大衆が国家と社会の主人として享受する自主的で創造的な生活であり、互いに助け導き合って苦楽をともにする集団主義的な生活であるということを明らかにした。

そして、朝鮮人民の享受している社会主義的政治生活と文化生活、物質生活の優越性について明示した。

まず、社会主義的物質生活は人間の自主的要求の実現と創造的活動の保障に寄与する健全なものであり、貧富の格差がなく、すべての人が等しく豊かに暮らす平等なものであるところにその優越性があると指摘した。そして社会主義的文化生活の本質的特徴、優越性は、人間を堕落させ病ませる資本主義的文化生活とは違って、精神的、肉体的に絶えず発展しようとする人間本来の要求を実現させ、全人民を文化の創造者、享受者にするところにあると述べた。また、誰もが国家と社会の主人として真の政治的自由と権利を享有し、貴い社会的政治的生命をもってそれを輝かしていくところに社会主義的政治生活の本質的特徴、優越性があると述べた。

主席は、社会主義の優越性を全面的に発揮するためには人民政権を強化し、思想、技術、文化の3大革命を力強く推し進めなければならないと指摘した。

主席は、思想的要塞を占領することに第一義的な力を注ぎ、社

会の全構成員をチュチェ型の人間に育て上げなければならないとし、そのためには思想革命と文化革命を推し進め、全社会の革命化、労働者階級化、インテリ化を実現しなければならないと指摘した。同時に、物質的要塞を占領するための社会主義経済建設、技術革命を力強く推し進め、党の基本戦略である人民経済の主体化、近代化、科学化の路線を堅持し、これを貫徹すべきであると強調した。

主席は、人民政権を強化しその機能と役割を高めるためには、国家活動において社会主義的民主主義を具現しなければならないと指摘したうえで、その本質と優越性を深く解明し、帝国主義者の宣伝する「民主主義」の欺瞞性と反人民性を暴いた。そして、社会主義的民主主義を具現するためには、帝国主義者と人民の敵の反革命的・反社会主義的策動を粉砕し、社会主義制度をさらに打ち固め、絶えず発展させていかなければならないと強調した。

また、社会主義はもっぱら社会主義の原則と方法によってのみ建設することができるのであり、社会主義建設で提起されるすべての問題は、あくまでも社会主義的原理にもとづき社会主義の優越性を発揮することを原則に、そして革命の主体である人民大衆の底知れない創造力を引き出す方法で解決しなければならないと述べた。

主席は、社会主義の優越性を強く発揮して経済建設を成功裏に行うためには、社会主義社会本来の要求に即して、チュチェの経済管理原則と経済管理システムをあくまで擁護、貫徹しなければならないと指摘した。

社会主義偉業を固守し前進させるための根本原則と闘争課題が明示されたことで、チュチェの社会主義理論はさらに完璧なものとなり、

帝国主義者と反動派が広めるあらゆる反革命的な詭弁と反社会主義的策動を粉砕し、社会主義を守るたたかいで勝利を収めることのできる強力な思想的・理論的武器がもたらされるようになった。

第2節　社会主義の思想的基盤を強化し、社会主義的文化と民族文化遺産をいっそう輝かせるための活動

金日成主席は社会主義を固守し輝かせるため、社会主義の思想的基盤を強化する活動に第一義的な力を入れた。

金日成主席は次のように述べている。

「われわれはここ数年来、国際舞台における思いもよらぬ事態を見て、社会主義社会の生命は思想であり、革命と建設において人民大衆の思想・意識を高めること以上に重要な問題はないということをいっそう切実に感じるようになりました」

1990年代に入り、各国における社会主義崩壊の過程は、社会主義は思想を捉えれば勝利し、思想を失えば滅ぶということ、社会主義の変質は思想の変質から始まり、思想的基盤が崩壊すれば社会主義の基盤はすべて瓦解し、最終的に社会主義をあとかたもなく壊滅させてしまうということを、重大な教訓として示している。まして、朝鮮に対する帝国主義反動派の反社会主義的策動が悪辣になっている状況下にあって、思想を生命として捉えていくかどうかは、社会主義をあくまで守るか否かという死活の問題となっていた。

主席は、朝鮮労働党を強化することに第一義的な関心を払った。

主席は、1990年10月10日、朝鮮労働党創立45周年祝賀宴で行った演説『党を強化し、その指導的役割を高めるのは革命勝利の基本的保障』で、党をいっそう強化しその指導的役割を絶えず高めるための課題を示した。

主席は党を強化し、その指導的役割を高めるうえで、党細胞を強化しその戦闘力を高めることに特に大きな力を注いだ。

主席は1992年9月、咸鏡（ハムギョン）北道党委員会拡大総会で、党を強化するため各級党委員会をしっかりと固め、その役割を高めることも重要であるが、より重要なのは細胞を強化することであると指摘した。

そして1994年3月末、全党細胞書記大会の参加者たちに送った祝賀文『党細胞の5大任務』で、党細胞の任務について、第1に、党中央委員会の唯一的指導に忠実に従う、第2に、党生活の組織と指導を正しく行ってすべての党員をチュチェ型の革命家に育てる、第3に、大衆との活動を強化して党と大衆との血縁的つながりを強める、第4に、思想、技術、文化の3大革命を強力に展開して社会主義建設を推し進める、第5に、祖国の安全と社会主義の獲得物を固く守ることであると強調した。

主席は社会主義思想・理論を深化、発展させ、社会主義の思想的基盤を強めるための指導的指針を示した。

主席は、1994年4月に発表した古典的著作『わが国の社会主義はチュチェの社会主義である』をはじめとする諸著作で、社会主義社会の本質的特性と優越性、その発生・発展の合法則性、社会主義の主体と社会主義社会の基本的政治方式、人民民主主義独裁の問題など、社会主義を守り成功裏に前進させるうえで提起され

る原則的問題を全面的に明らかにした。

特に、朝鮮労働党の実践的経験と国際共産主義運動の重大な教訓からして、指導の継承問題は社会主義偉業の最終的勝利のための決定的保証となるということを示し、領袖の後継者を中心とする党と革命隊伍の一心団結を強化するという思想を明らかにすることで、社会主義の思想・理論をさらに発展させ完璧なものにした。

主席は人民大衆を社会主義思想で武装させるための教育活動を力強く推し進めた。

主席は、チュチェの革命偉業を切り開き、比類なく困難かつ厳しかった朝鮮革命を成功裏に前進させてきたことを次世代に伝えることを崇高な義務と見なし、回顧録『世紀とともに』を執筆した。回顧録に貫かれている基本思想は「以民為天」（人民を天のごとく見なす）である。

主席はチュチェ思想の原理教育を忠実性教育、党政策教育と緊密に結びつけ、深く掘り下げて行うよう導いた。

主席は党員と勤労者がチュチェの革命的世界観を確立し、朝鮮式社会主義の優越性を深く体得するとともに、社会主義は守れば勝利であり、放棄すれば死滅であるという信念を固く持し、いかなる風が吹き荒れようとも動揺することなく、社会主義を守り、輝かせるためにたたかうよう教育することに深い関心を払った。特に、全人民が金正日（キムジョンイル）同志がいればわれわれは必ず勝利するという信念を持し、金正日同志の構想と意図を体して社会主義偉業を達成するため献身的にたたかい、「われわれの方式で生きよう！」というスローガンのもとに、自力更生のみが生きる道であるということを確信してあらゆる難関と試練を自力で克服し、自

信と楽観に満ちて社会主義建設を力強く前進させていくようにするための教育活動を強力に展開するようにした。

主席は、党の革命伝統を固守し継承、発展させるための教育に格別の関心を払った。

革命伝統を固守し輝せることは、社会主義の運命にかかわる重大な問題である。革命伝統を放棄すれば、革命の獲得物を守ることはできず、革命の代が断たれ、革命と建設を無にしてしまうということは国際共産主義運動が残した重大な教訓である。

主席は1990年8月、新たに発掘して復原された間白山(カンベクサン)密営を訪れ、次いで翌年8月には両江(リャンガン)道を訪れ、両江道は革命の聖山――白頭(ペクトウ)山があり、白頭山密営と普天堡(ポチョンボ)をはじめ数多くの革命戦跡がある朝鮮革命の聖地であるとしたうえで、恵山(ヘサン)、三池淵(サムジヨン)、普天、新坡(シンパ)（金正淑(キムジョンスク)郡）、葡坪(ポピョン)地区など道内の革命戦跡、革命史跡を立派に整備し、それを通じて革命伝統の教育を強化すべきであると述べた。そして、1993年7月末には朝鮮革命博物館を見て回り、博物館の展示で提起される問題を細やかに指摘しながら、参観の手配を綿密に行って、革命伝統をしっかり体得させるための大衆教育活動を強化しなければならないと強調した。

主席は、革命伝統を体得させる教育活動を革命戦跡と革命史跡、革命事績館と革命博物館に対する踏査と参観などさまざまな形式と方法で行うようにした。

そして、階級的教育をさらに強化して、党員と勤労者、特に新しい世代が労働者階級の階級意識と革命精神をしっかり体得し、常に階級的原則を守り、帝国主義とあらゆる階級の敵と容赦なくたたかうようにさせた。

主席は党員と勤労者を集団主義精神で武装させ、社会主義的道徳教育を強化して、社会全体に互いに助け導き合う美風が強く発揚されるようにし、全国を一心団結した睦まじい社会主義的大家庭にした。

主席はまた、あらゆる非社会主義的傾向を克服し、帝国主義の思想・文化に浸透されないように強固な思想的防御陣を敷くようにした。

1992年9月、咸鏡北道党委員会拡大総会で行った演説をはじめ多くの機会に、あらゆる非社会主義的傾向を克服し、外部から資本主義思想が浸透してこないよう思想的防御陣を敷かなければならないと述べた。

そのために、党員と勤労者の間で個人主義、利己主義に反対し、社会主義思想で武装させるための思想教育を強化して、資本主義思想をはじめあらゆる反動的な思想とブルジョア生活様式がわれわれの内部に浸透できないようにした。

主席は、社会主義文化の建設をいっそう力強く推し進めるよう導いた。

特に、教育事業の発展に深い関心を払った。

主席は1992年、社会主義教育テーゼ発表15周年に際し、教育部門において現実発展の要請に即して教育の内容と方法をさらに改善し、質を高めて次世代の教育と民族幹部養成事業で大きな前進を遂げるようにした。

金策（キムチェク）工業総合大学を近代的な教育設備を備えた総合的な科学技術人材養成基地にした。

主席は1989年5月、金策工業総合大学の新校舎を近代的なもの

にするための措置を講じて、建設集団と資材、莫大な資金を投じ、建設が終わった1993年1月には、自ら大学名「金策工業総合大学」の扁額まで揮毫した。そして同年5月には、建設された新校舎を見て回り、整えられた立派な教育条件に即して実験・実習設備を近代化し、教育内容と方法を絶えず改善して民族技術幹部の養成に新たな転換をもたらさなければならないと述べた。

また、1994年7月には金亨稷（キムヒョンジク）師範大学の事業に関心を払って「金亨稷師範大学」の扁額を揮毫し、大学が教員養成機関としての使命と任務を立派に果たすよう細やかな配慮をめぐらした。同時に、すべての大学を近代化し、民族幹部養成事業において大きな前進を遂げるよう深い関心を払った。

こうして、教育部門では国情が厳しい中にあっても無料義務教育制が実施され、有能な科学技術人材が数多く養成された結果、1994年には170余万のインテリ大集団を擁し、全社会のインテリ化が強力に推進されるようになった。

主席は、科学技術を最短期間で新たな高い段階へと発展させることに深い関心を払った。

主席は科学技術の発展のために、80の高齢の身で人民経済各分野の技術書や各種の科学雑誌、経済科学通信、科学技術通報資料を精読したり、録音を聴いては、必要な資料を当該幹部に知らせて生産に導入させた。

そして、科学者、技術者が高い革命的熱意と創造的積極性を発揮して、科学技術発展3カ年計画を遂行するため奮闘するようにした。

1990年10月下旬、竣工した朝鮮コンピュータセンターを訪ねてテープカットした主席は、展示場で作業状況も見、研究成果の説

明も聞き、コンピュータ技術を発展させるための諸問題についても貴重な教えを与えた。

主席は1992年8月、農業科学院鏡城（キョンソン）分院のある田圃に出向き、農業部門の科学者、技術者はわが国の気候風土に合った多収穫の新種を開発しなければならないと指摘した。

また1993年には、国家が科学研究機関に対する統一的指導機能をより立派に遂行できるよう新たな措置を講じた。

主席は、科学者、技術者の小さな科学的発見の芽も大事にし、それを実用へと導いた。

1992年8月上旬、科学院のある研究所が窒素細菌肥料を数年間研究しているという事実を知った主席は、早く完成するよう対策を講じた。

こうして、あれほど困難かつ複雑であった1990年代にも科学技術は急速な発展を遂げ、社会主義朝鮮の繁栄は科学技術によってしっかり保証されるようになった。

主席は、社会主義的文学・芸術を発展させることにも深い関心を払った。

1991年2月11日、万寿台（マンスデ）創作社を訪れた主席は、大型の朝鮮画作品をはじめ多くの作品を一つ一つ見て、国宝的価値のある傑作であると高く評価し、人民的な美術作品をより多く創作する課題を示した。また、1993年2月12日には文学・芸術部門に長年にわたり従事し、多くの功労を立てた創作家、芸術家と席をともにして彼らに恩情を施し、党の文芸方針をより立派に貫徹するため惜しむことなく努力するよう励ました。

主席は、保健医療、スポーツの発展にも大きな力を注いだ。

主席は、国情が厳しい中でも保健医療部門で無料治療制を引き続き実施して、党の予防医療の方針がしっかり貫徹されるようにした。そしてスポーツ部門では、体育とともに国防スポーツと大衆スポーツを強化し、国際競技で優勝して共和国旗を翻した選手を大いに称揚した。

主席は、民族文化遺産を主体的立場に立って保存、管理し、正しく継承していくようにした。

主席は朝鮮民族の始祖を探し出し、檀君(タングン)陵を民族の始祖の陵墓にふさわしく立派に改築するようはからった。

日本帝国主義の檀君抹殺策動により、朝鮮民族の始祖である檀君は当時は神話の人物とされ、檀君朝鮮の歴史は科学的に解明されていなかった。歴史学者も檀君が神話の人物であるという既成観念から脱皮できずにいた。

主席は1993年1月、愛国愛族の崇高な理念と千里眼の英知をもって、江東郡(カンドン)にある檀君陵を発掘する課題を示した。

檀君陵の発掘事業が進められ、1993年2月には檀君陵から檀君の遺骨と遺物が出土した。最新機器で年代を測定した結果、発掘された遺骨は5011年前のものと判定され、檀君は神話の人物ではなく実在した人物であり、平壌(ピョンヤン)を都に定めて初の古朝鮮国家を建てた始祖であることが科学的に解明された。

主席は1993年9月、檀君が実在した人物であることが明らかになった以上、檀君陵を始祖の陵墓にふさわしく立派に修復しなければならないと指摘したうえで、現地に出向いて敷地を定め、檀君陵の建設に関して数十回にわたり指導した。そして1994年7月に、檀君陵の最終形成案を検討し、早急に改築して南朝鮮人民と

海外同胞にも見せるべであると述べた。

主席が心血を注いで探し出した始祖陵は、金正日同志の精力的な指導によって後世に輝く国宝、大記念碑的建造物として立派に改装・拡張され、平壌は朝鮮民族の悠久の歴史と燦然たる文化の源となる聖地となった。

主席は高句麗（コグリョ）の建国始祖の墳墓である東明（トンミョン）王陵と高麗（コリョ）太祖の墳墓である王建（ワンゴン）王陵も立派に改築するよう導いた。

主席はずいぶん前から平壌市力浦（リョクポ）区域にある東明王陵とその周辺の遺跡を全面的に発掘、考証し、それを立派に改築するよう導き、完成したときには「東明王陵改建記念碑」と漢字の碑文まで揮毫した。1993年5月中旬には、新たに改築された東明王陵を訪ね、歴史主義の原則に沿って改築され、高句麗の時代感がよく反映されていると大きな満足の意を表した。

1992年5月5日、開城（ケソン）市にある王建王陵を見て回った主席は、王建は朝鮮の初めての統一国家を建てた人であるから、墳墓は立派にすべきであると指摘するとともに、改築方向と方途を具体的に示し、完成したときには漢字で「高麗太祖王建王陵改建碑」と碑文を揮毫した。

主席は、朝鮮民族の悠久の歴史を主体的立場に立って正しく位置づけ、体系化するよう導いた。

1993年10月20日、檀君陵改築関係部門活動家協議会で行った演説をはじめ多くの機会に、檀君と古朝鮮の歴史研究を深める課題を示し、これまで歪曲されたり間違っていた内容は主体的立場からすべて是正すべきであると述べた。

こうして、朝鮮の原始社会史の全貌は解明され、古朝鮮中心の古代

史と高句麗中心の中世史の体系が確立され、朝鮮民族の正統性にもとづく5000余年の悠久の民族史が位置づけられたのである。

主席は、教育・文化遺産をより立派に保存、管理し、輝かせるよう導いた。

国の悠久の民族教育史をいっそう輝かせるため、1992年5月、開城市を訪ねた主席は、高麗博物館になった成均(ソンギュン)館を見て回り、成均館とは人材を育てるという意味であり、その意味にふさわしく大学にすべきであると指摘した。そして、成均館を今のように高麗博物館にして、この建物が高麗時代の最高教育機関であったと説明するだけでは意味はなく、わが国にこの成均館を継承した大学があるということを実物をもって示すのがふさわしいとして、成均館を大学として生かすため高麗成均館と名づけ、軽工業総合大学にするよう指示した。

主席はその後、高麗成均館を設けるための実務上の対策を講じ、「高麗成均館」と扁額まで揮毫した。そして創立年度は、成均館の前身である国子監が創立された992年に、創立日は9月1日に定めた。

こうして、朝鮮に1000余年の長い歴史を有する大学として高麗成均館が設けられたのである。

主席は、国の貴重な文化遺産として保存されていた膨大な量の『李朝実録』と『八万大蔵経』を朝鮮語に翻訳して出版し、朝鮮人民固有の民族的風習と生活様式も今日の時代の要請に即して継承、発展させていくようにした。

主席は、民族文化遺産を継承、発展させるための事業で収められた成果を法律の面で固定化し、さらに輝かせるための措置も講じた。

主席は、1993年12月9日から11日にかけて行われた最高人民会議第9期第6回会議で、民族文化遺産を正しく継承、発展させるための事業をさらに強化する問題を討議にかけ、1994年4月上旬に開かれた最高人民会議第9期第7回会議で「朝鮮民主主義人民共和国文化遺物保護法」を採択するようにして、民族文化遺産を保存、管理し、正しく継承、発展させるための法的保証をもたらした。

1992年4月、主席は生誕80周年を迎えた。

主席は4月13日、すべての人民軍将兵と人民の一致した念願により、朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号を受けた。4月15日、主席は共和国政府が催した宴会で行った演説『人民大衆の役割を高めるのは自主偉業の勝利の保障』で、人民の息子として人民に尽くしてきた80年の生涯を総括し、革命家にとって人民のために一生を捧げること以上に誇りあり光栄なことはない、今後も人民の愛と信頼の中で人民に最後まで奉仕するであろうと述べた。

第3節　国防力を鉄壁に打ち固め、アメリカ帝国主義の核騒動を粉砕するためのたたかい

1990年代初めに至り、世界の社会主義体制の崩壊によって東西間の冷戦は朝米対決に凝縮され、アメリカをはじめ帝国主義連合勢力の孤立・圧殺策動は朝鮮に集中されるようになった。

金日成主席は新たな厳しい情勢を深く洞察し、銃剣によって切り開かれ前進してきた社会主義の偉業を銃剣をもって固守し輝かせるため、いつにもまして国防力の強化に大きな力を注いだ。

1991年12月24日に開かれた朝鮮労働党中央委員会第6期第19回総会では、金正日同志を朝鮮人民軍最高司令官に任命する決定を採択し、1993年4月9日に行われた最高人民会議第9期第5回会議では金正日同志を朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に推戴した。

主席は、金正日最高司令官の指導のもとにチュチェ革命偉業遂行の主力部隊である人民軍の威力を全面的に強化するよう導いた。

金日成主席は次のように述べている。

「金正日同志は革命武力の最高司令官としての不屈の意志と胆力、優れた知略と用兵術を身につけており、まさにここに、わが革命武力の不断の発展と百戦百勝の保証があります」

主席は1991年12月25日、朝鮮人民軍中隊政治指導員大会で行った演説『人民軍中隊政治指導員の任務について』で、全人民軍将兵が金正日最高司令官の命令をわたしの命令と見なし、その命令に絶対的に服従し、最高司令官の指導に忠実に従うようにと強調した。

そして1992年から1993年の間に、朝鮮人民軍指揮官、政治活動家大会をはじめ部門別の大会を10余回も開催し、金正日最高司令官に忠実に従うよう強調した。

また1994年4月25日には、人民軍の指揮官に自らの尊名入りの「白頭山」拳銃を授与し、全軍が金正日同志を高く戴き、その指導に忠実に従うよう綱領的指針を与えた。主席はこの日、深い感慨にひたった。わが国の労働者がつくった自動短銃を初めて金策、崔庸健（チェヨンゴン）同志たちに授与したのは1949年であり、それから45年が過ぎた今日、わたしがみなさんに拳銃を授与するのは2度目となる

が、そこには、みなさんがこれまでわたしに従って立派にたたかってきたように、今後は金正日最高司令官に忠実に従い、白頭山で始まったわれわれの革命偉業を必ず成就してほしいというわたしの期待が込められている、と述べた。そして、全軍が金正日最高司令官の周りに一致団結し、人民軍内に最高司令官の命令を無条件に実行する革命的軍紀を確立すべきであると強調した。

主席は金正日最高司令官への忠実性を高めることを基本に、軍隊内での政治・思想教育を強化するよう導いた。

主席は1992年3月13日と1993年1月20日、3月3日に抗日革命闘士、革命家の遺児への談話『社会主義偉業の継承、完成のために』で、金正日同志の思想と指導、品格、業績の偉大さについて語りながら、歌にもあるように金正日同志がいなければ、みなさんも社会主義祖国もない、金正日同志を中心にして一心団結するときにのみ、帝国主義者のいかなる反社会主義攻勢も断固粉砕し、社会主義を固守し輝かすことができるのだと述べた。

そして、1992年の金正日同志の生誕50周年を迎えて頌詩をつくり、金正日同志の誕生日を民族最大の祝日に制定するという中央人民委員会の政令を裁可する一方、人民軍軍人に最高司令官の偉大さを深く認識させ、最高司令官への忠誠心を胸に深く刻みつけさせるための教育活動がさまざまな形式と方法で着実に行われるようにした。また、白頭山革命戦跡踏査行軍、革命の聖地――白頭山密営での軍人たちの決意集会など革命伝統教育も力強く行うように指示した。

主席は、軍隊内で将兵一致、党・青一致の美風がさらに高く発揮されるようにした。

主席は、人民軍の指揮官が特権をふるったり横柄にふるまったりする傾向をなくし、兵士を真の革命同志として見るようにさせ、兵士の中に入って寝食をともにしながら彼らの生活を細やかに気づかうことで、兵士たちが指揮官を尊敬するようにした。そして、人民軍が党員と青年同盟員からなっている特性に即して、党・青一致の気風を打ち立て、党員が軍務生活で模範となり、青年同盟員を日常的に助け、青年同盟員が党員の模範を見習うようにさせた。

主席は、人民軍を軍事技術的にいっそう強化するための活動を指導した。

主席は、金正日同志が示した訓練方針と訓練原則に従って戦闘訓練を行うようにした。まず、指揮官・参謀部の訓練を強化して、すべての指揮官と参謀部の作戦・戦闘操作と指揮能力を高める一方、軍人たちが戦闘訓練を実戦さながらに行い、実戦で活用できるものを学び習熟するようにさせた。

1991年4月26日と1994年4月25日には、朝鮮人民軍軍部隊の訓練を現地で指導しながら、訓練の成果を高く評価し、軍人を鼓舞激励した。

主席は、人民軍の近代化をチュチェの軍事思想と戦法に即してあくまで朝鮮の実情に合わせて行うよう導いた。

主席は近代戦における砲兵の位置と役割の重要性を深く洞察し、1992年10月29日に開かれた朝鮮人民軍第2回砲兵大会で、砲兵と通信を近代化し、さらに発展させるための綱領的な課題を示した。同時に、人民軍全般の武力装備の機動力と打撃力を高めるための対策を講じた。

主席は、人民軍の基層組織であり基本戦闘単位である中隊を強

化することに深い関心を払った。

主席は1991年に朝鮮人民軍中隊長大会、中隊政治指導員大会、下士官長大会を、1992年には中隊社労青初級団体委員長大会を開くようにし、中隊の戦闘力を強化するうえで指針となる綱領的な教えを与えた。そして、指揮官の再教育と各種形態の講習を通じて中隊指揮官の水準と能力を一段と高め、上級単位の指揮官が日常的に中隊に出向いて戦闘力を強化する活動を積極的に支援するようにした。

主席は国防力を鉄壁に打ち固めるため、全人民武装化と全国土の要塞化を高い水準で完成するよう導いた。

1992年12月中旬に開かれた中央人民委員会・政務員合同会議で、全人民武装化、全国土の要塞化は全人民を動員して実行すべき課題であるとして、全人民を武装させ全国土を要塞化すれば、敵の侵攻があっても恐れることはないと強調した。そして多くの機会に、労農赤衛隊と赤の青年近衛隊の隊伍の強化とそれに対する指揮・管理の改善、民間武力の装備の改善と訓練の強化、防御工事の推進と軍事戦略上重要な地域の整備などの課題を示し、それを実現するための対策を講じた。

主席は特に国防工業の発展に大きな意義を付与し、1993年12月の朝鮮労働党中央委員会第6期第21回総会をはじめ一連の会議で、国防工業を発展させて全国をハリネズミのように要塞化すれば、誰も敢えて手出しすることはできないと指摘し、党の国防工業重視の方針を無条件に貫徹するようにした。

主席は国防力を強化するため、軍民一致の伝統的美風を強く発揮するよう導いた。

主席は、人民軍軍人が人民を限りなくいたわり愛し、人民の利益を尊重し、人民の生命・財産を保護し、社会主義建設に積極的に参加するようにした。

人民軍軍人は、「祖国防衛も社会主義建設もわれわれが受け持とう！」というスローガンのもとに、金日成主席と金正日最高司令官の構想と意図を実現するため、社会主義建設の現場で祖国の歴史に末長く輝く不滅の偉勲を立てた。

主席は、新しい世代と人民を主体的な戦争観点と祖国防衛の精神で武装させ、全人民が人民軍を肉親のようにいたわり愛し、積極的に支援するようにした。

主席は、アメリカ帝国主義の狂気じみた核騒動を粉砕し、社会主義祖国を守るたたかいを導いた。

アメリカ帝国主義が朝鮮民主主義人民共和国を圧殺するためありもしない「核疑惑」なるものを持ち出し、「特別査察」やら「制裁」やら騒ぎ立てたことで、朝鮮半島情勢は極度の緊張状態に陥った。アメリカ帝国主義は1993年1月、中止していた「チーム・スピリット」合同軍事演習の再開を公表し、20余万の侵略兵力と膨大な核攻撃手段を動員し、さらには核兵器使用時の指揮システムまで発動して軍事的脅迫を加えてきた。このように、朝鮮にいつ戦争が起こるか分からない一触即発の危機がもたらされ、国の最高利益は甚だしく脅かされることになった。

主席は、当面の情勢に対処して社会主義祖国の安全と自主権を守るため、1993年3月、全国に準戦時状態を宣布し、核拡散防止条約からの脱退を宣言する断固たる措置を取った。

主席は、われわれは米国と国際原子力機関の不当な仕打ちと圧

力に対処して、民族の尊厳と国の自主権を守るための自衛的措置として全国に準戦時状態を宣布し、核拡散防止条約からの脱退を宣した、と述べた。

アメリカ帝国主義は急遽「チーム・スピリット93」合同軍事演習を中止し、「特別査察」騒ぎも放棄せざるを得なかった。

しかし、彼らは狡猾にも朝鮮半島の核問題の「国際化」を謀り、「核問題」を国連に持ち込んで朝鮮に「集団的制裁」を加えようと企んだ。

主席は、1993年4月の朝鮮民主主義人民共和国外交部声明を通じて、敵の核騒動を暴露、糾弾し、朝鮮における核問題を実際に解決できる最善の方法は朝米会談を通じて平和的に解決することであり、朝鮮に対するいかなる「制裁」も「宣戦布告」と見なして強硬な自衛的措置を取るという断固たる立場を明らかにした。結果、アメリカ帝国主義は会談に応じざるを得なかった。

1993年6月にニューヨークで開かれた第1段階朝米会談では、朝鮮の主張と意図が十分に反映された朝米共同声明が史上初めて世界に発表され、次いで7月にジュネーブで開かれた第2段階朝米会談では、ニューヨーク共同声明で合意した原則を再確認し、共和国を圧殺しようとするアメリカ帝国主義と反動派の企図を挫折させた。

ところがアメリカ帝国主義は共同声明の合意事項に反して、国際原子力機関の査察を受け入れ、北南対話を再開しなくては次回の朝米会談は開催できないという不当な前提条件を出し、またもや国連を通じて朝鮮に「圧力」と「制裁」を加えようと策動した。

主席は、アメリカ帝国主義の圧力騒ぎに超強硬な態度で断固と

して立ち向かうようにした。

主席は、1994年1月の外交部スポークスマンの声明を通じて、米国が朝米会談をしないと言うならわれわれもしようとはしないし、米国が他の方法を選ぶならばわれわれもそれに対応する方法を選択するであろうという断固たる立場を表明した。そして、同年6月の外交部スポークスマンの声明を通じて、国際原子力機関から即時脱退するという断固たる措置に出た。

アメリカ帝国主義はカーター元大統領を朝鮮に送り、朝米間の関係問題、核問題をめぐる膠着状態を打開しようとした。

主席は1994年6月、平壌を訪れたカーター一行を接見し、真摯に話し合った。

主席は初日、カーターに、米国はわが国の「核問題」を国連に持ち込んでわが国に制裁を加えると言っているが、われわれは制裁を恐れはしない、これまで制裁を加えられながらも安泰であったのに、また制裁を受けるからといって生きていけないことはない、と述べた。翌日、カーターが、米国が北朝鮮に加えようとしていた制裁措置を取り消すことにしたと言うと、主席は制裁措置を取り消すことは有難いが、われわれは米国が取り消しても取り消さなくても構わない、あなたたちがわが国をいくらいじめても、われわれは十分自活していける、と述べた。

このように、主席は揺るぐことのない胆力をもって、核問題に関する朝米会談と北南最高位級会談の開催に有利な条件をもたらしたのである。

米国は、国連安保理での朝鮮に対する「制裁」論議を正式に撤回し、1994年8月にジュネーブで開かれた第3段階朝米会談に出て

きた。そして、1994年10月に開かれた朝米会談では、朝米基本合意文が採択され、クリントン大統領は金正日国防委員長に、朝米基本合意文履行に関する保証メッセージを寄せた。金日成主席と金正日同志の鉄の信念と意志、比類ない胆力と知略、そして無敵必勝の軍力によって、極限に達していたアメリカ帝国主義の核騒動と孤立・圧殺策動は挫折し、朝鮮は反帝軍事戦線の強力な堡塁として浮上するようになった。

第4節　変化した環境と革命発展の要請に即して社会主義経済建設を力強く推進

1990年代、朝鮮での社会主義経済建設は大きな難関と障害に際会した。ソ連と東欧諸国での社会主義の挫折と、世界社会主義市場の崩壊によって、これらの国々と結ばれていた長期および短期貿易協定は有名無実となり、経済協力と貿易取引は停滞した。一方、アメリカと帝国主義反動派は、社会主義の旗を高く掲げて進む朝鮮民主主義人民共和国を何としても孤立・圧殺しようと政治的、軍事的に圧力を加え、経済制裁と封鎖の度を強めた。

金日成主席は、環境の変化に対処して社会主義経済建設を力強く推し進めるためのたたかいを導いた。

1990年1月上旬に朝鮮労働党中央委員会第6期第17回総会を開き、国の経済的自立性をより強める方向で経済構造をさらに完備し、変化した環境に即して対外経済関係を転換する措置を講じた。

そして、増産と節約運動を強力に展開して、社会主義建設で今

一度革命的大高揚を起こさなければならないと強調した。

主席は、1956年12月の総会を契機に増産と節約運動によって社会主義建設でチョンリマ大高揚の端緒を開いたように、自力更生の革命精神を強く発揮して社会主義建設で革命的大高揚を起こすよう呼びかけ、その具体的な課題と方法を示した。そして、人民経済のすべての部門、すべての単位で増産と節約運動を強力に展開し、思想、技術、文化の3大革命路線を引き続き堅持しなければならないと指摘した。また、自力更生、刻苦奮闘の革命精神をもって朝鮮式の社会主義建設を進め、すべての党員と勤労者を「90年代の速度」を創造するたたかいに奮起させるべきであると強調した。

主席は社会主義建設で革命的大高揚を起こし、第3次7カ年計画を遂行するためのたたかいを導いた。

1990年2月下旬に開かれた全国生産革新者大会で、「増産、節約ですでに築かれた経済的土台が実効を上げるようにしよう！」、「われわれの方式で生きよう！」というスローガンのもとに「90年代の速度」を創造し、人民あげての社会主義大進軍運動をいっそう加速するよう全人民を奮い立たせた。そして、同年4月に開かれた全国青年熱誠者大会をはじめ部門別の大会と会議で、すべての党員と勤労者を新たな大進軍運動へと力強く奮い立たせた。

こうして朝鮮人民は、社会主義偉業の正当性と勝利の信念に燃え、新たな革命的大高揚を起こすための「90年代の速度」創造運動に立ち上がったのである。

主席は、人民大衆の高揚した熱意に即して経済組織活動を綿密に行うようにした。特に政務院が国の経済司令部としての役割を

高めることに大きな意義を付与し、1990年5月に開かれた中央人民委員会第9期第1回会議、政務院第9期第1回全員会議と1992年12月に開かれた中央人民委員会・政務院合同会議で、政務院は国家の経済活動全般を適切に案配し、各経済機関の活動を監督、統制しなければならないと指摘した。そして社会主義経済で重要な問題は、農業実績を上げ、工業部門の生産を正常化し、対外経済関係を発展させ、基本建設を活発に進める課題を実行することであると述べた。

主席は社会主義経済の本質に即して、経済指導管理を朝鮮式に行うことに深い関心を払った。1990年4月の経済学者との談話で、党の示したチュチェの社会主義経済管理原則と方法を引き続き貫徹し、テアンの事業体系にもとづいて計画化、契約による原料・資材の供給、生産の手配と指揮を改善する問題、朝鮮式に連合企業所を管理し、独立採算制と社会主義的労働報酬制を完成し、社会主義農業指導システムを引き続き強化、発展させ、分組管理制を強化し、農業を企業式の方法で管理し、大農場制の方向へと進めなければならないと指摘した。1990年6月に開かれた中央人民委員会第9期第2回会議では、社会主義の農村問題を解決するためには党の農村テーゼを貫徹すること以外に他の道はあり得ないとし、確固たる信念をもって農村テーゼが示した道に引き続き力強く進まなければならないと強調した。

主席は、第3次7カ年計画の主要生産目標を達成するためのたたかいを繰り広げ、特に穀物の生産目標達成に大きな力を入れた。

早くから「米はすなわち社会主義である」というスローガンを示し、農業第一主義の方針貫徹へと全党、全人民を導いてきた

主席は、帝国主義者による経済封鎖がその極に達した1990年代の前半においても、農業は天下の大本であるとし、農業を立派に営むことを第一の課題とした。

主席は耕地の地力を高めることに大きな意義を付与し、1990年11月末と12月初に行われた中央人民委員会第9期第3回会議で、全党、全人民、全軍を総動員して客土運動を力強く繰り広げるようにした。そして客土の方法と段階別の目標、その遂行方法まで具体的に示した。

主席は興南(フンナム)肥料連合企業所の設備を大型化、近代化して肥料生産を高めるため、1991年7月中旬に咸鏡南道の経済部門責任幹部協議会を開き、興南肥料連合企業所の設備を大型化、近代化しなければ食の問題を解決することはできないと指摘し、これに全力を集中するよう幹部と労働者を奮い立たせた。そして、長らく咸鏡南道と咸鏡北道に留まり、ほとんど毎日、あるときは日に何度も興南肥料連合企業所拡張工事の進行状況について報告を受けると、必要な対策を講じ、工事を期限前に完成させるよう精力的に指導した。

1991年11月末、拡張された興南肥料連合企業所を訪れた主席は、大型化、近代化された設備を一つ一つ見て回り、翌日には操業式に参加して労働革新者と記念写真を撮り、工事に参加した労働者と科学者、技術者のために盛大な宴会を催した。

主席は1993年初めから、再び農業部門の活動を重点に精力的に指導した。

3月2日から13日までの12日間にわたり、農業部門責任幹部の協議会と各道農業部門活動家の協議会を多忙な日程に組み入れ、連

日会議を指導した。

主席が農業部門の活動を指導しながら特に関心を払ったのは、穀倉地帯である黄海南道延白が原の農業であった。国の農業生産において大きな役割を担っている延白が原の農業に大きな意義を付与した主席は、北部地区への現地指導での疲れを解くいとまもなく、1993年8月30日、夜行列車で翌日の明け方に白川駅に着いた。そして、朝露も乾かぬ早朝から照りつける真夏の日差しの中、一瞬の休息もとらず、白川郡、延安郡、青丹郡内の五つの農場を次々と訪れて作柄を確かめ、農作業について話し合い、現地で農業部門活動家の協議会を開いて黄海南道の農業を新たな高い段階へと引き上げるための指針となる綱領的な教示を与えた。

朝鮮労働党中央委員会政治局は、高齢でありながら人民のために献身の道を歩み続ける主席に、少しでも休息をとるようにと勧めた。

すると主席は、昔から「臣労君逸」という言葉がある、これは、臣下が熱心に働けば君主が楽をするという意味であるが、わたしは人民の臣下で、人民はわれわれの君主である、だからわたしたちが仕事に励んでこそ人民が安楽に暮らすことができると言って、休息など考えもしなかった。

外国のある政治家は、昔から臣下は働いて君主は休むという意味の「臣労君逸」という言葉があるが、朝鮮ではまさしく正反対だ、偉大な金日成主席は休まず、下の幹部は必ず休むので、朝鮮では「臣労君逸」を「君労臣逸」に改めるべきではないか、と感動をこめて述べた。

主席の献身的な姿に引かれて、朝鮮労働党と朝鮮人民は第3次

7カ年計画を立派に遂行した。そうして、チュチェ工業の威力はさらに強まり、農業の水利化、機械化、化学化も大きな前進を遂げた。平壌市の統一(トンイル)通りをはじめ都市と農村に近代的な住宅が数多く建設され、平壌市にトロリーバス、地下鉄など近代的な旅客輸送手段が立派に整った。万景台(マンギョンデ)――松新(ソンシン)間の路面電車の第1段階工事が完成し、主席の生誕80周年に際して紋繡(ムンス)――土城(トソン)間の3里区間に路面電車が開通した。平壌市をはじめ都市の公害はなくなり、公園や遊園地、公共サービス施設も立派に整った。

主席は、変化する環境と発展する現実の要請に沿って革命的な経済戦略を打ち出し、その貫徹のためのたたかいを力強く推し進めた。

主席は1993年12月上旬の朝鮮労働党中央委員会第6期第21回総会で、以後3年間を調整期間とし、この間に農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義を進め、人民経済の先行部門である石炭工業と電力工業、鉄道輸送を確固として優先させ、金属工業を引き続き発展させるという革命的な経済戦略を提示した。

革命的な経済戦略の基本的目標は、2～3年の間に農業と軽工業、貿易の発展に力を集中して人民の生活上の問題を解決し、人民経済の先行部門を優先させることですべての部門で生産を正常化し、既存の経済的基盤の威力を十分に発揮させることであった。

主席は1994年の新年の辞で、党の革命的経済戦略を貫徹するためすべての幹部と党員、勤労者が「自力更生、刻苦奮闘の革命精神で、社会主義総進軍を力強く推し進めよう！」という戦闘的スローガンを高く掲げ、チョンリマに「90年代の速度」をプラスした勢いで継続革新、継続前進しなければならないと強調した。そ

して、同年4月上旬に開かれた最高人民会議第9期第7回会議で、社会主義経済建設の調整期間の課題を立派に遂行するための問題を討議、決定するようにするなど、革命的経済戦略の貫徹において必要な対策を具体的に講じた。

主席は、党の革命的経済戦略にもとづき農業と軽工業、対外貿易に新たな転換をもたらし、人民経済の先行部門である石炭工業と電力工業、鉄道輸送を優先させ、金属工業を発展させるよう導いた。

主席は農業第一主義の方針を貫徹するため、1994年1月の農業部門活動家の協議会で、穀倉地帯である黄海南道延白地区と載寧（チェリョン）地区、甕津（オンジン）地区の農業を盛り立てるための対策を講じ、2月には全国農業大会に『社会主義農村テーゼの旗のもと、農村問題の最終的解決のために』と題する書簡を送った。

主席は書簡で、思想革命と文化革命をさらに深化、発展させて農民の思想・意識水準と技術・文化水準を労働者階級の水準に確固と引き上げる問題、農村技術革命の成果を強化し発展させて農業の工業化、近代化を高い水準で実現し、チュチェ農法を立派に貫徹して農業生産を絶えず高める問題、農村への支援をいっそう強化する問題、経済管理水準における工業と農業の格差をなくし、農村で協同的所有を漸次、全人民的所有に移す事業を立派に遂行する問題などを強調した。

そして、同年4月に全国畜産部門熱誠者会議を招集し、6月19日と21日には温泉（オンチョン）郡金塘（クムダン）協同農場と大城（テソン）区域のある協同農場を現地指導し、農業生産を増やすための対策を講じた。

主席は軽工業第一主義の方針を貫徹するため、軽工業革命を推

し進めて一般消費物資の生産を増やし、その質を高めるための運動を力強く繰り広げるようにした。

軽工業部門の工場を整備、補強して近代化し、化学繊維と合成樹脂など軽工業原料の生産を強化するための積極的な対策を講じて軽工業部門のすべての工場をフル稼働させ、生産を高い水準で正常化するとともに、栽培原料基地と天然原料基地を強固に築いて、地方工業の発展に新たな転換がもたらされるようにした。

主席は貿易第一主義の方針を貫徹するため、変化した環境に即して対外市場を積極的に開拓し、対外経済交流を拡大、発展させるとともに、輸出品生産基地を整備して輸出品の生産を増やし、その質を高めるようにした。そして、社会主義的原則に沿って羅津（ラジン）――先鋒（ソンボン）経済貿易地帯を開発するようにした。

また石炭工業、電力工業を発展させるため、既存の生産土台を有効に利用し、生産能力を拡張して石炭と電力の生産を大幅に増やすようにした。

鉄道輸送の物質的・技術的土台を強化し、輸送の手配と指揮を綿密に行うようにする一方、鉄道の重量化を実現して増大する人民経済の輸送需要を満たすとともに、金属工業の発展に引き続き大きな力を入れて鉄鋼材の生産を増やすようにした。

主席は革命的経済戦略を立派に貫徹するため、1994年7月5日と6日、経済部門の責任幹部協議会を開き、社会主義経済建設に新たな革命的転換をもたらすための課題と方法を示した。

金日成主席は次のように述べている。

「帝国主義者と反動派の反共和国策動とわが国に対する圧殺・制裁策動を粉砕して、人民大衆中心の朝鮮式社会主義をさらに輝

かし、社会主義の旗を引き続き高く掲げて進むためには、党の革命的経済戦略を貫いて社会主義経済建設で新たな高揚を起こさなければなりません」

主席は、党の革命的な経済戦略を貫くうえで重要なのは、電力問題を速やかに解決し、化学肥料とビナロン、セメントの生産を正常化させるとともに、金属工業を発展させて鋼鉄生産を伸ばし、大型貨物船を多く建造することであると指摘し、部門別の主要課題を示した。

そして、社会主義経済建設に転換をもたらすためには幹部の責任感と役割を高めなければならないと指摘した。

主席は、経済部門の幹部が自らの本分を深く自覚し、経済活動における懸案を解決するため力を尽くし、知恵と精力を注いで取り組むならば、不可能なことはないと述べた。そして、幹部は人民を教師とし、人民大衆から学ばなければならない、チュチェ思想の要求どおり、常に人民の中に入って苦楽をともにし、人民の利益を擁護するために進んで努力しなければならない、と強調した。

経済部門の責任幹部協議会での主席の教えは、革命的経済戦略をあくまで貫徹し、国の経済を帝国主義者のいかなる経済封鎖にもびくともしない主体性の強い自立的民族経済に発展させる経済建設の綱領であり、朝鮮労働党と人民が社会主義経済建設において堅持すべき指導的指針となった。

第5節　全民族の大団結による祖国統一の画期的な局面を開くための活動

民族の団結を成し遂げて祖国統一の偉業を成就しようとする全同胞の熱望は、1990年代に至ってかつてなく高まった。

金日成主席は全民族の統一念願を胸に抱き、統一された祖国を同胞に譲り渡すため、全民族の団結を成し遂げることに心血を注いだ。

主席は、祖国統一の途上に横たわる障害と難関を克服し、統一問題の解決に根本的な転換をもたらすためには、祖国統一の偉業を名実ともに全民族的な偉業にする決定的な救国対策を立てる必要があると考えた。

この時期、南朝鮮の支配層は、アメリカ帝国主義の反共和国騒ぎに便乗して「吸収統一」、「自由民主主義体制下での統一」を唱え、祖国の統一を実現するための朝鮮人民の闘争を必死になって阻んだ。

主席は新たな情勢に対処し、1990年5月下旬に開かれた最高人民会議第9期第1回会議で、祖国統一偉業を全民族的偉業にするための対策として、祖国統一のための五つの方針を提示した。

五つの方針は第1に、朝鮮半島の緊張を緩和して、平和的環境をつくりだす、第2に、分断の障壁を打ち壊し、北南間の自由往来と全面開放を実現する、第3に、北と南が祖国の自主的平和統一に有利な国際的環境をつくりだす原則に立って対外関係を発展させる、第4に、祖国統一のための対話を進展させる、第5に、全

民族的な統一戦線を結成することであった。

主席は、1991年8月1日に発表した著作『わが民族の大団結を成し遂げよう』をはじめ一連の著作で、祖国統一の歴史的偉業を実現するうえで重要なのは、一にも二にも三にも朝鮮民族の大団結を成し遂げることであるとし、それを実現するための課題と方法を示した。

主席は、民族の大団結を実現するため、北と南、海外の各階層の同胞が思想と体制、信教の違いを越えて民族共通の利益を優先させ、祖国統一の偉業にすべてを服従させ、北と南、海外同胞の間の接触と往来を頻繁に行い、対話を積極的に進展させ、全民族的な連帯を強化して、祖国の統一をめざしてたたかう北と南、海外のすべての政党、団体と組織、各階層同胞の組織的な連合を実現することについて説いた。

主席は、民族大団結の旗のもとに全民族を一つの政治的勢力に結束するための活動を指導した。

汎民族大会を開いて北と南、海外の3者連帯を実現し、汎民族的な統一運動組織を設ける活動を積極的に進めるようにした。

全民族が大きな期待と関心を寄せる中、1990年8月、祖国解放45周年を契機に祖宗の山――白頭山の頂で祖国統一のための汎民族大会の開幕と白頭――漢拏（ハンナ）大行進発向式が行われ、次いで8月15日には、板門店（パンムンジョム）で祖国の平和と統一のための第1回汎民族大会が盛大に開催された。

8月中旬、汎民族大会の代表に会った主席は、祖国を統一するには北と南、海外のどこにいようと、全同胞が統一運動に立ち上がるべきであり、各階層の全同胞が思想と理念、政見と信教の違

いを越え、民族大団結の原則で一つに固く団結しなければならないと強調した。

歴史的な8・15汎民族大会を契機に、一つの民族としての英知を示す統一行事が相次いで行われた。第11回アジア競技大会に参加した北南の選手に対する共同応援、「統一サッカー競技」、汎民族統一音楽会と「90送年統一伝統音楽会」が成功裏に開催され、北南単一チームが第41回世界卓球選手権大会と第6回ワールドユースサッカー選手権大会に参加し、北南の女性が接触し、北南の大学生代表が学術踏査交換に関する実務接触を行った。

北と南、海外の統一・愛国勢力からなる連合体を組織するという汎民族大会での決議にもとづき、1990年11月に祖国統一汎民族連合（汎民連）が結成された。汎民連は、自主、平和統一、民族大団結の3大原則にもとづいて祖国統一を実現することを使命とし、北と南、海外同胞の共通の意思を代弁する愛国的な統一運動組織であった。次いで、1992年8月には祖国統一汎民族青年学生連合（汎青学連）が結成された。汎民連と汎青学連の結成は、祖国統一の主体的勢力を強化し、統一運動を拡大、発展させるうえで画期的な意義を持つ出来事であった。

汎民連の結成後、北と南、海外の統一愛国勢力は、毎年8・15を契機に平壌や板門店、ソウル、東京に集まって北と南、海外が共同で、または地域別に汎民族大会を開き、全民族的な規模で統一の熱気を高めていった。

主席は1992年8月、第3回汎民族大会に参加した海外同胞への談話で、民族自主の原則を堅持し全民族の団結を実現するため、北と南、海外同胞間の対話と全民族的な会議をたびたび開催するこ

とを発案した。

主席は北南間の軍事的対決状態を解消し、平和を保障するための実際的な対策を講じるため、北南高位級会談を催すようにした。

北南高位級会談は8回の板門店予備会談を経て、ついに1990年9月に開催された。

会談でわが方は、不可侵問題をはじめ軍事的対決状態を実際に解消するための提案を示し、誠意ある努力を尽くした。しかし、南朝鮮側は不当な口実を設けて問題の討議を人為的に難しくする一方、アメリカと「チーム・スピリット」合同軍事演習を繰り広げ、ようやく催された北南高位級会談を中断させ、国連への単独加入を執拗に追求した。

主席は祖国統一のための主動的な措置として、共和国が先に国連に加盟するようにした。そうして、1991年9月の国連総会第46回会議で参加国すべての賛同により、朝鮮民主主義人民共和国は国連加盟国となった。

南朝鮮側は再び会談の場に現れ、10カ月間も中断されていた北南高位級会談が再開した。1991年12月の第5回北南高位級会談では「北南間の和解と不可侵および協力・交流に関する合意書」が採択され、次いで核問題を協議するための3回にわたる北南代表の接触を経て「朝鮮半島の非核化に関する共同宣言」が採択された。合意書と共同宣言は、1992年に平壌で開かれた第6回北南高位級会談でその発効が全世界に公表された。

主席は1992年2月20日、北南高位級会談双方の代表団に会い、北南合意書と非核化共同宣言を成功裏に実現するために提起される基本的問題を明らかにした。そして、発効した合意文書は北と

南の責任ある当局が民族に対し誓った誓約であるため、北と南の当局者が自主、平和統一、民族大団結の原則に確固と立ち、具体的な実践によって信頼を積み重ねるならば、統一は必ず成就できると確信していると述べた。

主席は接触と対話を通じて民族の団結と統一の気運を高揚させる一方、南朝鮮にいる非転向長期囚たちの送還を実現させるため最善を尽くした。

そうして1993年3月、非転向長期囚である信念と意志の化身――李仁模（リインモ）がついに社会主義祖国の懐に抱かれた。

李仁模の送還は統一愛国勢力の歴史的な勝利であり、民族的団結と統一をめざす北と南、海外同胞のたたかいを大いに鼓舞激励した。

主席は、全民族大団結10大綱領の旗のもとに祖国統一の画期的な局面を開くための活動を力強く繰り広げるよう導いた。

接触と対話を通じて緊張緩和に向かっていた朝鮮半島の情勢は、1993年に入り、内外の分裂主義勢力の悪辣な反共和国策動によって再び戦争の瀬戸際へと追いやられた。

朝鮮民族には、同族同士が対決し大国の餌食となって核戦争の惨禍を被るか、それとも全民族が団結して民族の尊厳を守り、祖国統一の道を開いていくかという深刻な問題が提起された。

緊迫した情勢を深く洞察した主席は、民族の大団結を成し遂げるための活動を新たな高い段階で推し進めるため、1993年4月、『祖国統一のための全民族大団結10大綱領』を作成し、最高人民会議第9期第5回会議で討議、採択するようにした。

主席は綱領で、祖国の自主的平和統一を実現するため、全民族

が大団結しなければならないと指摘した。

金日成主席は次のように述べている。

「民族の運命を憂える人であれば、北と南、海外を問わず、共産主義者と民族主義者、無産者と有産者、無神論者と有神論者であるかを問わず、あらゆる違いを超越してまず一つの民族として団結し、祖国統一の道をともに切り開いていくべきである」

主席は綱領で、自主、平和、中立の汎民族統一国家の創建を民族大団結の総体的目標として示し、民族愛と民族自主精神を団結の理念的基礎とし、共存、共栄、共利を図り、祖国統一偉業にすべてを服従させることを団結の基本原則として規定した。また、一切の政争を中止して、北と南が互いに信頼し団結する、主義主張に関係なく祖国統一の道でともに手を取り合う、個人または団体所有のすべての財貨を保護して民族の大団結を図るのに利用する、接触、往来、対話を通じて全民族が互いに理解し信頼し、団結する、祖国統一をめざす道で、北と南、海外の全民族が相互の連帯を強める、民族の大団結と祖国統一の偉業に貢献した人を高く評価するなど、民族の大団結のための具体的な方法を全面的に提示した。

主席は、10大綱領の旗のもとに祖国統一の画期的な局面を開くため精力的に活動する一方、北南最高位級会談の実現のために最善を尽くした。

主席は、「文民」の看板を掲げた南朝鮮の新しい執権者が、いかなる同盟国も民族に勝るものではないとして、「頂上会談」開催の意向を表明したことに留意し、1993年5月、北南最高位級の特使交換を発起し、その実現のための措置を講じた。そうして、

同年10月から北南最高位級の特使交換のための実務代表の接触が8回にわたって行われた。

主席は、南朝鮮の支配層は特使交換の実現を悪辣に妨げたが、半世紀にわたる民族分裂の悲劇の歴史に終止符を打ち、何としても祖国統一の扉を開こうと南朝鮮の当局者を協議に応じさせた。

こうして、1994年6月、板門店で北南最高位級会談のための予備接触が行われ、7月25日から27日にかけて平壌で北南最高位級会談を開催する合意書が採択された。

主席は会談を控えて、数十回もの懇篤な言葉と10余件の親筆教示を下した。7月6日には、金正日同志と北南最高位級会談について具体的に話し合い、翌日には真夜中まで民族の大団結と統一の大経綸を行う歴史的な文書に目を通し、「金日成　1994・7・7」という親筆を残した。この歴史的な文書は、金日成主席の祖国統一の遺訓となった。

第6節　社会主義運動を再建し、自由で平和な新しい世界を建設するための活動

1990年代、帝国主義者と反動派は、多くの国で社会主義が挫折したことから、あたかもそれが「社会主義の終焉」を意味するかのように宣伝し、人民の心から社会主義を永遠に抜き去ろうと策動した。社会主義の背信者たちは、社会主義の理念そのものが誤っているとし、彼らの背信行為を弁護した。一方、アメリカをはじめ帝国主義者は、社会主義のとりでである朝鮮に矛先を向け、

社会主義が挫折した国々での社会主義の再生を妨げ、新しい社会の建設に入った国々が社会主義の道を歩めないようにしようと策動した。

世界革命発展の切実な要請を深く洞察した金日成主席は、社会主義運動を再建し、社会主義偉業を前進させるため精力的に活動した。

主席は、1991年7月上旬のポルトガル共産党代表団への談話と、翌年4月の『ワシントン・タイムズ』記者団の質問に対する回答をはじめ一連の著作で、社会主義運動を再建し、社会主義偉業を前進させるための原則的問題を明らかにした。

金日成主席は、社会主義が挫折した原因について次のように述べている。

「一部の国で社会主義が挫折した原因はいろいろありましょうが、その根本的原因は、それらの国が社会主義の基本原則を守らなかったことにあります」

主席は、社会主義建設で堅持すべき基本原則は自主性であると強調した。

国によって実情が異なり、風習や伝統も異なるため、社会主義建設は自らの方式で、自国人民の志向と要求に即して行わなければならない。東欧諸国で社会主義が崩壊した重要な原因の一つは、事大主義と教条主義に陥ってむやみに他国のやり方を模倣したことにある。

主席は、社会主義建設で必ず堅持すべき基本原則はまた、人民大衆が国家と社会の主人の地位を占め、主人としての役割を果たすようにさせることであると指摘した。

人民大衆が国家と社会の主人の地位を占め、主人としての役割を果たすようにさせるには、人民大衆を社会主義思想で教育し、社会主義的集団として統一・団結させ、党の指導のもとに大衆路線を貫徹し、国家管理において社会主義的民主主義を全面的に発揚しなければならない。こうしなければ主観主義と官僚主義が増長して、人民大衆が国家と社会の主人としての役割を果たすことはできず、社会主義はその優越性を発揮できなくなる。東欧諸国で社会主義が挫折した原因の一つは、まさに指導において幹部たちの官僚主義が甚だしくなり、人民大衆と離脱したことにある。

主席は特に、多くの国で社会主義が崩壊したのは、社会主義偉業の遂行において指導の継承の問題を正しく解決できなかったためであると指摘した。

主席は、社会主義偉業は数世代にわたって遂行する長期的な偉業であるため、革命の代が替わるときに革命と建設に対する指導が正しく継承されなければ、社会主義偉業は紆余曲折を経、失敗を免れることができないと述べた。

主席は、社会主義運動を再建するためには革命家が敗北主義に陥ってはならず、社会主義の勝利に対して固い信念を持つべきであるとし、歴史が前進する過程には一時的な挫折や紆余曲折はあり得るが、人類が自主の道、社会主義の道を進むのはたがえることのできない法則であるとしたうえで、社会主義偉業に対する固い信念を持ち、歴史の進路を切り開いていかなければならないと強調した。

主席は、平壌宣言の旗のもとに社会主義運動を再建し、前進させていくよう導いた。

社会主義再建運動を力強く前進させるためには、社会主義を志向する革命的人民のたたかいにおいて指針となる共同の闘争綱領が必要であった。これは、社会主義をめざしてたたかう革命家と世界の進歩的人民の共通の志向であり要求でもあった。

1992年4月、平壌を訪れた各国の共産党と労働者党、進歩的政党の代表は、朝鮮式社会主義の実相を目の当たりにし、チュチェ思想を具現した人民大衆中心の社会主義は人類が志向する真の社会であり、朝鮮式に社会主義を建設してこそ勝利することができるということをいっそう確信するようになった。彼らは、2国間および多国間会談を開いて社会主義偉業を固守し前進させていくための方法を十分に討議し、チュチェ思想を指針として社会主義を再建するための共同の闘争綱領を発表することを誰もが提起した。

そうして、1992年4月20日、平壌では社会主義再建の大憲章である平壌宣言『社会主義偉業を擁護し前進させよう』が採択、発表された。

平壌宣言の基本思想は、社会主義運動を再建し、社会主義の原則を守るために断固たたかおうというものであった。

平壌宣言には、社会主義は人類の未来を代表する理想の社会であり、社会主義偉業はその真理性と正当性によって必ず勝利すると指摘されている。そして、社会主義偉業を擁護し前進させるためには、各国の党が自主性を確固と堅持し、自らの力を強固にし、いかなる環境にあっても革命的原則を捨てず、社会主義の旗を高く掲げて進み、社会主義をめざすたたかいにおいて国際的団結を強めなければならないと強調されている。そして、全世界の進歩

的政党と人民に、社会主義偉業に対する確たる信念を持ち、人類の未来を切り開くためにあくまでたたかうことを呼びかけている。

世界の革命的党と人民はひとしく、平壌宣言を「社会主義再建運動と国際共産主義運動の再生を告げる偉大な共産党宣言」であるとし、絶対的な支持と共感を表した。

平壌宣言が採択された当初、これに署名した党は70であったが、その数は毎年増え、1994年7月には215に達した。

主席は、社会主義を再建し社会主義偉業を前進させるうえで、朝鮮が社会主義の堡塁としての先駆的役割を立派に果たすよう導いた。

主席は、わが共和国が社会主義偉業の遂行における出色な地位に即して、政治、経済、文化をはじめ社会主義建設の各分野において立派な模範となり、革命と建設で達成した輝かしい成果と貴重な経験を通じて、社会主義の再生をめざすたたかいへと世界の進歩的人民を力強く鼓舞激励するようにした。

そして、朝鮮を訪れる各国の党と政府の代表団と政界、社会各界、言論界の人士に会い、社会主義偉業に限りなく忠実な金正日同志の偉大さについて述べるとともに、幹部たちが金正日同志の対外的権威を高めることに重点をおいて対外活動を行うよう導いた。

主席は、世界各国の党と人民が社会主義の道を進むよう積極的に鼓舞激励した。

1992年から1994年6月までの間だけでも、キューバ、ベトナム、スウェーデン、ドイツ、カナダなど世界各国の党代表団をはじめ数多くの代表団と個別人士に会う一方、党代表団をはじめ多くの

代表団と特使を各国に派遣し、社会主義をめざす進歩的人民のたたかいを誠心誠意、支援するようにした。

主席は、帝国主義者の支配主義的策動を粉砕し、自由、平和の新しい世界の建設と世界の平和愛好人民の反戦、反核、平和運動の強化のため精力的に活動した。

主席は、1991年4月末に平壌で開かれた列国議会同盟第85回総会開幕会議で行った演説『自由、平和の新しい世界のために』で、自由、平和の新しい世界を建設することを人類共通の課題とし、その実現のための課題を示した。

主席は、平和を守るためには、すべての国と民族が自主性を堅持し、力の政策に反対し、侵略と戦争を防ぐ国際的な共同闘争を力強く展開しなければならないと述べた。また、軍縮を実現し、核兵器をはじめ大量破壊兵器を撤廃することは、現在、平和を保障するうえで最も緊切な問題となっているとし、核兵器の実験と製造の禁止、現有核兵器の縮減と全廃、非核地帯・平和地帯の設置、平和運動に対する積極的な支持と人民の団結と協力を強化するよう強調した。

主席は、朝鮮を訪れる数多くの国家元首と各国の党および政府代表団に接見する一方、多くの国際会議に代表団を派遣して、反戦、反核、平和運動のための対外活動を積極的に行うようにした。

1992年1月、ネパールで開かれた信頼構築に関するアジア・太平洋地域の軍縮会議と3月に中国で開かれたアジア・太平洋地域の軍縮および安全に関する会議、8月に日本で開かれた原水爆禁止世界大会に代表団を派遣して、アジア・太平洋地域における核兵器の縮減および拡散防止と信頼の構築、朝鮮半島の非核化のた

めに積極的に活動させ、アメリカ帝国主義の核騒ぎと日本の核武装化策動を暴露、糾弾するうえで大きな役割を果たすようにした。

一方、アメリカ帝国主義とその追随勢力が共和国に対する狂気じみた核騒ぎを起こし、「特別査察」と「制裁」を強いている状況に対処して、高圧強硬の姿勢でアメリカ帝国主義の傲慢な鼻柱をへし折ることで、世界の進歩的人民の反戦、反核、平和運動を大いに鼓舞激励した。

主席は、アジア地域で自主化をめざすたたかいを強めていくことに大きな力を注いだ。

自主、平和、繁栄の新しいアジアを建設することは、アジアの安全と共同の繁栄を成し遂げ、世界の平和偉業に寄与するための重要な要求であった。

主席は、1991年4月、『毎日新聞』編集局長の質問に対する回答をはじめ一連の著作で、自主、繁栄の新しいアジア建設に関する原則的な問題を明らかにした。

主席は、アジアの主人はアジア人であり、新しいアジアの建設においてアジア諸国の人民は主人としての責任と役割を果たさなければならないと指摘した。また、アジア諸国の人民はアジア問題の解決において帝国主義者の専横と干渉をこれ以上許してはならず、自主的立場を堅持し、思想と体制、信教の違いを越えて互いに緊密に協力し、この地域の侵略的軍事基地を撤廃し、外国軍隊を撤退させなければならないと強調した。

主席は新しいアジア建設の構想を実現するため、この地域の国々との政治的・経済的・文化的連係と協力関係を拡大、発展させることに深い関心を払い、1991年1月から2月にかけての朝鮮民

主主義人民共和国政府代表団のタイ、インドネシア、マレーシア訪問を契機に、こうした国々との友好・協力関係を拡大、発展させていくようにした。

主席は、朝・日関係を両国人民の念願と志向に合わせて改善し、東北アジア地域の平和と安全に寄与するようにした。

そうして1990年9月、平壌で朝鮮労働党と自由民主党、日本社会党による3党会談が開かれ、会談の結果、朝・日関係の改善とアジアの平和を図るための3党共同宣言が発表された。

主席は、非同盟運動を引き続き強化、発展させることに大きな関心を払った。

1990年代に至り、非同盟運動は冷戦の終息によって新たな挑戦に直面するようになった。アメリカ帝国主義は、国際舞台での冷戦構造の崩壊と力の均衡の破壊を奇貨として、反帝・自主、反戦・平和、独立と進歩をめざしてたたかってきたこの運動の根本理念と性格を抹殺しようと策動した。また、国際情勢の変化と関連して、一部の人は非同盟運動は自らの存在の有効性を失ったと考えたり、この運動の活動方向を政治問題から経済問題に変えるべきだという誤った主張を持ち出した。

主席は、1992年9月初め、インドネシアの『メディア・インドネシア』新聞社責任主筆の質問に対する回答で、非同盟運動の進む道を明らかにした。

金日成主席は次のように述べている。

「帝国主義支配勢力が存在し、非同盟運動の理念が実現されていない状況のもとで、非同盟運動は存続すべきであり、さらに強化、発展させなければなりません」

主席は、この運動の統一・団結を実現し、帝国主義、支配主義、植民地主義、人種主義に反対し、共同の戦略をもって国連をはじめ国際舞台で歩調を合わせるべきだと指摘した。そして、非同盟諸国は政治、経済、文化の各分野にわたって緊密に協力し合い、古い国際秩序を打ち壊し、公正な新国際秩序を確立し、集団的自力更生の原則にもとづいて南南協力を拡大発展させるため積極的に努力すべきであると強調した。

主席は非同盟運動の強化、発展のため、非同盟諸国の国家元首や代表団をわが国に招請して、この運動で提起される戦略戦術上の問題を示し、非同盟諸国首脳会議をはじめ重要な会議に特使や代表を派遣して、わが国が非同盟運動を強化し発展させるうえで重要な役割を果たすようにした。

そして非同盟諸国の広報活動にも深い関心を払い、1993年6月中旬、わが国で第4回非同盟諸国広報相会議を催すようにし、この会議が自主化された新しい世界を建設するための共同の偉業に寄与する重要な国際的な会合になるようにした。

主席はこのように、社会主義再建運動と非同盟運動、反戦・平和運動に不滅の貢献をした。

偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにおられる

朝鮮人民が数千年の歴史において初めて迎え、高く戴いた偉大な領袖金日成主席は、1994年7月8日2時、82歳を一期に、精神的過労による急病で惜しくも逝去された。

主席の逝去は、5000年にわたる朝鮮民族史上初めて味わった最も大きな悲しみであり、取り返すことのできない最も大きな喪失であった。

金正日総書記は次のように述べている。

「80余星霜、常に人民の中にあって朝鮮人民を勝利の道に導いてきた金日成同志を失ったことは、5000年にわたるわが民族史上初めて味わった最も大きな悲しみであり、何をもってしても取り返すことのできない最大の喪失でした」

主席の逝去は朝鮮人民にとって、実に太陽が消滅し、地球が割れ、天が崩れ落ちたような大きな衝撃であった。

主席はありとあらゆる辛苦をなめ尽くし、ひたすら人民の自由と幸福のために終生、一瞬たりとも休むことなく精力的に活動し、執務室で急逝されたため、人民はことのほか胸を痛めた。

7月9日昼の12時、重大放送で金日成主席が逝去されたという青天の霹靂のような悲報が伝えられると、全国、全世界は悲しみに包まれた。

すべての朝鮮人民は、最も大きな悲しみを抱いて主席を限りな

く追慕した。

7000万の全民族は、心の底からこみ上がる悲痛な思いを抑え切れず、胸をたたいて嗚咽した。

全国の人民と人民軍の将兵、青年学生は、言い知れぬ悲しみに暮れた。

人民は誰もが喪主となって夜を日に継いで主席の霊柩と銅像、現地指導標示碑、事績碑、主席の画像の前で夜とぎを務め、最も深い哀悼の意を表し、限りなく追慕した。全国は慟哭の海、涙の海と化し、山川草木も悲しみに打ち沈んだ。

哀悼期間（7月8日～20日）だけでも延べ2億1200万人以上の各階層の人民と人民軍将兵が金日成主席を追慕して弔意を表した。7月19日、革命の首都平壌では、10余里の沿道に立ち並んだ200万市民の哭声が天地に響く中、告別式が厳かに挙行された。同日、全国の各道、市、郡と朝鮮人民軍、朝鮮人民警備隊の各部隊で追悼式が行われ、7月20日には、金日成広場で中央追悼大会が厳かに執り行われた。

海外同胞は、民族の父を失った喪失の痛みを抱き、祖国人民と悲しみをともにした。彼らは、総聯と海外同胞組織が設けた弔意式場を訪ねて涙を流し、数多くの同胞が祖国を訪れて主席の霊前と銅像に花輪と花束を捧げた。

統一愛国人士をはじめ南朝鮮の各階層の人民も、南朝鮮当局によるファッショ的な弾圧の中にあっても主席の逝去に深い哀悼の意を表した。

主席逝去の悲報に接し、全世界が悲しみに暮れて深甚なる哀悼の意を表した。

哀悼期間、世界166カ国の国家・政府首班と政党指導者、社会団体、チュチェ思想研究組織、朝鮮人民との友好・連帯組織、各界の人士が3480余の弔電を寄せた。主席を追慕し、60余人の党および国家元首と170余人の政党指導者、そして世界各国の2000余人の代表が自国駐在の朝鮮民主主義人民共和国代表部を訪ねて弔意を表した。国連事務総長は、国連駐在の朝鮮民主主義人民共和国代表部を訪ねて弔意を表し、クリントン米大統領は、主席逝去の重大報道が発表された3時間後に弔意声明を発表した。7月11日に行われた国連安保理では、議長の提議により、会議開催の前に金日成主席を追悼して黙祷し、国連総会議長スポークスマンの声明を発表し、国連本部に弔旗を掲げた。

哀悼期間、世界120余カ国の700余の出版・報道各社が主席を追慕して特集を発刊し、200余の通信社、テレビ、放送各社が延べ2200余回にわたり特別番組で主席の業績を紹介した。

すべての朝鮮人民と人類が最も敬虔な気持ちで主席を追悼した日々は、朝鮮人民がいかに偉大な領袖を戴き、いかに大きな領袖の福運に恵まれていたかを痛切に感じさせた日々であった。

主席は逝去されたが、朝鮮人民と民族、全人類の心の中にチュチェの太陽として生き続けている。

金正日総書記は次のように述べている。

「金日成同志の心臓の鼓動は止みましたが、金日成同志は今日も朝鮮人民とともにあります。金日成同志は領袖、党、大衆の渾然一体の最高頭脳として、民族の太陽として生き続けています」

主席は、人民大衆の自主偉業の遂行に打ち立てた不滅の業績に

よって生き続けている。

領袖の永生は領袖の成し遂げた業績の偉大さによって裏付けられる。

主席は不滅のチュチェ思想を創始し、人類の自主偉業遂行の明るい道を示した。主席が精力的な思想・理論活動によって時代と革命、人民大衆の志向と要求を反映して創始したチュチェ思想は、その絶対的な真理性と不滅の生命力により、20世紀だけでなく人類の未来を代表する永遠な革命の指導思想となっている。

主席が1926年10月、打倒帝国主義同盟の綱領を作成した日から1994年7月まで、ほぼ70年もの間に執筆した古典的著作はおよそ1万800余件に達し、世界108カ国の出版社で63の民族語で翻訳、出版された。

主席は、長い間非凡な指導力をもって革命と建設を指導する過程で、最も貴くかつ豊かで永遠の生命力を持つ世紀の指導業績を打ち立てた。

主席は、1世代で米日の両帝国主義を打ち破り、植民地民族解放戦争の新しい時代、反帝反米闘争の新たな高揚の時代を開いた。

そして、二つの社会革命である反帝反封建民主主義革命と社会主義革命を立派に遂行し、自主、自立、自衛の社会主義強国を打ち立て、人民大衆中心の朝鮮式社会主義を固守した。

また、全社会を領袖、党、大衆が一心団結した睦まじい革命的な大家庭に育て上げ、その不抜の力によって革命と建設で絶えず高揚を起こした。

主席は、革命偉業を継承し達成するための指導の継承問題を完璧に解決し、時代と人類に対し卓抜な業績を打ち立てた。

主席は、民族の大団結によって祖国統一を実現する強固な土台を築き、祖国統一の前途に明るい展望を開いた。

主席は、解放直後から生涯の終わりまで人民軍部隊と人民経済各部門をはじめ全国2万600余カ所を現地指導し、その日数は8650余日、その道程の総距離は57万8000余キロに達する。

主席は世界革命を自主の軌道に乗せ、全世界を自主化する歴史的進軍の道を切り開いた。

主席は解放後、54回、685日間にわたって延べ87カ国を訪問し、その路程は52万2460余キロに達する。

主席が列車で国内と世界各国を訪問した道程を合わせると36万8000キロに及ぶ。解放直後から生涯の最後の時期まで136カ国の国家元首および政府首班、党首400余人をはじめ延べ7万余人の外国の客人に会って活動を行った。

主席は人民に対する熱い愛と崇高な信義をもち、仁徳政治、幅の広い政治によってこの地に人民の地上の楽園、人間愛の大花園を開いた。

主席は朝鮮革命と世界の自主化偉業の遂行に打ち立てた不滅の業績により、朝鮮民主主義人民共和国大元帥称号と共和国英雄称号（3回）、労働英雄称号を受け、70余の国と国際機構から180余の最高位の勲章とメダル、30余の都市の名誉市民称号、20余の有名な大学の名誉教授および名誉博士の称号を受けた。そして、169カ国の党首、国家元首および政府首班と進歩的人民、海外同胞と南朝鮮人民から祝意のこもった16万5920余点、朝鮮人民から56万9000余点の贈物を受けた。中国に主席の銅像が建立され、世界的に「国際金日成賞」が制定、授与されており、世界の100余

カ国480余の街と機関、団体に主席の尊名が冠されている。

世界の多くの国と進歩的人士は、主席の逝去後も引き続き数多くの贈物を寄せており、勲章とメダル、名誉称号を授与している。

主席は、卓出した偉人としての品格と打ち立てた不滅の業績により、人類解放の救いの星として今日も明日も永遠に朝鮮人民と世界の進歩的人民とともにある。

主席は、チュチェ革命偉業の継承者である金正日総書記の崇高な革命的徳義心によって生き続けている。

主席の永生は、主席の偉業に限りなく忠実な後継者によって最も崇高な高さで確固と保証される。

金正日総書記は、主席の切り開いた革命偉業を継承し達成しようという朝鮮労働党と軍隊と人民の信念と意志を込めて、「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにおられる」、「偉大な領袖金日成同志を千年万年高く戴こう！」、「偉大な領袖金日成同志の革命思想でしっかり武装しよう！」というスローガンを提示した。

これは朝鮮労働党と軍隊、人民が代を継いで永遠に高く掲げていくべき革命的スローガン、闘争の旗じるしである。

金正日総書記はこのスローガンを実現させるため、錦繍山（クムスサン）議事堂を記念宮殿として厳かなものに整え、主席が生前の姿でおられるようにした。

錦繍山議事堂は、朝鮮人民が真心を込めて主席に贈ったものであり、主席が長年にわたり朝鮮革命と人類の自主偉業を導いた歴史ある家であった。

金正日総書記は、主席が生前執務していた錦繍山議事堂を錦繍

山記念宮殿として最高水準のものに整え、主席を生前の姿のまま丁重に安置するようにした。

記念宮殿を訪ねる外国の客人は、世界には聖地が多いが、錦繡山記念宮殿のように人類の心と心が一緒になって大河のように流れる聖地はない、と感嘆してやまない。

金正日総書記は、主席の革命的生涯と不滅の業績を末長く輝かせていくようにするため、1912年を元年とするチュチェ年号を制定し、主席が誕生した民族最大の祝日である4月15日を太陽節に定めるようにした。そして、金日成憲法を新たに制定し、金日成同志を朝鮮民主主義人民共和国の永遠なる主席として法文化するようにした。

金正日総書記はこのように、崇高な徳義をもって領袖永生の大業を立派に実現し、金日成主席が永遠に朝鮮人民とともにあり、主席の思想と革命業績が代を継いで光を放つようにした。

20世紀を輝かせた金日成主席の思想と業績は、金正日総書記の先軍指導によって世紀を継いで全面的に継承されており、主席の崇高な志と念願が立派に実現される金日成朝鮮、金日成民族の富強・繁栄の中で金日成主席の革命活動史は引き続き流れている。

ISBN 978-9 946-0-0889-9

9 789946 008899 >